令和６年度学校教育研究助成事業　学校研究部門

※学校名または研究主題をクリックすると、該当ページに移動します。

No.	学　校　（園）　名	研　究　主　題　　～ 副　題 ～
1	名古屋市立千種小学校	「できた！」「分かった！」と感じることができる児童の育成 ～目指したい子どもの姿に向けた追及を通して～
2	名古屋市立千石小学校	自分で考え、決定し、行動できる子を育成するための対話活動の充実
3	名古屋市立城山中学校	探求心を深める「課題研究」の取り組み
4	名古屋市立東白壁小学校	自律して学ぶことのできる姿を目指した授業実践について ～自由進度学習を通して～
5	名古屋市立葵小学校	主体的に学ぶ葵っ子の育成 ～自律して学び続ける姿を目指して～
6	名古屋市立名北小学校	見つめよう　伸ばそう　深めよう ～「自律した学び手」を育てるために～
7	名古屋市立金城小学校	チャレンジしよう　夢中になろう ～自ら選び、自ら決めて取り組む活動を通して～
8	名古屋市立東志賀小学校	ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける東志賀っ子
9	名古屋市立なごや小学校	夢中になって追究し、自分で学びを進めるなごやっ子の育成 ～「子ども中心の学び」で問題解決の力が高まる生活科・理科学習～
10	名古屋市立児玉小学校	私たちのお兄さん・お姉さん ～学区でつながる異校種間交流を通して～
11	名古屋市立浄心中学校	ともに笑い　ともに学び　ともに生きる ～みんなで、陽だまりの笑顔！～
12	名古屋市立ほのか小学校	主体的に学ぶほのかの子の育成 ～自分に合った学び方の選択と振り返り活動を通して～
13	名古屋市立米野小学校	自分を大切に　仲間も大切に ～学び合い、チャレンジできる子どもをめざして～
14	名古屋市立笹島中学校	自他のよさに気づき　互いを尊重する　ささしまっこの育成 ～多文化にふれる学習活動や体験活動を通して～
15	名古屋市立新栄小学校	みんなで考えて解決しよう！ ～プロジェクトアドベンチャー、サークル対話、自由進度学習を通して～
16	名古屋市立松原小学校	夢や目標に向かう子どもの育成
17	名古屋市立松栄小学校	自ら学びを進める子どもの育成 ～単元内自由進度学習を通して～
18	名古屋市立桜山中学校	主体的・協働的な「生徒中心の学び」 ～社会で生き抜く力を育む・学び合い～
19	名古屋市立汐路小学校	自律して学ぶことができる子どもの育成 ～「見通す」段階での工夫を通して～
20	名古屋市立穂波小学校	心身ともにたくましく、心豊かな穂波っ子の育成 ～『自ら』、『進んで』取り組む姿勢を大切にして～
21	名古屋市立白鳥小学校	「夢の実現に向けて努力することができる白鳥っ子」の育成
22	名古屋市立大宝小学校	自分の学びは自分で決める ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実～
23	名古屋市立八幡小学校	夢中になれる八幡っ子 ～知りたいことを自ら見つける場面に重点を置いた授業づくり～
24	名古屋市立荒子小学校	自ら学びを進める荒子の子 ～多様な人との交流学習を通して～

No.	学　校　（園）　名	研　究　主　題　　～副　題～
25	名古屋市立正色小学校	自ら、ともに、学びを深める正色っ子
26	名古屋市立篠原小学校	主体的に学ぶ児童の育成 ～多様な調べ方を知り、自ら選択することを通して～
27	名古屋市立戸田小学校	なかまとの学びから、「わかった」「できた」と実感できる戸田っ子
28	名古屋市立港西小学校	「やった！」「できた！」「次もがんばろう！」 ～見通しをもち、振り返りながら学び続ける子どもたち～
29	名古屋市立小碓小学校	「やってみたい」をめあてに変えよう！ 学びの主人公にわたしはなる！
30	名古屋市立西築地小学校	協働しながら、主体的に学び続ける子 ～「つ（続ける）・き（協働）・じ（自己判断）力」を育てる授業の工夫～
31	名古屋市立港北中学校	ともに学ぶ学校 ～他者のよさを認める活動を通して～
32	名古屋市立呼続小学校	防災意識の高い呼続っ子の育成 ～自分で自分の身を守る方法を知る活動を通して～
33	名古屋市立白水小学校	主体的に活動することができる白水っ子の育成を目指して ～児童が安心して過ごせる居場所づくりの推進～
34	名古屋市立柴田小学校	遠くへ投げよう　柴田スタジアム
35	名古屋市立志段味東小学校	自分で決め 自分で考え 自分でやってみよう！ ～探究的な学びへの第一歩～
36	名古屋市立志段味西小学校	自ら思いを発し、考えを表現する子の育成
37	名古屋市立西城小学校	主体的に学習できる児童の育成 ～探究的な学びのサイクルの繰り返し～
38	名古屋市立守山東中学校	ＩＣＴ機器を効果的に活用した授業、委員会、ＰＴＡ活動
39	名古屋市立東丘小学校	豊かな人間関係づくりを目指す児童の育成 ～ことばの力を高めることを通して～
40	名古屋市立平子小学校	主体的に学習に取り組む子どもの育成 ～なぜだろう？知りたい！やってみたいがあふれる授業を目指して～
41	名古屋市立黒石小学校	自分らしく学ぶ黒石っ子の育成 ～最適な学びの方法を決める力の高まりを目指して～
42	名古屋市立神の倉小学校	自己学習力の育成 ～３つの型の自由進度学習を取り入れることを通して～
43	名古屋市立鳴海中学校	他者とともに生きる ～人権学習の各分野別課題の学習を通して～
44	名古屋市立西山小学校	生き生きと学び、学び合う児童の育成
45	名古屋市立藤が丘小学校	自ら考え行動し、学び続ける児童の育成 ～学ぶって楽しいな！～
46	名古屋市立猪子石小学校	自律して学び続ける子どもの育成 ～自分に合ったペースや方法で学ぶことを通して～
47	名古屋市立神丘中学校	ともに学び、よりよく生きる ～キャリア教育の充実を目指して～
48	名古屋市立平針小学校	主体的に学びに向かう平針っ子の育成 ～伝えよう、深めよう～
49	名古屋市立植田小学校	児童のよりよい関係づくりを目指して
50	名古屋市立天白中学校	多様な人と学び合う生徒の育成 ～ＩＣＴの活用を通して～

No.	学　校　（園）　名	研　究　主　題　　～副　題～
51	一宮市立向山小学校	児童の思考力を高めるための効果的な学習指導 ～「思考力・判断力・表現力」を育成する授業づくりをめざして～
52	一宮市立丹陽西小学校	いきいき、わくわく、笑顔がいちばん丹西っ子を目指して
53	一宮市立丹陽南小学校	言葉を大切にして主体的に学び、考えを豊かに伝え合うことができる児童の育成 ～子どもたちの問いを生かし、語彙を豊かにする言語活動の充実を図った国語の授業づくり～
54	一宮市立大和東小学校	自ら学び考える、心身共に健やかな児童の育成 ～異学年交流や全体交流を通して育む豊かな心～
55	一宮市立今伊勢小学校	「わかった」「できた」に喜びを感じ，自ら学ぶ児童の育成 ～個別最適な学びの視点を生かした授業づくり～
56	瀬戸市立幡山西小学校	課題解決に向け、すすんで活動に取り組み、他者と協働して学びを深める児童の育成
57	瀬戸市立東山小学校	「心豊かに学ぶ子」「心豊かに遊ぶ子」の育成
58	春日井市立勝川小学校	学んだ知識・技能をはたらかせて、すすんで思考・判断・表現しようとする児童の育成 ～日常的な授業改善を通して～
59	春日井市立篠木小学校	よく考えすすんで学びあう児童の育成 ～一人一台端末の効果的な活用を通して～
60	犬山市立城東小学校	自ら学び　高め合う　城東の子 ～温かな人間関係をベースとした、子どもの問いから始まる学びを通して～
61	江南市立宮田小学校	感動がうまれる授業の創造 ～ウェルビーイングの向上を目指して～
62	小牧市立桃ケ丘小学校	主体的に考え、学ぶ児童の育成 ～誰もが考えることを楽しめる授業づくりを通して～
63	稲沢市立稲沢東小学校	自分の考えを広げ、深めることができる児童の育成 ～発達段階に応じて教材・教具を工夫する対話活動と単元を貫く振り返り活動を通して～
64	稲沢市立丸甲小学校	「やる気」「元気」「よき仲間」にあふれた学校づくり
65	東海市立加木屋小学校	自らの思いを基に、主体的に学びに向かうことができる児童の育成 ～ＩＣＴ機器を活用し、つながりを生み出す活動を通して～
66	大府市立共長小学校	生きて働く知識・技能を身につけた児童の育成 ～効果的な振り返り活動や他者との協働の機会を確保した授業実践を通して～
67	知多市立つつじが丘小学校	自分の考えを深め、学んだことを次に生かすことができる児童の育成 ～ゴールが分かるめあての設定と視点ある振り返りの活動を通して～
68	尾張旭市立本地原小学校	他者と関わりながらよりよく生きる子を育てる教育活動 ～明るく 正しく のびのびと 本地ヶ原の本地っ子～
69	豊明市立豊明小学校	学校・家庭・地域が連携した造形教育 ～図画工作科「焼き物」「木の枝アート」の実践を通して～
70	豊明市立三崎小学校	考えを聞き合い、互いに学び合う児童の育成
71	日進市立西小学校	互いの意見を尊重し、自分の考えを深められる子の育成 ～聞く力をつける活動を通して～
72	清須市立西枇杷島小学校	知識や技能を生かして学びを深める児童の育成 ～既習内容や経験と関連付けた思考を促す授業展開を通して～
73	北名古屋市立西春小学校	言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し、適切に表現できる子の育成 ～「ワンランク上の言葉の学び手」を育む国語科指導の充実を通して～
74	弥富市立大藤小学校	運動の楽しさや喜びを味わい、基礎的な体力・身体能力の身に付いた児童の育成 ～児童の豊かな関わり合いを通して～
75	あま市立七宝小学校	お互いを認め合える心豊かな児童の育成 ～一人一人の存在や思いが大切にされる学級づくり～
76	長久手市立西小学校	子供たちの学びや成長を支える、地域と学校の協働活動の活性化を目指して

No.	学　校　（園）　名	研　究　主　題　　～副　題～
77	東郷町立兵庫小学校	「みんなの学校」の実現を目指して ～不登校支援や不登校に関する予防的対策の充実～
78	豊山町立新栄小学校	意欲的に考え、伝え合いながら学ぶ児童の育成
79	大口町立大口南小学校	対話を通して、課題を解決する力を高める授業づくりをする ～主体的に学習に取り組む児童の育成を目指して～
80	大口町立大口北小学校	主体的に課題解決に向かう児童の育成
81	扶桑町立山名小学校	豊かな心の育成
82	蟹江町立学戸小学校	「食」への関心を高め、自身の生活に生かすことのできる児童の育成 ～子ども達の心身の健康をはぐくむ食育指導や活動を通して～
83	阿久比町立南部小学校	考えることを楽しみ、自分の考えを深め、広げる児童の育成 ～表現する力を育てる授業づくりをめざして～
84	東浦町立石浜西小学校	個を大切にし、学びを深め合う児童の育成 ～課題に主体的に向かうための個別最適な学びを通して～
85	武豊町立武豊小学校	自らの可能性を信じ、幸せな未来をつかみとろうとする児童の育成 ～ウェルビーイングな学校を目指して～
86	南知多町立豊浜小学校	「特別の教科　道徳」を要とした道徳教育の充実 ～家庭・地域との連携を生かした道徳教育の推進～
87	南知多町立篠島小学校	ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな島っ子の育成 ～ＩＣＴを活かした協働的な学びの工夫と基礎学力の向上～
88	美浜町立野間小学校	自分の考えをもち、対話に参加できる子の育成 ～意図的な対話を取り入れた学習を通して～
89	美浜町立奥田小学校	自ら課題を見つけ解決する児童の育成 ～プログラミングを通して、目的に応じた情報活用能力の育成を目指して～
90	一宮市立中部中学校	読解力の育成をめざして ～リーディングスキルをもとにした資料の読み取りを通して～
91	一宮市立萩原中学校	個性を認め合える人間関係づくりができる生徒の育成 ～合唱コンクールを通した人間関係づくりの取り組み～
92	一宮市立木曽川中学校	「主体的で対話的な深い学び」を実現するための授業改善 ～主体的な学びにつながるグループ活動の工夫～
93	瀬戸市立幡山中学校	心と体を整え、人とかかわり人とつながる子の育成 ～豊かな心づくり、健やかな体づくりを柱として～
94	半田市立半田中学校	自分を信じて学び続ける生徒の育成 ～今日も学校楽しかった！と思える居場所づくり～
95	半田市立乙川中学校	学校や地域を愛し未来で活躍し続ける自律学習者を目指して ～自分らしいキャリアを実現するための「協同学習」を通して～
96	春日井市立石尾台中学校	見方・考え方を伸ばす深い学びの構築 ～課題解決型学習を通して～
97	津島市立暁中学校	業務効率化による教員指導の質的向上 ～デジタル採点システムの活用～
98	犬山市立城東中学校	ともに学ぶ ～主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～
99	常滑市立青海中学校	自ら学び、常に向上しようとする生徒の育成 ～各教科における「見方・考え方」を働かせ、深い学びにつなげるための指導の工夫～
100	小牧市立北里中学校	認め合い・高め合う授業を通して「学びを楽しむ生徒」を育てる ～「質の高い課題」で「夢中になる自分」に出会う喜びを～
101	小牧市立応時中学校	主体性を育む防災教育 ～地域で活躍できる人材の育成を目指して～
102	稲沢市立明治中学校	自他の安心安全を守るために、自ら気付き、考え、行動する生徒の育成

No.	学　校　（園）　名	研　究　主　題　　～副　題～
103	稲沢市立治郎丸中学校	自己の学びや成長を実感しながら探究的に学ぼうとする生徒の育成 ～自己調整力を高める振り返りの場の設定や協働的な学びの場の工夫を通して～
104	知多市立中部中学校	主体的・対話的に学びながら、深め合うことができる生徒の育成 ～個別最適な学びと協働的な学びを通して～
105	尾張旭市立西中学校	考え、議論する道徳のさらなる推進 ～自分の考えを他者と共有し、議論する活動を通して～
106	日進市立日進中学校	誰一人取り残されない学校を目指して ～タブレット端末を活用した不登校対策～
107	日進市立日進西中学校	主体的に学級づくりをする生徒の育成 ～学級活動における「学級力アンケート」を用いた話し合い活動を通して～
108	愛西市立佐屋中学校	「生きる力」を育む防災教育 ～震災・津波被害現場から学んだことを、自分事として捉える活動を通して～
109	愛西市立八開中学校	自ら考え、ともに認め合い、学びを深める生徒の育成 ～学びをつなぎ、絆をつなぐ活動を通して～
110	愛西市立佐織西中学校	主体的に取り組み、他者と協働しながら自分の意見や考えを伝えようとする生徒の育成 ～対話活動を通して～
111	清須市立西枇杷島中学校	自ら課題に気付き、主体的に課題解決に取り組む生徒の育成 ～「学習課題の設定」と「振り返り」による「自律」の心の向上を目指して～
112	北名古屋市立西春中学校	心と体を一体としてとらえ、主体的に体力向上を目指す生徒の育成 ～運動する楽しさや喜びを実感できる体育活動を通して～
113	あま市立甚目寺中学校	仲良くなれる！授業が盛り上がる！「ハートーーク」 ～みんながホッとする！あたたかくて安心できる学級づくり～
114	東郷町立諸輪中学校	不登校・不登校傾向の生徒をはじめとする多様な学びのニーズにこたえる学校づくり ～学びの場の個性化を図る取組を通して～
115	蟹江町立蟹江北中学校	命の大切さを学ぶ
116	東浦町立北部中学校	主体的に考え、判断し、行動できる生徒の育成 ～「探究的な時間の活動」の授業実践を通して～
117	武豊町立武豊中学校	主体的に取り組む生徒の育成
118	豊橋市立松葉小学校	人との関わりの中で　自らを高め　つながりを大切にする子の育成
119	豊橋市立花田小学校	「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業・活動の創造
120	豊橋市立汐田小学校	学校になじめない子どもたちの自立に向けた支援のあり方 ～生活サポート担当者を核とした校内適応指導教室（ほかほかルーム）の運営をとおして～
121	豊橋市立植田小学校	地域のよさに関心をもち自己の生き方を見つけようとする子どもの育成 ～地域の「もの・ひと・こと」に注目してふるさとの良さに気づく実践を通して～
122	豊橋市立下条小学校	他者と関わり合い、考えを深めることができる下条っ子の育成 ～身近な「ひと・もの・こと」とのつながりを大切にした活動を通して～
123	豊橋市立小沢小学校	かかわりの中で自分らしく表現し、ともに学び深める子の育成 ～温かな人間関係で思いや考えを伝えあう授業の工夫～
124	豊橋市立賀茂小学校	主体的に学び　問題を楽しみながら解決する　賀茂っ子の育成 ～協働的な学びを重視した授業づくりの工夫～
125	岡崎市立岡崎小学校	見通しをもって課題を追究する子供の育成
126	岡崎市立三島小学校	わくわくがある、学びがある、喜びがあふれる　子どものための学校の創造
127	岡崎市立井田小学校	「分かる・できる」喜びを実感する授業 ～子どもが主体的に取り組む授業づくり～
128	岡崎市立福岡小学校	将来「自立」できる児童の育成

No.	学　校　（園）　名	研　究　主　題　　～副　題～
129	豊川市立千両小学校	思いや考えを語り、自己の成長を認め、学びを深める子の育成 ～協働と対話、学びの場をとらえ直した教育活動を通して～
130	豊川市立国府小学校	生活をよりよくしようと工夫する子の育成 ～５年生 家庭科「食べて元気に」の学習を通して～
131	豊川市立金屋小学校	わたしが好き！なかまが好き！金屋小が大好き♥ ～ねばり強く取り組む子、ともに学ぶ喜びを味わう子をめざして～
132	碧南市立鷲塚小学校	自己を見つめ、他者との関わりをとおして、よりよく生きようとする子の育成 ～語り合い、深めあう道徳の実践を通して～
133	刈谷市立小垣江小学校	自ら学び、学びを生かそうとする子の育成 ～単元を貫く目的意識から生まれる課題解決の実践を通して～
134	刈谷市立朝日小学校	自ら学びを追究する子どもの育成 ～ふり返りで学びを見つめ直す活動を通して～
135	豊田市立根川小学校	楽しく体を動かすことで体力向上を図る児童の育成
136	豊田市立伊保小学校	見通しをもって学び、関わり合いを通して考えを深める児童の育成 ～学び合い・関わり合いの実践を通して～
137	豊田市立加納小学校	「意欲的に追究し表現する子」を目指して
138	豊田市立朝日小学校	自己有用感を高め、互いに学び合う児童の育成 ～相手を意識した話し合い活動を取り入れた授業づくり～
139	豊田市立足助小学校	地域に学び、かかわり、発信する子どもの育成 ～「みんな大好き！足助の町」の実践を通して～
140	豊田市立小渡小学校	へき地における国際教育 ～旭地区の魅力を社会へ発信～
141	豊田市立浄水北小学校	子どもが主役の授業づくり ～聞き合い、話し合う活動を通して～
142	安城市立錦町小学校	学びのエネルギーをもとに、仲間と共に考え続ける子の育成 ～多様な考えをいかす授業づくりを通して～
143	安城市立桜井小学校	学びを　つなげる　かさねる　広げる　桜井っ子 ～桜井のひと・もの・ことを生かした横断的な学習を通して～
144	安城市立梨の里小学校	心身共に健やかで　笑顔あふれる梨っ子の育成 ～拓かれた学校づくりを目指す学校・保護者・地域との連携を通して～
145	西尾市立矢田小学校	見通しをもち、筋道を立てて考えを説明できる矢田っ子 ～算数科等における「矢田小スタイル」を通して～
146	西尾市立寺津小学校	自他を大切にし、よりよく生きる寺津っ子の育成 ～生活科・総合的な学習の時間における「ふるさと単元」の実践を通して～
147	西尾市立白浜小学校	自ら動き出す白浜っ子の育成 ～個別最適な学びと協働的な学びの実践に向けた授業づくり～
148	蒲郡市立蒲郡東部小学校	地域とともに　心豊かに生きるとがみっ子 ～かかわりを大切にした学びを通して～
149	新城市立八名小学校	子どもが主体的に学ぶ学校 ～対話を通して学びを深める「みがく」の実践～
150	新城市立作手小学校	関わりの中で自分の思いや考えを進んで発信できる子の育成 ～関わりを楽しみ、学びを深める～
151	知立市立知立小学校	情報社会の中で自分らしさを発揮する子
152	高浜市立翼小学校	学び合うって楽しい!
153	みよし市立緑丘小学校	「学び合い、学びを深める」授業づくり ～聴き合い・振り返り～
154	幸田町立坂崎小学校	豊かな心をもち、目を輝かせて学び、たくましく生きる子の育成 ～伝えたい！聞きたい！という意欲を高め、伝え合う力を育む授業・学級づくり～

No.	学　校　（園）　名	研　究　主　題　　～副　題～
155	豊橋市立本郷中学校	本郷発、校区・学校をよくし隊 ～生徒の手による自主的な生徒会活動の取り組み～
156	豊橋市立南稜中学校	未来をつかむ「みらい学習」 ～くすのき特別支援学校との交流を通して～
157	豊橋市立北部中学校	他者とかかわり合いながら、自己の考えを深め、更に学び続けようとする生徒の育成 ～ＩＣＴを活用した「問題解決的な学習」を通して～
158	岡崎市立竜海中学校	未来を見つめ、自己の創造に向かう生徒の育成 ～意欲的に参加する教科外活動を通して～
159	岡崎市立福岡中学校	自分の良さや可能性に気付き、進んで挑戦できる生徒の育成
160	岡崎市立岩津中学校	自己肯定感を高める岩中教育 ～学ぶ楽しさを実感し、自他を愛する生徒の育成～
161	岡崎市立矢作中学校	長期欠席生徒の自立に向けた校内フリースクールＦ組と夜間学級Ｓ組の取組 ～Ｆ組の理念の展開による真の個別最適化をめざして～
162	岡崎市立翔南中学校	未来をたくましく生きる力を育む教育の創造 ～仲間と学ぶＳＯＺＯの時間を核に据えて～
163	豊川市立西部中学校	学びの楽しさ、わかることへの喜びを感じられる生徒の育成 ～自分自身を見つめるための「学びの見える化」の活用～
164	碧南市立西端中学校	主体的に学び、意欲的に自分の思いを表現する生徒の育成 ～さまざまな手段で自己表現ができる学習活動の工夫を通して～
165	豊田市立猿投台中学校	仲間と関わりながら、自分の考えを深める台中生の育成
166	豊田市立松平中学校	自らの考えをもち、主体的に学び続ける生徒の育成 ～ふりかえり活動を軸とした授業づくりをめざして～
167	豊田市立美里中学校	かかわり合いを通して、考えを深めることができる生徒の育成 ～自ら考え、議論する道徳授業づくりを通して～
168	豊田市立梅坪台中学校	自ら課題を見つけ、自ら学び、未来を切り拓く生徒の育成 ～生徒一人一人が寄り添い合う　深い対話を目指した　授業改善～
169	豊田市立藤岡中学校	令和時代を生き抜く藤中生の育成を目指す教育の実践 ～個別最適な学びと協働的な学びの充実～
170	豊田市立旭中学校	地域と共に歩み、未来を拓く生徒の育成 ～ふるさと旭にわくわくする学びの実現～
171	西尾市立鶴城中学校	生徒全体の「できた」「わかった」の実感がもてる授業づくり ～授業力や指導技術の高め合いを通して～
172	西尾市立東部中学校	青空の広がる東中生の育成 ～道徳・総合・特活を核とした新しい東中文化の創造～
173	蒲郡市立大塚中学校	「自ら問いを見つけ、学び続ける生徒」の育成 ～教材との出会い、個の学び、他者とのかかわり合いの活動を通して～
174	新城市立東郷中学校	自分たちが創る授業で、仲間と共に問題を解決する生徒の育成 ～「深化手だて」を用いた授業構想を生かして～
175	知立市立竜北中学校	学びをたのしむ竜北生
176	田原市立赤羽根中学校	すべての生徒が元気に登校できる学校づくり ～自己効力感を高めるための実践の充実～
177	豊根村立豊根中学校	積極的に人と関わり、自ら判断し主体的に取り組む豊根っ子の育成 ～総合的な学習の時間 perfectoyone の取り組みを通して～
178	愛知県立旭陵高等学校	校内居場所カフェの持続可能な運営について
179	愛知県立惟信高等学校	普通化改革支援事業　新設学科開設に向けて
180	愛知県立天白高等学校	生徒がより学びを深めるための授業改善方法を探る ～学びの「視覚化」「言語化」を伴う対話的活動の導入～

No.	学　校　（園）　名	研　究　主　題　　～副　題～
181	愛知県立瀬戸高等学校	学校創立百周年記念関連行事実施と学校活性化について
182	愛知県立春日井南高等学校	ＶＴ（探究的な学習の時間）における探究活動の充実 ～総合的な探究の時間を再定義する～
183	愛知県立新川高等学校	ＩＣＴ機器を利用した「主体的・対話的で深い学び」の推進
184	愛知県立西春高等学校	「主体的・対話的で深い学び」を実現するための探究的な授業づくり、課題解決探究学習に関する研究 ～生成ＡＩを活用した課題解決探究学習に関する研究～
185	愛知県立木曽川高等学校	単管パイプ工作を用いて教育活動を活性化する研究
186	愛知県立尾西高等学校	生徒・保護者・地域のつながりを実感する ～尾西高校閉校にあたり「大団円」の完成へ～
187	愛知県立津島北高等学校	運動部活動の地域移行に関する地域人材との連携について ～平日・休日の一貫指導のために外部指導員に伝えておきたいこと～
188	愛知県立阿久比高等学校	部活動における地域連携の取り組み ～新体操部の小中高連携から地域貢献へ～
189	愛知県立東浦高等学校	部活動運営 ～地域社会とのつながり～
190	愛知県立衣台高等学校	多文化共生社会の実現を目指す中高一貫教育の構築
191	愛知県立松平高等学校	自ら学ぶ力を育成するための「成功体験の生かし方」と「振り返りの在り方」に関する研究 ～「社会で光る『人間力』」を備えた人間性豊かな生徒の育成を目指して～
192	愛知県立岡崎工科高等学校	ホワイトボード・ＩＣＴ機器を用いた深い学びの研究
193	愛知県立知立東高等学校	課題を探究し、学び続ける生徒を育成するための実践
194	愛知県立知立高等学校	校則見直しを通した生徒の主体性を促す取組
195	愛知県立豊橋南高等学校	学校全体で取り組むユネスコスクール活動について ～豊橋南高校ができる地域社会貢献とは？～
196	愛知県立小坂井高等学校	生成ＡＩは教員業務の支援ツールとして活用できるか ～校務における生成ＡＩの活用法を探る～
197	名古屋市立若宮商業高等学校	生涯にわたって主体的に学び続ける生徒の育成について ～課題解決型学習を通した「主体的・対話的で深い学びの実現」～
198	刈谷市立日高幼児園	やりたい遊びに夢中になって取り組む子をめざして ～自分なりに考えたり工夫したりする姿を捉えて～
199	高浜市立高浜南部幼稚園	わくわく運動遊び
200	半田市立亀崎幼稚園	自己肯定感を育むためには ～一人一人のよさが発揮できる遊びの環境と援助～
201	名古屋市立神の倉幼稚園	“もっと知りたい！面白い！”自然に親しみ、心を動かして遊ぶ幼児の育成 ～「つぶやきシート」を活用して～
202	名古屋市立西山台幼稚園	主体的に遊び込む幼児の育成 ～一人一人の思いや育ちを捉えて～

目次へ

研究主題	「できた！」「分かった！」と感じることができる児童の育成		
副　　題	～目指したい子どもの姿に向けた追及を通して～		
学 校 名	名古屋市立千種小学校	校 長 氏 名	堀　　嘉　和

1　研究のねらいとこれまでの取り組み

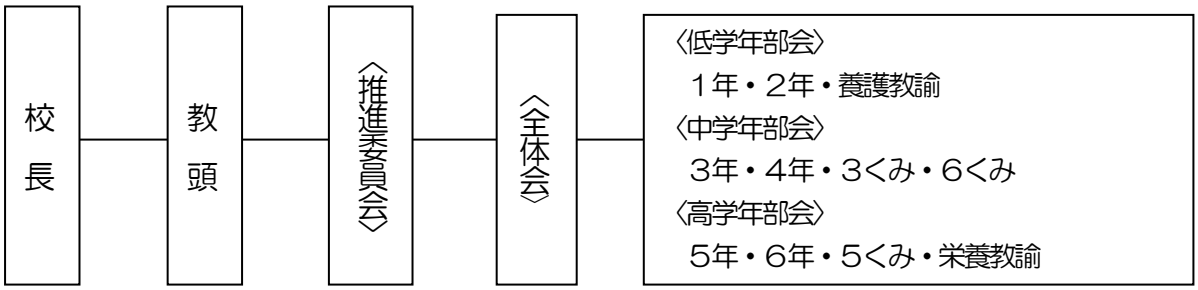
これまで、様々な教科においてどの場面でＩＣＴ機器を活用し、子どもたちの「できた！」「分かった！」を引き出せるように考えながら、２年間研究を進めてきた。

各学級のまとめから、ＩＣＴ機器を導入場面や共有場面で活用したことで、児童の学習に向けての意欲の喚起や新たな視点、理解につなげるきっかけとなり、子どもたちの「できた！」「分かった！」を各場面において引き出し、一定の成果を得ることができた。

そこで今年度は、「ナゴヤ学びのコンパス」が位置づけているその考えをグランドデザインにも反映し、副主題を『～目指したい子どもの姿に向けた追及を通して～』として、ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける子どもの姿を目指していく。

2　研究の方法

⑴　３年計画として、努力点研究を実践していく。また、次のように努力点指導部会（低・中・高学年部会）を構成する。



⑵　部員は、学習の在り方を探るために、各学年部会では月に１回程度、実践における学習指導方法について部会を開き、研究の推進や実践についての報告及び話し合いを行う。前期または後期で一人１実践を部会で見合い、事前・事後に検討や考察を行う。

⑶　各学級の実態に応じて、目指す子どもの姿に向けて、教科や取り組み方法などは自由に研究を推進する。ゆるやかな協働性の中で、自律して学び続ける子どもの姿を目指していく中で、

①　自分に合ったペースや方法で学ぶ
②　多様な人と学び合う
③　夢中で探究する

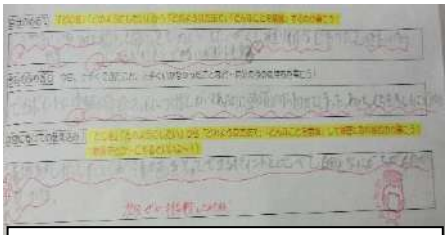
の、３つの学びの姿を重視して実践を進めていく。

3　実践の様子

５年２組（体育科）　器械運動（マット運動）

目標を達成するために、意識するところや練習方法を考え、自分の技に取り組む活動を行った。練習方法として、動きのポイントの確認。仲間と動きを確認し合う。手本と自分の動きを比べる。道具を使う。動画の撮影。タイムシフトカメラで確認する６つの方法を提示した。その中の、タイムシフトカメラを使って自分の動きを確認する方法


タイムシフトカメラを使って動きを確認している様子



児童の振り返り

で取り組む児童が多かった。また、タブレット端末を２台使って、手を着く位置と着地地点をより細かく見ようとしている児童もいた。

振り返りの部分では、次回は「どこを」「どのようにしたい」から「どのような方法で」「どんなことを意識」して練習に取り組むか、具体的に考えさせた。そのこともあり、授業の始めには、児童自身が本時で行いたいと思う練習が明確に考えられていた。

６年１組（外国語・英語科）　「Let’s see the world」



行きたい世界について紹介し合う場面



アドバイスカードに記入して友達に送る場面

モデル映像を視聴させ、簡単な語句や基本的な表現を確認してから、行きたい国についてグループで紹介し合う活動を行った。紹介し合う場面では、ポイント「ジェスチャー」「イラスト」「声の大きさ」「アイコンタクト」「習った表現」を意識してグループの友達の発表を聞き、アドバイスカードに改善点などを記入して、タブレット端末を用いて友達に送った。「聞いている人の目をみて、大きな声でゆっくりと話した方が良いよ。」「ジェスチャーをつけると、良く伝わるよ。」など、お互いにアドバイスし合う姿が見られた。

次に、タブレット端末を用いて送られてきたアドバイスカードを基に、他者の考えを参考にしながら自分のめあてを考えた。「相手に伝わりやすくするために、ジェスチャーをつけながら発表できるようにする。」「習った表現をもっと使っていく。」「友達の発表の発音が上手だったので、もっと発音の練習をする。」など、自分の発表を振り返り、友達の意見も参考にしながら、めあてを自己決定することができていた。「振り返りシート」には、「友達の発表を聞いて、自分も取り入れると良いことを考え、自分にあったためあてを決めることができた。」「めあてを決めたことで、何を目指していくのか、しっかりとした道しるべができた。」などの記述することができていた。

４　研究のまとめ

「ナゴヤ学びのコンパス」が位置づけている考えを反映し、副主題を『～目指したい子どもの姿に向けた追及を通して～』として、ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける子どもの姿を目指してきた。その中で、補助教材の充実や学習形態の工夫を行ったことで、能力差に関係なく「自分のペースや方法で学ぶ」ことや「多様な人と学び合う」ことができた学級があった。

その一方で、補助教材が乏しかったり、学習形態が子どもの実態に合ったものでなかったりと子どもたちの戸惑いにつながった学級もあった。今年度の実践において、明らかになった課題点を生かし、授業改善につなげ、子ども一人一人の良い点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出していくように教材研究はもちろん指導方法や手立てなど子どもの実態に応じたものにしていく必要がある。これからも、「ゆるやかな協働性の中で、自律して学び続ける子どもの姿」を目指し、「できた！」「分かった！」と感じることができる学習指導を追及していきたい。

目次へ

研究主題	自分で考え、決定し、行動できる子を育成するための対話活動の充実		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立千石小学校	校 長 氏 名	久野　正樹

1　本年度の活動とそのねらい

本校では、異学年交流や学級での様々な関わりを通して、自分で考え、決定し、行動できる子を育成するための対話活動の充実を目指して取り組んでいる。昨年度までの取り組みでは、学校全体に認め合いや助け合いなど「あい」というワードが浸透し、様々な場面で他者の考えや思いを受け入れたり、尊重して行動したりすることができるようになってきている。

本年度も、「あい」を合い言葉に、仲間との対話を通して、他者とよりよくつながり、自分で考え、決定し、行動できるようになってもらいたいと考え、実践に取り組んだ。

2　活動内容と児童の変容

(1) 実践1「全校道徳」【『みんなが気持ちよく過ごすために』の回】

2枚の写真を提示し、どちらが気持ちがよいか、自分の考える方に挙手をさせた。最後に見せた「大きな声で挨拶をする」と「笑顔でお辞儀のみする」のスライドについて各班で考えを伝え合わせた。「顔を見ることでよい気持ちがする」「でも、声を出した方が気持ちが伝わりそう」「確かに声も必要か…」などと、自分と異なる立場の考えを受け入れたり、自分にない新たな視点に納得したりする様子が見られた。



【活動の様子】

その後、「みんなが気持ちよく過ごすために大切な思い」について各班で対話を行った。「○○をしない」と、されて嫌なことを中心に考え対話が進む班や、「A さんは友達が失敗した時も『気にしない！次頑張ろう』と言ってくれて気持ちがいいよ」「私のクラスにも似た友達がいるよ」「B さんは『ありがとう』をたくさん言ってくれて気持ちがいいよ」などと具体的な言葉が出る班など様々であったが、みんなが気持ちよく過ごすために大切な思いについて、具体的な意見がたくさん出され、他者と進んで関わる姿が多く見られた。

全6回の全校道徳を通して、自分の考えを互いに伝え合う姿や他者の考えをうなずきながら聞き、「その考えいいね」と認め合う姿、話しづらそうにしている児童に「○○さんはどう思う？」と声を掛け、助け合う姿など、他者とよりよく関わろうとする姿が見られた。

これらの姿から、児童は、他者の考えをしっかりと聞き、自分で考え、決定し、行動しようとする態度を養うことができたと考える。

(2) 実践2「心のこもった言葉を使おう」【3・4年　道徳科】

まず、これまでの経験から「言われてうれしかった言葉」と「悲しかった言葉」について各自が書き出し、小グループ で対話後、付箋紙に書き出し全体で共有した。その後、校長先生の「言霊」についての話を聞いた。言葉には「言霊」があり、口にした言葉が本当になること、よい言葉を言えばよいことが起こり、逆に悪い言葉を言えば悪いことが起こることなどを真剣に聞く姿が見られ


【集まったうれしい言葉】

た。

授業の振り返りでは、「言葉は慎重に選ばないといけない」「『死ね』とか悪い言葉を使っている人がいたら、『やめなよ』と伝えたい」「一言で人の命を奪ってしまう言葉があることが分かった」「『死ね』は、間違っても絶対に言ってはいけない言葉だと改めて思った」など、言葉について真剣に考え、今後の自分の生き方を見つめ直す記述が多く見られた。

以上の振り返りから、児童は、一言で人の命まで奪ってしまう言葉があることを知り、言葉の重みや大切さについても深く考え、今後はより言葉を大切にし、温かい言葉や前向きな言葉を使って行動しようという気持ちをもつことができたと考える。

(3)　実践３「あいまつり」【全学年　児童会活動】

当日、お店を回る前には、どうしたらみんなが笑顔で回れるかめあてを決めてからお店を回った。遊びの最中、力を合わせてお店の課題をクリアしてみんなで「やったー」と喜ぶ姿や、「すごく面白かったです。ありがとう」とお店の人に感謝を伝える姿など、みんなが楽しく活動できるような声を掛けたりしてお店を回る姿が見られた。

また、お店の運営時には、クラスの仲間と協力しながら運営し、遊びに来た班の子達に笑顔でお店を回ってもらえるよう、明るく優しく声を掛ける姿や、自分たちも楽しむ姿など、生き生きと活動する姿が見られた。まつりの初めに班ごとに集まり、めあてを決めてから開始した。「どうしたらみんなが笑顔で過ごせるか」「そのために自分にできることは何か」などを考えてからまつりを開始したことで、どの児童も、自他ともに楽しく活動するためのよりよい関わり方を考えて、行動することができていた。まつり終了後に体育館で振り返りを行った。めあての達成度では、「よくできた」に〇を付けた児童が大半を占め、めあてを意識しながらまつりを楽しめたことがうかがえる。


【活動の様子】

感想には「いろんな人に声掛けしてもらったり、声掛けをしたらその子が頑張ってくれたりしたのでうれしかった」「笑顔で遊ぶことができ、班で助け合いや楽しみ合いなど、『あい』ができて良かった」などの記述が多く見られた。このことから、児童は、他者とのよりよい関わり方を自分で考えてｘ３行動し、楽しく活動できたと考える。

３　活動の成果と次年度への課題

本年度は、縦わり活動や全校道徳だけでなく、朝会でも校長先生の出したテーマ（例えば「仲よくってどんなこと？」「子どもの権利って？」など）について異学年で対話する時間を設けるなど、機会を増やし、交流の時間を多く確保した。その結果、対話が増え、関わりがより積極的になったり、互いの考えを伝え合ったりしやすい雰囲気ができてきている。

次年度への課題として、振り返りの質を高めていきたいと考える。振り返りの質を高めることで、毎回同じような振り返りをする児童が、「次はこうしたい」となったり、対話がより活発になったりと、児童にとってより学びのある活動になると考える。

今後も、本校の児童に必要なテーマで全校道徳を行ったり、ペア学年で社会にある個別の人権課題について対話を行ったりして、自分で考え、決定し、行動できるようにしていきたい。

目次へ

研究主題	探求心を深める「課題研究」の取り組み		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立城山中学校	校 長 氏 名	野口　俊一

１　生徒の実態

本校の生徒はとても落ち着いた態度で学校生活を送ることができ、体育大会や合唱祭などの行事に対しては、学級で協力して取り組むことができる。しかし、昨年度のアンケート調査で、「授業に意欲的に取り組んでいる」という質問項目では、生徒は４５％と低い結果となった。与えられた課題に対しては、真面目に取り組むことができるが、自らの見通しをもって粘り強く、意欲的に学習に取り組もうとする姿勢を身に付けていくことが大切であると考える。知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするだけではなく、主体的に学習に取り組む態度の育成が必要である。主体性や何事にも粘り強く取り組む態度は、学習面だけではなく、生活面においても、これからの時代をたくましく生き抜く力の育成に必要な資質だと考える。

２　研究のねらい

本校は、平成 11 年より生徒自らの興味・関心に基づいて課題を設定し、その課題に沿って各自が研究や制作などに「課題研究」を行っている。全校生徒が一人一研究を行う本校の代表的な教育活動である。これは、「ナゴヤ学びのコンパス」で提言されている「自分に合ったペースや方法で学ぶ」「夢中で探求する」姿に当てはまるものと考える。

学習指導の一環で取り組む「課題研究」は次の３つをねらいとして行う。

① 自らの興味・関心に基づいた探求的な学習の過程において、課題の解決必要な知識や技能を身に付ける。（知識・理解）
② 実社会や実生活の中から自ら問いを見つけ出し、解決に向けて仮設を立てたり、調べた情報を整理・分析したりするとともに、そこから考察したことを、根拠を明確にしてまとめ、表現する力を身に付ける。（思考力・判断力・表現力）
③ 探求的な学習に主体的に取り組むとともに、他者の発表から学んだり、そのよさを認めようとしたりする態度を育てる。（主体的に学習に取り組む態度）

これまでの本校の取り組みを生かしつつ、自他を大切にし、仲間とともに学び合い、心のつながりを大切にする生徒を育むだけでなく、主体的に行動でき、自らの見通しをもって、何事にも粘り強く取り組む生徒を育てたいと考えた。

３　具体的な手立て

(1)　一人１つのテーマでの研究

自らの興味・関心に基づいた探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識や技能を身に付けるために、自ら問いを見付け出し、根拠を明確にしてまとめ、発表をする。課題研究発表日を学校開放日として、保護者にも参観していただき、さらにロイロノートで他学級・他学年の発表内容を見られるようにして、ヴァーチャル作品展を実施する。

(2)　プレゼンについての講話

キャリアナビゲーターから、「『プレゼン』って何だろう？」というテーマで全校生徒に向けて、自分の言いたいこと、伝えたいことをきちんと伝える方法や相手に理解と共感を得てもらうためのポイントについての講話を行う。

4　実践内容

(1)　一人１つのテーマでの研究

生徒がそれぞれ自分でテーマを決めるので、様々なジャンルからテーマがある。(資料１)

１学期にテーマを決めて、夏休みの出校日まで、自分のペースで研究を進めていった。総合の時間や出校日で１時間を課題研究についての質問時間を設け、友人や担任、学年の先生などに助言をもらいながら研究を進めていく。助言をもとに修正し、９月にクラスで一人ずつ発表を行った。(資料２)

発表を聞いて、自分の出席番号前後３人ずつと良い発表だと思った２人分の評価をし、その評価をクラスで集約し、自分のシートに友人からの評価が集まるようにした。その集まった評価をもって、自分の振り返りに活用した。



資料１〈３年生のテーマ〉


資料２〈発表の様子〉

(2)　プレゼンについての講話

プレゼンの基本的な作成の仕方を教員ではない立場でのキャリアナビゲーターから伝えた。プレゼンの意義、相手に上手に伝えるためのスライドの作成や発表のスキルなど細かく講話していただいた。(資料３)



資料３〈キャリアナビゲーターによるプレゼン講話〉

5　研究の成果と課題

課題研究の成果は、一人１つの課題をもって、夢中で探究することができた。キャリアナビゲーターにテレビ中継を使ってプレゼンのコツを伝えてもらったことによって、完成度の高い発表が多かった。課題としては、発表を聞いて評価をする活動では、真剣に発表を聞いている生徒が多かったものの、一人あたりの発表時間が限られているので、十分に周りの生徒に伝わったかどうかが課題である。また、課題研究という与えられた枠の中だけでなく、授業や行事、クラスの中でも自律して学び続ける生徒を育成したい。

目次へ

研究主題	自律して学ぶことのできる姿を目指した授業実践について		
副　　題	自由進度学習を通して		
学 校 名	名古屋市立東白壁小学校	校 長 氏 名	福井　一道

本校では、これまで、ICT 機器も活用した「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりを目指して実践を進めてきた。実践の結果、多くの児童が ICT 機器も活用しながら、自分の考えをもって学習を進める様子が見られた。しかし、漠然と自分の考えをもつ児童も少なくない。また、友達の考えも知り、自分の考えに生かすことのできない児童も見られる。

自分の学習状況を把握して、考えに根拠をもって学習を進めることができれば、児童は、これまで以上に、意欲的に学習に取り組むことができるのではないか。そして、それぞれの児童が友達の考えを認めて自分の考えに生かすことができれば、学習を深めることにつながるのではないかと考える。児童が学習状況を把握して自分の考えをもち、その考えに友達の考えを生かすことのできる児童を本校では、自律して学ぶことのできる児童と捉え、こうした児童を育てる授業実践を行っていきたい。

今年度は、自由進度学習を取り入れた授業を行い、教師が示した選択肢の中から自分に見合ったものを自己決定できる児童を育てたい。

自由進度学習を行っていくためには、教師が自由進度学習について学ぶ機会が不可欠であると考えた。そこで、定期的な現職教育を、年間を通して行った。

５月には、名古屋市教育センター指導主事の講師による、自由進度学習についての現職教育を行った。そこでは、全国的に先進的に実践している学校の取り組み、児童が学習する上で選択する観点、振り返り活動の大切さを学んだ。

また、本校の中学校ブロックには、自由進度学習をこれまで数年にかけて実践している学校もある。中学校ブロックの学校がより連携を密にして教育活動を行っていくことは重要だと考える。そこで、教育委員会が行っている応募事業の「つながるプロジェクト」に参加し、中学校ブロックの学校と積極的に交流して実践方法を学ぶ活動を行った。

７月には、中学校に集まり、各学校の教員が学校間の仕事内容や、教育活動を行う上での悩み、その解決方法を話し合った。特に、中学校の教員が思う、児童が中学校に進学するまでに身に付けてほしい力や、自由進度学習を熱心に行っている学校の教材研究方法で新しい発見があった。

９月には、自由進度学習をこれまで数年にかけて実践している学校の授業を参観した。学年の実態に応じて、単元内自由進度学習や複数教科による自由進度学習を行っている様子が見られ、本校の実践にも生かしていくことのできる実践方法を学ぶことができた。その後、ウェルビーイングについて話し合った。各学校で様々な教育活動を行っているが、どの学校も児童のウェルビーイングを大切にした教育活動を行っていることを再確認することができた。

定期的な現職教育を行う中で、各担任が自由進度学習を取り入れた授業を行い、教師が示した選択肢の中から自分に見合ったものを自己決定する授業実践を行い、授業を参観する活動も行った。

研究の手立てとして、自由進度学習の三つ型、課題選択型（興味・関心に対応）、時間設定型（学習のペースに対応）、目標設定型（習熟度に対応）を取り入れ、児童の実態に応じて型を選んだり、場合によっては組み合わせたりして授業実践を行った。

低学年部会、中学年部会、高学年部会の三つに分かれて、授業内容を検討して、実践を行い、事

後検討会を行った。そして、代表授業については、全教員で授業内容を検討して、実践を行い、事後検討会を行った。

１年生では、課題設定型として、生活科「あきとなかよし」の実践を行い、秋に公園で見付けた木の実や葉っぱなどを使って、自分や友達が楽しいと思うおもちゃを作り、遊ぶだけでなく、そのおもちゃを友達に紹介する活動を行った。どの児童も木の実や葉っぱの特徴を生かしたおもちゃを作り、楽しそうに遊ぶ姿が見られた。また、近隣の幼稚園や保育園の児童も小学校に来校してもらい、秋祭りに参加してもらったり、６年生の児童にもおもちゃ遊びに参加してもらったりした。年齢を問わず、どの児童も楽しそうに遊ぶ様子が見られた。

２年生では、課題設定型として、国語科「ひろがる読書」の実践を行い、自分が友達に勧めたい本を紹介するための方法を考える学習を行った。友達に勧めたい内容を明確にして、紹介方法のそれぞれの特徴をおさえたことで、どの児童も、自分なりに根拠をもって紹介方法を選び、友達に紹介することができた。

３年生では、目標設定型として、算数科「１けたをかけるかけ算の筆算」で実践を行い、授業前半で評価テストを行い、自分の学習状況を知る。その上で、自分のレベルにあった学習プリントに取り組んで、１けたをかけるかけ算の筆算をより正確に速く解けるようにする学習を行った。自分のレベルに合ったプリントに取り組むことができるので、どの児童も集中して学習に取り組む様子が見られた。

４年生では、目標設定型として、算数科「小数のかけ算とわり算」で実践を行い、学習状況に応じて自分のレベルに合った学習プリントに取り組み、小数のかけ算とわり算の計算をより正確に速く解けるようにする学習を行った。授業の中では、毎時間振り返り活動を行い、自分が学習したい内容、しなければならない内容を児童一人一人が理解した上で、授業に参加していた。そのため、どの児童もこれまで以上に意欲的に授業に参加する様子が見られた。

５年生では、目標設定型として、体育科「走り幅跳び」で実践を行った。砂場で走り幅跳びを行ったが、走った勢いを跳ぶ力に変えるために必要な動きを確認して、児童ごとに練習の場を選んで学習に取り組んだ。自分で練習の場を選ぶことで、意欲的に練習に取り組む児童の様子が見られ、記録を伸ばして喜ぶ児童の姿が見られた。

６年生では、課題選択型として、社会科「貴族のくらし」で実践を行った。単元の始めに、教師から平安時代に活躍した人物を紹介したり、動画や当時の資料を見たりして、平安時代の貴族に対する知識を身に付けた。その上で、児童間で興味をもったこと、疑問に思ったことについて、意見交流をすることで、どの児童も、自分の調べたい学習内容をもつことができ、意欲的に学習に取り組む様子が見れた。

全学年で、体力運動能力調査を行ったが、課題設定型として、それぞれの児童ごとの記録を分かりやすくまとめた用紙を配布した。それぞれの児童が自分の体力の高まりや、高めたい動きを実感することができ、休み時間や体育の授業など、これまで以上に運動に親しむ様子が見られた。

こうした実践の様子を共有するために、自由進度学習を行った際の指導案や学習プリント等を教員の校内パソコンの共有データに入れ、教員間でいつでも閲覧・利用できるようにした。

実践の成果としては、定期的な現職教育の実施や、実践を行ったり共有したりすることで、どの学年の児童も自己決定しながら学習を行うことができた。

実践の課題としては、自由進度学習を行うことに対して不安感をもつ教員も少なくないことだ。本校としての自由進度学習の方法と目的を教員に周知し、実践内容の共有や現職教育を続けていきたい。また、教材研究をする際の負担を少しでも減らせるような方法を考えていきたい。

目次へ

研究主題	主体的に学ぶ葵っ子の育成		
副　　題	自律して学び続ける姿を目指して		
学 校 名	名古屋市立葵小学校	校 長 氏 名	山田　敏晴

1　研究の概要

学校教育目標である「ともに学び、ともに感じ、ともに創る葵っ子」を実現するために、「主体的に学ぶ葵っ子の育成」をテーマとして、児童が自律して学ぶ姿を目指していく。

一つの単元や一つの授業の中で自律して学び続ける場面を教師が設定し、有能な学び手である児童が主体的に学ぶ姿を追求していく。児童は自律して学び続けることで主体的に学ぶようになり、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」を身に付けられるようにしていく。

自律して学ぶ姿を、低学年は興味・関心等に応じ、やりたいことを見付けて取り組む姿、中学年は学ぶペースや方法、内容などを自己選択、自己決定しながら学ぶ姿、高学年は学びに見通しをもち、振り返りながら学び続ける姿と考える。

2　研究の内容

(1) 5年生（社会科：あたたかい土地のくらし・寒い土地のくらし）

ア　単元を貫く学習課題

その土地について知ったことを、みんなに伝えよう

イ　手立て

調べることをあたたかい土地のくらしか寒い土地のくらしかで選択したり、その土地でのくらしのよいところや大変なこと、知りたいと思った事柄を調べたりすることで、興味・関心に応じてやりたいことを見付けて取り組むことができるようにする。

調べる方法は、教科書や資料集、タブレットから選択し、まとめる方法はノート・タブレットから選択させ、方法や内容などを自己決定しながら学ぶことができるようにする。

単元を貫く学習課題を提示し、発表することを意識しながら取り組ませることで、学びに見通しをもたせることができるようにする。また、振り返りシートを活用して、前時とのつながりをもたせることができるようにする。

ウ　実践の様子（第1時と第3時）

第1時

那覇市と帯広市の気候区分のグラフや写真を児童に提示した。児童から「降水量が多いからこっちのグラフは沖縄県だ」や「プロ野球のキャンプの写真だ」、「新鮮な牛乳が飲めそう」などの声が聞かれた。そして「あたたかい土地、寒い土地のくらしについて、どちらを調べたいか決めよう」というめあてを確認した。児童にあたたかい土地、寒い土地について知っていることやイメージを発表させ、その後、「今回はあたたかい土地と寒い土地のどちらかを選んで、調べたことをみんなに伝えます」と教師が単元を貫く学習課題を提示した。児童は、あたたかい土地にするか寒い土地にするかを自分で決め、タブレットを使って調べた。授業の最後には、「疑問に思ったこと・次回調べたいこと」を振り返りシートに記入した。



【単元を貫く学習課題を提示している様子】

第３時

単元を貫く学習課題を確認し、前時の振り返りシートの「疑問に思ったこと・次回調べたいこと」を参考に、本時のめあてを振り返りシートにさせた。そのめあてに沿って児童は教科書や資料集、タブレットを使って調べたり、ノートやタブレットにまとめたりした。第１時の最後と同じように「疑問に思ったこと・次回調べたいこと」を振り返りシートに記入した。



【タブレットを使って調べている様子】

エ　成果と課題

○　興味・関心に応じて調べることを自己選択することができたので、児童は主体的に学ぶことができた。

●　調べる方法を教科書や資料集、タブレットから選択させたが、多くの児童がタブレットを使って調べていた。そのため、調べた内容が多すぎてまとめることが大変であった。教科書や資料集を使って調べ、教科書や資料集に書いていないことを調べたかったらタブレットを使って調べさせるとよかった。

⑵　４年（国語：分類をもとに本をみつけよう）

ア　単元を貫く学習課題

２年生が楽しめるブックトークをしよう

イ　手立て

ブックトークのテーマを児童の興味・関心に応じて、自己選択できるようにする。

ブックトークを作り上げるグループを集団か個人かを自己選択できるようにする。

自分のペースに応じて、学ぶ進度を自己決定できるようにする。

本を選ぶときに、テーマと分類によってより適切な本を自己選択することができるようにする。

ウ　実践の様子（第１時～第３時）

第１時

ブックトークに向けて準備する時間は４時間であることや、完成させるまでにテーマを決めたり、発表の仕方を考えたりしなくてはいけないことを児童は伝えられ、どの活動にどれだけの時間を使うか児童が計画を立てた。

第２・３時

児童はそれぞれのペースで学習を進めた。まず、自分の興味・関心に応じてテーマを自己選択した。テーマを自己選択することが難しい児童は、分類表の言葉から自己選択していた。そして、一人で活動するのか同じテーマの児童とグループで活動するのか自己選択した。次に、自己選択したテーマに合った本を選んだ。グループで活動している児童は話し合いをしながら本を選ぶことができたが、一人で活動している児童は一人で本を選ばなくてはいけないのでやるべき活動が多く困っている児童もいた。



【グループで話し合いをしている様子】

本を選んだらブックトークで話す内容を考えた。ブックトークでは、はじめの言葉で始まり、終わりの言葉で終わるようにした。グループで活動している児童は、はじめの言葉だけを担当した児童もいた。また、一人で活動している児童ははじめの言葉から終わりの言葉まで全部一人で考えなければならなかった。

毎時間の振り返りでは、その時間でできたことを振り返ったり、次の時間に何をすればよいのか見通しをもったりすることができていた。

エ　成果と課題

○　一人で活動するよさやグループで活動するよさを伝えてから、一人で活動するか、グループで活動するか自己選択させたため、児童は自分のペースで学習を進めたり、協力して取り組んだりすることができた。

○　ブックトークを作る流れを伝えたため、児童は完成までの見通しをもつことができ、自分に合った進度で学習を進めることができた。

●　学ぶペースや方法、内容などを自己選択、自己決定させたため、一人で活動する児童とグループで活動する児童とで学習内容に差ができてしまった。学習内容に差が出ないことを自己選択、自己決定させる必要があった。

(3)　1年生（生活科：なつとともだち）

ア　単元を貫く学習課題

草や花を使ったおもしろい遊びを考えよう

イ　手立て

児童が見付けた夏の植物の実物やその写真を大きな紙にはり、教室後方の黒板に掲示しておくことで夏の植物やそれを使った遊びに関する興味・関心を継続的にもつことができるようにする。

ウ　実践の様子（第3時）

植物を使った遊びを考える活動では、これまで試した遊びを思い出して、グループで意見を出しながら、どの遊びがおもしろかったか考える姿が見られた。また、茎が切れてしまうことに困っていたグループに対して「2本でやってみたら」とアドバイスをする様子や、アドバイスを参考に遊びを改善したり、アドバイスを参考に新しい遊びを考えたりする姿が見られた。



【新しい遊びを考えている様子】

エ　成果と課題

○　児童の視界に夏の植物についての情報が映ることで、授業中だけでなく休み時間にも進んで夏の植物について調べたり、探しに行ったりする姿が見られた。

●　考えた遊びをワークシートに記入させたが、児童には難しかった。タブレットを使って写真や動画で記録させるとよかった。

3　研究のまとめ

学校教育目標である「ともに学び、ともに感じ、ともに創る葵っ子」を実現するために、「主体的に学ぶ葵っ子の育成」をテーマとして、児童が自律して学ぶ姿を目指した。

自律して学ぶ児童の姿に近付けるよう、児童が自分の興味・関心等に応じてテーマを設定することができたり、学ぶペースや方法を自己選択、自己決定させたりした。そのため、児童から「おもしろそう」「もっとやってみたい」という声を聞くことができた。教師が設定した単元を貫く学習課題は「発表しよう」や「伝えよう」という活動が多くあった。そのため、タブレットで作成した資料をプロジェクターやスピーカーを使って提示したり、発表している様子を児童が振り返ったりする必要があった。タブレットスタンドを使い、タブレットで発表している様子を撮影し、見返すことで学習を振り返ることができた。また、タブレットを授業の中で活用することが多くあったが、タブレットの充電がなくなってしまう場面もあった。そこで、すぐに充電できるように充電器を準備しておく必要もあった。

このように、教師が事前に自律して学ぶ児童の姿を想定し、単元を貫く学習課題を設定したり、児童の興味・関心等に応じてテーマを設定することができるようにしたり、児童に学ぶペースや方法を自己選択、自己決定させるようにしたりすることが大切である。また、児童が主体的に取り組むことができるように学習環境を整備することも大切である。

今後も、有能な学び手である児童が主体的に学ぶ姿を追求していけるように、自律して学び続ける場面を教師が設定し、児童の学びに伴走していきたい。

目次へ

研究主題	見つめよう　伸ばそう　深めよう		
副　　題	「自律した学び手」を育てるために		
学 校 名	名古屋市立名北小学校	校 長 氏 名	中村　千秋

1　研究の概要

（1）研究のねらい

今年度から名古屋市立学校・園では、「ナゴヤ学びのコンパス」の考えに基づいた教育活動を展開している。「ナゴヤ学びのコンパス」では、目指したい児童の姿に「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける」とある。これを受けて、若葉ブロックでは、幼稚園・小学校・中学校の 12 年間において、目指す児童の姿を「夢に向かって、自分らしく学ぶ」とした。

「夢に向かって、自分らしく学ぶ」児童を育てるためには、児童の学び方改革に取り組まなければならないと考える。そこで、本校では努力点主題を「見つめよう　伸ばそう　深めよう」とした。副題を「『自律した学び手』を育てるために」とし、児童が学びを進めていく、深めていくことができる活動を展開していくこととした。その活動の中心として、生活科と総合的な学習の時間でプロジェクト型学習に取り組み、「自律した学び手」を育てるためには、児童が学びの舵をとり、「学びに向かう力」を高めていきたい。

プロジェクト型学習は、「学びに向かう力」を高めるにあたって、効果的な育成手法だと考える。プロジェクト型学習に取り組むことによって、各学年の実態に応じた探究的な学習を進め、教師の指示による受動的な学習ではなく、児童の興味・関心を基にして、自分のペースで学習を進めていける力を高めていきたい。

（2）研究の方法

プロジェクト型学習を推進するにあたって、今年度から取り組むプロジェクト型学習をどのように進めていけばよいのかを迷うことが予想された。そこで、ＰＢＬコーディネーターの方に定期的に来校していただき、本校のプロジェクト型学習をサポートしてもらうこととした。また、夏休み中に現職教育を行い、プロジェクト型学習の進め方や考え方を学ぶ機会を設定した。そうすることで、プロジェクト型学習の全体像やステップごとの取組方について、より具体的に理解できるようにしていきたい。そして、二学期以降の学習活動に見通しをもって取り組めるようにする。

具体的には以下のように計画をした。

＜ＰＢＬコーディネーターによる来校予定と活動内容＞
８月…現職教育（プロジェクト型学習の進め方、考え方の学習会）
９月…授業への参加、取り組みの相談
１０月…授業への参加、取り組みの相談
１１月…授業への参加、後期努力点代表授業事前検討会への参加
１２月…後期努力点代表授業の参観、事後検討会への参加

２　研究の内容

（１）現職教育（プロジェクト型学習の進め方、考え方の学習会）

８月にＰＢＬコーディネーターによる現職教育を行った。これまでプロジェクト型学習に取り組んできた学校の事例を基にして、プロジェクト型学習の進め方や考え方を学んだ。これまでの実践校で使用していたワークシートや資料も提供してもらうことができた。また、低・中・高に分かれて学年ワークを行い、９月からの活動内容の話し合いも行った。全体での学習会後には、各学年で時間をとり、これまでの取り組みの経過と９月の授業参観での授業の組み立てなどの相談を行った。

現職教育を通して、プロジェクト型学習の進め方や考え方を学ぶよい機会となった。コーディネーターに相談することができ、今後の見通しをもつことができた。



【学習会の様子】



【学年ワークの様子】

（２）授業の実際

＜３年生（総合的な学習の時間「名北学区について調べよう」）＞

３年生の実践では、「問いとゴールの設定」段階で、「名北学区について、自分の手でもっと調べてみたいことを決めよう」というめあてで授業を行った。導入場面で、「ふれる」段階での学区探検やワークシートの記述を振り返り、疑問に思ったことを発表した。その後、一番調べたいことを選び、理由をワークシートに記述した。そして、友達と意見を共有できるように、調べたいことが似ている友達とグループを作り、自分の調べたいことを伝え合った。

児童はめあてを達成するために、友達の意見を聞いて、自分も調べてみたいことをワークシートに書き加えたり、調べてみたいことが複数ある場合には優先順位を付けたりして、調べてみたいことを焦点化していった。最後に、活動を振り返り、どのような方法で調べるとよいかを問い掛け、次時へとつなげた。





【調べたいことを伝え合っている様子】

＜１年生（生活科「あきとなかよし」）＞

１年生の実践では、まず、秋のものを使ったおもちゃを作った。次に、作ったものをどうするのかを「探究活動」の段階で考え、お店にして２年生に紹介することになった。そして、「どのような店にしたいかを考えて、店の練習をしよう」というめあてで活動を行った。お客さんが来たときの言葉を考えたり、言うことを何度も練習して覚えたりした。お店の練習をする場面では、教室に置いてある「アドバイスカード」を用いて、よかったところやもっと工夫できる点を伝え合った。





【店の練習をしている様子】

実践の最後には、２年生を招待し、「オータムフェス」として、それぞれが考えたお店を開いた。そして、「あきとともだち」の単元を通して、できるようになったことを自己評価し、振り返りを記入した。書いた内容を共有した。





【オータムフェスの様子】

（３）ＰＢＬコーディネーターの授業への参加と取り組みの相談

ＰＢＬコーディネーターの来校時には、できるだけ各学年の生活科や総合的な学習の時間のプロジェクト型学習の授業を参観してもらっている。コーディネーターが児童に質問したり、児童が質問に答えたりするなど、授業を参観するだけでなく積極的に授業に関わってもらい、授業のサポートをしてもらっている。授業後には、授業をよりよくするポイントや今後の学習の進め方を、コーディネーターに相談する時間を設けている。コーディネーターに相談することで、今後の見通しをもつことができ、次の授業に生かすことができており、実りのある時間となった。



【授業に参加している様子】



【各学年での相談の様子】

３　研究の成果と課題

成果としては、初めてプロジェクト型学習に取り組んできたが、ＰＢＬコーディネーターを招き、どの学年も定期的に学習の進捗状況を伝え、助言を受けたことで、学習の進め方についての理解を深めることができた。また、夏休み中の現職教育で、プロジェクト型学習の研修を受けたことで、プロジェクト型学習の全体像やステップごとの取組方について、教職員がより具体的に理解することができた。

課題として、ＰＢＬコーディネーターのサポートを受け始めたのが夏休み以降であったため、プロジェクト開始時の段階（ふれる段階）が十分ではなかったところがある。ふれる段階が、学びの土台となり重要な段階であるので、来年度は「ふれる段階」の計画をさらに充実させたい。また、児童の興味・関心を継続的に持続させることの難しさもあった。「心のエンジン」に灯した火を、絶えず燃やし続けるための活動や仕掛けの工夫を考えていく必要がある。

４　来年度の重点項目

①ふれる段階での活動の充実。

②探究活動段階での、児童の興味・関心を持続させるための活動や仕掛けの工夫。

③プロジェクト型学習を他教科へも広げていくこと。

目次へ

研究主題	チャレンジしよう　夢中になろう		
副　　題	－　自ら選び、自ら決めて取り組む活動を通して　－		
学 校 名	名古屋市立金城小学校	校 長 氏 名	高須　孝司

1　主題設定の理由

⑴　これまでの取り組み

文部科学省が掲げる「ＧＩＧＡスクール構想」のもと、ＩＣＴによる個別最適化された教育の実現に向けた基盤をつくるために「ＩＣＴの活用を通して主体的に学ぶ児童の育成」を主題において、実践を進めてきた。その中で、教師・児童ともにタブレットの基本的な操作方法を身に付け、児童は自分の考えを写真や資料を使って表現できるようになった。また、タブレットを使った小集団での話し合い活動を通して、考えや学習の成果を共有させることで、自分とは異なる新しい視点や新たな課題に気付く姿が見られた。さらに、協働的な学びの充実を目指していく中で、児童が自らの考えの深まりを実感していく姿を引き出すことができた。

⑵　金城小の課題

一方で、学習内容の理解度や、取り組むスピードには個人差があるため、話し合いや学び合いの設定はしたものの、考えが深まらない場面があった。また、取り組みに対する児童の様子にも個人差があり、主体的に学ぶ児童が育ったとは言い切れないといった課題が残った。さらに、教職員へのアンケートから、自分で判断する力が乏しく、次に何をしたらよいかなどをすぐに教師に聞きに来ることや、日常生活において自分の思いが先行し、公共（学校）のルールやマナーが守れないことなどが課題にあがった。

⑶　今後の取り組み

昨年度までの取り組みの課題と、教職員からの課題を総合し、今年度は「チャレンジしよう　夢中になろう」を主題に設定した。チャレンジするとは、児童が自分の理解度や技量などから自分の取り組み方を自分で判断して選んだことに挑戦していく姿である。また、夢中になるとは、児童自身がその事象の中心になって意欲的に取り組む姿である。

チャレンジする児童を育てるために、めあてに対して自分で活動や取り組み方を選択したり、決定したりした後、その活動を振り返るといった取り組みを繰り返すことが大切である。例えば、学習の中で練習方法を選択させて取り組む時間があったり、１単位授業の時間の終わりに課題を選択させて取り組ませたりしていく。そして、その活動を振り返らせることで、自分の理解度などを判断し、次の活動に対する意欲や見通しをもたせることができるようにしていく。

また、学級活動の中でも自己選択・自己決定する経験を積ませていく必要があると考える。そのために、学級で対話しながら役割分担したり、活動内容を決めたりする場面を設定していく。定期的に活動を振り返り、それをもとに活動内容を変更したり、新たな取り組みにチャレンジさせたりしていく。学習場面だけでなく、学級での活動、委員会活動など、日常生活全ての活動で選択・決定・振り返りを取り入れることで、チャレンジし、夢中になって取り組み続ける児童を育てていく。

⑷　「ナゴヤ学びのコンパス」とのかかわり

「ナゴヤ学びのコンパス」では、ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける児童の姿を目指している。目指すのは、児童中心の学びであり、その中で教師や大人は、児童は有能な学び

手と理解し、児童の学びに伴走するという、子ども観の転換が求められている。児童中心の学びを進める中で、自己選択・自己決定は大切な要素であるため、本校の努力点とのかかわりが深く、これに取り組むことには意義がある。

２　研究の計画

⑴　研究の進め方

今年度の副題を「自ら選び、自ら決めて取り組む活動を通して」と設定し、めあてに対して自分で活動や取り組み方を選択したり、決定したりした後、その活動を振り返る取り組みを繰り返していく。児童が自分で選び、決めたことにチャレンジし、その取り組み方を振り返る経験を積ませることで、自分の力で物事を考え実行するための基盤となる力を育んでいく。

⑵　内容および日程

①　全職員が学習指導案を作成して、年に１回、授業公開をする。
②　授業公開の際は、部会で参観と事後検討会を行う。(できるだけ事前検討会も行う)
③　全体授業は、全職員で事前検討、参観、事後検討会を行う。

３　実践の様子

１年生　生活科「みんなの　にこにこ　大さくせん」

家族の「にこにこ」を増やすために、家庭内で自分ができる「にこにこ大さくせん」の計画を立てた。「誰に」「何を」「どのように」を選択したり考えたりして、意欲的に活動に取り組む様子が見られた。計画を実行した後「家族をにこにこにさせることができてうれしかった」「これからもつづけたい」など、人の役に立つことにやりがいを感じるとともに、家族のために自分ができることを続けていこうという思いをもつことができた。



【計画を立てている様子】

２年生　生活科「わたしの町　はっけん」

町探検で行くお店の、見たいことや聞きたいことを考えて選ぶ活動を行った。写真や地図、教師の話を基にして、興味をもったお店を選び、見たいことや聞きたいことを付箋紙に書いた。知りたいことがどんどん思い浮かんで付箋紙を何枚も取りに来たり、友達の書いた付箋紙を見て、それを参考に書いたりするなど、意欲的に取り組む姿が見られた。最後に、行きたいお店を選ぶ活動では、どの児童も選んだ理由まで書くことができた。



【付箋紙を貼ったり、友達の付箋紙を参考にしたりする様子】

３年生理科「ゴムと風の力のはたらき」

ゴムカーを遠くまで進めるための方法を考えた。ゴムの太さや本数を変えるという条件のもと、実際にゴムを触って、引き戻す力を確かめながら、「１本のときより２本の方が戻ろうとする力が強いから、車はよく進むと思う」「太いゴムは伸びにくいから、細いゴムの方がよく進む」などと予想した。自分の予想を確かめる実験では、班の仲間と協力して、生き生きとした表情で取り組む姿が見られた。



【考えを試して、確かめる様子】

４年生　体育科「マット運動」

側方倒立回転ができるようになることを目指して、自分の課題に合わせた練習の場を選んで取り組んだ。タブレットで試技を撮影し、何度も見返したり、仲間とアドバイスをし合ったりしながら練習した。「まだ足が曲がっているから、ゴムに届くように頑張ろう」「腕を伸ばすことで、きれいな形になった」など、自分の課題の解決方法を考えながら、意欲的に取り組むことができた。



【試技を撮影している様子】

５年生　図画工作科「紙から生まれるすてきな明かり」

一人一人の思いに合った明かりを表現できるように、光り方についての表現の工夫を見付けさせた。紙を折り曲げる、丸める、重ねるなどして形を変えたり、多様な材料を用いたりして、どのように光が透けて見えるのかを確かめた。「違う材料を切って貼るとどんな光になるのかな」という疑問や「紙を重ねると光の見え方が優しい感じになった」という発見を繰り返し、友達と話し合いながら活動する様子が見られた。次回の明かり製作に向けて、「この形や材料で作ってみたい」「この光の見え方を生かした作品にしたい」など、気持ちの高まりが感じられた。



【紙の形を変えている様子】

６年生　総合的な学習の時間「１年生と思い出をつくろう」

１年生と仲良くなるための交流会に向けた準備をした。事前に１年生にアンケートをとり、それを基に１年生が喜びそうな遊びについて話し合った。３つの調査隊に分かれて会議を行い、出された意見を整理して比べ合いながら、内容を決めた。その後、どんな役割が必要かを話し合い、自分たちで役割分担を行った。「分かりやすい説明をしたい」「会を盛り上げられるようにしっかり準備したい」など、一人一人がめあてをもち、意欲的に活動に取り組むとともに、「何をするか」「自分に何ができるか」といったことを自分たちで判断して話し合いを進めていくことができた。



【調査隊が会議をしている様子】

４　成果と課題

自ら選び、自ら決めて取り組む活動を授業の中に設定したことで、自分の予想を確かめたり、自分の考えを証明したりする活動において、生き生きとした表情で意欲的に取り組む児童の姿が見られるようになった。しかし、選んだり決めたりする方法ばかりに重点がいってしまい、なぜそれを選んだのかを十分に考えさせることができなかった。今後は、選んだ理由や実際に取り組んだ結果、選び方は適切で合ったのかどうかを振り返る活動を取り入れることで、自分に合った活動を選ぶことができる児童を育てていきたい。

目次へ

研究主題	ゆるやかな協働性の中で自立して学び続ける東志賀っ子の育成		
副　　題			
学校名・園名	名古屋市立東志賀小学校	校長・園長氏名	古川　守之

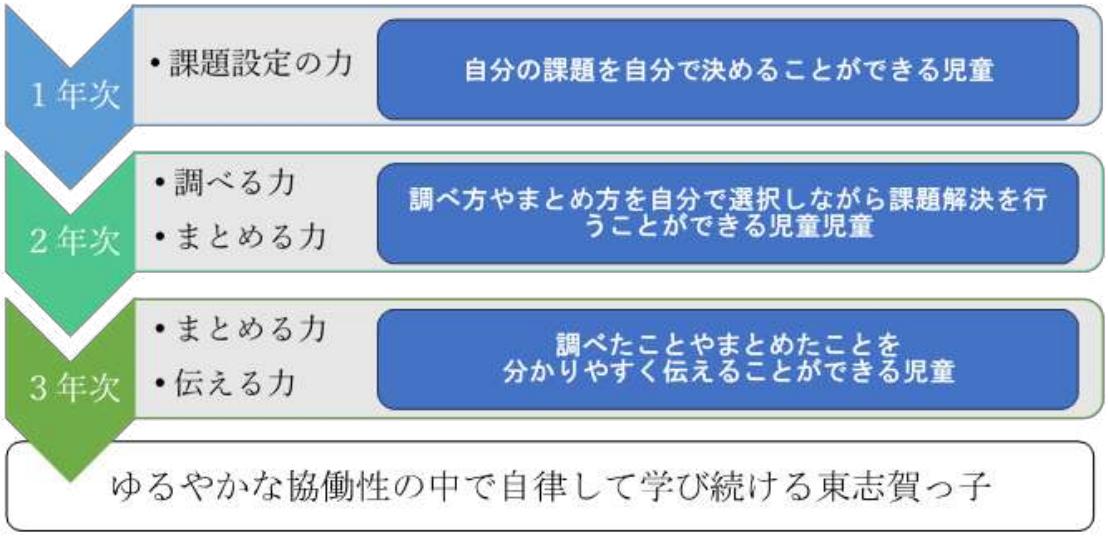
1　はじめに

ナゴヤ学びのコンパスの実現に向けて

名古屋市教育委員会は令和５年９月に「ナゴヤ学びのコンパス」を策定した。その中には、「全ての子どもは、適切な環境とそれを支える仲間・大人に出会うことで、自ら学びを進め、深めていく存在であるという意味で『有能な学び手』である」と示されている。このことから、教師主導で進められてきた現行の学校教育の在り方を見直し、子どもたちが主体となって学習に取り組むことができるような学習スタイルの確立が必要であると考える。さらに名古屋市は、「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける子ども」を目指したい子どもの姿として、名古屋市の小中学校が目指していく大きな指針を示している。

そこで、以下のような３年計画に基づき、本校の児童の実態に即した学習スタイルを構築し、ナゴヤ学びのコンパスの示す「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける子ども」を育成することを目指し、本年度は、「課題設定」の場面に着目した実践を進めることにした。

学習段階	**課題設定（令和６年度）**	調べ学習（令和７年度）	まとめ（令和７年度）	発表（令和８年度）
児童の活動	**○　大テーマから知りたいこと・調べたいことをテーマに設定する。**	○　自分のテーマについて様々な手段で調べる。	○　学習成果をまとめる。	○　調べたことを伝える。
教師の役割	**○　テーマとの出合わせ方の工夫** **○　子どもにあった課題設定への助言**	○調べ方の例示と助言	○　まとめ方の例示 ○　分かりやすくまとめるための助言	○　伝える場の設定
		○　協働学習の場を設定		
研究計画	**１年次**	２年次		３年次



２　具体的な手立て

課題設定の力を育てる手だて

○　テーマとの出合わせ方の工夫（画像・動画の活用、発問、問題の工夫など）

○　子どもの興味・能力にあった課題を設定できるような助言の仕方

調べる力を育てる手だて

○　調べ方の例示（インターネットの検索の仕方、図書の探し方、インタビューの仕方など）

○　調べ方の選択肢を広げることができるような助言の仕方

まとめる力を育てる手だて

○「誰に」「何のために」「何を」などの相手意識や目的意識などをもたせる工夫

○　まとめ方の例示

※　プレゼンテーションや新聞、ポスターなど、複数のまとめ方の中から、一番自分の考えをまとめ方子ども自身が選択することができるように促す。

伝える力を育てる手だて

○　話す速さ、間、声の大きさなど、場に応じて話す技術の指導

○　ポスターや新聞など、相手に伝わる構成の工夫への助言

ゆるやかな協働性の中で学ぶ場の設定

○　情報交換やアドバイスタイムなど、友達と一緒に学ぶ場の設定

※　「友達と相談しましょう」と投げ掛けるのではなく、子どもから「友達と相談したい」「友達に聞いてもらいたい」と子ども自身が友達と一緒に学びたいという思いをもつことができるようにする。

すべての学習活動において、教師主導で学習が進むのではなく、
子どもたちが自ら学びに向かって動き出す姿を引き出すことができるようにする。

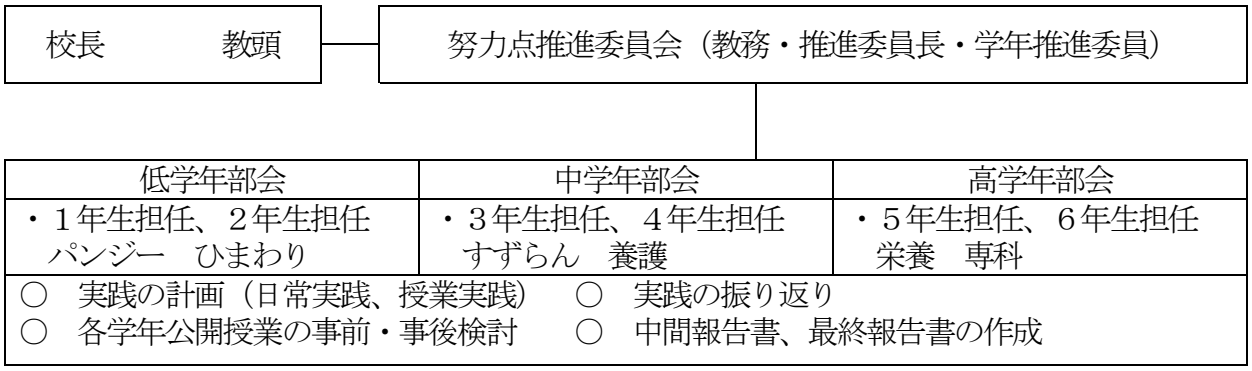
３　研究の進め方

・　４月に各自が核として取り組む教科を設定し、年間を通した計画を立てる。一人当たり 5,000 円を研究費とし、研究に必要な書籍の購入や教材の準備・学習環境の整備等に充てる。

・　低・中・高の部会で検討会を開き、授業公開を行なう。

・　授業の様子を学年だよりに掲載するとともに、学級懇談会で保護者に紹介する。

５　研究組織



６　研究の内容

５年　体育科　「マット運動」

⑴　目標

自分に適した課題の解決の仕方を考え、練習場所や練習方法を工夫して取り組むことができる。（思考・判断・表現）

⑵　主な手立てについて

【自分の課題を見付けることのできる振り返りシートの工夫（課題を見付ける手立て）】

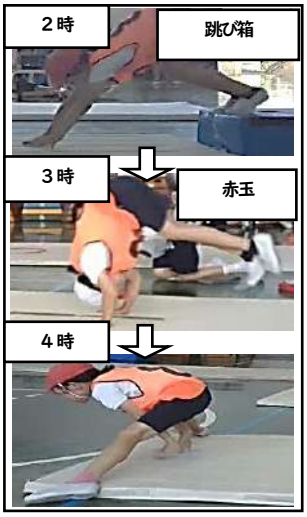
技の大まかなポイントを示したワークシートを用意する。子どもたちは自分の能力に適した技を選び、前時に取り組んだ自分の技の動画を見返して自分の課題を設定する。

【課題ごとに練習ができる場と教具の設定（課題を解決する手立て）】

技を練習する場をスモールステップで段階的に設定するとともに、課題解決につながるように、様々な教具を用意し、必要に応じて選択することができるようにする。

⑶　実践の様子

撮影した自分の技の動画を見て、自分の課題が何かを考えさせた。そして課題解決のために必要となる教具や場をワークシートから選んで課題に取り組ませた。また、より完成度の高い技になるにはどうしたらよいかを子どもたちに発表させ、ただ技ができるのではなく、より完成度が高まるように意識させた。A児は大きな前転の場を選択し、腰を高く上げるという課題を解決するために跳び箱を使って腰を高く上げる感覚をつかんでいた。第３時では、より完成度の高い大きな前転にするため、技の最後に立ち上がることができるように、赤玉を足に挟んで足が真っすぐ伸びるように意識して取り組んだ。第４時では、大きな前転でつかんだ感覚を基に、回転の勢いを付けるために坂道の場で練習し、最後には平らな場で開脚前転を成功させることができた。



【A児の活動の様子】

⑷　成果と課題　（○成果　●課題）

○　自分の動画を見たり、チェックポイントを確認したりすることで、多くの児童が自分の課題を見付けることができた。

○　場や教具を選択することで、目的をもってそれぞれの課題に取り組むことができた。

●　課題が解決できているのに、次の場になかなか進むことができない児童がいた。

●　自分の課題が分かっていても、その解決方法が分からず困ってしまう場面があった。

４年　特別支援学級（自閉・情緒）自立活動　「話し合いをしよう」

⑴　目標

「話し合い」の基本的な決まりを守って、友達との話し合いを楽しもうとしている。

（主体的に学習に取り組む態度）

⑵　主な手立てについて

【話合いに必要な基本的なルールを学ばせるための学習活動の工夫】

話題に沿った会話を続ける活動を行い、話し手の話を最後まで聞くことや自分ばかり話さないなど、話合いに必要な基本的なルールを学ばせる。話し手はマイクを持ち、話が終わったら次の話し手の児童にマイクを渡すようにし、会話の移り変わりを視覚的に分かりやすくする。

【話合いの良さを感じさせるための学習活動の工夫】

「どうぶつマンションゲーム」の中で、児童全員に異なる内容が書かれたヒントカードを渡し、一人ずつ内容を発表して、聞いた内容を整理して答えを導き出す活動を行う。友達の話を聞くことや自分の話を伝えることができるように支援をしていく。約束を守って、楽しみながら話合いの良さを感じることができるようにする。

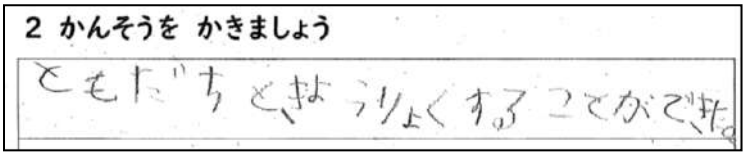
⑶ 実践の様子

まず、しりとりゲームを行った。B児は、話す順番になったらマイクを持ち、話すことができた。マイクを持つ友達の声をしっかり聞こうとしたり、自分の順番ではないときは話をしないようにしたりすることができた。

「どうぶつマンションゲーム」では、ヒントを発表する順番になったらマイクを持ち、さらに、話し手は、話す前に「話します。」と言い、聞き手は「はい。」と答えるルールを設定した。B児は、マイクがあることで、「どうぶつマンションゲーム」に関係のない話をしないように気を付けたり、順番を守って話したりすることができた。また、友達が「話します。」と言ったら、元気よく「はい。」と答え、話し手に注目して聞くことができた。



【B児の活動の様子と感想】



⑷ 成果と課題 （○成果 ●課題）

○ マイクを用いて話合いを行ったことで、話し手と聞き手の移り変わりが視覚的に分かりやすくなり、児童は、一方的に話したり黙っていたりせずに、話し手と聞き手の移り変わりを意識して活動することができた。

○ ヒントを聞かないと分からない問題を活動に取り入れることで、約束を守って、楽しみながら話合いの良さを感じることができた。

● マイクがなくても話す順番を意識できるようにするため、日ごろから話す順番を意識させるような指導していくと良かった。

● 話合いの内容をより高いものにしていくため、相談するときにヒントの内容を吟味したり、答えを一人で考える時間をもう少し長くしたりすると良かった。

8 研究のまとめ

他の学年でも、児童が自分の課題をもち、進んで学習に取り組むことができるような手立てを考えながら実践に取り組んだ。授業の導入時に、ＩＣＴ機器を用いてこれから取り組む学習内容や問題を分かりやすく提示したり、クイズやゲームなど、児童の関心を高めるような活動を取り入れたりして、児童が「やってみたいな」「こうすればできそうだ」と課題を見つけ、解決への見通しをもつことができるように心掛けた。

児童が自分の課題に応じた活動に取り組む際には、様々な資料や教具を用意したり、友達と途中経過を確認しあう場面を設定したりして、児童の活動が充実するよう支援した。つまずいている児童も、友達や教師のサポートを受けながら最後まで課題解決に取り組むことができた。

本年度は、課題設定の場面を重視し、一人一人が自分にふさわしい課題をもち、その解決への道筋を考えることができるよう心掛けた。しかし、児童ごとに異なる内容に取り組む機会が増えるにつれ、個々の学習をいかに全体で共有するかが課題となる。次年度は「協働的な学び」に焦点を当てることで、一人一人の学びを共有し、学び合いながら解決に取り組むことできるような授業づくりに取り組んでいきたい。

目次へ

研究主題	夢中になって追究し、自分で学びを進めるなごやっ子の育成		
副　　題	「子ども中心の学び」で問題解決の力が高まる生活科・理科学習		
学 校 名	名古屋市立なごや小学校	校 長 氏 名	笹口　真

１　研究主題について

予測不可能な VUCA が急速に進む時代、未知の事象に出会ったときに、自ら解決の道筋を考え解決することのできる力を身に付け、自律して学び続けることのできる児童の育成が、これからの生活科・理科学習には求められている。そこで、本校のこれまでの取り組みや児童の実態に基づいて、研究主題を上記のように設定した。

⑴　「夢中になって追究し、自分で学びを進めるなごやっ子の育成」とは

「夢中になって追究し、自分で学びを進める」とは、「あれ？どうしてかな」「調べてみたいな」という児童の思いや願いに基づいて問題設定をし、対象と深く関わりながら、問題解決の活動に没頭して学びを進めることである。没頭して学びを進めるとは、「こうすれば確かめられるのではないか」「○○と□□は関係があるのではないだろうか」「ほんとうに○○なのだろうか、他の方法でも調べたい」と、発達段階に応じて、解決の道筋について自分なりの考えや見通しをもつとともに、友達と協働しながら学びを自律的に進めていくことである。以上のことから、本校の目指す児童の姿を学年ごとに、次のように設定した。

１、２年･･･「～したい」という思いや願いを実現しようとする児童
３年･･･自分で問題を見いだし、調べたいことを明確にして追究する児童
４年･･･自分で問題を見いだし、予想や仮説に基づいて自分で追究する児童
５年･･･見いだした問題を、確かめるための解決方法を自分で発想して追究する児童
６年･･･見いだした問題に対して、問題解決の過程を、吟味しながら追究する児童

⑵　問題解決の力が高まる生活科・理科学習とは

①　問題を科学的に解決するよさを感じる　**「分かった！」**

「問題を科学的に解決するよさを感じる」とは、科学的に判断できる力を身に付けることのよさを実感できることである。学習活動において、「科学的に解決するよさ」を児童自身が実感することができるよう、実証性・再現性・客観性を、「科学的に考える３つの合言葉」として、「観察や実験で確かめることができるか」「誰がやっても、いつやっても、何度やっても同じか」「みんなが納得できるか」と設定する。

② 自然の事物・現象のすばらしさを感じる **「すごい！」→「もっと知りたい！」**

「自然の事物・現象のすばらしさを感じる」とは、空間的・時間的な自然のスケールの大きさに驚いたり、自然の神秘や巧みさに感動したりすることである。

③ 生活に生きる有用感を感じる **「こんなところでも使われているんだ！」**

生活科・理科で学んだことを基に、身の回りにあるものや事柄を見つめ直すと、今まで気付かなかったことに気付くことができるようになる。また、学んだことを生活に生かせば、自分たちの生活をよりよくすることができるかもしれないという価値観も生まれ、生活科・理科を学ぶ価値を実感しながら学びを進めることができるようになると考える。

２ 研究の手立て

（１）問題を見いだす場面と結論を導き出す場面がつながる事象提示と振り返りの工夫

児童の身近な生活の中から、「自然の事物・現象のすばらしさを感じる」ような自然現象や、「生活に生きる有用感を感じる」ような仕組みをもつ身の回りのものと、問題を見いだす場面で出会うようにする。また、その際には、違いのある２点の事物・現象と触れ合ったり、現象の前後を比較したりする体験を取り入れる。これにより、驚きや感動、生活経験とのずれから、「自然ってすごいな。もっと調べてみたい。」「あれ？不思議だな。本当はどうなのか調べたい。」という、解決したいという思いや願いが生まれ、児童が夢中になって追究することができる問題を自分たちで設定することができる。

また、児童の身近な生活の中から、自然のすばらしさや有用感を感じられる事象と出会い、学びを進めることで、結論を導き出し、学習を振り返る単元の終末部では、学んで得た知識を基に同じものを見ると、見え方が変わったり、学んだことが生活に役立っているという見方ができたりすると考える。また、新たに解決したい問題を見いだすことができるようになると考える。

生活科では、身近な生活における人々、社会、自然などの対象と自分がどのように関わっているのかという視点から、自分自身や自分の生活について考え、自律して生活を豊かにしていこうとする態度を養うことを大切にする。

（２）実証する場面における、科学的に解決するよさを実感できる追究過程の工夫

生活科や理科の学習では、問題解決の場面に沿って、学習を展開していく。例えば、理科の場合、「1.自然事象への働きかけ」「2.問題の設定」「3.予想・仮説」「4.検証計画」「5.観察・実験」「6.結果」「7.考察」「8.結論」の８つのステップが基本となり、最後に「振り返り」が含まれる場合もある。

その問題解決のステップの中で、児童が追究したいという問題を見いだしても、学級全体で解決していく共通の問題を設定し、同じ検証方法で追究していく従来の問題解決の在り方だけでは、学級全体の問題に反映されず追究の意欲が失われてしまう場合がある。一方、個別で見いだした問題を、最後まで個別で追究する場合、一人一人が解決したい問題を主体的に解決できるものの、データ数が少なく再現性という側面から科学的に考えることができなかったり、学び合いを通して客観性のある考察を導きだすことが難しかったりすることがある。

そこで、児童の発達段階と単元の特性を考慮し、「個別最適な学び」と「協働

的な学び」のバランスを考えた追究過程の方法を工夫する。

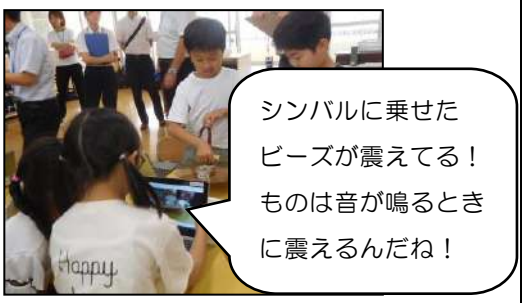
生活科では、幼保小との円滑な接続を意識し、スタートカリキュラムとして、幼児期に自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、生活科の学習に円滑に接続されるよう、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが大切である。児童の「～したい」という思いや願いを実現しようとするために、どの過程を選択するか十分に吟味する必要がある。

3　研究の内容

授業実践　３年理科「音のふしぎ」

⑴　本時の指導で目指す子ども像

自ら問題を見いだし、調べたいことを明確にして追究する児童



【シンバルの振動の様子をタブレット端末に記録する児童】

⑵　目指す子ども像に迫るための手立て

手立て①：問題を見いだす場面での事象の観察に諸感覚を使うことや、共通点や差異点に目を向けることを意識させ、結論を導き出す場面でのキーワードに実感を伴って結論を理解させていく。

手立て②：振動を可視化する方法を考えさせ、結果を共有・検証することで、予想はより実証性、再現性、客観性を増していくことを知らせる。

⑶　授業の様子

導入で一人一本ずつストロー笛を持たせ、吹かせることで、音を出した時に唇が震えるという気付きを共有した。その後、児童の言葉を基に、ストロー笛以外のものでも音が出るときは震えるのだろうか、という問題を設定し、用意してあった楽器を鳴らして、楽器が震えるかどうかの実験を行うことにした。体感ではなく、誰が見ても震えていることが分かるようにするためには、どのように実験すればよいか話し合う中で、楽器に付箋紙やビーズなどを置くことで震えを可視化することができることを知り、グループごとにタブレット端末で様子を撮影しながら実験を行った。楽器を鳴らすと、付箋紙やビーズが震えることを確認した児童は「震えている！」と驚き、全体で「音が出るとき、ものは震えている」という結論を導き出すことができた。

教室環境の整備

学習の時間だけでなく、日頃から児童が何かに興味をもった時に、すぐに試し活動を行ったり、製作したりすることができるようにしたいと考えた。そこで、各学級に文房具や紙テープ、紙コップなどを保管することができる収納ケースを用意した。学習活動だけでなく、係活動・当番活動など、児童が「やってみたい」「活動したい」と思った時にすぐに手に取ることができる場所に収納ケースを設置した。


【文房具の入った収納ケース】

理科や生活科の時間はもちろん、休み時間中になると、児童は学習をしていて気になったこと、係活動でやってみたいことをやろうと、教室内の収納ケースから必要な材料を調達し、すぐに取り掛かる姿が見られた。

４　研究のまとめ

１２月に児童にアンケート調査を行った。「興味のあることにチャレンジしているか」という項目では、平均が３．５点（４点満点中）となり、多くの児童が興味をもったことに対して前向きに取り組むことができていることが分かった。一方で、「自分で学習のめあてを立てている」という項目では、平均が３．３点となった。授業では、教師とともに問題を見いだすことはできるようになってきているものの、児童自身の感覚ではまだ不十分であると感じているのだと考える。

今後は、手立てをさらに改善して授業を行うとともに、児童が「やってみたい」と思える環境づくりを心掛けていきたい。

目次へ

研究主題	私たちのお兄さん・お姉さん		
副　　題	～学区でつながる異校種間交流を通して～		
学 校 名	名古屋市立児玉小学校	校 長 氏 名	髙井　圭子

本校は、地域の人たちに守られ、地域の人たちから愛された学校である。学校の敷地内には、開校当初から大切に育てられたお茶の木（児玉茶）がある。５月の茶摘みの学校行事には、たくさんの地域の方が来校し、子どもたちが茶摘みをする姿を見て楽しんでいる。受け継がれてきた伝統を、地域の人たちみんなで大切に守っている。

学区には、全国優勝経験のあるラグビー部が有名な西陵高等学校がある。普段から、部活動の練習風景や制服を着た高校生が登下校をする姿、文化祭や体育祭で盛り上がる様子を見ることができ、子どもたちは西陵高校を身近に感じており、日ごろから憧れている。

児玉の地域には、地域とのつながりを生かし、地域から学ぶことできるヒト・モノ・コトであふれている。児玉のヒト・モノ・コトを扱うことは、地域に対する誇りと愛着を養うことにつながると考え、研究主題を設定した。

昨年度から、西陵高等学校との異校種間交流を行っている。昨年度は、高校生に小学校の授業を参観してもらったり、休み時間には一緒に遊んだりして、交流を深めた。また、西陵高校へ出掛け、ＩＣＴ機器の使い方やパソコンを用いた発表の仕方を学ぶことができた。

今年度は、西陵高校との異校種間交流を、児玉小学校のキャリア教育として位置付け、全学年を通して、さまざまな活動に取り組み、実践を進めることができた。

○　全学年「高校生に児玉小学校を紹介しよう」






西陵高校生を児玉小学校に招いて、高校生に小学校の授業を見てもらったり、休み時間に一緒に遊んでもらったりと、全学年の児童が交流することができた。初めは緊張していたが、時間がたつにつれて、「高校生のお姉さん、一緒に遊ぼう！」と声を掛け、楽しく活動することができた。

○　低学年「学区探検で西陵高校に行こう」






低学年が学区探検で西陵高校に行った。子どもたちは、自分たちが住んでいる学区に高校があることを知り、とてもうれしそうだった。高校生に紙飛行機の折り方を教えてもらって飛ばしたり、ペープサートや紙芝居を読んでもらったりして、交流を楽しむことができた。

○　中学年「高校生と一緒に校外学習に出掛けよう」






中学年は、高校生と西消防署へ校外学習に出掛けた。消防署へ向かう道中で自己紹介をして話しながら仲を深めることができた。消防署では、高校生から見学の仕方をアドバイスしてもらったり、体験活動をサポートしてもらったりと、交流しながら一緒に見学することができた。

○　高学年「高校生と将来の夢や進路について話し合おう」






高学年は、高校生と将来の夢や中学校、高等学校について話し合った。漠然としている将来について、具体的なビジョンをもった高校生に聞いたり教えてもらったりすることで、将来の夢について考えるきっかけになったようだった。また、中学校生活や高校生活について詳しく教えてもらうことで、近い将来への見通しをもつことができた。

名古屋市では、キャリア教育の推進・充実を図るため、来年度から「キャリアタイム」が始まる。キャリアタイムとは、実社会で活躍する本物のヒト・モノ・コトとの出あいや日ごろの授業などを通じて、子どもたちが自分の「好き」や「できる」を大切にしながら、人生の多様な選択肢の中で、自分らしい生き方を実現する時間である。

この研究は、児玉小学校のみならず、キャリア教育のより一層の充実を図っている名古屋市にとっても、有意義な実践であることは間違いない。

今後も、児玉の地域が誇るヒト・モノ・コトを生かし、児玉のヒト・コト・モノから学んでいきたい。そして、子どもたちが児玉の地域に対する誇りや愛着を育んでいけるよう、研究を推進していきたい。

目次へ

研究主題	ともに学び　ともに笑い　ともに生きる		
副　　題	みんなで、陽だまりの笑顔！		
学 校 名	名古屋市立浄心中学校	校 長 氏 名	山田善申

1　本年度の活動とそのねらい

本校は「ともに笑い　ともに学び　ともに生きる　ーみんなで、陽だまりの笑顔！ー」を教育目標として、実践を行っている。本年度は特に、「笑顔で学ぶ」をキーワードに活動している。生涯にわたって主体的に笑顔で学び続けるためには、自分が大切にされ、尊重されているという安心感が基盤となっていなければならない。同時に、他者の存在を認め、尊重するという人権感覚を身に付けることも重要である。そこで、今日的な人権課題を取り上げながら人権教育を推進することで、自他を尊重する態度の育成を目指すことにした。

2　主な実践

○　実践例　「世界の人権課題について考えよう」全学年　道徳科

(1) 実践のねらい

世界の人権課題についての知識を深め、自他を尊重する態度を育成する。

(2) 実践の内容

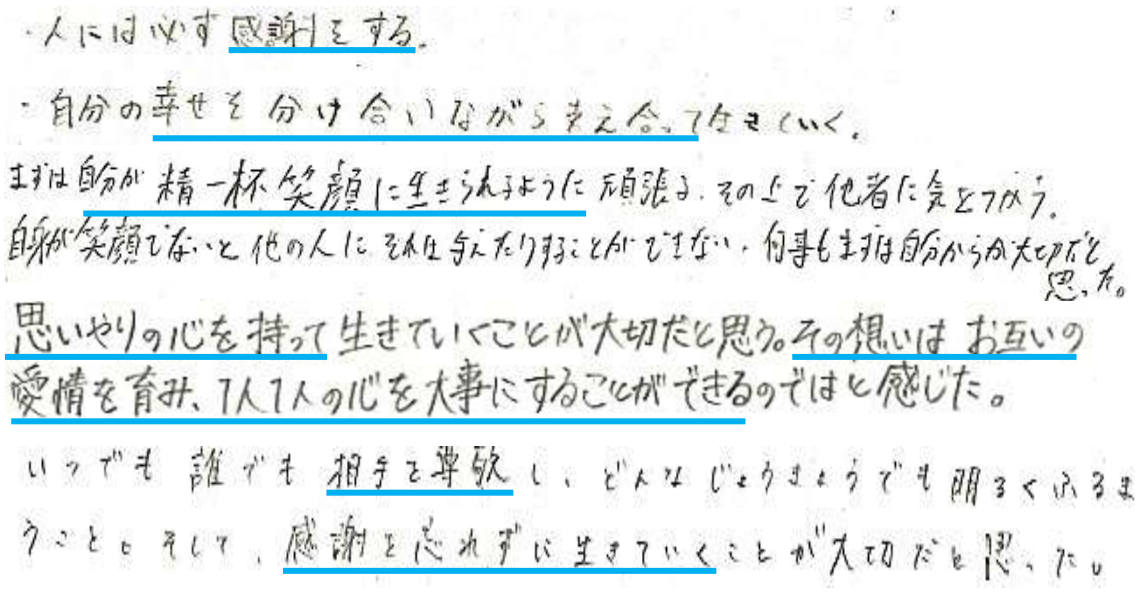
カメラマンとして活動しながら、主に東南アジアの貧困にまつわる深刻な社会問題について調査・撮影・支援を行っている方を講師としてお招きし、「懸命に生きる人々～いま、私たちが学ぶべきこと～」というテーマで全校生徒を対象に人権講演会を実施した。講演会後には、学習プリントを使用して振り返り活動を行った。



【講演会の様子】

(3) 実践の結果【学習プリントの記述内容】

ア　他者も自分も「笑顔」で生きていくためには、何が大切だと思いますか。



・人には必ず感謝をする。

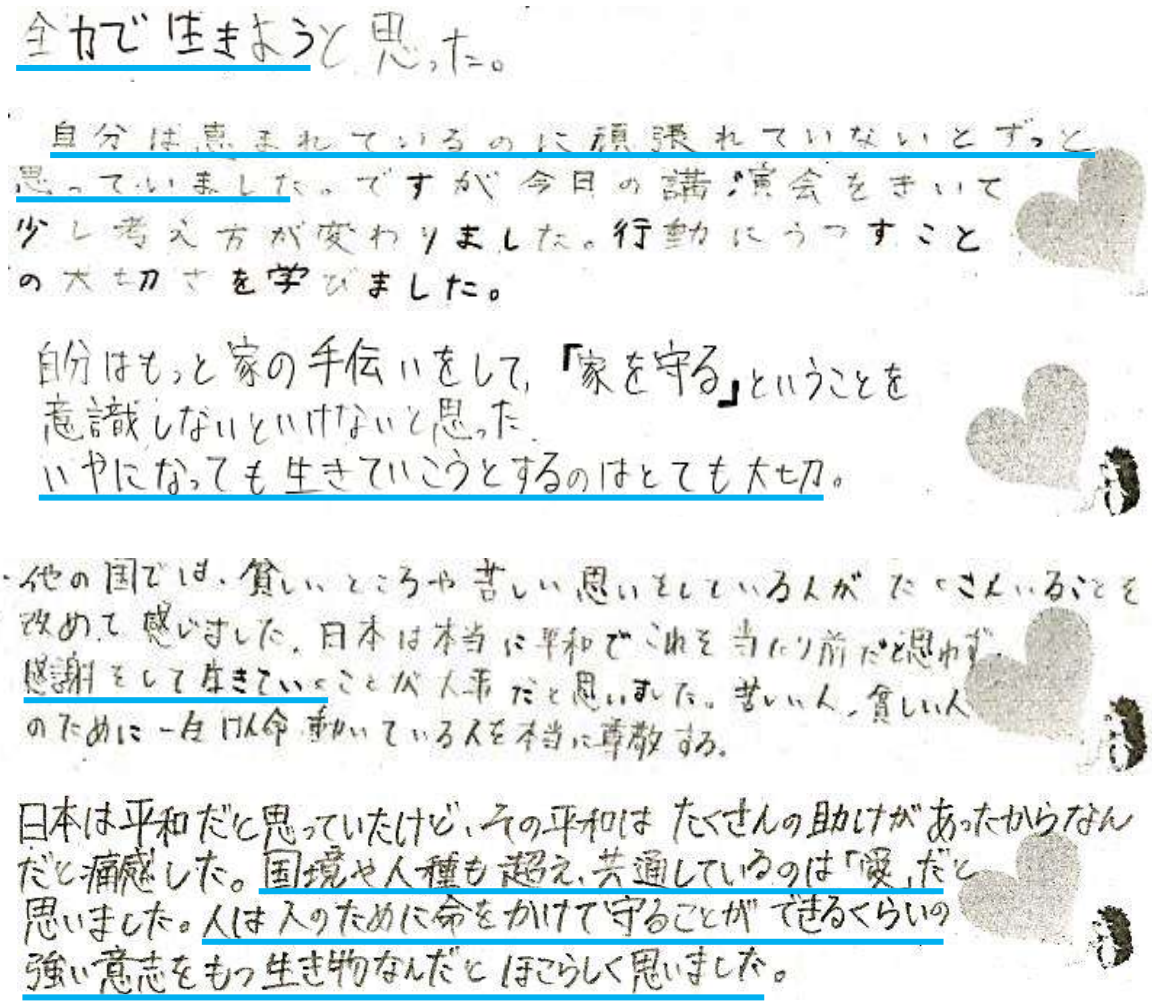
・自分の幸せを分け合いながら支え合って生きていく。

まずは自分が精一杯笑顔に生きられるよう頑張る。その上で他者に気をつかう。自分が笑顔でないと他の人にそれを与えたりすることができない。何事もまず自分からが大切だと思った。

思いやりの心を持って生きていくことが大切だと思う。その想いはお互いの愛情を育み、1人1人の心を大事にすることができるのではと感じた。

いつでも誰でも相手を尊敬し、どんなじょうきょうでも明るくふるまうこと。そして、感謝を忘れずに生きていくことが大切だと思った。

イ　講演を聞いて思ったこと、気付いたことは何ですか。



(4) 考察

生徒は、講師が東南アジアで写真や動画に収めた人々の姿が映ったスクリーンを見ながら、話を聞いた。扱われた内容は、ごみの山で生活するストリートチルドレンの問題や、ハンセン病患者差別、女性差別、戦争・紛争被害者など、多岐にわたった。また、これら人権課題についての話だけではなく、前向きに生きることの大切さや、自分自身を尊重することについても話を聞くことができた。学習プリントには、「最大のボランティアは、自分自身が一生懸命生きること」という講師の言葉が特に印象に残ったと複数の生徒が記述していた。

生徒たちは、写真や映像を見ながら話を聞いたり、世界で活躍している講師の実体験から語られた力強いメッセージを聞いたりしたことによって、今日的な人権課題について理解を深め、自他を尊重しようとする態度が養われた考える。

3　実践の成果と課題

本実践を通して、生徒は世界の人権課題についての理解を深め、自他を尊重する態度を養うことができた。今後もこのような実践を重ねることで、人権尊重の意識を高め、自他を大切にする生徒の育成に努めたい。その上で、さまざまな課題の解決に向けて主体的に学び続けることができるよう、工夫して生徒を支援していきたい。

目次へ

研究主題	主体的に学ぶほのかの子の育成		
副　　題	自分に合った学び方の選択とふり返り活動を通して		
学 校 名	名古屋市立ほのか小学校	校 長 氏 名	古川　裕章

1　実践の概要

(1) 育てたい子どもの姿とそこに迫る手立てについて

育てたい子どもの姿を「自分が学びたいことを見つけ、自分に合った学びを自らの手で進めることができる子ども」と設定する。そして、育てたい子どもの姿に迫るために、次の２点の手立てを工夫した。

> ①　子どもが自分に合った学び方を見つけるための、多様な学び方の提示
> ②　自分に合った学び方で学びを進めるのを支援するためのふり返り活動の工夫

①　子どもが自分に合った学び方を見つけるための、多様な学び方の提示

子どもが自分に合った学び方を見つけるために、多様な学び方の中から自分に合いそうなものを選択し、試してみる。様々な学び方の手段に加え、子どもが学びの主体となって進めることができる学習方法も提示することで、子どもがそれらを試しながら自分に合った学び方を見つけることができるようにする。

②　自分に合った学び方で学びを進めるのを支援するためのふり返り活動の工夫

学びを進める過程で自分の学び方についてふり返ることで、自分の学び方を自己評価し、学びの自己調整力を高めていくことができるようにする。どのような場で、どのような観点に基づいてふり返ることが効果的なのか、一人で行うのか、他者と協働して行うかなどの点を意識して実践に取り組むようにする。

2　実践例

(1) ６年生の取り組み【他者との協働を通して課題を解決する取り組み(体育)】

仲間との教え合いを通して、自己の課題解決に向けて主体的に取り組む子どもの育成を目指した。



【自分に合った練習方法を選択して
グループの仲間と練習を行う様子】

水泳運動の平泳ぎの技能を身に付け高めるために、自らの技能課題に気付き、その課題を解決することができるよう、マット上で「手のかき」や「足のけり」の練習を行う場や、跳び箱を使った「手と足のタイミング」を合わせる練習の場などを設定した。課題の解決に合うと考えた練習方法を自分で選択し、意欲的に取り組む姿が見られた。

また、グループ内で互いの練習の様子や撮影した動画を見合うことで、次にどのような練習が必要かを考え、アドバイスし合う様子も見られた。グループの仲間と対話をすることで、自分では気付かなかった視点からの考えに触れ、「もっとよい練習方法はないか」と考えることで、課題の解決に効果的な練習方法を自分で選択することができた。そして、課題を解決することができた子どもは、次の技能課題の解決を目指して取り組み続けることができた。

これらの活動を通し、自分の学び方を自己評価し、学びの自己調整力を高めていく力を身に付けることができた。

(2) 特別支援学級の取り組み【自分で課題を設定し調べる取り組み(総合的な学習)】

給食について疑問に思ったことや、もっと知りたいと思ったことを調べる学習活動に取り組んだ。インターネットや本などを使用したこれまでに学んだ調べ方や、インタビューを基にした調べ方などから調べ方を選び、自ら調べを進めていった。



【学んだ調べ方を提示した場】

５年生の児童は「気になる食材である『さごし』と『さわら』を使っている料理や献立を調べてみよう」と考え、食材カードの中から当てはまるカード探しを行った。さらに詳しく調べたいと考え、給食メニューや写真から食材探しを行い、７月のメニューの中に「さわら」が使われている料理を見付け出した。「次回は別の方法で探してみよう」と、自分が選択した調べ方についてふり返った。また、「○○さんは、次はインタビューをしてみたらどうかな」と、仲間の調べ方について関心をもち、アドバイスをする姿も見られた。



【調べ方を選択して学びを進める様子】

「自分に合ったペースや方法で学ぶ」「夢中で探究する」といった学びの姿が、子どもの活動の様子に表れていた。

(3) 学習発表会

１１月、文化的行事として、全校による学習発表会を実施した。国語科、生活科、総合的な学習の時間などで取り組んだ学習内容について、体育館の舞台を中心に全校児童や保護者に向けて発表した。

各学年の教師と子どもが伝えたい内容や方法を考え、学年や学級で何度も検討を重ねながら、せりふを何度も修正したり、視覚的効果を高めるボードや小道具に工夫を加えたりしながら準備を進めた。

生活科の町探検で、見たり聞いたりして分かったことを、大きなボール紙に書いて見せる、野外学習での生活を寸劇で表現する、修学旅行で体験したことをスライドの画像に合わせて説明するといった、完成度の高い発表を行うことができた。

【各学年の発表テーマ】

１年	ドキドキ　ワクワク　はっぴょうかい
２年	ほのかの町のたからもの
３年	ぼくら　学びのたんけんたい
４年	ニュース・４・ゆう
５年	５！ＧＯ！中津川
６年	みんなで修学旅行に行こう！
特支	ひまたん　たんてい団！



【スライドを使って発表する】



【会場に設置したスピーカー】

3　成果と問題点

○　学び方を選択し自ら学びを進めることで、自己の課題を見付け、次にどのような学び方がよいか考える力を育てることができた。また、自分の学び方をふり返って自己評価を行うことで、学びの自己調整力を高めることができた。

●　単元を通し、子どもたちがどのような力を身に付ければよいかをより明確にすることが重要であると感じた。単元を通した学びを設定し、子どもたちの「もっと知りたい」「もっと学びたい」という思いを育てていきたい。

目次へ

研究主題	自分を大切に　仲間も大切に		
副　題	学び合い、チャレンジできる子どもをめざして		
学校名	名古屋市立米野小学校	校長氏名	新村卓生

1　主題設定の理由と実践の概要

昨年度、「自分を大切に仲間も大切に～自他を尊重し、学び合える学級をめざして～」を主題とし、学級活動の授業を中心とした実践を行った。互いを認め合える学級風土を目指し、自分や仲間のよさについて考える授業を、年間を通して全学級で行ったことで、児童は、ありのままの自分を受け止めながら自己の可能性に気付いたり、仲間の長所や内面を前向きにとらえたりすることができた。また、仲間と温かく関わり合うことのできる支持的で創造的な学級環境づくりにつながった。

ナゴヤ学びのコンパスでは、目指したい子どもの姿を「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける」と示している。必要に応じて仲間の力を借りたり貸したりしながら学び合い、一人一人の思いやチャレンジが尊重される関係性を構築するため、昨年度の取り組みをさらに発展させ、より深い自己理解のもと、他者との関わり方について考え、実践する力や、学級・学校に貢献しようとする社会性を育てたい。

本年度は「社会性と情動の学習（※ＳＥＬ＝Social Emotional Learning）」の考え方をベースに取り入れ、仲間との関わり方を身に付けられるようにしていく。学校生活の様々な場面で、どのように行動し、どのように仲間にアプローチしていけばよいのかを具体的に考えることで、関わり方の選択肢を増やし、多様な考え、異なる価値観をもった仲間と、適切な人間関係を築く力を育て、ゆるやかな協働性につなげたい。さらに、その仲間と共に、明確な目標や目的をもち、一人一人が意識して目標達成に向けて行動できるような機会を増やし、「できた」という成功体験を味わわせたい。

2　実践

（1）コミュチャレ【社会性と情動の学習】

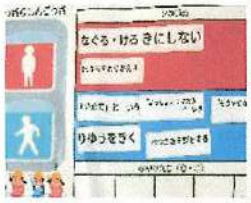
※コミュニケーションチャレンジ

子どもの人間関係能力を育てる「社会性と情動の学習(SEL)」の考え方をベースに、学び合える児童、学級の基盤づくりに向けた学活の授業実践を、年間を通して計画的、段階的に実践した。



【1年：すっきりしんごうきをつくろう】

休み時間に遭遇しがちな具体的な対人トラブルの場面における、自分の気持ちの伝え方についての授業を行った。ロールプレイやゲーム形式でそれぞれの考えを交流し、赤・青の信号を用いて「お互いにすっきりする」「しない」で分類、整理しながら、他者を尊重した自己表現について考えさせた。



【6年：怒りとの付き合い方を考えよう】

怒りの原因について考えたり、アンガーマネジメントの考え方を取り入れたりしながら、様々な対処法について話し合った。対処法を「すぐにできる」「後で」などの観点で二軸四象限表に類型化し、他者との考え方の違いや、自分に合った対処法に気付くことができるようにした。



授業実践の様子



感謝するスキル
班ごとに「ありがとう」とお礼を言う場面の動画を作成し、互いに鑑賞しながら、よりよい感謝の気持ちの伝え方について考えさせた。



自分のよさに目を向けよう
「リフレーミング(別の視点で捉え直す)」の考え方で、例えば「頑固→信念がある」など、自分や仲間の性格をポジティブに捉えさせた。



伝え方・受け取り方のスキル
友達とトラブルにならない伝え方・受け取り方を考え、実際に演じながら、相手と和やかにやりとりするコツを考えさせた。



みんなといっしょにあそぶには
友達の輪に入りたいとき、どんな態度で、どんな言葉を掛けるとよいか考え、ゲームを通して仲間に入れてもらう方法を体験的に学ばせた。



自分の気持ちの伝え方
「アサーション(互いを尊重した自己表現)」を使い、トラブルになりそうな場面での、自分も相手も大切にした気持ちの伝え方を話し合わせた。



イライラさんよ、さようなら
ストレスについて学び、「ストレスマネジメント」の考え方で、イライラしたときの対処法について交流し、よりよい方法を話し合わせた。



いろんな気もち
「気持ちカメラ」のゲームで、友達と怒りや喜びの表情を交流し、感情による表情の変化や、人によってその表情が様々であることに気付かせた。



なつまつりを せいこうさせよう
来客をもてなす練習をロールプレイで行い、表情や動作、言葉など、様々な要素を押さえながら相手を意識した適切な言動を体験的に捉えさせた。

授業実践は、主として、感情の調整や自己理解、ソーシャルスキルに関わる内容に取り組んだ。例として、人によって感情の動きが異なることや、自分の情動をコントロールするために何ができるかを学んだり、アサーションの考え方で、トラブルを回避するためのスキルトレーニングを行ったりした。様々なスキルの授業を行う中で、よりよいコミュニケーションをとろうと行動する児童や、身に付いたスキルを実際の生活で生かそうとする児童が見られた。

児童による自己評価アンケート結果（R６年１１月実施）	あてはまる/ややあてはまる
自分の気持ちや考えを相手に気づかいながら伝えることができた。	９２．４%
仲間と考え方や意見が違うときでも、怒ったり落ち込んだりせず、自分の気持ちをコントロールできた。	８３．７%

（2）マナチャレ【自己実現の場の設定】 ※マナーチャレンジ・まなびチャレンジ
仲間と共に新たなチャレンジに取り組むことで、自己決定、自己実現の機会を設定した。

週目標（ルールやマナー）に関わる取り組み

月ごとに「運動会を成功させるためには」「安全に過ごすためには」「友だちと仲良く過ごすには」といったテーマを与え、週１回、業前の 15 分でミニ学級会を行い、児童が主体となって目標設定をして、具体的な取り組みを考えさせた。また、それに対する振り返りも行い、実情に応じて新たな目標設定を行った。

各学級で決定した目標や取り組みは、「マナチャレ掲示板」に貼り出して意識付けし、さらに、他学級・他学年の取り組みからも学ぶことができるようにした。

学級での話し合いを通し、月の目標を理由と共に明確に語ることができる児童が増えてきた。「自分たちの生活を自分たちでよくしよう」と、目標を意識して生活する児童も増えた。中には、掲示された下学年の取り組みを見て、「上級生として、もっとレベルアップした目標をたてたい」と再度話し合った学級もあった。



仲間と話し合い、自分たちで取り組みを考え、決定し、取り組むという、自己決定を大切にした活動により、主体性をもって学校生活を送ることができる児童が増えた。

児童による自己評価アンケート結果（R６年１１月実施）	あてはまる/ややあてはまる
目標をたて、その目標が達成できるようにがんばることができた。	８７．８%

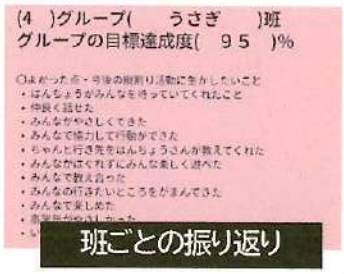
全校校外学習での取り組み

「縦割り班でレゴランドに行く」という活動を設定し、異学年で以下のような学習を行った。

① 「校外学習を通して、どんな仲間になりたいか」という目標づくり（３～６年）
② アトラクションの内容や、ルートなどについての調べ学習（３～６年）
③ ①②を１・２年に伝えるためのプレゼン作成（３～６年） →実際にプレゼン
④ 校外学習後、①についての振り返り（１～６年）


異学年合同学習の様子


各班の目標を掲示して意識付けを図った



班ごとの振り返り

活動②でアトラクションやルートを決めるときも、活動①で話し合った「仲良くなるために」「みんなで楽しむ」といった目標を自覚して話し合う様子が見られた。活動④の振り返りからは、これまでの全校校外学習よりも、目標達成に向けどのように行動するかを考えた児童や、話し合って決めたことが「うまくいった」と満足感を味わっている児童が多く見られた。

3 成果と課題

授業実践「コミュチャレ」を通して、感情の調整、相手への共感、人間関係の維持・修復に向けた力を育てながら、学級・学年、あるいは異学年での様々な「チャレンジ」に取り組んだ。マナチャレでは、自分たちで考えた目標を意識して声を掛け合う姿や、異学年で温かく関わり合う様子などが見られた。児童の自己評価アンケートでも、ソーシャルスキルに関わる項目によい変化が見られている。

ただ、非認知能力の評価は難しく、児童が「伸びた」「身に付いた」と感じていることが、適切な自己評価であるかの見極めは容易ではない。例えば、ルーブリック評価を作成して、身に付いた力を可視化するような取り組みを行いながら、その妥当性を検証することが必要である。

今後も、SELの考え方をベースに指導を行い、子どもたちの心と非認知能力を育てながら、学び合える集団、チャレンジできる児童を育て、各教科・領域での学習にもつなげたい。

目次へ

研究主題	自他のよさに気づき　互いを尊重する　ささしまっこの育成		
副　　題	多文化にふれる学習活動や体験活動を通して		
学 校 名	名古屋市立笹島中学校	校 長 氏 名	阿部　健一

○　実践の概要

自他のよさに気づき、互いを尊重する生徒を育てたい。名古屋市唯一の帰国子女受入校である本校は、在籍している児童生徒数は少ないものの、育った地域や環境に違いがあり、異なる価値観や考え方等をもっている。その一方で「山車、お囃子、からくり人形」といった地域の歴史、伝統文化を大切にする地域でもあり、生徒は様々な文化に触れる機会があると言える。そのため、誰もがそうした違いを受け入れ、それぞれのよさを認め合い、互いの持ち味を活かしながら共に生活していくことが大切であると考える。

そこで、右のような３年間における重点目標を設定し、目指す生徒像に迫る。１年目の昨年度は、「多文化共生」をキーワードとして、国や地域、またそこに根付いている文化だけでなく、性別、職種、国籍、障がいの有無、志向や考え方等などについて、教師が紹介したり児童生徒自身で調べたりする活動を取り入れた。実践を通して、自他のよさに気付いたり、自分自身や他者を意識しながら考えたことで「みんな考えが違ってもいい」という思いをもったりすることができ、一人ひとりがもつ個性や能力、価値観や考え方などに違いがあることに目を向けることができた。

	重点目標
1年目	多文化共生とは何かを知る
2年目	共通点や相違点に目を向け、違いを認め合う
3年目	多文化共生のためにできることを考える

２年目の今年度は、「多文化共生」をキーワードとして、比べたり、似ているところを探したりしてよいところを伝え合う活動を取り入れる。そうすることで、一人ひとりがもつ個性や能力、価値観や考え方などの共通点や相違点に目を向け、違いを認め合うことができるようにしていく。

○　実践のようす

①　総合的な学習の時間（中学校１年生）

多文化共生社会の実現に向けて、価値観や立場による考え方の違いについて学ぶために、名古屋市内を中心とした文化施設や企業へ訪問する分散学習を行った。そこで、事前学習として、１２月に外国人観光客の誘致に携わっている日本交通公社の方をお招きし、分散学習のときに注目することや、意識すべき視点についての講話をしていただいた。

１月に名古屋市内を中心とした文化施設や企業へ訪問し、外国人という立場の異なる立場の人の視点に立ち、そこから見た名古屋市や愛知県を考える活動を行った。これにより、様々な価値観に触れながら、誰もが安心して楽しめる観光をするために、自分たちはどのようなことができるかについて考えを深めることができた。中部国際空港、名古屋城、有松絞り会館など





【分散学習時のようす（上下）】

、市内外の観光地に出掛けた際には、現地で働く人たちへのインタビューも行い、身近な伝統文化や企業が行っている共生社会の実現に向けた取り組みなどを聞き、多文化共生についての考えを深めることができた。

② 総合的な学習の時間（中学校３年生）

日本と世界におけるマナーの違いに着目し、「食事」「身だしなみ」「ビジネス」における場面を取り上げて、それぞれの国の文化や、そこで暮らす人々の価値観や考え方における共通点や相違点を調べる活動を行った。



【調べ学習の発表のようす】

「食事のマナー」の学習では、生徒が興味や関心のある国について調べ、互いの発表を聴き合った後、自らの生き方について考えた。学習を通して、「気づかずにマナー違反をしてしまわないように、互いに認め合うことが大切」「当たり前が国によって違うことを自分たちが理解しないと行けない」など、文化や価値観の違いに気付き、それを認め合うことの大切さを実感する様子が見られた。また、級友の考えに共感したり、互いの考えのよさを認め合ったりする姿も見られた。

③ 生徒委員会による取組の予定（全学年）

生徒委員会では、生徒が主体となり、委員会活動における取組として多文化共生に関わりのあるものを取り入れた活動を行った。生活委員会では、登校時の挨拶運動において、韓国やスペイン、フランスなど様々な国の言葉で「おはよう」の声掛けを行った。文化委員会では、帰国生徒や海外に行ったことがある生徒へインタビューを行ったり、ポスターを作成したりして、他国の文化や生活のようすなどを全校生徒に紹介した。



【挨拶運動のようす】

また、今後の委員会活動においても、日本や世界の生活習慣やお祭りについてのクイズを出題したり（文化委員会）、各国を代表する文学作品について特集したり（図書委員会）することを予定している。

○ 成果と課題

「多文化共生」をキーワードとした実践を２年間続けたことで、多文化共生への理解をより深めることができた。また、一人ひとりがもつ個性や能力、価値観や考え方などの共通点や相違点に目を向け、互いの違いを認め合う活動を行ったことで、自分の価値観や考え方を見直すとともに、これまで以上に他者のことを考えることができるようになった。

その一方で、認めることを重視したことから、相手に対して気を遣いすぎてしまったり、反対意見を言うことをためらったりする場面が見られ、他者を考えながらよりよい考えを生み出すということができない場面も見られた。また、実践を行う中で、多文化共生について専門的な知識をもたれる方から幅広く広く話を聞くためには、オンラインの教室を開くなど、学校現場の環境を整えることが必要であると感じた。

来年度は、「多文化共生」を意識しつつ、よりよい考えを生むために、他者と考えを練り上げる活動に力を入れていけるようにしていきたい。

目次へ

研究主題	みんなで考えて解決しよう！		
副　題	プロジェクトアドベンチャー、サークル対話、自由進度学習を通して		
学校名	名古屋市立新栄小学校	校長氏名	上田　真

1　実践の概要

本研究で目指す児童の姿とは、「学校生活で生じた諸課題について、周囲の合意を得ながら、解決に向かって取り組むことができる児童」である。

なお、ここで述べる「学校生活で生じた諸課題」とは「校内、校外を問わず、学校に起因する人間関係の中で生じた諸課題」と定義する。つまり、教科・領域等の学習の場や、休み時間や清掃時間、さらに下校後などにおける児童同士の関わりの中で生じる課題を示す。

本校は複数の職員で児童を見守り、児童間で課題が生じた際も学級担任だけではなく、同じフロアや関係職員で情報を共有し、組織的に対応している。校内で起きる課題に対しては、重大な事案に発展する前に早期解決をしたり、児童が下校した後は学区の見回りを職員で行い、現地での指導や課題に発展しそうな情報の共有と対策に努めたりしている。

そのため、校内における課題は減ってきている。しかし、校外における児童同士の関わり方に係る課題は依然多い。

これは、児童の中に「共通の目的を実現するために、最適な手段を自分で判断し用いる力」つまり「自己決定力」と、「自分たちの課題は自分たちで解決しようという意識」つまり「当事者意識」が十分に育っていないことが原因と考える。

児童の自己決定力と当事者意識を高めるために、昨年度から取り組んでいる「プロジェクト・アドベンチャー」「サークル対話」に加え、今年度から「自由進度学習」に取り組んだ。

2　実践の内容

○　プロジェクト・アドベンチャー（5年生の様子より）

チームに分かれてレジャーシートを持ち、シートの上のぬいぐるみを落とさないように上下させ、ゴールまで運ぶ活動を行った。結果は、どのグループもゴールできなかった。よりよい解決方法を学級全体で考えるため、「どうしたらゴールすることができるか」を話し合った。


【プロジェクトアドベンチャーの様子】

話合いを始めると、「○○がうまくいっていないからゴールできない」という意見が多く出され、互いに失敗の要因となることを責め合うような姿が見られた。そこで、この活動の目的である「みんなで協力して運ぼう」に立ち返り、「『みんなで協力して運ぶ』ために、心掛けるとよいことはなんだろう」と、問い掛けた。すると、「ミスを責めない」や「誰かの意見だけでやらない」など、続々と意見が出された。そして、活動の目的の確認をきっかけにして、少しずつ話合いの内容が具体的になっていき、「手を上げる角度を変えよう」「走るタイミングをそろえよう」など、協力しながら解決に向かおうとする姿が見られた。

2回目では、話合いで出された建設的な意見を取り入れゴールを目指したところ、4グルー

プ中３グループが成功できた。２回目終了後の話合いでは、「次はもっと早くゴールしたい」と、より高みを目指す発言だけでなく、全グループがゴールするにはどうするとよいかについても意見が出され、学級全体で目標達成を目指し、協力し合う姿が見られた。最終的に、全グループがゴールし、成功を喜び合っていた。

振り返りで、何が大切だったかを問うと、「みんなで意見を出し合って考えること」や「相手のことをよく見ること」など、活動した経験を通して自他ともに尊重することの価値やその大切さについて気付くことができた。課題を解決するため児童同士で互いに意見を出し合いながら活動を繰り返すことで、多くの児童の「自己決定力」と「当事者意識」を高めることができた。

○　サークル対話（６年生の様子より）


【サークル対話の様子】

以前に学級で生じた課題に対して、「ドッジボールを行う際に近い距離の場合は強いボールは投げない」という学級のルールを設定していたが、「ルールを悪用して投げる人にわざと近づき、力を加減して投げさせてボールを捕る」という新たな課題を取り上げた。話合いをしていく中で、「近い距離で強いボールを投げられると怖い、痛い」という意見や、「近くても強いボールで投げるべきだ」という意見が出された。次第に、「怖いという人だけ力を加減する」や「この距離なら強くてもいいという明確なルールを決める」といった、現実的には実現が難しい意見も出始め、話合いが進まない時間もあった。そのようなやりとりを経て、教師から実際にやってみることを想定して話し合うことを助言すると、さらに様々な意見が出された。「力を加減させるために近づくのはドッジボールの本当の楽しみ方とは違うと思う」や「相手のことを考えれば近い距離の時は強いボールを投げる必要はないと思う」といった意見が出された。最終的には、「明確なルールを設定するよりも、みんながドッジボールを楽しめるようにということを一人一人が意識することを大切にしよう」という結論に至った。結論として明確なルールや線引きをする形にはならなかったが、話合いを通して、様々な考えや立場の人がいることを改めて知ることができ、それを踏まえた上で、同じ人の気持ちを考えながら行動しようとする気持ちを高めることにつながった。その後のドッジボールでは、楽しく関わり合う姿を見ることができている。朝の会では「１日をどのように過ごすか」という予定や「何を意識して過ごすか」と、めあてを設定している。これらを繰り返し行う中で、学級に話しやすい雰囲気が芽生えてきたため、１学期途中から、テーマによっては、児童が司会者を担い、サークル対話に取り組ませることで、多くの児童がより当事者意識をもって取り組むことができた。

○　自由進度学習（４年生の様子より）

社会科「水はどこから」の単元において、自由進度学習を取り入れた学習活動を行った。

水が安全で安定的に供給されるための仕組みや工夫があることを学び、単元末では、学んだことを伝える活動を行った。伝える活動では、自由進度学習として「新栄セレクトタイム」を設定し、「伝えたい内容」や「調べる方法や伝える方法」を選択できるように設定した。内容を選択する場面では、「処理センターで水が12時間かけてきれいになる仕組みを伝えたい」や「安全のために浄水場でたくさん検査していることを伝えたい」など、これまでに学習した内容を踏まえながら自分の興味・関心に応じて伝える内容を決定し、その内容に合わせて伝える方法を選択する姿が見られた。社会科の学習の中で、自己選択・自己決定をしながら学んだことや調べたことをまとめたり、伝えたりする活動を通して、多くの児童の「自己決定力」と「当事者意識」を高めることができた。


【全校集会で学んだことを伝える様子】

3　実践上の問題点　○：成果　●：課題

○　様々な場面で集団の一員として主体的に関わろうとする姿が見られるようになった。

○　学校内外における児童間のトラブルが少なくなった。

●　学習の中に自由進度学習を取り入れるにあたって、自己選択・自己決定する有用感や効果を高めることが難しい教科・単元があった。次年度以降は、自己選択・自己決定する有用感や効果に重点を置き、より「自己決定力」と「当事者意識」を高めることができるようにしたい。

目次へ

研究主題	夢や目標に向かう子どもの育成		
副　題			
学校名	名古屋市立松原小学校	校長氏名	松　本　和　芳

1　主題設定の理由

近年、子どもを取り巻く環境が大きく変化し、価値観が多様化する中において、自分を見つめ、見直し、自己を肯定して生きていく必要がある。そのためには、将来に対しての夢や目標を自ら抱き、その実現に向けて取り組むことが大切である。文部科学省は平成29年度小学校学習指導要領の特別活動編において、これからの学びや生き方を見通し、活動を振り返るなどをしてキャリア形成を図ることは重要な課題と捉え、キャリア教育を推進する必要があると述べている。また、名古屋市教育委員会でも、キャリア教育推進に向けた取り組みの一つである「キャリアタイム」を通して、子ども一人一人が自分らしい生き方を実現する力を身に付けてほしいと考えている。

そこで、本校では自分のよさについて考えるとともに、将来の夢や、身近な目標をもって、その実現を目指した活動に取り組んでほしいと考えて、主題を設定した。

2　目指す子ども像

本校の児童は、素直で、大人の話をとても興味関心をもって聞くところがある。しかし、聞いた話を自分の夢や目標に結び付けて考えているかどうかは分からない。昨年度、６年生が受けた全国学力・学習状況調査の児童質問紙項目「将来の夢や目標を持っている」の当てはまる、やや当てはまるを合わせた割合は全体の73%であった。全国は81.5%と比べると、8.5ポイントも低かった。さらに、本年度を見ても、本校は68.9%に対して全国は82.4%であったので、13.5ポイントも低く、昨年度より５ポイント下がっていた。

このように、将来の夢や目標に対する意識を高めるために、日頃から将来の夢や身近な目標を考えたり、様々な場面で頑張っている方の話を聞いたりする機会を設けることによって、夢や目標を自分事のように捉えていこうとする子どもの育成を目指したいと考えた。

3　目指す子ども像に向けた取り組み

(1) 松原キャリアタイムについて

① 松原キャリアタイムの考え方

○特別活動において自らの学習状況を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価する学習活動を設ける。

○年度初めに作成する「キャリア・パスポート」を基に、一人一人のキャリア形成に生かすことができる時間として朝会を行わない月曜日の朝の時間に設定する。（８：２５～４０）

○キャリア・パスポートに書いたことを基に、１～３年生：「係活動」「学習目標」など、４～６年生：他に、「将来の夢、仕事」「なりたい自分」などを具体化し、一人一人がすべきことを決定し、行動し、振り返る時間とする。主に、下の図の②③の時間とする。③の振り返りによって、新たな目標ができた場合には、新たな目標のための活動としてよい。

① 計画する　→　② 行動する　→　③ 自己評価（振り返り）

② 松原キャリアタイムの取り組み

本校では、毎週月曜の業前の時間に子どもたちが「松原キャリアタイム」に取り組んでいる。前述の考え方にあるように、４月に今年度の目標や、なりたい自分を「キャリア・パスポート」に記入し、それを基に、なりたい自分に近づくためにできることを子ども自身が考えて取り組んでいる。

取り組んだ活動の中で、「学年の新出漢字を覚えたい」と記入した子は、漢字ドリルやオンラインの漢字ドリルアプリで新出漢字の練習に取り組んだり、「楽しいクラスにするために、できることを頑張りたい」と記入した子は、仲間と数人で係活動に取り組み、学級会の準備に取り組んだりしている。校内だけでなく、家庭で「早寝早起き」「手伝い」を頑張りたいことに取り組んでいる子どもたちもいた。高学年の子どもたちにおいては、教育委員会主催のミラトラDAY（子供向けの企業展）に参加し、自分の将来の夢と照らし合わせて興味をもった職業についてプレゼンテーションにまとめ、発表し合う姿も見られた。また、スポーツ選手を夢にもつ子は家で自主練習をしたり、天文学者を夢にもつ子は星座を、獣医になりたい子は動物の生態を自分で勉強したりしている。

（2） 寺田ユースケ（車いすユーチューバー）さんの講演

①講演の趣旨

目指す子ども像にもあるように、自分の夢や目標をもつ意識が低いように思われることから、寺田ユースケ（車椅子ユーチューバー）さんを招いて話を聞く中で、努力すればできそうな夢や目標をもち、キャリアタイムなど日々努力しようとする意欲と態度を身に付けさせたいと考えた。

②講演の様子

講演が始まると、子どもたちは、目を輝かせながら寺田さんの話に聞き入っていた。まず、寺田さんは、自分が生まれつき脳性麻痺であったため、野球部入部に悩んだこと、入部後に友達に支えてもらったことなどの話をされた。そして、大学に入ってから、イギリス留学や車椅子ヒッチハイクで日本一周などポジティブに活動し、ユーチューバーへの歩んだ話を聞くことができた。寺田さんのポジティブにアクティブに夢や目標をもった話を聞き、質疑応答の時間が足りなくなる程、子どもたちから質問の手が挙がった。寺田さん自身、全国を講演して回っているそうだが、「こんなに興味をもって自分の話を聞いてくれた子どもたちは初めてだ」と言っていた。講演を通して、子どもたちは「周りに感謝すること」「何事もまずやってみること」「諦めずに挑戦すること」「他人の挑戦を後押しできる存在になること」などを学んだ。

③講演を聞いた感想（アンケート結果）

寺田さんの話を聞いて、自分も夢や目標をもとうと思った子は全体の約 85%、その夢や目標に向かって頑張ろうと思った子は全体の約88%だったことから、諦めず努力しようとする気持ちが芽生えたと考える。感想の中には、「自分らしい生き方でありのままに生きていこう」「失敗してもいいからチャレンジすることに自信がもてた」など前向きな感想が多かった。

4 分析と成果

日常の「松原キャリアタイム」を設定して、日頃から夢や目標を考えたり、挫折に負けずチャレンジする講師の話を聞いたりする機会を設けたことによって、夢や目標に向かってチャレンジすれば、夢や目標に繋がることを実感して努力しようとする児童の意欲につながったと考える。

目次へ

研究主題	自ら学びを進める子どもの育成		
副　題	単元内自由進度学習を通して		
学 校 名	名古屋市立松栄小学校	校 長 氏 名	千葉　雅美

1　研究のねらい

本校では、昨年度までの３年間「ICT を活用して主体的に学ぶ子どもの育成」を主題とし、授業研究を行ってきた。その結果、子どもがタブレットの操作に慣れ、タブレットを活用しながら意欲的に学習に取り組むことができるようになった。しかし、意欲的ではあったものの主体的な学びではなかったこと、子どもに自身の努力や成長について実感させられなかったことが課題として残った。

今年度、名古屋市において、子ども中心の学びの指針として、「ナゴヤ学びのコンパス」が出された。その中では、「自律して学び続ける」という目指す子どもの姿と「夢中で探求する」「自分に合ったペースや方法で学ぶ」「多様な人と学び合う」という目指す学びの姿が示されている。

そこで、昨年度の課題と名古屋市の方針を踏まえ、「自ら学びを進める子どもの育成」を主題として研究を進めることにした。

2　研究のねらいに迫るための手だて

「自ら学びを進める子どもの育成」のためには、子ども自身が「何を」「何のために」学習しているのかを理解することが大切であると考える。そのために、子ども自身がその時間のめあてを立てて学習に取り組み、学習の終わりにその時間の学習に対して振り返りを行っていくことで、自身の努力や成長を実感させたい。これらの学びを実現するために、「自由進度学習」を取り入れた授業実践を行っていく。

> 「自由進度学習」とは
> 子どもたちの興味・関心や、学習のペース、習熟度に応じて、子どもたちが自分に必要な課題や学習活動を選択して取り組むことができる学習と定義する。
> 子ども一人一人が学習計画を立て、それに沿って、個別に、時には協働しながら学習を進めていく。

今年度は、単元内の１時間以上で取り組むこととする。また、学習に対しての達成感や次の学びへの期待感が得られ、自分自身のできたこと・できなかったことを分析することで、子どもの学習時間が有意義なものになるようにしていきたい。そのため、単元全体の学習内容を示した「単元進度表」や振り返りの規準となる「ルーブリック」を作成する。

3　研究の内容

(1)　「自由進度学習」についての研修会

名古屋市教育センター指導主事の内山幹夫先生をお呼びして、「自由進度学習」とはどのようなものなのかを学ぶ研修を行った。従来の一斉授業と組み合わせることで効果が高まること、①課題選択型（興味・関心や自身の立てた問いに対応して、子どもが課題を選

択できるようにする）②時間設定型（学習のペースに対応し、子どもがそれぞれの学習活動に掛ける時間を設定できるようにする）③目標設定型（習熟度に対応し、子どもが学習に取り組む目標を設定できるようにする）という３つの型があり、学習内容に合わせて教師が選択していくこと、先進校で行われている実際の授業例などを知ることができた。研修後、各学年でどの単元でどのような学習を行っていくかという話し合いをした。

⑵ 研究支援のための話し合い

授業実践に向けて動き出した教員から、多くの不安の声があがった。その中で特に多かったものが、若手教員やベテラン教員による「授業規律が保たれず、学級が乱れるのではないか」というものであった。

この不安を払拭するために、管理職や教務主任はどのような支援ができるのかを考えるため、一般社団法人ひらけエデュケーション代表理事の若杉逸平さんをお呼びして、対話を行った。

対話を促してもらいながら、「自由進度学習を進めるために、自由進度学習の研修をさらに進める」「子ども同士が安心して学び合うことができるための環境づくりが大切」「担任の先生方がやってみたい・やってみようと思える研修をしたい」などの意見が出され、子ども同士の関係づくり、学級経営に焦点を当てた研修を行うことを決めた。

⑶ 話し合い活動・学級経営についての研修会

愛知教育大学非常勤講師の深見太一先生をお呼びして、「クラス会議（子どもたちが自分たちで話し合い,学級の問題や個人の問題を解決していく会議)」についての研修会を行った。まず、アイスブレイクとしていくつかのレクリエーションを行った。活動中はどの教員からも笑顔が見られた。次に、小グループになって、「ハッピーサンキューナイス（自分が嬉しかったこと、人にされて嬉しかったこと、人が自分ではない他の人にしていたいいことを話す活動)」を行った。ポジティブなことを共有し合い、また、それを認めてもらうことで、優しい空気になり、どのグループも会話が広がっていた。


【研修でレクリエーションを行う様子】

これらの活動を学級に取り入れていくことで、子どもたちは学級での安心・安全を感じることができる。そして、それが土台となって話し合い活動、学び合いへとつながっていくことを、研修を通して実感することができた。

研修後は「おもしろかった。」「ぜひやってみたい。」と話す教員が多く、早速レクリエーションやハッピーサンキューナイス、クラス会議を取り入れていた。

⑷ 各学年における授業実践

１年生　体育科「にんじゃごっこ」

様々な技の習得に向けて、個人のめあてを立て、個別学習を行った。子どもは、自分が取り組むと決めた術（技）を練習するために、それぞれの場へ移動して活動を行った。技ができるようになったら、友達同士で技を見合う「チェックタイム」を行った。チェックタイムで友達からサインをもらうと、うれしそうな表情を見せている子どもが多くいた。しかし、どの技を練習しようか悩んでしまう子もいた。迷っていた分、運動量も減ってしまった。

２年生　生活科「楽しさのひみつはっけん」

おもちゃ作りを単元のゴールとして設定した。授業の始まりで「今日やること」を決め、

同じおもちゃを作ったり改良したりするグループを作って活動した。途中、「アドバイスタイム」で自分の工夫と友達に伝えたり、友達の工夫を聞いたりする時間を設け、自分のおもちゃ作りに生かすよう働きかけた。最後に、ルーブリックをもとに振り返らせ、次への見通しをもたせた。しかし、友達の工夫を積極的に取り入れようとする子は少なかった。

3年生　理科「電気の通り道」

単元のゴールとして、豆電球を活用したおもちゃ作りをすることを示した。様々な実験では、自分のペースで実験を進め、知識を得ることができた。学んだ知識を生かしたおもちゃ作りでは、多くのアイデアが出された。しかし、実際に作り始めると思ったように豆電球が光らないことが多かった。そのような場面でも、自分で単元進度表に書き溜めたポイントを確認し、一つ一つ確かめることで問題を解決することができた。一方で、ルーブリックをうまく活用することができず、教師の見取りと子どもの自己評価が乖離してしまうことがあった。

4年生　理科「わたしたちの体と運動」

一人一人が骨、筋肉、関節について調べていく活動をした。それぞれ自分の調べたいものから順に調べていった。調べる方法として、模型、図書資料、インターネットから選んでプリントにまとめていった。同じ部位について調べている友達と一緒に本を見ながら確認する子や、模型を実際に触りながら動きを確かめる子などが見られた。一方で、ルーブリックの設定が難しく、子どもが振り返りをする際に迷ってしまうことがあった。

5年生　算数科「面積」

「自分で公式をつくろう」をテーマに学習を進めた。様々な図形の求積において、紙を切ったり、組み合わせたり、補助線を引いたりして紀州の知識を使って面積の求め方を考える活動、次に、教科書の問題を解く活動、次に、デジタルドリルの問題を解く活動、そして、チェックテストで知識の定着を図る活動を行った。公式づくりでは、自分で黙々と進めたり、友達と一緒に話し合いながら進めたりする子が見られた。友達と一緒に学習している子の中には、ホワイトボードを使って説明する様子が見られた。チェックテストでは、間違えた問題があると合格した友達に教えてもらったり、ノートや教科書を確認したりして、自分から進んで問題を解き直していた。一方で、低位の子にとっては、チェックテストの解き方を友達に教えてもらうことで、知識として定着する前に合格し、次に進んでしまうことがあった。



【自分の選んだ学習形態で学習する様子】

6年生　国語科「伝記を読んで、生き方について自分の考えをまとめよう」

伝記を読み、自分の生き方に活かしたい考え方についてまとめ、発表することを単元のゴールとして設定した。子どもたちは、7時間の自由進度学習の中、伝記を読み進めたり、ワークシートに名場面を記入したりしながら資料作成の準備に向けて意欲的に活動を行っていた。また、パワーポイントの資料作成では、ワークシートや教師の模範資料をもとにスライドを作成していった。時折、パワーポイントの使い方について互いに教え合う様子が見られ、意欲的に活動することができた。しかし、自由進度学習の3時間目ですでに進度に大きな差が見られた。活動の遅れに対する支援が十分でなかった。

４　成果（〇）と課題（●）

〇　自分で選んだ課題に取り組むことで、活動に主体的に取り組む姿が見られた。

〇　他者評価を取り入れたことで、他の子と関わり合いながら学習を進めることができた。

〇　単元進度表を活用したことで、活動の見通しをもつことができ、次の活動へのつながりを考えて取り組むことができた。また、自分の活動内容が明確になることで、集中して取り組むことができた。

〇　学び方を選ばせたことで、自分の進度や習熟度に合わせて、友達と協働して学習をしたり、自分で学習を振り返ったりしながら学びを進めることができた。

〇　調べる手段を複数用意したことで、子どもたちが自分に合った方法を選び、進んで活動に取り組むことができた。

●　子どもの振り返りにおいて、ルーブリックをうまく活用することができなかった。

●　自ら学習を進めることができない子、学力の低い子は自己評価も低くなりがちであった。それらの子への支援が十分でなかった。

●　自分の取り組みに集中するあまり、協働的な学習の場が見られないことがあった。意図的な場の設定が必要であった。

５　次年度に向けて

今年度、自由進度学習を取り入れた授業実践に取り組んだことで、自ら学びを進める子どもが育ちつつあると考える。一方、多くの課題も見つかった。次年度は、課題の中から重点を置いて取り組む内容を考え、さらに、自ら学びを進める子どもの育成を目指して研究に取り組みたい。

目次へ

研究主題	主体的・協働的な「生徒中心の学び」		
副　　題	～社会で生き抜く力を育む・学び合い～		
学 校 名	名古屋市立桜山中学校	校 長 氏 名	八幡　章雄

１　はじめに

「ナゴヤ学びのコンパス」では、目指したい子どもの姿として、子どもたちが必要に応じて、仲間や大人の力を借りたり、自分の力を貸したりする「ゆるやかな協働性」のもとで一人一人が自立して学び続けている姿を目指している。「ナゴヤ学びのコンパス」が目指す学びの姿を踏まえ、本校では、生徒中心の学びの授業「学び合い」を進め、社会で生き抜く生徒の育成を目指して授業や行事に取り組んでいる。具体的には、授業の中での対話を大切にし、授業の中で、「分からないことを、教えて」と言える関係を大切にする。また、学級における話し合い活動の場面では、グループの仲間と対話によって合意形成する力を育むことで、社会で生き抜く生徒の育成につなげていきたいと考えている。そこで本研究では、生徒同士の対話や授業の様子をアクションカメラで記録し、生徒の対話の内容や様子を検証し、今後の授業改善や生徒理解に役立てたいと考えた。

２　実践の様子

（１） 各教科の実践について

「AET に SAKUCHU のよいところを伝えよう」〈英語の実践（３年生)〉

グループでの学びの場面で「I think that」を使って AET に伝わるように表現を工夫する活動を行った。文法の順番に迷う生徒が、グループの学びから「そうだ！！」と理解する瞬間をとらえることができた。仲間に伝え合う中でよりよい表現を追求することができた瞬間であった。授業後には授業者が動画を見返し、課題は生徒にとって適切だったかどうかを、生徒の反応を確認しながら振り返り、授業改善に繋げた。また、継続して授業の始めに行うワークでも撮影を取り入れ、定期的にチームでの学びを録画して授業改善に繋げている。



仲間のアドバイスで文法に気付く生徒の様子

「桜山中学区の DESIGN プロジェクト」〈美術の実践（３年生)〉

グループでのテーマ設定から個のデザインを行った。テーマ設定の場面では、グループ内での対話による合意形成が大切になり、制作の過程をアクションカメラで記録した。また、最後はグループでのプレゼンテーションを行ったが、その際、自分の作品について生き生きと語る生徒をアクションカメラを用いて撮影することができた。教師は、後日制作の過程を評価するにあたり、参考になる映像になったと考える。



プレゼンテーションで熱く語る生徒の様子

「説明文の読解」〈国語の実践（１年生)〉

教材「子どもの権利」を用いて、筆者が誰の視点や考え方を用いているか、その変化を考えてグループの仲間と学び合う活動を行った。

２台のアクションカメラでグループでの学び(生徒同士の発言や気付き）を追うことができた。生徒が話す自分の考えの根拠や、ホワイトボードに書き込む様子もしっかり確認できた。生徒もカメラを意識することもなく、活動を進めることができた。また、本実践は校内研究授業として取り組んだこともあり、他の教科の教師を含む多くの教師で参観することができ、生徒理解にも繋がった。



説明文の根拠を探すグループの学び

（２）生徒への価値付けに繋げる

「デジタルサイネージで見せる」

撮影した動画から、学びの姿を校内のデジタルサイネージで公開し、生徒への価値付けを行った。各教科でのよい学びの姿を示したことで、校内全体の学びの基準にすることができたと考える。また、今年度生徒の行った学習のアンケートには、「自分と違う意見について考えることが楽しい」「自分の考えを工夫して発表することができる」と答えた生徒が多いことが分かった。



デジタルサイネージで価値付けした学びの姿

３　成果と課題

生徒の対話・気付きは、教師がすべて拾えるわけではないことがアクションカメラの活用を通して明らかになった。しかし、場面に応じてどの教科、どの場面でもアクションカメラを活用できる。映像による授業リフレクションをどの教師も活用し、授業改善に活用できる学校を目指したい。

また、教科指導の視点だけに留まらず、他教科の教師が、他学年の生徒の様子を見ることで新たな生徒理解につながると考える。こういった活動こそが学校全体で生徒を見ていくことにつながるのではないだろうか。



デジタルサイネージで学びを確認する生徒

今後は、アクションカメラを活用し生徒の声を拾いながら授業参観や授業研究を行い、教師も学び続ける姿勢をもち続けるようにしていきたい。本校の「学び合い」は、まだスタートしたばかりである。次年度から、生徒・職員に向けた学びのオリエンテーションを行うなど、生徒を中心とした学びを職員、保護者、地域でつくり上げる学校を目指していきたい。

目次へ

研究主題	自律して学ぶことができる子どもの育成		
副　　題	「見通す」段階での工夫を通して		
学 校 名	名古屋市立汐路小学校	校 長 氏 名	伊藤　葉子

１　はじめに

本校には、言われたことをきちんと受け止め、学習に真面目に取り組むことができる子どもが多くいる一方、試行錯誤をしながら自分の力で取り組むことに自信を持てない子どもが多くいる。そのような子どもたちに、「学習の見通しをもち、自分に合った課題や学び方を考えて計画する力」「計画を修正しながら学習を進め、課題を乗り越える力」「学習を通して学んだことや自分自身の成長を振り返る力」などを身に付けさせるため、一人一人の興味・関心、学習のペースや習熟度に応じた学習（自由進度学習）を必要に応じて取り入れる。自由進度学習で試行錯誤しながら自分の力で取り組む経験を重ねることで、自律して学ぶことができる子どもを育成したいと考える。

自由進度学習には昨年度から取り組んでおり、本年度は昨年度の成果と反省に基づき、「学習の見通しをもち、自分に合った課題や学び方を考えて計画する力」、つまり、一人一人が適切に学習課題を設定したり、見通しをもって学習計画を立てたりすることに重点を置く。

２　研究の方法

(1) 研究の構想

「課題選択型」「時間設定型」「目標設定型」の３つの型を教科や単元に合わせて取り入れる。そして、単元全体を「見通す」「進める」「振り返る」の３つの段階で捉え、一人一人が適切に学習課題を設定したり、見通しをもって学習計画を立てたりすることに重点を置く。

(2) 研究の進め方

・各学年で、授業研究を行う単元、公開授業を行う授業者、授業日を決めて、実践を行う。
・公開授業をしない教員も、自分がた担任する学級で同じ指導案で授業実践を行う。
・２学期の授業参観では、全学級、自由進度学習を取り入れた授業を行う。

３　具体的実践

(1)　５年生の実践　マット運動　体育科　６月



＜動画を確認する児童＞

体育科の「マット運動」の単元では、まず、基本となる３つの技「開脚前転」「寝室後転」「壁倒立」をしている自分を撮影させた。そして、自分の姿と手本の動画を見比べたことで、「足が曲がっている」などの自分の課題に気付いた。次に、気付いた自分の課題を基に、これからの４時間の中で、どの技にどれだけの時間を掛けて練習したいかを考えて計画を立て、学習カードに記録した。



＜仲間と学び合う児童＞

「開脚前転が苦手だから時間を多くとろう」や「できるまでに時間がかかりそうな伸膝後転、壁倒立に長く時間を使いたい」などと、

単元のゴールを考えながら計画を立てる様子が見られた。また、毎時間の始めに、計画を練り直す時間を設定した。活動全体を通して、計画を調整しながら自分の課題に向かっていく姿が見られるようになった。

成果と課題をまとめると次のようになる。

○　手本の動画と自分の動画を見比べることで、自分の動きの課題を具体的に把握することができた。

○　毎時間、計画を作り替えながら、自分に合った計画で練習し、課題を解決していくことができた。

●　毎時間の中で、自分の動きが高まっているかを判断し、目標を修正する機会がなかった。

⑵　４年生の実践　　未来予想図を作ろう　総合的な学習の時間　１１月～２月

約３ヶ月かけて、いろいろな仕事について調べ、自分自身のドリームマップをつくるという活動に取り組んだ。

１１月には、キャリアナビゲーターに協力していただき、獣医師、気象予報士など６種類の職業の方を招き、児童一人一人が２種類の仕事を選んでお話を聞いた。冬休みには、家族や親戚の人などにインタビューをした。

３学期には、図書資料等も活用し、世の中にはたくさんの仕事があり、仕事をする人にはそれぞれの思いがあることを学んだ。そして、仕事調べを通して学んだことをもとにドリームマップを作成した。２月の授業参観でドリームマップ発表会をするという目標に向かい、ドリームマップ作成・発表練習をどのように進めていくかについて一人一人が計画を立てて取り組んだ。進捗状況に合わせて、計画を修正しながら学習を進め、発表会を迎えることができた。


R6　4年　総合「未来予想図を作ろう」

ワークシート	やること	目標
No.1	自分の仕事や生き方について考えよう（2時間程度）	11月21日（木）
No.2	自分の「好き」を見付けよう	月　日（　）
No.3	仕事を調べよう（2学期）	月　日（　）
No.4	身近な人にインタビューをしよう（冬休み）	月　日（　）
No.5	仕事を調べよう（3学期）	月　日（　）
No.6	ドリームマップを書こう	月　日（　）

ロイロノート　ドリームマップ作成・発表練習

＜学習の流れ＞



＜図書資料で調べる児童＞

○ 学習の流れを示し、ドリームマップをつくり発表するというゴールが明確であったため、意欲を持続させることができ、自分の進捗状況に合わせて計画を修正しながら取り組むことができた。

○ 人から話を聞く、タブレットや図書資料で調べるなど多様な方法で調べることで、世の中にはたくさんの仕事があること、それぞれの仕事をする人に“やりがい”や“大切にしたいこと”があることなどを知り、仕事について多面的にとらえることができた。

☆　正解がない学びであるため、「好き」と「得意」のどちらを選ぶか、「仕事」と「生活」のどちらを大切にするかなど、答えのない疑問に戸惑う児童が見られた。

４　実践のまとめ

自由進度学習の取り組みは始まったばかりであり、どの学年も手探りで実践を行っている。取り組みを通して、学年、教科・領域、単元、児童の実態などによってもふさわしい型が異なること、ゴールを明確にし、自分で計画を立てて学ぶことで意欲が持続すること、タブレットだけでなく多様な方法で調べることで学びが充実することなどが分かってきた。

「ナゴヤ学びのコンパス」の実現のために、本校では来年度も自由進度学習に取り組む。児童の瞳が輝く授業を目指して、実践を積み重ねたい。

目次へ

研究主題	「心身ともにたくましく、心豊かな穂波っ子の育成」		
副　　題	～　『自ら』、『進んで』取り組む姿勢を大切にして　～		
学 校 名	穂波小学校	校 長 氏 名	河合　勉

心と体の両面を健全に育てていくことが重要であると考える。本校では、１年目には、心を育てていくこと、２年目には、体を育てていくこと、３年目に成長させてきたことを様々な学習活動で生かすことを重点において、実践を進めてきた。

本年度は、テーマ３年目の集大成の年となる。自己決定、自己選択、自己評価する場やペア活動を企画・運営する場を設定することで、『自ら』、『進んで』学習に取り組む子どもを目指してきた。

＜授業実践＞

・前期代表授業：５年生　特別活動

子どもたちが進んで考えようとするための工夫として、付箋紙を利用したシートを作成し、次のお楽しみ会に向けての目標や計画を考えた。シートを基にして話し合う活動を通して、自分の考えをしっかりと話す姿、相手の話をしっかりと聞き、助言や感想を伝える姿など、進んで考えようとする子どもの姿が見られた。



【付箋紙を利用したシート】



【話し合い活動の様子】

・後期代表授業：２年生　音楽科

「汽車は走る」を聴き、グループで曲のイメージを絵に描き、その絵を基にして楽器を選び、表現した。授業では、順に各グループが楽器を演奏し、他グループからアドバイスを聞いたり、録画した自分たちの演奏を見直して、振り返ったりした。振り返りシートを用いて、次時の目標をもつことができた。「『みんなにいいね』という意見をもらったので、このままの楽器で練習したいです」、「『〇〇の楽器にするといいよ』という意見をもらったので、違う楽器で練習してみようと思います」など、次の目標を進んで考える子どもの姿が見られた。



【演奏を聴き、各グループがアドバイスをする様子】



【録画した自分たちの演奏を見直して、振り返る様子】

＜日常実践（ペア活動・異学年交流）＞

朝の時間を利用して、ペア活動（１・６年、２・４年、３・５年）を行っている。子ども自身が企画・運営していく場を設定していくことで、進んで取り組む姿勢を引き出していこうと考え、実践を進めてきた。

また、児童会では、穂波小独自のキャラクター「ほなみん」、「いなほちゃん」を作成

したいと主体的に全校に働き掛ける姿があった。穂波小スローガンを児童会が全校児童に進んで企画し、声を掛け、中心になって考え、キャラクター「ほなみん」、「いなほちゃん」を入れて、思いがこもったスローガンを考えることができた。また、スローガンが印刷された「ほなみん&いなほちゃんクリアファイル」を作成したことで、穂波小学校への愛着、いじめ防止の意識を高めることにつながった。



【全校で考えた穂波小スローガン】

＜実践の成果と課題＞

○　各学年が発達段階に応じて、各教科で『自ら』、『進んで』の姿を引き出すように、自己決定、自己選択、自己評価する場を設定し、一人一人が目標をもち、取り組むよう、工夫していた。〔算数科では、習熟度に合わせて計算の練習を選択すること（１年)、語科では学んだことからクイズを作る場面を取り入れたこと（２年)、社会科では一人一人の課題を見つけ、追究していく場面を工夫したこと（３年・４年)、外国語科では、ゲームやグループ活動を取り入れる工夫をしたこと（６年）など〕

○　上学年が企画・運営することで、進んでペア活動に取り組む姿が見られた。また、下学年は、その企画に楽しく取り組むことができた。

●　一時間の目標をもって取り組むようになってきたが、次の授業につながるような振り返りができていない。

→　次時へつなげるための振り返りやワークシートの工夫が必要である。また、自己決定、自己選択、自己評価する場の設定を続けていくことは、今後も続けていきたい。

目次へ

研究主題	「夢の実現に向けて努力することができる白鳥っ子」の育成		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立白鳥小学校	校 長 氏 名	坪井　丈典

1　研究の概要

社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質能力を身につけるために、キャリア教育の充実が挙げられている。また、本校は学校教育目標に「よりよい自分づくりを目指す子」を掲げており、自分自身の生き方を見つめ、夢の実現に向けて努力することができるような子どもを育成したいと考えた。夢の実現に向けての講話を聞いたり、多様な人々と関わったりすることで、子どもに社会的・職業的自立に向けた資質・能力の素地が養われていくと考える。他地域の子どもと関わる中で、広い視点で自分を見つめ直すことができると考える。このように様々な人々との絆づくりを通して、夢の実現に向けて努力することができる子どもを育成できるよう、支援していきたい。

2　活動の内容

（1）夢を実現させた人々との関わり

第一線で活躍する社会人をゲストティーチャーに招き、講演会を行った。

現在ラグビーチーム・トヨタヴェルブリッツで活躍するに至る自身の経歴を紹介するだけでなく、夢や目標に向かって努力した経験はもちろん、挫折や周囲の人たちに支えられて成長してきたことなどもお話していただいた。

また、ラグビーチームの通訳士からは、チームの勝利のために自分ができることや、選手のためにできることなど、支える側の思いや願いがよく分かる話を聞いた。

このように児童の生き方の一助となるような話を聞き、児童が自身の生き方を見直す契機とした。



【思いを伝えるラグビーチームスタッフ】



【ラグビーチームの通訳士による講演】

（2）留学生や多様な社会人との関わり

連携協定を締結している名古屋学院大学から留学生をゲストティーチャーに招き、外国語活動の授業を行った。また、尾張てしごと未来応援団の方々と連携し、こいのぼり職人や七宝焼の職人などをゲストティーチャーに招き、講話を聞いたり、体験活動に取り組んだりした。このような取組を通して、自分のこれからの生き方について考えることができた。また、

将来の自分について見通しをもつ機会となった。



【留学生と交流する様子】



【紙すき体験をする様子】



【こいのぼり職人の講話】



【七宝焼体験をする児童】

（３）他地域の子どもとの関わり

これまでも協働学習で関わってきた「大口町立大口南小学校」「松山市立東雲小学校」に対して、学校や地域について学んだことを紹介した。また、相手校の歴史や地域の様子についても紹介してもらった。このような協働学習を通して、白鳥小の地域や歴史だけでなく、それに関わる他地域の歴史や様子などについても広い視点から学ぶことができた。

また、交流の時間には、楽しく談笑したり、一緒にお弁当を食べたりして、互いに絆を深めることができた。



【大口南小学校との姉妹校交歓会】



【他地域の歴史について学ぶ様子】

3　成果と課題

○　夢を実現させた社会人や多様な社会人といった第一線で活躍する方から努力だけでなく、挫折などを経験しながら歩んできた話を聞くことで、自分自身の生き方を見つめ、これからの生き方について学ぶことができた。

○　地域の歴史について関わりのある学校と協働学習を行うことで、互いの地域の様子や歴史を伝え合うだけでなく、交流を通して他地域の児童と絆づくりをすることができた。

●　この後、ハンドボール選手にも講話をしていただく予定だが、学年によって、活動の機会に多少の差が出てしまった。できる限り、機会を均等にしていく必要がある。

目次へ

研究主題	自分の学びは自分で決める		
副　　題	「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実		
学 校 名	名古屋市立大宝小学校	校 長 氏 名	川出　真由美

1　主題について

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を推進するため、児童の「自己選択・自己決定」と「自己調整」のある授業づくりを継続しながら、今年度は「振り返り」にも重点を置いて取り組んでいる。育てたい児童像は、自分に合った学びのために振り返りながら、見通しをもって粘り強く学び続けることができる児童である。自らの学習状況や課題を把握させ、学習の見通しをもったり振り返ったりする活動をどのように取り入れると、学びの成果を児童自身が実感できるようになるのか、実践を通して研究を行った。

2　研究の方法

各学年や各学級の児童の実態を踏まえ、各教科等の目標や内容に応じて、「自己選択・自己決定」と「振り返り」のある学びの機会を取り入れた単元・授業づくりを行い、実践を行った。

「自己選択・自己決定」
○　どの場面で？（例：単元の導入時、毎時間、探求の段階、…）
○　何を？　　（例：内容、学び方、学習環境、進度、順序、協働する相手、タイミング）
「振り返り」
○　どの段階で？（例：計画段階、実行段階、振り返り段階、毎時間、…）
○　どのように？（例：学習計画表を記述する、振り返りシートを記入する、スクールライフを使用する…）
「自己選択・自己決定」「振り返り」をどのように取り入れるのか、「実践プランシート」を作成。

3　実践の内容（振り返りの場面を中心に報告）

〈2年：図画工作科「くしゃくしゃ　ぎゅっ」〉

「振り返り」の設定

○　どの段階　：毎時間・製作途中で

○　どのように：ロイロノートを活用し、作品を撮影したり振り返りシートを記入したりする。

くしゃくしゃにした袋紙を生かして、思いついたものをつくる活動に取り組んだ。しばる、結ぶ、ねじる、丸めるなど様々試しながら、袋の形が何に見えるかを考え、動物やロボット、リボンなど思い思いの作品を作った。振り返りでは、ロイロノートを活用して、途中経過を写真で記録したり、頑張ったことや、次にもっとやってみたいことを記録したりした。友達からアドバイスをもらったり、よいところを教えてもらったりしながら活動した児童も多く、「友達と協力し合ってできた」「困っていたらみんなが教えてくれてよかった」と振り返る児童の姿が見られた。



【試しながらつくる児童】

〈５年　社会科　「自然災害を防ぐ」〉

「振り返り」の設定

○　どの段階　：学習の終わりに

○　どのように：自分の学び方を振り返り、今後の学習に生かすことができるようにする。



【一枚ポートフォリオ】

「自然災害は、地形や気候とどう関係していて、国や都道府県ではどのような取り組みや対策、努力をしているのだろう」という学習問題の予想を考え、その予想をもとに、これから自分が調べたい課題を考えた。

単元を通して、自分の学びが一目で分かるように、「一枚ポートフォリオ」を活用して振り返りを行った。ポートフォリオには、評価基準のルーブリックが示されており、それをもとに各自が活動の自己評価を行い、毎授業のはじめには、前時の振り返り内容を確認し、前回うまくいかなかったことが解決できるように意識して取り組んだ。この一枚ポートフォリオを活用することによって、追究する課題に対して粘り強く取り組むことができるようになったり、どのように学べばよいのか児童自身がしっかり考えたりすることができるようになった。

〈６年：社会「天皇を中心とした国づくり」〉

「振り返り」の設定

○　どの段階　：授業の始めと終わり

○　どのように：旅ゲーター活動を通して、次に調べたいことを決める。



【実寸大の大仏を描く児童】

歴史を身近に感じることができるよう、当時の物に実際に触れたり再現したりする「タイムトリップ活動」や、探究したことをナビゲートするように発表し、次の活動につなげる「旅ゲーター活動」などを行った。天皇を中心とした国づくりについて、「政策」「外国との関係」「世の中の様子」「大仏」「文化」などの視点を基に調べたり話し合ったりした。様々な視点から発表する「旅ゲーター活動」は、新たな側面を知ることができ、「違う視点からも詳しく調べてみたい」「この政策は、本当に全ての人を幸せにしたのか、議論してみたい」など、「もっと知りたい！」と児童の探究意欲を高めることにつながった。

４　成果と課題（○成果　●課題）

○　児童の意識調査で「振り返りをすることは意味があると思う」の質問で、９割以上の児童が肯定的に答えた。「今日できなかったことを改善するために、次はこうしようとか、次の学習に活かしたいことを見つけることができるから、振り返りは大切。」「何ができて、何ができなかったか、めあてを達成できたか等、自分が学習活動のどの地点にいるのかが分かり、その進み具合によって学習方法を変えることができる。」など、振り返りをする意味をしっかり考えて、次の学習につなげている児童の姿が多く見られた。

●　効果的に振り返りをする場面の取り入れ方や、振り返りシートの工夫、低・中・高での児童の発達段階に応じた振り返りの仕方などは、まだ研究中である。振り返る視点を作成したり、学びのプロセスもたどることができるようにしたりしていきたい。

目次へ

研究主題	夢中になれる八幡っ子		
副　　題	知りたいことを自ら見つける場面に重点を置いた授業づくり		
学 校 名	名古屋市立八幡小学校	校 長 氏 名	寺尾　奨宏

今年度、名古屋市より、激しい社会の変化を前向きに受け止め、たくましくしなやかに変化を乗り越え、よりよく自らの人生をきり拓いていく方針として、「ナゴヤ学びのコンパス」が示された。

そこには、子どもたちが夢中になって、自分なりの問いを立て、自分なりの方法で、自分なりの答えにたどり着くことができるような、「探究的な学び」を実現していく必要があると提示されている。そして、子どもたちが自律して学び続ける人に成長していくために、教師は子どもの学びに伴走し、子ども中心の学びを進めていくことが大切であると記されている。

そこで、本校では、学校努力点を「夢中になれる八幡っ子～知りたいことや、やりたいことを自ら見つける場面に重点をおいた授業づくり～」と設定し、研究に取り組んだ。

自律して学び続けるためには、

① 興味・関心に応じ、やりたいことを児童自身が見付けて取り組む。
② 学ぶ方法や内容などを自己決定しながら進める。
③ 学びに見通しをもち、学びを振り返りながら、仲間とともに学び続ける。

という３つの観点を基に学習が進むように研究を進めていこうと計画した。

研究１年目の今年度については、知りたいこと、やりたいことを自ら見つけ、子どもたちが「夢中になって学習に取り組む」場面を意識的に設定する授業づくりを行った。

【授業実践Ⅰ　１年　図画工作　ちょきちょき　かざり】

最初に教師が、折った紙を切り、それを広げると、いろいろな形ができることを提示した。引き続いて児童たちに実際に紙を折り、自由に切ることでいろいろな形づくりに挑戦させた。

三角や四角に折った紙を一直線や曲線で切ったり、折り目や折り目以外の部分の切り方を工夫して切ったりすることで様々な形を生み出すことができた。

さらに、できた形を組み合わせて動物や乗り物などに見立てる活動を行った。児童たちは様々な切り方を工夫するとともに、紙を広げたときの予想外の形や、切った形で何を作ろうかと、夢中になって取り組み、かざりを作ることができた。

【授業実践Ⅱ　３年　体育　ポートボール】

ゲームに必要な技術である「パス回し」について学習を行った。最初にテンポよくパス回しをしている動画を提示したうえで、児童に攻撃と守備に分けてパス回しの練習をさせた。

最初はすぐ守備側にボールを取られてしまうグループが多かったが、改めて動画を見て、「ボールを持っていない仲間がどのように動くか」でパスの成功率が高くなることに気付くと、実際にパス回しが続くようになり、児童たちは夢中になってパス回しを続けることができた。

それとともに、守備側の児童も「ボールを持っていない攻撃側の児童をどうマークするか」がパスを阻止するカギだと気付き、こちらも夢中になってパスを阻止しようとすることで、パスゲームをしている児童たちの運動量は飛躍的に多くなっていった。

【授業実践Ⅲ　４年　外国語活動　What do you want？】

夢のピザとパフェを作るため、客役の児童が、店役の児童に食材をもらう行為を、チャントに合わせてやりとりし、ピザとパフェを完成させる活動を行った。

最初に教師とＡＥＴによる実演を見せた後、児童たちは教室中を動き回り、多くの他の児童と何回もチャントに合わせたやりとりを行った。

理想のピザとパフェを完成させるためには、何件もお店を回らなくてはならないよう工夫されていたため、児童たちは夢中になってお店を回り、何度も何度もチャントを繰り返すことで「What　do you　want？」「I want……」の話形を自然にマスターすることができていた。

【授業実践Ⅳ　６年　総合的な学習　情報の発信について考えよう】

インターネットを利用する上でトラブルとなった事例を参考に、児童が「自分ごと」としてトラブルを回避できる力を身につけさせる。「トラブルのキーワード」を７つ示し、気になったキーワードがどのようなトラブルであるのか、調べ、考えさせ、グループ内で発表した。

例えば「キーワード　上手く伝わった？」では、メール文の中に「あの子の話、面白くない」との文があった際、それは「面白い」のか「面白くない」のか、全く逆のどちらにも意味がとれてしまう例が示された。そして、他にも同じような例はないか、自分や友達が似たような事例（意味の取り違え）でトラブルになったことはないか調べた。

児童たちは身近なところにトラブルの落とし穴があることに気付くとともに、どうしたら回避することができるのか、夢中になって調べ、グループで話し合うことができた。

【教職員への講演会】

講師として名城大学教授、竹内英人氏を招き、子どもたちが夢中になって取り組むための授業の工夫の仕方について講演会を行った。氏が行っている小学生向けの算数教室の様子を紹介していただき、教師が親切にしすぎない授業展開を教えていただいた。一番気を付けたいことは、子ども本人が一生懸命考え、解決への糸口を見つけ、正答にたどり着くまで、教師はじっと待ち続ける（これがなかなかできないと指摘された）という、教師側の覚悟の大切さである。また、たくさんの問題を一度に提示し、できる問題から解くこと、教師は正解かどうかのみを子どもに伝えることで、考える楽しさを実感させることが、学びの質を上げることにつながるとも教えていただいた。

また、高校生に対する数学の実践では、解法に至るまでの考えを言語化させることで、論理的思考能力が育ち、学力の向上につながっている事例が紹介された。高校生と小学生の違いはあれ、小学生でも思考の言語化は、効果的であると思われるので今後挑戦していきたい。

講演の中では、生成ＡＩの活用についても話題にしていただいた。ＡＩに「使われる」のではなく、「使いこなす」ことが重要であると力説されていた。そのためには、利用者が確かな知識や言語能力を備えていることが必須であることを強調された。

教師としては、生成ＡＩを活用しての指導案づくり、学習プリントづくり等、便利なツールとなり得るが、「使いこなす」教師によってより効果的に活用できることを指摘された。生成ＡＩの活用の幅は児童にも広がっていくと考えられる。児童が「使いこなす」ことができる確かな知識を身につけさせる指導も必要となってくる。

今後も、「ナゴヤ学びのコンパス」の方針の下、様々な教育活動に挑戦することができるよう、研究を重ねていきたいと考える。

目次へ

研究主題	自ら学びを進める荒子の子		
副　　題	多様な人との交流学習を通して		
学 校 名	名古屋市立荒子小学校	校 長 氏 名	溝口　弘

１　研究のねらい

昨年度、本校では「かかわりを生かしながら学ぶ荒子の子～ＩＣＴ活用の幅を広げて～」を主題に、ＩＣＴの活用の幅を広げることを重点に置いて研究に取り組んだ。実践を通して、子どもが仲間と情報や考えを交流させ、自分の考えを改めたり深めたりすることができた。この研究から、様々な場面でＩＣＴを活用することで、協働的な学習を進めることができ、子どもの学びを深化させることが明らかになった。

名古屋市の教育の方向性を示した「ナゴヤ学びのコンパス」では、子ども中心の学びを幼・小・中・高校で一貫して進めていくことを目指している。そのための学び方として、多様な人と学び合うことが大切だと言われている。本校は荒子幼稚園、一柳中学校と隣接しており、いろいろな人と関わる環境が整っており、また地域が出自の武将、前田利家もいる。そのおかけで、今まで様々な交流学習を続けて行ってきており、子どもは意欲的に活動に取り組んでいる。

今年度は、子どもが個々の関心に応じて、学ぶ内容を選択したり、学習計画や方法を考えたりしながら、自ら学習を進めることができるようにしたいと考えた。そのために、本校の強みを生かし、校内での異学年との交流をはじめ、隣接する幼稚園の園児や中学校の生徒、地域の人々等、多様な人との交流学習を計画している。こうした人とのかかわりの中で、児童が関心や意欲を持続させたり、自分の考えを深化させたりすることができるようにしたいと考えた。

２　推進計画

４月	努力点研究推進計画【全体会】	11・12 月	授業実践
５・６月	授業実践の計画、授業実践	１月	成果と課題の検証、報告書作成
７・８月	共通指導案検討、代表授業者決定	２月	報告会
９・10 月	授業実践	３月	次年度の計画立案

３　主な手立て　単元に位置付けた交流活動

４　実践の内容

(1) ３年生の実践…総合 「たくさんの人に食べてもらえる野菜を作ろう」

「おいしいミニトマトを作るにはどうしたらよいのだろう」という子どもの問いから単元の学習を始め、地域の農家の方と出会わせた。子どもは、野菜栽培に必要な様々な条件を知り、どのように育てていくとよいかをグループや学級全体で話し合った。子どもは、話し合いを通して考えたことを生かし、粘り強く活動に取り組む姿が見られた。さらに、自分の活動の様子を振り返り、地域の農家の方から学んだことで、自分たちの学びが深まっていったことにも気付くことができた。こうした学びの成果を地域の農家の方に伝えることもでき、自ら学びを進める達成感を味わうことができた。



【学んだことを農家の方に伝える様子】

(2) ４年の実践…総合「地域の武将と荒子観音について調べよう」

地域に古くからゆかりのある前田利家について、「もっと知りたい、たくさん調べたい」という願いもった子どもを地域の歴史を語り継ぐ会の方と出会わせた。子どもは、前田利家の偉業とそれを知る手掛かりが長い間大切に受け継がれてきたことを知った。子どもは、学んだことをグループごとにまとめて、他学年に伝えることにした。ここでは、相手に伝わるように、進んで準備する姿が見られた。こうした活動を通して、地域への誇りや愛着が生まれるとともに、自分たちが地域の伝統を伝えていきたいという意欲も高まっていった。



【地域の方からゆかりの武将の話を聞く様子】

(3) １年の実践…生活「あきとともだち　つくったおもちゃであそぼう」

公園で見つけたどんぐりや落ち葉などを使って遊ぶ中で、併設の幼稚園の園児とも遊びたいという思いが生まれた。そこで、秋の物でつくったおもちゃを使って、園児と一緒にお店屋さんをすることにした。仲良く遊ぶにはどのようにするとよいか考え、グループで話し合うことで、遊びをよりよいものに改善していくことができた。遊びの後には、楽しかったことやうれしかった気持ちを園児と伝えあい、遊びの計画を立て、実行したり改善したりして楽しむことができた。



【計画した遊びを園児と楽しむ様子】

５　研究のまとめ

目次へ

研究主題	自ら、ともに、学びを深める正色っ子		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立正色小学校	校 長 氏 名	長谷川　剛

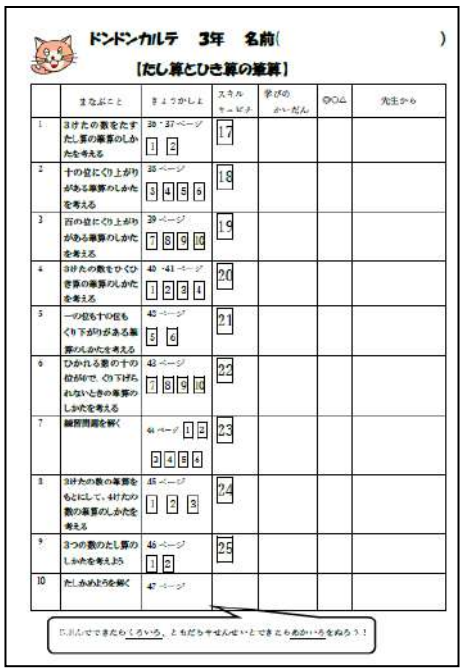
1　実践の概要

本校では、令和３年度から「自ら、ともに、学びを深める正色っ子」をテーマに「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指し、個別学習（ドンドンクエスト）とプロジェクト型学習（プロジェクトS）に取り組んできた。



【研究のイメージ図】

４年目となる今年度は、個別学習（ドンドンクエスト）では、算数科に絞って研究を進め、２年生以上は、ＮＩＮＯ（認知能力検査）を行い、本研究に限らず、日頃の学習支援の資料として活用した。また、昨年度に引き続き「ドンドンカルテ」を用いて、児童が目標や学習計画を立てたり、振り返りを行ったりした。児童が記入した「ドンドンカルテ」を担任が確認することで、その児童の進捗状況を把握するようにした。また、今年度からは、全学年で単元の途中等で小テストを行い、児童の理解度を正確に把握できるようにした。さらに、解き方を交流したり、学習の振り返りを文章表記したりし、自分の考えをもつ場面を意識して進めるようにした。そして、振り返りの時間では、個別の学習を段階で示した「学びのかいだん」を活用することで、児童自身が授業における理解度を把握しやすくした。

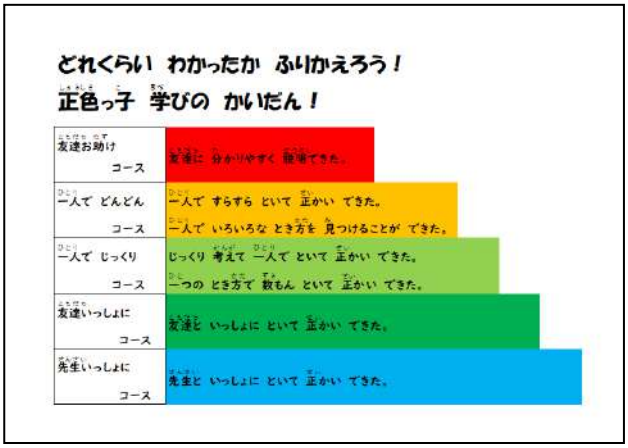

ドンドンカルテ　3年　名前（　　）
【たし算とひき算の筆算】

	まなぶこと	きょうかしょ	スキルチェック	学びのかいだん	◎○△	先生から
1	3けたの数をたす たし算の筆算のしかたを考える	26・27ページ 1 2	17			
2	十の位にくり上がりがある筆算のしかたを考える	28ページ 3 4 5 6	18			
3	百の位にくり上がりがある筆算のしかたを考える	29ページ 7 8 9 10	19			
4	3けたの数をひく くり下がりがある筆算のしかたを考える	40・41ページ 1 2 3 4	20			
5	一の位も十の位も くり下がりがある筆算のしかたを考える	42ページ 5 6	21			
6	ひかれる数の十の位が0で くり下げられないときの筆算のしかたを考える	43ページ 7 8 9 10	22			
7	練習問題を解く	44ページ 1 2 3 4 5 6	23			
8	3けたの数の筆算をもとにして、4けたの数の筆算のしかたを考える	45ページ 1 2 3	24			
9	3つの数のたし算のしかたを考えよう	46ページ 1 2	25			
10	たしかめようを解く	47ページ				

たしんでできたらくらいろ、ともだちやせんせいとできたらあおいろをぬろう！

【ドンドンカルテ（例）】

プロジェクト型学習（プロジェクトS）では、３年生以上は総合、１・２年生は生活科や国語、学級活動を中心に進めた。今年度は、授業参観（11 月）でプロジェクト型学習の実践を保護者に参観してもらう機会を設定した。保護者をアドバイザーとして中間発表を行うことで、児童の発表の質を高めるとともに、保護者の本研究に対する理解を深める機会とした。また、実践後の振り返りや児童同士の中間報告会の時間を必要に応じて効率的に確保した。保護者のアドバイスを受けた結果や変容は、２月の授業参観において、教室掲示や動画等で保護者に示すこととした。他にも、保護者への周知を図るため、たよりを発行し、それをホームページにも掲載した。



【学びのかいだん】

２　実践の内容

（１）４年生算数科での自由進度学習（ドンドンクエスト）の取組

「小数」の単元で練習のページを使い、ドンドンクエストに取り組んだ。授業の前半は例題を教師と一緒に解き、後半は自分たちで誰と、何を、どのように学ぶかを選択して取り組んだ。残り 10 分ほどのところで振り返りを書いた。振り返りをチェックする際に、進み具合や問題の理解度を確認した。また、小テストを学びのまとめの前に取り組んだ。間違えている問題を分析する時間を設けることで、「小数を 10 倍したり 10 でわったりする問題で間違えている」と分析した児童は、教科書の問題を再度解き直している姿が見られた。

（２）６年生総合的な学習の時間でのプロジェクト型学習（プロジェクトS）の取組

「ＳＤＧs に目を向けよう」をテーマとして取り組んだ。ＳＤＧs に関する様々な問題や取組の中で、興味をもったものについて調べるようにし、カードゲームやすごろくなどのゲームを活用して発表した。中間発表の授業参観の際には、保護者にゲームを実際に体験してもらいながらＳＤＧs について伝えられるように、どのグループも工夫する姿が見られた。互いに見合いながら、「良かったところ」「改善点」などを伝え合った。中間発表によって、発表に向けて自信をもつことができたり、改善点に気付き、さらに付け足したいことを調べ始めたりする姿が見られた。また、保護者にアドバイスをもらう姿も見られた。



【中間発表の様子】



【保護者にｱﾄﾞﾊﾞｲｽを聞く様子】

（３）４年生総合的な学習の時間でのプロジェクト型学習（プロジェクトS）の取組

総合の時間に、愛知県に近い都道府県について調べて発表する活動を行った。自分たちで計画を立てたり、調べる役割を分担したりしながら活動を進めることができた。右の画像は、児童が作ったスライドの一部で、発表の際には、「Kahoot!」というソフトを使ってクイズ形式にして、聞き手を楽しませる工夫をしたり、「Canva」というソフトを使い、画像生成 AI 機能でオリジナルキャラクターを作ったりと、デジタルコンテンツを有効活用することができた。楽しみながら、児童が協働的に調べ学習を進めることができた。





【児童が作成した資料】

３　まとめ

算数科自由進度学習の「ドンドンクエスト」では、「小テスト」を取り入れたことで、児童の実態を教師だけでなく児童自身も把握することができた。今後は、「ドンドンカルテ」のめあてをより具体的に立て、そのめあてについて、どのように達成できたのかを振り返るようにし、学びが積み重なっていくようにしたい。プロジェクト型学習の「プロジェクトＳ」では、中間発表の充実によって、よりよい発表を目指そうとする姿が見られた。今後は、児童同士で振り返ったり、改善したりする活動を充実させるために、「話型」を活用したい。発表したり、自分の考えを伝えたりすることが苦手な児童でも「話型」を基に自分の考えを伝えられるように支援することで、実践の質の向上を図りたい。

目次へ

研究主題	主体的に学ぶ児童の育成		
副　題	多様な調べ方を知り、自ら選択することを通して		
学校名	名古屋市立篠原小学校	校長氏名	石黒　和栄

１　実践のねらい

令和５年度に名古屋市が策定した「なごや学びのコンパス」では、「子どもの中心の学び」の実現を目指している。これは、子どもたちが自分の興味・関心・能力や特性などに合わせて学習方法や学習内容を個別に最適化する学びのことであり、本校もこれを受けて、「主体的に学ぶ児童の育成」を目標に実践を進めることとした。

前年度までの実践において、話し合いで考えを深めたり広げたりすることに一定の成果を挙げることができた。しかし、言われたことはできるが受動的な児童が多く、能動的に動くことに対して自信をもてなかったり、現状把握する力や見通しをもつ力が十分でなかったりする様子も見られ、課題となった。

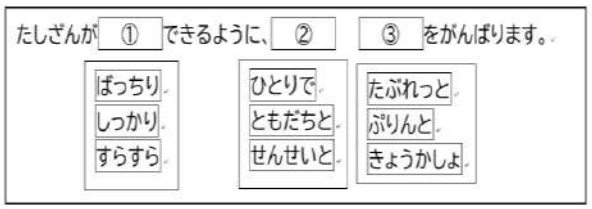
そこで、実践１年目となる今年度は、学習内容の定着に効果的と考えられる単元の一部に自由進度学習や探究活動を取り入れ、学習方法を選択できるようにした。学習方法については、教師が様々な方法を子どもに提示し、その方法のよさを伝えるようにした。また、自由進度学習や探究活動に取り組む際は、見通す→実践→振り返りのサイクルを基本とし、振り返りから課題を見付け、自分で学習方法を決定したり選択したりできるようにした。

このように、子どもが自分で学習方法を選択して学習を進めることを通して、自分なりの学び方を見つけ、学ぶ楽しさや充実感・達成感を味わうことができるようにしていきたい。

２　実践の内容

１年　算数科　【ＩＣＴ機器を活用した学習の取り組み】

学習で付けたい力や学習の取り組み方を明確にするために、ロイロノートのカードを選んで組み合わせることができるようにした。また、学習の終わりに振り返りの気持ちをイラストで選ばせ、それを基に何を頑張ったのか、次何をするかなど課題を見付けるようにさせた。どの児童も自分のめあてと取り組み方を決めて意欲的に学習に取り組むことができた。しかし、「自分の力を高めるため」ではなく、「楽しいから」という視点で選ぶ児童が見られた。



【ロイロノートを使った振り返りカード】

３年　体育科　【動画を活用した学習の取り組み】

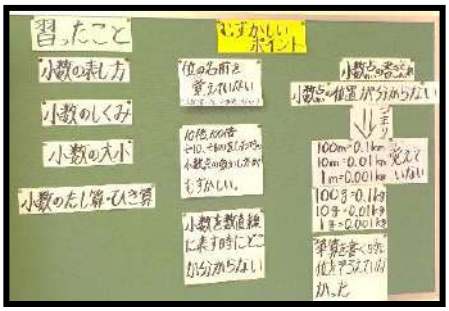
自分の動きと見本となる動きを動画で比較して、自分なりの課題をもたせるようにした。最初は、「きれいな姿勢で頑張る」という抽象的な課題だったため、どの練習の場で行えばよいか分からなかったり、適切な練習の場を選ぶことができなかったりした。しかし、友達や教師からのアドバイスや


【動きを確認する子どもの様子】

繰り返し練習を行っていくことで、「手でマットを強く押し上げたい」と自分の課題を具体的に記述することができるようになってきた。課題が明確になったことで、課題を解決するための練習の場を適切に選ぶことができるようになった。

４年　算数科　【確認プリント、ヒントカードを使った学習の取り組み】

確認プリントにて、自分がどのくらい学習が定着しているか数値で把握できるようにする。その後の振り返りでは、観点や役割、「○○はまだ理解できていない」といった文例を載せたヒントカードを使って自分の課題を明確にさせた。また、グループで交流させ、自分では気付けない課題等に触れられるようにした。プリントで自己分析をしっかり記入させたことで、一人一人が自分の課題を把握して行動目標を書くことができた。課題が明確になったことで、自分の苦手部分を補う練習を繰り返し、学力が向上した児童が見られた。



【ヒントカードの提示】

６年　総合的な学習の時間【プロセスカードを活用した学習の取り組み】

子どもに学習の見通しをもたせるために、プロセスカードに自分が友達に伝えたいことを書き、どんなことが知りたいか、何を調べていくかなどを記入させた。そこから、どのような情報を集めるか、情報をどのような視点で選び整理・分析するか、どんな方法でまとめるかなどの探究の流れを計画した。調べ方については、教師が、資料やインターネット、リーフレットなど、それぞれの良さを提示した。調べる内容に応じて、調べ方を選択する様子が見られた。資料の中に難しい言葉があると、これはどんな意味なのかと辞典で確認する様子も見られた。



【提示したプロセスカード】

３　成果と課題（○成果、●課題）

○　振り返りカードや比較、確認プリント等で、課題を明確にしたことで、解決するにはどうしたらよいか自分なりに考えながら学習方法を選択することができた。

○　学習方法や調べ方のよさを教師があらかじめ提示し、伝えたことは、課題に適切な学習方法を選択することに効果的だった。

●　題解決のために学習方法を選択するのではなく、「楽しいから」など曖昧な理由で選択する子どもが見られた。

●　自分の課題を明確にできないために、適切に学習方法を選択できない子どもが見られた。

４　おわりに

自分の課題を明確にしたことで、学習方法を適切に選択できる児童が見られた。どの学年においても、振り返りカードなど学習環境を整えることが大切と感じる。その反面、『楽しそうだから』という理由で学習方法を選択する子どもも見られた。必要感をもって選択できるように工夫していく必要がある。

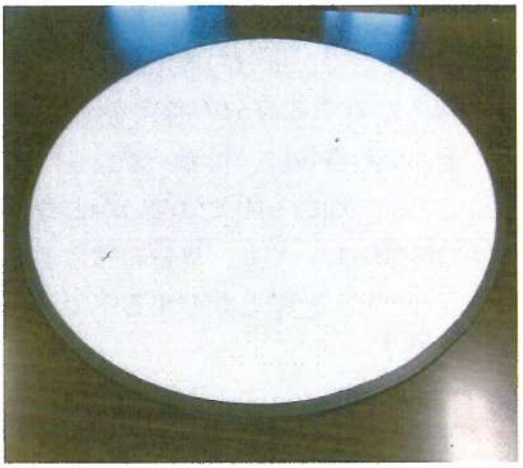
目次へ

研究主題	なかまとの学びから、「わかった」「できた」と実感できる戸田っ子		
副　題			
学校名	名古屋市立戸田小学校	校長氏名	酒井　健司

学校努力点のテーマである、「なかまとの学びから、『わかった』『できた』と実感できる戸田っ子」を目指し、昨年度と今年度、全学年で対話活動を多く取り入れた。

昨年度は、対話するために必要な自分の考えをもつことに重点を置いて研究を進めた。自分の考えをもつことができるように、発問の仕方や発達段階に合わせた教具、学習プリントなどの工夫をしたことで、自分の考えを整理したり、分からないところに気付いたりすることができた。また、各学年、常時実践でソーシャルスキルトレーニングやペアトークを行うことで、自分の考えをもち、相手と対話することに少しずつ慣れていく様子が見られた。そして、以前に比べ、「友達の考えを聞いてみたい」という気持ちが高まり、進んで対話に臨む姿が多く見られるようになった。

自分の考えをもつことができるようになってきた一方で、考えを伝え合うことに留まってしまい、対話を生かしてさらに自分の考えや学びを深めたり、広げたりしていくことについては、課題が見られた。児童が対話を通して自分の考えや学びをより深めたり、広げたりできるようにするために、いかに自分の考えを伝え合うだけでなく、相手と自分の考えを比較したり、相手の考えを自分の考えに取り入れたりしていくかが重要であると考える。

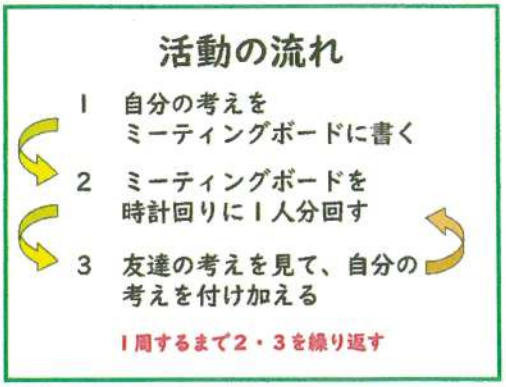


【資料１　グループミーティングボード】

そこで今年度は、自分の考えをもつところからステップアップを目指し、学びを深めたり、広げたりするために、ミーティングボードを活用した。【資料１】

ミーティングボードを活用するねらいとしては、相手の考えを身近なものとして捉えることができ、それを基に自分の考えを膨らませることにつながるとともに、自分の考えをもつことが苦手な子や上手く表現できない子も様々な考えに触れる中で、自分の考えをもつことができるのではないかと考える。

活動内容は、まず、少人数グループで、あるテーマについての自分の考えをミーティングボードに書く。次に、を時計回りに１人分回転させ、グループのメンバーが書いた考えに対する自分の考えを書き、これを１周するまで繰り返す。【資料２】



【資料２　活動の流れ】

他のメンバーが自分の考えについてどう考えているのかを知ることで、自分の考えと相手の考えを比較し、自分の考えや学びを深めたり広げたりすることができると考える。さらに、その出来上がったミーティングボ

ードを他のグループに回していくことで、より多様な考えに触れることができ、一層の学びを得ることにつながると考える。


【資料３　活動の様子】

活動の様子は、普段使わない円形のホワイトボードにとまどいながらも新鮮な様子で、楽しそうな雰囲気の中、対話することができていた。【資料３】多くの子はすらすらと自分の考えを書くことができていたが、中には手が止まってしまってなかなか自分の考えを書くことができていない子もいた。

しかし、そんななかなか手が進まない子も、同じグループの子が書いている様子を見て、自分が伝えたいことを見つけることができたり、どのように表現すればよいかの手本にしたりするなど、全く自分の考えを書くことができないという子どもはいなかった。自分の考えを書いてからの対話もスムーズに行うことができていた。これは、ホワイトボードマーカーの色を

一人ずつ変えて書いたことで誰が書いた意見なのか視覚的にすぐに捉えることができたこともスムーズに対話することができた要因ではないかと考える。

また、ミーティングボードを児童５人の膝の上に置いて活動をしたことで、普段の机をつなげて行う話し合い活動よりも互いの距離が近く、ただ考えを書くだけに留まらず、活発に話し合うことができたのではないかと考える。活発な話し合いが行われることで、自分の考えに自信をもつことや相手の考えに対する自分の考えをもつことにつながり、そこからさらに、「わかった」「できた」を実感することにつながるのではないかと考える。実際、今回の活動においても、自分の考えと相手の考えを伝え合ったり、比較したりする中で、自分の学びや考えを広げ、


【資料４　活動の様子】

深めることができ、子どもたちも充実した表情を見せていた。【資料４】

今回は、ホワイトボードマーカーで書くという活動であったが、意見をどんどん付箋に書いて貼り付け、グループ分けするといった活動をすることで、一つ一つの考えに対してより深く考えることができるのではないかと考える。また、グループでの話し合いをより活発に進めることができるのではないかと感じた。

今後は、学習の場面だけではなく、学級会やレクリエーション活動などの場面でもこのミーティングボードをうまく活用していき、様々な場面で対話を活性化させていくことができればと考える。そして、そのような対話活動を通して、より自分の考えを深めたり広げたりすることにつなげ、「わかった」「できた」と実感することができる戸田っ子が増えることを目指したい。

目次へ

研究主題	「やった！」「できた！」「次もがんばろう！」		
副　題	見通しをもち、振り返りながら学び続ける子どもたち		
学 校 名	名古屋市立港西小学校	校 長 氏 名	山　田　浩　嗣

1　主題設定の理由

本校では、「個別最適な学び」と、「協働的な学び」の一体的な充実による授業改善を行うことで、学習内容を深く理解したり新たな考えを形成したりできる子どもの育成を目指し実践に取り組んできた。

今年度は、「ナゴヤ学びのコンパス」が掲げる「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける」姿を実現するために「学びに見通しもち、振り返りながら学び続けること」に焦点を当てる。子どもたちが各教科において何を身に付けるかを具体的にイメージできるようなめあてや課題を設定したり、学習方法などを選択する機会を設けて、その学習方法が適していたのか自己評価する場を設定したりすることで、「できた！」「次もがんばろう！」といった、自分の成長を感じ、自分らしく学ぶことができる子どもたちが育つことをねらいとして研究に取り組んだ。

2　目指す児童像に迫るための手立て

授業の中で、単元や一時間の初めに学習のめあてを意識させたり、学習方法を自ら考えさせたりすることを取り入れていく。また、その時間に自分が取り組んだ問題の数や種類、解決することができた課題や、身に付いた力などを確認する時間「振り返る時間」を設定する。

手立て１：学習の見通しをもつ

単元や授業の最初に、達成するめあてを設定する時間を設けたり、どのような練習方法や発表方法などを用いるのかを選択できるようにしたりすることで、子どもたちがより自発的に学習に取り組んだり、達成感を得たりすることができるようにする。

手立て２：振り返り活動の充実

自分の本時の取り組みについて、「点数をつける」「マークに色を塗る」「文章で記述する」などして、振り返る活動を充実させる。前提として、昨年度までの研究をふまえて、子どもたちが達成感を得やすくするために、ヒントカードをもとに自分の考えをもたせる工夫も並行して行う。

授業の具体例

- 体育…マット運動で、複数用意した練習の場の選択が正しかったかどうかを振り返る。
- 外国語…授業の最後に、自分の話す様子をタブレットで録音・撮影し、うまくいった点の振り返りや、今後の課題を考える。
- 自由進度…自分のペースで学習を進める活動を行い、「○○したらうまくいった」などの観点で振り返る。

3　研究と実践の様子

（1）研究について

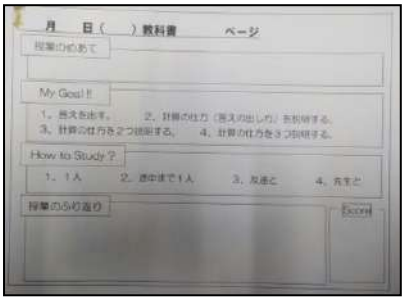
子どもたちが自身の学習を振り返る際の振り返りシートや、自己選択の場面の設定の仕方について、有効な手立ての研究を行う際、書籍等から、様々なワークシートや振り返りシート例を活用した。

（2）実践の様子

①　研究テーマに関連する手立て

・　めあてをもとに、子どもたち一人一人にマイゴール（本時の目標）や学習の場を決めさせる。

・　目標に対する自己評価と振り返りをして、自分の学びを見つめさせる。



【活用した振り返りシート】

②　研究テーマに関連する学習の様子

授業の導入では、本時のめあてを伝えたのち、「マイゴール」を設定させた。子どもたちは「計算の仕方を説明する」「説明できなくても答えを出す」といった選択肢の中から、マイゴールを選んだ。

問題に取り組む時間では、コンディションカードの「教えて」のカードを示して、既習事項などを友達に教えてもらいながら取り組む子どももいた。その後、班の仲間と問題の解き方について話し合った。

班の話し合いでは、ホワイトボードを使って自分の考えを図で説明する姿も見られた。

そして、自分でじっくり考えたり、友達の意見を聞いたりしたことで深まった考えを、学級全体の場で説明した。



【話し合いの様子】

最後に、振り返りの時間では、前向きに学習に取り組めたかどうか、自分の目標を達成することができたかどうかを振り返りシートに記述した。

シートの記述を見ると、多くの児童が、自分の立てた目標を達成することができ、「今日の自分のスコア」に９０点以上の高得点を付けていた。また、振り返りの記述を見ると、「たくさんの考えを発表することができた。次はもっとたくさんの考え方を発表できるようにしたい」といった記述も見られた。

4　研究のまとめ

めあてや課題の設定と振り返り活動に重点を置いたことで、子どもたちは、自分たちのそれぞれの目標を達成でき、自信をもつことができた。また、昨年度まで取り組んできた「個別最適な学び」「協働的な学び」を継続して意識していることも、実践の意義を深めている。

研究材料として購入した書籍等を十分に活用して、授業計画を考えたり、ワークシートを活用したりして、有意義な研究となった。今後も、子どもたちがより「やった！」「できた！」「次もかんばろう！」と思えるように支援していきたい。

目次へ

研究主題	「やってみたい」をめあてに変えよう！学びの主人公にわたしはなる！		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立小碓小学校	校 長 氏 名	田中　康一

1　主題設定の理由

本校では、昨年度まで、「主体的に学習に取り組むことができる児童の育成」を学校努力点の主題として、個別最適な学びや協働的な学びを単元計画の中に位置付け、児童が自分の学び方を選択したり、他者とかかわり合いながら学習を進めたりすることで、学習内容を身に付けられるようにしてきた。しかし、それはあくまでも教師が準備した学習であり、児童の「やってみたい」「どうしてだろう」といった思いが学習の出発点になっていない点が課題としてあげられた。

これまでの取り組みの結果、全国学力学習状況調査の結果は年々改善されているが、全国平均の結果と比較すると、国語、算数ともに大幅に下回っている。今後、本校児童の学力向上に向けて、児童の思いを出発点とした学びを進め、学習意欲を高めていく必要があると考える。

そこで、今年度は「『やってみたい』をめあてに変えよう！ 学びの主人公に、わたしは、なる！ 」を学校努力点の主題とした。単元を見通した学習計画の立案や導入方法や発問の工夫などを通して、教材に対する気付きや疑問などから児童がめあてを設定し、学習を進められるようにしていく。また、昨年度まで同様に、児童が自分の学び方を選択したり、他者とかかわり合いながら学習を進めたりする時間を設定し、児童が自ら設定しためあての達成に向けて学習に取り組むことができるようにしていく。

2　目指す子ども像に迫るための手立て

(1)　めあてをもつための対話ツールの活用

「何で～だろう」や「どうなっているのか気になる」といった児童の何気ない気付きや疑問を学習の出発点にすることができるよう、授業（単元）の導入方法や課題の出し方などを工夫していく。そして、児童の多様な疑問を共有することができるよう対話ツール「円たくん」を活用し、単元の学習目標に沿った疑問からめあてを設定することができるようにしていく。



【対話ツール「円たくん」】

(2)　めあてを達成するための学習環境の整備

児童が自分の学び方を選択したり、他者とかかわり合いながら学習を進めたりすることができるようにするために、学習環境の整備を進める。本校は、体育館棟１階に「学習センター　おうすの森」として、集会コーナー、対話コーナー、図書室、特活室が配置されている。各場所では、インターネットが使用可能である。インターネットや図書資料を活用したり、広いスペースで他者と関わり合ったりしながら学習を進め、児童が自ら設定しためあてを達成することができるようにしていく。





【学習センター　おうすの森】

3　実践の様子

6年　国語科「説得力のある文章を書こう」

(1) 実践のねらい

意見文を読み、対話ツール「円たくん」を活用して気付いたことや疑問を話し合うことで、意見文のテーマや説得力のある文章にするために必要なことを考えることができる。

(2) 児童の様子

教科書の意見文や新聞に掲載されている投書を資料として児童に提示した。それぞれの文章を読んだ児童から「すごく読みやすい」「こんな文章が書けるといいな」といった声が聞こえた。「それぞれの文章で読みやすくするための共通点はありますか」と問いかけることで、説得力のある文章を書くために必要なことを考えることができるようにした。児童は、気付いたことを円たくんに書き込み、関連のある内容を結んだり、キーワード化したりして意見文を書くために必要なことを見付けていった。



【円たくんに書き込む様子】

その後、各グループが円たくんに書き込んだ内容を見合い、共有した。児童からは、「経験したことを書くと説得力が出る」「その時の気持ちを書くと想像しやすくなる」などといった意見が出された。



【円たくんを見合う様子】

授業の振り返りでは、本時で見付けたことを取り入れて文章を書いていこうという内容の記述が見られた。

5年　社会科　情報を生かす産業

(1) 実践のねらい

自分のめあて（学習目標）を達成するために、学習計画を考え、調べ学習に取り組むことができるようにする。

(2) 児童の様子

学習問題「コンビニエンスストアでは、どのような情報を何のために活用しているのだろう」の解決に向けて、調べたいことを決め、調べ学習に取り組んだ。児童は、「学習センター　おうすの森」でタブレットや図書資料を活用して、必要な情報を集めていった。広いスペースを活用することで、教科書や図書資料など複数の資料を見比べながら調べ活動に取り組む児童も見られた。また、お互いに分かったことや調べて疑問に思ったことを伝え合ったり、資料を交換したりする姿も見られた。



【集会コーナで学習に取り組む児童】

4　研究のまとめ

右の表は、1月に実施したアンケートの結果である。79%の児童が「自分で目標を決めて、進んで学習している」と回答しており、対話ツールを活用したり、学習環境を整備したりしたことで、目指す児童像に迫ることができたと考える。今後は、より多くの児童が目標を設定し、学習に取り組むことができるように目標設定の仕方や学習の進め方の指導方法を工夫していきたい。

自分で目標を決めて、進んで学習していますか。			
そう思う	ほぼそう思う	あまり思わない	思わない
39%	40%	17%	5%

【児童アンケートの結果】

目次へ

研究主題	協働しながら、主体的に学び続ける子		
副　　題	つ（続ける）き（協働）じ（自己判断）力を育てる授業の工夫		
学 校 名	名古屋市立西築地小学校	校 長 氏 名	坂野　奈緒美

Ⅰ 実践の概要

（1） 主題設定の理由

子どもたちの実態を見ると、教師から言われたことはできるが、集中力が続かず、途中で諦めてしまったり、みんなの前で自分が失敗しそうだと思うことに挑戦しなかったり、主体的な学びではなかったりする子どもがいる。

そこで、今年度は、粘り強く試行錯誤しながら続けること、他者を尊重し考えや意見を共有すること、課題解決のために自ら判断することが、「協働しながら、主体的に学び続ける子」の育成につながると考えた。「つ力」とは、続ける力（持続力）、「き力」とは、協働する力（協働力）、「じ力」とは、自分で判断する力（自己判断力）である。本校では、「つ・き・じ力」を発揮しやすい場を設定し、子どもが発揮したことのよさを実感できるように振り返り活動を行うことで、自らの力をより発揮しようとし、さらに「つ・き・じ力」が育っていくと捉えている。

具体的な手立てとして、学習形態（自分一人で、ペアで、グループで）を自ら選択して学ぶ場面や、それぞれの考えや意見を（ロイロノート、発表など）共有する場面を設定したり、学習の目標、学習内容を児童自ら決め、取り組ませるなど宿題の個別化で家庭学習の習慣の定着を図ったりする。また、教員間も協働的に学び合うために、授業の振り返り、職員の相互参観や現職教育などで振り返りや検討の機会を設ける。

（2） 研究の進め方

【つ】続ける力を育むために

・振り返りを行い、次時の学習形態やめあてを自ら設定する。

・家庭学習の目標、学習内容を児童自ら決め、取り組ませる。

【き】協働する力を育むために

・それぞれの考えや意見を（ロイロノート、発表など）共有し、尊重する。

・同じ課題や目的のために協力して学習する。

【じ】自分で判断する力を育むために

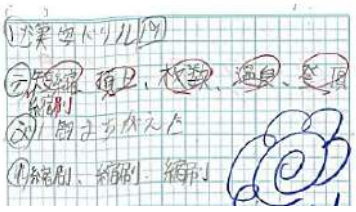
・学習形態（自分一人で、ペアで、グループで）を自ら選択して学ぶ。

・課題解決したら、次の新たな課題に自ら進んで取り組む。

3　実践の内容

（1） 家庭学習の工夫（6年：㋕㋖㋚㋛）

家庭学習を自分で「㋕計画」し、実際に「㋖テスト」してみる（やってみる）。その結果を振り返って「㋚分析」し、



目標を達成するために必要な「㋐練習」を積み重ねることで、【つ】続ける力と、【じ】自分で判断する力の育成を図る。



このサイクルを続けたことで、練習する内容や分析の記述の内容に質の向上が見られるようになった。また、授業の振り返りや予習だけでなく、自分の興味をもった内容について調べてまとめるなど、主体的に学べる児童が増えてきた。

（2） 授業の工夫（4年：体育）

【つ】続ける力と【じ】自分で判断する力を高めるために、課題解決学習の工夫として、自分の動きを動画撮影し、手本の動画と比較し、自分の課題を確認する。その後、課題解決に必要な練習を練習カードの中から選択し、取り組ませ、最後にセルフチェックを行い、自己評価と次時のめあてを考える。



また、【き】協働する力を高めるために、単元を通して、グループのメンバーを固定し、互いの動きを見合って評価したり、アドバイスを伝え合ったりする。動きを見合う際は、「ここを見て」と視点を伝えるようにしたり、「評価基準シート」を活用し、正しい評価ができるようにしたりする。

成果として、グループで動画を取り合ってお互いにチェックしたり、動画を見て気付いたことを伝え合ったりしながら協働的に取り組むことができた。また、自ら次の課題を発見し、次時のめあてを考えるなど、主体的に取り組む児童も多く見られた。

課題として、振り返りを行う際に、どのように振り返ればいいのか分からなくて、本時と全然関係ない振り返りをしていた子どもや、自分の達成度を正しく自己評価できていない子どもが何人か見られた。どこに注目するかという評価の視点を与えたり、個別の声掛けを行ったりしていきたい。

2 実践の成果と課題

【つ】続ける力、【き】協働する力、【じ】自分で判断する力の育成につながるよう、グループ活動を取り入れたり、子ども自身が判断・決定できる場面を設定したり、各学年の実態に合わせて実践に取り組んだ。特に、家庭学習においては、子どもたちが自分で取り組む内容を考え、決めることで「やらされ感」の軽減につながり、継続して取り組めている。

また、グループ学習を取り入れたことで他の児童の考えやアドバイスから、自分の考えや作品を改善する姿や、目標を達成するためにどうすればよいかを相談して取り組もうとする姿が多くみられた。一方、グループで考えが統一されたことで満足してしまい、考えの深まりがみられないなど、課題も残っている。話し合い活動のルールや目標の設定に工夫の余地がある。

今回、参考図書の充実を図ることができ、講師を招いての研修を充実させることができたことは、大変貴重なことであり、教師力、指導力を学校全体で足並みをそろえて、身につける良い機会となった。今後も、子どもたちが達成感を感じ、「つ・き・じ」力の育成につながる授業、取り組みを目指して、職員間で相互授業参観などを通して、研鑽を続けていきたい。

目次へ

研究主題	ともに学ぶ学校		
副　題	他者のよさを認める活動を通して		
学 校 名	名古屋市立港北中学校	校 長 氏 名	三谷　康博

1　主題設定

子どもたちが、「この学校で学んできてよかった」「港北中学校で育って良かった」と誇りに思える学校を目指し、授業や特別活動など様々な活動を通して、子ども達の主体性を育んできた。昨年度の学校評価においては、「学校のルールを守って生活している」と「授業に真剣に取り組んでいる」の項目について、よくあてはまる・ややあてはまるという回答の保護者のポイントは高い水準で維持していた。一方、「授業内容が身に付いてきている」の項目については、残念ながら、よくあてはまるという回答の保護者のポイントは低い値を示していた。

そこで、この課題を克服するために、他者のよさを認める活動を取り入れながら、「ナゴヤ学びのコンパス」の考え方を踏まえた授業改善を行う。そして、協働的な学びを基本として、生徒一人一人が主体的に学べるように個別最適な学びも意識しながら、ともに学ぶ学校を目指して研究に取り組んでいきたい。

2　他者のよさを認める活動の重点項目

- 他者のよさを知るために、他者の書いたものを読んだり、他者の発言や発表を聞いたりする場面を設定する。
- 他者の書いたものを読んで感想を書いたり、発表を聞いて感想を話したりすることで、他者のよさを表現する。
- 仲間と対話することを学びの中で重視することで、他者のよさを認め、最終的には自分の考えをもって自分なりの学習方法を身に付けられるようにする。

3　実践の内容

(1) 生徒の実態

本校では４年間を見通した努力点推進計画を立て、それぞれの年に重点項目を意識して実践に取り組んできた。昨年度までの２年間で、生徒は自分自身の活動を振り返るとともに、自分の考えを他者に伝える力を身に付けるような活動を行ってきた。本年度は他者との協働的な学習を通して、他者のよさを認められるような実践を行った。

(2) 実践１：音楽（合唱曲の練習）

合唱コンクールで歌うクラスの合唱曲の練習をそれぞれパートごとに分かれて行った。その際に、パート別で部分ごとにレベル１～４段階の難易度を設定し、練習をした【資料１】。「簡単な部分は早く終わらせて、難しい部分を練習する時間をたくさんとろう」と、クラスの合唱がよりよくなるように見通しをもって計画を立てる姿が見られた。



【資料1 グループで難易度を決めている様子 】

(3) 実践２：社会（地理的分野「アジア州」）

アジア州の多様な地域的特色を捉え、経済発展について考えられるようにするために「アジアに工場を建設するならどの地域がよいだろうか」について自由進度学習を交えた学習を行った。学習課題について自分の考えをまとめられるように生徒自身が学習計画を立てて調べ学習を進めた。その際に、学び合う形態についても生徒自身が「個人」「ペア」「グループ」を決め、学習を進められるようにした【資料２】。「西アジアは資源が多いから生産する上で効果的」「東南アジアは地域的統合の動きが強く、日本とのつながりも強いから、メリットが多い」といった対話が見られ、互いに自分の考えを伝え合いながら、他者の考えの良いところを認め合う姿が見られた。



【資料２　多様な形態で学び合う様子】

(4) 実践３：理科（身近な物理現象―光の性質―）

光の屈折など、日常生活での事象を科学的に説明できるようになることは論理的な思考力を育む上で大変意義深い学習活動である。本単元では、自由進度学習を取り入れながら、事前に示しておいた学習到達度表に到達できるようにした。その際に光学に関する実験器具を用いて、どの順番で学習到達度に到達できるようにするのかを自分たちで考え、７時間の自由進度学習を行った。生徒たちはグループで実験器具を触りながら、示された学習到達度に到達するためにはどうすればいいのかを考えながら学習計画を立てることができた【資料３】。



【資料３　学習計画を立てている様子】

また、自由進度学習の途中で学習到達度に達成できているかどうかを確認するために、以下のパフォーマンス課題を提示した。

難易度	課題内容
【低】発見レベル	物体が虫眼鏡を通して写った像はなぜ上下左右反対に写るのか説明しよう
【中】研究レベル	物体が虫眼鏡を通して同じ向きに写す方法を説明しよう
【高】起業家レベル	研究レベルの原理を用いて活用されている物を紹介しよう

グループでそれぞれパフォーマンス課題を達成できるようにするために、自由進度学習における学習到達度を踏まえてプレゼンテーションの作成に取り組んだ。生徒たちは「この実験は課題解決に向けて効果的だ」「課題解決のためにこの実験について確認してみよう」など、課題解決に向けて主体的に取り組んでいる姿が見られた。

(5) 実践４：総合的な学習の時間（キャリア学習）

社会で働く多様な人との出会いを通して、生徒たちが働く上での価値観について学べるようにした。身近に働いている人として、学校で働く職員（教員以外の業務士やキャリアナビゲーターなど）や生徒たちの保護者に協力を仰ぎ、参加してもらうようにした。

働く上での価値観を、「適性」「安定」「やりがい」「お金」「職場環境」「やすみ」「社会貢献」「勤務地」「知名度」とし、それぞれの職業で働いている人たちがどの価値観を大切にしているのか、ホワイトボードを使って示しながら話をしてもらうようにした。生徒たちは、日常ではあまり接点のない職業についての話に対して、興味深く聞き入っている様子だった【資料４】。



【資料4 保護者の話を熱心に聞いている様子】

その後、生徒たちは職業人講話の前後で自分自身として働く上で大切にしたい価値観がどのように変化したのかについて考えた。そして、それを踏まえて自分が大切にしたい価値観がどのような職業に生かされているのかを調べ、プレゼンテーションを行った【資料５】。



【資料5 プレゼンテーションの様子】

様々な職業に関わる人や学級・学年の仲間の発表を聞くことで、働くことについて考えるきっかけとなる活動となった。

４　実践の成果と課題（〇：成果　●：課題）

〇　実践１について、難易度を考える協働的な学習を取り入れたことで、パートごとに他者の考えのよさを取り入れながらより良い練習方法を模索することができた。

〇　実践２について、多様な形態で学び合う活動を取り入れたことで、生徒一人一人に合った学習活動を行うことができた。

〇　実践３について、グループで学習計画を立てて自由進度学習を行い、パフォーマンス課題を難易度別に提示したことで、一人一人に合った進度で学習を進めることができた。

〇　実践４について、様々な業種で働いている人たちから直接話を聞いたことで、働く意義について考える良いきっかけとなった。

●　ナゴヤ学びのコンパスにおける授業改善を考えたときに、協働的な学びを重視した結果、個別最適な学びについての活動は十分ではなかったと感じる。今後は、今年度重視した協働的な学びを踏まえて、実践３のように自分に合ったペースや方法で学ぶ活動についても様々な教科や領域で取り入れながら集団としてともに学び合えるような活動を取り入れていきたい。

●　自由進度学習や協働的な学習を進める上で、学習指導要領に記載されている学習内容の定着は不可欠であるが、自由な学習を進めていくことで補えきれない可能性がある。学習する内容に不備がでないように、タブレットを使った学力補充についても取り入れていきたい。

目次へ

研究主題	防災意識の高い呼続っ子の育成		
副　　題	自分で自分の身を守る方法を知る活動を通して		
学 校 名	名古屋市立呼続小学校	校 長 氏 名	服部左夕里

本校では、これまで「自分で自分の身を守る」活動として、防犯教室などを通して、不審者から身を守ることを行ってきた。この取組の中で、「つみきおに」という不審者から身を守るための合言葉の定着や、防犯ブザーの携帯率の向上など、不審者から「自分で自分の身を守る」意識は高まってきた。しかし、避難訓練の様子を見ていると、真剣に取り組んでいる児童と、そうでない児童との差がとても大きく、実際に災害が起こったときには、全校児童が落ち着いて、安全に命を守れるかどうかという点が課題として挙げられる。また、令和２年度入学児童から、防災ヘルメットが配付されるようになり、６年生の児童を除いた全児童がヘルメットを持っている。



【購入したヘルメット】

このような状況の中で、児童が落ち着いて「自分で自分の身を守る」ために必要なことは、防災についての正しい知識の定着と、児童を落ち着かせられる大人の存在であると考える。

そこで、今年度は「自分で自分の身を守る方法を知る活動」を通して、「防災意識の高い呼続っ子」の育成を目指そうと考えた。

「防災意識の高い呼続っ子」となることができるようにするための手立てとして、授業の中で場面を設定してどんなときでも自分の身を守る方法を伝えるようにする。また、児童の身を守るためのサポートをする教職員の安全を守るヘルメットを用意する。


【避難訓練でヘルメットをかぶって避難している様子】

休み時間に行った避難訓練においては、教室にいる児童はすぐに近くの教室にある机にもぐり、頭を守り、運動場で遊

んでいた児童は落下物がある危険の少ない運動場の真ん中にすぐに避難する姿が見られた。

また、教職員のヘルメットを用意し、避難訓練で使用したことで、児童もすぐにヘルメットをかぶる姿が見られた。

避難訓練を中心として、児童は自然と自分の身を守ろうとすることができていた。また、教職員がヘルメットをかぶる姿を見せたことで、児童も災害時にはヘルメットをかぶって自分の身を守るという意識を高めさせることができた。

目次へ

研究主題	主体的に活動することができる白水っ子の育成を目指して		
副　　題	児童が安心して過ごせる居場所づくりの推進		
学 校 名	名古屋市立白水小学校	校 長 氏 名	丹羽　知臣

1　はじめに

令和６年度は、名古屋市内８７校の中学校で、教室に入れない生徒が安心して学校生活を送ることができる居場所づくりの取り組みが実施されている。小学校でもその必要性は例外ではなく、本校でも、学校に来たくても来ることができない不登校の児童や登校したものの教室に入ることができない児童、教室の雰囲気に慣れず一人になれる時間が欲しい児童など、学校生活になじめないことを訴える児童が多くなっている。それぞれの児童の不安感や原因は様々だが、そのような児童が少しでも学校の中で安心して過ごせる場所が必要である。また、教室に入りづらい児童に、教室とは別の場所で過ごしてもよいという提案ができるだけでも、安心感を与えることができると考える。本校には、相談室が一部屋あるが、スクールカウンセラー来校日には一日中使用することになり、児童がいつでも使用できる部屋がないため、図書準備室の半分を利用して児童の居場所（第２相談室）として整備したいと考えた。

2　研究の内容

⑴　第２相談室の準備

- 図書準備室を仕切るためのカーテン
- ４人掛けテーブルと椅子
- ホワイトボード（黒板の代わりや廊下からの目隠しに使用）
- 収納棚（書籍やゲーム類を収納）
- 収納ケース（児童の持ち物や学習用具を収納）


整備した第２相談室

⑵　第２相談室での過ごし方

- 学級で行っている学習内容を行う。
- ドリル類やタブレットで自主学習を行う。
- 給食を食べる。
- 担任と学習内容の確認をしたりコミュニケーションをとったりする。

⑶　担当職員

- 教頭や教務主任…児童の受け入れと、活動の見守り。保護者との連絡。
- 教科担当教員…時間が合えば、図工や家庭科などの担当教科の作品作りを指導。
- 担任…児童とコミュニケーションをとるとともに、給食を学級の児童に運ばせたり、職員室に取りに行かせたりするなど、児童の実態に合わせた自立に向けてのルール作り。

⑷　利用している児童の様子

・　担任から出された課題で取り組めそうなものを相談して取り組んだり、部屋に置いてある知育ゲームに集中して遊んだりしていた。

・　慣れてきてリラックスした頃には、設置してあるホワイトボードを自由に使い、的あてゲームなどをかいて楽しむ様子が見られた。



自分で決めた課題に取り組む様子



ホワイトボードに自作のゲームをかく様子

3　成果と課題（成果…○、課題…●）

○　利用する児童から、「この部屋なら行ってもいい」という言葉が聞かれ、何度か利用するうちに自分の居場所として安心して過ごすことができるようになっていった。

○　利用する児童の実態（友達との接触ができる・全くできない　など）に合わせ、給食を友達に運んでもらう、自分で職員室に取りに行くなど、居場所ルームでどのように過ごすかのきまりを児童と共に設定し、自立を促すことができた。

●　今年度は利用する児童が少なかったが、次年度以降、利用する児童が増えてきたときに、それぞれが抱える問題に対応しながらの第２相談室でのきまりや利用の仕方を整えていく必要がある。

●　利用する児童の登校日数が増えることはとてもうれしいことだが、対応する職員が配置されているわけではないので、校内でやりくりをしなければならなかった。今後は、居場所だけではなく人的配置を要望していきたい。

4　まとめ

近年増えつつある、精神的な体調不良を訴える児童や、集団生活への不安感を抱く児童に対し、落ち着ける場所があることを提案することができたのは、安心して過ごすことができる学校を築く上で有効だったと言える。今年度、実際に利用した児童は２人だったが、今後も必要な児童には積極的に働き掛け、第２相談室が効果的に活用されるよう周知していきたい。

利用していた児童の一人は、小学校を卒業し中学校へと進学するが、今後の生活の中で、この部屋で過ごしたことが少しでもプラスとなって働くことを願う。また、もう一人の児童は、第２相談室から教室への復帰を目指す中で、この場所があることを支えにして前進することができるとよいと思う。

学校生活につまずきを感じる児童の原因や不安は様々で、複数の要因が重なっていることが多い。学校内の居場所は一つの手段として捉え、その児童が本当に必要としている手助けができるよう、今後も一人一人の児童に寄り添った指導をしていきたい。

目次へ

研究主題	遠くへ投げよう柴田スタジアム		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立柴田小学校	校 長 氏 名	山田　康介

1　はじめに

本校では休み時間になると多くの児童が外に出て、元気に友達と過ごすことができている。休み時間には、異学年交流で過ごす時間が設定されることもあり、学年問わず、仲良く一緒に運動に親しむことができる環境にある。

しかし、ドッジボールをした際、多くの児童がボールを捕り、投げようとせず、よけることに楽しみを感じていた。また、投げている児童も正しい投げ方を知らないため、思い通りの場所に投げたり、相手チームに向かって強い球を投げたりすることができない場面も見られた。

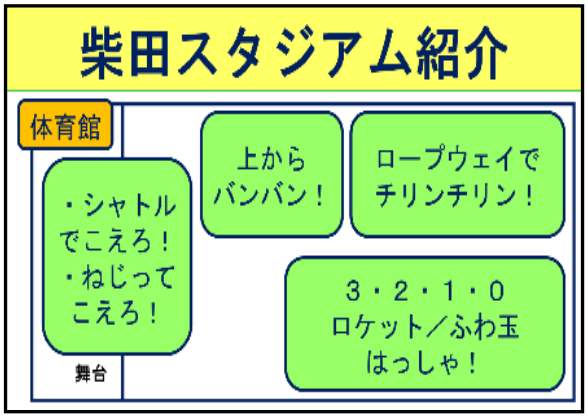
令和４年度の体力運動能力調査では、ソフトボール投げの記録において、ほぼすべての学年の男女とも全国平均を下回っていた。中には、大幅に平均を下回っている学年も見られ、投げることを苦手としている児童が多いことが明らかになった。

そこで、様々な種類のボールや環境を整備し、投げる運動に取り組ませたい。そして、ボールを投げることの楽しさを感じさせたり、記録を伸ばすことに挑戦させたりすることで、投運動の基礎的な技能向上を図りたい。

2　実践の内容

(1) 実践のねらい

本校では、休み時間にボールを使った運動をする場所や機会が少ないことから、投運動に親しむことができる環境を整備する。「投げてみたい」「楽しそう」と投げることに興味・関心をもつことができるようにしていく。業間時に運動できる環境として「柴田スタジアム」（資料１）を設定することで、投げる機会を増やすことができると考える。そして、技能向上のために様々なボールや教具を用意し、投運動における動きを身に付けさせるようする。



【資料１　柴田スタジアム】

(2) 具体的な実践

柴田スタジアム（業間運動）

昼の業間を使い、学年ごとに「柴田スタジアム」を行う。柴田スタジアムでは、大きさや形状など様々なボールや教具（資料２）を用意する。それぞれ、活動の場と教具を組み合わせることで、上から腕を振る動きや投げる方向を安定させたり、腕を真っすぐ振るこ



【資料２　教具一部（左から紙鉄砲・めんこ、スカッドキッズ、ロープ的あてバランスボール】

とで音が鳴るような仕掛けがある教具を用意したりする。そして、興味・関心に応じて投げてみたいボールや場を児童自身が選択して、自由に投げる活動に取り組めるようにする。事前にすべての活動の場の紹介動画を制作し、視聴させることで、投げる時間を確保する。

１、２年生は、楽しくボールを投げる機会を多く確保することに重点を置き、投運動の技能的な指導は行わず、投運動に親しむことができるようにする。

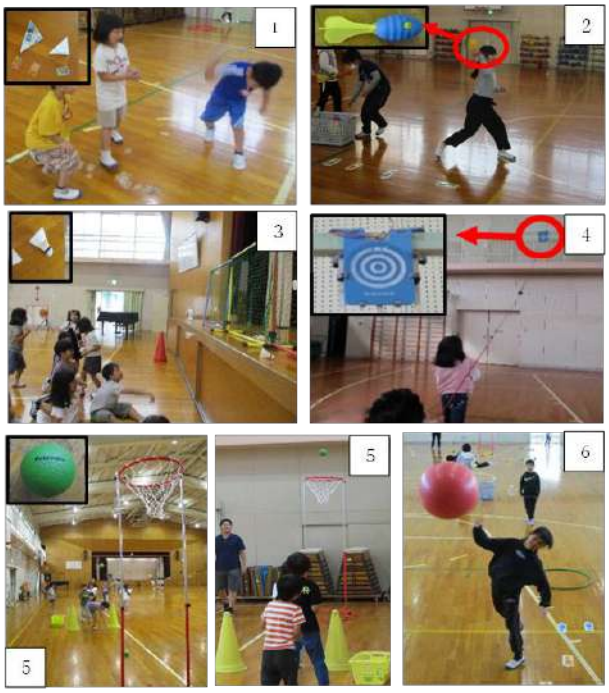
３年生以上では、活動の場で楽しんで投げることに加え、投げ方の技能向上を目指す。また、それぞれの場に、足形を用意する。投げる際の足の向きや動かし方、体の向き、体重移動の仕方が自然と身に付けることができるように、足の左右や足の運び順を番号で示し、順番通りに足を運ぶことができるようにする。（資料３）



【資料３　足形】

(3) 児童の様子

どの学年の児童も、見たことのない様々なボールや教具に興味を示し、一斉に活動を始めた。同じ場で何度も取り組む児童や様々な場を全て試そうとするなど、投運動に興味をもちながら活動に取り組む姿が見られた。（資料４）



【資料４　様々な場で活動する児童の様子】

低学年は投げる経験が少ないことから、投げ方が分からず、ボールを下や横から投げるなど、好きな投げ方で自由に投げていた。しかし、それぞれの場には、投げるための技能を高める工夫を取り入れたため、紙鉄砲やめんこの場では、上から腕をふる動作や、座ってシャトルを上に投げる場では、、腕を上げ上半身全体を使って投げるなど、投げるために必要な技能を使って投げる動きが見られるようになった。

高学年では、体の使い方や足の運びが正しい動きではなく、力任せに投げていたことで、山なりの軌道で遠くまでボールが投げられなかった。しかし、足形があることで、足の運び方を確認し、どのように投げるかを考えながら投げる児童が増えてきた。投げる前に足の動作を確認し、自分の動きを試しながら投げることで、正しい動かし方を理解し、山なりの軌道でボールが投げられるようになった。足形があることで、児童同士で動きを話し合う姿も見られたり、うまく投げられない児童は友達に聞いたりし、試行錯誤しながら投げる姿が見られた。

(4) 実勢のまとめ

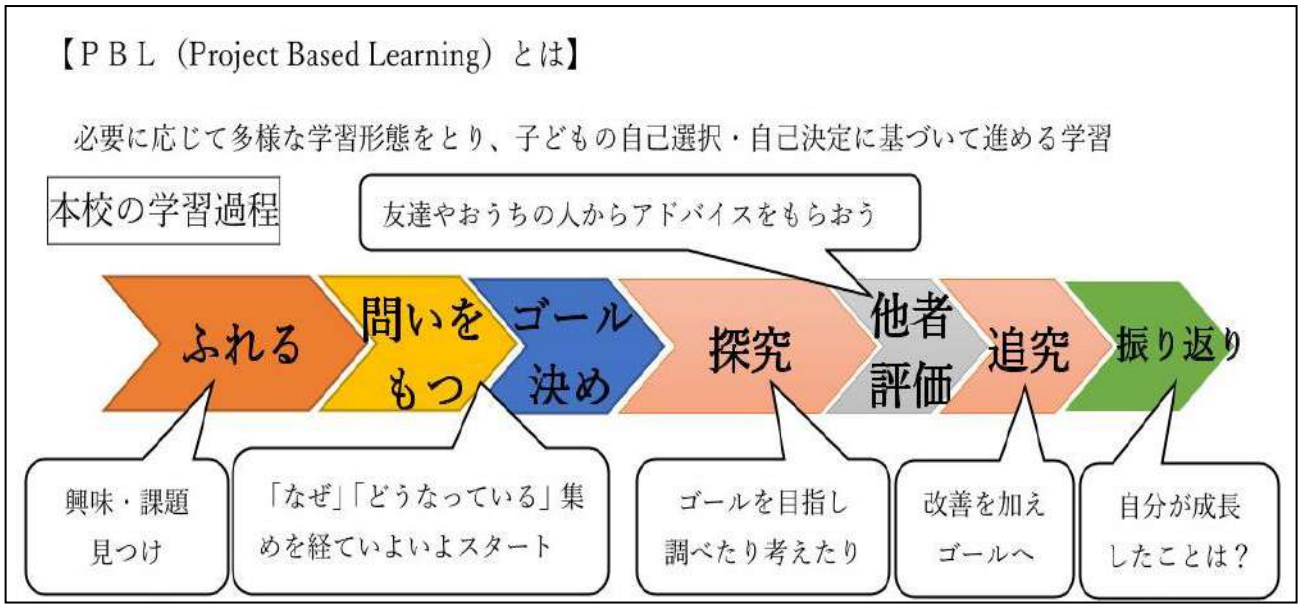
どの学年も投げることを楽しみながら活動することができた。今までは、投運動をする環境が少なく、投げることに興味をもつ児童が少なかった。しかし、本実践を通じて投運動に親しむ環境を整えたことで児童は興味をもって取り組むことができた。また、投げる楽しみや自己の成長を感じることができた児童は、年度末に行う記録会を楽しみにしており、柴田スタジアムを通じて遠くへ投げることへの意欲をもたせることができた。

目次へ

研究主題	自分で決め　自分で考え　自分でやってみよう！		
副　　題	探究的な学びへの第一歩		
学 校 名	名古屋市立志段味東小学校	校 長 氏 名	川　口　　一

1　主題のねらい

今年度より、名古屋市では「ナゴヤ学びのコンパス」の実践が始まった。「ナゴヤ学びのコンパス」は、全ての児童生徒が学びを通して自分らしく、幸せに生きていくことができるよう、名古屋市の学びの基本的な考えを示したもので、「自分に合ったペースや方法で学ぶ」「多様な人と学び合う」「夢中で探究する」の３つを、重視したい学びの姿としてあげている。それらを受けて、本校では、生活科・総合的な学習の時間でＰＢＬを基にした探究学習を行い、３つの学びの姿の実現を目指していくこととした。



2　実践の方法

ＰＢＬはこれまでに行ってきた指導法からの大きな転換となる実践である。そのため、実践の開始は２学期からとする。１学期から夏季休業中は、関係協力機関の選定、カリキュラムの入替などの、実践に向けての準備期間とする。その他にも、ＰＢＬに精通している東條さおり氏をコーディネーターとして招いて学習会を行い、ＰＢＬの理念や手法、実施に伴う留意点などを学ぶ機会を設けるようにする。

また、東條氏には、実践開始後の２学期以降にも定期的に来校していただき、ＰＢＬの授業支援や、教職員への助言などを依頼することにする。なお、本事業における助成金は、東條氏への謝金として活用することとする。

３　現職教育の内容

１学期に、現職教育を４回行った。ＰＢＬがこれまでの本校の総合的な学習の時間とどのように違うのかや、実践を通してどのような力を育てるのか等の学習形態の特色、「ふれる」「問いをもつ」等それぞれの段階で留意すべき点、先行実践校の実践紹介などについて、東條氏から学んだ。この４回の現職教育は、実践に取り組む教職員が見通しをもつことができる、かけがえのない時間となった。

ＰＢＬでは児童だけでなく、先生方も失敗から多くのことを学ぶことができます。
道に迷ったときは、努力点のテーマに立ち返り、ぜひうまくいかないことも楽しんでください。



【現職教育の一場面】

４　授業実践の内容

２学期は、東條氏が５回来校され、授業支援をしていただいた。東條氏は「それを行うことで、どんなよさがあるのかな」「なぜそれを調べているのかな」などと積極的に児童に問い掛け、思考や気付きを促すことの大切さを背中で教えていただいた。

また、在校時間を一日中としたことで、授業を行う前に各学年の担任が困りごとを相談することができた。授業で支援するポイントを東條氏が把握した上で教室に向かうことができたため、効果的な時間となった。業後にも担任が東條氏に積極的に声を掛け、抱いている悩みや疑問へのアドバイスをいただいた。

５　本事業が本校にもたらしたもの

これまでに行ってきた指導法からの大きな転換となる本実践をゆるやかに導入して、東條氏のご指導を仰いだことが、教職員が見通しをもって実践に取り組むことにつながり、主題に迫るための大きな手立てとなった。

東條氏は、２月に行った次年度の努力点の方向性を決定する全体会にも参加してくださった。次年度にＰＢＬを半歩前進させたいという教職員の思いに合わせて、よりよい手立てを提案してくださり、実りある会となった。また、会の最後には、次年度から始まる「キャリアタイム」とＰＢＬの関連についても助言をいただいた。両者をうまくクロスさせた年間計画ができあがり、４月以降に相乗効果を生み出すことが期待される。

次年度は、１学期から実践を開始することとなる。乗り越えるべき壁として総合的な学習の時間の年間計画や各学年の実践計画の見直し等があげられるが、今年度の東條氏からの学んだことを引き継ぎ、乗り越えていきたい。

目次へ

研究主題	自ら思いを発し、考えを表現する子の育成		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立志段味西小学校	校 長 氏 名	石原　清丈

グローバル化が加速する今日、児童には言語や文化、ルーツなど、多様な人とのかかわりを通して学び、自分の思いを発したり考えを表現したりすることができるようになってほしいとの願いから、本校では、６年生の総合的な学習の時間に国際理解教育を柱として学習を進めている。そこで今回は、その６年生を中心に研究を進めることにした。

はじめに、他国の様子を知る前に自国の歴史を詳しく知るため、１学期には社会科の発展学習として、縄文・弥生・古墳時代について、自分たちで調べたい時代やその内容を決定してグループを作り、それぞれ調べ学習を行ってパンフレットにまとめる学習をした。そしてパンフレットにまとめた内容については、学級内で発表し合うだけでなく、日頃からお世話になっている近隣図書館の司書さんにもお越しいただき、発表会を行った。司書の方から、発表内容や作成したパンフレットの内容について褒めてもらったり、改善に向けたアドバイスをもらったりしたことで、資料管理や作成という観点から新たな学びを得ることができた。作成したパンフレットは、一定期間図書館で展示してもらえることが決まったため、児童は自分たちが調べてまとめた内容が、より多くの人に正しく伝わるようにと、アドバイスを基に修正作業に取り組んでいった。


【司書の方へ発表する様子】



【作成したパンフレットの一部】

さらに学級では、「縄文・弥生・古墳のどの時代が幸せであったか」という正しい答えが明確に存在しない問いについて考え、共有する場を設けた。調べ学習の内容を基に、児童は自分なりの根拠を探し、思いを発することができるようにした。これらの学習を通して、児童は自分なりの思いをもち、どのようにすれば相手にきちんと伝えることができるのかということを考え、グループのみんなと協力しながら、個人やグループの課題解決に向けて取り組むことができた。

２学期には、中国の民謡楽器である二胡の演奏家の方々にお越しいただき、演奏鑑賞会を実施した。中国の楽器で演奏する日本の曲をうれしそうに鑑賞したり、演奏体験を通して弦を弾いて音を出すことの難しさを体験したりすることができた。会の中で演奏家の方から、自国の文化を大切にして継承していきたいという思いや、楽器を通して中国と様々な国とをつなぐ架け橋になりたいという思いで活動を続けている


【演奏鑑賞会の様子】

という話を聞いた。これをきっかけに、児童はこれから自分がどのように生きていくかを考えるきっかけとなった。

また、この演奏鑑賞会を機に、本校と南京市にある小西湖小学校の６年生とがつながるご縁をいただいた。そこで交流に向け、まずは自己紹介カードを作成し、互いに送り合うことにした。児童は、相手に少しでも伝わるようにと、好きな食べ物や将来の夢などを、英単語やイラストを交えながらカードを作成していった。やがて小西湖小学校から、本校からのカードが手元に届いたという知らせを受けると、児童はとても喜び、実際につながっているということを実感した様子で、この後に続く交流に、より期待を高めていった。



【小西湖小学校へ送ったもの】



【本校からの手紙を受け取った小西湖小学校の様子】

３学期にはWEBで直接交流を行うため、冬休みに両校の職員でWEB会議を行った。会議では、直接交流で「学校紹介」「名古屋（南京）の紹介」「大切にしたい日本（中国）の文化」「将来の夢」などを中心に行うということ、今後の具体的な準備、交流学習を通して目指す児童の姿などについて確認した。児童にとって有意義な学習にするため、両校の職員で直接やり取りができたことは、大変有意義なことであった。

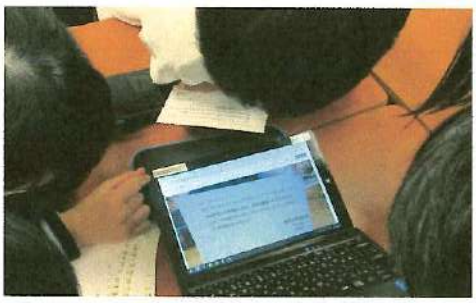


【職員によるWEB会議の様子】

小西湖小学校からからも、中国の旧正月に合わせて年賀状と正月飾り、学校紹介などが届いた。テレビの映像やインターネットから情報を得たときとは違って、実際に本物を見て触れられるということは、児童にとって貴重な経験となった。届いたものを紹介すると、児童は翻訳機能を活用しながら、中国語で書かれたメッセージを熱心に読んでいた。そして、日本と中国の年賀状の書き方の違いに気づいたり、学校の様子を見て、日本の学校との違いに気づいて疑問を抱いたり、旧正月について自分で調べたりしていた。直接交流に向け、伝えたいことや聞きたいことを児童が自ら端的にまとめ準備を進めている様子から、ますます意欲が高まっていることが感じられる。今後も、多様な他者とのかかわりを通して見聞を広め、自ら思いを発し、考えを表現する子の育成に取り組んでいきたい。



【小西湖小学校から届いた年賀状など】



【翻訳機能を使って届いた手紙を読む様子】

目次へ

研究主題	主体的に学習できる児童の育成		
副　　題	～　探究的な学びのサイクルの繰り返し　～		
学 校 名	名古屋市立西城小学校	校 長 氏 名	石田　寛一

1　実践の概要

（1）実践のねらい

探究的な学習の展開（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）を基本とし、子どもたちが１１月中旬に行われる学習発表会に向けた生活科・総合的な学習の時間の中で、主体的に、また他者とともに協働的に学習に取り組むことができるようにする。

（2）実践の方法と評価

①　実践の方法



児童が主体的に学習に取り組むことができるように、また、目的や方法に応じて自分でピア（＝グループ）を選択して協働的に学習に取り組むことができるように、ロイロノート・スクールの様々なシンキングツールを用いて、事象や知識、自分の考え等を整理させる。

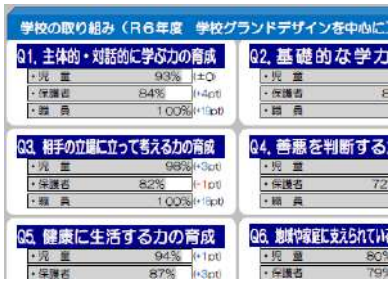
【写真：ロイロノート・スクールのシンキングツールを使って協働学習に取り組む児童の様子】



各学年や学級で、学校教育努力点を意識した授業実践を行ったり、大学教授を招いて授業参観を行ったりし、絶えず検討を繰り返し、年間を通して継続性のある実践となるよう努める。

【写真：特別支援学級において学校教育努力点授業の実践に取り組む様子】

②　評価



学年・学校だより、学校評議委員会等で学校教育努力点の取り組みを地域や保護者に知らせるとともに、学校評価アンケート（教職員・保護者・児童）の中に学校教育努力点に関する評価項目を設け、取り組みの自己評価、他者評価を行う。

【写真：学校教育努力点に関する学校評価アンケートを載せた学校だよりの一部】

2　実践例

探究的な学習の展開のサイクルを継続的に回すために必要十分な【課題の設定】に重点を置き、児童の主体的な学びのきっかけとした。

学　年	【課題の設定】のきっかけの例
1　年	生活科の授業で取り組んだシャボン玉をもっと大きく膨らませたい、いろいろな道具を使って作ってみたい。
2　年	生活科の授業で育てることになった野菜を大きく育てたい、育てた野菜をおいしく食べ（てもらい）たい。
3　年	学校医さん等の出前授業を受けて、学校のみんなの健康状態が気になったから、アンケートを取って調べ、健康意識を高めたい。
4　年	猛暑で全然体育ができない。このままだと体育ができないから、どうにかして自分たちの手で温暖化を止めたい。
5　年	社会で学んだ過去の風水害の歴史や昨今の自然災害の現状を受け、自分たちの町にもいつかくるであろう災害から身を守る術を知りたい。
6　年	校外学習先で感じた歴史の不思議や面白さ、地域の方の出前授業で学んだ学区の歴史等から、みんなが知らない学区や学校の魅力を調べたい、伝えたい。

3　実践の成果と課題

○　探究的な学習の展開のサイクルの【課題の設定】を内発的なものにしたことで、ピアを変えながら情報を収集・整理したり、まとめるために課題に立ち返ったり、児童一人一人が興味関心をもって主体的に、協働的に学習を進めることができた。

●　シンキングツールをうまく活用することができず、知識や情報をもてあます児童も見られたことから、他の教科でも活用する機会を設けるなど、継続的に活用していきながら使い方を定着させる必要があると感じた。

4　実践を終えて

本年度は学習発表会という目的がはっきりしていたため、ゴールに向かう過程において、児童が解決したい、解消したいという気持ちになり、主体的・協働的に学習の展開のサイクルを回すことができた。今後は、教授から学んだ、内発的な課題の大切さや導入での工夫、知識を整理するための思考ツールの使い方等を、他教科にも生かしていきたい。

また、知識や情報の集め方、まとめ方にはまだまだ課題が見られたので、探究的な学習のサイクルを回す学習方法を児童が確立できるよう、支援・助言していきたい。





目次へ

研究主題	ＩＣＴ機器を効果的に活用した授業、委員会、ＰＴＡ活動		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立守山東中学校	校 長 氏 名	相原　剛

1　研究主題設定の理由

本校の視聴覚教室である「シアター守東」のＩＣＴ環境面での整備を進めることで、授業や生徒委員会、ＰＴＡ活動等において効果的に活用することができ、より充実した教育活動の実現が期待されると考えたため。

2　実践計画

(1) 授業における実践

大型スクリーンとアクセスポイントを活用した単元構想を行う。国語科の授業において、教科書を読んだり資料集を見たりするだけでは分かりづらい資料について、動画や立体的な実感を伴ったイメージをさせることで、作品の内容解釈にやそれに基づいた自分の考えの形成につなげられるようにする。

(2) 生徒委員会における実践

委員会活動の中に大型スクリーンとアクセスポイントを活用する場面を設定する。各学級の代表者による提案や話合いの場面でタブレット端末を用いることで、即時的な意見交流が可能になり、より活発で効果的な提案や話合いにつなげられるようにする。

(3) ＰＴＡ活動における実践

家庭教育セミナーをシアター守東で行い、大型スクリーンとアクセスポイント、ステレオを活用する。本校の卒業生である映画監督オオタヴィン氏の作品「いただきます　ここは　醗酵の楽園」の視聴を通して、食育についての理解を深めることをねらいとする。

3　実践の様子

(1) 授業における実践

第１学年国語科の授業では、小説「少年の日の思い出」の学習において、作者の人生観や作品構成の確認、チョウに関わる専門用語の共通理解等を行った。

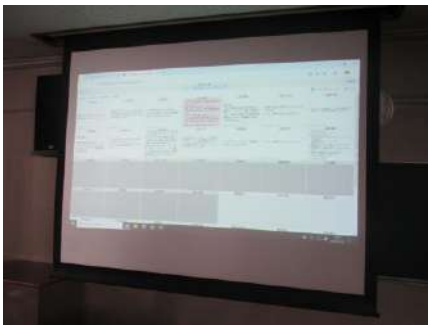
作者の人生観については、動画を視聴させたことで、ドイツの歴史的背景を把握させることの一助となった。作品構成の確認については、パワーポイントでまとめた資料を全体へ提示したことで、過去の回想場面や人物の相互関係、語り手の存在について踏まえさせることができた。専門用語については、動画を視聴させたことで、「ヤママユガ」や「展翅」、「胴乱」といった言葉をより



具体的にイメージさせることができたと考える。

もちろん、紙面に印刷された文字や絵から自分の想像力を伴わせて読み取ることは大切な力である。その一方で、動画から細かな動きやわずかな音を感じ取ることも同様に大切な力であると考える。ＩＣＴ機器の活用により、子どもたちの興味関心が向上している様子は、その後の授業への取組からも見て取ることができた。

(2) 生徒委員会における実践



１月に行われた生徒議会では、「３年生を送る会」の企画について話合いを行った。

始めに、各学級の室長が自分の考える企画をタブレットＰＣ上へ入力した。次に、座席が隣同士のペアで企画を読み、互いの企画についてアドバイスをし合い、相手からもらったアドバイスを基に自分の企画の見直しを行った。次に、４人グループに分かれてさらに交流を行った。このグループは、各自が入力した企画内容別に編成されており、話題の焦点が絞られたことによって、より交流が深まった。最後に、グループで集約した企画案を提出箱に入れた上で、全体交流を行った。

実践を通して、タブレットＰＣを通した意見交流を行ったことで、即時的な反応が可能となり、活発な意見交流につながったと考える。入力された文字だけを見つめるだけではなく、インターネット検索をしてよりよいアイデアを模索する姿も見られた。

(3) ＰＴＡ活動における実践



家庭教育セミナー当日は、本校の保護者だけではなく、同ブロックの小学校の保護者も参加し、盛大な会となった。会の最後に行ったアンケートへの記述によると、映画の内容もさることながら、家庭では実現が難しい大型スクリーンとステレオからの大迫力の映像と音声も、大変好評であった。保護者からは、「改めて我が子とも食育について話し合いたい」「来年は続編を見てみたい」といった声があった。

保護者の声にもあるように、非日常性が感じられたことで、より没入感が増したと言える。そのことが、「食育」についての興味関心の高まりや理解の深まりにつながったと考える。

４　研究のまとめ

課題としては、約２００人の生徒のアクセスが集中した際に、インターネットの通信速度が落ちたり、作業画面がフリーズしたりする場面があった。スムーズに学習活動が進められるよう、ハード面での改善を学校ＤＸ推進課に要望していきたい。

ＩＣＴ機器の活用が可能となったことで、「シアター守東」は単なる視聴覚教室ではなく、情報収集・発信の拠点として生まれ変わった。子どもたちや保護者、教職員のために今後も更に環境整備を進めていきたいと考える。

目次へ

研究主題	豊かな人間関係づくりを目指す児童の育成		
副　　題	～ことばの力を高めることを通して～		
学 校 名	東丘小学校	校 長 氏 名	加藤凡夫

1　実践の概要

本校では、昨年度までの３年間、主体的に学習に向かう子どもの育成を目指し、自己評価や相互評価（ワークシートやチェックシート、ＯＰＰシート、ハンドサインなど）を取り入れた振り返り活動の充実を図ってきた。その結果、子ども自身が学習前後の変化に気付いたり、学んだことを次の学習に生かしたりする姿が見られるようになった。しかし、振り返りや話し合いをする中で、自分から声を掛けることができない、使う語彙が少ないなどの子どもの姿が見られた。

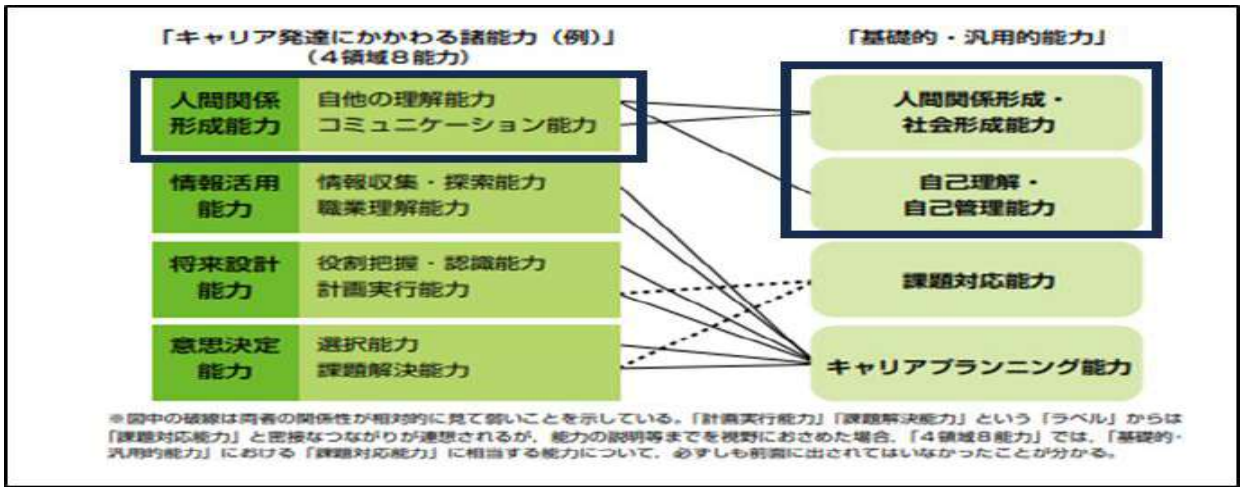
そこで、今年度は、「ことばの力」を高めることで、様々な人々とコミュニケーションを図ったり、自分や相手の理解を深めたりすることができるようにする。「ことばの力」とは、国語科での、話す・聞く力、語彙力、他教科や学級活動での、自他の理解能力、コミュニケーション能力（キャリア発達に関わる能力）などのことである。

「ことばの力」を高めることで、他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、豊かな人間関係を築くことができるようになると考える。

2　研究推進の重点

(1) 自他の理解能力・コミュニケーション能力を高めるために

文部科学省「キャリア教育とは何か」に書かれている「職業観・勤労観を育むためのプログラムの枠組み（例）」の「人間関係形成能力」の内容を参考に、各学年の発達段階や実態に応じた内容の実践を行う。公開授業の教科は、学年統一でなくてよい。



(2) 児童の実態把握（自他の理解能力・コミュニケーション能力）

各学年で目指す子どもの姿を決め、簡単なアンケート調査（５月・12 月頃）をして実態・変容をつかむ。また、教師による行動観察で、児童の変容を具体的に捉える。

3　実践の内容

⑴ 実践例「無人島ＳＯＳ」（６年）

13 個のアイテムの中から無人島で生き延びるために必要なアイテムを４個選ばせるという実践を行った。

まずは一人一人が個人で４個選び、その後４人程度の小グループで４個選び、どうしてその４個になったのかを学級全体で共有するという実践の流れだった。

根拠を伴った自分の考えをもち、その考えを他者へ伝えるという実践を行ったことで、「ことばの力」を高めることができた。

⑵ その他の実践（手立てなど）

・　表情カードを使って、自分や他者の考えを表明することで、自分の考えをうまく言葉にできない児童でも参加できるようにした実践。

（２年：道徳科）

・　国語辞典を使って、一つの語彙に複数の意味があることを捉えさせ、クラゲチャートを活用して、語彙力を高めることをねらった実践。

（３年：国語科）

・　コミュニケーションスキルを高めることをねらい、グループワークを用いてソーシャルスキルを身に付けるようにした実践。

（５年：特別活動）

4　成果と今後の課題（成果：○、課題：●）

○　語彙力やコミュニケーションスキルなどの「ことばの力」を高めることは、人間関係を構築し、主題である豊かな人間関係づくりにつながった。

●　主題に迫るためには話合いをすることが必要であり、さまざまな手立てを用いて目指す子ども像に迫ったが、話合いが停滞することがあった。

目次へ

研究主題	主体的に取り組む子どもの育成		
副　題	―なぜだろう？知りたい！やってみたいがあふれる授業を目指して―		
学校名	名古屋市立平子小学校	校長氏名	塚田 敏弘

本校では昨年度まで、国語科や算数科における学習力を高めるための研究を行ってきた。これらの研究を通して、子どもの読み取り力や思考力を高めることができた一方で、自らの学習の成果が実感できていなかったり、自ら学習に取り組むことができなかったりして課題があった。そこで今年度の学習は、「主体的に取り組む子どもの育成」を目指して実践を行うこととした。

児童が学習において、主体的に取り組むことができるように、教員向けの現職教育として愛知教育大学の磯部征尊先生に「学級経営」と「主体的に取り組める授業づくり」をテーマに２回の講演を行っていただいた。

「学級経営」をテーマにした現職教育では、子どもたちがやる気を高めていける学級づくりについて学んだ。はじめは話しやすいように話型を使って発表の練習を行うとともに、心情を表すときは「楽しい」「わくわくする」「ほっとする」等、人物を表すときは「明るい」「勇気がある」「前むき」等どんな言葉を使って表現するといいのかを子どもたちに具体的に説明するとよいことを学んだ。言葉について学んでいく段階では、教室に様々な表現の言葉を種類ごとに一覧にして掲示していくといいことが分かった。話し合いは特別活動の時間などに行い、学級をよりよくしていくための話し合いから、楽しい時間や安心できる時間が生まれるとよい好循環の学級経営が生まれることを話していただいた。また、「ちゃんと○○しなさい」という教師がよく話しがちな言葉の縛りについてお話していただいた。「ちゃんと」という教師の言葉や投げかけは、ときに具体性のないあいまいな指示につながり、また責められる雰囲気をつくることに繋がる可能性があることを理解していく必要性があることが分かった。またこの講演を通して、子どもたちの主体的な姿勢をつくっていくのは、教師が子どものために新たなことにチャレンジする姿勢や、職員室内であたたかい言葉のやりとりがあり、協力し合う体制がつくられているかが子どもに伝わるため大切であることが分かった。こういった学級づくりの工夫により、子どもたちが安心して楽しく過ごせるようにすることで、より主体的に学習に取り組む学級の土台をつくることができるという実感をもつことができた。実際にこの講演の後に、留意点をおさえて学級経営を見直した若手教員は、「前よりも子どもたちの笑顔が増えました」と明るく話をしていたのがとても印象的であった。

「主体的に取り組める授業づくり」をテーマにした現職教育では、教師が話しすぎない授業の大切さを学んだ。「港区には何があるかというと・・・」「港があります」と返せるように話し始めるなど、子どもたちに話すときは、必ず言葉をキャッチボールのように教師と子どもがお互いのやりとりで授業を進行していくことが大切であることを学んだ。こうすることで、教師が一方的に話す時間が短くなり、子どもがより主体的に学習に参加できるようになることが分かった。また大事なことや全員が答えられるようなことを子どもが答える形にして必ずやりとりの中で授業を展開していくといいことも教えていただいた。また様々な板書の例を紹介していただき、ねらいとまとめの関係について説明していただいた。まとめは、ねらいからの逆算で考えるとよいことを学んだ。言葉のキャッチボールを意識した発問やまとめの逆算からねらいを作っていく。また、ねらいを子どもたちに作らせることを意識した投げかけは実際に講演の中で演習として練習に取り組んだ。「スーパーマーケットはお客さんのために様々な工夫をしている」というまとめから、「スーパーマーケットは誰のために工夫をしているのだろうか」というように、ねらいは「いつ」「だれが」「どのように」の部分を考えられるように意識してつくるとよいことを説明していただいた。そして、子どもたちが学習した成果を実感できるようにして、次回の授業への意欲を高めていけるような振り返りのポイントを教えていただいた。子どもたちはただ振り返りを行うと反省だけを記述して、できなかった実感だけが残りがちなので、今後やりたい意志の表明など、感情を表す言葉と共に記

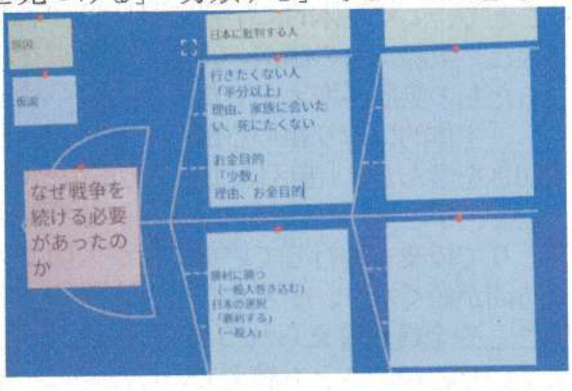
述するとよいこと、よい振り返りの内容を共有するとよいことを学ぶことができた。子どもの思考を促すために、課題や実験がどうなりそうかを予想することの大切さを学んだ。予想することで学んだことの中から大切なことを見落とさずに進めることができることや今後の学習をどうやって進めていくとよいかを一人一人が考えるきっかけになることが分かった。この講演で学んだことを今後に生かせるように実際に今までつくった指導案をもちより、より主体的に取り組むことができる授業にしていくための改善方法を考えた。講演をもとにして、授業を改善できたため、「より楽しい授業にしていくことができると感じた」「子どもがもっとやる気をもって取り組める授業ができそう」と話す教員の姿があった。

以上の２回の現職教育を行うことによって、「主体的に取り組む子どもの育成」を行う際の留意点や実際の指導方法を全教員で確認することができた。



また出前授業や各学年の話し合いの活動がより充実するように、「Bluetooth スピーカー」と「USB ケーブル」を活用し、教材や各班の発表内容を撮影した動画等を教室だけでなく、体育館や運動場でも大きな音量で視聴することができるようになった。そのため基礎的な知識や各班の学習内容を共有した上で、話し合いの活動を行うことが可能になり、「警察の人の話を聞いて、どうやって犯罪が行らないようにしているのかが分かった。犯罪に合わないように通学路の危険個所を確認して教えてもらったことに気を付けていきたい」「緑区の歴史を聞いて、学区にある道が江戸時代につくられたものであることが分かった。常夜灯など、その頃からあるものを実際に調べてみたい」「学校の中のごみの内訳を調べるという取り組みが分かりやすかったので、家庭のごみも調べてみたい」など、考えを深めることに繋がり、児童の学習活動がより主体的になった。校外学習においても、各児童が自分の学習における学習のねらいを明らかにして、調べる点を意識して見学したり、質問したりすることができた。学習の成果をまとめて、授業参観で発表した学年もあり、保護者から、「よく調べられていて素晴らしかった」「緑区の歴史を詳しく知ることができた」等の感想をいただくことで、学習の成果を実感することができた。

発表を行う際には、言葉で話すだけでなく「わくわくパフォーマンス課題づくり［明治図書］」の書籍で紹介されているシンキングツールを「共通点を見つける」「分類する」等といった思考のねらいに応じて、そして学年の実態に応じてツールの種類を選択して活用することができた。シンキングツールを活用することで考えを整理したり、深めたりすることができ、また発表の際にも言葉で話すだけでなく、考えの根拠や流れを見える化して発表することができた。活発な話し合い活動を行うことができた児童は、「今後は各国のごみ減量の取り組みを比べてみたい」「各国の食文化の違いがどうして生まれたのかを調べてみたい」など今後の学習活動への意欲をより高めて、主体的に調べ学習を行うことができた。



今年度の実践の学習における子どもたちの感想では、「自分の考えたテーマを一生懸命に調べて深めることができた」「各国の文化の違いを詳しく知ることができた」など、自分たちの学習の成果に納得できた子どもが多くいた。２学期末に行ったアンケートにおいても、「自ら進んで学習することができましたか」という質問項目に対して、「できた」「どちらかというとできた」と答えた子どもが合わせて９３%いたことは大きな成果だと言える。昨年度よりも家庭での自主学習に取り組む子どもも増えてきた。今後も今年度の成果を生かして、より子どもたちが主体的に取り組むことができる授業づくりを発展させていきたい。そのため、各学年の手立てや工夫を共有し合い、よりよい授業づくりを行うことができるようにしていきたい。

目次へ

研究主題	自分らしく学ぶ黒石っ子の育成		
副　　題	最適な学びの方法を決める力の高まりを目指して		
学 校 名	名古屋市立黒石小学校	校 長 氏 名	岡田　理

1　研究主題について

昨年度、本校では「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して実践に取り組んだ。成果は、児童自らが学びの方法を決めることで学習意欲が高まり、自分の力で課題を解決しようとする児童が増えた。加えて、友達と思いや考えを共有しながら、なかまとともに学ぶ姿が多くの場面で見られた。一方、「個別最適な学び」に関して、児童が自分で決めた学びの方法が、必ずしもその児童にとって最適ではなく、ある程度の教師の指導が必要であったという課題もあがった。

そこで本年度は、「個別最適な学び」に焦点を当て、最適な学びの方法を決める力を高めることで、自分らしく学ぶ黒石っ子の育成を目指したい。

2　研究の重点

児童が最適な学びの方法を決める力を高め、自分らしく学べるようにするためには、以下の２点が重要であると考える。

① 児童が自分で学びの方法を決め、決めた学びの方法が最適であったかどうかを振り返ること。
② 教員が「個別最適な学び」と「ナゴヤ学びのコンパス」への理解を深めること。

3　実践の内容　①

(1) ２年　算数「たし算とひき算のひっ算」

(2) 目標

自分に合ったコースを選択することができる。

(3) 実践の様子

第２学年では、算数科で「黒石タイム」という時間を設定している。「黒石タイム」では、学習の定着を図るため、「ヒントなし」「少しヒントあり」「ヒントあり」の３段階にレベル分けされたプリントの中から、児童が選んで学習に取り組む。

本時の導入では、前回までの「黒石タイム」と同様に、自分で選んだプリントに取り組むことを教師が全体に伝えた。児童はこれまでの経験から、戸惑う様子もなくプリントを選ぶことができていた。そして、問題に取り組む時間は、多くの児童が落ち着いた様子で目の前の課題と向き合っていた。その間、教師は机間巡視を行い、個別の指導を行った。

プリント学習が終わった児童は、タブレットを活用して自学に取り組むことになっている。その際、黒板に名札を貼り、「ミニ先生」として出動できることを示す。教師は常に全体を見渡し、支援が必要と感じた児童にはミニ先生を派遣する。教師は児童と児童をつなぐ役割も果たしていた。



【自分で選んだ学習プリントに取り組む様子】

本時のまとめでは、自分が選んだプリントの難易度は適切だったか、次回の「黒石タイム」では、どの難易度に取り組みたいか等の振り返りを行った。児童の振り返りには「集中して頑張った」「次は『ヒントなし』に挑戦したい」等の記述があった。

(4) 成果と課題

○　問題の難易度を自分で選ぶことで、多くの児童が主体的に学習に取り組むことができた。

●　臨機応変な個別指導や児童をつなぐ役割等、教師の経験と柔軟な対応が必要となる。

4　実践の内容　②

(1) 算数「垂直と並行」

(2) 目標

自分で選択した学習内容に取り組み、その成果を振り返ることができる。

(3) 実践の様子

第４学年でも、算数の時間に「黒石タイム」を行っている。第２学年と異なる点としては、「一人で」「友達と」「先生と」や「教科書で」「発展プリントで」「タブレットで」というように、学習方法の選択肢が広がっている点である。

本時の導入では、次時に行う「確認テスト」のために学習を進めることと、これまでに学習した「垂直と並行」の単元には「垂直と並行のかき方」や「平行四辺形・ひし形」等の学習内容があることを教師が説明した。その後、自分が選んだ学習方法をタブレットに打ち込み、教師に送った。課題に取り組む時間には、一人でタブレットの学習アプリに取り組んでいる児童や、友達と相談しながら四角形の作図に取り組んでいる児童などさまざまであった。

本時のまとめでは、確認テストに向けてレベルアップができたか、具体的にどのような成果があったか等の振り返りを行った。児童は「教科書で復習ができた」「(確認テストまでに) 平行四辺形のかき方を練習したい」等の記述があった。



【自分で立てた計画に沿って、学習に取り組む様子】

(4) 成果と課題

○　「黒石タイム」という同じ名称の学習時間は、児童に自分のペースで落ち着いて学習できる時間という安心感を与えている。

●　学年が上がるごとに児童間の学力の差も開いていってしまう。そのため、個々の目標を設定することも必要となり、教師の児童理解がますます必要となる。

5　来年度に向けて

今年度の実践は、どの学級でも年間を通して継続的に行っていることに意義がある。児童にとって、「いつもの学習」となっていることが、落ち着いて学習に取り組めている大きな要因である。

ただ、実践が特定の教科に偏ってしまっていることは課題である。「いつもの教科のいつもの学習」が他教科においての意義のある学習になるよう、工夫を重ねていきたい。

目次へ

研究主題	自己学習力の育成		
副　　題	３つの型の自由進度学習を取り入れることを通して		
学 校 名	名古屋市立神の倉小学校	校 長 氏 名	豊島　斉

１．研究のねらい

中教審答申報告書(令和３年)では、「子供たちに自ら学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら粘り強く取り組む態度を育成すること、つまり『指導の個別化』が必要である」と述べられている。

そこで、本研究では、子どもたちが、①自身の興味・関心、②学習のペース、③習熟度に応じて学習計画を立て、自ら学習を進めていく「自由進度学習」に着目した。そして、従来の一斉授業と「自由進度学習」とのそれぞれのよさを生かしながら、学習内容の定着に効果的だと考えられる単元の一部に「自由進度学習」を取り入れた実践を行っていく。

課題や学習活動を選択できる柔軟な授業を教師が提供することによって、子どもたちは学習の進め方を考えて取り組み、「自分で選びながら取り組めたからよく分かった、できた」と学習内容が定着した経験を積み重ねる。その中で学ぶ楽しさや充実感・達成感を味わうことにより、将来にわたり、自分で学習を進めていくことができる力（＝自己学習力）を育成できるものと考える。

２．研究の手立て

「自由進度学習」は、子どもたちの興味・関心や、学習のペース、習熟度等に応じて、子どもたちが自分に必要な課題や学習活動を選択して取り組むことができる学習と定義する。そして、子どもの自己学習力を育成するために、下記の(1)～(3)の三つの型の自由進度学習を単元の中に位置付ける。

(1) 課題選択型（興味・関心に対応）

興味・関心や自身の立てた問いなどに対応し、子どもが課題を選択できるようにする。全ての課題に取り組み、取り組む順を選択する場合と、いくつかの課題のみ選択して取り組む場合がある。

(2) 時間設定型（学習のペースに対応）

学習のペースに対応し、子どもがそれぞれの学習活動に掛ける時間を設定できるようにする。重点的に取り組みたい活動を明らかにして計画を立てたり、一つの活動で身に付けるべき内容の習得を確認して、次の活動に移ったりする。

(3) 目標設定型（習熟度に対応）

習熟度に対応し、子どもが学習に取り組む目標を設定できるようにする。目標を達成するために必要な課題や学習活動に取り組むことで基本的な学習内容の定着を図るとともに、習熟度に応じ、資質・能力を高められようにする。

３．実践について

研究実践は、全学年が年間を通して、授業や学習活動に取り入れて行った。各学年の実態に合わせて、教科や単元をそれぞれ選び自由進度学習に取り組んだ。

１年生は、「目標設定型」の自由進度学習を実践として、タブレットを使って計算や漢字の学習を行った。子どもたち自身が、自分の理解度に合わせて、学習の単元を選択し、自分のペースで学習を進めることができた。また、「課題選択型」を活用した生活科の学習の実践では、秋のおもちゃを作るために、友達と話し合って必要な物を調べ、おもちゃ作りの計画書を作成した。子どもたちは、同じ課題をもつ仲間同士で協力し、作業を進めていくことで、達成感や充実感を得ることができた。

２年生は、「目標設定型」を活用した算数科「かけ算」の学習では、子どもたちが自分の目標を達成するために必要な学習方法を選択し、自分で学習計画を立てることができた。学習への理解を深めるとともに、意欲も高めることもできた。

３年生は、「目標設定型」を体育科の水泳学習に活用し、子どもたちが各自の目標に応じて、４つのコース別練習方法を選択し、取り組んだ。練習後の振り返りでは、子どもたちが自分で気付いたことをもとに、次回の目標を立てた。また、算数や社会の学習では、「課題選択型」を活用し、自分が知りたいことや分からないことを調べ学習や習熟度別の課題を選択して学習を進めていき、理解を深めることができた。

４年生では、社会科の学習で「課題選択型」を活用し、子どもたち自身で調べ学習の計画を立てることができた。また、図画工作科では「時間設定型」を活用したり、体育科では「目標設定型」を活用したりするなど、様々な学習に自由進度学習を取り入れ、子どもたちは意欲的に学習に取り組むことができた。

５年生では、「課題選択型」を活用して社会科の学習に取り組んだ。子どもが自分で選択した調べ学習の課題を、誰と、どのように調べていくか、調べ学習の計画を立てることができた。どの単元でも同様に、子ども自身で調べる方法や課題を選択し、探求していくことができた。

６年生では、体育科の学習に「目標設定型」を活用した。特に「マット運動」の学習では、技の習得に向けて、難易度別の練習場を設定し、子どもたちが自分の目標に向けて、練習内容を選択することができた。また、図画工作科の学習では「時間設定型」を活用した。作品の完成に向けての制作時間の見通しをもつために、制作過程の全体計画を子どもたちがそれぞれ作成して取り組んだ。音楽科の学習でも「時間設定型」を活用し、時間を有効に使って、計画的に子どもたちが歌唱のパート練習に取り組むことができた。

各学年が実態に応じて、３つの型を有効に活用し、自由進度学習に取り組み、子どもたちの自己学習力の育成に努めることができた。しかし、自己学習力を定着させるためには、今後も継続的な取り組みが必要である。

目次へ

研究主題	他者とともに生きる		
副　　題	人権学習の各分野別課題の学習を通して		
学 校 名	名古屋市立鳴海中学校	校 長 氏 名	服部　太

1　はじめに

名古屋市の人権教育実践校である本校では、毎年、生徒会役員が中心となってテーマを決め、全校での人権学習に取り組んでいる。昨年度は「多様性」をテーマに設定し、「他者を尊重すること」について学級ごとに考えを深めた後、個人での標語創作を行った。複数年にわたる人権学習の取組によって、生徒は「自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めること」の重要性について知的に理解をしている。

本年度は、本校の生徒が「拉致問題に関する中学生サミット」に参加することになった。この機会を生かし、人権教育の分野別課題について全校で学ぶ機会を作りたいと考えた。また、分野別課題の学習を行う上で、生徒たちには「当事者の方と出会う機会」を設定し、リアリティのある人権学習を展開したいと考えた。昨年度まで全校で進めてきた生徒同士での人権学習によって育んできた人権意識の土壌に、同じ世界に生きる当事者との出会いを通しての学習を展開することで、他者とともに生きていく上での想像力が更に広がり、生徒の人権意識の涵養に資することを本研究のねらいとした。

2　研究の概要

⑴　全校で行う学習への動機付けの場の設定

個別の人権課題について全校で学習を進めるに当たり、全校での学習の動機付けの場を設定する。生徒会役員が中心となって毎年人権学習を進めてきた本校の実践を生かし、生徒主体での学習を展開できるよう生徒会役員と場の設定・運営を工夫する。その際、「拉致問題に関する中学生サミット」の参加生徒のサミットでの学びを全校生徒に還流できるようにする。

⑵　個別の人権課題について当事者の方から学ぶ場の設定

本校の学校規模を勘案し、学年別で個別の人権課題について当事者の方から学ぶ場を設定する。

⑶　全校で行う学習活動のまとめの場の設定

各学年での学習内容を全校で共有する場を設定する。その上で、生徒一人一人が一連の人権学習を振り返り、学んだことを言語化する場を設定することで、学習を価値付けられるよう工夫する。

上記⑴から⑶の人権学習を通して、生徒の主体的な運営の中で、生徒が多様な世界の在りように気付き、生徒の人権意識が高まり、他者の人権を尊重して生きていくことができる生徒を育む。

3　活動実践

⑴　人権生徒集会の開催



個別の人権課題について全校で学習を進めるに当たり、全校生徒への学習の動機付けとなるよう、生徒会役員の運営のもと、人権生徒集会を開催した。生徒会役員が「なぜ人権が必要なのか」という今年度の人権学習のテーマを設定し、全校生徒にテーマを問い掛けた。生徒会役員は隣の生徒同士で考えを伝え合うよう促すなど、活動場面を設定することで、全校生徒の思考が動くよう運営方法を工夫した。その中で、生徒は積極的に自分の考えを伝え合う様子が見て取れた。さらに、生徒会役員が個別の人権課題についてプレゼンテーションを行い、各学年で個別の人権課題について学ぶ人権講演会を行うことを周知した。その後、



「拉致問題に関する中学生サミット」の参加生徒が、個別の人権課題の一つである拉致問題についてプレゼンテーションを行った。「拉致問題について自分が学んだことをしっかりと伝えよう」という熱意のあるプレゼンテーションに、生徒は真剣に聞き入っている様子であった。集会後、生徒は各教室に戻り、「拉致問題について自分が考えたこと」をワークシートに記述した。

⑵　人権講演会の開催





各学年で異なる人権課題についての当事者の方を招いて、人権講演会を開催した。１年生は全国子ども福祉センターの方を講師に招き、「子どもの権利」をテーマに講演会を行った。２年生はＮＰＯ法人ＡＳＴＡの方を講師に招き、「性の多様性」をテーマに講演会を行った。３年生はＮＩＣ地球市民教室登録のメキシコの方を講師に招き、講演会を行った。講師の方の生徒の興味を引くような話しぶりとリアリティのある内容に、生徒は笑い声や驚きの声を上げる様子があり、引き込まれながら話を聞いていることがうかがえた。また講演の最後には、時間いっぱいまで生徒が講師の方に質問する姿があった。講演会後、生徒は各教室に戻り、「それぞれの人権講演会に参加して自分が考えたこと」をワークシートに記述した。

⑶　人権生徒集会の開催



各学年の人権講演会の終了後、全校での人権生徒集会を開催し、各学年の人権講演会の内容を生徒会役員からの紹介で共有した。その後、生徒は各教室に戻り、一連の人権学習で記述した自分のワークシートと他学年の人権講演会の内容を想起しながら、「個別の人権課題について自分が学んだこと」をグループで共有し、整理する活動に取り組んだ。各グループで模造紙を取り囲みながら、自分の考えを熱心に伝える姿や考えを書いた付箋を何度も貼り替える姿、相手の考えに触発され意見を述べ、他者との協働の中で問いを深める姿、が見られた。最後に一連の人権学習のまとめとして、

「人権はなぜ必要なのか」という問いに対して、一人一人が自分の考えを記述した。

4　実践の成果

「拉致問題に関する中学生サミット」参加生徒のプレゼンテーションと各学年での講演会後の生徒のワークシートの記述は以下の通りである。

○　自分たちは笑って過ごしているのに横田さんたちは北朝鮮で毎日苦しんでいるのかもしれない、その家族の人たちは毎日拉致に向き合って考えていると思うと、「過去にしてはいけない。一人ぐらいいいと思ってはいけない」と思った。その一人を大切だと思っている一人がきっといるから。だから家族も友達も知らない人でも、一人を大切にしたいと思った。

○　居場所のない子に居場所を作ってあげることはすごく大切だし、居場所ができるだけですごくホッとできる。そして話を聞いてくれる人がいるだけで、さみしくないと思える。子ども福祉センターがあるだけで、仲間が増えるし、居場所ができるのですごくいい場所なんだなと思った。

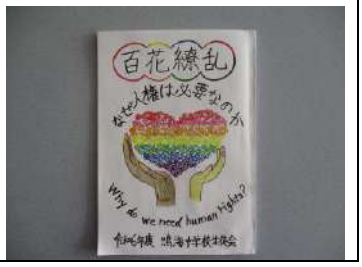
○　質問の内容は同じでも質問の仕方一つで相手の受け取り方が変わることが分かり、大事なのは内容もあるが、一番は相手のことを思えているか、理解しようと努力できているかどうかなんだと感じた。また、一人ができることは少ないが全体での雰囲気づくりだったり、その人の個性を認めれることができる環境づくりだったりが何よりも大切だと分かった。人権を守るために必要なことは、「知ることで変えることができる」という言葉を常にもって行動すること、そしてＡＬＬＹの考え方を知るだけでなく身に付けて相手に寄り添うことだと思った。

○　「外国人」という区別をせずに対等に接することが大切だと思った。もし自分が意見を言わせてもらえなかったらとてもつらいし、違う接し方をされたら自分を否定されたように感じると思う。自分が無意識にそういうふうに差別している、してしまうかもしれないのが一番怖かった。「無意識の差別」をしていないか気を付けたい。

生徒の記述からは、個別の人権課題の当事者の方の感情を共感的に受け止めようと想像力を働かせていることがうかがえる。また、「自分なりにできること」を見付け、学習を通して気付いたことを自分の日常の行動へと結び付けようという意思を読み取ることができる。当事者の方を招いての講演会が、生徒にとってリアリティのある人権学習となり生徒の当事者意識につながったと考える。また、学習の動機付けからまとめまでを生徒会が考案・運営し、各講演会を一連の人権学習につなげたことも生徒の人権意識の涵養につながったと考える

4　おわりに

「人権はなぜ必要なのか」という問いに対する生徒一人一人の考えは、人権冊子としてまとめ、全校生徒に共有した。次年度も今年度の成果を生かし、生徒の人権意識の涵養に資する実践を重ねていきたい。



目次へ

研究主題	生き生きと学び、学び合う児童の育成		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立西山小学校	校 長 氏 名	竹 中 剛 志

1　本校と児童の実態

本校は、児童数1114名。名古屋市一の大規模校である。教育への意識の高い文教地区で、学ぶ意欲の高い児童が多い。しかし、過大な規模のため、施設の手狭さ、器具等の不足など、ハード面が児童の意欲に追いついていない課題を抱えている。また、関心や能力、進度に応じた「個別最適な学び」を進めることができておらず、特に、「学習の個性化」については、「もっと自分に合う問題を解きたい」「難しいことを調べたい」など、児童の一人一人の高い意欲に適応した学びを進めてほしいという声が、児童からも上がっていることから、主体的に学び、学び合う児童の育成が喫緊の課題であると考えている。

2　活動・研究の目的

本校は、「生き生きと学び、学び合う児童の育成」をテーマに、子どもたち中心の学び、授業づくりに取り組んでいる。今年度は、自分に合ったペースや方法で学ぶために、「自己選択」「自己決定」しながら学ぶ活動を重点とした授業づくりに取り組む。また、子どもたちが生涯にわたって学び続けるための基盤となるための「未来を見据えたキャリア教育を核とした幼小中連携」にも取り組む。本研究を通して、主体的に学びに向かう態度を身に付けるとともに、自分自身と人とのつながりを大切にできる児童の育成につながると考える。

これまでに本校で培ってきた高い協働性を発揮して、全教職員の力を合わせて研究を推進する。

3　活動の内容

(1)　授業観・教師観を大きく変えるための協働性向上～学び・学び合う教師がモデルとなる～

教師が自身の授業観・教師観の大転換を図るためには、先進的な取り組みを学ぶことが不可欠である。大規模な本校では情報共有は意外に大変である。「幼小中連携」にかかわる情報や、今回、助成で購入した図書のリスト、市内外の授業公開や研修会などの情報、市の教育に関する情報などを共有するために「校内ポータルサイト」を活用している。また、校内での研修会を実施し、その研修を自分たちの授業づくりに生かした。１学年が５～６学級のため、「１つの授業をみんなで創る」形で取り組んだ。



【職員で情報共有できる校内ポータルサイト】

個々の教師が文献や研修会で得た学びを、学年に還元し、授業づくりにチャレンジできることで学年チームが活性化していった。教師一人一人が学び、学年で協働性を生かして授業づくりに取り組むことで、自分たちの姿が、児童の学びの姿につながるモデルとなる取り組みであった。

⑵　自分に合ったペースや方法で学ぶために、「自己選択」「自己決定」しながら学ぶ活動（実践：６年）

６年生体育の「とび箱運動」では単元の最後にグループ全員でとび箱の技を取り入れた演技「シンクロBOX」を行うことを見据えた授業を行った。単元の前半には、個人の力量を高める「パワーアップタイム」、単元の後半には、グループ全員でできる技を確認し合ったうえで演技構成を考える「シンクロタイム」を設定することで、自分に合った学びのペースや方法を選択し、生き生きと主体的に学習に取り組むことができるようにした。

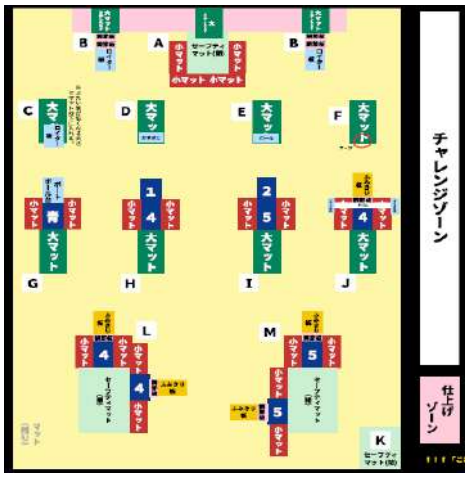
手だて1　パワーアップタイムの設定
　A～M の13段階の練習の場を用意する。また、それぞれの場がどのような習得段階の子どもに適しているかを伝えることで、自分に合った練習の場を自己選択・自己決定できるようにする。

手だて2　シンクロタイムの設定
　個人で習得した技(とび箱運動)やオリジナルの動き(マット運動)などを合わせて、チームごとの演技構成を考えさせる。その際、「チームの全員が活躍できる演技構成にする」というめあてを提示することで、自分だけでなく仲間の技の習得具合を把握させ、それぞれに合った技や動きを自己選択・自己決定できるようにする。

手だて3　ロイロノートの活用
　その時間に取り組んだ技や、成果と課題を振り返りシートに記述させ、ロイロノートで提出させる。また、「マイベスト開脚跳び」「マイベスト台上前転」として、基本的な技の動画をロイロノートに提出させることで、子どもたちの技の習得具合を把握できるようにする。さらに、動画については、前時に撮影した動画に本時の動画を連結して提出させることで、子どもたちの成長を見取ることができるようにする。



【「とび箱運動」の単元計画表】



【パワーアップタイムの練習の場の構成】

（実践の様子）
　それぞれの場がどのようなパワーアップをねらった場であるかを児童と共に確認した後、第１時の活動で明らかになった回転系の技について課題を振り返らせ、練習の場を選択させた。
　児童は、「両足で強く踏み切れるようにするために、Ｂで練習をする」や「とび箱の上で前転するのはまだ怖いから、まずはＧで練習をする」など、それぞれ自分の課題に合った場を選択し、練習していた。また、同じ場を選択している友達と関わり、「上手にできているよ。もう少し腰を高く上げてみよう。」とアドバイスをもらいながら練習に取り組む姿も見られた。台上前転や発展技のコツがつかめない児童に対しては、担

挑戦した技・動き（全て）	今日の成果と次への課題（よかったところ・よくしていきたいところ）
開脚跳び、台上前転、抱え込み跳び	率先してマットなどの準備をできたこと。
開脚跳び、抱え込み跳び	跳び箱を飛んだあとに勢いで前に足が進んでしまったり、足が開いて着地してしまったので次は、着地地点に足を閉じてしっかりと治まれるようにいきたい。
台上前転、しんしつ台上前転	しんしつ台上前転では、足うまく伸びなかったので上に伸びるように注意したい。
頭はね跳び、抱え込み跳び、開脚跳び、台上前転	頭はね飛びで、頭を付けた後きれいに着地につながらなかったので、次は着地に移行するときの動作に注意したい。

【子どもが活用する振り返りカードの例】

任が関わり、タブレットで本人の動きを撮影した動画を繰り返し視聴したり「NHK for school：はりきり体育ノ介」の動画コンテンツを視聴したりすることで、課題や改善方法を明らかにできるように支援を行った。

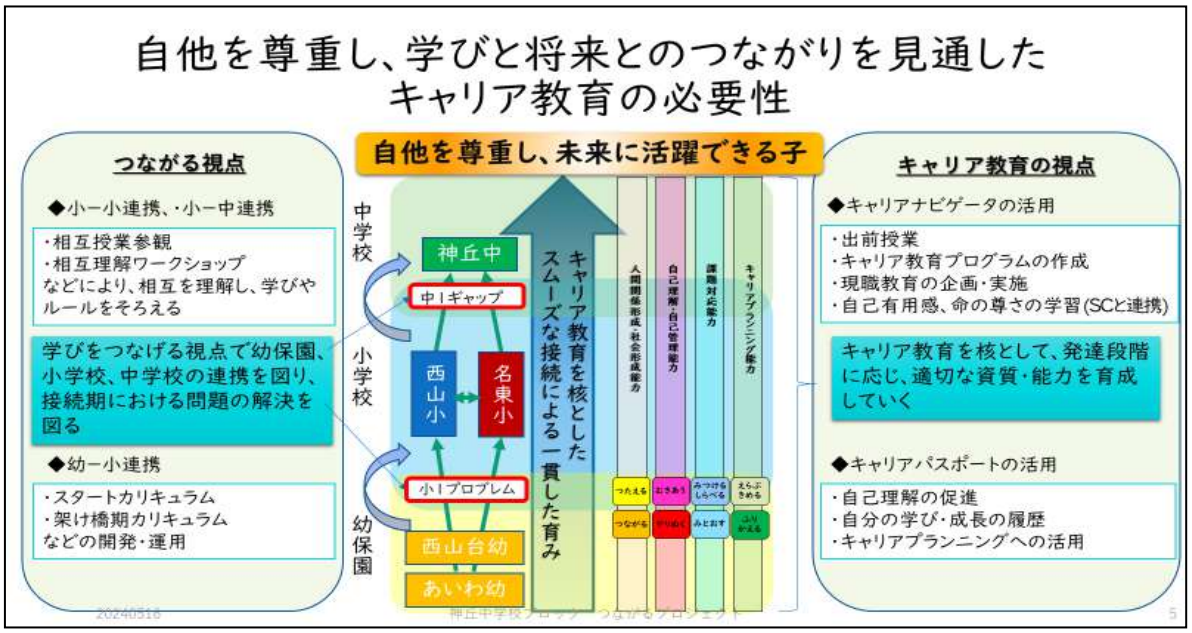
授業の最後には、「マイベスト動画」として自分の台上前転の動画を撮影させ、１時間での自身の成長を振り返らせた。児童は、「しっかりとおしりをあげて台上前転ができた。」や「伸膝台上前転では、まだ足が伸びていなかったから、上に伸ばすことを意識したい。」などと振り返りを記述し、本時の学習での成果と課題を振り返ることができていた。

⑶　幼稚園～小学校～中学校の学びをつなぐ幼小中連携

今年度より、本校の所属する中学校ブロックの５校園が、幼小中連携に取り組んでいる。市の教育施策である「ナゴヤ学びのコンパス」が令和６年度から始動し、目指したい子どもの姿を「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける」としている。子どもたちが「学び続ける」ためには、単一の学校園だけが、この理念に基づくだけでなく、一連の成長段階の中で常に「学び続ける」ことが重要であると考え、中学校ブロックの「中学校」と２つの「小学校」、そして、「幼稚園」がつながり、「学び続ける」ことができるようにした。

また、未来を生きる子どもたちが、将来の生活や社会と、現在の自分の学びや成長を結びつけ、社会的・職業的自立に向け学び続けるためには、「キャリア教育」の視点が重要である。

このようなの考えを基に、中学校ブロックのつながりを充実させ、幼保園、小学校、中学校、保護者、地域がつながり、その中で子どもたちを育むことを目指す取り組みをスタートさせた。



【中学校ブロック連携のコンセプト】

（実践①：「自校理解ワークショップ」）

上図のように、「つながる視点」と「キャリア教育の視点」の２軸で子どもたちの学びをつなげていこうと考えた。

初めに、各学校園で、全職員での「自校理解ワークショップ」を実施した。中学校常駐のキャリアナビゲータを活用し、研修内容も統一し、キャリア教育についての理解を深めるとともに、自校の子どもたち、学校、保護者、地域の強み・弱み・特性を整理し、理解を深めた。

本校だけでなく、本中学校ブロックは、すべて児童生徒数が１０００人ほどの大規模である

ため、教職員数も大変多い。そのため、普段から学年内の交流はあるものの、学校全体で交流する機会が少なく、全体でのミュニケーションや、コンセンサスをとることが難しい。

そこで、どの校園でも、学年が混ざるようにグループを決め、ワークショップを実施した。普段なかなか話すことのできない職員とコミュニケーションをとることができ、活発な雰囲気の中、ワークショップを実施することができた。

（実践②：「学校園間の交流」の実施）

コロナ禍で十分できなかった学校園間の交流も、授業参観や行事の交流という形で再開した。

相互の授業参観も、空いている時間に参観できるよう、電話連絡だけ簡単に相互を行き来し、参観できるようにした。また、幼稚園児と１年生の交流や、２つの小学校の６年生と、中学１年生との交流会など、子どもたち同士の交流活動も再開することができた。

（実践③：「キャリア教育」の推進）

キャリア教育が特別なものではなく、未来を生きる子どもたちにとって必要不可欠な能力であることを、意識付けするために、キャリア教育における「基礎的・汎用的能力」を、日常の授業の中で明示し、価値づけする取り組みを行った。



右のようなカードを全学級に作成し、各教科・領域の学習活動において、「この活動では、〇〇という力がついているんだね」と、教師が子どもたちに声をかけ、常に意識できるようにした。

このような日常的な活動から、「基礎的・汎用的能力」を意識し、自他の尊重を基盤としたキャリア教育を進めることをブロックの幼小中で連携して進めることが、未来に活躍できる子どもの育成につながると考えている。

４　子どもたちへの効果（成果・課題）

○　児童の学びを変えるためには、まず、教職員の意識変革が重要であることをスタートラインにし、「新たなチャレンジ」をキーワードに取り組んだことは、教職員の意欲を高め、新しい授業観・教師観を意識させることに大変有効であった。

○　常に「自己決定」「自己選択」しながら学ぶ授業づくりを進めたことは、子どもたち自身が自分にとって必要かつ、最適な学びを選び、学びを深めることに効果的であった。

○　キャリア教育を核とした幼小中連携を進めたことは、子どもの学びをつなげ、将来に見通しをもち、未来で活躍できる子の育成につながるという手応えを感じることができた。特に、日常から「基礎的・汎用的能力」を意識付けさせたことは身に付いた力を自覚させる上で有効であった。

●　個別の学び・協働的な学びを自由に選択して学習を進めることは、児童一人一人の学習進度や成果・課題を把握することがとても難しく、評価方法について工夫が必要だと感じた。

●　大規模な学校園がつながり、協働することの重要性を感じた一方で、連携して運営することの難しさに直面した。今後も、長期的なスパンで計画を立て、各学校園と連携して、つながることの大切さを共有し続けていきたい。

目次へ

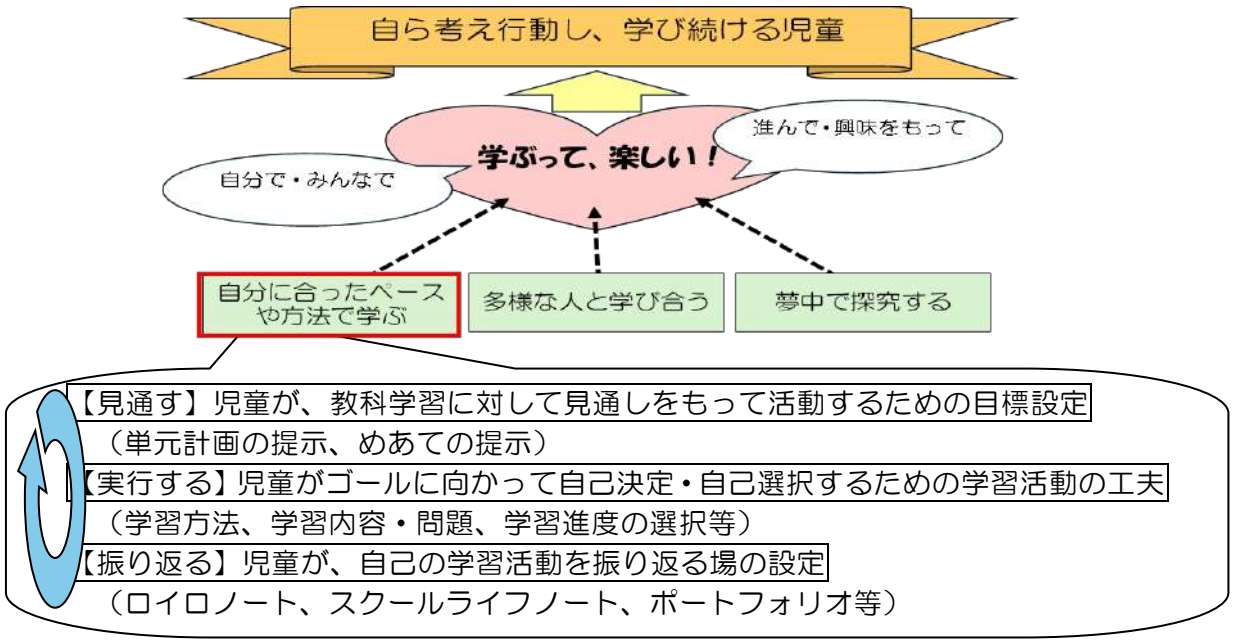
研究主題	自ら考え行動し、学び続ける児童の育成		
副　　題	～学ぶって楽しいな！～		
学 校 名	名古屋市立藤が丘小学校	校 長 氏 名	平井　光明

1　研究主題設定の理由

本校では、昨年度まで学校努力点を中心に授業改善に取り組み、その結果、児童アンケートでは、「進んで学習に取り組んでいる」や「学校へ行くのが楽しい」と回答した児童が 3.4 とやや低い結果となった。これは、学習への主体性を十分に引き出すことができず、自律した学びを味わうことには至っていないことが原因だと考える。

そこで今年度は、「ナゴヤ学びのコンパス」を基に、児童が自分に合ったペースや方法を自己選択・自己決定しながら自律して学ぶことができるような授業づくりを推進していく。また、文化的行事の際にも、児童が主体的に取り組んでいけるように、自己選択・自己決定できる機会を与えていく。それにより、自ら考え行動し、学び続ける児童の育成を目指していく。

2　研究の進め方と方法



3　研究の内容

本研究は、学校全体の取り組みとして、文化的行事「藤小フェスティバル（参加型学習発表会）」を通して実践を行った。藤小フェスティバルは、１年かけて、教職員と対話を積み重ねてきた行事で、今年度初めての実施となる。

（１）ねらい

・　学校行事を通して、日頃の学習の成果を発表することができるようにする。

・　学年・学級単位で計画・実行することで、児童が主体的に考え、活動することができるようにする。

・　学年・学級・ペア学年とのかかわりを通して、仲間と協力して活動することの大切さを感じること　ができるようにする。

（２）実践の様子

副題を「きらきら輝け！自分らしく～仲間とともに～」とし、ナゴヤ学びのコンパスにある「自分に合ったペースや方法で学ぶ」を特に重点を置いた。準備の過程では、教師が主導するのではなく、児童が試行錯誤しながら、よりよいものを作り上げることができるよう、教職員間で共通理解しながら進めた。また、初めての取り組みのため、進め方に迷うことがあれば、臨時でミーティングを行い、調整を図った。１１月１５日（金）、１６日（土）の２日間実施し、両日ともに保護者参観ありとした。各学級や学年で、これまでの学習を振り返りながら出し物を考え、全校で４３ものお店ができた。１～３年生は、１クラスに１つのお店、４・５年生は、１クラスに２つ、６年生は、１クラス６～７つのお店を準備した。



【１年　つりつり～！もじもじ！】



【２年　ねらいをさだめてとくてんゲーム】



【３年　英語劇「Ｐｅａｃｈ　Ｂｏｙ」】



【４年　いろいろな楽器を楽しもう「楽器体験」】



【５年　みんなの心と気持ち感じ合おう　福祉体験学習】



【６年　図工表現技法体験店】

これらの活動は、単なる体験活動にとどまらず、児童が自分たちで内容を考え、進行を工夫することで学びの質を向上させることができた。また、１日目が終わった後に振り返りの時間を設けたことで、２日目に内容を修正して取り組む学級もあった。

４　研究のまとめ

（１）成果

本研究を通じて、児童の学びに対する意欲や自主性が向上した。児童アンケートでは、「学校へ行くのが楽しい」と回答した児童は 3.5 となり、昨年より 0.1 ポイント上昇した。また、試行錯誤を重ねながら活動を進める中で、児童同士の対話が活発になり、協働する力も高まった。教職員も継続的な話し合いと改善を通して、ともに成長する姿勢が養われた。

（２）課題

各学級の授業計画と並行して取り組みを進める中で、時間配分に工夫が必要だった。また、今後は、振り返りの質が高まるような取り組みがあるとよい。

目次へ

研究主題	自律して学び続ける子どもの育成		
副　　題	自分に合ったペースや方法で学ぶことを通して		
学 校 名	名古屋市立猪子石小学校	校 長 氏 名	林　宏一

１　研究主題について

令和５年９月、名古屋市教育委員会から「ナゴヤ学びのコンパス」が示された。これまでの学校教育は、全ての子どもたちに一定水準の教育を保障する平等性の面、全人教育という面などにおいて、高い成果をあげてきた。

一方、社会の変化から、学ぶ意欲が低下していることや教師の指示がなくては学べないこと、自ら考える学びが十分でないことなどの課題が生じてきた。「学びのコンパス」では、これらの課題を踏まえ、さらに、激しい社会の変化を前向きに受け止め、たくましくしなやかに変化を乗り越え、よりよく自らの人生を切り拓いていくために、「自律して学び続ける」子どもを育てることを目指している。

「自律して学び続ける」姿とは、「興味・関心等に応じ、やりたいことを見付けて取り組む姿」、「学ぶペースや方法、内容などを自己選択、自己決定しながら学ぶ姿」「学びに見通しをもち、振り返りながら学び続ける姿」のことである。これらの姿が見られるように、「子どもが自分に合ったペースや方法を選んだり、決めたりできる」ことが必要であると考える。そして、子どもが自分たちらしく、楽しく学ぶことができるように、教師は子どもの学びに伴奏することが大切になってくる。

本校の多くの子どもは、学習に前向きで、決められた課題に熱心に取り組むことができ、一定水準の知識を身に付けている。一方で決められた課題しか取り組もうとしない子どもや、分からないことがあると、学びを止めてしまう子どもが多い。

決められた課題しか取り組もうとしない子どもは、決められたことさえ終えればよいという考えをもっていると考える。これらの子どもには、興味・関心を刺激し、自ら学ぼうとする姿を引き出す必要がある。

また、分からないことがあると、学びを止めてしまう子どもは、見通しがもてず、同じ課題を同じ時間内で取り組むことに対応できていないと考える。これらの子どもには、見通しをもたせ、その子に合った学習内容や方法、進度を提示し、安心して学び続けることができるようにする必要がある。

以上のことから、子どもたちが学習に見通しをもち、学習の状況を振り返り、調整しながら進めていく学習（自由進度学習）を基に授業実践を行っていくことで、自律して学び続ける子どもを育てていく。

２　研究の方法

○　低・中・高・０学年の４部会で構成し、一人一実践を行う。

○　部会ごとに事前検討、授業参観、事後検討を行う。

○　教育センターのホームページを参考にして、学年で一つの単元計画表と学びシートを作成する。

３　自由進度学習の内容

○　オリエンテーション（学習の進め方、単元の見通し、学習環境を伝える）

○　単元を通して解決する課題を提示する。
○　必要な知識・技能を身に付ける。
○　子どもが興味・関心に応じて、課題を選択して学習を進めていく。
○　めあてと振り返りを必ず行い、進捗状況を把握して、学習を調整していく。
○　自由進度学習の到達目標を設定する。
○　「子ども中心の学び」となるよう、教師は子どもに伴走する。
○　「伴走する」→学習環境を整える。事前に立てた支援計画に基づいて、子ども一人一人の学習状況に応じた支援を行う。必要であれば、知識・技能を再度「教える」ことも行う。
○　学習したことを共有する。
○　単元全体のまとめをする。
○　身に付けた知識・技能を確認する。
○　振り返りをする。

4　成果と課題（○成果、●課題）

○　一人一人が自分に合ったためあてを設定したことで、様々な活動の中から自分の課題を見付けたり、どのように学習を進めていくかを決めたりと、自分に合ったペースや方法で学習に取り組むことができた。
○　自分に合ったペースで進めることができるので、多くのこどもが意欲的に取り組むことができた。
○　調べる上で行き詰まったときには、同じものを調べて人たち同士で協力し、助言し合いながら進める姿が見られた。
○　子どもの活動時間は、十分に確保することができた。
●　教師の授業に向けての準備に時間が掛かり、児童の活動に広がりが見られなかった。
●　子どもの活動が多岐にわたるので、単元の目標が到達できているかの評価が難しい。
●　活動の場が自由に選べるので、自分の課題を解決することにつながる活動場所を選ぶことができない子どもがいた。

5　研究のまとめ

今年度、自由進度学習を授業の中に取り入れたことにより、子どもたちは、意欲的に学習に取り組むことができた。特にこれまでの一斉授業の中では、学習に意欲を示さなかった子どもも意欲的に取り組むことができていた。

その一方で、子どもたちにどのような力が身に付いたかを評価することが難しいといった課題も見られた。

今回の研究助成で購入したプリンターは、タブレットから直接印刷することができるので、子どもたちが調べたことを印刷したり、活動のまとめをするときに、まとめを印刷したりするのに有効に活用することができた。

目次へ

研究主題	ともに学び、よりよく生きる		
副　題	～キャリア教育の充実を目指して～		
学校名	名古屋市立神丘中学校	校長氏名	本郷　文幸

1　目指す生徒像（本校の実態）

本校は、名古屋市の閑静な住宅街に位置する有数の大規模校で、多くの生徒・教職員が在籍している。生徒は、落ち着いた学習環境のもとで、何事にも真面目に一生懸命取り組むことができている。一方で、大規模校で多数の生徒が在籍するゆえに、人間関係が希薄になりやすく、自分一人で悩みを抱え込んでしまう生徒もいる。学習の意味や意義、面白さを見出すことができずに、定期考査の点数のみに固執してしまったり、課題に対して失敗を恐れたりしてしまう生徒もいる。

そこで、「キャリア教育」の充実を図ることを通して、目指す生徒像「ともに学び、よりよく生きる生徒」に迫りたいと考え研究を進めた。なお、本研究における「ともに学び、よりよく生きる生徒」とは、学ぶ意義と意味を見出し、仲間たちと協働的に学習することができる生徒と定義する。

2　研究に迫るための手立て

目指す生徒像に迫るために、以下の２つの手立てを講じる。なお、キャリア教育に関わる専門的な知識・国家資格を有する「キャリア・ナビゲーター」と連携しながら以下の手立てを講じることとする。

① 教職員向け現職教育の実施と「キャリア文献コーナー」の設置

キャリア教育の概要や目的を教職員自身が理解しなければならない。そこで、年度当初の現職教育でキャリア教育に関わる現職教育を実施する。実施する際は、ファシリテーションツール「えんたくん」を活用することで、職員間の対話を促す工夫を講じる。

また、職員室内にキャリア教育に関わる「文献コーナー」を教職員が自由に手に取れる場所に設置する。このような手立てを講じることで、教職員がキャリア教育の目的や目指す生徒像を共有しながら、指導・支援にあたることができると考える。

② 実社会で活躍する講師を招いた「キャリア講演会」の実施

実社会で活躍する講師を招いた「キャリア講演会」を実施する。講師の方に、「働く意義」「学習することの意義や意味」「中学校時代に取り組むべきこと」などを講話していただく。このような内容の話を生徒たちが聞くことを通して、生徒たちは、学ぶ意義や意味を見出すだけでなく、将来に対する希望も抱くことができると考える。

3　実践の様子

①　教職員向け現職教育の実施と「キャリア文献コーナー」の設置

職員室内の教職員が頻繁に往来する場所に、「キャリア文献コーナー」を設置した。「文献コーナー」に置いた書籍は、キャリア教育の概要や目的が分かりやすく理解できる内容となっているものとした。教職員が気軽に手に取り、書籍を読み込む姿が見られた。教職員からは、「キャリア教育の歴史的な背景がよくわかった」「キャリア教育を通して育むべき基礎的・汎用的能力が具体的にわかった」などの声を聞くことができた。

年度当初に、キャリア教育に関わる現職教育を実施した。実施するにあたり、キャリア・ナビゲーターと綿密な打合せを重ね、当日を迎えた。



ファシリテーションツールである「えんたくん」を活用することで、これまでの受講型の現職教育からの転換を図った。「えんたくん」とは、直径１メートル程の丸い段ボール製の板である。参加者が円座になって、膝の上に「えんだくん」をのせることで、気軽な雰囲気と、互いの顔が見えるよさを生み出し、職員間の対話を促すことができた。加えて付箋紙を活用しながら、「自校の強み」「弱み」について、SWOT 分析を活用し職員が協働的にテーマに迫る姿が見られた。また、キャリア・ナビゲーターより、学校教育におけるキャリア教育の必要生についてお話いただいた。参加者が真剣に話を聞き入る姿が見られた。





②　　実社会で活躍する講師を招いた「キャリア講演会」の実施



実社会で活躍する講師の方を招いた「キャリア講演会」を実施した。講師の方として、「日本一の便利屋集団」と評される不用品回収会社社長の若山陽一郎氏をお迎えして、「何者でもない僕が、何者かになる物語」をテーマにご講演いただいた。表現力豊かな語り口はもちろん、ご自身の紆余曲折や山あり谷ありの人生を振り返りながら、その過程で出会った人や古くからの友人との関わりの中でピンチをチャンスに変え、生きる力と喜びを見いだし、今の自分があること。そして、自分と関わった人を大切にし、目の前のことに心を込めて今を大切に生きていけば、必ず最高の人生に出会え、誰もが「ラッキーマン」になれるという内容のお話を様々なエピソードを交えて生徒たちにお伝えていただいた。「バックダンサーから不用品回収会社の経営者への転身」「恋人と食べた一杯のカレーライス」「世界一周の旅」「カンボジアでの学校建設」「そのたびに起こる人生を変えるほどの出会い」など、魅力的で具体的なエピソードに、生徒たちは目を輝かせながら聞き入っていた。「早く大人になりたくなった」「自分の長所を生かして、目の前のことに一生懸命取り組んでいきたい」「『絶望は神様からのプレゼント』の言葉に励まされた」などの感想が聞かれた。



4　研究の成果と課題（成果＝○、課題＝●）

○　現職教育や「キャリア文献コーナー」の設置を通して、キャリア教育の目的や意義を教職員が理解することができた。また、自校の「強み」などを共通理解することができたことで、全職員が共通認識のもとで、指導・支援にあたることができた。

○　キャリア講演会の実施を通して、生徒たちは学ぶ意義や意味を見出すことができた。実社会で活躍する方のリアルな声を聞くことで、中学校時に励む事項や失敗を恐れずにチャレンジすることの大切さを身をもって理解することができたと考える。

●　今後はキャリア教育を、特別活動や教科指導、総合的な学習の時間と有機的につなげて継続的・計画的に推進していく必要がある。

目次へ

研究主題	主体的に学びに向かう平針っ子の育成		
副　題	― 伝えよう、深めよう ―		
学 校 名	平針小学校	校 長 氏 名	森　佳世子

1 実践の概要

(1) ねらい

本校の児童は、素直で学習にまじめに取り組む子が多い。しかし、自信のなさから、新しいことに挑戦することに消極的な姿や、自分に自信がなく、思いや考えを他者に伝えることができない姿も見られる。そこで、「ナゴヤ学びのコンパス」で示されている「子ども中心の学び」を実現するために、本校では、児童が互いに思いや考えを伝え合い、高めあう関係づくりを　大切にしていきたい。仲間との関わりの中で、自己と仲間のよさや課題に気付き、考えを伝え合いながら 課題解決に向けて活動することで、より学習に意欲的に取り組むことができるのではないかと考え、実践を行った。

(2) 実践の方法

各学級に、ホワイトボード10枚を常備する。互いの意見を聴き合い可視化する「ホワイトボードミーティング」を授業の中に取り入れ、自分たちで話し合い、課題を解決する体験を多く取り入れる。繰り返し取り組むことにより、自立した学び手を育てていきたい。

(3)目指す子ども像

思いや考えを友達と伝え合うことによって、自分の考えを深めることができる児童

2 実践の内容

実践①:学級活動「インプロでキャラクターをかこう」(3年)

児童がホワイトボードの扱いに慣れること、そして、ペアでのコミュニケーションに慣れることを目的として、ホワイトボードを使った「インプロ(即興)ゲーム」を行った。このゲームでは、相手が描いた線を見て、何を描いているのか想像しながら、一筆ずつ交代で続きを描き足していく。ルールは「相手を否定しないこと」。たとえ「無茶ぶり」だと感じても、「別のやつにして」「それは無理だよ」とは言わないようにする。最初は、おそるおそる描いていたが、次第に「うんうん」「えー」と言いながら、相手の意図を受け止めて、続きを描こうとする様子がうかがえた。できあがったキャラクターを学級全体で共有すると、児童は自分たちのキャラクターに満足した様子であった。振り返りでは、「難しかった。耳を描いているのかと思ったら手だった」「相手の子が何を描いているのかなー、と想像した」「一人では思いつかない、面



【キャラクターを見ながら振り返る様子】

白いキャラクターになった」などの声が聞かれた。実践を通して、相手の思いを「知りたい」という気持ちが高まった。また、互いに伝え合うことのよさを感じることができた。

実践②：体育科「マット運動（側方倒立回転）」（4年）


【動画を見ながら話し合う様子】

児童は、自分の動きをタブレットで撮影し、振り返ることで、うまくできている点や、そうでない点を見付けていた。「膝が曲がっている」「まっすぐ回れない」など、自分が見付けた課題をもとに練習の方法を決めて取り組んでいた。自分で課題を見付けられない児童や、どのように課題を解決したらよいのか分からない児童には、教師から「○○さんができているみたいだから、聞いてみたらどうかな」などと助言するようにした。すると、同じ場所で練習している児童同士で「もう少し腰を高くするといいよ」「さっきより、できているよ」などと声を掛け合う様子が見られるようになった。さらに、撮影した動画や、技のポイントを示したカードをもとに、体のどの部分をどう動かせば、技を成功させられるのかや、課題を解決するためにどのような練習に取り組めばよいのかを、具体的に話し合うことができた。振り返りでは、「ゴムひもで練習していたら、腰が上がるようになった」「両ひざが曲がっていたから、次は伸びるようにしたい」など、練習の成果や次への目標が聞かれ、次の学習への意欲を高めることができた。

実践③：算数科「面積」（5年）

児童は、面積を求める問題の中から、どの問題から取り組むかを自分で決めて、取り組んだ。問題として扱った図形は、三角形・四角形・直角三角形・平行四辺形・ひし形・台形の6種類であり、それぞれ難易度が異なっている。そのため、面積を求めることが苦手と感じている児童も、すぐにできそうな問題から取り組む様子が見られた。また、教師は児童の様子を見守り、解き方が間違っていた場合でもすぐには指摘せず、「○○さんと答えが違っているけれど、どちらが正しいかな」など、児童同士で確かめるよう、うながしていた。児童は「この問題は、三角形と長方形に分けて考えればいいよ」「ここに線を付け足したら、大きい長方形になるね」「今まで使ってきた面積の公式で求められそうだ」などと話し合いながら、図や式、言葉を使って、面積の求め方を説明していた。その中で、自分の考え方とは別の考え方に触れ、感心したり、納得したりしながら、問題に取り組む意欲が高まっていた。

3　実践の成果と課題

最初はペアで、短時間での伝え合いから始め、何度も繰り返し活動することで、児童は自分の考えを伝えられるようになってきた。考えを友達と伝え合うことで、多くの考えに触れ、自分の考えを深めることにつながった。また、教師は児童一人一人に寄り添い、考えを引き出す言葉や、安心感を生み出す言葉、意欲につながる言葉を掛けるよう心掛けた。そうすることで、自分なりの考えをもって活動に取り組んだり、見付けたよさや課題を仲間に伝えたりすることにつながり、考えを共有する活動が充実させることができた。今後も、話し合いや意見交流の場を増やし、様々な考えに触れることで、自分の考えを深めることのできる児童を育てていきたい。

目次へ

研究主題	児童のよりよい関係づくりを目指して		
副　　題			
学 校 名	名古屋市立植田小学校	校 長 氏 名	野々川　康弘

1　はじめに

名古屋市が目指す児童の姿は「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける子ども」である。そのためには、児童のよい関係づくりが不可欠である。学校の研究でも主体的に学びに向かう児童の育成として、「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現する授業研究を行ってきた。その中で友達の興味をもって意見を聞いたり、取り入れたりしながら、良好な関係で協働的な学習を行う姿が多く見られた。学習場面と生活場面は結び付いているため、その中でよりよい関係をつくっていくことで、相乗効果が期待できると考える。学習場面でよりよい関係をつくることができれば、生活場面でもよりよい関係をつくることができ、生活場面でよりよい関係をつくることができれば、学習場面でもよりよい関係をつくることができる。

また、近年、全国的にも、友だちとよい関係をつくることが苦手と感じる児童も増えてきている。コミュニケーションに不安をもっている児童に支援することで、安心して楽しく学校に通うことができるようになると考える。

以上のことから、児童のよりよい関係づくりを目指して実践を行っていく。

2　実践内容

(1) 研究の概要

児童のよりよい関係づくりを行うために、コミュニケーションを促すツールを活用する。関わりが難しい場合も、ツールを活用することで、会話が生まれたり、ルールを守ることができるようになったりして、よりよい人間関係を築くことができるようになると考える。いじめ防止の観点からも、ツールを使って行っていくことで、よりよい関係づくりを築くことを目指す。

(2)研究の方法

コミュニケーションを促すツールとして、以下のカードゲームを３種類用意する。

○ジェスチャーカードゲーム…言葉を使わずに動作だけで、何のことかを伝えるゲーム
○ワードゲーム…カードに書かれた言葉を使って、しりとりをしていくゲーム
○名前付けゲーム…カードのキャラクターに自分や友達が付けた名前を記憶するゲーム



【コミュニケーションを促すツール】

各学級にセットで配付して、学級活動や休み時間などで活用する。カードゲームを選んだ基準は、「全学年が理解して楽しむことができるもの」「からかいにつながらないもの」である。

(3)実践の様子

①スムーズなコミュニケーションが生まれる

カードゲームを使って、輪になって活動する様子が見られた。２～３人という少人数での活動や８～１０人が集まって活動している様子もあった。「答えたい人は手を挙げてください」というように、進行をする役をしたり、「次はまだ一度もやっていない人にしよう」と、スムーズに進むようにアイデアを出したりする姿が見られた。



【ジェスチャーカードゲームで活動する様子】

活動を楽しむために、ルールを守ろうとする姿も見られた。友達の説明をしっかり聞きながら、活動をしていた。

低学年では、ルール説明の時に、話している途中で質問をしてしまう児童がいたことで、スムーズにいかない場面があった。教師が介入し、説明している児童の気持ちや、周りで聞いていた児童の気持ちを聞き、どのようにすればよかったのかを振り返った。次の活動の際には、スムーズなコミュニケーションを行うことができた。



【ワードゲームで活動する様子】

②友達の輪の中に入ることができる

友達の輪の中に入ることが苦手な児童が、カードゲームがあることで、輪の中に入って一緒に活動することができた。教員とまず１対１でカードゲームを行い、ルールや遊び方を理解でき、自分にもできると感じたことも輪の中に入ることができた理由の一つであると考える。カードゲームがあることで、「一緒にやろう」とお互いに誘い合うことができた。



【名前付けゲームで活動する様子】

3　まとめ

児童のよりよい関係づくりを行うために、コミュニケーションを促すツールを活用した。関わりが難しい場合も、ツールを活用することで、会話が生まれたり、ルールを守ることができるようになったりする姿が見られたため、有効であった。ツールを使って行っていくことで、児童がよりよい関係をつくることができるようになってきた。児童からも「今まで話さなかった友達とも一緒に活動することができた」という発言があった。

ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける子どもの育成を目指す中で、様々な人間関係の中で学びを追究していくことが大事である。今後は、その土台としても、仲の良い子だけでの関係づくりではなく、様々な友達とよりよい関係づくりをするために、継続して活用していきたい。

目次へ

研究主題	多様な人と学び合う生徒の育成		
副　　題	ICT の活用を通して		
学 校 名	名古屋市立天白中学校	校 長 氏 名	飯田　仁

1　実践のねらい

本校では、令和４年度より、「みがこう“自分のよさ”　高め合おう“みんなのよさ”」を教育活動のテーマとして、自他のよさに気付いたり、自分の課題を把握して改善することでよさを伸長したりして、そのよさを生かしていく機会を設けている。そして、互いが関わり合う場面を設けて、支え合ったり、認め合ったりして、高め合う集団づくりを目指すことで、より主体的・対話的で深い学びを実現できると考えている。

本実践では、以下の生徒像に迫るために、特に対話を重視した学習活動において、多様な人と学び合い、課題解決をしていくように取り組む。そのため、各教科でタブレットＰＣの探究学習・協働学習システム（以下：ロイロノート）等を活用し、多様な人と考えを共有して、互いの考えを比較したり、関連付けたりして、課題解決をしていく。

○　自他のよさに気付き、互いのよさを認め合える生徒
○　自ら考え、判断し、表現・行動できる生徒
○　多様な集団の中で、目標に向かって力を合わせて高め合える生徒

2　実践の内容

(1)　実践１（音楽）

リコーダーでタンギングと息の使い方について図を用いたり音の違いを聴けるようにしたりしたが、どのクラスにも３人～７人程度はタンギングが全く理解できていない生徒がいた。また、正しい息の使い方ができていない生徒も多くいることが分かった。

そこで、「ポルタート奏法とスタッカート奏法で『かっこう』を演奏しよう」という目標を設定し、２時間の題材に取り組んだ。１時間目には、習熟度別に分かれたチームの中で、ロイロノートを用いて自分で学習を進めていき、１つでもステップを上げることをそれぞれの生徒の目標とした。２時間目も同じように習熟度別でチームを分けて、それぞれのペースで学習を進めていくが、１時間目よりも、仲間と演奏を聴き合ったり教え合ったりしながら「かっこう」の演奏ができるようにすることを目標とした。

各チームのカードの中には、教師によるお手本動画も組み込まれているため、前時にタブレットと共にイヤホンを持ってくる連絡をし、当日はほとんどの生徒がイヤホンを装着しながらリコーダーを演奏していた。また、同じ課題をもった生徒同士が集まって学習を進められるようにしたり、違うチームの生徒から教えてもらう時間をつくったりして、個別の学習だけでなく協働的な学習ができるようした。



ロイロノートの各チームのカード

ロイロノートのカードを活用して、個別に課題に繰り返し取り組んだり、多様な人と学び合ったりしたことで、ほとんどの生徒がタンギングについて理解し、技能を習得することができた。各チームのカードの中にSTEPを設けることで、自分の学習方法を自己決定しながら、互いに高め合う姿が見られた。

(2) 実践（理科）

電気の単元で学習する電磁誘導仕組みは身の回りの多くの電気機器で利用されいる。そこで、電磁誘導の学習を終わったところで、「電磁誘導を利用した電気機器の仕組みをみんなに分かりやすく説明しよう」という課題で、ＩＨ調理器、ワイヤレス充電器、非接触型ＩＣカードのいずれかの電気機器の仕組みを調べ、説明し合う活動を行った。



ロイロノートで説明し合う生徒

生徒は教科書やインターネット等を活用して、それぞれの仕組みを調べて、ロイロノートのカードでスライドにまとめていった。まとめているときでも、随時ロイロノートの提出箱にスライドを提出させ、誰でも見られるように共有状態にした。そのため、同じような内容でまとめている生徒同士で集まってアドバイスをし合ったり、参考にし合ったりして、学びを深める姿が見られた。また、まとめることが苦手な生徒は、参考になりそうなスライドをつくっている生徒に教えてもらいながら、自分なりのペースで学びを進めていた。最後にワールドカフェ方式でタブレットＰＣを使って発表会を行い、多様な人と学び合うことで、身の回りの電磁誘導を利用されている機器の仕組みについて考えを深め合う姿が見られた。

3 成果（○）と課題（●）

○ 助成金で購入した無線アクセスポイントを未整備の教室に持ち運び利用することで、多くの場面でタブレットＰＣを活用して、多様な人と学び合う姿が見られた。

○ ロイロノートを活用して、レベル別のカードを準備したり、共有できる提出箱から自分に合ったカードを選択したりすることで、自分のペースで学びを進める姿が見られた。

○ 教科の学習場面だけでなく、生徒議会等でもロイロノートを活用することで、全体の意見を共有して、生徒会活動を高め合っていた。

○ タブレットＰＣを活用できる環境が増えたことで、多くの教科で様々な活用方法を工夫していた。

○ アクセスポイントが持ち運びできることで、体育大会のときに外の本部席と職員室のタブレットＰＣが無線ＬＡＮで繋がり、スムーズに行事運営を行うことができ、生徒たちが励まし合ったり、高め合ったりする姿が見られた。

● タブレットＰＣを活用して、考えを共有するときに、互いの考えをより深めるために意見交換を行ったり、考えを集約したりするなどの工夫が必要である。

● 多様な人と学び合うことに重点を置いたが、個別最適な学びと協働的な学びは一体的に進めていくことが大切であるため、自分のペースで学べる工夫を深めていく。

目次へ

研究主題	児童の思考力を高めるための効果的な学習指導		
副　題	「思考力・判断力・表現力」を育成する授業づくりをめざして		
学校名	一宮市立向山小学校	校長氏名	太　田　暢　子

1　研究主題設定の理由

本校では、令和５年度より児童の「思考力・判断力・表現力」の育成に向けた研修実践に取り組んできた。実践の検証としてR4年度と５年度に実施した国語科・算数科の学力診断テストの思考観点の全国平均の結果を比較すると、右のような結果になった。２年生の国語科・算数科、４年生の国語、６年生の国語については、思考力が伸びていた。しかし、他については、伸び悩んでしまった。そこで、５年度に引き続き、６年度も、現職教育研究テーマを『「児童の思考力を高めるための効果的な学習指導」』とし、「思考力・判断力・表現力」の育成に重点を置いて算数の授業研究を進めていくこととした。

学年	R4 国語 思考	R5 国語 思考	R4 算数 思考	R5 算数 思考
1年	／	105	／	105
2年	105	112	105	113
3年	112	102	113	112
4年	102	111	112	109
5年	111	97	109	98
6年	97	101	98	97

2　研究実践とその考察

（1）研究の手立て

①　子どもの思考を促す構造的な板書について研究を進める。

②　授業の前後に振り返りの時間を設定し、子どもの学びの実態をつかむ。

（2）子どもの思考を促す指導の充実についての共通理解

研究・実践を効果的に進めるには、現職教育への共通理解が大切である。そこで年度当初には、今年度異動をしてきた教職員を含め、全員が研究について共通理解をし、同一歩調で進めていけるよう計画をした。昨年度に引き続き、授業と学び研究所　フェロー和田裕枝先生を講師にお招きし、年度前半には、以下の視点で模擬授業や講演・授業の参観をしていただいた。

①５月　参観・模擬授業・講演『思考力を高めるための効果的な学習指導』

②８月　参観・講演『授業を行った結果、悩んでいること、教えていただきたいこと』

５月に行った現職教育では、各学級の授業を参観し、ご指導をいただいた。また、効果的な板書や振り返りについて講義をしていただき、授業改善に向けての具体的な方策を学んだ。



【和田裕枝先生による現職教育】

構造的な板書については、児童の目線から、「何を考えるのか」がずっと見えていること、多様な考えを比べることができること、授業の終末で全体を見ながら自分の学びを振り返ることができることなどについて、ご指導をいただき、全教員で共通理解をはかることができた。昨年度から和田先生にご指導いただいているため、全教員のめざす方向性も定まりつつあり、全員でステップアップするためのよいスタートとなった。

８月に行った現職教育では、自分の学年の現状（授業の様子・まとめテストを行った結果）と１学期に授業を行った結果、悩んでいること、教えていただきたいことを和田先生にお聞きした。実践はしたものの、成果が出ず迷っている担任は、このままの実践を継続してよいのか、方向を

修正した方がよいのかを助言していただくことができ、２学期の実践にむけての方向性を確認することができた。

（３）授業力向上に向けた研究授業の場の工夫

研究授業では、ミドルリーダーや若手の育成のため、学年で指導案（細案）を検討すること、レディネステストを行い、その結果を指導案に記し、授業の手立てを講じることとした。また、学年以外の参観者も、端末に授業参観後の気づきや感想を入力し共有することで、全員の参加意識を高めることとした。

年度折り返しの１０月には、研究の進捗状況を全員で確認する場として公開授業を行った。指導案検討の段階から教務主任や現職教育主任を中心に、全員や学年で協議や共通理解をする場を設定した。また、協議会では端末の入力のみならず、ホワイトボードで発言を記録する係を設定し、構造的な板書の実践の場とした。



【ホワイトボードを活用した協議会】

公開授業では、授業の初めに、前時の授業を振り返らせた。前時の問題と本時の問題との違いが比べやすいような配置を意識した板書をし、児童の意見をもとに本時のめあてをたてることができた。また、数量関係を線分図に表す際、「今の言葉を図の中に表すと？」などと問い返すことによって、児童の思考を促しながら、共通理解をはかっていった。振り返りでは、ＩＣＴを活用し各自の振り返りを共有したり、教師の意図的な指名につなげたりすることで、振り返りの時間を充実させることができた。



【全員で検討した細案での公開授業】

３ 研究の成果と課題

昨年度に引き続き和田裕枝先生を講師にお招きし、現職教育の充実を図ったため、「振り返り」の時間の設定については定着が進んだ。また、児童の考えを取り入れながら板書する「構造的な板書」について、より理解を深め、授業改善を進めることができた。児童アンケートでは、「授業がよくわかる・わかる」が９４％となり、今年度の自校目標値８９％を超えることができた。



職員の学校アンケートを見ると、「２年続けて取り組み、やっと少しやり方がわかってきたように思う」「板書を生かすための教材研究を進めたい」という職員がいる一方、「目指す児童の姿を意識しているが、理想と現実の部分で難しさを感じる」と答えている職員もいた。

また、話し合いや振り返りをすることで、本校の課題である児童の思考力・判断力・表現力の育成を図っていきたいと考えたが、児童のまとめテストにおいて目標通過率と実際の通過率を比較してみると、思考・表現については、６割の学年で目標通過率を上回ることができなかった。職員の分析によると、「文章を正しく読むことができない」「授業では理解できても、まとめになると正答率が下がる」といったことが挙げられた。授業理解が進んでも、学力の定着に課題が残る結果となった。本校の課題である児童の思考力・判断力・表現力の育成を図っていくために、文章を正しく読み取りイメージさせる場の工夫など、さらなる手立てを工夫していきたい。

目次へ

研究主題	いきいき、わくわく、笑顔がいちばん丹西っ子を目指して		
副　　題			
学 校 名	一宮市立丹陽西小学校	校 長 氏 名	木村　祥治

1　はじめに

本校では、地域的特性からか、人間関係におけるトラブルが多い。また、その対処のため、担任をはじめとした教職員が対応に苦慮する場面も多く発生する。そこで、ピア・サポートの実践を通して子どもたちの人間関係力の向上を目指すこととした。また、日々、児童の問題行動等の対応に疲弊している教職員に対して、「PEP　TALK」の講演を聞くことにより、児童をより肯定的にとらえる視点を与えたいと考えた。

2　ピア・サポートの実践

ピア・サポートとは、ピア＝「仲間」、サポート＝「支援・援助」であることから、「仲間による支援」を意味し、子どもたちが相互に支え合う活動を指す。ピア・サポートはコミュニケーションスキルトレーニングとサポート活動から成り立っている。



まず、現職教育の一環として自主研修会を行い、ピサ・ポートの授業のあり方について研修した。その後、「すてきな聞き方」「すてきな頼み方」「すてきな断り方」「物事を解決する方法を学ぼう（メディエーション＝調停）」の実践に取り組んだ。ピア・サポートに造詣の深い教頭が示範授業を各教室で行い、それに倣って担任が実践していった。また、授業で扱うメディエーションの動画も作成した。

以下が、メディエーションの指導案である。

○　単元名　「支えあい・助け合う」ピアサポート　～対立を解消するためには～

○　本時のねらい　仲裁者として、問題の当事者と向き合い、当事者双方の合意を形成する技法や、対立を学ぶことの意義を理解することができる。

○　指導計画

	学習活動	教師の支援・手立て
導入5分	1　アイスブレイキング 3人1組で「トントン・パッ」を行う。 2　前時の学習を振り返る ・ピア・サポートの意味を振り返る。 3　本時のめあてを確認する。 ㋮　「もめごと」を解決する技を学ぼう。	・緊張をほぐすために、3人グループで簡単なゲームを行う。 ・「ピア・サポート」の意味をフラッシュカードにして黒板に貼り付け、確認する。

展開 35分	4　「もめごとが起こった場面」の動画を視聴する。	・動画の中でも、特に仲裁している役（メディエーター）の行動を観察するように伝える。
	5　「もめごと」がなぜうまく解決したのか、原因を話し合う。 ①　ペアでの話し合い ②　全体の場で共有化	・話し合いの方法について、ルールを提示する。班での話し合い後、全体で共有する。 （スライド） 【話し合いのルール】 ①　「すてきな聞き方」を意識する。 ・相手の意見を否定しない。 「いいね。」「そうだね。」 ・時間内は、話し合いを続ける。 「ほかにはないかな。」
		※「すてきな聞き方」 F…Facing（顔を相手に向ける） E…Eye－contact（視線を合わせる） L…Lean（前かがみの姿勢をとる） O…Open（心を開く） R…Relax（リラックスする） ・図を活用して、視覚的に内容が理解しやすいようにする。
	6　「もめごと」を解消するためのポイントを知る。	【メディエーションの方法】 ①事実を確認する。 ②それぞれの気持ちを聞く。 ③それぞれの願いを聞く。 ④解決策を考える。 【解消するためのポイント】 ①相手の話をしっかり「聴く」 ②相手の話をさえぎらない。 ③自分の気持ちを正直に伝える。 ④お互いに解決しようと努力する。
	7　「メディエーター」の役になりきって、ロールプレイを行う。 ・メディエーターのセリフは全員で読み、「もめごと」を仲裁するのに必要な技術を確認する。	・メディエーターのセリフだけが消音処理されている「もめごとが起こった場面」の動画を再び視聴させる。メディエーターのセリフだけ、画面を見ながら全員で読み合わせを行わせる。 ・【解消するためのポイント】を意識してロールプレイを行うように指示をする。
	8　３人１組になってロールプレイを行う。 ・A→B→ピア係の順番で合計３回ロールプレイを行う。（５分×３回）	・全員がロールプレイに参加できるよう、 ①　もめている内容 ②　A・Bの初めの気持ち の２点は全員で共有化してからロールプレイを行うようにさせる。 ・５分経ったら、話の途中でも終了させる。また、早く終わってしまっても、繰り返しロールプレイを行わせる。
まとめ 5分	9　ロールプレイの感想を発表する。 １０　対立を学ぶ意味について考える。	・問題の当事者の気持ちとメディエーターの気持ち両方を発表させるようにする。 ・「もめごと（対立）」は、悪い事ではなく、成長へのステップであることを伝える。

「すてきな聞き方を考えよう」の実践後の子どもたちのワークシートには、「思ったより聞き方によって相手の気持ちが変わることがわかりました。これから相手の話を聞くときは『ＦＥＬＯＲモデル』を参考に聞きたいなと思いました。教頭先生、今日は忙しいなか、わかりやすい授業ありがとうございました。」（５年）



担任に行ったアンケートの回答には、「子どもたちがお互いに助け合う関係性がもてたり、より子どもたちがいきいきと生活していったりするために、どのような手立てが必要かを考えるようになった。」「いけないことを注意するだけでなく、ピア・サポートで児童とともに客観的にそれぞれの場面について考えることにより、ピア・サポートで出てきた児童自身の考えを伝えることで納得できる場をもてた。」また、「ピア・サポートの研修会を受けたり、授業をしたりすることを通して、児童に対する働きかけに意識や方法の変化はありましたか」の問いに９０％以上の担任が「変化があった」と回答した。

３　ペップトークの講演会

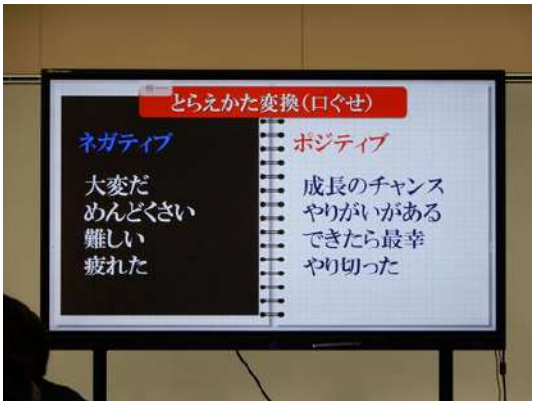
令和７年１月２３日（木）に現職教育の一環として、一般財団法人日本ペップトーク普及協会の鈴木孝氏をお招きし、本校教職員に向けて「PEP TALK!～やる気を引き出す言葉の力～」と題して、講演会を行っていただいた。



ペップトークとは、元気が出るように話す、活気が出るように話しかける「激励演説」「応援演説」とされている。WBC の決勝、アメリカ戦の前に大谷翔平がチームに語り掛けた言葉もその一つとして有名である。「･･･、野球をやっていたら誰しも聞いたことがあるような選手たちがいると思う。憧れてしまっては超えられないので、僕らは今日超えるために、トップになるために来たので。今日一日だけは彼らへの憧れを捨てて、勝つことだけ考えていきましょう。」ペップトークの特徴は、短く、わかりやすく、肯定的な言葉で、魂を揺さぶり、その気を引き出す言葉がけである。

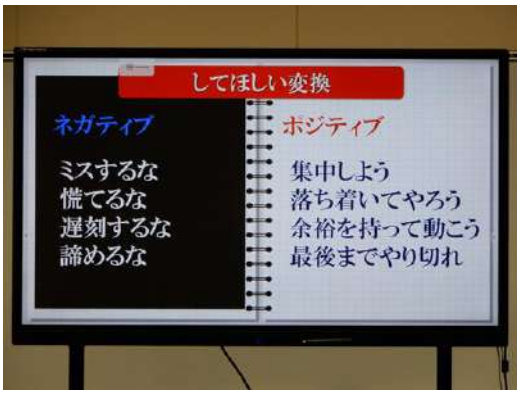
やる気を引き出すコツとして、鈴木氏は「とらえかた変換」、「あるもの承認」、「してほしい変換」が大切であると言っている。

「とらえかた変換」とは、ネガティブにとらえた状況をポジティブにとらえ直し、前向きな言葉に変換することである。あることが「大変だ」と感じるならば、例えば「やりがいがありそうだ」ととらえることである。そして、それを口にすることが大切であると鈴木氏は語っている。言葉にすることで脳が理解しイメージをする。そのイメージから心が動き感情が生まれる。



「あるもの承認」とは、できていないところを指摘する前にできているところを認めることである。私たち教員は、子どもたちとのかかわりの中で「～ができ

ていない」「～をやっていない」と子どもができていないことをいとも簡単に指摘している。ごみを落としてしまった子どもに拾うよう指示し、一つ二つ拾った子どもに対して、拾ったことを評価せず、「まだ落ちてるよ」と指摘してしまう。不登校傾向の子どもが遅刻してやってきたときに「よく来たね」と評価しているにもかかわらず、毎朝きちんと登校している子どもに評価の声をかけることをしない。教員にありがちなできていないことを指摘する姿勢から、あるもの・できていることに目を向ける姿勢を大切にしたい。



「してほしい変換」とは、「してほしくない」という否定の考えや言葉を「してほしい」に変換することである。バレーの試合で大事なポイントのサーブの場面、「ミスするなよ」と指導者に声をかけられたら選手はどんな気持ちになるだろうか。ベストのパフォーマンスを出せるだろうか、という視点である。鈴木氏は「成功の反対は、挑戦しないこと」と言っている。失敗しダメ出しをされ続けるとやる気をなくし、学習においては学習性無力感を生み、可能性を摘むことにつながると言っている。だからこそたくさんの挑戦をし、たくさん失敗したその先に成長があり、成功があると。

講演の最後に鈴木氏は、子どもたちが言われてうれしい言葉は「ありがとう」「助かるよ」であると語った。一方反対の言葉は「あたりまえ」であると。

子どもたちを指導する際、「ほめることが大切だ」とよく言われるが、そのほめ方が実はかなり難しいことを実感している教職員は多いと感じる。今回の鈴木氏の講演で、本校の教職員が子どもの接し方において、ポジティブな視点で声掛けをするよう意識していくことができたならば幸いである。以下に、本校教職員の感想を記載する。

「悪い例が見事に自分に当てはまっていて、子どもたちに「ごめんね。」ってなりました。明日からペップトークをこころがけて子どもたちを育てていきたいです。」「ないものばかりに目を向けるのではなく、まずはあるものを認めることが大切であることを学びました」「難しい、疲れたではなく『やり切った』『頑張った』という言葉が仕事中に出るようにしたい。」

４　研究の成果と今後の課題

ピア・サポートの実践については、全学級で実施することができ、一定の成果を得た。しかし、学級担任それぞれにピア・サポートに対する実践に温度差があることもまた明らかになった。ピア・サポートの有用性を教職員に理解させ、継続して実践させることが大切である。一方で、タブレット端末の導入、スクールライフノートの実践など新たな取り組みが学級担任に課せられてくる現状のなかで、学級担任の業務軽減の観点も管理職として十分に配慮していかなければならない。

本校の子どもたちが「いきいき」と「わくわく」しながら、「笑顔あふれる」日々を過ごすことができるよう教職員に働きかけるとともに、教職員の働き甲斐のある職場づくりを目指して努めていきたい。

目次へ

研究主題	言葉を大切にして主体的に学び、 考えを豊かに伝え合うことができる児童の育成		
副　　題	子どもたちの問いを生かし、 語彙を豊かにする言語活動の充実を図った国語の授業づくり		
学 校 名	愛知県一宮市立丹陽南小学校	校 長 氏 名	山田　泰司

1　研究内容

主題設定の理由

本校は『みんなそれぞれ　とっておきの一人』であることを自覚し、夢とプライドを持ち、自他を大切にするとともに奉仕の心を持った児童を育てる」を教育目標に掲げ、「自立し、自信を持って生きぬく子」の育成を目指している。この教育目標の具現化を目指し、「伝え合う力」の育成を進化発展させたいと考える。その中で、学習の基礎となる言語能力を育成する国語科を研究の中心とし、基本的な国語の力を定着させていきたい。そのために、言語能力を支える重要な要素である語彙力を豊かにすることを基盤に、「自分の思いを言葉にし、適切な言葉を選んで伝えること」、「相手の話を聞いて、相手の伝えたいことを理解し、自分の考えを伝えること」を目指し、言語活動の質を更に高める授業に向けて、研究を進めていくこととした。

また、単元を学習する中で解き明かしていきたい「問い」を児童一人一人が持ち、児童が見通しをもって主体的に学習に取り組むことのできる授業に向けて、指導の研究を進めていくこととした。

2　研究の仮設

伝え合う力を進化発展させるために、語彙力を豊かにすることができれば、自分の思いを言葉にして伝えることができ、「言葉を大切にして主体的に学び、考えを豊かに伝え合うことができる児童の育成」ができるだろう。

3　研究の方法

言葉を大切にした授業を展開

今年度、①～④を現職教育の目標として、各単元実践を行う。

① 身についた語彙力を適切に使うことができるようにするための言語活動を充実させる。

② 言葉を大切にする「文章の言葉に立ち戻る活動」を授業の中に取り入れ、言葉を大切にする姿勢を育む。

③ 授業のユニバーサルデザイン化（視覚化、焦点化、共有化）を意識し、めあての明確化、まとめや定着の時間、目的をはっきりとさせた活動を工夫する。

④ 子どもの問いを生かした授業づくりを行い、子どもが主体となることで、より学びを深める。

4　研究実践

（1）３年生「辞書引き」

本校では、３年生で１人１冊辞書を持つと同時に、現職教育でご教授いただいている中部大学教授　深谷　圭助先生による「辞書引き」の出前講座を受講している。



辞書引きの様子



付箋を貼った辞書

辞書引きの方法は、「見つけた熟語を付箋に書いて、ページの上部に貼り付ける」ことを繰り返す。見る見る間に付箋で辞書が埋め尽くされていく。子どもたちは、黙々と熟語を探し続け「百個見つけた。五百個見つけた。千個見つけた。」と楽しく学びながら語彙の習得を行っている。たくさんの熟語を見つけ、その意味を確認するという作業を授業以外の朝の時間や休み時間等、時間を有効に活用して行っている児童も多くいる。

（2）３年生「まいごのかぎ」

中心人物「りいこの気持ちが変わった理由」を本文から見つけ、そこからりいこの気持ちがどのように変わっていったのかを読み取った。子どもたちは、本文の言葉に立ち戻り、根拠となる言葉を見つけては線を引き、グループで話し合い活動を行いながら中心人物の気持ちが変わった理由を明確にしていった。終末には、挿絵を基に物語を振り返り、タブレットを用いて、中心人物の心情の変化を心情曲線にして結んだ。挿絵を見て、その場面で起きたこととその時の気持ちを照らし合わせ、心情曲線で表すことで場面毎のりいこの心情がどの辺りに位置するのかを丁寧に振り返ることができた。最後に、曲線が大きく傾いたところが、中心人物りいこの気持ちが変わったところであることを視覚的にも捉え、理解を深めた。



話し合い活動の様子



タブレットの心情曲線

（3）２年生「スイミー」

物語の中で、中心人物スイミーがどんな生き物に出会ったのか比喩表現に着目して読み取りを進めた。比喩で表現されている生き物の実際の姿を具体的にイメージできるように、写真や具体物を提示したり、動作化を取り入れたりすることで、子どもたちの想像力を高める一助とした。具体的に生き物の姿をイメージしたり、動作化を取り入れたりしたことは、子どもたちの想像力を高めるだけでなく、スイミーの心情そのものが反映されていることに気付く手がかりとなり、興味深く読み取りを進めることができた。



生き物の写真



具体物を活用した動作化の様子

（4）　1年生「やくそく」




ペープサートを動かし、あおむしの動作や位置を確認する様子

物語全体を通して、会話文や様子を表す言葉が多く、登場人物の感情や行動を読み取り、具体的に情景を想像しやすい教材である。しかし、登場人物の3匹の「あおむし」には名前がついていない。そこで、誰が何を言い、どういった行動をとったのか正しく読み取るために、挿絵を活用したり、ペープサートを動かしたりすることでどの「あおむし」がどこで何をしているのか正しく捉えられるようにした。また、「いいあい」や「おおげんか」といった児童にとってなじみのある表現もあるが、「目をまるくする」といった慣用句的な表現も使われており自分の経験と結びつけることで語彙をより豊かにすることができた。その上で、「あおむし」たちの気持ちを想像し、音読で表現することにつなげた。音読の様子を班毎にタブレットで撮影し改善点を見つけては修正を重ね、まとめの音読発表会を行った。自分たちの音読の様子をタブレットで見返し確認するという活動は、よりよい音読を自発的に目指す活動としてもとても有効であった。




音読をタブレットで撮影している様子

（5）　4年生「ごんぎつね」




ワークシートに言葉を抜き出して記入している様子

物語の1から5場面の多くは、主人公であるごんの視点で描かれているため、ごんの気持ちやその変化が捉えやすい。一方、6場面では、兵十の視点での描写が多く、両者の気持ちのすれ違いに気付くことができる。ごんと兵十のそれぞれの気持ちが書かれている言葉に色分けして線を引いた。さらに、ワークシートに言葉を抜き出して記入し、それぞれの気持ちの変化を考えた。また、兵十の「ばたりと取り落とした」や兵十の目線が、「うちの中→くり→ごん」へと移動していることを動作化することで兵十の気持ちの変化を捉えた。叙述に基づいて両者の心情の変化を捉えることで、償いを続けるごんの気持ちが兵十になかなか届かず、ごんの気持ちに気付いたときには既に取り返しのつかない状況となってしまったことから、「心のかよいあい」の難しさを深く感じることができた。また、本文に散りばめられている情景描写が登場人物の気持ちを反映していることにも気付き、そこから感じ取ったことを友達と伝え合うことでさらに読み取りを深めることができた。

（6） 6年生「やまなし」

本校の現職教育の研究主題にある「子どの問いを生かした授業づくり」を単元を通して重点の１つに置き授業を行った。初発の感想から拾い上げたり、毎時間まとめの時間に必ず問いをもたせるようにしたりした。毎時間、子どもたちの中から上がった問いから「めあて」を提示することで、子どもたちが主体となり自発的に問題解決に向かう姿が見られた。また、本文中のオノマトペや比喩、色彩表現にサイドラインを引き、ワークシートに記入することで表現の工夫に焦点を当てさせた。子どもたちは、着目すべき点に自然と焦点を当て、できた。その上で、「やまなし」という題名で物語を読んだとき、どのような印象をもつかをグループで話し合い、ホワイトボードにまとめ、学級全体で意見交流をした。



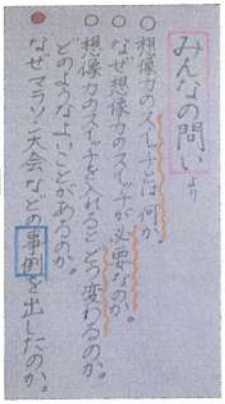
オノマトペを確認する様子



ホワイトボードにまとめる様子

（7） 5年生「想像力のスイッチを入れよう」

５年生も研究主題である「子どもの問いを生かした授業づくり」を重点において、授業を進めた。初発の感想から、問いを拾い上げ、「みんなの問い」」として掲示した。毎時間、前時の問いを生かして「めあて」を考えるに当たり、この掲示物はとても有効であった。また、説明文の特徴を習得させるためにワークシートの表にまとめさせた。事例と意見を表に整理することで、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することにつなげることができた。このように毎時間、表に整理することを繰り返すことで、子どもたち自らで、事例と意見が順番に繰り返されていることに気付き、説明文の特徴に自然に気付くことができた。さらに文末表現や接続語に着目させ、筆者の意見や考えの大事な部分を正しく読み取らせた。



みんなの問い



事例と意見を整理した表と板書

5　研究の成果と課題

各学年、児童の実態に応じて研究を進めた。現職教育の目標の中で達成できたことと課題として残ったことはあるが、全職員が共通理解をして研究を進めることができた。どの目標にも確実に近づくことはできたが、目標を意識しすぎるが上に、目標が先行となり、児童の実態とかけ離れてしまうこともあった。また、検討を重ねた指導案であっても計画通りに進めることができず、足踏みしてしまうこともあった。改めて、子ども達と一体となって授業を作り上げることの難しさを痛感した。しかし、このように課題が明確になることは、本校の現職教育として確実に前進している証拠である。教師がファシリテーターとなり子ども達の学びに向かう姿から目標とするものが少しずつ見え始めた。来年度、さらにステップアップし、全職員で現職教育を進めていきたい。

目次へ

研究主題	自ら学び考える、心身共に健やかな児童の育成		
副　　題	～異学年交流や全校交流を通して育む豊かな心～		
学 校 名	一宮市立大和東小学校	校 長 氏 名	長谷川　伸弘

1　めざす子ども像（学校教育目標より）

・よく考える子　　よりよく問題を解決する資質や能力
・心豊かな子　　感動する心や自らを律しつつ他人を思いやる心
・強くたくましい子　　たくましく生きるための健康や体力

2　主題設定の理由

本校は、全学年４クラス（特別支援３クラス）を構える市内有数の大規模校である。児童数が多いため、長い休み時間には、安全に配慮するために、運動場や図書館を使用するクラスを分けなければいけないなどの制限がある。しかし、その一方、数の多さを生かした強みがある。それは、行事の際の迫力である。殊に、スポーツ大会での学年演技や、学習発表会での全員で心を揃えて歌う合唱は、迫力があり大変すばらしく感動する。

それに加えて本年度は、さらに本校の強みを作るために、「異学年交流」や「全校交流」の機会を増やしたいと考えた。高学年はリーダーとしての資質向上や思いやりを、低学年はそんな高学年の姿を見ることで、高学年を慕う気持ちを体得するために有効である。そして、それぞれの立場で互いに認め合うことで、クラス以外にも「居場所づくり」ができ、豊かな心が育まれると考えた。

3　研究の計画（異学年交流と全校交流の年間計画

月日	取　り　組　み	内　　容
4/9	1学期通学団集会	班長を中心に通学班での登下校のルール確認
4/13	なかよし集会	ペア学級の児童との対面、自己紹介ゲーム
6/7	ペア遊び①	ペア学年ごとにそれぞれ運動場・屋内運動場・教室に分かれて遊ぶ
6/13	ペア読み聞かせ①	低学年が高学年に本を読み聞かせる
7/16	サマーフェスティバル	代表委員が進行を務め、教室で低学年と高学年が協力し合うゲームをする
9/13	ペア遊び②	ペア学年ごとにそれぞれ運動場・屋内運動場・教室に分かれて遊ぶ
10/9	ペア読み聞かせ②	低学年が高学年に本を読み聞かせる
11/1	スポーツ大会全校交流会	学年の演技を全校で鑑賞し合う
12/12	2学期通学団集会	「じまんできる通学班」に向けて、振り返りをし、以後に生かす
12/18	ウインターフェスティバル	代表委員が進行を務め、教室で低学年と高学年が協力し合うゲームをする
1/23	学習発表会の全校交流会	学年の演技を全校で鑑賞し合う
2/5	ペア読み聞かせ③	低学年が高学年に本を読み聞かせる
2/10	なかよし集会	ペア学級の児童とともに１年間の交流を振り返る
2/14	ペア遊び③	ペア学年ごとにそれぞれ運動場・屋内運動場・教室に分かれて遊ぶ
2/20	3学期通学団集会	次年度の班長と副班長に引き継ぎをし、1年間の振り返りをする

4　研究の仮説

ペア学年や通学班集会等の異学年交流、並びに学年の取り組みを全校で鑑賞する全校交流の場を多く設定すれば、学年の発達段階に応じて、豊かな人間性や社会性を育むとともに、自尊感情（自己肯定感・自己有用感）を向上させることができるであろう。

5　研究の実際

ペア学年　1・6年／3・5年／2・4年（ペア学級は、学年で相談して決める）

(1)　なかよし集会

ペア活動の初めと終わりに「なかよし集会」を行った。

5月の初めの会では、お互いのことを知るために「自己紹介ゲーム」や「たけのこニョッキ」などのゲームを行った。最初緊張していた児童もだんだんと打ち解ける様子が見られた。1年間のペア交流のまとめとして2月に行った感謝の会では、1年間一緒に活動してきた仲間として初めから楽しそうにふれ合い、「これからもまた遊ぼうね。」と声をかけ合うなど、確実に学年以外の交流の幅が広がっていることがわかった。



なかよし集会の様子

(2)　ペア読み聞かせ

学期に1回「読書週間」の期間に設定した。通年で取り組んでいる毎週水曜日の朝の10分間を活用した。

高学年の児童は、事前に図書館で本を選び、休み時間等に読み聞かせの練習をした。本を選ぶ際には「この絵本なら喜びそう。」「これはいい話だから読んであげたい。」などの声が聞かれた。高学年として、低学年の立場に立った相手を思いやる気持ちに溢れた光景だった。

低学年の児童が一生懸命に話を聞く姿もほほえましく、読書で心の栄養を満たすとともに、気持ちも満ちた時間になった。



ペア読み聞かせの様子

(3)　ペア遊び（学年単位）

ペア読み聞かせ同様、学期に1回設定し、運動場、屋内運動場、教室の3会場をそれぞれ順番に使用して遊んだ。学年の「児童会担当」の教員が相談して遊びを決め、協力して進行した。運動場ではボールや遊具を使った遊びを、屋内運動場では音楽に合わせて「ジャンケン列車」などをした。教室では、椅子を使った「なんでもバスケット」を行った。ペア遊びの日は掃除をなくし、中間放課と合わせて時間を確保し、2限後から3限の前に行った。25分間ではあったが、児童たちはペア学年の児童たちとそれぞれの遊びを楽しんでいた。

(4)　サマーフェスティバル・ウインターフェスティバル

【フェスティバルの遊び】

①ジャンケン列車　②もうじゅう狩り
③震源地（リーダー）ゲーム　④言うことといっしょ　やることといっしょ
⑤爆弾ゲーム　⑥ゴリラとゴジラ

夏休み前と冬休み前にペア学級の教室で行った。内容は「ペア遊び」であるが、学期に1回のペア遊びは教師主導なのに対し、こちらは代表委員の児童が企画と進行を務めた。代表委員

の児童の大きな活躍の場であり、時間も１時間設定した。

持続可能なものにするために、極力事前準備を減らした。まず、簡単な説明で行うことができるゲーム６種類を代表委員会で決めた。その中から代表委員が中心になり、あらかじめそれぞれのクラスで行う遊びを３つ選ぶ時間を設けた。当日は、代表委員の司会のもと、順番にゲームを楽しんでいた。１時間たっぷり交流したことで、どの児童も満足そうであった。

(5)　通学団集会

本校は「じまんできる通学班」を合言葉に、通学班の取り組みを行っている。班長と副班長の意識を向上させ、教員の力を借りず自分たちで登下校できることを最終目標にしている。その目標を達成する手立てとして、「通学団集会」を行っている。4 月と 2 月は班編成を中心に行い、12 月は、今の通学班の状態を班長中心に振り返りをさせ、たりないところをどのようにすればよくなるかを話し合った。それに加えて月に 1 度の班長会（副班長会）も行い、リーダーとしての資質とやる気を育てている。

登校途中にけがをした低学年を気づかい、学校まで励ましながら登校したり、班員を安全に渡すために、赤に変わることを見越して信号の前で止まったりと、班長としての意識の向上が見られた。

(6)　スポーツ大会と学習発表会の全校交流会

本校は児童数が多いため、保護者にゆっくりと参観してもらうために、両行事共に全校一斉には行わず、低（特別支援）・中・高学年の 2 学年の部ごとに分けて開催している。従って、当日は、相手の１学年の演技や発表は見ることはできるが、その他（特別支援学級を含む）学年の演技や発表は見ることができない。

当日まで一生懸命練習を重ねてきた演技や発表であるため、全学年に見せてあげたいとの思いから、「全校交流会」を設定した。ペア活動で交流している異学年の友達や、通学班でのなじみの友達を見つけるとうれしそうに「がんばれ。」と声をかけたり、「かっこよかった。」と口々に話す姿が見られた。実際に鑑賞することで自分がその学年になったときのモチベーションになったり、ペアで交流している友達に見てもらうことでやる気につながったりと大変有効であった。

6　研究の成果と課題

12 月に実施した子どもの意識実態調査の結果では、「学校は楽しいですか。」の質問において、6 年生で「楽しい」と答えた児童の割合が市では 62.7%だったのに対し、本校は 71.8%と高かった。また、「自分にはよいところがあると思いますか。」の質問に対して、「思わない」と答えた全校の割合の平均が市では 5.91%だったのに対し、本校は 4.4%と低かった。本校の７月に行った同調査では 4.3%だったので低値で安定していると言える。

さらに、11 月に行った Q-U の「要支援児童」７名から２名に減少した。これは、異学年交流によって、クラスはもとより、クラス以外からも認められる機会が増えたことにより、自己肯定感や自己有用感が向上したことが一因であると考える。

しかし、課題もある。異学年で交流するということは学年間を超えるということであり、感染症が流行る時期は感染拡大が起こる可能性がある。事実、ウインターフェスティバル前後でインフルエンザ感染が広がってしまった。どのように両立していくかが問われる。また、持続可能なものにするためには、極力準備や当日の運営が簡素的で機能的でなければならない。これからも PDCA サイクルを回しながら、より効果的な方法を探っていきたい。

目次へ

研究主題	「わかった」「できた」に喜びを感じ，自ら学ぶ児童の育成		
副　　題	―個別最適な学びの視点を生かした授業づくり―		
学 校 名	一宮市立今伊勢小学校	校 長 氏 名	岩田　武志

1　研究内容

（1）主題設定の理由

全ての児童に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が効果的な指導を実現することや、児童一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどが必要である。本校の教育目標「心身とも健康で、確かな力と豊かな心を持った今伊勢っ子を育成する。」の実現にむけて、基礎基本の定着を図ることが、めまぐるしく変化するこの時代に、児童が将来への夢や希望をもち、自らのよさを発揮し、よりよい社会の創り手となる資質・能力を身につけることが大切であると考え、主題を設定した。

（2）研究の仮説

児童の実態を把握し、児童の興味・関心を高める課題や問題を把握させ，授業を展開する中で「指導の個別化」、「学習の個性化」を図っていけば、児童が主体的に学ぶ授業が展開できるだろう。

（3）めざす児童像

他者とのかかわりを通して、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む子

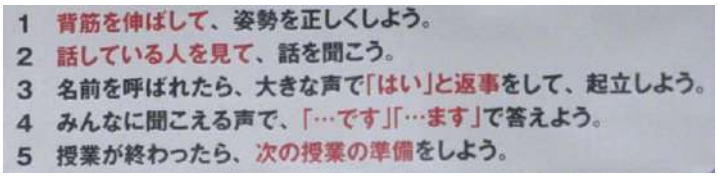
（4）具体的な手立て

①支援が必要な児童に、より重点的な指導を行うことなど効果的な指導
②特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を
③指導方法や指導体制の工夫、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段の活用
④自らの学習を調整する力を育成

令和５年度までに継続して取り組んでいる内容

＜基礎基本の定着をめざして＞

㋐「学習の５つの約束」【資料１】を習慣化する。
㋑基礎基本の学力を定着させるための工夫を、授業の中に計画的・継続的に取り入れて授業実践を行う。



【資料１】学習の５つの約束

㋒発問や切り返しの仕方を吟味し、授業実践後評価をして、次時につなげる。
㋓「わかった・できた」を支援するために、〇付け法や復唱法、ペア学習や授業のユニバーサルデザインの視点を適宜取り入れる。
㋔自分の考えを説明したり、他者の考えをもとに自分の考えを再考したりする場面を設定して、考えを深める。
㋕朝のスキル学習の時間（水・金）を使って、漢字の読み書きや計算問題に何度も取り組み、定着を図る。

㋖学級および児童一人一人の学習理解度を把握し、学級全体や個々の弱点に対して効果的な支援を行う。（ＣＲＴ結果の分析、Ｓ－Ｐ表の活用）

＜温かい人間関係づくりをめざして＞

㋗「かかわり方スキル」の習得を目指したソーシャルスキルトレーニング、ピア・サポート活動を実践し、学び合う場を充実させる。

㋘心のアンケートやＨｙｐｅｒＱ－Ｕの結果を分析し、学級経営改善に生かす。

＜力量向上をめざして＞

㋙学期に１回、相互参観週間を設定し、教師の授業力を高める。

㋚他校への授業参観、研修会への積極的な参加を図る。

㋛外部講師を招き、全職員で研鑽を積む【資料２】。





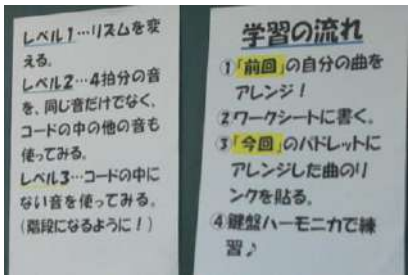
【資料２】外部講師を招き、全職員で研鑽を積む様子

２　研究実践

どの実践も、令和５年度まで継続して取り組んできた「基礎基本の定着をめざして」の内容を継続して取り組んだ上で行った。

①支援が必要な児童により重点的な指導を行うことなど効果的な指導

学習の見通しをもつことが難しいと感じる児童は多く見られる。音楽では、作曲時に楽器やワークシート、タブレット端末を併用して行っていく。次に何をしていけばよいかわからなくなるなど、学習の流れを見失わないように、掲示【資料３】を準備した。同時に、作曲のレベルを上げるためのポイントや段階を図示し、児童が自分で取り組むレベルを選択させるようにした。



【資料３】ポイントと学習の流れ

また、一斉読みでは文章を目で追いながら音読することが難しい児童も少なくない。そこで、算数の授業では、教科書の問題文を指で押さえながら読むよう促し【資料４】、着目する点や計算する内容について、児童の理解を確認しながら具体的に提示した。文章問題が苦手な児童は「何を聞かれているかがわからない」ことが一番多い。文章問題で「わかっていること」と「聞かれていること」に線を引き、「何を求めればよいか」をはっきりさせるようにした。



【資料４】指で視点を示す様子

②特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定

学級では、個々の特性や学習進度等の違いから一斉指導以外の指導方法や、個に応じた教材を提供・設定することが望ましい場面が多くある。

算数の授業では、理解度や計算の処理スピードの違いから、取り組む課題のレベルや問題数を変えて取り組ませた【資料５】。課題の負荷を調整し全員が達成感を味わうことができるようにした。



【資料５】取り組む課題を調整する様子

そして、全体での交流の前に、理解度や学習ペースが同じになるようにペアやグループを編成した。このような形で教えあいを行うことで、できる児童からできない児童への一方的な教え込みではなく、「いま自分が何をわかっているか」、「相手はどのくらいわかっていそうか」、「自分と相手の違いはどういうところにありそうか」という視点をもって話し合いが進められるため、できる児童とできない児童の双方にとって、実りある学びの形とすることを意図した。



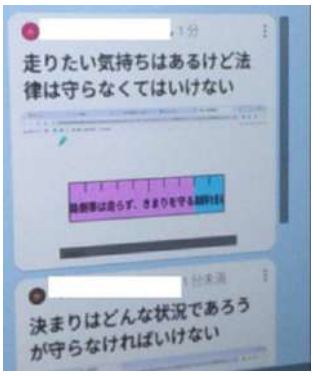
【資料６】違う資料をまとめる様子

また、国語では、資料で材料を調べ、どのような食材に変身するのかをリーフレットにまとめる学習がある。本で調べたいと思う児童もいれば、インターネットで調べたいと思う児童【資料６】もいる。どのような手段でも認め、児童が自分にあった調べ学習ができる環境を整えた。

③指導方法や指導体制の工夫、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段の活用

デジタル教科書をはじめ、様々なICT機器やアプリを活用して授業を行っている。

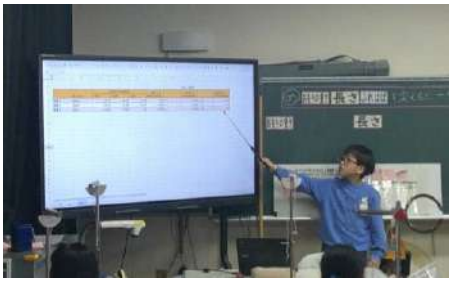
児童も多くの教科をタブレット端末のプレゼンテーションアプリを用いることで、考えたことや意見を即時に共有し、自分では気付けなかった新しい見方や意見を知り、考えを深めることができるようにした。



【資料７】即時に共有された意見

道徳では、意見とその理由をアップロードするだけで、意見の類型化ができ、心のものさしやその内容を確認しながら、意見交流ができるようにした【資料７】。

理科では、調べた実験結果を、表計算ソフトで共有を図ることで、お互いの検証で得られた複数の結果を集約し、より精度の高い考察を行い発表した。タブレット端末のプレゼンテーションアプリを用いることで、自分の考えや意見を即時に共有し、新しい視点を得ることができるようにした【資料８】。



②【資料８】実験結果を共有する場面

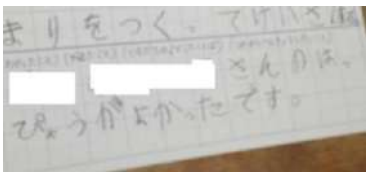
④自らの学習を調整する力を育成する。

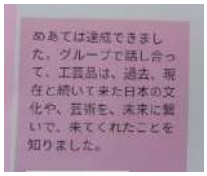
自分がどんなことを意識しながら授業に臨むのか、何ができるようになりたいのかを設定【資料９】させることで、児童一人一人が自分が設定しためあてを達成しようと粘り強く取り組むことができるようにした。授業の最後には、めあてに即したふりかえりをさせ、自らの学びを見つめ直すことで、学びを調整しながら、考えを深めていくことができるようした。

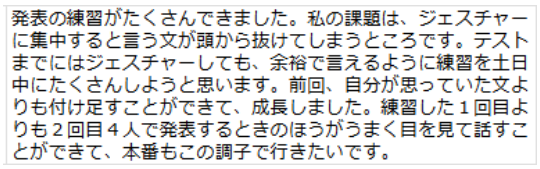
ふりかえりの方法は、発達の段階に応じて、ノートやワークシート、スタディログなどを活用して、まとめさせるようにした【資料１０】。英語では前時のスピーチ撮影動画やふりかえりを活用した。全体で共有したのち、本時でその姿をより良くするために個別に目標を立てさせた。また、ふりかえりシートを一つにまとめることで、単元を通して自分の考えや思考の変化に自分自身で気づくことができるようにした。ふりかえりの活動に生かされるような授業の好循環につながるようにした。

ごんはひとりぼっちだったのがひとりぼっちじゃなくなっているのか考えたい。みんなはごんが一人ぼっちかじゃないか話し合いたい。その時のごんの気持ちも読み深めたい。

【資料9】自らの学習課題（国語）







【資料１０】発達段階に合わせたふりかえり（左から低学年・中学年・高学年）

３　研究の成果と課題

今年度の 12 月に行った先生へのアンケートで「児童一人一人の理解に努め、個に応じた指導を行っているか」の項目に対し、「大いにそう思う・そう思う」と答えたのは 94.8%であり、大多数の先生がテーマについて意識したと言える。研究授業後には各学年で事後協議会を行い、有効であると感じた手立てや課題についてまとめた。

①国語の文章読解では、音声の読み上げを聞いた後、問いかけの答えとなる部分にタッチペンを使って線を引かせた。口頭では答えられない児童も線を引くことは可能だった。漢字の学習では、書き順が大きく、ゆっくり示されるため、筆順を意識して取り組めるようになった。（特別支援国語）

②練習問題は、2 つの難易度の問題を用意し、自分の理解度に合った問題を解かせた。自分の理解度にあわせた問題を解き切り、満足する姿が見られた。早く終わった児童の中には、次のレベルに挑戦する者もいた。しかし、毎回レベルに応じた問題を準備することが負担である。（１年生算数）

②学習方法（調べ方）を児童に選択させることで、児童が主体的・意欲的に学習活動に取り組むことができた。取り組みに時間がかかる児童への支援や助言の仕方が課題となった。十分な時間を確保するために、２時間続きで授業することを前提とした指導案であるとよかった。１時間で収めようとすると、ダイジェスト版のような授業になったので、授業は児童が学ぶ場であることを再確認して実践を行うべきであった。（６年生国語）

③プレゼンテーションアプリを活用することで、瞬時に意見を集約できた。発言が難しい児童も意欲的に取り組むことができた。自らの理解度に応じてアプリの背景を変えさせる工夫をしたことで、児童の理解度を一目で把握することができた。また、「いいね」機能があるので、「いいね」がたくさん集まった意見に注目させて、なぜ「いいね」と思われたかという理由を考えさせることで、学びの焦点化を図ることも可能となった。しかし、集まった情報を読み取るのに時間がかかるため、効果的な共有のさせ方を考えていく必要がある。（４年生国語）

④ふりかえりの記述を見ると、様子を表すことばをたくさん知っていると、相手に伝わりやすく分かりやすい文章が書けることや、他の教科の学習でも生かせることに気づくことができた児童が多かった。「めあて」に対する「まとめ」を確認した上で、「ふりかえり」に取り組ませるとよかった。指導案の段階でしっかりと区別をして把握しておく必要があった。（２年生国語）

以上のように、有効であったと感じる手立て多くあったと。しかし、多くの課題もあるために、改善を図りながら、さらなる「個別最適な学び」の研究をしていきたいと考える。今年度は「個別最適な学び」のみを取り扱ったが、目指す児童像にある「他者とのかかわりを通して、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む子」は「協働的な学び」の要素が組み合わさって実現されていくことが多いと考える。次年度は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことを課題とし、さらなる研究を続けていきたい。

目次へ

研究主題	課題解決に向け、すすんで活動に取り組み、他者と協働して学びを深める児童の育成		
副　　題			
学 校 名	瀬戸市立幡山西小学校	校 長 氏 名	福留　正康



【研究協議会の様子】

研究課題を、「課題解決に向け、すすんで活動に取り組み、他者と協働して学びを深める児童の育成」として、研究に取り組んだ。あらゆる学校現場において、体験的な学習や問題解決学習を重視し、自ら学ぶ意欲や能力を高める主体的な活動の仕方や学習の仕方を身につけさせることによって、めざす児童像にせまった。

めざす児童像とは、

① 自分の目標を持ち、課題に取り組むことで、自分に合った学習の仕方を知り、基礎基本を身につける子

② 自分や他者を理解し、互いの違いや良さを認め、互いに協力しようとする豊かな心をもつ子

③ 自分の体を知り、健康作りに励む子・身のまわりの危険に気づき、命を大切にする子

として、研究を工夫して取り組んだ。

実践したことは、課題解決に向け、見通しをもって学習に取り組めるよう、課題設定を工夫した。学び合いについては、ルールを定め、学び合いを通して、自分の思い・考えを深め伝える指導をした。

「読む（話す）・書く・聞く・考える」などの学習状況をバランスよく取り入れることで学習意欲を持続させ、基礎基本の徹底を図った。特に「話す・聞く」「書く」活動に力を入れ、自分の思いを相手に伝える力ら表現力の育成をめざした。

また、特に道徳指導の研究を推進し、充実した道徳指導を図った。

小学校と中学校の学習内容、指導方法に関する相互理解を深め、系統性のある指導に努めた。

ＩＣＴ機器を積極的に活用できるよう、指導方法や活用方法の共通理解を図った。

その他には、漢字・計算チャレンジテストを行い基礎・基本を身につける意欲をもたせる指導をした。

充実した学校行事、特別活動で個性を引き出し、集団の中で生かされる指導をした。児童理解と生活指導の充実を図った。

交流学級への授業参加など、個に応じた特別支援・教育支援のあり方を研究した。地域の特性を生かし、系統的な総合的な学習やキャリア教育の実践をした。また、スクールソーシャルワーカーを活用し、児童支援のあり方を研修した。

教員の授業力を高めるために、お互いの授業を公開する「オープン授業」を行った。各学年で指導案の検討を行い、よりよい手立ての研究を行った。また、授業後は、時間短縮のため、検討会を

行わず、ＩＣＴ機器を使った情報交換会とした。

学びを深める児童の育成に取り組んできたが、話し合いや他者と協働して、学ぶ姿勢は身についてきた。

しかしながら、その活動が学習理解の定着までには結びついておらず、今後の課題である。

本研究実践は、始まったばかりであるので、今後も教職員一同で、研修を深め、さらに学びを深められるようにしていきたい。



【情報交換会の様子】

実践経過・項目

月	研修項目	授業研究
4	全体会	
5	特別支援教育・通級学級概要及び全体計画	・学校訪問（特設２名、他公開） ・オープン授業
	実技研修（救急蘇生法）	
	授業研究	
6	実技研修（熱中症等対応指導）	
	学校訪問	
7	学校保健安全委員会（児童理解と健康管理指導）	
8	全体研究（ティーチャーズアカデミー）	
9	授業研究	・初任研授業研究（１名） ・中堅教諭（前期）（３名） ・中堅教諭（後期）（１名） ・オープン授業
10	授業研究	
	尾教研研修	
	福祉実践教室	
11	授業研究	
	福祉実践教室	
	学校保健委員会（未定）	
12	授業研究	
1	教科教育・キャリア教育・総合的な学習のまとめ	・初任研授業研究（１名） ・オープン授業
	授業研究	
2	現職教育のまとめ	
3	全体会（現職教育の反省・次年度の計画）	

※　毎週木曜日に情報交換会を行い、問題に対し対応のあり方を探っていく。

オープン授業について

- 各学年で指導案の検討を行い、よりよい手立ての研究をする。
- 全員オープン授業を行う。（学校訪問の特設授業や中堅教諭研修の研究授業を優先とする）
- オープン授業は検討会の時間は設定しない。
- 各学年で同じ指導案（略案学習過程が分かるもの A4１枚程度）で公開してもよい。

目次へ

研究主題	「心豊かに学ぶ子」「心豊かに遊ぶ子」の育成		
副　　題			
学 校 名	瀬戸市立東山小学校	校 長 氏 名	野田　敬資

１　主題設定の理由

「子どもたちが成人し、社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。」この言葉が述べられてから７年が経ち、その間に私たちの教育環境も大きく変化してきた。特に、タブレットの導入や、「指導の個別化」「学習の個性化」といった学びのスタイルの変化など、教育現場やその周囲の環境は急速に変容している。そのため、未来を生きる子どもたちには、これまでとは異なる資質・能力が求められており、それに対応した環境づくりが急務となっている。

瀬戸市立東山小学校の学校教育目標は、「心豊かによく学び、よく遊ぶ東山っ子を育成する」である。この目標は、大きく二つの側面に分けることができる。第一に、「心豊かに学ぶ」ことである。これは、子どもたちが自らの人生を切り拓くための基礎を養うことを目的としている。具体的には、協働的な課題解決能力の基礎を育むこと、そして「瀬戸を大好きな子ども」を育てることを重視してきた。第二に、「心豊かに遊ぶ」ことである。これは、子どもたちが豊かな人生を送るための基礎を養うことを目的としている。様々な活動を通じて、自己肯定感や有用感を高める取り組みを行ってきた。

本研究では、この二つの児童像に向けたバランスの取れた取り組みを通じて、子どもたちが自分のやりたいことを見つけ、自身やその周囲に対して PDCA サイクルを回しながら、未来を切り開く力を身につけることを目指す。そして、これまでの取り組みをスクラップ・アンド・ビルドしながら、新たな施策を取り入れることで、現代の実情に即した教育の実現を図りたい。

２　研究の内容

（１）　研究仮説

協働型課題解決能力の基礎を育む実践や自己肯定感・自己有用感を高める取り組みを行うことで、今日が充実して楽しい学校・明日が待ち遠しい学校になるであろう。

（２）　研究の手立て

【手だて①】ICT の導入

瀬戸市で導入された ICT 機能を積極的に活用・検討することで、子どもたちに多様な学びの機会を提供する。



【手だて②】一人一公開授業の改善

授業者が『授業メモ』を作成し、共有することで、教師の指導力向上のための視点を明確にし、より意義のあるものにする。

【手だて③】ハッピースマイルタイムの改善

自己肯定感や自己有用感を高めるために、SGE や SST の概念を取り入れたハッピースマイルタイムを実施してきた。今後は、この取り組みを中学校区で統一し、さらに卒業生が戻って関わることで、その意義をより深める。

【手だて④】総合的な学習の時間の改善

総合的な学習の時間を、子どもたちの興味・関心を基に構成する。子どもたち自身が課題を設定し、環境整備（観察池の整備やベンチなどの憩いの場の作成など）を実際に行い、振り返ることで、主体的に学ぶ力を育成する。

３　研究の実際

【手だて①】　ICT の導入

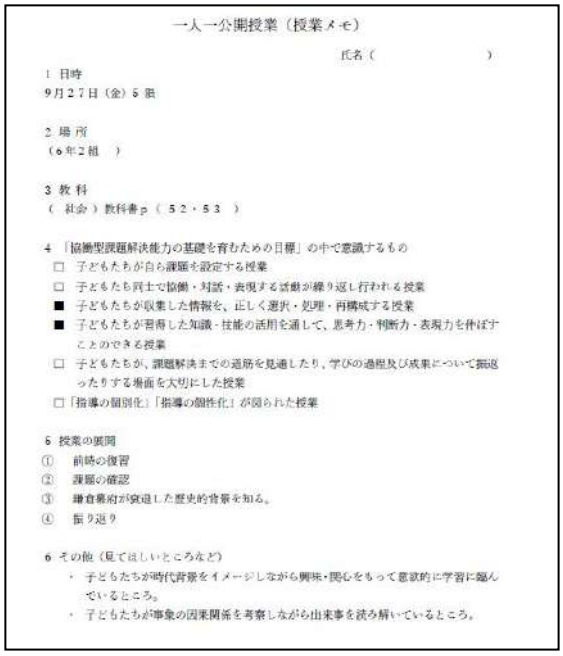
市で導入されているタブレットのアプリやブラウザ上のシステムについて、現職教育をいち早く実施し、先生方に周知・実践してもらうよう努めた。昨今は説明書だけでなく動画も用意されており、各自で学ぶことが可能である。しかし、リアルタイムで一緒に研修を行うことで、「実際に使うものだ」という意識がより高まった。

また、教師が必要なスキルを統一して身につけることで、来年度の開始時には、2～6 年生の児童は基本的なスキルをすでに習得している状態となり、多少の復習を行うだけで本題に入れると考えられる。

研修後の反省では、「ステップ・バイ・ステップの ICT 研修はとても助かった」「機能について詳しく教えてもらえたので、多くの授業で活用できた」など、前向きな意見が多く寄せられた。

【手だて②】一人一公開授業の改善

本校の一人一公開授業は、昨年度までは指導案を作成せずに実施していた。これは、教師同士が自然にお互いの授業を見られるようにすることや、肩の力を抜いた雰囲気の醸成、働き方改革など、さまざまな意図があった。しかし、経験の浅い先生からは「見学してもどこに注目すればよいのかわからない」、経験のある先生からは「見てほしいポイントがあったのに、振り返りの時間で話題にならなかった」といった声が上がり、それぞれのニーズに合わないものになってしまっていた。



一人一公開授業（授業メモ）

氏名（　　）

1 日時
9月27日（金）5 限

2 場所
（6年2組　）

3 教科
（ 社会 ）教科書p（ 52・53 ）

4 「協働型課題解決能力の基礎を育むための目標」の中で意識するもの
□ 子どもたちが自ら課題を設定する授業
□ 子どもたち同士で協働・対話・表現する活動が繰り返し行われる授業
■ 子どもたちが収集した情報を、正しく選択・処理・再構成する授業
■ 子どもたちが習得した知識・技能の活用を通して、思考力・判断力・表現力を伸ばすことのできる授業
□ 子どもたちが、課題解決までの道筋を見通したり、学びの過程及び成果について振返ったりする場面を大切にした授業
□「指導の個別化」「指導の個性化」が図られた授業

5 授業の展開
① 前時の復習
② 課題の確認
③ 織倉幕府が衰退した歴史的背景を知る。
④ 振り返り

6 その他（見てほしいところなど）
・ 子どもたちが時代背景をイメージしながら興味・関心をもって意欲的に学習に臨んでいるところ。
・ 子どもたちが事象の因果関係を考察しながら出来事を読み解いているところ。

そこで、今年度は「授業メモ」を作成することとした。この「授業メモ」は A4 用紙 1 枚にまとめ、①授業の日時、②場所、③対象学年・クラス、④単元名、⑤学校教育目標に掲げる「協働型課題解決能力の基礎を育む」視点のうち、どこを意識して授業を行うかを明記するようにした。

「授業メモ」を導入したことで、経験の浅い教師でも授業のポイントを絞って発言できるようになり、振り返りの場でも意見が出しやすくなった。また、授業を公開した教師にとっても、自身が気になっていた点について指摘を受けることで、より深い学びにつながるようになった。さらに、「授業メモ」を教科書のページとともにクラウド上で共有することで、事前に教科書を確認する手間が省けるほか、紙を忘れるといったミスも防ぐことができた。

【手だて③】ハッピースマイルタイムの改善

東山小学校では、「ハッピースマイルタイム」と称し、SST（ソーシャルスキルトレーニング）や SGE（ソーシャルグループエンカウンター）の考え方を取り入れた活動を実施している。今年度は主に二つの取り組みを行った。

一つ目は、中学生が登校前に母校の小学校に立ち寄り、2 年生～6 年生とハッピースマイルタイムを実施するというものである。中学生にとっては、母校で成長した姿を見せる機会となり、小学生にとっては、昨年度まで同じ小学校にいた先輩が来ることで緊張感をもちながら中学校の様子を聞く姿が見られた。

小学生の感想には、「中学生の先輩は丁寧な言葉遣いや質問をしていて、お手本になってくれた。自分も見習ってハッピースマイルタイムを頑張りたい」「小学校と同じやり方で楽しく話せたので、またやりたい」といったものがあった。一方、中学生からは、「中学校では課題ややることが多く、大変なこともあったが、小学生の夢や目標を聞くうちに、自分が何のために何をするのかを改めて考える機会になった」といった声が聞かれた。同じ学校で育った経験があるからこそ、お互いに素直に話ができたようである。

また、教員にとっても、小学校の担任は卒業生の成長を実感でき、中学校の担任は「中学校生活では分からなかったが、小学生のころは後輩の面倒を見ていたのだ」と気付くことができるなど、児童理解の深化につながった。

二つ目は、ブロック内の 3 校における 6 年生の交流活動である。6 年生は、5 時間目に中学校の授業を参観し、6

時間目には体育館でハッピースマイルタイムを実施し、中学校生活に関する不安や疑問について話し合った。同じ取り組みを３校で統一して行ったことで、小学生たちもリラックスして活動に参加し、温かい雰囲気の中で意見交換をすることができた。その後の質疑応答でも、６年生は自分ごととして捉え、積極的に発言する様子が見られた。

【手だて④】総合的な学習の時間の改善

総合的な学習の時間において、探究的な活動を実施した。子どもたち自身の課題意識をもとに活動し、評価を行う形で進めたが、当初は教師自身もどのように進めるべきか戸惑う姿が見られた。しかし、子どもたちに問いかける中で、教師の想定を超える課題意識が生まれ、何とかスタートを切ることができた。

本校の児童は、指示されたことには積極的に取り組む傾向があるが、未知の課題に対しては、自分たちの力でどこまでできるのかが分からなかったり、課題が漠然としすぎていて何から手をつけてよいのか分からなかったりする姿も見られた。しかし、児童が実際に行動を起こす中で課題にぶつかると、サポートに入る教師や外部講師の力を借りながら試行錯誤し、うまくいかないことを経験することで、新たな課題を見つける姿が見られた。こうして、子どもたち自身の手でPDCAサイクルを回していく様子がはっきりと見て取れた。

また、この探究的な活動を、他校の児童や自校の児童に向けて発表することで、自らの学びを振り返る機会ともなった。

４　成果と課題

【手だて①】ICTの導入

新しいアプリやシステムを全員で共有することで、児童・職員ともに安心してICTを活用できる環境を整えることができた。一度導入してしまえば、翌年度からは１年生に教えるだけで済むため、初年度の苦労を乗り越えれば、あとは継続的に改善していくだけでよい。また、考えを共有できるシステムを活用することで、学習の効率化・多様化・共同学習の促進といったメリットも生まれた。

一方で、課題としては、現在のシステムを「いつ・どこで・誰が」指導していくのかが明確に決まっていない点が挙げられる。また、新しく本校に着任する教師に対して、どのようにICT活用を伝えていくのかについても、計画を立てていく必要がある。先進校の事例を参考にしながら、本校に適した形で導入を進めていきたい。

【手だて②】一人一公開授業の改善

「授業メモ」は、授業の展開やポイントを簡潔に把握できるツールとして、授業者・参観者の双方にとって有益であった。特に、経験の浅い教師にとっては、話し合いの際の会話のきっかけとなり、振り返りの場での議論が活発になった。

今年度は導入の年であったため、全員にこの形式を適用したが、今後は従来の形式も選択できるようにし、より良い公開授業が行えるように努めていきたい。

【手だて③】ハッピースマイルタイムの改善

中学生との交流は、「中１ギャップ」の解消や、小中学校の教員の視野拡大という点で、教師・児童ともに意義のあるものとなった。班分けや異なる学年の児童生徒との交流には、教師の負担もあったが、子どもたちの感想からも、得られたものの大きさが伝わってきた。

また、以前から行っていた活動を見直し、スクラップ・アンド・ビルドを繰り返すことで、地域に合った形へと発展させることの重要性を改めて実感した。

【手だて④】総合的な学習の時間の改善

総合的な学習の時間を子どもたち主導で進めたことにより、普段の授業ではあまり目立たない児童が積極的に取り組む姿が見られたり、逆に、答えのある授業では生き生きとしていた児童が、何をすればよいのか分からなくなる様子が見られたりして、

活動する場所も、来年度に向けた腐葉土の作成や現在あまり使われなくなってしまった観察池やウサギ小屋の整備、本校２階にあるグリーンガーデンを憩いの場所にするためのベンチづくりなど、子どもたちの視点で周りのことを考えることができた。

また、小学生のうちに PDCA サイクルを自ら回す経験を積むことで、上級学校や社会に出た際に活かせる力が養われることが期待される。

これらの成果の一方で、教師の負担が増えていることは否めない。「働き方」と「働きがい」のバランスを取りながら、「心豊かによく学び、よく遊ぶ」児童の育成に努めていきたい。

目次へ

研究主題	学んだ知識・技能をはたらかせて、すすんで思考・判断・表現しようとする児童の育成		
副　　題	日常的な授業改善を通して		
学 校 名	春日井市立勝川小学校	校 長 氏 名	村上　洋

１　はじめに

本校児童は、落ち着いて学習に取り組むことができ、与えられた課題に対して前向きに取り組む児童が多い。全国学力・学習状況調査の結果においても、愛知県や全国の平均点よりも高い結果となっている。しかし、自ら課題を設定することや自分の考えや思いを他者に伝えることを積極的に行うことができる児童は少ないため、児童自身が学び方や学ぶ内容を選択し、自ら学びを進めていく力を身に付けることが、本校児童にとって必要である。

本校は文部科学省が進めるリーディングＤＸスクール事業の協力校として、児童の情報活用能力の育成を図りつつ個別最適な学びと協働的な学びの充実や校務ＤＸを進めている。前向きに取り組む教職員が多く、常に最新の情報を取り入れながら日常的な授業改善に取り組むことができる環境である。

２　本年度の取組

（１）授業づくりの工夫

「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の学習過程を意識した授業づくりをする。各段階において、児童がより主体的に取り組めるように以下の内容を中心として取り組む。

ア　一人一台端末の環境を生かした授業実践と授業支援アプリの効果的な活用方法を探る。

イ　思考ツール（考えるための技法）を取り入れた授業実践。

ウ　パフォーマンス課題、ルーブリック評価の提示など児童が見通しをもって学習を進めるための工夫。

エ　児童が、各教科の「見方・考え方」を働かせながら学びを深められるような授業づくり。

（２）教職員の学びの充実

ア　年間で１人１授業を公開する。その中の学年１名が、研究授業を行う。

イ　各学期に１回ずつ、研究授業の時に講師を招聘し、指導・助言を賜る。

講師：中京大学 教養教育研究院　教授 泰山 裕 先生

ウ　学年部会において、公開授業の指導案検討・学習環境の見直しをする。

エ　定期的に学習会を開き、様々な視点（情報教育・特別支援・健康教育等）においての学びを広げる。

オ　チャットなどのリアルタイムコミュニケーションアプリを活用し、日常的に実践紹介をするなど、情報共有に努める。

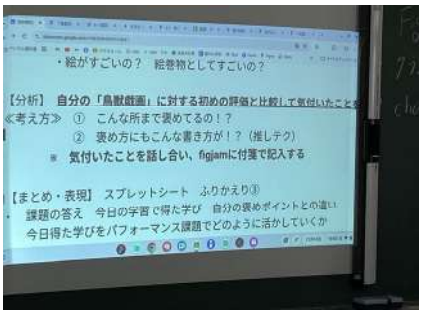
カ　情報教育・ICT 機器活用部会と連携し、ICT 機器を活用したより効果的な授業づくりをめざす。

３　取組の実際

（１）授業づくりの工夫

学習内容をスクリーンに映したり、タブレット端末で共有したりすることで、視覚化、共有化し、学習内容に見通しをもって取り組むことができるようにした。また、ルーブリック評価も児童に明示し、何ができるようになればよいのか、何のために学ぶのかを児童に分かるようにした。学習の過程においては、クラウド環境を活用し考えを共有したり、思考ツールを取り入れて自分の考えを整理・分析できるようにした。これらの学習過程を繰り返し行うことで、学び方を理解し、自らの力で学びを進める児童の姿が見られるようになった。

児童が自らの力で学びを進めるにあたって、教師が一人一人の学びを把握するために表計算アプリを活用した。クラウドに共有されている表に学びの進捗状況や理解度を児童が入力することで、教師が適切に支援することができた。児童自身も自分の学びの位置を客観的に捉えることができ、学びを進める意欲の向上にもつながった。



学習内容と評価の共有


クラウド環境や思考ツールの活用


学び方を選択する児童

（２）教職員の学びの様子

年間３回の校内授業研究会においては、校外からも多くの参観者にきていただくことができ、多様な意見を得ることができた。講師として招いた泰山先生からも、学びの価値を高めるための授業づくりについて話をしていただいた。授業者にとっては公開授業に向けて授業を考えること自体が学びにつながるが公開授業を終えてもまだ学び続ける授業者の姿があった。


校内授業研究会の様子

年間３回の授業研究会に限らず、校内での取組を日常的に共有したり、市内の先進校、市外・県外の研究校や各種研修会にも積極的に参加したりした。参加した教職員からはリアルタイムで情報の共有がなされた。また、自主研修会もこれまでに 3 回行い、教職員自ら学び続ける姿が見られた。


教職員による自主研修会

４　まとめ

教職員の前向きな取組や日常的な授業改善により、児童の学び方に変化が見られている。今年度の取組が来年度以降も継続できるよう、学校全体で学び合う環境作りをこれからも続けていきたい。

目次へ

研究主題	よく考えすすんで学びあう児童の育成		
副　　題	一人一台端末の効果的な活用を通して		
学 校 名	春日井市立篠木小学校	校 長 氏 名	原　伸和

１　はじめに

本校では、令和元年度より４年間、実践的なスキルを身に付けるための取組として、「授業のユニバーサルデザイン化と見方・考え方を働かせた授業の追究」をテーマに「授業・人的環境・学習環境の UD 化」を進め、すべての児童にとって分かりやすく、学びやすく、合理的に配慮された教育活動を進めるための研究を進めてきた。

令和５年度から、これまでの研究で培った力を基に、本校の教育目標である「よく考えすすんで学ぶ子」「なかよく助け合う子」「健康でたくましい子」に改めて着目し、この教育目標を備えた児童を育成していくための取組を行っている。今年度は、「よく考えすすんで学ぶ」力をさらに伸ばし、さまざまな事象に対して児童が「自己選択・自己決定」できるようにするために、昨年度の研究結果を踏まえ、一人一台端末をより一層有効に活用した実践に取り組んできた。発達段階に応じて積極的に学習活動の中に ICT 機器を用いることで、言語能力と同様に重要な学習の基盤となる資質・能力である情報活用能力の育成を目指した。自他の考えを可視化したり、共有したりすることでよく考え、学び合うという相互作用の深まりのある授業づくりを検討し、実践を重ねてきた。

２　本年度の取組

○　授業公開

個人および学年での研究･･･授業公開期間を設定（１０月～）し、全教員が１回以上、一人一台端末の効果的な活用を意識した授業を作成・公開・参観した。評価の視点から授業改善を図れるように、本時のめあてと評価基準を明確にし、どの場面で端末の効果的な活用がなされたのか意見交流を図った。

① 事前に、授業者が本時で児童に身に付けさせたいこと、端末の活用の場面を示す（教務が取りまとめ、一覧に示す）。
② 参観者は、Google チャットを用いて端末の活用や改善点・よかった点についてリアルタイムで書き込みをする。
③ 授業後、授業者は、参観者が書き込んだ意見を参考に、本時で児童に身に付けさせたかったことが、どの程度身に付いたか、端末が効果的に活用されていたかを振り返る。

３　成果と課題

ア　教師の変容

全ての担任教師が授業実践をしたことにより、端末を使った授業のイメージが明確になり、学年間の教材の共有はもちろん、学年を超えたところでの端末の活用の工夫や考え方を共有することができた。また、授業者は、記入された Google チャットを見ることで、端末が効果的に活用されていたかどうかを複数の先生の視点から振り返ることができ、次からの授業に生かせるよいフィードバックとなった。

授業を公開するための準備段階から、児童の基礎的な情報活用能力を向上させる必要があることに気づき、日常的に端末を使用することに前向きな姿勢が見られた。さらに、端末を使った実践をするための知識や技能をもっと身につけたいという意見や、児童が今後さらに使用を拡大する際に考えられる問題点を指摘する教師もあり、端末を使った授業を今後も前向きに取り組んでこうとする意識の向上が見られた。

イ　児童の変容

授業を公開することで、すべての学級・学年で端末を使うことに対する心理的なハードルが下がり、学年や学級間での使用時間や頻度の差が縮まってきた。その結果、低学年であっても、文字入力がスムーズに行える児童が増え、さらに端末を活用する時間が増えるという好循環が生まれるようになった。また、端末を使用することが当たり前の環境になったことから、端末を学校に持ってこない児童や充電がなくて使用することができない児童の数が劇的に減少した。端末を活用することで他者参照・意見共有が容易にできるようになったことで、児童が思考する時間や自分の意見を主張する時間を従来よりも多くとることができた。そのため児童が様々な場面で「自己選択・自己決定」する姿が昨年度よりも多くみられるようになった。



対面での意見共有





クラウド上での他者参照・意見共有

ウ　課題

教師に対しては、ミニ研修会や模擬授業、ミニ勉強会など、全体で行う会以外にも様々な取り組みを行うことができれば、さらなる活用もできたのではないかと考える。学習会を重ねたり、実践を重ねたりしたことで教師の意識が高まり、情報モラルについての研修やさらなる情報活用能力向上のための研修・学習会を求める声が多く挙がったが、すべてに対応することができなかった。カリキュラムマネジメントや指導と評価の一体化など、別の学習会を開いてほしいという要望もあったため、さらなる教職員研修が必要であると感じた。

また、端末を活用した本格的な実践が 2 年目ということもあり、多くの児童が端末を有効的に活用することができていた。しかし、端末を活用して他者参照や意見共有を多くできても、形成した自分の意見を正しく主張したり、伝え合ったりする場面に課題があった。今後は、端末活用と並行して、自らの意見をきちんと主張できるコミュニケーション能力の向上が課題である。

4　まとめ

今年度の取り組みで得た端末を日常的に使って授業するベースを活かして、さらなる授業研究が進めていけるような仕組みづくりや、研修の計画、今年度の課題であるソーシャルスキルの向上のための計画を立てていきたい。

目次へ

研究主題	自ら学び　高め合う　城東の子		
副　　題	温かな人間関係をベースとした、子どもの問いから始まる学びを通して		
学 校 名	犬山市立城東小学校	校 長 氏 名	後藤　栄吉

１．はじめに

本校は、丹葉地方教育事務協議会より、令和６年から２年間、犬山市教育委員会より令和５年度から３年間の委嘱を受け、「自ら学び　高め合う　城東の子」を主題として研究に取り組んでいる。令和５年度から犬山読解力①を身につけさせるために、「問いづくり」に着目をして研究を進めている。教材を深く読み込み読解することを通して、「問い」がうまれ、もっと知りたいという気持ちが、児童の主体的な態度を育むであろうと考え実践を繰り返している。研究は、「授業づくり」チームと、「温かな人間関係づくり」チームを組織し、児童がもつ素養をさらに伸ばし「自ら学び　高め合う　城東の子」実現を目指している。

※①犬山読解力とは、言葉の意味と働きを理解し、正しく豊かに使い、問題解決に活かす力と定義している。犬山市では、この読解力を「言葉の意味や働きを適用させる力」と捉え、正しく豊かな読解力の向上に取り組んでいる。

２．令和６年度の主な取り組み

犬山読解力を身に付け、深化した学びの中で生まれる児童の「問い」 なぜ？ 知りたい！を大切に授業改善に取り組んだ。

４つの「できる」を目指して！

〇温かな人間関係を育む学級経営を！

・温かな雰囲気の中で児童が協働的に問題解決できる

〇子どもの問いから始まる学びを！

・子どもの「問い」を引き出す授業をすることで、児童が主体的に学習に取り組むことができる

〇考え学び続ける教師集団に！

・教師が楽しんで目の前の児童にとって最適な授業ができる

〇教師がやりがいを感じ、力を発揮できる学校に！

・よりよい学校作りをするために、教師が自分の強みを発揮して活躍できる

３．授業実践

令和６年１１月２７日に、外部から２８名の参加者が来校し、公開日相互研修授業を実施した。

実践①令和６年１１月２７日（水）授業公開　低学年　３年２組　曽我　麻里子　教諭

〇算数「１けたをかけるかけ算の筆算」

◇単元を通した目標：１けたをかけるかけ算の筆算の仕方を考えたり、説明したりすることを通して、（２，３位数）×（１位数）の筆算の仕組みや仕方を理解し、計算できるようにするとともに、かけ算に進んで関わり、かけ算の筆算の仕方のよさや楽しさに気付き、生活や学習に生かそうとしている。

授業のめあて：かける数が３で答えが４５６になるとき、かけられる数はいくつになるか考えよう。

◇問いを生ませるための手立て

・児童が違和感や規則に気付きやすいように、問題の提示の仕方や板書の書き方を工夫する。
・個の違和感や気付きが集団の課題になるように、グループの話し合いの時間を多くとる。

実際：４１×３＝１２３、７８×３＝２３４、１１５×３＝３４５という教師からの問題を解いていく中で、答えの連続性やかける数がすべて３になっていることに気が付いた子ども達のつぶやきをどんどん拾って、めあて（□×３＝４５６）を作った。めあてができるまでには３０分を要したが、熱心に課題に取り組む姿が見られた。個に応じて、教えたり、聞いたり、仲間が解けるまで待ったり、自力で課題解決を目指し取り組んだりと個別・協働的な学びが展開できた。



【　公開日相互研修授業　算数の様子　】

実践②令和６年１１月２７日（水）授業公開　高学年　６年３組　体育館　新崎　梨恵　教諭
〇保健体育「器械運動（マット運動）」
◇単元を通した目標：自分に合った回転系や巧技系を組み合わせて行うことができる。
授業のめあて；見本の動画に近づくよう、どのポイントが必要か見つけよう。
◇問いを生ませるための手立て
・回転系の見本動画や資料と自身が行った技の動画を見比べることで習得させる。

実際：３１名の児童に１０枚のマットを用意し、技ごとに分かれてお互いにアドバイスし合いながら、回転技・巧技系の組み合わせた練習を行った。運動時間を確保するために、教師は多くを語らず、教師は学びを子どもに委ね支援に回った。子ども達は、タブレットを活用しながら、お互いの技を高めていくことができた。学ぶ必然性、目的を子どもたちが理解しているからこそ、児童に学び委ねることができその結果、豊かな学びが成立した。



【　公開日相互研修授業　体育の様子　】

公開授業アンケート結果（来校者有効回答１６名）
Q「問い」が生まれる場面設定について、教師にとって新たな学びがあったか。
はい：１００％　　いいえ：０％
Q問題解決のための手立てについて、教師にとって新たな学びがあったか。
はい：９３．８％　　いいえ：６．２％
Q児童の協働的な学び合いを活性化させる手立てについて、教師にとって新たな学びがあったか。
はい：１００％　　いいえ：０％
Q「問い」が生まれる場面設定での学び
参観者評価　・「問い」を生み出す仕掛けがよい　・思考ツールの提示がよい
・子どもの「問い」を、めあてに設定することがよい
・教師の発問の仕方が参考になった　など
Q「協働的な学び」について

参加者評価　・子ども同士が自然に教え合っていた　・友だちの気付きを聴き合い、共有することによって、問いが生まれるという流れがスムースだった
・教師の仕かけに対して素直に反応するだけじゃなく、疑問を見つけ「問い」につなげられる力がついている　など

４．研究３年次に向けて（R5･R6 児童アンケート分析結果概要）

令和７年１月末に全児童を対象に、学びのアンケートを実施した。（児童数４８１名）

○生活について

表面的な交流は増えているものの、深い関わりや思いやりの表現が不足している

→意識的に優しい言葉を使ったり、友達の良さを認めたりできるようにするための工夫や手立てが必要であろう。

◇　学級力レーダーチャートに、言葉遣いに関する項目を入れる

◇　教員が言葉遣いやよいとこ見つけのモデルとなる

◇　「ふわふわ言葉リレー」、「ありがとうカード」等児童のポジティブな活動の機会を増やす

◇　ペア・グループ・チーム・クラス単位で、協力が必要不可欠な活動や課題を増やす

全校平均比較

生活アンケート

年度	1. 学級で決めた目標（学級訓など）を覚えている	2. 学級で決めた目標（学級訓など）を意識して行動している	3. 友達と話しやすい	4. 友達にあいさつをしている	5. 友達に優しい言葉遣い（ふわふわ言葉）で話している	6. 自分が困っているときに、友達は助けてくれている	7. 自分が困っているときに、友達や先生に「分からない」「助けて」などと、助けを求めることができている	8. 困っている友達に優しく声をかけることができている	9. みんなで決めたことに協力している	10. よりよい学級にするために、みんなで話し合って決めたことを行動している	11. 友達はあなたの良いところを認めてくれている	12. 自分のことが好き	13. 毎日運動をしている	14. 毎日早寝・早起きをしている	15. 毎日朝ごはんを食べている	16. 給食は残さず食べている	17. 「いただきます」「ごちそうさま」など、感謝の気持ちをもって言っている	18. 身の回り（靴下脱ぐ等）や学校をきれいにする心・安全に気をつけている	19. 不安や失敗を恐れずに、いろいろなことに取り組んでいる	20. 学校は楽しい	21. 教室は楽しい	平均
R5	3.5	3.31	3.78	3.54	3.43	3.6	3.4	3.48	3.5	3.36	3.42	2.99	3.18	3.02	3.79	3.45	3.73	3.69	3.21	3.49	3.59	3.45
R6	3.58	3.22	3.83	3.54	3.36	3.58	3.4	3.56	3.46	3.35	3.36	3.11	3.28	2.88	3.78	3.34	3.74	3.61	3.13	3.48	3.55	3.44
R5との差	0.08	-0.09	0.05	0	-0.07	-0.02	0	0.08	-0.04	-0.01	-0.06	0.12	0.1	-0.14	-0.01	-0.11	0.01	-0.08	-0.08	-0.01	-0.04	-0.02

学習アンケート

学年	1. 勉強は好き	2. 勉強は大切だと思う	3. 自分で考えることは楽しい	4. 学校の授業は好き	5. 話し合い活動では積極的に参加している	6. 友達の前で意見を最後まで聞いている	7. 友達の考えを聞くことは大切だと思う	8. 学級の友達との関わり合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている	9. 授業では友達との関わり合う学習が行われていると思う	10. 友達の前で自分の考えや意見を発表している	11. 授業では自分の意見を発表する機会がよくあると思う	12. めあてを意識して学習することができている	13. 授業で学んだことや自分が伸ばったことや困ったこと、乗り越えたりすることができている	14. 授業を振り返って次の学習に生かそうとしている	15. 授業の最後に、学習内容を基に振り返る活動を取り入れられていると思う	16. 授業で分からないことがでやすいことがあるときに、あきらめずに、がんばっている	平均
R5	2.96	3.72	3.18	3.21	3.21	3.64	3.81	3.19	3.45	3.05	3.07	3.18	3.19	3.19	3.15	3.43	3.29
R6	2.88	3.72	3.14	3.18	3.18	3.54	3.82	3.16	3.42	2.96	3.03	3.16	3.08	3.15	3.08	3.3	3.24
R5との差	-0.08	0	-0.04	-0.03	-0.03	-0.1	0.01	-0.03	-0.03	-0.09	-0.04	-0.02	-0.11	-0.04	-0.07	-0.13	-0.05

○学習について

「勉強や対話の重要性」は理解しているものの、最後まで粘り強く取り組むことができず、学習に向かう気持ちが低い

→学びを「楽しい」と感じる機会づくりや、聞く力の育成、粘り強さをもつための働きかけが必要である。

◇　学習への興味を引き出す取組（クイズ、ランキング、ミッション形式、ポイント制等）

◇　探究学習や体験学習の充実

◇　話を聞く土台作り（話している人を見る、途中で遮らない、反応を示す等の習慣化）

◇　聞くことの価値を高める（最後まで聞く、友達の意見を取り入れることで成功、理解できる経験を増やす）

◇　スモールステップによる成功体験の積み重ね

◇　「できた」を実感できる振り返り活動の実施

５．最後に

犬山読解力を基に授業研究を行っている。研究最終年の令和７年度も引き続き、「子どもの問いから始まる学び」いわゆる「問いづくり」の授業実践を積み上げていく。研究２年次までの取り組

みは、学級全体で「問い」の共有を通して、子ども達の「主体的・対話的で深い学び」を目指した。３年次では、その解決へのアプローチ方法を、子どもが自身の興味・関心や考えに合わせて選択・思考できるよう発展的改善を図っていきたい。

そのためには、教師が子どもの姿をよく見取り、計画・準備を行った上で、授業場面ではファシリテーターとして子どもに教えるよりも子ども一人一人の気付きや学びを引き出すことを意識する必要がある。アンケート結果により、子どもの達成感や満足感が不足していると考えられるため、学級で作り上げ「問い」が広がったまま単元が終わらないようにすることや、具体物の操作や実体験等、成果が目に見えて実感できる振り返り活動を用意していきたい。



【　研究協議の様子　】

目次へ

研究主題	感動がうまれる授業の創造		
副　　題	ウエルビーイングの向上を目指して		
学 校 名	江南市立宮田小学校	校 長 氏 名	水野　美華子

OECD ラーニングコンパス 2030 では、個人を含む社会のウェルビーイングを最終的な目的地として設定している。本校でも、その考えに則り、ウェルビーイングを高めるために重要となる生徒エージェンシーの高まりを目指す。（生徒エージェンシー：よりよいものにしようと変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）

本校では、生徒エージェンシーが高まる原動力は、学びの中の『感動』であるととらえ、「感動がうまれる授業の創造」を研究主題とした。

令和5年度より愛知県総合教育センター「自ら学ぶ力の育成に関する研究」の研究協力校となり、SWOT 分析と児童の現状、教員間の意識を把握・共有し、「自ら学ぶ力」を育成するためにどのようなことを優先的にすべきか、協議・検討を進めてきた。

本校では、「自ら学ぶ力」の育成のために、「学びの共同体研究会」の考え方を参考に研究を進める。ジャンプの課題（宮笑課題）を意図的に位置付けたり、教師と児童が単元の学びを共有したりして、授業に取り組んでいく。

ラーニングコンパスの中にも示されているAARサイクル（Anticipation「見通し・期待」、Action「行動」、Reflection「省察・振り返り」）を意識した授業計画を立て、学びの楽しさや学びの中での感動を実感する手だてを実施することで、「自ら学ぶ力」や、生徒エージェンシーの向上につながるようにしていく。

1 目指す児童像

友達と対話し、未知の問いにも夢中になって深く学ぶ姿

より具体的には、学びにおける次のような姿である。

① **感動や学ぶ楽しさを味わう。（本校における感動の捉え）**

- 「そういうことか」「○○（友達の名前）すごい」など、感嘆やリアクションなどの表現などを通して、問いを友達と考える中で生まれる。
- 未知の問いに「ああでもない」「こうでもない」とつぶやき、話を聴き合い、解決に向けて夢中になって力を合わせる。
- 自分の発言が解決につながったり、友達の考えを聴いて理解を深めたりして学ぶ楽しさを実感する。

② **生徒エージェンシーが高まる。**

- 未知の問いを解く中で、よりよい解決方法を生み出そうと責任をもって取り組み、選択・判断する。
- 振り返りから目標を設定するなど、AAR サイクルを回しながら学びに向かう。

③ **「できない」「わからない」と自分から発信し、友達と協同して乗り越える。**

④ **未知の問いの解決への見通しをもちながら、解決しようとした過程を互いに認め、振り返り、次の問いに向かおうとする。**

2 研究仮説

仮説１

挑戦してみたいと思わざるを得ないような問い（ジャンプの課題：宮笑課題）を友達と力を合わせて解決しようとする活動を意図的に位置付ければ、子供は深く学ぶ楽しさを味わい、学びの中で感動を味わうことができるであろう。

仮説２

単元の見通しを教師と子供が共有し、見通しと学習内容と振り返りがつながる指導計画を立てれば、子供は学ぶ目的を理解し、夢中になって学ぶことができるであろう。

3 手だて

＜仮説1の手だて＞

① 小集団で学ぶ。3～6年生は4人グループを基本としてグループを編成する。1・2年生はペアでの学習とする。

② ジャンプの課題（宮笑課題）を位置付ける。共有の課題（教科書レベルの問い）と、宮笑課題（教科書を超えるレベルかつ、教科の本質をとらえた問い）を解くことによって、深く学ぶ。

③ 短時間グループアプローチ（宮笑タイム）を位置付ける。毎週火曜日の朝、グループアプローチを行い、「聴き合う」仲間関係づくりの土壌を作る。

＜仮説2の手だて＞

① AARサイクルを意識した授業計画を立てる。授業の終わりの振り返りが次時の導入につながるような振り返りの時間とする。Google 共有アプリを活用して、友達の振り返りから自分の振り返りへとつなぎ、次時の展望がもてるようにする。

② 単元指導計画をもとにした指導案を作成する。

③ 振り返りから次の課題を見つける活動を繰り返し、子供と共有する単元計画になるようにする。

④ 明日、どんな学習をするのか理解した上で、下校できるよう翌日の学習内容に見通しをもてる連絡帳を使用する。

4 検証方法

① 児童アンケート（総合教育センター「自ら学ぶ力の育成に関する研究」で共通利用しているアンケート）を実施し、成果を確認する。

② 全国学力・学習状況調査（R7.4 実施予定）の結果や、NRT 学力検査（R7.4 実施予定）の結果などから、本校児童の学力を把握し、成果を確認する。

5 実践について

≪５年生（６月２１日）　算数科の実践≫

単　元　名	割合
感動を味わう姿	3要素2段階以上の倍に関する問題でも、2要素の図式化を活用することによって、全体の関係性を捉え、割合の問題が求められそうだと見通しをもてた姿

子供と単元計画、単元のゴールを共有することを目的に、単元の最初に、単元の最後に取り組む宮笑課題を提示した。

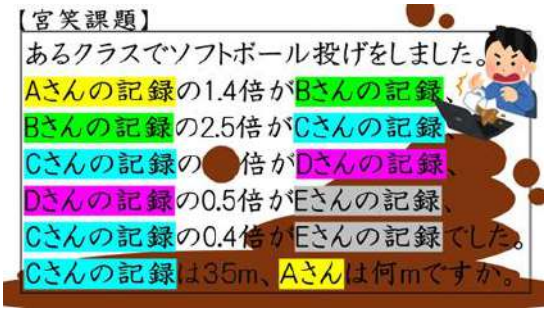
毎時間の授業の振り返りの際に、宮笑課題を見せ、宮笑課題を解決できそうな道筋を見付けたり、次の授業以降にどんな知識・技能を身に付けないと宮笑課題を解決できないか考えたりしながら振り返る

ように取り組んだ。

6月21日の研究授業の際には、『毎時間提示してきた宮笑課題では、既習事項を使うとすんなり解決してしまうのではないか』という学年職員の判断の下、急遽、宮笑課題を変更した。その判断をしたきっかけとして、6月19日に行った6年生の研究授業において、『逆思考』を用いた算数科の宮笑課題があった。その課題を5年生にも適用し、初期に想定した『順思考』のみの宮笑課題ではなく、改訂版として、『逆思考』を取り入れたものを提示した。そのため、難易度が少し上がり、すぐに課題を解決する子供は一人も現れず、子供たちが互いの話を聴き合う状況に自然となった。



子供たちは、互いの話を聴く中で、「ここまでは分かったけれど、これからあとが分からない」「どうやってやればいいの？」などの、分からなさの共有をしたり、「分かったかもしれない！」「そういうことか！！」という解決できそうな(解決できた)喜び・感動をグループの友達と味わったりしていた。



≪４年生（７月１９日）　社会科の実践≫

単　元　名	住みよいくらしをつくる 「水はどこから」
感動を味わう姿	資料をつなぎ、多面的に読み取る事実を基に、自分にできることを考え深め合う姿

単元「住みよいくらしをつくる 『水はどこから』」は、本来水の循環を知ることで学習が終わるところ、人口の増減を表したグラフなどの複数の資料を読み取り、未来の水について現在の自分たちにできることを考えたり、選択・判断したりする課題を宮笑課題として設定した。

単元の初めから「疑問に思ったこと、もっと知りたいこと」を振り返りとして記入させ、子供の疑問やもっと知りたいことを追究していくことができるように単元計画を組み立てた。

AAR サイクルの Anticipation(見通し、期待)にあたる授業の導入では、地球上に存在している水を2リットルのペットボトルに見立てると、飲料水として使用できる水の量は目薬一滴分であることを、実物を用いながら示した。その結果、子供は使用できる水がいかに少ないかということを自分事として捉え、宮笑課題を考えていくための意欲が高まったと考えられる。



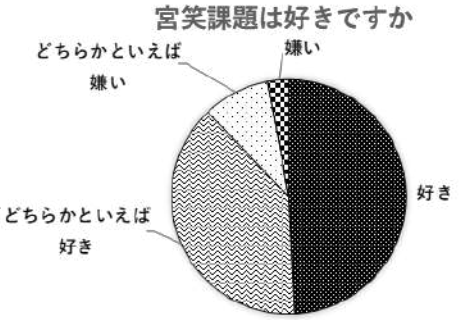
複数の資料をつなぎ、多面的に事実を読み取る場面では、どのグループでも資料から読み取れる事実を語り合う姿が見られた。あるグループでは、世界の人口の推移を示した資料と、汚れた水を魚が住むことができる水質に戻すためにどのくらいの水の量が必要かを示した資料から、「飲み水が少なくなっていく」という事実だけでなく、「魚が住むことができなくなり、魚を捕ることができなくなる。そうすると、世界の人口も増えていくから魚を食べる

ことがどんどん難しくなる」という事実を読み取っていた。
　以上の結果、授業後に「これから自分にできることは何か」を振り返りとして書く場面では、多くの子供が、現在の自分にできることを具体的に記述することができた。

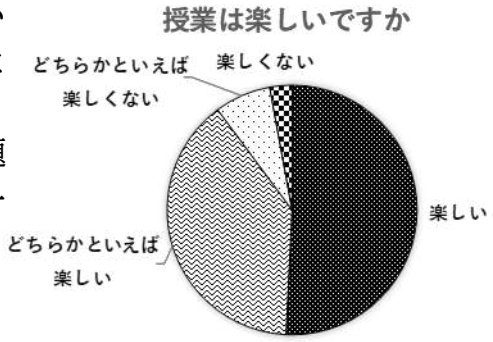
6 成果と課題

　本校では、学びの共同体の考え方を参考に実践を始めた（ジャンプの課題に取り組み始めた）のは、令和5年度の9月からである。研究の方針が固まり、研究主題や研究仮説等を職員と共有したのは、令和5年度の3月である。
　実践を始めて間もないので、大きな成果はまだ表れていないが、現状報告を兼ねて今年度の9月時点のアンケート結果より、成果と課題を以下のように示す。

≪成果≫



・ 宮笑課題が好き、どちらかといえば好きという子供が9割ほどであり、宮笑課題を楽しみにしている子供が多い。
・ 宮笑タイムが好き、どちらかといえば好きという子供が9割以上おり、互いの話を聴く時間が好きである子供が多い。
・ 授業が楽しい、どちらかといえば楽しいと答えている子供が9割ほどであり、授業を楽しく受けている。
・ 令和6年度全国学力・学習状況調査（『自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか』質問紙調査　質問番号17より）における回答で、当てはまると答えた子供が4割ほどであり、愛知県や全国平均の3割という結果を大きく上回った。宮笑課題を昨年度の9月から実施し始め、グループで考えが最初から一致しない問いに取り組むことを楽しんでいる。



≪課題≫

・ 宮笑課題への取り組みを通して、苦手なことなどに粘り強く取り組もうとする子供がいる（生徒エージェンシーの高まりが見られる）一方で、そういったことに前向きに取り組めない子供もいる。
・ ウェルビーイングの向上という視点からは、大きな成果は見られない。令和6年度全国学力・学習状況調査（『普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか』、『授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができると思いますか。』質問紙調査　質問番号19、35より）における回答で愛知県や全国の平均を下回っている。

≪今後に向けて≫

　子供たちは授業自体に楽しさを味わっているものの、授業で学んでいる方法『互いの考えを聴き合って解決に向けて取り組むこと』を家庭や地域などの日常生活で生かしていると感じられていないことが分かった。授業で学んでいる方法と日常生活をつなぐことに難しさがあるが、学校教育全体を通して、授業と日常をつなぐような働きかけ、声かけをするなどして、将来的にウェルビーイングが高まっていくように、子供たちの今の満足感を高めたい。

目次へ

研究主題	主体的に考え、学ぶ児童の育成		
副　　題	～誰もが考えることを楽しめる授業づくりを通して～		
学 校 名	小牧市立桃ヶ丘小学校	校 長 氏 名	森川　美千代

１　はじめに

本校では、令和６・７年度に小牧市教育委員会から「学習指導」の研究委嘱を受け、「主体的に考え、学ぶ児童の育成　～誰もが考えることを楽しめる授業づくりを通して～」を研究題目に掲げ、授業実践に取り組んできた。

研究に臨むにあたり、２年計画の１年目の今年度は、まず児童の実態を掴み、これまでの授業研究の成果と課題を洗い出すことから始めた。そして、めざす児童像をできるだけ具体的に描き、その姿を授業者で共有した上で、学校として同じ方向へ、同じ歩調で、授業実践を積み重ねていくことを目指した。

昨年度までの授業研究において、学びは「話を聴くことから始まる」と考えて、「聴くこと」に重点を置いて指導を積み重ねてきた。その結果、話し手の思いを受け止めようと耳を傾けて聴き、対話を通して課題解決をしようとする意識を向上させることができた。学習指導要領がめざす「主体的・対話的で深い学び」のうち、ペアやグループでの対話を通して学ぶスキルについて、一定の成果を得ることができたといえる。児童を対象としたアンケートからも、「友だちといっしょに考えることが楽しい」と回答している児童が、全体の 95%いる。

しかしながら、課題と向かい合い、見通しをもって粘り強く考える力や、身につけた知識をつなげて深く理解したり考えを形成したりする力には、物足りなさが感じられた。そこで何よりもまず、授業中に、個々の児童が主体的に考える姿が見られるよう、さらには考えることを「楽しむ」姿が見られるよう、手立てを探ることとした。

２　研究実践

《 定例の授業研究と授業の個別指導 》



授業研究に当たり、今年度も、学びの共同体スーパーバイザーを講師として迎え、学期に一度の定例の授業研究日を設定した。授業研究を重ねる中で、授業者のキャリアによって、小牧市が推奨する「学び合う学び」の手法についての理解度や授業に対する悩みが異なることが分かり、学校全体として「学び合う学び」の授業づくりの原点に戻る必要性が感じられた。そこで今年度は、希望する教員には、スーパーバイザーから個別に授業を参観して助言をいただく、個別指導日を設けた。限られた時間の中で行っている定例の研究日とは異なり、日頃の授業づくりや学級経営について、１対１でご指導、ご助言をいただけることから、先生方には大変好評であった。

これまで以上に、児童に「考えさせること」を意識して授業を展開するためには、当然、授業中に「考えるさせる場面」を設定しなければならない。そこで、教材研究を大切にした上で、児童が考えることを楽しめるように、「ジャンプ課題」を設定してきた。今年度の授業研究では、特に算





数の特設授業において、児童が「ジャンプ課題」に取り組む提案授業を全職員で参観した。「ジャンプ課題」とは、個で考えても解決できる課題ではなく、仲間との対話や関わりを通して解決できるレベルの課題である。難しければよいというものでもなく、適度な難易度の課題を設定することで、児童はそれを解決しようと、よく考え、夢中になって取り組むことができる。そこに、本校がめざす児童像があるのではないかと考えた。日々の授業のすべにおいて、適度な難易度の「ジャンプ課題」を設定することは難しいが、４５分の時間の中に「考える場面」を組み込むこと、単元構成を見直して、単元の中により高いレベルの課題を設定すれば、考えることを「楽しむ」レベルにまで引き上げることができるだろう。まだ手探りではあるが、児童にとって魅力的な課題に日常的に取り組めるよう、模索していきたい。

また、「授業を見合おう週間」では、教員が授業を公開し、互いに参観し合っている。一定の期間だけではなく、自発的に授業を公開することを促し、その授業について教員間で対話することで、授業力に磨きをかけられるよう、同僚性を高めていきたい。

《 外国人児童教育研修 》



本校の特徴として、外国にルーツをもつ児童（以下、外国籍児童）が 62 名在籍しており、それは実に全体の約 20%を占める。国籍や言語、生育歴や日本語習得のレベルも様々であるが、これらの外国籍児童を巻き込んで授業を展開する必要があるのは、言うまでもない。そこで、７月に「外国人児童教育研修」を実施した。外部講師を迎え、外国人児童教育についての基礎知識を学ぶことから始まり、日頃指導する上で感じている疑問点や効果的な支援方法、さらにはＪＳＬカリキュラム（日本語と教科の総合学習）の授業づくりについて取り上げ、ご指導をいただいた。文化や言語の壁を作ることなく、どの児童にも学びのある授業を展開していきたい。

《 心理的安全性の高い学級づくり～ＱＵ研修～ 》



本校では、教育目標のひとつとして、「互いの居心地の良さを大切にできる児童の育成」を掲げ、児童はもちろん、教職員や保護者、地域の協働による居心地のいい居場所づくりを目指している。

今年度のＱＵ研修では、「心理的安全性の高い学級づくり」をテーマとして、ＱＵの結果を生かした学級経営の具体的な実践事例を学んだ。学級経営と授業改善はタイヤの両輪である。児童にとって、教室が心理的安全性の高い場所であること、安全で安心して生活できる場所であることは、授業で学びを成立させるための大前提である。研修では、ＱＵの結果を分析し、個々の児童への支援や対応の仕方まで、丁寧にご指導をいただいた。学級経営という側面からも授業づくりを見つめ直す機会となった。また、特に配慮が必要な児童については、担任だけではなく、全体の場で取り上げ、学校全体で見守りって支援していけるよう、情報を共有した。

《 桃ヶ丘小 マンダラチャートの作成 》



９×９マスのマス目からなる、思考・発想のためのフレームワークに、「マンダラチャート」がある。現在、メジャーリーグで活躍する大谷翔平選手が、高校生の時にマンダラチャートを作成したことでよく知られている。マンダラチャートは、難易度の高い目標達成に向けて、達成すべき要素を８項目に分解し、さらにやるべきことをより具体的に６４個書き出して完成させる。要素を漏れなく洗い出し、整理し、行動を具体化することができるというメリットがあり、特に目標達成のためのツールとして利用されることが多い。本校でも、授業研究の進捗、達成状況を可視化したり、全教員で作成することで具体的な行動目標を共有したりすることができる考え、マンダラチャートの作成に全職員で取り組むこととした。

「めざす児童像」に近づくためにどんな指導が必要かを議論した上で、チャートの中央部に研究題目を掲げた。全職員で、日頃の授業について振り返り、授業についての考えを共有しながら作成した過程にも、大きな意義が感じられた。対話しながら完成したマンダラチャートは、本校がめざす授業づくりに向けた行動目標が示してある。完成させること自体が目的ではなく、日頃から繰り返し見てチェックすることで、授業改善に役立てることが目的である。今後の活用を期待したい。

《 先進校の視察や研修会への参加 》

昨年度までの研究実績がありながらも、改めて０からのスタートと位置づけて研究をスタートさせた。校内で研鑽を積むことは大切だが、先進校から学ぶ貴重な機会でもある。また、授業そのものだけではなく、研修会や講演会に参加し、児童理解そのものにも立ち戻ることも、授業づくりにおいては大切な要素となる。そこで、教員には校外での様々な研修に参加することを推奨し、それぞれが学んだことを校内へと還元し、共有することで、研究推進の指針となるよう活かしてきた。

また小牧市では、これまでの総合的な学習の時間を拡大して、こまき「夢☆チャレンジ」科をスタートさせる。こまき「夢☆チャレンジ」科では、児童が自分の知りたいこと・考えたいこと・挑戦したいことをもとにテーマを決めて、探究的な活動を進めていく。教師は、児童にとっての「伴走者」となり、児童の学びを支えていくが、探究学習を指導した経験がなく、ノウハウも身につけていない。児童とともに手探りでのスタートとなるが、探究学習に取り組んでいる先進校から学びことで、来年度の実践に備えた。

３　おわりに

研究委嘱２年目を迎える令和７年度は、さらに「めざす児童の姿」を教員間で摺り合わせ、解像度を上げ、より鮮明に具体的な姿を描きながら、授業研究に臨みたい。そして、日々目の前にいる児童と向かい合い、その小さな変化や成長の過程にともに喜びを感じながら、実践を積み重ねていきたいと思う。

桃ヶ丘小学校　マンダラチャート

年間計画で描く子どもの姿	単元構成 単元全体を俯瞰す	教えるでなく学ばせる	よさを認める 認め合える	言葉づかい あったか言葉	適度な距離感 気配り目配り 先導あり	その場 その時 タイミングよく	多様な視点から 教員間の連携も	指を評価 人と比べない
手で書く 文字を書く 目に書す	教材研究	学年間の系統性を意識して	気軽に言える 雰囲気をよくする	人間関係	全職員で 立花魂を見守る！	学びのあしあと ふりかえり 次へつなげる	評価	めあてで始まり めあてで終わる 評価基準を明確
学習指導要領 教材書を読む！	タブレット ICT機器の 有効活用	具体物 視覚的資料を 用意する	信頼してる 相談できる	同僚と 支える 共有する ONE TEAM！	様子の気持ちを 想像できる	小さな変化 見逃さない	分かりやすく 伝わりやすい 子どもへの伝え方	観察よりも 連携を大切に！
トライするスター 恐れずに チャレンジ！	互いの価値を認め 授業から学ぶ	単元末を指導 授業者は ファシリテーター	教材研究	人間関係	評価	身近な小さな 変化を 見逃さない	伝わるよう 変わる キラキラした 子どもの笑顔	学習意識を変える 評価物
子どもが笑わない あきらめない	授業力向上 授業展開	子どもに 耳を傾ける 聞く 訊く	授業力向上 授業展開	主体的に考え、学び深まりの形成	環境づくり	生活ルーティンが 確認できる	環境づくり	時間を守り 余裕をもたらす
理解なんか プレゼン	子どもが語る 子どもの言葉で 表現が増える	子どもを観る 見逃さない	課題	学級経営	対話	集中できる 心地よい空間が 味わえる	心のゆとり 安心感	互いの表情が 見える 机の配置 コの字！
笑顔からの つながり	学ぶ考える 必然性が 感じられる	楽しそう！ やってみたい わくわく感	温かい雰囲気 温心考がいい！	主役は子ども！ 主体的な活動を 意識に	学級開きが大切 ブレない指導と 柔軟な対応	話し方スキルUP つなげる話形 おかりやすさ	聞こえるよ ちょうどいい 声のトーン	聴くから始まる 真日心で 受け止める
考えるための土台 知識 基本 習熟	課題	授業終わっても 考え続けたい！	学習の見通しと努力 変容が見える化	学級経営	個を認める 全体を認める	なるほどね！ うんざき あいづち 傾聴する構え	対話	否定しないで つなげる 広げる
学級の足跡 教育で共有	適度な難易度 ジャンプ課題	達成感が 味わえる	多様性を生かす！ 外国籍児童を 孤立させない	仲間と協同 みんなで 一人にしない！	だれもが 自己有用感 自己肯定感	分からない 困ってるから 始まる	事中になってる 心地よい つぶやき	自分の言葉で 価値 説明 話すから話るへ

目次へ

研究主題	自分の考えを広げ、深めることができる児童の育成		
副　題	発達段階に応じて教材・教具を工夫する対話活動と単元を貫く振り返り活動を通して		
学校名	稲沢市立稲沢東小学校	校長氏名	野田　隆之

Ⅰ　はじめに

本校の現職教育では、これまで「主体的・対話的で、深い学び」をテーマに研究を進めてきた。昨年度の反省から、「発達段階に応じた対話活動や振り返り活動のあり方」や「振り返りが児童の成長の実感につながっていないこと」が課題にあげられた。

今年度は昨年度に引き続き、教材・教具を工夫した対話活動を行うとともに、「発達段階を踏まえた対話活動と振り返り活動」「単元を貫く振り返り」に重点を置いた研究をしていくことで、自分の考えを広げ、深めることのできる児童の育成を目指すこととした。

Ⅱ　研究構想

1　目指す児童像

自分の考えを広げ、深めることのできる児童の育成

2　研究の仮説

(1) 付箋やイメージマップなどを用いて、自分の考えを可視化し、対話の目的を明示したうえで、発達段階に応じた目標に基づいて対話活動を行わせることで、児童は自分の考えをより深めることができるであろう。

(2) 振り返りの視点を明示し、単元ごとに１枚のワークシートにまとめ、自分の振り返りの記述を見直し、友達と振り返りを読み合う時間を設定すれば、学習内容を既習事項や普段の生活に結びつけて、自身の成長を感じ取ることができるであろう。

3　研究の手だて

(1) 発達段階に応じて教材・教具を工夫した対話活動

① 発達段階に応じた対話活動の目標を設定し、その目標に基づいて対話活動を行う。

② 対話の目的を児童に明示する。

③ 対話の目的を「広げる」「深める」の２つに分類する。

④ 付箋やイメージマップなどを活用して考えを形成・可視化する。

⑤ 可視化した意見を共通点ごとにまとめたり、ラベリングしたりする。

(2) 単元を貫く振り返り活動

① 振り返りの目的やポイント、視点を分類し、児童に明示する。

② 発達段階に応じた振り返りシートを活用する。

③ 単元ごとに振り返りシートをまとめる。

④ 振り返りを読み合う活動や、児童自身の振り返りを読み返す時間を設ける。

4　仮説の検証方法

仮説と、それを支える手だての有効性について、次の方法で検証していく。

(1) 児童の対話活動の様子やイメージマップ、実践前後のアンケートの変容を基に判断する。

(2) 振り返りの内容や実践前後のアンケートの変容を基に判断する。

Ⅲ　研究の実際

1　2年生　生活科「うごく うごく わたしのおもちゃ」

(1) 教材・教具を工夫した対話活動

① 考えを形成・可視化するための手だて

つくったおもちゃを、どのように改良すればさらに動くようになるかを考えるため、同じおもちゃをつくった児童同士でグループを作り、互いに遊んだ。同じ種類のおもちゃで遊ぶ際には、自分と友達の作品を比較し、違いを見つけるよう促し、「どのように違うのか」「どうして違うのか」などを考えるよう伝えた。また、「誰のおもちゃがよく動いたか」「どうして、よく動いたのか」という視点を黒板に提示することで、目的をもって遊ぶことができ、グループでの対話活動につなげることができた。

② 対話活動を活性化するための手だて

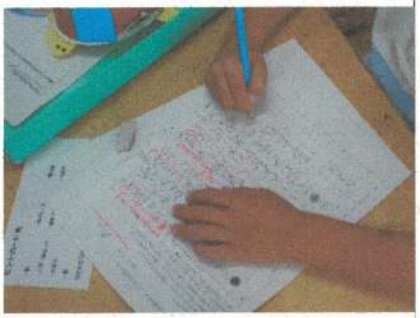
グループでの対話活動では、「誰のおもちゃがよく動いたか」「それはどうしてか」という点について意見を交換した。その際話のポイントがずれないよう、話型を示したホワイトボードや、必要に応じてヒントカードを活用した【資料1】。しかし、自分のおもちゃの改良方法を考える場面では、取り入れたい工夫をプリントに書くことができない児童が見られた。そこで、グループで互いにアドバイスし合う場を設けたところ、友達の考えやおもちゃのよさを自分のおもちゃの改良に役立てることができた。



【資料1　ホワイトボードに記入する様子】

(2) 単元を貫く振り返り

振り返り活動は、小単元ごとに、自分の頑張り度合いを顔のイラストで自己評価し、振り返りを記述するように設定した【資料2】。「分かったこと」や「できるようになったこと」、「友達の考えでなるほどと思ったこと」などの振り返りの視点を番号で提示し、児童自身が番号を選ぶことで、何について書けばよいかが、明確になった。また、振り返りを書くことが苦手な児童のために、書き出しの言葉をシートに用意した。この手だてによって、振り返りを書くことができた児童もいたが、書き出しに合わせることが難しい様子も一部で見られた。児童の振り返りには、「○○さんの輪ゴムの位置が（自分と）違っていた」や「友達が輪ゴムを二重にしていたので自分もやってみたい」などの記述が見られた。友達と比較して気付いたことや学んだことを振り返り、次にどのように生かすとよいかを考えることができていた。



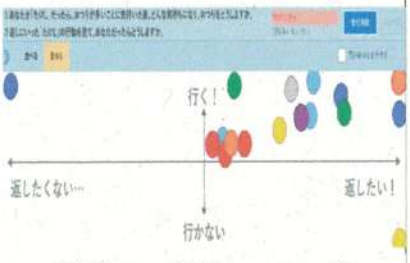
【資料2　振り返りの様子】

2　4年生　道徳科「『正直』五十円分」

(1) 教材・教具を工夫した対話活動

① 考えを形成・可視化するための手だて

「ごまかしてしまいたくなる気持ち」と「正直に伝えた方がいい気持ち」の狭間で葛藤する主人公について話し合い、正直であることの気持ちのよさについて考える授業を展開した。「余分にもらったおつりをどうするか」を考える場面では、タブレット端



【資料3　ポジショニング】

末のポジショニング機能を活用し、「気持ち」と「行動」を踏まえた座標軸を用いて各自の立場を可視化した【資料３】。それぞれの立場について意見を発表することで、児童同士が互いの視点を確認し合った。

② 対話活動を活性化するための手だて

主人公が自分から正しく行動すると決断した場面では、ホワイトボードとネームカードを活用し、学級全体で話し合った。その際、発表した児童の発言に付け足しや、違う意見を出す形で進めた【資料４】。「○○さんの意見に付け足しで、△△です」「△△さんと似ていて、自分は○○と思います」など、付け足しの内容や類似の意見などそれぞれの視点を共有した。児童同士が発言をつなげることで、対話活動が活発になり、考えをさらに深めることができた。



【資料４　ホワイトボード】

(2) 単元を貫く振り返り

道徳科の４つの大きな価値項目ごとにＯＰＰシートを作成し、毎時間振り返りの時間を設定し、深まった考えを書いた【資料５】。振り返りを書く際には、「①主人公と同じように悩んだ時どのようなことを大切にしていきたいか」「②今後どのような気持ちを大切にしたいか」「③これからの生活にどう生かしたいか」「④授業の前後で、どのように考えが深まったか」の４つの視点から選択して書くようにした。ＯＰＰシートを活用し、同じ内容項目内で学んだ授業の内容を読み返したうえで本時の振り返りを書くことで、児童は自分の考えの変容を俯瞰的に捉えることができた。



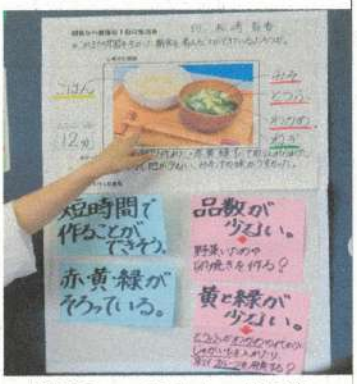
【資料５　ＯＰＰシート】

３　６年生　家庭科「朝食から健康な１日の生活を」

(1) 教材・教具を工夫した対話活動

① 自分の考えを可視化するための手だて

これまでの学習を生かした朝食になっているかを振り返り、よい点や課題点をまとめられるようにした。児童が考えを可視化できるよう、付箋によい点・課題点を書くようにした。拡大したワークシートを黒板に貼り、付箋の書き方を例示した【資料６】。よい点は青色、課題点は赤色の付箋に書いたことで、どのような内容の意見が書かれているか児童にとって分かりやすいものとなった。



【資料６　書き方の例示】

② 対話活動を活性化するための手だて

グループでの対話活動では、自分の考えを基に、作った朝食の課題点に対する改善策を考えられるよう、赤色の付箋を上下に分け、上に課題点、下に友達と話し合って考えた解決策を書くように指示した。よりよい朝食を考える中で、友達の意見を受け入れることの大切さを伝えたり、朝食作りのポイントを確認したりすることで、さまざまな視点から活発に対話活動を行うことができた【資料７】。



【資料７　対話活動の様子】

(2) 単元を貫く振り返り

振り返り活動では、児童がこれまでの学びを実感し、それを今後の

生活に生かせるよう、「健康な生活」「栄養バランス」などのキーワードや「学習する前の自分と比べて変化したこと」「今後の生活にどう生かすか」などの視点を提示した。これらのキーワードや視点を提示した結果、「以前は好きなものばかり食べていたが、これからは栄養バランスのよい朝食を食べようと思った」「朝食作りは毎日のことだから、限られた時間内で作っていきたい」という記述が多く見られた。また、単元の初めと学習後の自分の思いや考えを比較できるよう、振り返りシートの顔文字に色を塗って朝食作りへの興味を表現するようにした。本時は単元の最後の時間であったため、単元の初めと比べて変化した思いや、単元全体を見通して、今後の生活にどう生かしていくかを考えながら振り返ることができた。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

(1) 発達段階に応じて教材・教具を工夫した対話活動

◇　学年の実態に応じた教材・教具の工夫により、低学年でも友達と自分の考えを比較しながら対話活動を行うことができた。

◇　付箋やホワイトボードを活用することで、児童は互いの意見を視覚的にとらえ、それぞれの考えのよさや、自分との違いに気付くことができた。

(2) 単元を貫く振り返り活動

◇　振り返りの視点を明示し、複数の視点から児童に選択させたり、教師がポイントを伝えたりすることで、学習内容に沿った記述をすることができた。

◇　実践後のアンケートによると、過去の振り返りを読み返すことで、単元終了時に「成長した」と実感した児童が多くいた。そのため、振り返りシートを単元で１枚にまとめたり、ポートフォリオ形式で整理したりすることは有効であったと考える。

2　今後の課題

(1) 発達段階に応じて教材・教具を工夫する対話活動

◆　実践後のアンケートによると、「友達の意見を聞いた後で、自分の考えをまとめているか」の項目の「よくできる」の割合が低い結果となった。そのため、対話活動の後に、自分の考えが友達との対話活動で変わったかどうかを振り返る時間を設け、それをワークシートなどに記述する授業展開を検討する必要がある。

(2) 単元を貫く振り返り活動

◆　学習内容が普段の生活とどのように結びついているかに気付くことができるよう、教師側が魅力的な教材開発を行ったり、単元構成を工夫したりする必要がある。

◆　友達と振り返りを共有する時間を確保することで、他者の異なる視点から考えを広げたり、自分の記述内容を確認したりすることができるようにする必要がある。

Ⅴ　終わりに

発達段階に応じた教材・教具や振り返りシートの工夫により、どの学年の児童も他者と自分の考えを比較し、「自分の考えを広げ、深める」という目標に近づく姿が見られた。今後も、本研究で実践した手だてを継続しつつ、他者の考えに触れることで自分の考えを振り返る場を設定し、さらに目標とする姿に近づくための手だてを講ずる必要がある。

目次へ

研究主題	「やる気」「元気」「よき仲間」にあふれた学校づくり		
副　　題			
学 校 名	稲沢市立丸甲小学校	校 長 氏 名	鈴木　賢一

Ⅰ　はじめに

本校（児童数１１６名、学級数８）は、「未来を創造し、心豊かで深く考え、たくましく生き抜こうとする心身ともに健全な児童の育成」を学校教育目標に掲げている。本年度は、重点努力目標を「『やる気』『元気』『よき仲間』にあふれた学校づくり」に設定し、その達成を図るため、「学習指導の充実（やる気）」「健康・安全教育の充実（元気）」「豊かな心と温かい人間関係づくり（よき仲間）」を柱に様々な取組を行った。

Ⅱ　取組

１　学習指導の充実（やる気）

(1)　自分の考えを広げたり深めたりする授業づくり

「子どもが学ぶ」主体的な授業の展開に焦点を当て、学習に対する児童のやる気を促すと同時に、自分の考えを広げたり深めたりする工夫（「資料提示」「思考ツール」「タブレット端末」等の工夫や活用）を取り入れた授業づくりを行った。



〔思考ﾂｰﾙ「ｳｪﾋﾞﾝｸﾞﾏｯﾌﾟ」の活用〕

(2)　外部の専門講師を活用した指導

専門知識や技能をもった外部講師を招き、「絵画教室（３・６年）」「焼き物づくり教室（５年）」を行った。また、総合学習（４年）においては、環境問題をテーマにした探究活動の一環として、地域の環境保全に取り組んでいる「祖父江のホタルを守る会」の方から学ぶ機会を設けた。

(3)　読書活動の取組

読書活動を活性化するため、読書月間を設定し、図書委員会を中心に「図書クイズ」や「お話スタンプラリー」などの取組を行った。また、読み聞かせボランティアによる朗読劇や図書委員による読み聞かせ会なども実施した。

(4) 生き方について考える「夢授業」

市内在住の大道芸人を講師としてお招きし、大道芸を披露していただいた後、５・６年生対象に夢授業を行った。「偶然入ったおもちゃ屋さんで宇宙ゴマを見つけたことが大道芸人になったきっかけ」「YouTuber やメダカ販売など自分がやってみたいと思ったらすぐ実行」「大事なのは才能ではなく努力の積み重ね」であることなど、夢を志し、目標を立てて取り組むことの楽しさや大切さについてお話しいただいた。



〔大道芸人による夢授業〕

２　健康・安全教育の充実（元気）

(1)　運動に親しみ、体力を高める取組

学校保健委員会（５・６年生、希望保護者）で、市内でランニングコーチをしている方を講師に招いての講演会を行った。日頃あまり動かしていない筋肉や関節を意識して動かすことを「からだスイッチを入れる」と称して、いつでもどこでもできる手軽な運動（体スイッチ体操）を教えていただいた。その内容を家庭でも実践できるようにお便りで紹介し、夏休みには、健康チャレンジカードとし



〔体ｽｲｯﾁ体操に取り組む様子〕

てその運動にチャレンジする機会を設けるなど、家庭との連携も図った。

また、毎週木曜日の朝、全校での体力づくりの時間を設定した。運動内容は、「タバタトレーニング」、前述した「からだスイッチ体操」など、学年関係なく取り組みやすいものにした。また、楽しく運動に取り組むことができるよう、大縄跳び、ボール送りなど器具を活用した運動、足じゃんけんでのじゃんけん列車など、レクリエーション要素を含んだ運動なども盛り込んだ。

⑵　着衣泳指導

日本赤十字社から講師を招き、５・６年対象に着衣泳指導を行った。衣服を着けたままで水中で動くことの難しさや対応方法などを学ぶことを通し、「自分の身は自分で守ること」「身を守るための正しいスキルを身に付けること」の大切さを実感させた。

⑶　栄養教諭による栄養指導

各学年、年に１回、給食の時間を利用して、栄養教諭より栄養指導を受けている。好き嫌いなく食べることの大切さを三大栄養素の観点から丁寧に説明してもらうことで、低学年のうちから「栄養バランス」についての意識を高められるようにしている。また、食事に関わる人々に感謝する気持ちを高めるよい機会となっている。



〔栄養素分けをする児童〕

⑷　薬物乱用教室

愛知県薬剤師会の方を講師に薬物乱用防止についてのお話をしていただいた。かぜ薬を決められた量以上に服用することも「薬物乱用」にあたること、「薬物乱用はしない」という選択をするためには、自分が大切に思う人や自分のことを大切に思ってくれる人などを思い浮かべながら、断固として拒否することが大切であることなどを教えていただいた。

⑸　避難訓練

春に地震が発生した場合を想定した避難訓練、秋には火災が発生した場合を想定した避難訓練を実施した。また、本年度は、新たな取組として、清掃時に火災を想定した避難訓練を実施した。児童からは、「避難の邪魔にならないように、清掃道具を隅に置く必要があった」「火災の発生場所によって、避難経路を自分で考えるようにしたい」などの反省が出た。職員からも、残留児童の確認方法などの課題が出され、臨場感のある訓練となった。

３　豊かな心と温かい人間関係づくり（よき仲間）

⑴　縦割り活動（異学年交流）

本校では、１年生から６年生までの異学年集団(以下、「なかよし学級」と呼ぶ)を形成し、「リーダーシップや思いやりの心」「集団の一員としての自覚と責任感」を育てることを意識しながら、下記のような活動を通して「よき仲間」づくりを目指している。

①　なかよし遊び

月に１回程度、なかよし学級全員で遊んでいる。今年度から、５年生が中心となり企画・運営して活動を進めている。なかよし遊びの時間にどんな遊びをしたいか、全員で意見を出し合いながら１年間の計画を立てた。なかよし遊びの中で、上級生が下級生にルールを優しく教えたり、補助をしたりする場面が多く見られ、思いやりの心を育てるよい機会となっている。

②　なかよし遠足

６月になかよし学級の活動班で「南知多ビーチランド」に行った。当日に向けて、６年生を中心に班別行動の計画を立てた。場内をどの順番で回るかを全学年で相談しながら決めた。遠足当日、高学年の児童は、下級生の様子を見ながら次の行動の声かけをしたり、計画通りに回れるように時計を見ながら行動したりしていた。



〔なかよし遠足の様子〕

③　なかよし大縄跳び

１０月に、なかよし学級ごとで８の字跳びをする「なかよし大縄跳び大会」を行った。本年度は、学級ごとに目標回数を話し合って決めて練習に取り組んだ。練習を重ねていくうちに高学年の児童が縄に入るタイミングを声で知らせたり、下級生に寄り添って跳び方を教えたりする姿が見られた。また、練習の最後に跳べた回数を記録し、その数を校内に掲示した。その結果、「もっと練習して１００回跳べるようにしたい」という声が聞かれるなど、次の練習への意欲づけになった。さらに練習後に振り返りを行うことで、良かったところを褒め合ったり、回数を伸ばすためにアドバイスし合ったりするようになり、チーム一丸となって頑張ろうとする前向きな気持ちを高めることができた。大会当日も、励ましの声をかけ合ったり、跳び終わった後には称え合ったりする姿が見られるなど、「なかよし大縄跳び」を通して、絆を深める様子が見られた。

④　布智っ子祭

本校は、異学年の縦割り班毎に児童自らが企画した店を出し、保護者や地域の方をもてなす「布智っ子祭」を毎年開催している。特に高学年は、店の企画や運営計画を立て、中心となって班をまとめる役割を担い、下学年は、自分の与えられた役割に懸命に取り組むなど、お店を成功させるために全学年が互いに協力し合う姿が見られる。活動を通して、高学年は徐々にリーダーシップが高まっていくのを実感でき、自己有用感や自己肯定感を高めるよい場となっている。高学年は「学級をまとめ」、中学年は「高学年と低学年をつなぎ」、低学年は「上級生から学ぶ」というそれぞれの役割を果たしながら活動を進めることで、見通しをもって６年間の学校生活を送ることができるようになってきている。

⑵　福祉実践教室


〔手話体験の様子〕

福祉実践教室で、３年生は手話、４年生は車椅子、５年生は点字の体験を行った。手話の体験では、手を動かすだけではなく、表情や口の動きも大切であることを学んだ。車椅子の体験では、車椅子に乗っていると少しの段差でも激しく揺れるため、事前に声をかけたり車椅子の向きを変えたりすることが大切であることを知った。点字の体験では、点字器を使って、自分の名前を点字にする活動を行った。体験を通して、障がいのある人がどのようなことに困っているのかを実感し、社会には障がいのある人にとって優しい工夫がたくさんあることに気付いた。そして、「障がいの有無にかかわらず誰とでも助け合っていきたい」という共助の考えをもつことができた。

⑶　いじめ予防教室


〔いじめ予防教室〕

５月に愛知県弁護士会の方をお招きし、６年生を対象にいじめ予防教室を行った。前半は、実際に起こったいじめ事案を取り上げ、いじめについて考えた。後半は、「ドラえもん」の登場人物の立場に立ち、相手を不快にさせないために、どんな言葉かけや行動が適切か考える活動を行った。いじめが命を奪うことにつながるものだということを認識するとともに、いじめをしないのはもちろんのこと、見て見ぬふりをしないなどの自分がとるべき行動について再確認することができた。

１０月には、自身の壮絶ないじめ体験を基にいじめ防止講演講師としても活躍されているお笑い芸人を招き、全校を対象にいじめの悲惨さや対処法などについてお話していただい

た。「暴言」「暴力」「仲間はずれ」の３つは絶対にしてはいけないことや、講師がいじめを受けた時、友人が味方になり救ってくれた話などから、友達を今まで以上に大切にしていこうという気持ちを高めることができた。

⑷　ケータイ安全教室

年々、携帯電話を所持している児童が増加している実態を受け、ＳＮＳ利用における情報モラルやリテラシーについて学ぶために、e-ネットキャラバンから講師をお招きし、「ケータイ安全教室」を行い、ネット依存やネットいじめなどの危険性について話していただいた。実際に起こりそうな場面を想定したクイズもあり、ＳＮＳを活用する時に気を付けなければならないことについても、楽しく学ぶことができた。また、保護者にも参加していただいたことで、スマホの使い方やそのルールづくりについて、親子で考えるきっかけとなった。

４　取組の成果と課題

＜やる気＞

○　自分の考えを広げたり深めたりする授業づくりに努めたことで、児童は自分の考えを様々な視点から見直したり、友達と練り上げたりすることができた。その結果、徐々にであるが、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようになってきた。そして、それが学習への意欲につながり、「主体的な学び」の土台となり始めていると考える。

○　絵画指導や焼き物づくりなどにおいて、専門的な知識や技能をもった講師を活用することで、児童はポイントを押さえた適切な指導を受けることができ、確かな知識や技能はもちろん、児童の学習意欲を高める上でも効果的であった。

○　読書活動の推進により、休み時間などに積極的に読書する児童が増えつつある。読書が活性化することで、児童の興味関心が広がり、学習意欲の高まりにもつながる。

○　「夢授業」により、将来に向けて、自分なりの目標をもち、それを達成していこうとする気持ちを高めることができた。

●　自己調整しながら学習を自ら進めていくという点で課題が残る。「指導の個別化」「学習の個性化」を意識した授業を工夫し、展開していく必要があると考える。

●　外部の専門講師の人材と予算の確保が課題である。

＜元気＞

○　学校保健委員会での講演会や毎週の体づくりの時間の取組により、自分の健康に興味・関心をもつとともに、運動に親しみ、丈夫な体をつくっていこうとする児童が増えた。

○　薬物乱用防止教室や着衣泳、避難訓練では、「自分の身は自分で守る」という意識を高めることができた。また、自分の身の安全を確保するために、自分で考えながら行動する思考力や判断力、必要となるスキルを身に付けることができた。

●　登下校中の危険な行為や不注意によるけがや事故が時々見られる。「自分の安全は自分で守る」という危機回避能力を高める取組をさらに進めていく必要がある。

＜よき仲間づくり＞

○　なかよし活動を通して、上級生は下級生を思いやり、下級生は上級生を慕う気持ちを高めることができた。また、福祉実践教室では、障がいの有無にかかわらず、誰とでも助け合って生きていこうとする気持ち、いじめ予防教室、ケータイ教室を通して、友達を大切にしようとする気持ちが高まり、「よき仲間」づくりにつながった。

●　善悪の判断が甘く、友達との間でトラブルに発展するケースも少なくない。普段の学級経営や道徳教育などを通じて、善悪の判断を適切にできる児童を育てたい。

Ⅲ　おわりに

今後も、本校のめざす児童を育成するために、小規模校ならではの強みを生かし、保護者・地域と連携しながらさらに特色ある学校づくりに取り組んでいきたい。

目次へ

研究主題	自らの思いを基に、主体的に学びに向かうことができる児童の育成		
副　　題	ＩＣＴ機器を活用し、つながりを生み出す活動を通して		
学 校 名	東海市立加木屋小学校	校 長 氏 名	新美　勲

１　テーマ設定の理由

本校では、令和３年から３年間、ＩＣＴ機器を活用した授業について実践を積み重ねてきた。ＩＣＴ機器をともかく使用して慣れるところから始まり、効果的な活用場面について考えてきた。

それにより、校内ではＩＣＴ機器を活用することに慣れ、教師はもちろん、児童も道具として当たり前のように活用している。興味・関心をもったことについて、インターネットで調べたり、写真や映像に記録を残したりして、そこから自分の考えをまとめる姿が見られる。また児童は、教師の指導や支援により、互いの考えを共有し、考えを広げたり深めたりする姿が見られる。

しかし、限られた時間の中では、考えの把握、共有が一部の児童のみとなることがある。児童がより一人一人の思いを基にして、課題に向けて活動することができれば、今まで以上に主体的・対話的で深い学びの実現ができるものと考える。また、それにはＩＣＴ機器のより効果的な活用が不可欠であると考える。

そこで、本研究では、ＩＣＴ機器を活用し、児童と課題とのつながり、自分自身や他者とのつながりを生み出す活動を模索していく。そして、課題解決に向けて、児童一人一人が自らの思いを基に活動し、考えを深め、主体的に学びに向かうことができるようにしていく。

２　研究の仮説

・ＩＣＴ機器を効果的に活用することで、児童は課題とつながり、学びを自分事として捉えることができるであろう。
・自分の思いを基に他者とつながったり、自分自身の考えとつながったりする場を設けることで、児童は主体的に学びに向かうことができるだろう。

３　手だて

・導入時や活動時に、ＩＣＴ機器を活用し、児童と課題とを効果的につなげることで、児童は課題を自分事として捉えることができるであろう。
・自らの思いを基に、他者の考えとつながる場を設けることで、課題に対して主体的に取り組むことができるであろう。
・これまでの自分とつながる、振り返りの場を設けることで、自らの学びを実感し、より主体的に課題に向かうことができるであろう。

４　目指す児童

・課題理解をし，課題解決に向け、自ら考え、思いや考えを学びにつなげていこうとし、主体的に取り組むことができる児童
・伝え合う活動を通して、他者とのつながりを感じながら学習をすすめることができる児童

５　授業実践等の計画

⑴ 普通研究授業

①普通研究授業

・授業づくりに所属する先生が授業を行う。
・教科学習及び学活・道徳で行う。
・指導案作成の必要はないが、ＩＣＴ活用のポイントが分かるものを用意した上で実践を行う。また、授業展開がわかるものを用意する。
※Ｒ５授業作りワークシートを活用　→　新しい形式の「授業計画シート」
・希望者が参観。公開の後は授業の感想、意見を伝え合う。（感想箋・話し合い）
・授業の様子を映像に記録しておく（ビデオやタブレットで撮影）

⑵ 特別研究授業

①学校訪問特設授業（３名）

・低・中・高学年に分かれて授業を参観し合う。
・市内教員にも参観を促し、ＩＣＴ機器を活用した授業を公開する。

②研究協議会について

・学校訪問特設授業の後に行う
・各部会の部長（現職推進委員より選出）が役割を決め、運営する。

⑶ 市内授業公開

①公開授業（１～２名）

・タブレットを活用した授業を市内教員向けに公開

②夏季研修での事例紹介（ＩＣＴ活用推進を中心に）

・係活動やクラブ・委員会、行事など、教科指導以外での活用例を紹介する。
→作成データだけでなく、活動の記録を写真や映像で蓄積しておくとよい
・７月２３日（火）９：００のタブレット活用学習会で紹介する。

６　研究の実践

⑴ ３年生算数科の実践　単元名「あまりのあるわり算」

授業の様子

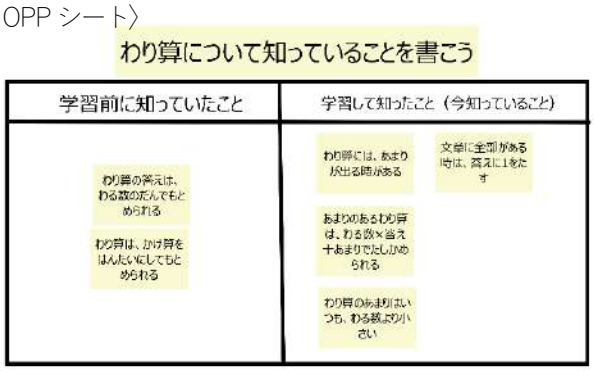
授業の終わりに、子どもたちに振り返りを記入させた。タブレット端末を活用し、振り返りの蓄積を行った。ＯＰＰシートを作成し、本時で学んだことを簡潔に記入するように子どもたちに指導し、授業の終末５分間で自分の学びについて振り返ることができるようにした。



〈授業の様子（スクリーンに映す）〉

〈児童が書いた OPP シート〉





振り返りで記入したことを次時の導入に活用したり、前時の学びを確認したりすることが簡単にできるためＩＣＴ機器の活用が効果的であると感じた。しかし、子どもたちが振り返りに記入する内容について明確な指導を行うことができなかったため、見通しをもたせることまではできなかった。

⑵ ４年生総合的な学習の時間の実践

総合的な学習の時間の実践　「福祉について考えよう」

授業の様子

障害のある方との関わりや、災害を経験した方との関わりをもちながら学習を進めた。障害のある方との関わりでは、実際に学校に来ていただき一緒にボッチャを行った。その体験について、ＩＣＴ機器等を活用して調べ学習をしたり、まとめたりした。また、災害を経験した方との関わりをもつ際は、授業時間中に釜石市のいのちをつなぐ未来館の方とインターネットを通じてインタビューを行った。被災体験を話していただいたり、子どもたちの質問に答えていただいたりした。



〈ボッチャ選手とのボッチャ体験交流〉

学習のまとめを行ったり、遠くの土地にいる人とコミュニケーションをとったりすることができるのはＩＣＴ機器のよさである。子どもたちの学びに大きくつなげることができた。

⑶ 市内教員向けタブレット活用学習会

学習会の実践

今年度から本校が市内のＩＣＴ機器活用推進校に指定された。東海市教員研修センターとの共催という形で進めた。本校の教員の中でもＩＣＴ機器の活用の知識と技能を持ち合わせている２名の教員が講師に加わり、学習会を開催した。

「普段の授業で使えるＩＣＴ」「ＳＫＹＭＥＮＵとＴＥＡＭＳの活用」の２講座ですぐに授業で使える活用について研究してきたことを市内の教員に伝えた。




〈タブレット活用学習会の様子〉

受講者の感想

・実際に目の前でタブレットを操作してもらう、また自分で操作してみる機会をいただいて、とても勉強になった。
・２学期の最初から使ってみたいと思う内容であった。使う場面や教科を考えて使ってみようと思う。
・ＩＣＴ 機器の便利さや活用する有効性については理解していても、準備が簡単という感覚に至るまでは、個人差があると思うので、市内や校内で、今回のように研修できる機会をもつことはとても必要なことだと思った。

学習会後

タブレットの活用については、授業を効率良く進めるための方法や教員の業務負担軽減に

つながる方法、さらに授業内で子どもたちの学びを深めるための方法がある。子どもたちの学びを深める、子ども同士のつながりをつくるための活用について、より研究を進めていく必要があると感じた。そのためにも、「授業のあり方」や「子どもとの関わり方」について教員の理解を深めたいと感じた。二学期から三学期にかけて、ひらけエデュケーションの服部氏を講師に迎え、教員に向けた研修会を計画、開催をした。

7　成果と課題

ＩＣＴ機器の効果的な活用について、校内で一丸となって研究することができたことがいちばんの成果である。本校の教員は、まずは使ってみるというところから、子どもたちの学びにどのように生かすことができるのかという研究を行ってきた。その中で、子どもたち同士のつながりや、外部の方とのつながりから学び合うことの必要性を考え、今年度の研究主題とした。

振り返りで学級内の子ども同士でつながる。遠くの土地で生活している人と、インターネットでつながる。子ども同士のつながりでは互いの考えにふれながら、深い学びを求めていくこと。遠くの土地の人とつながることは、生の声を子どもたちに届けることができ、もっと知りたいという気持ちを生み出すことができたと考えている。

一方で、自らの思いを子どもたちにもたせることへの手立てが足りなかったことを感じている。子どもたちに課題意識をもたせ、自らその課題に立ち向かわせるような授業の展開を考える必要がある。そのためにも子どもたちに振り返りをさせる際、自己の学びを自覚することができるような振り返りにしていく必要がある。振り返りを基に、授業で学んだことが自分の力として身についているのか、身についていなければどうする必要があるのかといったことを子どもたち自身が考えられるようにしていかなければならない。振り返りについて、ICT 機器を活用して蓄積することで、自らの学びに自覚をもたせる方法を確立したい。

最後に、子どもたちの振り返りから、教師は自分自身の授業を振り返り、改善をしていく。学習指導要領で求められている力を子どもたちに身に付けさせていくためにも、教師自身が研究、自己研鑽を積みながら、授業力の向上を求めていかなければならない。今後も教員一丸となって、自分の思いをもち、主体的に学ぶことができる児童の育成を目指していきたい。

目次へ

研究主題	生きて働く知識・技能を身につけた児童の育成		
副　題	効果的な振り返り活動や他者との協働の機会を確保した授業実践を通して		
学 校 名	大府市立共長小学校	校 長 氏 名	髙島恭一

1　はじめに

学習指導要領では、児童に必要な資質・能力の３つの柱「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力」を育むための学びの質に着目し、授業改善の取組を活性化していくための視点として「主体的・対話的で深い学び」が示されている。これによって、これまで以上に、児童が、何を、どのように学び、何ができるようになったのかなど、自身の学びの過程や変容を自覚できる場面である振り返り活動の重要性が高まってきた。

本校では、「生きて働く知識・技能を身につけた児童の育成」を目指して研究を進めて３年目となる。各教科における振り返り活動を通して、自分の考えを拡げ、習得した知識や技能を活用・再構成したり、次の学習に生かしたりすることができる児童の育成を目指し、活用や再構築に必要な「他者との協働」の重要性を認識し、その上で授業実践に努めていく。

2　研究の方法

研究課題に迫るために、以下の研究仮説及び手立てを設定した。

(1) 目指す児童像

・効果的な振り返り活動や他者との協働を通して、意欲的に学びを追究する姿勢を強められる子
・効果的な振り返り活動や他者との協働を通して、自分の考えを拡げ、習得した知識や技能を活用・再構成できる子
・習得した知識や技能を、相互に関連付けてより深く理解し、次の学習（同じ教科・他教科・次学年）に生かせる子

(2) 研究の仮説

習得した知識や技能を、相互に関連付けてより深く理解し、次の学習に生かせる児童が育つであろう。

(3) 主題に迫るための手立て

①「めあて」と「まとめ」+「振り返り」の徹底

・習得させるべき内容を明確にして「めあて」を設定し、授業終盤の５～10 分で「まとめ」や「振り返り」を行う。「まとめ」は学習内容の確認を教師主導で行い、「振り返り」は学んだことやできるようになったこと、新たな疑問などを児童主体で整理する。「まとめ」と「振り返り」の目的の違いを明確にして行う。

②精選した振り返りポイントの活用（振り返りの視点）

・目指す姿を具体化するための振り返りポイントを低学年用と高学年用の２つに分け、それぞれ５つに絞り、児童に振り返らせる。

＜振り返りポイント＞

低学年用
①できたことをふりかえる。
②わかったことをふりかえる。
③なぜだろうとおもうことをふりかえる。
④もっとやってみたいことをふりかえる。
⑤ともだちと（　　）して、わかったことやきがついたことをふりかえる。

高学年用
①分かったこと・できるようになったことをふりかえる。
②なぜだろう・もっとやってみたいなと思うことをふりかえる。
③友達と活動して分かったことや気付いたことをふりかえる。
④これまで学習してきたことを思い出してふりかえる。
⑤普段のくらしに役立てたいと思ったことをふりかえる。

③振り返り活動の効果的な活用方法の模索

・自分の考えを拡げ、習得した知識や技能を活用・再構成する。そして習得した知識や技能を、相互に関連付けてより深く理解し、次の学習に生かせるように、振り返り活動の効果的な活用方法を実践する。

④「他者との協働」の機会を確保した授業実践

・単純にペア学習やグループ学習を取り入れさえすればよいというわけではなく、児童が「協働的に学びたいな。」「話し合わないと解決が難しいぞ。」と思えるような授業展開や発問、学び合いの場の設定の工夫を追究する。

3　研究の実践

(1) 低学年：１年生　生活科「がっこうたんけん」

①本時の目標

o グループの仲間の話を聞いて、自分の気付きを深めたり拡げたりすることができる。

②本時の指導過程

ア　前時までの学習内容を振り返り、本時の学習課題をつかむ。

学校探検で見つけたことや分かったことを「ひみつみつけたよ」カードにまとめ、本時の学習問題をつかむ。

イ　「ひみつのおしらせかい」の方法を知る。

話をするときや聞くときの注意点を確認し、「ひみつのおしらせかい」の進め方を知る。

ウ　グループで「ひみつのおしらせかい」を行う。

学校探検をして、気付いたことや分かったことを伝え合う。また、グループの仲間の話を聞いて、自分も気付いていたことに対して賛同の意味の付箋を貼って発表者に知らせる。

エ　本時の学習のまとめと振り返りをし、次時の見通しをもつ。

本時の学習を振り返り、振り返りカードの表情マークに表情を描き込む。

③成果と課題

個から伝え合い個による再構築、そして伝え合い活動をする単元構成であり、単元全体を通して学びを深められる単元構成である点が大変よかった。導入でのつかみ

や「ひみつのおしらせかい」といった児童の意欲につながるような工夫が数多くあり、最後の意欲的な振り返り活動にも反映されていた。

課題としては、付箋の数が増えていくこと自体が目的となってしまい、「秘密を集めよう」というめあてにそっていない児童もいた。秘密を集めることやグループの人に発表することが大切であるという事前の押さえが必要であった。

(2) 中学年：４年生　国語科「場面をくらべて読み、心にのこったことを伝え合おう」

①本時の目標

o 本文の叙述をもとに、お父さんの心情を読み取ることができる。

o お父さんがコスモスに込めた想いについて、読み取ったことをもとに、自分の考えをもつことができる。

②本時の学習過程

ア　前時までの学習内容を振り返り、本時の学習課題をつかむ。

前時までに学習したものをまとめた振り返りシートをもとに、前時までの学習を想起させる。

イ　第２場面の後半を読み取る。

第２場面後半を音読した後で、話し合う上で大切な文章や、お父さんの想いが分かる文章を出し合う。コスモスが咲いている場所について読み取り、発表する。一つの花を見つめながら汽車に乗って行ってしまったお父さんのようすを読み取る。

ウ　「大事にするんだよう」に続く言葉を考え、お父さんが一輪のコスモスに込めた想いについて話し合う。

自分の考えをノートに書き、全体の場で話し合う。

エ　本時の学習を振り返る。

児童から出た意見をもとに、本時のまとめを話し合う。本時の学習を経て、最終的に自分の考えがどのように変化したかを振り返りにまとめさせる。

③成果と課題

単元構想がしっかりしており、学びの足跡があるために単元の目標を忘れがちの児童も学びの足跡を見ながら確認ができ、一貫した学びができていた。また、今回の授業のような振り返り活動をすることで、周囲に流されている児童に対して確認することができるため、振り返り活動は意味を為し得ていると言える。さらに授業時間内における一人一人の成長や学びを見ることができた。

課題としては、授業の全般を通して教師がリードするのではなく、児童だけで話し合い活動を進めることができるとよかった。また、児童へ「話し合ってよい」と投げかけていたが、その時点で協働的な学びとはならないので、協働的な学びとは何かを今一度考え直していく必要がある。

(3) 高学年：５年生　図画工作科「あの時　あの場所　わたしの思い」

①本時の目標

o 自分の作品と友達の作品を比較し、自分の作品の改善点に気付くことができる。

②本時の学習過程

ア　前時を振り返り、本時の学習課題を確認する。

鑑賞活動のウォーミングアップとして、図工の教科書にある「おめめぱっちりたいそう」を行っておく。

イ　グループで友達の作品のよさを話し合う。

友達の作品のよい点とその理由を話し合う。８つのグループをつくり、「動き」「奥行き」「表現の工夫」の３つの項目でグループごとに分担して考えさせ、話し合ったことを発表する。

ウ　自分の作品のプレゼンテーションをする。

グループ内で自分の作品をプレゼンテーションした後、クラス全体でプレゼンテーションする。自分の作品をどのように評価して、次の作品にどのように生かしていくのかを考えさせる。

③成果と課題

グループにおけるそれぞれの役割が明確であり、作品の現物が掲示してあるため、鑑賞や評価をするときに進めやすかった。教師が掲げるめあてが明確で、児童の発表に対する教師の切り返しも適切でよかった。

課題としては、鑑賞の観点として掲げた「動き、奥行き、表現」のどの観点で話し合い活動をしているのかが分かりづらかった。また、限られた時間内でしっかりと振り返り活動の時間を確保するために、単元構成の工夫が必要である。

今回の授業で時間が十分取れなかった点は、課題の一つである。

4　まとめ

昨年度から引き続き現職教育の手立てである「振り返り活動」を通して、自分の考えを拡げ、習得した知識や技能を活用・再構成したり、次の学習に生かしたりすることができる児童の育成を目指し、研究を進めてきた。めあてを立て、まとめを全員で共通理解することは授業の基本であり、そこに振り返り活動が加わることで、自分事として考える主体的な学びをすることができる。さらに今年度は、これまで以上に「他者との協働」の重要性を認識し、その上で授業実践に努めてきた。

本研究が始まった令和４年度より、児童も教師も振り返り活動に対する取組について当たり前の活動となり、時間をかけずに行動に移すことができるようになったことは大きな成果である。また、協働的な学びの追究のため、他学年の教師の授業を参観したり、他校の研究授業に積極的に参加したりするなど、今まで以上に意欲的に研鑽を重ねていく教師の姿も見られるようになってきたことも大きな成長であると言える。

一方で研究を進めていくと、めあてとまとめ、振り返り活動や協働的な学びと１時間の授業に対しての思いが強くなるあまり、最後の振り返り活動まで時間内に収まることができず、次時にもち越すような授業実践も見えてきた。まずは児童の成長のための振り返り活動であって、研究のための振り返り活動ではないという考えのもと、授業内容をしっかりと精査して、効果的な授業実践を重ねていくことが今後の課題と考える。

5　おわりに

現職教育のテーマである「振り返り活動」を通して、他者との協働を充実させながら自分の考えを拡げ、習得した知識や技能を活用・再構成したり、次の学習に生かしたりすることができる児童の育成を目指してきた。振り返り活動によって学習前の自分と学習後の自分をつなぐ役割をもつことはこれまで実証することができた。今後は、振り返り活動を充実させるための授業の展開工夫が課題となってくる。さらに研究授業等を通じて検討を重ね、上記の課題解決に向けて追究を進めていきたいと考える。

目次へ

研究主題	自分の考えを深め、学んだことを次に生かすことのできる児童の育成		
副　　題	ゴールが分かるめあての設定と視点ある振り返りの活動を通して		
学 校 名	知多市立つつじが丘小学校	校 長 氏 名	片山　智代江

1　主題設定の理由

この研究主題における本校の研究は４年目である。昨年度、「見通しのあるめあて」と「価値ある振り返り」を手立ての柱に据え、実践を行った。毎回の授業で、何をどのように学ぶのかについて子どもたちに示すことで、子どもたちの学習に取りかかる意欲を向上させることができた。また、振り返りを授業後に行うことで教師・児童ともに少しずつ習慣化させることができた。しかしながら、「見通しのあるめあて」と「価値ある振り返り」という言葉が抽象的であったため、日常的な実践において教師が迷うことも多かったという反省が残った。

そこで、今年度は昨年度の研究内容をさらに充実させるべく、二つの手立てをより具体化させた。「ゴールが分かるめあて」を提示することで、子ども自身がどのように学びを進めていくかを自覚したり決定させたりする。次に「視点ある振り返り」を授業の終末に行うことで、次の学習をどうしていきたいか考えさせる。このような学習活動の継続により主体的な学習者を育てることができるのではないかと考えた。そして、そのスパイラルを繰り返すことで培った自己調整力が、将来自分自身の未来をたくましく切り拓くための礎となるという認識を教員間で共有し、授業実践を進めていくことにした。

2　研究の仮説

見通しのあるめあての設定と価値ある振り返りにより、児童は自分の考えを深め、学んだことを次に生かすようになるだろう。

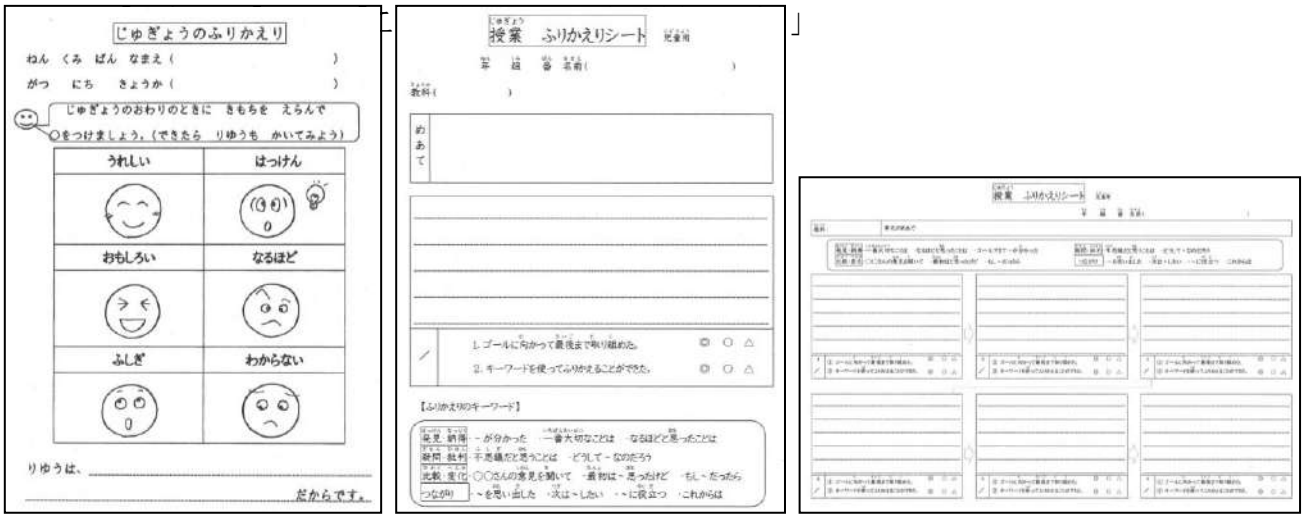
3　研究の手立て

(1) ゴールが分かるめあての設定

・提示するめあてに具体的な数字や動詞を入れて、児童がより自分たちの学びの様子が想像しやすいものとする。
　＜例＞「～の理由について○文字で説明しよう」「～についての…を○個見つけよう」など
・単元の導入時に、単元を通して追究させたいテーマや、単元を終えたときにできるようになっていることなどを示すようにし、単元全体の見通しをもたせるようにする。

(2) 視点ある振り返り

・振り返りシートは、低学年用（視点が言葉と顔の絵で描かれたもの)、高学年用（視点が言葉で書かれたもの)・単元全体用（ＯＰＰシート）の３種類を全教員で共有する。
・それぞれのシートには、視点が話形とともに明記してある。また、振り返りを共有する際には、形成的評価を積極的に行い、価値付けを行う。
　＜視点と話形の例＞
　　【発見・納得】…「○○さんの…という意見がなるほどと思いました。」
　　【比較・変化】…「最初は…と思ったけど」「○○さんの意見を聞いて…と思いました」



【振り返りシート（左：低学年用、右：高学年用)】　　【ＯＰＰシート】

４　研究の実際

(1) ４年生　社会科「くらしをささえる水、電気、ガス」の実践

①　実践の概要

本単元は、我々の暮らしを支える水、電気、ガスの供給について理解するものである。今回は、学級全体で一つの事業について追究していくのではなく、児童一人一人の興味や関心に応じて事業を選択して追究させるために、追究する事業を選ばせることとした。個人での追究後、学級全体で三つの事業全てに触れ、比較させることで、水、電気、ガスが安全かつ安定的に供給されていることについての理解を深めさせたいと考えた。

第１次で単元を通した問いを捉えさせ、第２次で個人が選んだ事業についての追究していく。第３次では、調べたことを発表し、まとめとして三つの事業に共通する安全に安定的に供給するための工夫についてさらに探るという単元全体の授業計画を基に実践した。

②　授業の実際

第１次では、ライフラインについて児童が話し合う中で、「わたしたちのくらしを支える水、電気、ガスはどこからどのように送られてくるのか、また、どんな供給の工夫があるのかを調べ、それぞれの工夫の共通点を探ろう」という単元全体を通して追究していく学習問題（めあて）を設定した。この学習問題については、単元学習の期間中いつでも見えるところに掲示し、指導者も毎回の授業で確認を行った。そのため、児童が調べ学習を進める中で迷いが生じたときには、この学習問題に立ち戻らせ、その情報が本当に必要かどうかを吟味するための指針となった。

第２次の児童それぞれが選んだ事業についての追究の時間は、発表準備も含め６時間分の時間を児童に委ね、自由進度学習の要素を取り入れて実施した。毎回の授業後の振り返りには、ＯＰＰシートを利用した。児童の振り返りには、その日の追究で分かったことの記述があったり、「次は○○について調べたい」と言ったように、次時への展望の記述があったりした。ある程度の見通しをもって学習に取り組む姿が見られた。

第３次のまとめの時間には、「水、電気、ガスの供給の工夫の共通点を見つけ、２人の友達に伝えよう」という具体的な学習問題を提示して行った。単元全体のめあてについて考えるということをそのまま伝えるのではなく、児童にとってより具体的なゴールの姿が想像できるようにした。そのため、多くの児童が迷うことなく活動に取り組むことができた。

(2) ５年生　算数科「面積」、外国語科「Unit7　Welcome to Japan!」の実践

① 実践の概要

この実践は、２教科同時進行単元内自由進度学習で行った。算数・外国語それぞれの目標や学習の流れが示された「学習のてびき」を参考に、２教科をどのような順で進めていくかを児童が計画して進めていく学習形態である。本学年では、算数を学級担任、外国語を教務主任とＡＬＴが担当している。

算数「面積」は、既習の三角形、長方形、正方形の求積に加えて、平行四辺形、台形、ひし形の求積を行う。教科書の流れに沿って進めていくコースや図形を切り貼りして既習事項をいかして公式を生み出すコース、公式の意味を説明するコースの３コースを設定し、自分の興味関心や追究スタイルに応じて児童が選択できるようにした。

外国語「Unit7 Welcome to Japan!」は、「want to～」の表現を使って、日本のどこに行きたいか、そして、そこで何がしたいかなどについて尋ねたり、答えたりする単元である。この学習については、ほぼ教科書に沿った流れの学習を進めた後に、最終課題のアウトプット方法を児童の興味関心や追究スタイルに応じて児童が選択できるようにした。


自由進度学習　算数「面積」　学習のてびき
「スタンダードコース」
目標　（標準時間：２時間）
・既習事項をいかして、図形カードを切ったりはったりしながらいろいろな図形の面積の求め方を自分で考える。
・図形の面積の求め方（公式）を考え、まとめる。
学習の流れ

学習内容	教科書	学習プリント	答えカード
① 直角三角形の面積の求め方を考える。	P135・136	学習プリント1	答えカード1
② 三角形の面積の求め方を考える。	P137	学習プリント2	答えカード2
③ 三角形の面積の公式を考える。	P138・139	学習プリント3	答えカード3
★チェック１　学習プリントを先生に見せる。			
④ 平行四辺形の面積の求め方を考える。	P140・141	学習プリント4	答えカード4
⑤ 平行四辺形の面積の公式を考える。	P142・143	学習プリント5	答えカード5
⑥ いろいろな三角形や平行四辺形の面積を求める。	P144・145	学習プリント6・7	答えカード6・7
⑦ 平行な直線にはさまれた面積を考える。	P146	学習プリント8	答えカード8
⑧ 台形の面積の求め方を考える。	P147・148	学習プリント9	答えカード9
⑨ 台形の面積の公式を考える。	P149	学習プリント10	答えカード10
⑩ ひし形の面積の求め方を考える。	P150	学習プリント11	答えカード11
⑪ ひし形の面積の公式を考える。	P150	学習プリント12	答えカード12
⑫ 色々な図形の面積を求める。	P152・153	学習プリント13・14	答えカード13・14
⑬ 高さ底辺と面積の関係について考える。	P154	学習プリント15・16	答えカード15・16
⑭ 校内にある図形の面積を明らかにしよう		学習プリント発展	
★チェック２　学習プリントを先生に見せる。			
⑮ チェックテストをする。		チェックテスト	

ここまでは、かならず終わりましょう。

チ：①色々な図形の面積の、他の求め方を考えよう。
チ：②色々な図形の面積の公式の説明を考えよう。
レ：③長方形パケーキを５等分する方法について考えよう。（☆ちょっと難しい）
シ：④陣地取りゲームをしよう
シ：⑤発展問題にチャレンジしよう
学：あめざせ！面積マスター！（認定証あり）
自：牛鬼ムス問題に挑戦！

自由進度学習　算数「面積」　学習のてびき
「数学者コース」
目標　（標準時間：２時間）
・既習事項をいかして、図形カードを切ったりはったりしながらいろいろな図形の面積の求め方を自分で考える。
・図形の面積の求め方（公式）について考え、公式がなぜそうなるかの説明を書く。
学習の流れ

学習内容	教科書	学習プリント	答えカード
① 直角三角形の面積の求め方を考える。	P135・136	学習プリント1	答えカード1
② 三角形の面積の求め方を考える。	P137	学習プリント2	答えカード2
③ 三角形の面積の公式を考える。	P138・139	学習プリント3	答えカード3
★チェック１　学習プリントを先生に見せる。			
④ 平行四辺形の面積の求め方を考える。	P140・141	学習プリント4	答えカード4
⑤ 平行四辺形の面積の公式を考える。	P142・143	学習プリント5	答えカード5
⑥ いろいろな三角形や平行四辺形の面積を求める。	P144・145	学習プリント6・7	答えカード6・7
⑦ 平行な直線にはさまれた面積を考える。	P146	学習プリント8	答えカード8
⑧ 台形の面積の求め方を考える。	P147・148	学習プリント9	答えカード9
⑨ 台形の面積の公式を考える。	P149	学習プリント10	答えカード10
⑩ ひし形の面積の求め方を考える。	P150	学習プリント11	答えカード11
⑪ ひし形の面積の公式を考える。	P150	学習プリント12	答えカード12
⑫ 色々な図形の面積を求める。	P152・153	学習プリント13・14	答えカード13・14
⑬ 高さ底辺と面積の関係について考える。	P154	学習プリント15・16	答えカード15・16
⑭ 校内にある図形の面積を明らかにしよう		学習プリント発展	
★チェック２　学習プリントを先生に見せる。			
⑮ チェックテストをする。		チェックテスト	

ここまでは、かならず終わりましょう。

チ：①色々な図形の面積の、他の求め方を考えよう。
チ：②色々な図形の面積の公式の説明を考えよう。
レ：③長方形パケーキを５等分する方法について考えよう。（☆ちょっと難しい）
シ：④陣地取りゲームをしよう
シ：⑤発展問題にチャレンジしよう
学：あめざせ！面積マスター！（認定証あり）
自：牛鬼ムス問題に挑戦！

自由進度学習　算数「面積」　学習のてびき
「試行錯誤コース」
目標　（標準時間：２時間）
・既習事項をいかして、図形カードを何度も切ったりはったりしながらいろいろな図形の面積の求め方を自分で考える。
・図形の面積の求め方についてまとめる。
学習の流れ

学習内容	教科書	学習プリント	答えカード
① 直角三角形の面積の求め方を考える。	P135・136	学習プリント1	答えカード1
② 三角形の面積の求め方を考える。	P137	学習プリント2	答えカード2
③ 三角形の面積の公式を考える。	P138・139	学習プリント3	答えカード3
★チェック１　学習プリントを先生に見せる。			
④ 平行四辺形の面積の求め方を考える。	P140・141	学習プリント4	答えカード4
⑤ 平行四辺形の面積の公式を考える。	P142・143	学習プリント5	答えカード5
⑥ いろいろな三角形や平行四辺形の面積を求める。	P144・145	学習プリント6・7	答えカード6・7
⑦ 平行な直線にはさまれた面積を考える。	P146	学習プリント8	答えカード8
⑧ 台形の面積の求め方を考える。	P147・148	学習プリント9	答えカード9
⑨ 台形の面積の公式を考える。	P149	学習プリント10	答えカード10
⑩ ひし形の面積の求め方を考える。	P150	学習プリント11	答えカード11
⑪ ひし形の面積の公式を考える。	P150	学習プリント12	答えカード12
⑫ 色々な図形の面積を求める。	P152・153	学習プリント13・14	答えカード13・14
⑬ 高さ底辺と面積の関係について考える。	P154	学習プリント15・16	答えカード15・16
⑭ 校内にある図形の面積を明らかにしよう		学習プリント発展	
★チェック２　学習プリントを先生に見せる。			
⑮ チェックテストをする。		チェックテスト	

ここまでは、かならず終わりましょう。

チ：①色々な図形の面積の、他の求め方を考えよう。
チ：②色々な図形の面積の公式の説明を考えよう。
レ：③長方形パケーキを５等分する方法について考えよう。（☆ちょっと難しい）
シ：④陣地取りゲームをしよう
シ：⑤発展問題にチャレンジしよう
学：あめざせ！面積マスター！（認定証あり）
自：牛鬼ムス問題に挑戦！

【算数「面積」：各コースごとの学習のてびき】

② 授業の実際

単元を進めるにあたり、２教科それぞれのガイダンスを行った。その際に、単元全体を通して追究していく目標提示を以下のように行った。

［算数「面積」］

・既習事項をいかして、図形カードを何度も切ったり貼ったりしながら、いろいろな図形の面積の求め方を自分で考える。
・図形の面積の求め方についてまとめる（説明する）。

［外国語「Unit7 Welcome to Japan!」］

・行きたい日本の場所について、紹介する語句と表現を身に付ける。（チェック１：会話テスト）
・行きたい日本の場所について、方法を選び、紹介することができる。（チェック２：発表）

特に、外国語の学習では、目標とそれに対応するチェック方法を明記したことにより、児童は「できるようになること」と「その評価方法」を単元開始時に知ることができ、より明確にゴールの姿を意識して学習に臨むことができた。

毎時間の児童の振り返りには、「やっとＡＬＴの先生との会話テストが終わった。次は発表のためのＣＭづくりに取りかかりたい。」といった記述が見られるなど、見通しをもって活動できていた。



【外国語における個人追究の様子】



【自作のプレゼンで発表する児童】

５　成果と課題

単元全体や各授業において「ゴールが分かるめあて」を設定することを意識して実践を重ねてきたことにより、児童は見通しをもって学習活動を進めることができた。また、視点をもって振り返りをさせることにより、自ら学びとったことを記述する児童や、次時へのつながりを意識して記述する児童が増えた。以上のことから、「ゴールの分かるめあて」の設定と「視点ある振り返り」の活動を行うことは、追究活動をより活発にしたり、学びを次に生かそうとしたりする児童を育成するためには有効な手立てであったと考えられる。

しかし、学習内容や流れについては見通しがもてているものの、計画的に進められなかったり、困難が生じたりした時に、自ら調整していく力はまだ弱いと感じた。今後は、自己調整力を育むための手立ての構築と実践を進めていきたいと考える。

目次へ

研究主題	他者と関わりながらよりよく生きる子を育てる教育活動		
副　　題	明るく　正しく　のびのびと　本地ヶ原の本地っ子		
学 校 名	尾張旭市立本地原小学校	校 長 氏 名	長谷川　環

1　主題設定の理由

本校の児童は、誰とでも分け隔て無く接することができるという特性を持った子が多い反面、他者との一方的な関わり方をすることでトラブルにつなげてしまう児童も少なからずいる。そのため、学校生活の中では、他者との正しい関わり方を学び健やかな成長をめざしていくことが求められると考える。そして、本校の教育目標の１つに「仲間育て」がある。その「仲間育て」では、互いの違いを認め合い、許し合う寛容の心を育てることをめざしている。寛容の心を育てるためには、やはり他者との関わりが必要不可欠であるため、本研究の研究主題を「他者と関わりながらよりよく生きる子を育てる教育活動　～明るく　正しく　のびのびと　本地ヶ原の本地っ子～」とした。

2　研究の実際

⑴　児童会活動の充実

他者との関わりを意図的に設けるために、児童会では様々な企画を行った。その企画の中には、「あいさつ運動」や「あそぼう会」などがある。「あいさつ運動」では、単に登校時のあいさつをするのではなく、誰もが取り組みやすいように、多言語でのあいさつ交換に取り組んだり、低学年でも取り組みやすいように塗り絵などを導入したりした。

また、児童会企画の一大イベントとして、本年度は９月に「本地っ子祭」を行った。「本地っ子祭」とは、４～６年生が各クラスにおいて、低学年が楽しめるゲームなどを企画して、低学年をおもてなしする催しとなっている。高学年のどのクラスも低学年が楽しめるようにするには、どのような説明を行えばよいのかやどのように低学年をエスコートすることで、たくさんのクラスのゲームを楽しめることができるかなど、相手のことを思いやる気持ちを大切にする心を育むことができたのではないかと思う。



本地っ子祭の様子

⑵　外部人材の活用

他者との関わりを学んでいくためには、校内のみならず校外の社会で活躍する人材とふれあうことも非常に重要であると考えている。そのため、今年度も多くの外部講師をお招きして、講演・授業等を行っていただいた。その中の１つで、２年生に行った交通安全教室について、紹介していく。交通安全教室は、近隣の運送業者に来ていただき、実際に大型トラックを使って運転席から見えるトラックの死角などについて学んでいった。子どもたちは、実際の大型トラックの大きさに驚くとともに、代表の児童が運転席からの見え方を確認する中で、トラック

の周囲には死角があり、危険がいっぱいあることを学ぶことができた。また、学校の近隣にはさまざまな企業があり、そこで活躍している大人達がいることも知ることができた。子どもたちと身近な企業の大人達が関わるよい機会になったと捉えている。



交通安全教室の様子

⑶　講演会の実施

他者との関わりを学ぶために、公務員弘済会補助を活用して、全国で活躍しているパフォーマーをお招きして、講演会を実施した。講演会では２人のパフォーマーが様々な演目を演じた。子どもたちは、目を輝かせながら社会で活躍している大人達にふれあうことができた。また、さまざまな演目を行う中で、子どもたちとの関わりもあり、子どもたちは、他者を楽しませるための工夫や話し方などコミュニケーションの取り方について学ぶことができたのではないかと考える。



講演会の様子

３　研究のまとめと今後の課題

ＳＮＳなどがますます普及して他者との関わりが実際のふれあいから、インターネット上でのふれあいに変わってきた。インターネット上のふれあいが増えていく昨今において、学校生活の中でこどもたちが学んで行くべきものは、実際のふれあいの大切さとその手段についてである。今回の研究において、児童会などによる意図的なふれあいの機会の創出ができたことは、大変意義のあるものであると感じた。意図的に他者とふれあう機会を設ける中で、教員というコーディネーターのもと他者との正しいふれあい方について学んでいくことは、今後子どもたちが成長していく中で、大きな糧になるのではないかと考える。

また、子どもたちのみならず、地域で活躍する大人と関わることは、学校という場においては、得てして子どもたちとかかわる大人が教員に限られてしまう環境の中で、多様な考えや関わり方にふれあう機会となり、意義のあるものであったと考える。実際に目で見て感じたり、話をしたりすることは、教員からの伝聞よりも伝わるものが多いため、効果的な機会となったと考える。

一方で、今後の課題としては、いかにして今回実践した内容を継続・拡大していくかである。昨今、教員の働き方改革が叫ばれる中、多くの企画を創出していくことは、時間的な制約もあるため、できるだけ効率的に行って行く必要がある。現在行っているものについては、継続する場合は、次の担当者にどのようにして引き継ぎを行うかなど、その方法などの工夫が必要となる。また、拡大して新規に行う場合にいても、ＩＣＴ機器をうまく活用するなどして、準備等に多くの時間を費やさないようにすることが必要だと感じている。

最後に、本校としては、今後も子どもたちの健やかな成長のために、試行錯誤をして他者との関わりを大切にした取り組みを継続して行っていきたいと考える。

目次へ

研究主題	学校・家庭・地域と連携した造形教育		
副　題	－図画工作科「焼き物」「木の枝アート」の実践を通して－		
学校名・園名	豊明市立豊明小学校	校長・園長氏名	小　崎　　真

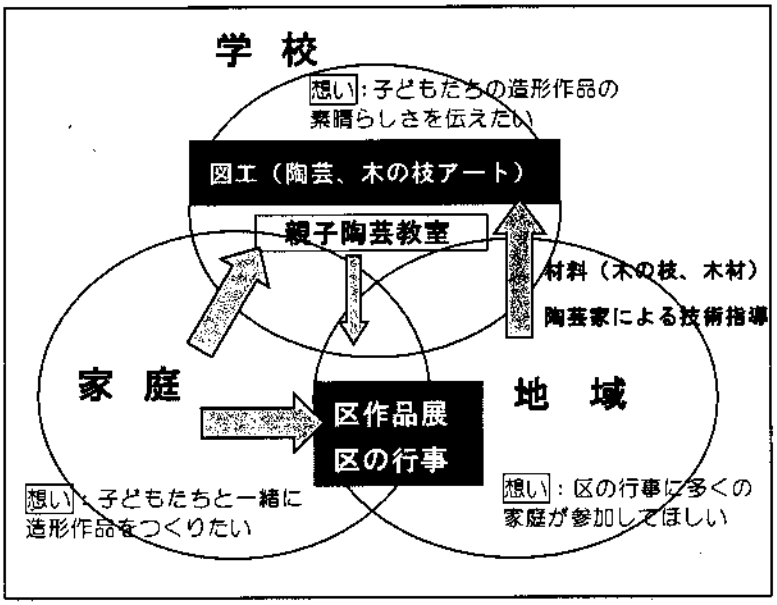
はじめに

本校は今年度で創立114周年を迎え、家庭・地域とつながりの深い歴史のある学校である。コミュニティスクール（学校運営協議会）では、学校・家庭・地域との連携により、本校の教育活動が豊かに展開されている。

今年度のコミュニティスクールで、複数の区から「区の文化祭作品展で、子どもたちの作品を展示してもらえないか」と提案があった。理由は、「区の作品展に子どもの作品を展示すれば、保護者に対し地域行事への参加を促せる」ということであった。

また、保護者からは、「子どもと一緒に陶芸作品を作りたい」という要望が出た。図工の授業で子どもたちが陶芸作品を作ったため、保護者も作ってみたいと陶芸に興味が出てきたようである。

学校としても、「子どもたちの造形作品の素晴らしさを伝えたい」という思いがあり、学校・家庭・地域が「造形活動」を中心にした連携を推し進めることになった。造形教育でも専門性の高い「陶芸」を扱うということで、地域の陶芸家の方に専門的な技術をサポートしていただいたり、図工の材料として区の神社にある木の枝や木材を提供していただいたりすることを期待している。そこで、本研究では、学校・家庭・地域が「造形教育」を通して連携することで有意義な学びとなるよう、実践に取り組むことにした（資料1）。



資料1　コミュニティスクール（学校運営協議会）での連携

1　研究の実際

（1）造形教育の広がり～地域からの人的支援

図画工作科（5・6年）の授業「焼き物をつくろう（陶芸）」の実践で、地域の陶芸家の方に授業で指導していただき、児童は電動ろくろ・手回しろくろを使って各自成形し、素焼き後は釉薬をかけて本焼きした。陶芸家の方からは、ろくろによる成形や施釉の仕方等の指導をいただいた（資料2）。児童は、焼き上がった作品を家に持ち帰った。



資料2　造形作家の方による指導（図工の授業）

保護者からも陶芸に関する反応が大きく、「ぜひ、夏休みに親子で陶芸教室を実施してほしい」という要望があった。そこで、夏季休業中に親子陶芸教室（資料3）を行うことにした。



資料3　親子陶芸教室（夏季休業中）の様子

（2）家庭との連携～親子陶芸教室

夏季休業中に、親子での陶芸教室の開催案内を配付したと

ころ、全部で30家庭の申込みがあった。会場となる図工室のスペースの都合上、一度での実施が難しいため、低・中・高学年で1時間ごとに時間を分けて行った。児童の発達段階に合わせて、制作する器の内容を変えたため、無理なく作陶することができた。中には、電動ろくろに挑戦して器をつくる児童や保護者もいた。完成した作品は素焼きをした後、施釉・本焼きをした。

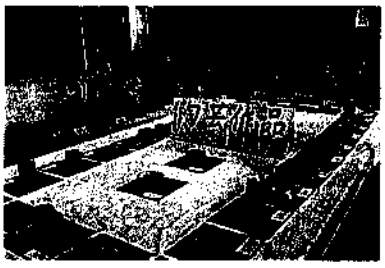


資料4　「木の枝アート」に取り組む様子

（3）造形教育の広がり～地域からの物的支援

陶芸作品だけではなく、他の学年の児童による造形作品を地域の多くの方に見ていただきたいと考えた。そこで、地域の方にお願いして許可をいただき、神社に落ちていた木の枝を集め、図画工作科「木の枝アート」(4年)に取り組んだ(資料4)。

児童は木の枝を加工しホットボンドで接着した。その際、土台として、地域の建築業者からいただいた木材を利用した。完成した作品は、陶芸と同様、区の作品展に展示した。



資料5　区の文化祭作品展（陶芸作品）

（4）地域との連携～区作品展

完成した陶芸作品「焼き物」と「木の枝アート」は2つの区の文化祭作品展に展示した(資料5・6)。展示台や白布は地域の方が準備してくださった。作品展当日、多くの保護者や地域の方に作品を鑑賞していただくことができた。学校外で児童の作品が展示される機会がない昨今、児童が学校の授業や教育活動で制作された作品が地域の施設で展示された意味は大きいと考える。



資料6　区の文化祭作品展（木の枝アート）

2　研究のまとめ

今年度、コミュニティスクールで検討された内容をもとに、図画工作科「焼き物」「木の枝アート」の実践をとおした連携づくりに取り組んだ。地域の文化祭作品展に児童作品を展示することで、これまで校内で留まっていた児童作品の素晴らしさを多くの保護者や地域の方に伝えていくことができた。造形作品は、鑑賞者に見られることで「作品」として成り立つため、こうした多くの方に見ていただく場を大切にしていく必要がある。

今回の取組は、学校での文化的活動が地域の中で広がりを見せた事例であるが、今後は地域の活動を学校での文化的活動に活かす取組を検討していきたい。

おわりに

本校のコミュニティスクールは、スタートして今年度で4年目となる。スタート当初は、どのような取組を行うか、試行錯誤の状態であった。しかし、ここ数年は、地域が所有するテントを運動会児童観覧用としてお借りしたり、今回のように地域の文化祭作品展に積極的に関わったりと、学校と地域が連携して互いの行事に関わっていくようになってきた。

今後も、学校・保護者・地域の連携は大切であり、例えば、地域のお祭りで児童が太鼓や笛を演奏しているが、参加者する児童が少ないという課題がある。そこで、児童がお祭りで披露している演奏を学校の体育館で発表し、より多くの児童が地域の行事に参加できるような意識付けをすることも検討している。こうした学校・保護者・地域が連携し、互いの行事を盛り上げていく視点は重要であると考える。

最後になりましたが、今回の研究では、材料代として土粘土・釉薬の費用については、日本教育公務員弘済会愛知支部から助成いただくことができました。この点においても、保護者の負担を減らすことができ、好意的かつ積極的に陶芸に取り組んでいただくことができました。

この場をお借りして深く感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

目次へ

研究主題	考えを聴き合い、互いに学び合う児童の育成		
副　　題			
学 校 名	豊明市立三崎小学校	校 長 氏 名	今　井　智　樹

1　はじめに

本校では、令和元年度より、自分の考えをもち、学び合いの中で考えを深められる児童の育成を行ってきた。そのため、相手を意識して考えを伝え合い、互いに学びを深め合う授業づくりに取り組んできた。また、ICT機器の効果的な活用を考え、取り組んできた。

今年度は、これまでの成果を踏まえ、さらに子どもたちが考えを聴き合い、互いに学び合う児童の育成を目指し、研究に取り組むことにした。

2　研究の概要

「考えを聴き合い、互いに学び合う児童の育成」を目指し、授業づくりを進める。

（1）　子ども同士で学び合う場面を取り入れた指導計画の工夫
（2）　子どもたちが主体的に解決できる課題設定の工夫
（3）　ICT機器を効果的に活用した指導計画の工夫

3　研究の実際

（1）　子ども同士で学び合う場面を取り入れた指導計画の工夫

聴き合える安心感のある学級づくりを心がけ、ペア活動やグループ活動を授業の中で効果的に取り入れるように意識した。男女が交互になるように市松模様、3～4人のグループ編成、コの字の座席隊形など、話し合いをしやすい座席配置を多く取り入れた。また、教員同士でも話し合いツール（えんたくん）を使って研修や研究協議をし、学び合うことで、子どもの指導に生かすようにした。


研究協議の様子

（2）　子どもたちが主体的に解決できる課題設定の工夫

基礎基本の定着を図る教科書レベルの「共有の学び」を設定した。さらに、「共有の学び」とつながりがあり「探究」を促す「ジャンプの学び」を設定した。外部講師（市のクラスアドバイザーや岐阜聖徳大学の山田貞二先生）による講話、助言を聴くことで、適切な課題設定や発問について考えた。また、1人1授業を公開し、他クラスの子どもたちの様子を見ながら、学びが深まっているかどうか検証をし、見取った。研究協議会では、話し合いツール（えんたくん）を使い、どの発問やどの場面で子どもたちの学びが深まったのかを話し合い、成果を共有した。

（3）　ICT機器を効果的に活用した指導計画の工夫

タブレットの写真機能などは、低学年であっても十分に使えるので、活用させることにした。例えば、2年生の図画工作「おともだちをさがそう！」では、子どもたちが校内を歩き、友達に見えるものを写真に撮り、その画像をグループのメンバーに見せながらクイズを出すなど、タブレットを効果的に活用させた。また、市のICT支援員を講師として「コラボノート」研修会を開き、子どもたちの


コラボノートを活用

意見を共有するための便利なツールとしての使い方を職員が学んだ。授業でもコラボノートの活用をし始め、少しずつ意見を共有できるようになってきている。

4　おわりに

「考えを聴き合い、互いに学び合う児童の育成」を目指し、授業づくりを進めてきた。「探究」を促進する「ジャンプの学び」を工夫することで、子どもたちが、「どうして？」「知りたい」と仲間と話し合いながら学ぶ姿が多く見られるようになった。また、児童も活用しているのだが、職員の現職教育や研究協議のときにも、話し合いツール（えんたくん）を使用し、職員の聴き合い、学び合う姿も多く見られるようになった。

今後の課題としては、聴き合い、学び合うだけでなく、さらに学びを深めていくことが挙げられる。学校独自の三崎小スタンダードを教員全員で創り出し、さらに研究を進めていきたい。

目次へ

研究主題	互いの意見を尊重し、自分の考えを深められる子の育成		
副　　題	― 聞く力をつける活動を通して ―		
学 校 名	日進市立西小学校	校 長 氏 名	高田　由紀

はじめに

今年度から、本校の研究主題を「互いの意見を尊重し、自分の考えを深められる子の育成」とし、対話的な活動を通し、自分の考えを深められる子の育成を目指していくことにした。１年目にあたる今年度は、「聞く力」に重点をおき、副題を「聞く力をつける活動を通して」とした。「聞く力」を８段階のステップアップ式で捉えられるように設定し、学年ごとの子どもたちの目指す姿を考えた(資料１)。目指す姿を意識することで、教員も指導をする際の言葉がけや指導内容なども、どこに重きを置けばよいのかわかりやすくなった。授業の中では、話を聞くときや話し合い活動のときに意識させるように声をかけ、自分と相手の考えに着目させたり、相手が何を伝えたいのかを考えさせたりするようにした。さらに、全校で具体的な子どもたちの目指す姿を共有しているので、どの学年の教員も子どもの実態把握がしやすくなると考えて行った。

【聞く力を育てるための８ステップ！】
1　話している人を見る
2　最後まで聞く
3　うなずきながら聞く
4　あいづちをうとう
5　話の内容をつかもう
6　分からないことを質問する
7　自分が感じたことを伝える
8　事実と意見を聞き分ける

「聞く力」を育てるための８ステップ（資料1）

また、「聞く力」は学習面のみならず、普段の学校生活や人間関係を形成していく上でも重要な力である。小学校という枠組みの中で、学年や学級といった集団生活をしていくときに、自分一人の思いだけで生活することはできない。小学校という発達段階において、相手の気持ちを考えて行動できるようにしていくことは、とても大事なことである。本校では、友達同士のトラブルが多く、些細なことからけんかになることも少なくない。子どもたちの「聞く力」を伸ばすことで、相手の気持ちに寄り添い、思いやりのある子どもたちに育てていきたい。

助成金で行った内容

①　「あすチャレ！スクール」の開催

子どもたちに、他者が抱える問題を自分のこと、同じ仲間のこととして捉え、どのような思いをもっているのかを考える力をもってほしいと思い、パラスポーツの体験型出前授業を開催した。シドニーパラリンピック男子車いすバスケットボールの日本代表キャプテン、根木慎志さんを講師に招き、障害があることでできることやできないこと、普段の生活などについて話をしていただいた。子どもたちは、真剣に話を聞き、他人事ではなく、ごく身近なことであり、自分たちには何ができるのか、何をすべき



講師の話を真剣に聞く様子（資料２）

なのかを考えている様子が見られた（資料２）。また、講演後には、実際に車いすバスケットボールを体験し、車いすで動くことの難しさや、座ったまま活動することの大変さを実感していた（資料３）。



車いすバスケットボールを体験する様子（資料3）

② 話し合い活動を充実させるための教材の購入

子どもたちの話し合い活動を充実させるために、プリントを差し込んで、表面の透明シートに書き込むことができる「まなボード」を購入した。互いに書いた内容を見て、子どもたちが意見を出し合い、話を聞くことで、考えを深める授業を行うことができた。これまでのホワイトボードに比べ、比較的軽い点や、図や表などを差し込むことで、直接どの部分のことを話し合っているのかを書き込んだり消したりできることで、これまで以上に話し合いが活発に行われていた。さらに、黒板に貼って発表するなど、比較・検討をしながら、子どもたち同士が教え合い、学び合うなど、協働的に学ぶ姿も見られた。タブレットを用いるなど、デジタル教材でもできることかもしれないが、児童のデジタル活用力や、画面の大きさなどを考えると、このような方法が望ましい場面もあるのだと感じた。

また、体育の授業などでの話し合い活動を充実させるために、「タブレット用スタンド」を購入した。子どもたちが、自分たちの動きや活動の様子をその場で確認し、お互いにどうすれば技術が向上するのか、よりよく活動できるのかを話し合うことを目的とした。これまでもタブレットを話し合い活動に活用してきたが、屋外でも使用しやすいようにタブレット用のスタンドを用意することで、より効率的に話し合い活動ができると考えた。

まとめ

今年度は「聞く力」を意識させ、講演会を開催したり、話し合い活動を中心に研究授業を行ったりして、児童たちは、相手の話に耳を傾け、他者の意見を尊重しようとする姿が見られた。ただ、普段の授業や生活の様子を見ていると、まだ力としては不十分だと感じる。今後も、互いの意見を尊重し、思いやりの気持ちをもって行動できる子どもたちを目指し、授業実践や生活指導を重ねていきたい。

目次へ

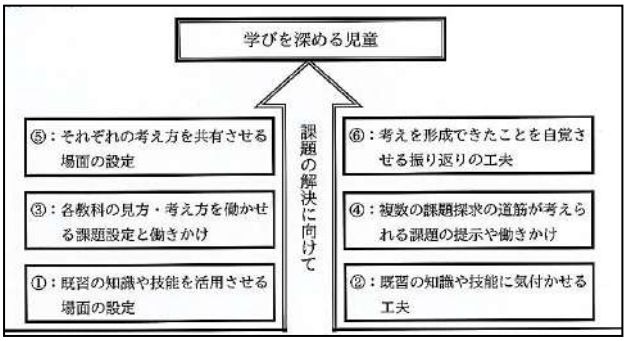
研究主題	知識や技能を生かして学びを深める児童の育成		
副　　題	―既習内容や経験と関連付けた思考を促す授業展開を通して―		
学 校 名	清須市立西枇杷島小学校	校 長 氏 名	海　川　　覚

１　はじめに

本校では昨年度、学習活動において、各教科に合った見方や考え方を働かせる課題を設定するとともに、課題解決の過程に、知識や技能、経験を、意識・活用させていくことで、深い学びの実現を目指した。今年度はその学習活動を継続しつつ、既習内容や経験と関連付けた思考を促す授業展開を行うことで、今まで以上に、より知識や技能を生かした深い学びの実現を目指した。また、個別最適な学びと協働的な学びの場面を設定し、それぞれの学びを一体的に充実させることで、深い学びへつなげていきたいと考えた。さらに、課題解決に際しどの知識や技能、経験を関連付けたかを言葉で表現する活動を行い、自分自身の学習活動を客観的に振り返らせ、学びを自覚させたいと考えた。これらを六つの手だてとして明示し、研究の方法として図に表し、本校教員に提示し研究を進めた【資料１】。

今年度は、知識や技能を生かして学びを深める児童を育成するために、二つの取組を行った。一つ目は、「深い学び」に対するさらなる理解を深め、授業改善を図る取組である。そこで外部講師による研修機会を設け、「深い学び」についての学習と授業改善に向けての講演を実施した。二つ目は研究協議を含めた研究授業の充実である。研究授業を行うにあたり、部会で授業検討をもつとともに、授業後に研究協議を行い、授業力向上を図った。

【資料１】研究の方法



２　実践内容

(1) 外部講師の研修

今年度は、現職教育テーマを「深い学び」に設定した２年目の取組となる。本校教員は昨年度、「深い学び」について理解を深めたものの、「深い学び」の実現に向けて、具体的にどのような授業を行うべきか、方向性を探っていた。そこで、筑波大学附属小学校教諭である鷲見辰美先生を講師としてお招きし、「深い学び」に向けた授業改善についての学習を行った【写真１】。



【写真１】「深い学び」についての講義

講演の中で、「深い学び」の実現のためには、目標だけでなく目的を明確にすることや、主体的な問題活動を行う導入を取り入れることが大切であることを学んだ。また、実際に鷲見先生が授業をされた理科の実践を例に、「主体的な活動」、「子どもたちの判断が必要となる場の設定」、「ゴールの明確化」の三つの視点を基にした授業改善が必要であることを、具体的に学ぶことができた。

(2) 研究授業の充実

学校訪問や初任者研修、中堅教諭等資質向上研修を含めた研究授業の際には、部会を設け、知識や技能が生かされているか、既習内容や経験と関連付けた思考を促す授業展開になっているかなど、授業内容を検討した。その後、授業を公開し、参観した教師より、よかった点や改善点を出し合うなどして、授業力の向上を図った。

ア　６年社会科「縄文のむらから古墳のくにへ」

既習の技能である、資料から読み取った情報を比較・分類してまとめる力を生かした「深い学び」の実現を目指した。授業の中で、縄文時代から弥生時代への変化の様子を相互関係の視点で関連付け、変化した理由について自分の考えを表現させた【写真２】。授業後の研究協議では、既習技能を学びに生かすことができたか、協働的な学びの場面でどのように学びを深めるかについて議論した。



【写真２】社会科の授業

イ　３年算数科「あまりのあるわり算」

既習の知識である、わり算の仕方を理解し式の答えを求める力を生かした「深い学び」の実現を目指した。授業の中で、余りの意味とその処理の仕方を関連付ける思考を児童に促すよう授業展開を工夫した【写真３】。図を使って答えを求める問題において、児童は既習を生かして学習に取り組むことができていたとともに、ペア学習などの協働的な学びの場の設定により、理解を深める児童がいた。研究協議では、余りが何を表しているかについて、児童たちが追究できる授業展開の工夫について議論した。



【写真３】算数科の授業

ウ　５年理科「物のとけ方」

既習の知識である、複数の条件の中から調べたい条件だけを変えて実験するという条件制御の考え方を生かした「深い学び」の実現を目指した。理科の見方・考え方である条件制御の考え方を生かして実験を行うことにより、児童から様々な考えが出された。また、出された考えを共有することにより、自分の考えと他者の考えの違いを捉え，多様な視点から自分の考えを見直したり振り返ったりする児童の様子が見られた【写真４】。研究協議では、理科において学びを深めるには、仮説、予想をしっかりもっていること、実験結果を共有し、疑問に思うことの解決方法を出し合うことが必要であるなどの意見が出された。



【写真４】理科の授業

３　成果と今後の課題

今年度は外部講師の研修により、本校教員の「深い学び」についての授業改善について必要性を実感することができた。また、年度当初に計画を立てて研究授業を進めたことで、部会での授業検討や、授業後の研究協議が充実した内容となった。課題として、授業の中で既習内容や経験と関連付けた思考を児童にどう促すかが挙げられる。今後も学習活動において思考を促す場面をより意識しながら、授業力の向上を図り、「深い学び」の実現を目指していきたい。

目次へ

研究主題	言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し、適切に表現できる子の育成		
副　題	「ワンランク上の言葉の学び手」を育む国語科指導の充実を通して		
学 校 名	北名古屋市立西春小学校	校 長 氏 名	久保　千聡

１　はじめに

本校は、令和５・６年度、愛日地方教育事務協議会、北名古屋市教育委員会より「学習指導」の研究委嘱を受け、研究主題を「言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し、適切に表現できる子の育成―『ワンランク上の言葉の学び手』を育む国語科指導の充実を通して―」として、２年にわたって国語科の研究に取り組んできた。

１年目となる昨年度は、国語の授業スタイルの確立と、「言葉」の基礎トレーニングに重点を置いて実践を進めてきた。教師と児童がともに「ワンランク上の言葉の学び手」という言葉で目指す姿を共通理解し、全校が一丸となって研究に取り組む雰囲気が醸成された。また、デジタル教科書を活用して個で考えを深める個別最適な学びと、対話を重視した協働的な学びの一体的な充実を図る「西春小スタイルの国語の学び」が定着し、児童も教師も見通しをもって学習に臨むことができるようになってきた。しかし、自分の考えを友達に伝えたり、全体の場で発表したりすることに苦手意識をもつ児童も多く、話し合いが深まらない場面も見られた。

そこで２年目となる今年度は、特に「西春小スタイルの国語の学び」の充実と、学び合いの基礎となる「話し方・聞き方」「話し合いの仕方」の指導に重点を置いて対話的な活動の活性化を図り、研究主題に迫るため、本実践に取り組んだ。

２　実践内容

（１）西春小スタイルの国語の学び

昨年度は、本校の国語科の学習スタイルとして、一人でじっくり黙々と考える個別最適な学びの時間「もくもくタイム」と、対話を通してみんなでよく考える協働的な学びの時間「わいわいタイム」を授業中に位置づけ、「西春小スタイルの国語の学び」として全校で取り組んできた。今年度は、さらに、「わいわいタイム」での話し合いを基に、自分の考えを再構築する個別最適な学習の時間「ぐんぐんタイム」を位置付けた。

授業は、まず「もくもくタイム」で、児童は学習者用デジタル教科書を活用して、言葉や叙述に着目して本時の課題に対する自分の考えを形成し、「マイ黒板」を使用してその考えを構造化・可視化する。

次に「わいわいタイム」で、「もくもくタイム」で形成した自分の考えを、ペアやグループ、学級全体で伝え合う。友達の考えと自分の考えを比較して自分の考えにはなかった新しい気付きを得たり、自分の考えに対する友達の感想を聞いて考えの質を高めたりする。

そして「ぐんぐんタイム」で、「わいわいタイム」での話し合いを通して得た新たな気付きや考えの深まりを、もう一度一人で学習者用デジタル教科書に加筆・修正し、本時の課題に対する自分の考えを再構築・再確認する。その後、「学びのまとめ」として、児童の発言を基に本時の課題に対するまとめをしていく。

このように、個の考えが、ペアやグループ、全体の場での話し合いを経ることでスパイラルに深まっていく授業展開とした。これにより、他者の気付きや意見を自らの考えに生かし、物語文の主題や説明文の構成などについてより深い考えをもつことができるようになり、研究主題である「国語で正確に理解し、適切に表現できる」姿に迫ることができた。

（2）「学び」の基礎づくり

仲間とともに「学び」を深め、「学び」を支え合う学習集団の育成を目指して、「話し方・聞き方」や「話し合いの仕方」を指導し、対話活動の活性化を図った。

友達や教師の話に対して、うなずいたり、声に出したりして反応しながら聞く活動を「西春リアクション」とし、話の要点を自然と理解できるようにするとともに、話し手が話しやすい雰囲気をつくった。

また、「わいわいタイム」での話し合いの形態を、①ペア②グループ③「武者修行の旅」（教室内を自由に立ち歩いて交流する場）④ワンランクアップタイム（全体での話し合いの場）とし、「西春ディスカッション」として、児童の実態や学習内容、場面等に応じて選択した。この「西春ディスカッション」の取組では、少ない人数での意見交流から始め、形態を変えながら何度も対話を繰り返すことで、自分の考えに自信をもたせて学級全体への議論に広げ、それぞれの意見の共有や付け加え、質疑などを通して、学びを深めていくことができた。

3　成果と課題

2年にわたる国語科の研究で、研究授業を合計 180 本、その他の公開授業や授業交流を合わせると、数えきれないほどの授業検討を行ってきた。教師自身が教材研究や対話によって読みを深めると同時に、児童に深い学びをさせるためにどうすればよいか、試行錯誤しながら取り組んできた。児童が「言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し、適切に表現できる」場面を数多く見ることができ、児童の成長を実感することができたことは成果である。

また、研究発表を終えて、参観者からは「子どもたちが安心して発言できる環境が整い、日常的に言葉の基礎トレーニングが行われていることが、自信に繋がっている」「授業の流れが明確で、児童が主体的に動く姿が見られた」「授業の中で子どもたちが自分の言葉で表現する力が育まれていることに感動し、今後の授業でもこのスタイルを取り入れたい感じた」「西春小スタイルの実践例は、他の学校でも参考にされるべきであり、今後の教育においても重要な手法となると思う」などの意見をいただいた。これらのことから本研究は、国語教育の新たな方法と可能性を示し、今後の国語科教育の参考になる事例になったと考える。特に、「西春小スタイルの国語の学び」「西春リアクション」「西春ディスカッション」は、児童の思考力や表現力を育む上で非常に有効な手法であることが実証された。

一方、一授業内及び単元内での時間配分の仕方や、考えや表現することが苦手な児童への指導の在り方、形の指導から入った「西春リアクション」や「西春ディスカッション」をどう児童の実態や発達段階に応じて発展させていくかなど、課題も残っている。さらに、国語科において一定の成果が出たものの、他教科の授業でも本研究の成果を生かして研究を広げていく必要がある。今後も、児童の成長を第一に考え、よりよい教育の実現を目指して研究を続けていきたい。

目次へ

研究主題	運動の楽しさや喜びを味わい、基礎的な体力・身体能力の身に付いた児童の育成		
副　　題	児童の豊かな関わり合いを通して		
学 校 名	弥富市立大藤小学校	校 長 氏 名	伴野　満猛

1　はじめに

小学校体育科では、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることを重視している。そんな中、コロナ禍の影響もあり、児童の体力の低下が問題視されている。本校でも例外ではない。全学級単学級である本校では、クラス替えもなく人間関係が固定されがちである。そのため、休み時間の過ごし方も固定され、外遊びをする児童、校舎内で過ごす児童と分かれてしまっている。そこで、本校では、児童同士の関わりを大切にしながら、体育科の授業で運動の楽しさや喜びを味わわせたいと考えた。また、運動会などの行事や縦割り班活動で、仲間とともに体を動かして活動する楽しさを味わわせることにより、外遊びにつなげたいと考えた。児童が体を動かすことのよさに気付き、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎となる体力向上を図ることを目的とした。

2　研究の内容

(1) 仮説

①　運動の楽しさや喜びを味わわせることを通して、運動に親しむ資質や能力の基礎となる体力向上につなげることができるであろう。

②　児童が豊かに関わり合い、協同的に学ぶことを通して、互いの動きや関わりを大切にするようにし、ともに体力や技能を高め合えることができるであろう。

(2) 方法

①　体育科の授業での実践

体育の授業では、運動量を確保しつつ、学習のめあて・課題を意識し、児童同士の関わり合いを大切にした授業展開をする。

②　体育的行事での実践

運動に親しむ環境づくりとして、１学期は運動会、２学期は校内持久走大会、３学期は長なわ集会と、目標となる行事や集会を設定することで、仲間とともに楽しく体力づくりに取り組む。

③　休み時間の運動の確保

外遊びを推奨するために、日課を工夫するとともに、休み時間に体を動かす機会を設定する。

3　研究の実際

(1) 体育科の授業での実践

①　プールの授業の取組

プールの授業において、３～６年生で牽引練習法を取り入れた。20m程度の長さのロープを４～５人のグループに１本ずつ用意し、ロープを引っ張る側と引っ張られる側と役割分担

させた。引っ張られる側がどのような姿勢であると進みやすいか、引っ張る側は、引っ張られる児童がどのような姿勢でいてくれたら引っ張りやすいかを考えながら取り組ませた。回数を重ねるごとに、児童の水中での姿勢がよくなるとともに、上手く体の力を抜くことができるようになってきた。



【ロープによる牽引練習法】

グループに１台水中カメラを用意した。互いに水中での活動の様子を撮影し合った。水中で写真が撮れるということで、被写体になった児童は、どのようなポーズをするとよいか考えていた。撮影する児童は、被写体の児童と水中に潜るタイミングを図る必要があり、自然と声をかけ合うなど協力することができた。水中カメラを使用することにより、児童の目的は撮影することとなり、水を怖がる傾向にある児童も楽しく取り組むことにつながった。また、教師側が水中での様子を把握することは難しいが、カメラで撮影されたものを見ることにより、水中で児童の様子を把握する一助となった。



【水中カメラを使って撮影】

② キャッチバレーの取組

４～６年生では、ボール運動としてキャッチバレーに取り組んだ。まず、基本動作となる「投げる・捕る」の動きを練習した。その後、２対２のゲーム形式に取り組んだ。レシーバー、セッター、アタッカーの役割があること、それぞれがどのような動きや役割があるかを確認した。１チーム２人のため、レシーブをした後、アタックするようにした。児童は一連の動きが分かってくると、どのように攻撃するとよいか考えることができた。ゲームをする中で自然とブロックを決めたり、速攻をしたりするなど得点するための方法を考えていた。チームによって、作戦を考えており、それを学級全体で共有する時間を設定した。「ゲームをやっていて困ったことはないか」、「全体で確認したほうがよいことはないか」など、児童に投げかけた。すぐに児童から意見が出ることもあるが、どのようにしてよいか迷っている場合もあった。迷いがある場合には、すぐにどうするのか決めるのではなく、「考えてみて」と投げかけ、ゲームを再開させ、どうするとよいか考えさせた。１時間の授業の中で対戦相手も変え、いろいろなチームと関われるようにした。また、毎時間チーム



【アタック】



【アタック＆ブロック】

を変え、いろいろな児童と関われるようにした。児童はチームのメンバーや相手のメンバーを見て、作戦を考えることができた。

③　基礎体力の向上

１～３年生では、体ほぐしの運動を実施した。全身を使ったじゃんけんでは、座ってじゃんけんをしたり、跳び上がってじゃんけんをしたり、相手の動きにも着目しながら行うことができた。２人１組になり、目を閉じた友達の手をとって案内した。手をひく児童は、相手のことを気にかけながら進み、目を閉じた児童は、不安になりながらも相手の手を頼りに進み、互いの存在を感じながら取り組むことができた。２人いっしょに取り組む活動を楽しんだ。新聞紙を使った運動では、みんなといっしょに活動する楽しさを感じた。手軽な運動遊びを通して、他の児童と関わりながら、心や体がどのように変化するかを考えさせることができた。



【全身を使ったじゃんけん】

日常的な体づくりを目指すために、「笑顔が生まれる姿勢体幹体操」を取り入れた。運動会やプールの授業などの準備運動として行った。



【姿勢体幹体操】

(2) 体育的行事の取組

①　２学年合同の取組

運動会では、２学年合同種目を２つずつ行った。校内持久走大会では、２学年合同男女別で競走した。本番に向けての練習も合同で行うことにより、「力を合わせてがんばろう」「○年に負けないように練習しよう」など互いに刺激し合うことができた。

②　異学年の活動

２月に長なわ集会を行った。ふれあい班（縦割り班）ごとに、連続で何回跳べるか、決められた時間内に何回跳べるかを競った。班長を中心に上の学年の児童が下の学年の児童に声をかけながら練習に取り組み、本番に臨むことができた。本番だけでなく練習でも協力し合うことができた。また、異学年で交流する機会を設けることにより、休み時間に異学年でドッジボールやサッカーをしたり、おにごっこをしたりするなど、他の学年と関わる児童が増えた。



【縦割り班による長なわ練習】

(3) 休み時間の運動

①　外遊びの推奨

体力向上には日常的な取組が不可欠であると考え、「遊び」の中で夢中に体を動かす体験ができるように日課を工夫した。毎日 20 分間の休み時間を、午前中の業間と昼休みの２回設定することにより、外で遊ぶことを楽しみにする児童が増えた。学年ごとに集まってドッジボ

ールやサッカーをしたり、遊具で遊んだりする姿が多く見られた。また、異学年が集まって遊ぶことも増えた。

② 12 月に行う校内持久走大会に向けて、11 月からジョギングタイムと名付けて、休み時間に５分間走を行った。５分間のめやすとしてＢＧＭを流すことによって、各自目標をもって走り続けることができるようになった。



【ジョギングタイム】

２月の長なわ集会では、１月から休み時間に５分間長なわの練習を行った。初めは跳ぶことができなかった児童も、練習も重ねることにより、跳ぶことができるようになった。長なわの練習後には、自由に遊ぶ時間を 10 分程度確保した。そのまま長なわの練習をしたり、他の遊びをしたりするなど外で遊ぶ機会が増えることにより、外遊びの楽しさを感じ、外で遊ぶ児童が増えた。

４　成果と課題

⑴ 成果

プールの授業では、牽引させるためのロープや水中の様子を可視化するために水中カメラを用意した。ロープや水中カメラなどの教材を取り入れることにより、児童の気付きを促すことができるとともに楽しさを増すことができた。児童にとって有効な教具、教材の開発の大切さを感じた。

どの活動においても児童同士の関わりを意識させた。キャッチバレーでは、２～３人の少人数のグループでゲームをすることにより、自然と声を掛け合ったり、プレーを考えたりすることができた。少人数で行うことは運動量の確保にもつながった。ふれあい班による長なわ集会では、「みんなで長なわを跳ぶ」という目標に向かって６年生が中心になって下の学年と関わることができた。異学年との関わりの機会が増えることは、人間関係が固定されがちな本校の児童にとっては貴重な経験である。

外遊びを推奨するために、休み時間の確保とともに長なわ集会やジョギングタイムなど休み時間に外に出る機会を設定した。教室で過ごしがちな児童も外にでるきっかけとなった。外で遊ぶ児童が増えれば「ぼくもいっしょに遊ぶ」「わたしも遊ぼうかな」と相乗効果が生まれ、多くの児童が外に出ることができるようになった。



【一輪車で遊ぶ児童】

⑵ 課題

外で遊んだり、楽しく体育の授業に取り組んだりすることができるようになり、児童は、体を動かすことの楽しさを感じつつあると考える。これを継続することにより、児童の体力が向上するとともに、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎となる体力の向上につながることとなる。そのためには、休み時間の外遊びの推奨を続けながら、体育の授業や学校行事・クラブ活動など体力向上につながるような内容の充実を図っていきたい。

児童の体力向上のためには、家庭での過ごし方を大切である。「笑顔が生まれる姿勢体幹体操」に継続して取り組めるよう児童の生活の一部となるように家庭へ広げていけるようにしたい。

目次へ

研究主題	お互いに認め合える心豊かな児童の育成		
副　題	一人一人の存在や思いが大切にされる学級づくり		
学 校 名	あま市立七宝小学校	校 長 氏 名	加　藤　　登

1　研究のねらい

本校の校訓は「じょうぶで、なかよく、しんけんに」である。この校訓のもと、７つの宝（素直・笑顔・思いやり・感謝・自ら・挑戦・継続）を磨く児童の育成に取り組んでいる。学校・家庭・地域が「つながる」学校づくりを推進し、地域の一員としての自覚や貢献する気持ちを育成したり、学級で役に立っている実感を味わわせたりすることによって「自己有用感」の育成を図ることを本年度の重点目標としている。

昨年度末に行ったＱＵアンケートで、「クラスの人から認められることがありますか」という質問に対して「とてもそう思う」「そう思う」と回答した児童が全校児童の 73%であった。「あなたの気持ちを分かってくれる人がいますか」という質問に対しては「とてもそう思う」「そう思う」と回答した児童は全体の 78. ３%の児童が答えている。また、昨年度の年間の欠席日数が 30 日を超えた児童の割合が全体の３．６%の割合だった。以上の結果から、互いに認め合える活動を取り入れることで、「自己有用感」を高め、自分の居場所がきちんと確立された、安心して過ごすことのできる学級づくりが必要だと感じた。

そこで、研究一年目である本年度は、学級に焦点を当てて実践を行う。人権教育の推進を図るうえで、学校生活のほとんどの時間を過ごす学級という場所が、安心して過ごせる場とならなければならない。学級の中で、一人一人の存在や思いが大切にされる環境を成立させることで、お互いに認め合える心豊かな児童の育成ができると考える。教科指導、学級活動、その他活動全体を通して、一人一人の存在や思いを大切にする学級づくりを目指す。

2　めざす児童像

- 自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めることができる児童
- 集団の中で、自分は価値ある存在だという実感を得ることができる児童

3　研究の仮説

(1)　人権尊重の視点に立った学級づくりを意識し、教科指導・学級活動を進めていくことで、自尊感情や学級への所属感が高まり、自他を大切にし、お互いに認め合える児童の育成ができるだろう。

(2)　児童がよさを発揮し、互いに認め合える活動を設定することで、集団の中で、自分は価値ある存在だという実感を得る児童の育成ができるだろう。

4　研究の方法

(1)　対象　　全学年

(2) 手立て

①　自己有用感を高め、つながりを深める活動

ア　他者との関わりの中で、児童の一人一人が学級の中で居場所を見つけ、存在価値を見出すことのできる場を設定する。

イ　「ありがとうの実」を実施し、感謝の気持ちを伝える活動を通して、他者のよさに目を向けたり、自分が認められたりする機会をつくる。

②　教科・特別活動における取組

ア　学び合い活動などの他者との関わりを、意図的に授業に組み込み、振り返ることで「友達のおかげでできた」「友達の役に立てた」という実感をもてるようにする。

イ　命の尊さを学び、自他共にかけがえのない存在であることに気付く場を設定する。

ウ　クラス会議等を実施し、児童が自分たちで話し合い、学級の問題や個人の問題を学級全体で解決する。

③　安心して過ごすことのできる環境づくり

毎朝「光っ子タイム」で「心の温度計」を実施し、教師が児童の様子を把握して声かけをすることで児童に安心感をもたせる。

(3) 検証

①アンケートの分析

②授業での児童観察

③授業や行事後の児童の振り返りの分析

5　実践

(1) 自己有用感を高め、つながりを深める活動

①　ふわふわの木(１年生)

思ったことがすぐ口に出たり、相手の立場に立った言葉がけや行動が難しかったりという児童の実態がある。そこで、道徳の授業を通して、「言葉にはどのような力があるか」を考える機会を設けた。児童からは、「相手を気持ちよくする力」「仲間をつくる言葉」「人を感動させる」といった意見が出た。その後、言葉をつかう具体的な場面を挙げ、「ふわふわ言葉」「ちくちく言葉」に分類した。それぞれの言葉について考える中で、自分事として捉えながら考える姿が見られた。授業後には「ふわふわの木」として掲示し、可視化した【資料１】。その結果、言いたいことがすぐに口に出てしまい、口調がきつかった児童が優しく声をかけたり、友達同士でも「その言い方はちくちく言葉じゃない？」と声をかけたりするようになり、「言葉」について考えたことで、「ふわふわ言葉」が増え、つながりのある温かい学級づくりにつながった。



【資料１　ふわふわの木】

②　ほめほめタイム(５年生)

高学年になり、思春期を迎えた児童も増えてきて、思ったことを素直に表現することを恥ずかしく思ったり、ためらったりする児童が増えた。そこで、実態を踏まえ、児童が自分に自信をもち、自己有用感を高める手立てとして、毎回の道徳の授業の始めに、友達のよいところや、すてきなところを全員が発表する「ほめほめタイム」を行った。また、席替えの際に、班のメンバーのよいところを言い合ってお別れをしたり、歌の練習や音読などで頑張っていた人を担当の児童が全体の前で発表したりする時間を設けた。

「ほめほめタイム」では、日頃あまり関わりが無い児童同士も、よいところを見つけて褒め合っていて、うれしそうな表情をしていた。褒められる側の児童は、照れながら友達からの褒め言葉を聞いたり、「よいところを伝えてもらって、よい気持ちになった」と感想をもったりしていた【資料２】。班のメンバーのよいところを言い合う場面や頑張っていた人を評価する場面は、全員でその人へ拍手をしていて、認め合う雰囲気作りができた。

高学年になり、グループが固定されやすく人間関係も狭くなりがちだからこそ、多くの人と関わる機会をもつことができた。様々な場面で、他者との関わりを意図的に作り認め合う活動を行うことで児童一人一人が学級の中で居場所を見つけ存在価値を見出すことができた。

【友達に教えてもらった自分の良いところ】
- 字や絵が丁寧なところ
- 優しいところ
- 面白いし、真面目なところ

【今日の授業の振り返り】
良いところを伝えてもらって、とても良い気持ちになりました。自分の良いところを伸ばし、将来の夢に繋げていきたいです。これからは、メリハリをつけて生活したいです。

【資料２　児童の振り返り】

③　ありがとうの実(全校)

人権委員会が中心となり、「ありがとうの実」を実施している。感謝の気持ちを「ありがとうの実」として伝え、書かれた実を給食放送で全校に紹介したり、掲示を行ったりする活動である。学年に応じて、行事後に、「ありがとうの実」を書く時間を設けている。３年生では、

毎週末に書く時間を設け、友達に手渡しに行き、活発に取り組んでいる。

「ありがとうの実」を書くときは、ありがとうを伝える児童が渡す相手が喜ぶことを想像し、楽しそうに取り組んでいる様子が見られた。振り返りでは、自分の行動が認められた実感から思いやりをもった行動をしようと、前向きな姿勢になる児童がいた。また友達からありがとうの実をもらった時には「１年生に教えてよかった」や「ありがとうと言われてうれしい」など、他人から認められるうれしさを実感する児童が多かった。

(2)　教科・特別活動における取組

①　クラス会議（４年生）

学活の時間に、司会進行や書記などすべて子どもたちが主体となって進めるクラス会議を行っている。会議の最初に「ハッピーサンキュ―ナイスタイム」を設け、最近あったうれしかったことなどを皆で順番に発言し、意見を言いやすい温かい雰囲気作りを行っている。その後、議題に対しての解決策を皆で話し合う。議題は、クラスの問題はもちろん、個人の悩みも議題としている【資料３】。特に、個人の悩みでは、友達の悩みを自分ごととして捉えてくれる友達の存在、「自分一人のために、クラスの全員でこんなに真剣に考えてくれてうれしい」といった気持ちからクラスへの居場所を実感できる児童を増やすことができると考えた。



《今まで話し合った議題》
- 大玉おくりの必勝法〔クラス〕
- 話し合いのときに自分の意見が言えないので、どうしたらよいか教えて欲しい〔個人〕
- 教室でのタブレット使用ルール〔クラス〕
- 算数が得意になるためにはどうしたらよいか〔個人〕
- 親子喧嘩をしないためにはどうしたらよいか〔個人〕
- どうしたらご飯を早く食べれるか〔個人〕

【資料３　今まで話し合った議題】

クラス会議中は、全員が議題に対して真剣に考える様子が見られ時間が足らなくなるくらい、多くの意見が出て、有意義な話し合いが行われた。しかし、意見を言う場面では、時折、主張の強い児童だけで話し合いが進んでいってしまう場面もあり、「空気を読む、作る」という話し合い目標を意識させることで、お互いに気を遣い、意見をあまり言えない子にも耳を傾ける行動が見られるようになった。

さまざまな悩みの解決策をクラスの皆で話し合う「クラス会議」は、クラスの問題も減り、問題を自分たちで解決しようという意識の高まりも感じた。また、個人の悩みも話し合うことで、自分の悩みについて真剣に考えくれる仲間の存在を実感し、「自分の悩みをいろいろな人に考えてもらえてうれしかった」という振り返りも見られた。

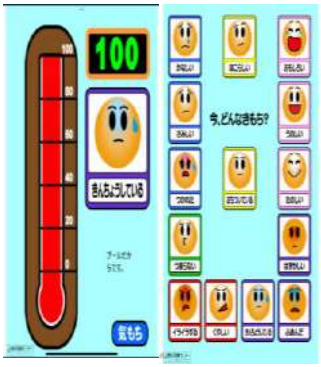
②　キャリア教育を通して（６年）

３月に蟹江にあるケーキ店「パリジャン」の店長をお招きし、講話をしていただく予定である。キャリア教育を通して自己理解をし、他者と円滑にコミュニケーションをとることを身に付ける必要性やチームワークで目標を達成するために努力する必要性を学ばせたい。

(3)　安心して過ごすことのできる環境づくり

①　「心の温度計」（全学年）

児童は、毎朝学校へ登校したら、心の温度計（自分の今の気持ちを表情や温度計で表すデジタルシート）を学習用タブレット端末内のシートに記入し、提出している【資料４】。提出された心の温度計は、毎日学年を担当する教員、養護教諭がチェックし、気になった児童にはコメントを返している。心の温度計を毎日行うことで、教員は、児童の毎朝の状態を把握することができる。また、悩みをそこへ書いてくる児童もいて、直接話すことが苦手な児童も容易に悩みを打ち開けることができ、安心して過ごすことのできる環境を作っている。また、学年で共有することで、気になる児童にクラスを越えて声をかけることができ、児童に「他の先生も気にかけているよ」という安心感をもたせることができた。また、養護教諭も毎朝チェックし、状態を把握できるので、保健室に来る児童への体や心の健康相談に活用でき、有効性を感じられた。



【資料４　心の温度計】

② 「気づいてみよう　自分の気持ち、みんなの気持ち」　(全学年)

10月に全校児童を対象に学校保健委員会を行った。ＮＰＯ法人「チャイルド・ラインあいち」の講師の方をお招きし、自分の考えや気持ちを言葉にして相手に伝えること、相手がどのような気持ちなのかを否定せずに聞く（受け入れる）ことに注目して、話を聞いたり実際にグループワークをして体験したりした。低学年、高学年に分けてそれぞれ1時間ずつではあったがこの時間を通して、気持ちは時間の経過や経験を通して変化していくのが当たり前であること、その時の自分の気持ちも相手の気持ちも大切にしなければいけないことがつかめた児童も多くみられた。【資料５】

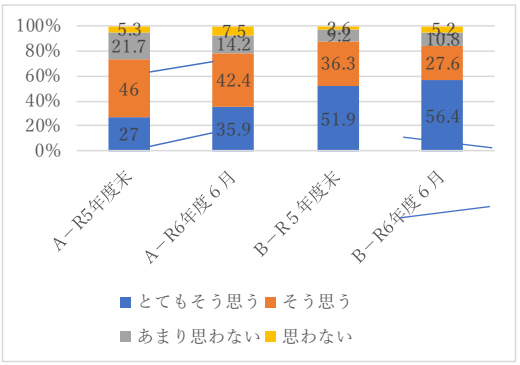


【資料５　グループワークの様子】

６　成果と課題(○：成果　●：課題)

(1)　自己有用感を高め、つながりを深める活動

○　昨年度末に行ったＱＵアンケートの結果と、実践後に行ったアンケート結果を比較した(対象：令和６年度　２～６年生)【資料６】。比較した質問内容はＡ【クラスの人から認められることはあるか】Ｂ【あなたの気持ちを分かってくれる人はいるか】の２項目である。Ａでは「とてもそう思う」「そう思う」と答えた児童の割合が５．３％増えた。



【資料６　ＱＵアンケート結果比較】

「ありがとうの実」や「ほめほめタイム」などのよいところみつけを繰り返し行うことが、「認められた」という気持ちの高まりにつながったと考えられる。

●　Ｂでは、「とてもそう思う」「そう思う」という児童の割合が４．２％減ってしまった。考えられる理由としては、新しいクラスになって時間があまり経過していないので、人間関係の構築がまだできていないことが挙げられる。また、学年によっては数値が増加していたことから来年度、数値の高い学年の実践を、学校全体へ広げていきたい。

●　自主的に「ありがとうの実」を書こうとする児童が少ないことが課題である。教師の声掛けで行うだけでなく、自発的に「ありがとう」を伝えるような工夫が必要である。

(2)　教科・特別活動における取組

○　高学年を中心に行った「学び合い活動」では、子どもたちがのびのびと楽しく学習に取り組む様子が見られた。また、「学び合い」を通して、多様な他者との関わりが増え、児童同士のつながりを感じることができた。「学び合い」で一番大事にしていることは「一人も置き去りにしない、全員で課題を達成する」である。このことを意識させることで、一人一人が大切にされた居場所のある学級づくりにつながった。

○　クラス会議を重ねることで、子どもたちは「自分たちのクラスをつくっているのは自分である」というオーナーシップが芽生え、問題行動も減り、居場所のある温かい学級づくりをすることができた。

●　「学び合い活動」では、自己肯定感を高めることに関しては、クラスの大部分に効果があったが、教えてもらうことのほうが多かった勉強の苦手な児童には効果はあまり見られなかった。そのため、今後は勉強の苦手な児童でも、小さな気付きによって活躍できる「学び合い」を目指した工夫が必要である。

(3)　安心して過ごすことのできる環境づくり

○　毎朝、「心の温度計」を行うことで、教員が児童のその日の状態を把握できた。また、気になった児童には、ロイロノートで返信をしたり、直接話をしたりすることで、児童に安心感をもたせることができた。直接相談しにくいことも、ロイロノートで行うことで、気軽に悩みを相談できる環境づくりをすることができた。

●　今後は、学年担任と養護教諭だけでなく、学校全体で児童を把握し、声かけができるような仕組みを考えていきたい。

目次へ

研究主題	子供たちの学びや成長を支える、地域と学校の協働活動の活性化を目指して		
副　　題			
学 校 名	長久手市立西小学校	校 長 氏 名	伊藤　友香

1 研究主題設定の理由

「よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創る」という目標が学習指導要領に掲げられている。この目標を学校と地域が共有し、未来の創り手となる子どもたちに必要な資質・能力を育めるよう、地域づくり・学校づくりを進めていくことが求められている。西小学校としても、子供たちの学びや成長のために校内でできることだけでなく、地域や外部機関と学校が相互に連携・協働することが必要である。そこで「教育の質の向上」を目的とした学校における働き方改革と、地域や外部機関と連携の２つを柱とし、研究に取り組むこととした。学校での業務改善を行うことで教員の創造的余白を生み出したり、地域や外部機関と学校が相互に連携・協働したりすることで、新たな発想や知恵を得られると考える。このように、地域と学校が一体となって協働活動の活性化を行うことで子供たちの学びや成長を支え、本校の目指す児童像に迫ることができると考え、研究主題を設定した。

2 研究の実際

（1）「教育の質の向上」を目指す働き方改革についての対話の場設定

文部科学省は、教員の勤務実態を見直し、効果的な教育活動を行うことができるようにするために、学校における働き方改革を進めている。本校でも、行事を精選したり、日課を見直したりするなど、業務改善を行ってきた。しかし、これらの業務改善は、運営会議や年度末反省での話し合いを基に、教務主任からの提案で進めており、教員主体の見直しではないのが現状である。そこで、先生のための幸せ研究所の田上氏を講師として招き、「『できそう！』を見つける　～創造的余白をつくる～」をテーマにワークショップを開いた。はじめに、現在の働き方を振り返り、働き方改革のためのアイデアを付箋に書き出した。書き出した付箋を内容ごとに模造紙に貼り、ギャラリーウォークで話し合いたい内容についてのチームを決定した**【写真1】**。今回は「行事」「業務の分担」「教材・データの共有」「学び（宿題・テスト）」「チーム担任」の５つのチームに分かれ、作戦会議を行った**【写真2】**。年度末反省のように、校務分掌で決められた部会に参加しての話し合いではなく、自らの意思で、かつラフな気持ちで決めたチームであることもあり、従来の部会での話し合いの雰囲気とは違い、井戸端会議のように和



【写真1　ギャラリーウォークでチームを決定】



【写真2　チームでの作戦会議】

気あいあいとした雰囲気で作戦会議は大いに盛り上がった。「行事」について話し合うチームでは、卒業証書授与式について話題となった。卒業証書授与式は「厳粛な雰囲気で行うもの」とバイアスにとらわれている教員が多くいる中、「海外のように、もっとラフに、もっと自由に祝えるといい」という意見にチームの教員は皆うなずいていた。そこでチームの皆で考え、卒業証書は従来のように一人一人が校長先生から受け取り、その後、式とは別に第２部として保護者に感謝の気持ちを伝えたり歌ったりすれば、もう少し子どもたちも緊張せずに最後の日を迎えられるのではないか、という推しのアイデアをまとめた。そして、最後に、それぞれのチームの作戦会議の内容や推しのアイデアを全体で共有した【写真3】。誰か一人の意見で決まるのではなく皆で話し合ったこと、和やかな雰囲気で話し合いが進められたこともあり、いつもの会議では出されないような斬新なアイデアやよりよい答えが見つかるなど、充実した作戦会議となった。



【写真3　全体の場で作戦会議の共有】

（2）学校をとりまく地域団体と対話の場を設定

ＣＳのない本校では、学校５０周年記念となる年に、地域とともに何をしていくかを、まちづくり協議会、ＣＳＷ、ＰＴＡ役員と話し合った。学校の課題を、学校から報告するのではなく、地域とともに「納得解」を見出していくこと、そのためにまずは対話の場をもつことから始めようというものである。さらに、その場に教職員や児童を巻き込んでいくことで、教職員の意識改革にもつながっていくと考え、対話の場を設定した【写真4】。地域とアイデアを出し合うことで、地元のケーブルテレビ局や記念誌用の写真募集の協力を得るなど、学校だけではできないことがスムーズに実現していった。児童会担当の教員も話し合いに参加し、その内容を受けて、児童会中心に５０周年に向けての活動も行っている。航空写真のアイデアを募集したり、西小学校のことを全校児童にもっと知ってもらうためのクイズを行ったりするなど【写真5】、地域、学校、児童が一体となって取り組み、５０周年を迎えようとしている。



【写真4　50周年記念行事についての話し合い】



【写真5　児童集会「西小　天才クイズ」】

３　研究の成果と今後の課題

今回の研究の成果は、学校という教育現場において多く存在するバイアス（思考の偏り、思い込み）に教員自らが気付き、よりよい職場環境をつくるために一歩踏み出せたことである。また、地域と対話の場を設定し、多くのアイデアを出し合うことで、教員主導ではなく、子供たち自身が西小のために何ができるかを考え、実行する環境を整えることができた。しかし、学校の中には、まだまだバイアスが多く存在している。地域との対話を通して、そのバイアスに気付き、地域と学校の協働活動の活性化により、西小学校の子供たちの学びや成長を支えていきたい。

目次へ

研究主題	「みんなの学校」の実現を目指して		
副　　題	－不登校支援や不登校に関する予防的対策の充実－		
学校名・園名	東郷町立兵庫小学校	校長・園長氏名	浅田　文代

１　研究のねらい

（１）研究主題・副題について

令和５年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、国立、公立、私立の小・中学校の不登校児童生徒数が約３４万６千人で過去最多となっている。本校には、５５２名の児童の内、２２名の不登校児童がいる。不登校の社会的背景については、長引いたコロナウイルスによる感染症予防の欠席増加、SNS の発達による対面コミュニケーション力の低下、児童のストレス耐性の弱体化、家庭環境など、多様であるが、同調査における学校に係る要因を見ると、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」や「学業の不振」の割合が高い傾向にある。

このような状況の中、「みんなの学校」の実現には、不登校支援や予防的対策の充実が不可欠である。まずは、不登校にならないよう、予防的対策として、児童の自己肯定感を高めさせ、自他を大切にした人間関係づくりができるようにさせたい。また、学業不振にならないよう個別の指導や学び合いの充実を図りたい。そして、教室に入ることが困難になった児童への支援を充実させたい。これらについてチーム学校で様々なアプローチを考えて取り組み、研究を深める必要があると考え、本主題を設定した。

（２）目指す児童像

○　自己肯定感を高め、自他を大切にして学校生活を送ることができる児童
○　学習活動に意欲をもって参加できる児童、教室に入れない場合でも、できるだけ登校し、学習活動ができる児童

２　研究の仮説

仮説１

講演会や道徳科の学習等において、自己肯定感を高めたり認め合ったりする活動や、児童同士の交流を深める行事等の活動を充実させることで、自他を大切にしようとする心情を育むことができるであろう。

仮説２

個別の指導や支援を充実させること、そして学び合いを進め、みんなが分かる授業を目指すことで、学習における不安を解消し、前向きに学校に向かうことができるであろう。

３　研究の手立て

（１）自己肯定感を高め、自他を大切にしようとする講演会の開催（日教弘愛知支部学校教育研究助成）（仮説１）

日教弘愛知支部学校教育研究助成を活用し、自己肯定感を高め、自他を大切にしようと思えるような講演会を開催する。

（２）道徳科の学習の充実（仮説１）

道徳科の学習を充実させるべく、各学年でローテーション道徳に取り組む。ローテーション道徳には、教務主任・校務主任も加わり、道徳科の授業研究としての質の向上を図る。また、ＩＣＴの活用も推進し、多様な考えを知り、認め合える授業実践を行う。

（３）児童同士の交流を深める取組（仮説１）

児童会主催の行事をはじめ、学級や学年、また、その枠を超えて交流を深める取組を行う。ペア学年による交流を深める活動として、「わくわくなかよしタイム」を行う。ペア学年は１・６年、２・４年、３・５年とする。

（４）別室登校教室の活用（仮説２）

教室に入ることが困難な児童のために、相談室を別室登校教室として運用する。空き時間の教員を時間割上で配置し、学校生活支援員と協力して別室登校児童の対応に当たる。また、外国籍児童の日本語指導も別室登校教室を活用して行う。

（５）授業における学び合いや個別の指導の充実（仮説２）

現職教育において、学校全体で学び合いに焦点を当て、テーマを「学級全員が参加できる授業づくり」として研究授業に取り組む。また、算数科におけるＴＴを進め、個別の指導の充実を図る。

３　研究の実際

（１）自己肯定感を高め、自他を大切にしようとする講演会の開催（日教弘愛知支部学校教育研究助成）（仮説１）

９月２７日（金）、文字職人　杉浦誠司氏を講師に招き、上学年児童を対象に講演会を開催した（日教弘愛知支部学校教育研究助成を活用）。講演では、ユーモアを交え、児童と対話をしながら、自身のエピソードから、いじめをなくそうとする気持ち、自分の殻を破る方法、夢をもつことの大切さについて考えさせられる内容の話を聞くことができた。また、「自由（きぼう）」という「めっせー字」の書実演も見せていただいた【資料１】。参加児童からは、「ノミの法則の話がおもしろく、自分の可能性を信じようと思った」「人とのかかわり方が大切で、自分の人生は自分で変えられると思った」「大きな紙に書いた文字がはく力があって、きぼうをもってという想いが伝わってきた」という感想が挙げられた。



【資料１】書実演の様子

（２）道徳科の学習の充実（仮説１）

道徳科の学習を充実させるべく、各学年でローテーション道徳に取り組んだ。ローテーション道徳には、教務主任・校務主任も加わり、観察する時間を設けることで、道徳科の授業研究としての質の向上を図った。ローテーション道徳は、一つの教材で繰り返し授業を行うことができる。さらに、観察者との意見交換で助言を得ることもできる。そのため、客観的に授業実践を振り返り、より効果的な発問や展開、学び合いの取り入れ方を工夫することができた。教員の力量向上になり、児童にとっても道徳科の学習の充実につながっている。

また、現職教育主任よりＩＣＴの活用推進として、デジタルホワイトボードの活

用を提案し、使い方を伝達していただいた。デジタルホワイトボードを活用した道徳科の授業では、級友の意見を閲覧しながら自分の考えをまとめるなど、多様な考えを知り、これを基に対話し、級友の考えを認め合える授業実践を行うことができた【資料２】。



【資料２】デジタルホワイトボードの活用（道徳科）

（３）児童同士の交流を深める取組（仮説１）

本校では、ペア清掃という取組を継続して行っている。ペア学年は１・６年、２・４年、３・５年とし、上学年が下学年に教え、協力する活動としている。そこで、ペア清掃におけるペア班で楽しむ機会として「わくわくなかよしタイム」を行った【資料３】。「わくわくなかよしタイム」は年３回行っており、第１・２回は上学年が下学年と一緒に楽しめる企画を、第３回は下学年が上学年への感謝の気持ちを表し、楽しんでもらう企画を班ごとに考え、実行している。


【資料３】「わくわくなかよしタイム」の様子

また、児童会が中心となり、「１年生を迎える会」、「なぞとき」といった企画を行った。「１年生を迎える会」は、１年生が学校に親しめるよう全校児童・教員でじゃんけん大会を行ったり、６年生からプレゼントをしたりした。「なぞとき」は、学級を越えて交流を深めることを目的とし、各学年で少人数グループを作って参加できるようにした。

どの取組も、児童同士の交流を深め、学校生活を楽しいものにすることに役立っていた。

（４）別室登校教室の活用（仮説２）

学級での生活において、外部刺激に敏感であったり、人の目が気になって居づらさを感じたり、人間関係での不安があったりと、教室に入ることが困難な児童がいる。そうした児童が全く登校できないということにならないよう、相談室を別室登校教室として運用した。別室登校教室には、空き時間の教員を時間割上で配置し、学校生活支援員と協力して別室登校児童の対応に当たるようにした。学習内容については、担任と連携し、無理はしない程度で個に応じて学習活動に取り組めるようにした。

別室登校教室の活用は教室復帰を目指すためのステップでもあるため、得意な教科や参加したい行事、給食や清掃など、可能な範囲で教室等に行けるよう励ますこともした。しかし、それが負担となる場合もあり、教室復帰に向けては、状況や目標設定など、学校内だけでなく保護者やスクールカウンセラーとの情報共有が必要であり、長期的に見ていかなければならないということが分かった。必要に応じてケース会議を開くなど、共有の場を大切にし、個に応じたより効果的な支援を模索していきたい。

近年、編入する外国籍児童が増加傾向にある。携帯型翻訳機やタブレット端末の翻訳機能を活用することでコミュニケーションを図ることは可能だが、外国籍児童にとって、日本語の習得は学校生活において重要となる。そこで、外国籍児童を取り出して、日本語指導を行うという取組を別室指導教室で行った【資料４】。日本語の習得に向けて熱心に学び、指導開始から一週間で、「おはようございます」と挨拶する姿が見られた。



【資料４】日本語指導の様子

（５）授業における学び合いや個別の指導の充実（仮説２）

現職教育において、学校全体で学び合いに焦点を当て、テーマを「学級全員が参加できる授業づくり」として一人一研究授業の実践に取り組んだ【資料５】。また、経験の少ない教員や講師を対象に、授業研究会を開き、学びの場を設けた。「学級全員が参加できる授業づくり」に焦点を当てたことで、児童一人一人の状況から、取り残される児童が出ないよう、支援や学び合いの方法、発言しやすい雰囲気づくりについても助言し合い学び合うことができた。こうした授業力向上は、児童が生き生きと授業に向かうことにつながっている。



【資料５】研究授業の様子

算数科におけるＴＴを進め、個別の指導の充実を図った。算数科においては、既習内容の習得が授業理解に重要であり、個によってつまずきの状況が大きく異なる。ＴＴにより、一人一人に対して、その児童に合った助言やスモールステップの設定をすることができた。個別最適な学びをすることで、多くの「できた」「わかった」を引き出すことができた。

４　研究の成果と課題

講演会により自己肯定感を高め、自他を大切にして生活しようという想いをもつ児童が多かった。また、道徳科において、教師の授業力向上を図ることができたとともに、学び合いで考えを深める児童の様子も見られた。児童同士の交流を深める取組では、学級の枠を越えて仲を深める様子が見られた。学習においては、学び合いや個別の指導により、学習活動に意欲をもって参加できる児童の姿をたくさん見ることができた。教室に入れない場合でも、欠席を減らし、別室登校教室で過ごす時間を増やせる児童もいた。昨年度、教室に入ることが困難だったが、教室で過ごすことができるようになった児童も見られた。以上のことから、今回行ったそれぞれの実践は一定の効果があったということが分かった。

しかし、それが不登校児童数の減少に直結していないのが現状である。不登校となるには様々な要因があり、短期的に解決できないことが多い。今回の研究による実践を継続するとともに、個に応じた支援の在り方の研究を進め、家庭や関係機関との連携についても充実させることで、「みんなの学校」の実現を目指したい。

目次へ

研究主題	意欲的に考え、伝え合いながら学ぶ児童の育成		
副　　題			
学 校 名	豊山町立新栄小学校	校 長 氏 名	松永　千鶴

１　はじめに

本校では昨年度より、「意欲的に考え、伝え合いながら学ぶ児童の育成」というテーマで研究を実施している。児童が意欲をもって学習に取り組むことができるよう指導を継続して行うことで、主体的な姿が見られ、一定の成果を確認することができた。また、低・中・高学年の部会においても授業研究を実施し、授業の目標や指導上の工夫について多くの意見を交流することで、普段の授業で行っていることなどについても意見を重ねる場となった。

本年度は昨年度の取組を継続するとともに、児童が伝え合う力を高めるために、「授業づくり」「対話する力を伸ばすための工夫」「課題解決の見通しをもたせる」の３つを柱に研究を実施した。また、若手教員を中心に授業研究を実施し、授業力の向上を目指した。学習に意欲をもって取り組ませる中で、伝え合いながら学びを深めていく児童を育成していくために、以下の実践を進めていくことにした。

２　研究の方法

（１）授業実践

３つの柱と手だて

①「授業づくり」

・ゴール→めあて→展開の順に授業を組み立てる
・ゴール（目指す児童の姿）とめあてをリンクさせる
・ゴールをもとに展開の計画を立てる
・児童の多様な発言に対応し、発言を繋いでいく

②「課題解決の見通しをもたせる」

・ペアやグループ活動に加え、聞きたい児童と直接意見交換をする活動を取り入れる
・日常的な発言の訓練により、個々の表現スキルを鍛える
・対話の基盤（互いの意見や考え方を尊重する）を意識した指導

③「対話する力を伸ばすための工夫」

・めあてを把握させるとともにゴールを確認し、達成のためのイメージをもたせる
・めあてを達成するためにどうすればよいか、課題について調べる視点をもたせる
・学習プリントやタブレット端末、思考ツールなどを使用し、考えを可視化する

（２）校内研修

・若手教員の授業研究
・全体研修

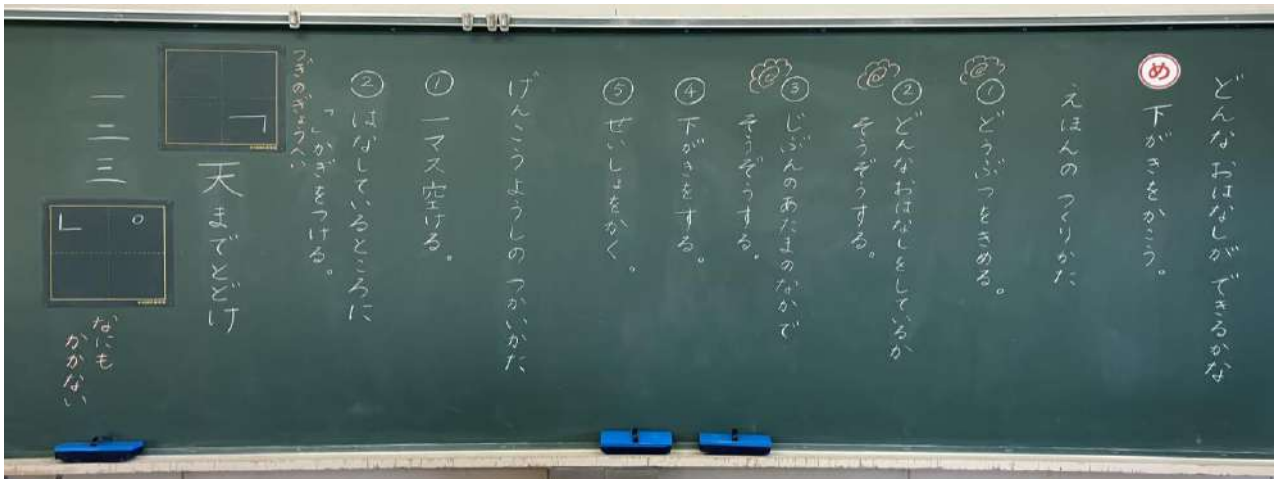
３　研究の実際

（１）授業実践

①授業づくり

実践１　「１年生　国語科」　単元名「どんな　おはなしが　できるかな」

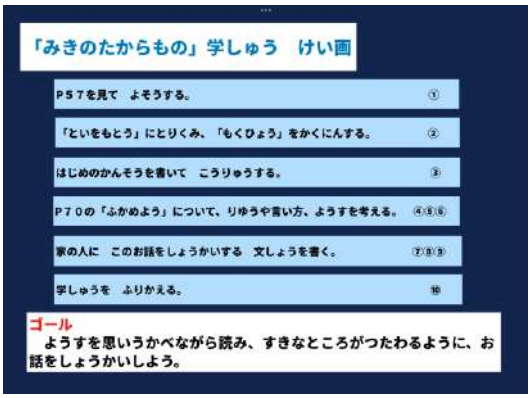
単元の見通しをもたせることで目標を明確にし、意欲的に話を書き、物語を完成させる実践を行った。はじめに、学習の計画を黒板に示して内容を確認し、完成の見通しをもたせた【資料１】。また、教科書の挿絵を見ながらペアで話し合いをする中で、自分の絵本に登場させる生き物がどのような話をしているのかを想像させてから書かせた。さらに、ただ話を想像してノートに書くのではなく、児童の意欲的な気持ちを引き出すために、絵本を作るという目標をもたせ、製作に取り組んだ。



【資料1　見通しをもたせるための板書】

実践２「２年生　国語科」単元名「みきのたからもの」
「おもちゃの作り方をせつめいしよう」

タブレット端末で作成した学習計画を児童と共有し､見通しをもって学習に取り組ませ、単元のゴールをより意識させた【資料２】。また、個人から全体への発表やペアもしくはグループでの話し合い、学級全体での伝え合いなどを取り入れ、意見を共有する時間を設定した。発表や話し合いの前には必ず「聞き方あいうえお」と「話しかたかきくけこ」を確認した。

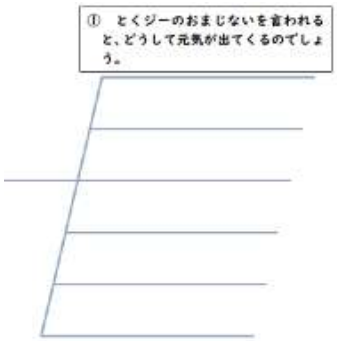


【資料2　学習計画】

② 課題解決の見通しをもたせる

実践１「３年生　道徳」　単元名「とくジーのおまじない」

発問に対して多様な考えを引き出すことができるよう、思考ツールのくま手チャートを活用しながら授業を進めた【資料３】。また、書き込んだワークシートはタブレット端末で撮影させた。写真は教育支援ソフトで提出させ、他の児童が自由に見ることができるようにした。その際、気になった意見については書いた友達の所に行き、考え方や理由を直接聞く時間を設けた。



【資料3 くま手チャート】

実践２　「３年生　道徳」単元名「モンたんとケロきち」

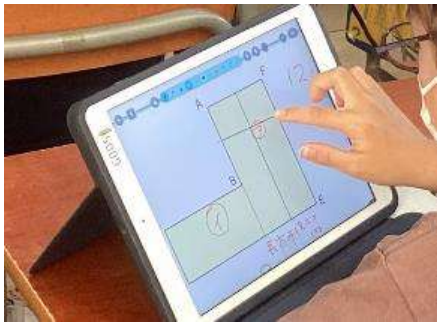
正直でいることについて、登場人物の気持ちを感じ取らせたいと考え、範読を行いながら黒板に挿絵を貼り、視覚的にも捉えさせようと取り組んだ。また、葛藤や解決の場面を分けて読み、登場人物の気持ちに近づき、正直でいることについての視点をもたせた。登場人物が正直に言うかどうか葛藤する場面では、タブレット端末の「心の数直線」というデジタル教材を活用して可視化しながら、逆の立場の視点からも考えさせた【資料４】。



【資料4 心の数直線】

実践３「４年生　算数科」　単元名「面積」

毎回前時の振り返りから始め、前時の復習をさせることで既習事項と関連付けた課題解決ができるようにした。個人追究の時間では、教育支援ソフトを用いて配付した図に自分の考えを書き込ませた【資料５】。書かせたデータは話し合い活動に活用し、教育支援ソフトを用いて全員で共有できるようにすることで多様な考えに触れさせた。また、個人追究の時間の後には必ずペアやグループでの話し合い活動を行った。



【資料5 タブレット端末の活用】

③　授業実践「対話する力を伸ばすための工夫」

実践１「５年生　社会科」単元名「これからの工業生産とわたしたち」

工業生産の発展に向けての課題や解決策についての考えを教育支援ソフトで提出し、共有させた。同じ課題を選んだグループで話し合ったり、違う課題を選んだ人に質問したりする時間を設定し、意見を交流させた。また、同じ課題を選んだグループにも違う考えがあることに気付き、さらに質問する様子が見られた。さらに、違う課題を選んだ児童に考えを聞く活動では、新たな気付きが生まれている様子が見られた。

実践２「６年生　道徳」単元名「手品師」「子ども会のキャンプ」

内容を理解した状態で問いについて考えることができるよう範読を行った。また、課題解決への道筋が見えやすくなるように、意見を交流する機会を毎回設定した。はじめに個人で考える時間を設定し、次に登場人物の気持ちについて聞きたい児童の所に行き、直接意見交換をさせた【資料６】。次に、多かった意見とその理由について発表させ、その中で気になった意見について質問し、児童同士が発言を繋ぎながら進めた。意見交換が活発になるようにするための手だてとして、道徳の授業は座席をコの字にして行うようにした。さらに、発言した児童が、次の発言者を指名する相互指名を取り入れた。その際、同じような意見が続いたときには、担任が問いかけて意見が偏らないようにしたり、指名に際して助言したりするなど、相互指名による発言が円滑に進むよう促した。



【資料6 意見交換】

（１）校内研修

①「若手教員の授業研究」（５・６月）



【資料7 研究協議会】

本校でも経験の浅い若手の教員が増えている。そこで、若手教員の授業力の向上を目指すため、愛知教育大学の土井謙次氏を本校に招き、若手教員による授業研究を実施した。今年度は、１年、２年、３年、５年の担任をしている４名を対象に授業を参観していただき、授業後には研究協議会を実施した。また、研究協議会では、１年・５年が実施した国語と、２年・３年が実施した算数の授業と、教科ごとに分けて指導をしていただいた。また、その中で、学びの過程において重要な役割である「見方・考え方」についての講義も実施していただいた【資料７】。

②全体研修「見方・考え方を鍛える　－協働的な学びの中で－」（１２月）



【資料8 校内研修】

授業研究と同様に土井謙次氏を本校に招き、校内研修を実施した【資料８】。５・６月に実施した若手教員による授業研究の指導内容にあった見方・考え方について職員全体で共有させたいと考え、講義をしていただいた。また、ＩＣＴ機器の効果的な活用方法や学びを支える板書の重要性、授業の中で子どもの集中力をどう持続させていくかなどについて学ぶことができた。その中で、児童向けの授業に使用できるものや職員向けに活用できる生成ＡＩについても教えていただいた。研修後には、教材研究や校内での業務に活用してみようという声が聞かれた。

４　研究の成果・課題

授業実践では、授業に意欲的に取り組む姿勢が多く見られるようになり、人に意見を伝えたり聞いたりしようとする意識が高まった。また、授業者からも計画的に、そして継続することが児童の変化につながるという意見が多く出てきた。今回の実践を通して、どの学級もタブレット端末を効果的に活用しているため、考えを深める活動においてとても有効であった。しかし、タブレット端末を使った授業を増やすだけでなく、授業の復習など、家庭学習においてもタブレット端末が使用できるとよいという意見もあった。

校内研修では、「見方・考え方」を働かせるための指導方法や援助の仕方に加え、振り返りが重要であることについても学んだ。本校でも授業での振り返りを実施しているが、学習の過程の振り返りによって概念を形成し、深い学びにつながるよう意識して指導していきたい。今年度の授業研究は若手職員のみの実施であった。自身が授業を実施することで得られる経験も大きいが、参観することで得られることも多いため、計画を考えていく必要がある。

本実践でできた課題についても検討し、成果とともに生かしながら、児童の意欲的に学びに向かう力や姿勢を育てていくよう、これからも授業実践に取り組んでいきたい。

目次へ

研究主題	対話を通して、課題を解決する力を高める授業づくりをする		
副　題	主体的に学習に取り組む児童の育成を目指して		
学校名	大口町立大口南小学校	校長氏名	川井　栄治

1　研究の構想

(1) 主題設定の理由

令和５年度の現職教育の取組により、「一人学び」や「自分学び」の場面において、手だてを工夫することで自分の考えをもつことができる児童が多くなった。しかし、「みんな学び」の場面においては、交流するための手だてを数多く見つけることはできたが、それが学びを深めたり広めたりする姿にはつながらなかった。

そこで、令和６年度は、積み重ねてきた「自分の考えをもつ」ための手だてを継続しながら、対話ができる環境づくり（学級の風土、人間関係及び対話スキル）を構築することで、自分の考えをさらに深め、広げられるようにしたい。また、対話力が上がることで、課題を解決する力も身に付き、主体的に学習に取り組む児童を育成することができると考えた。

(2) 研究主題の捉え方

①　「主体的に学習に取り組む児童」とは？

自ら学習の目標をもち、進め方を見直しながら学習を進め、粘り強く知識・技能を獲得したり、思考・判断・表現しようとしたりしている児童を「主体的に学習に取り組む児童」とした。

②　「対話」と「会話」の違い

「対話」…テーマに基づき、互いの立場や意見の違いを理解し、そのずれをすりあわせることを目的に行う話し合い。

「会話」…明確な目的やゴールがない話し合い

(3) 目指す児童像

友達との対話を通して、課題を解決することができる児童

(4) 研究目標

対話をもとに課題を解決し、主体的に学習に取り組む児童を育成するための指導のあり方をさまざまな手だてを生かした学級の基盤づくりや授業づくりについて探る。

(5) 研究の仮説

仮説１　学校生活において、全校一斉に対話を基にしたグループエンカウンターなどの話し合い活動の時間を設定すれば、対話する楽しさを感じられたり、話し合いの進め方を身に付けたりできるだろう。

仮説２　「みんな学び」において、対話を基にした話し合い活動を工夫すれば、各自の考えを比較・検討し、課題を解決することができるだろう。

(6) 研究の手だて

①　仮説１の手だて

ー　全校一斉の「トークタイム～対話したいわぁ～」の導入

第１、３水曜日の８：３０～８：４５を全校一斉の「トークタイム～対話したいわぁ～」の時間とし、対話を基にしたグループエンカウンターなどの話し合い活動の時間を設定する。１年間を通して、話し合い活動を継続させ、学習の基盤となる学級づくりに生かし、児童の心理的安心感を高めることで、課題を解決する楽しさを感じられたり、対話をつなげる話し合いの手法を身に付けたりすることができると考えた。

② 仮説２の手だて

― 対話を基にした話し合い活動の工夫

「みんな学び」において、自分の考えを伝え、相手の考えを受け入れるなど、対話を通して考えを深めたり、広げたりする時間にしたい。そのためには、話し合う活動の時間を工夫していかなければいけない。そこで、友達と協力して考えたくなる発問や学習課題や出された意見をまとめる方法を工夫することで、「トークタイム」で身に付けた力を生かし、互いの考えを伝え合い、比較・検討しながら課題を解決することができると考えた。

(7) 検証方法

- 「Q－U」や「学びのアンケート」をもとに、手だての有効性について検討する（３～６年）。
- 「トークタイムの振り返り」をもとに取組の有効性について検討する（１～６年）。
- 協議会での話し合いをもとに、児童の変容した姿について協議する（１～６年）。
- 児童の実態の変容を見る（１～６年）。

2 職員の学び

講師　愛知文教大学　学び合う学び研究所　木村　芳博先生

学びの共同体の考え方となる「学び合う学び」について教えていただいた。児童を中心に据え、協同的に学ぶことを目指し、本校の取組を進めることにした。

(1) 「学び合う学び」の理念

① 学びの保障

「一人にしない　個人作業の協同化」

授業にペア、グループを入れる

② 学びの共有

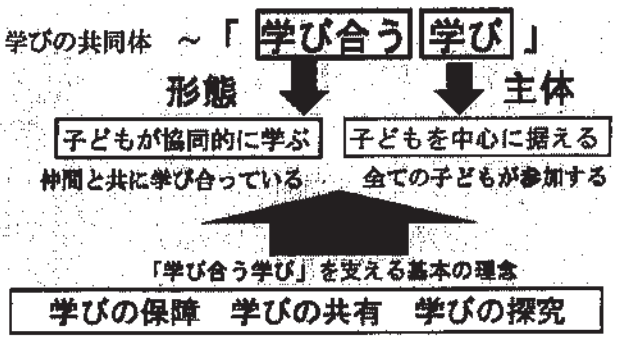
「互恵的に聴き合うことの尊重」

相互に傾聴し、能動的に対話する

③ 学びの探究

「協働して探索させる問いの設定」

考え方や答えが一つに限らない課題



<資料①　学び合う学び>

※互　恵…互いに恩恵を受ける　　※能動的…自分から他へはたらきかけるさま

(2) 「学び合う学び」の授業を組織するための教師の姿勢

① 探究的な課題を設定し、問いかけている

- 子どもの言葉からの「課題づくり」
- どうなっているのだろうと考えたくなる「課題設定」

② 子どもの発言やつぶやきを、能動的に聴こうとしている

- 教師が子どもの意見を大事にしている、大切にしていることを示す

③ 高質な発言、突飛な発言を他の子どもにつなごうとしている

- 子どもの発言を他の子どもにつなげながら周りの子と共有する

3 仮説の検証

(1) 実践と考察【仮説１】

第１、３水曜日の８：３０～８：４５を全校一斉の「トークタイム～対話したいわぁ～」の時間とし、対話を基にしたグループエンカウンターなどの話し合い活動の時間を設定することで、対話する練習や話し合うことの楽しさを実感し、授業に生かすことができると考えた。教師が担当学年の発達段階に合ったトークテーマを決め、実践を進めた。トークタイムの目標として、話す・聴く・反応の３つのポイントを向上させていくことを目指した。数多くの実践の中から、２つの実践を紹介する。

① ○○な人トーク

自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け取ったりして自分の概念を広げていくことを目指し、言葉の意味は分かるけれど、きちんと言葉にするとどういう意味になるのだろうと考えることができるようなトークテーマ。「かっこいい人って、どんな人？」「協力するってどういうこと？」などのお題を提示し、グループで話し合った。

児童の様子では、かっこいい人のイメージとして、「勉強ができる」「優しい」「友達を大切にする」「友達を気遣える人」など、児童の考えをホワイトボードに書いていった。考えを出し合う中で、相手の考えに「分かる！」「そうそう！」や「それって、こういうこと？」など反応し合う姿が多く見られた。

② ランキング当てよっトーク

課題を解決する力を高めることを目指し、ランキングの順位を当てるトークテーマ。「子どもの習い事ランキング」「好きな野菜・嫌いな野菜ランキング」などのお題を提示し、グループで話し合った。

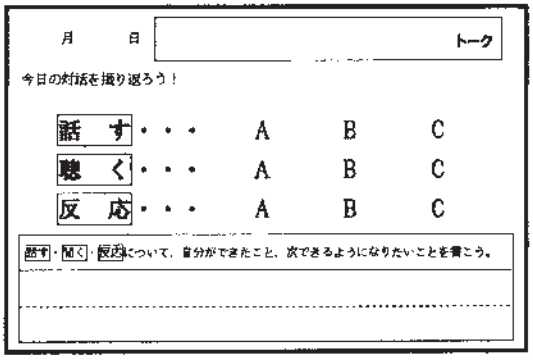


<写真① トークタイムの様子>

児童の様子では、「○○が入ると思う」「△△はどうかな？」「1位になるのは□□かな」「私は、△△を1位にしたほうがよいと思うけど、どう？」など、お題に対して、自分の考えを出したり、順位を予想したりするなど、対話する姿が多く見られた。答え合わせのときには、「当たった！」「そっちだったか！ごめん！」など歓声があがっていた。

予備知識が必要なく、ランキングを当てるという分かりやすいテーマであるため、児童はとても楽しそうに、活発に対話することができた。

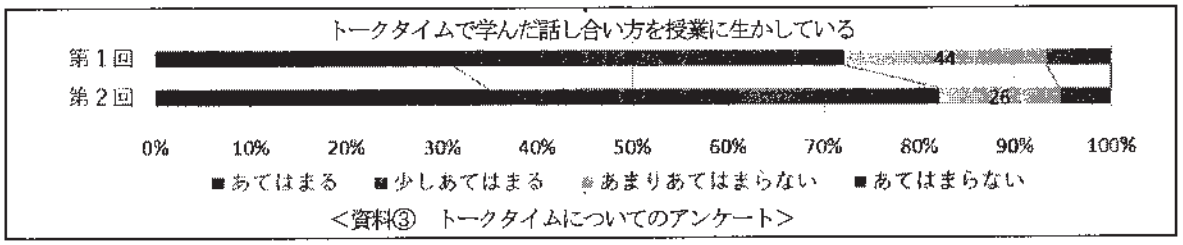
トークタイム終了後に、振り返りを書く時間を設定した。話す・聴く・反応の3つのポイントについて、振り返りカードに自分がどのようにできていたか、できていなかったのでこれからどのようにしていきたいかを具体的に記入した。また、評価基準を示すことで、何ができるようになると達成できたといえるのか、自分の姿と比べながらチェックすることができた。



<資料② 振り返りカード>

このように、「トークタイム～対話したいわぁ～」を取り入れたことによって、ペアやグループで対話する練習を定期的に行うことができ、テーマについて話し合うことができるようになってきた。また、児童のアンケートの結果【資料③】から、授業での話し合い活動に少しずつ生かしていこうとする児童が増えてきたことが分かる。

児童のトークタイムの様子やアンケート結果から仮説1が有効であったと考えられる。



<資料③ トークタイムについてのアンケート>

(2) 授業での児童の姿と考察【仮説2】

対話を基にした話し合い活動を取り入れた2つの実践から見えた児童の姿と考察を紹介する。

① 4年2組国語「ごんぎつね」の実践

【児童の姿】 グループ交流時、文章の語句や言葉に着目してごんの気持ちを想像し、考えを深める姿が見られた。

【 考 察 】 今回の授業では、グループ交流する時間を設け、ごんの気持ちや不思議に思ったことを自由に意見交流させた。その間、教師はグループを周り、話し合いの中で出てきた本文のキーワードを座席表に

記録し、頃合いを見計らって全体交流を行った。児童の意見を基にして、学習の流れをつくりたいと考えたからである。５場面の話の流れに沿うように、本文の言葉「井戸のそばにしゃがんで」「かげをふみふみ」「引き合わない」が順番に出るよう、意図的に指名してキーワードを全体に広められるようにした。そのキーワードを基にごんの気持ちを全体で考え、全体交流でさらに出された意見やつぶやきから再度グループに返して対話するように投げかけた。グループ交流するときに、児童の言葉を基にして発問し、何について対話するのかが明らかであったため、対話を通してごんの気持ちを想像して読みを深めることができた。

また、対話に積極的に参加していなかった児童も「振り返り」に読み取って感じたことを書くことができたことから、友達の話を聞くことで、自分の読みを深められた。また、他の授業やトークタイムでの対話練習を通して、友達の考えを受け止め、問い返したり、質問したりしてつなげて話すことが少しずつできるようになってきたことも、対話を通して考えを深める姿につながった。

② 2年2組国語「みきのたからもの」の実践

【児童の姿】 課題に対して、ペアやグループで対話しながら考える姿が見られた。その一方で、考えを深めるための質問ではあるが、質問の内容が本時の内容に合っていない児童もいた。

【考 察】 １学期から、「トークスキルアップカード」を学級で作り、質問や意見を伝える際の話型を提示しながら授業やトークタイムで対話を行ってきた。２学期には、相手の意見を聞いた後に自分の感想や疑問に思ったことを相手に伝えることが少しずつできるようになってきた。本時の授業でも、「どうしてそう思ったのですか?」「それは、どこから分かるのですか?」と児童同士で問いかけ、「ここの文から～と思った」など、意見の根拠まで詳しく聞いたり、伝えたりすることができた。分からないときには、「どういうこと?」と聞き返したり、「だって」と相談したりすることで、児童同士で対話をつなげながら考えることができている。そのことが、課題を解決するための手だてとなっていたと考えられる。


<写真② 授業の対話の様子>

しかし、「いつからそう思ったのですか?」などと、本時の課題では必要ない質問をしている児童もいた。いくつかある質問の中から、相手の考えを引き出すための質問を考えて、選択する術も詳しく指導する必要がある。

このように、対話する時間を設定したことで、児童は自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け入れたりすることで、さまざまな考え方に触れ、協働して問題解決することができるようになってきた。また、グループの話し合いや教師が全体に投げかけた発問によって、新たな視点に気付き、再度考え直すことにつながっていた。しかし、児童自身で考えを深めたり、広げたりできるようになるためには、まだまだ不十分であった。今後の課題として、児童が協力して考えたくなる学習課題の設定や学びを深化させる発問、問い返しなどを教材研究や実際の授業のときに考えていく必要がある。

以上のことから、仮説２が部分的に有効であったと考えられる。課題として見えてきたことを次につなげ、対話を通した課題解決に向けた実践を積み重ねていく必要がある。

4 研究の成果と課題

上述のように、仮説１、２それぞれが研究主題として設定した「対話を通して、課題を解決する力を高める授業づくりをする」を目指し、有効な手だてとなることが明らかになった。特に、トークタイムは、対話する上での基盤づくりとして大きな成果があった。

今後の課題は、対話をするための授業を考えるのではなく、課題を解決するために対話を通して迫っていけるような授業づくりを考えていかなければならない。児童に身に付けさせたい力をはっきりさせ、児童が主体的に学習に取り組んでいけるような課題設定や学びを深化させる発問、問い返しを吟味することを考えていきたい。

目次へ

研究主題	主体的に課題解決に向かう児童の育成		
副　　題			
学 校 名	大口町立大口北小学校	校 長 氏 名	伊左治　泉

1　本年度の研究について

上記の研究主題を掲げ、「課題解決に向けてねばり強く取り組むとともに、学んだことを、学習や自分の生活につなげて考えることができる子」を目指す児童とした。

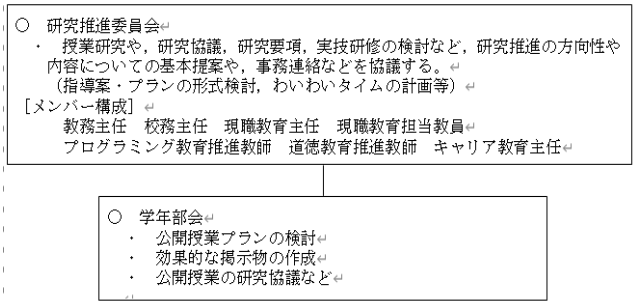
2　研究の流れ

主体的な姿を課題解決に向けてねばり強く取り組むとともに、学んだことを学習や自分の生活につなげて考えている姿と定義した。そのために、見通しをもって単元構成を考えた上で授業づくりの工夫をし、児童が前時や次時、他教科や実生活などとのつながりを意識して学習に取り組めるようにした。また、ポートフォリオを活用して児童の思考を見える化し、研究主題に迫っていった。

3　本年度の方針

①　研究主題達成に向け、組織的・計画的に研究活動及び実践活動を推進した。

愛知教育大学　教育科学系　生活科教育講座　教授　加納　誠司　先生をお招きし、指導・助言を受ける。



【今年度の研究組織】

②　単元を通した学びのつながりや自分の生活とのつながりを意識し、児童が主体的に課題解決に向かうことができるように、導入や課題提示、教材・教具の工夫をした授業づくりを行う。

③　児童が学びを振り返り、自分自身の考えの変容を見える化できるように、単元を通してポートフォリオの活用や、振り返りの視点をはっきりさせる。

4　研究の実際

①　研究主題に迫るための授業づくりの追究

・　１年に１回、全員が「研究主題」に基づいた授業を公開し、学年部会で研究協議を行った。

教科内容の研究、指導方法工夫をし、教師一人一人の力量の向上を図った。また、協議内容については、職員間で共通理解を図った。

・　児童が「つながり」を意識できる授業づくりを行った。



【講師の先生を招聘しての研究授業】

② 学びの基盤としての「学級づくり」の充実

・ 「エンカウンター」「ＳＳＴ」「GWT」などを学級経営に取り入れ、よりよい学級の人間関係をつくっていった。それを基に、共に学ぶ雰囲気を高めた。

③ 指導に生きる「評価」、子どもを励ます「評価」の工夫

・ 児童の思考の変容を見える化するために、ポートフォリオを取り入れた。

・ 教師が単元構想を意識した授業を行うことで、単元を通した児童の思考の広がりや、深まりを評価できるようにした。

④ 大口町教育研究会で全員公開授業

・ ４年に一度の大口町教育研究会の発表の機会に、全員授業を公開し、研究の途中を参観していただいた。講師の先生や町内の先生方に高評していただき、今後の研究への課題や方向性を示唆していただいた。



【大口町教育研究会で公開授業】

目次へ

研究主題	豊かな心の育成		
副　　題			
学 校 名	扶桑町立山名小学校	校 長 氏 名	櫻井　まゆみ

1　主題設定の理由

本校は、「心豊かで楽しい学校」という教育目標のもと、「学び合い高め合う子」「自他を認め思いやりのある子」「感謝し感動する子」「健康な体としなやかな心の子」の育成を基本としている。また、現職教育では「主体的に学びを続ける児童の育成～自分の考えを広げ、追究できる課題を通して～」をテーマに掲げ、児童自身が主体となり、問題意識をもって学ぶ授業を目指している。

こうした目標を達成するためには、学力向上だけでなく、豊かな心を育む教育が不可欠である。現代社会において、多様な価値観を尊重し、他者と協力しながら生きる力が求められている。本校の児童が「知・徳・情・体」のバランスが取れた成長を遂げるために、「豊かな心の育成」を研究テーマとして設定した。

2　研究の手だて

豊かな心を育むためには、学習活動や学校生活の中で、児童が感情や価値観を深める機会を増やすことが重要である。本校では、以下のような手だてを講じた。

(1)　人間関係づくりの推進

学級経営を基盤とした人間関係づくりに力を注ぎ、児童が安心して自分の考えを表現し、互いに認め合える環境を整える。

(2)　感動を育む活動の充実

児童が日々の生活の中で感動する心を育むための体験の機会を設ける。

(3)　主体的な学びを促す授業の工夫

児童が自ら考え、積極的に学習に向かう姿勢を育てるため、「子どもに学びを委ねる」をキーワードに授業改善に取り組む。

3　研究の実際

(1)　人間関係づくりの推進

ア　ひまわりタイム

朝の活動時間にソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンカウンターを取り入れた「ひまわりタイム」を毎月１回実施した。低学年、中学年、高学年の部会ごとに児童の実態に合わせたワークを準備して取り組んだ。実施後の１週間を「ひまわり週間」として設定し、スキルを日常生活で活用できるよう振り返りの機会を設けた。



【ひまわりタイム】

イ　ミニ現職教育

教員間の連携を深めるため、定期的にミニ現職教育を実施した。セミナー等に参加した教員が講師となり、学級経営や人間関係づくりに関する具体的なノウハウを共有した。

実践事例を共有するだけでなく、課題や悩みを共有し、解決策を話し合った。この取組により、教員間の共通理解が深まり、学級経営の強化につながった。

(2)　感動を育む活動の充実

ア　芸術鑑賞会

ピアノとバイオリンのデュオ「スギテツ」を招き、親しみやすいメロディやユニークな擬音を活用した楽曲を鑑賞した。視覚的に楽しめる映像資料も交えることで、児童は新たな感性に触れ、感動を共有する機会となった。



【芸術鑑賞会】

イ　なわとびスペシャル集会

ペア学級で協力しながら長縄跳びに挑戦する「なわとび集会」を開催した。今年は特別に縄跳びのギネス記録保持者を招き、45 分間のパフォーマンスを披露していただいた。児童は目の前で繰り広げられる多彩な技に目を輝かせ、本物に触れる感動を味わうことができた。



【なわとびスペシャル集会】

(3)　主体的な学びを促す授業の工夫

児童が自ら考え、学びを深められるよう、ICT の活用や課題設定、発問の工夫、特別な支援を要する児童の学びの工夫を行った。

ア　ICT の活用

スプレッドシートやパドレットを用いて互いの考えを共有し、多様な意見に触れる機会を増やした。これにより、児童は自分の考えを整理しつつ、他者の意見を参考にしながら思考を深めた。視覚的に意見を整理できることは、学びの過程を明確にする助けにもなった。

イ　課題設定の工夫

児童が興味をもち、自ら探究しようとすることを意識した授業づくりを行った。単元や授業の目的を明確にし、児童が学びの見通しをもてるようにすることで、学習への意欲を高めた。また、一つの答えに縛られない課題を設定し、多様な視点から考えられるようにすることで、児童が主体的に取り組める学びの環境を整えた。

ウ　特別な支援を要する児童の学びの工夫

個別最適な学びの実現に向け、特別な支援を要する児童の学びを工夫した。スモールステップ、個に合わせた進度で「できる」ことが意識できる方法で指導に当たった。

4　成果と課題

本研究を通じて、「豊かな心の育成」を目指した取組を実践した。児童が安心して意見を共有し、互いを尊重し合える環境づくりや、感動を分かち合う体験、主体的な学びを引き出す工夫が児童の感性や思考力の向上に寄与したことは、大きな成果である。一方で、これらの取組を長期的に持続可能な形で定着させることが課題として残っている。また、教員同士の連携を一層深めるため、ミニ現職教育の頻度や内容の充実が必要である。今後は ICT の活用や課題設定の工夫について、各児童の個性や多様性に応じた対応をさらに進めるため、研究を深化させていきたい。

・研究主題・副題は１４ポイントです。変えないようにしてください。
・副題がない場合は空欄にしてください。
・本文の体裁は４４字程度×４３行程度、１２ポイントとしてください。
・写真や図表の資料を別添することはできません。論文内に掲載してください。
・このテキストボックスは削除してください。

目次へ

研究主題	「食」への関心を高め、自身の生活で生かすことのできる児童の育成		
副　　題	子ども達の心身の健康をはぐくむ食育指導や活動を通して		
学 校 名	蟹江町立学戸小学校	校 長 氏 名	河村　佳子

1　主題設定の理由

本校の児童の多くは、給食の時間を楽しみにしており、美味しそうに給食を食べている。しかし一方では、苦手な食材があり、減らしたり最後まで食べられなかったりする児童もいる。蟹江町給食センターで行っている令和５年度残菜調査では、町内小学校平均5.4%に対して、本校は7.9%と他校と比べても残菜が多い傾向にある。

さらに、食に関する本校の児童の実態を詳しく把握するために、４月に全児童を対象に食育アンケートを実施した。その結果を見ると、「食事の時間は楽しいですか」という質問に対し、約 90%の児童が「とても楽しい」または「楽しい」と答えた。しかし、「給食は毎日残さず（減らさず）食べていますか」という質問では、47%の児童が「ときどき残す（減らす）」または「毎日残す（減らす）」と答え、主な理由としては「苦手なものが出るから」が約半数であった。また、「朝食に野菜を食べていますか」については、「食べない」と答えた児童が 36%、「よくかんで食べるのを意識していますか」については、「意識していない」と答えた児童が 20%となり、「食」に対する意識の低い児童が一定数いることが分かった。

上記のことから、本校の児童の傾向として給食で皆と会食をすることや食事の時間を楽しみにしていることがうかがえる。しかし、苦手な食べ物を減らしたり残したりしてしまう児童も多く、自身の健康や栄養バランスなど、食育の６つの視点（食事の重要性、心身の健康、食品を選択する能力、感謝の心、社会性、食文化『食に関する指導の手引』より引用）を意識して食事をしている児童は少ないのではないのかと考えた。

そこで本年度より、食事を楽しむ姿勢を大切にしながら、「食」への関心を高めたいと考える。食育の６つの視点を意識した食育活動を行うことにより、自らの食生活を考え、心身の健康につなげたり、給食の時間や家庭での食事の時間で生かしたりする意識をもつことのできる児童を育成することを目指し、本研究を進めることにした。

2　研究のねらい

食に関する正しい知識を身につける中で、自らの食生活を考え、心身の健康を育み、望ましい食生活を実践することができる児童の育成を目指す。

⑴　めざす児童像

「食」への関心を高め、「食」を通じて毎日健康に過ごそうとしたり、自身の食生活の向上につなげようとしたりすることのできる児童

⑵　研究の仮説

食べ物への感謝の気持ちや健康への意識を高めたり、食事の文化やマナーを学んだりする活動を行えば、自身の食生活を考え自分の生活につなげられる児童を育成することができるであろう。

3　研究の対象

全学年（501 名）

4　研究の方法

⑴　仮説に対する手だて

①　食育の６つの視点を意識した授業実践を行い、食への関心を高める。

②　「いただきます」「ごちそうさま」の意味を知ったり、食べ物に感謝の気持ちをもったりすることで、残さず食べようという意識をもたせる。

③　食事のマナーや文化を知り、自身の食事について振り返らせる。

⑵　仮説の検証

①　　アンケート調査　②　調査結果を踏まえた、授業実践　③　分析・検証（アンケート調査含む）

5　研究の実践

⑴　各学年の授業実践

①　１年生「おはし名人になろう！」

１年生は、給食の様子から、まだ箸の扱いに慣れていない児童が多くいることが課題として挙げられた。そのため、食育の視点の「社会性」に着目し、よりよい箸の持ち方を知り、それを実践していこうという気持ちをもたせることをねらいとする授業を行った。授業では、箸を正しく持つとどんなよいことがあるのかを考えるために、実際に箸を持たせて箸でできることについて考えた【資料１】。箸はスプーンやフォークよりも多くの機能があることに気付かせることができた。さまざまな箸の動きを使いこなすことのできる人を「おはし名人」と題し、ワークシートの順に沿って真剣に練習する姿が見られた。「こんなに難しいとは思わなかった」「もっと上手に箸が使えるようになりたい」など、正しい箸の使い方をしようという意欲の高まりがみられた【資料２】。



【資料1　箸でできることの例】

めざせ！！おはし名人

	あなたが できること	できたところに○をつけましょう
名人	まめを つまむことが できる。	○
レベル5	スポンジを つまむことが できる。	○
レベル4	上のはしだけを うごかすことが できる。（正しい はしのうごかし方が できる。）	○
レベル3	はしのさきを くっつけることが できる。（正しい はしのもち方が できる。）	○
レベル2	おはしを 1本もって、「1」の数字を 書くことができる。	○
レベル1	正しい えんぴつの もち方が できる。	○

【資料2　ワークシート】

②　２年生「すききらいをせずにきゅう食を食べよう」

２年生は、食育の視点の「心身の健康」に着目し、バランスよく食べることで心身の健康につながることを理解するというねらいのもと授業を行った。授業では、ある日の給食の献立を基に、多くの食材が使われていることを知らせたり、食べ物のはたらきについて考えさせたりした。その後、食べ物には大きく分けて３つのはたらきがあることを伝え、生活班でその献立に使われている食材を、３色食品群の３つのグループに分類させた。班活動では、活発に意見交換をしながら一生懸命に分けようとする姿が見られた。また、給食に使われている食材の分類を知ると、「３色全部使われている」「毎日３色の食材が使われていそう」とつぶやいている児童がいた。その後、バランスのとれた食事のよさを考えるための意見交流では、「好きなものばかり食べていると、疲れやすくなったり、病気にかかりやすくなったりするが、バランスのよい食事をするとパワーが出たり、健康な体を保ったりすることができる」という意見が出た【資料３】。また、今日の給食から好き嫌いなく食べようという意識が高まっている意見も多く見られた。



【資料3　意見をまとめた板書】

③　３年生「魚のことをもっとすきになろう！」

３年生は、食育の視点の「心身の健康」に着目し、魚に含まれる栄養素やその働きを理解し、魚を進んで食べようとする意欲を育むことをねらいとする授業を行った。授業では、事前アンケートを活用して、牛肉や鶏肉に比べて魚を苦手にしている児童が多いことや、魚の栄養素や働きについてあまり知らないことに気付かせた。また、魚に興味をもてるように導入部分で魚釣りゲームを行った【資料４】。魚の裏側には、魚の名前、大きさ、旬、代表的な食べ方が書いてあり、児童はそれを見ながら釣った魚の特徴をワークシートに記入させた。その後、グループで自分の釣った魚を紹介し合い、愛知県でとれる魚について理解を深めることができた。魚がもつ栄養素や働きについて資料を用いながら説明し、さらに魚への興味が深まった。児童からは、「頭がよくなることや血や筋肉を作る基になることは知っていたが、血液がサラサラになることは知らなかった」という声が聞かれた。その後、担任が、給食にも色々な種類の魚が使われていることや、焼き魚が苦手な子はフライやかまぼこなどの加工品でも魚と同じ栄養素を摂ることができることを伝えた【資料５】。



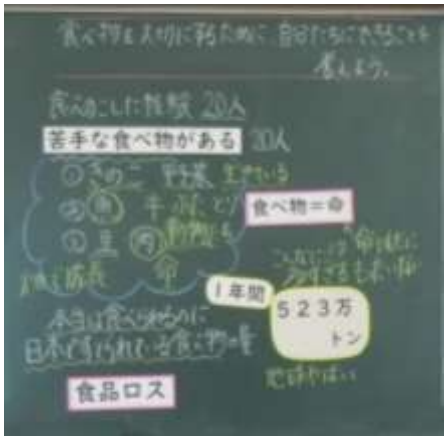
【資料4　魚釣りゲームの様子】



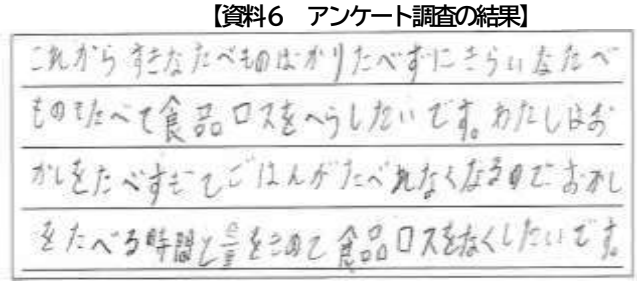
【資料5　魚料理を紹介する様子】

④　４年生「食べ物を大切にするために、自分にできることを考えよう」

４年生は、食育の視点の「感謝の心」に着目し、食品ロスの少ない食生活を送るために自分ができることを考え、毎日の食事に感謝の気持ちをもって生活しようとする心を養うことをねらいとする授業を行った。事前に行った食べ残した経験の有無や苦手な食べ物についてのアンケート調査の結果を児童に伝えた。野菜や魚だけでなく、きのこや肉、豆類など、多くの児童に苦手な物があることを知った【資料６】。その後、苦手な食べ物があると残してしまうことや、飲食店で注文しすぎてしまったり、時間が足りなかったりした経験があることなど、自分の経験を発表し合った。周りの児童からは共感している様子が見られた。残してしまった料理は、ごみとして処理されること、「食品ロス」という大きな問題となっていることを児童に知らせると、「命がもったいない」「むだにしたくない」などの声が上がった。食べ物をむだにしないために自分にできることを考え、グループで積極的に話し合った。その後の発表では、「苦手な物は、一口でも挑戦して好きになる努力をす



【資料6　アンケート調査の結果】



【資料7　授業後のふりかえり】

る」「自分で量を調節する」などの意見が出た。また振り返りには、これから食べ残しを減らすために、自分にできることを続けていきたいという意見が多数書かれており、全体的に食への意識が高まった【資料７】。

⑤　５年生「お米について知ろう」

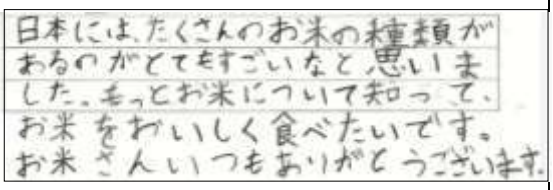
５年生は、食育の視点の「食文化」に着目し、日本食に欠かせない米について深く知り、自身の食生活を振り返ることをねらいとする授業を行った。授業では、全国で新米として売られている袋だけを提示し、食感や味の分布図を見せ、全国的にお米が生産されていることを知らせた【資料８】。その後、米について知っていることを尋ねると、ほとんど毎日食べているにも関わらず知らないことが多いという意見が多かった。そこで、苗作りから収穫までのスライドを提示し、何をしているところなのかをクイズ形式で考えさせ、それぞれの工程で行うことや手間がかかっていることを理解させた【資料９】。５月に田植えを体験していたこともあり、より意欲的に活動する姿がみられ、米についてもっと知りたい、調べたいという声が多く聞かれた。また、授業を通して、米一粒一粒を大切に食べようと振り返る様子も見られた【資料10】。



【資料８　食感や味の分布図】



【資料９　苗作りから収穫までのスライド】


日本には、たくさんのお米の種類があるのがとてもすごいなと思いました。もっとお米について知って、お米をおいしく食べたいです。お米さんいつもありがとうございます。

【資料10　授業後の振り返り】

８　研究の成果と今後の課題

⑴　成果

各学年で食育の６つの視点を意識した食育活動を実践することで、自身の健康や生活に繋げようとする様子が見られたり、声が聞かれたりした。食べ物への感謝の気持ちや健康への意識を高めることができたと考えられる。また、事後アンケートでは、朝食に「野菜を食べない」と答えた児童が、事前アンケートの 36%から 28%となり、食べる児童が増加した。なお、給食センターの調査による残菜率は、昨年度１学期が 5.9%であったのに対して、今年度１学期は 5.1%となり、減少傾向にある。本校の「食に関する指導の全体計画」の目標値である残菜率 4.5%以下を達成できるよう、今後も継続的な取組を行いたい。

⑵　課題

実践後アンケートで調査を行った。その結果、「よくかんで食べることを意識していますか」については、「意識していない」と答えた児童が 20%から 21%となり、あまり変化が見られなかった。その要因としては、どの学年も授業で取り扱うことがなく、担任からの声掛けも少なかったためであると考えられる。年間を通したカリキュラムの見直し・改善を図り、児童がさらに自身の生活に繋げていけるよう、食育の６つの視点に焦点を当てた計画にしていきたい。また、よりよい食育活動のためには、学校だけでなく家庭との連携も必要である。今後は、家庭への広報活動を積極的に行ったり、連携して取り組める活動を考えたりしていきたい。さらに、学年ごとに活動を行うだけでなく、全校で協働できる食育活動も考えていきたい。

目次へ

研究主題	考えることを楽しみ、自分の考えを深め、広げる児童の育成		
副　　題	－表現する力を育てる授業づくりをめざして－		
学 校 名	阿久比町立南部小学校	校 長 氏 名	鏡味 志寿夫

１　はじめに

本校は、昨年度より研究テーマを「考えることを楽しみ、自分の考えを深め、広げる児童の育成」として研究を行っており、今年度は２年目となる。児童の実態として、自分の考えをなかなかもつことができなかったり、話し合い活動が伝えるだけで終わってしまったりする児童が見られる。そこで、発表したり、自分の考えをもったりする「表現する力」を育成していく必要があると感じ、児童が思考する場面で、教師による指導の工夫を行うことで、自ら考えを深め、広げて、さらには自らの考えを表現していく児童を育てていきたいと考えた。今年度は特に協働学習ツールを授業の中で活用し、情報活用能力の育成を目的とした活動に重点をおいた。考えを深め、広げるには、自分の考えをしっかりもっていることが必要であり、考えをもたせる活動にも工夫を図っていき、「考えを深める」ことと、「考えを広げる」ことを相互作用させ、学びを深めていきながら、表現する力を育てる授業づくりをめざして研究を進めていった。

２　研究の概要

(1) 育てたい児童像

・課題解決に向けて、自らの考えをよりよいものにしようという意識をもって、考えを深めることができる児童

・友達と関わり合う中で、相手の考えを聞き、そこから自分の考えを広げ、深めることができる児童

(2)　研究の仮説

教師が教材解釈・教材理解を深め、それらを生かした授業をすれば、自分の考えを深め、広げようとする児童が育つだろう。

(3)　手だて（以下の手だてｉ～ｖについては、各学年の実践の部分と対応している。）

（ｉ）　情報活用能力の育成を目的とした活動の設定

（ii）　考えをもたせる活動の工夫

・児童の考えが湧き出てくるような問いや活動の工夫をする。

・視点を与え、考えの手助けをする。

（iii）　考えを整理させる活動の工夫

・思考ツールを用いて考えを視覚的に整理させる。

・板書の文字色を工夫したり、掲示物を用いたりすることで、考えを視覚的に整理させる。

（iv）　考えを見直させる活動の工夫

・思考ツールを用いて考えを深めさせる。

・ペア活動を行った後、自分の考えを見直す場を設定する。

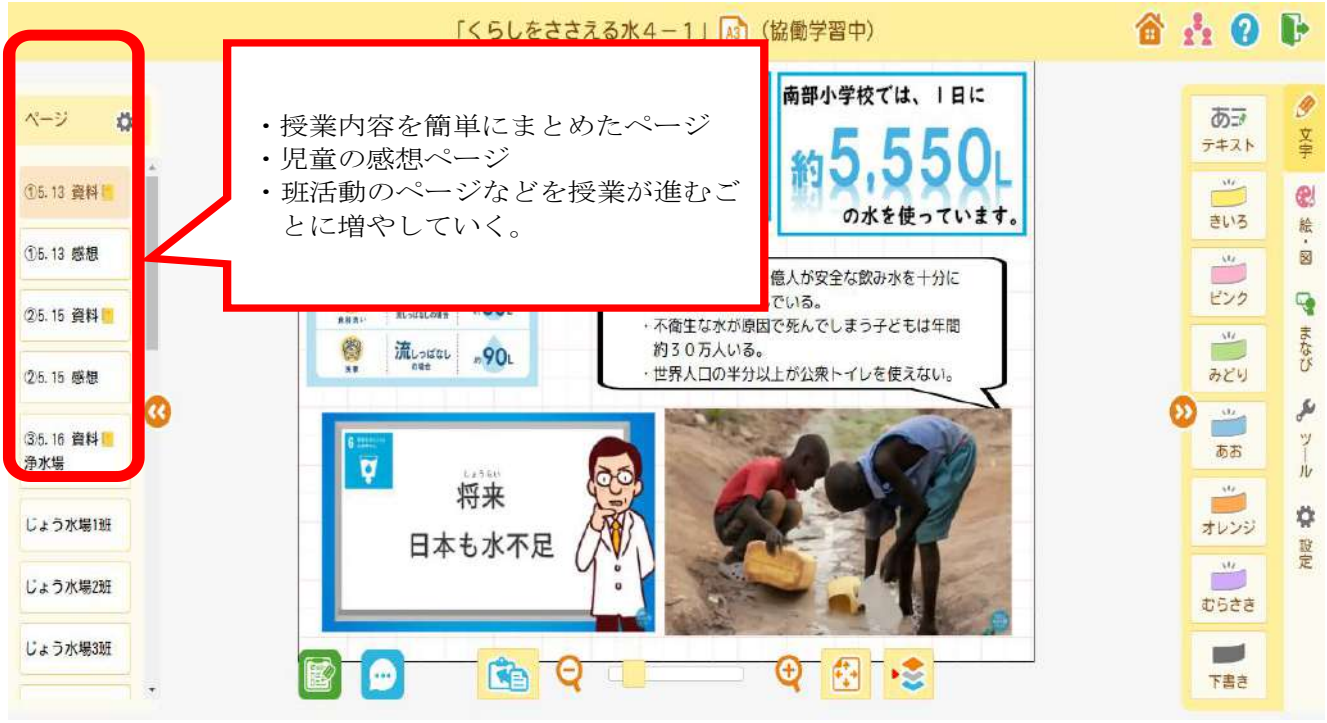
（ｖ）　考えを共有させる活動の工夫

・ペアやグループ、全体での活動を通して、考えを共有できる場を設定する。

3　授業実践の実際（協働学習ツール活用例）

(1) 4年生社会

活用場面
・単元を通して一つのノートを作成し、授業の進度に合わせてページを増やしていく。
ねらい　　【いつでも好きなときに振り返られる活動】
・いつでも単元の学習内容を振り返られるようにする。
実際の様子



成果◎と課題▲
◎考えをもてない児童が資料のノートを見ることで、考えるための視点が与えられ、自分の考えをもてることにつながった。 ◎班活動のページを振り返られるようにすることで、班の考えを整理したり、見直したりすることができ、よりよいまとめにすることができた。 ◎欠席した授業の内容を把握できた。 ▲資料ページを用意することで、自分に必要な情報を自分で調べなくても手に入る状況をつくってしまうことで、情報を収集力の育成はできなかった。 ▲資料ページを作成する手間がある。

(2)　６年生道徳

活用場面
・ペアで一つのページに考えを書き込みながら授業を進めていく。 ・「ふせん紙」の色によって自分の立場を表現させる。
ねらい　　【分かりやすくまとめる活動】
・短時間で効率よく全体共有をするために、学習をコラボノート上で進める。 ・考えの入力ができなくても「ふせん紙」の色で意思表示ができ、授業に参加できるようにする。
実際の様子



ペアで１つのページを使用し、ふせん紙やテキストで考えを記入しながら学習を進めた。



ふせん紙の色による感情の

成果◎と課題▲
◎考えを入力しないとペアでの活動が進まないが、考えがまとまらない子でも、お互いの考えを「ふせん紙」の色で共有しながらページにまとめることができた。 ◎入力が苦手だったり、うまく考えがまとまらない児童も「ふせん紙」の色だけで考えを表すことができた。 ▲共有することで考えの見直しをする児童は多かったが、中には自分の正直な意見を見られることに抵抗を感じる児童がおり、当たり障りのない内容を書き込む姿も見られた。

4　おわりに

今年度の研究では、コラボノートの活用を中心に、情報活用能力の育成を意識しながら、「考えを深める」ことと、「考えを広げる」ことを相互的に作用させ、学びを深めていくことをねらいとして実践を進めてきた。児童はタブレット端末を活用することで、情報を得たり、整理・比較したり、共有したりしながら、自らの考えをもつことができた。また、日常的にタブレット端末を活用した授業を行っていくことで、児童は操作にも慣れ、高学年の児童を中心にタイピングでの文字入力もスムーズに行えるようになった。

その一方で、タブレット端末を中心に学習を進めると、ノートやプリントへ書く活動が減少し、文字をていねいに書くことができなかったり、書く活動自体に苦手意識をもつ児童が見られたりした。また本校の児童の実態として、自分の考えを全体の場で発表することに苦手意識をもつ児童が多く、端末へ自分の考えは入力できても、それを発表したり、伝えたりすることができない児童が多い。これまでの研究で児童に自分の考えをもたせることはできたため、今後はその考えを他者へ伝えることへ目を向けて研究を続けていきたい。

目次へ

研究主題	個を大切にし、学びを深め合う児童の育成		
副　　題	課題に主体的に向かうための個別最適な学びを通して		
学 校 名	東浦町立石浜西小学校	校 長 氏 名	浅井　真司

１　はじめに

本年度の研究では、これまでに行ってきた単元全体の工夫の中でも「個別最適な学び」に焦点を当てて取り組んだ。「個別最適な学び」は、中央教育審議会の答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」において示された概念である。「指導の個別化」によって、きめ細かく学習の状況を把握・分析したり、個々の児童生徒に合った多様な方法で学んだりすることができる。また、「学習の個性化」によって学びの質が高まり、深い学びにつなげることができ、どちらも児童が主体的に学習に取り組む姿へ導くことが期待される。本人の個性や家庭環境が多様化・複雑化している本校の児童だからこそ、主体的に学ぶためにより有効な学習方法であると考えられる。今まで積み重ねてきた実践に、新たに個別最適な学びを取り入れることで、児童主体の「石西の対話的活動」となる研究を進めることができると考え、本主題を設定した。

２　研究の方針

(1) 目指す児童像

ア　学習に主体的に取り組もうとする児童

イ　進んで考えを伝え、聞こうとする児童

ウ　他者の考えを認め、学習を深めていく児童

(2) 研究の仮説

学級内に受容的な雰囲気を醸成し単元の学習を個別最適な学びによって工夫することで、その後の課題解決場面における対話的活動において、協働的に児童が自分の考えを再構築しながら、学びを深めていくことができるだろう。

(3) 今年度の研究の手だて

ア　Ｄタイムを各学年の実態に合わせた方法で行い、学級における受容的な雰囲気の醸成を行う。

イ　児童が主体的に取り組めるように個別最適な学びを単元の学習に取り入れ、実践していく。

ウ　個別最適な学びで得たものをもとに「意見を整理・比較する中で、選別・統合などをしながら、課題に対する納得解を考える」対話的活動を行う。

(4) 実践例（５年家庭科「ものを生かして住みやすく」）

ア　指導の個別化

・教科書を読むことに苦手意識をもつ児童は、タブレット端末の動画を中に学習を進めることができるようにした。

・自分で学習する順番を決めたり、時間配分を考えたりできるようにした。

イ　学習の個性化

・コースを３種類に設定し、興味によって自分に合った学習を進められるようにした。

・発展学習においては教科書準拠だけでなく、児童の関心が高まるような学習課題を多く設定した。

ウ　個別最適な学びを深めるための工夫

・発展学習では、掲示によって児童同士が清掃をした場所を相互評価できるようにする。
・まとめでは、異なるコースの児童と意見交換をしたり、ロイロノートで振り返りを共有したりして、さまざまな取組から自分に適した工夫を考えられるようにする。

エ　授業の様子

・それぞれの児童が自分の作品について、しっかりと発表できていた。
・よく考えられた工夫をしている児童が何人かいた。
・発表に終始してしまったグループがいくつかあった。そのため、互いの考えをより聞き合えるような本時での課題設定や形式を工夫する必要がある。
・コースの人数が偏ってしまったのは、コース設定が合っていなかったのではないかと考えられる。そもそもコースありきで指導計画を作成することを見直してみてはどうか。

３　年間を通した校内研修会の実施

時期	担当	テーマ
４月	養護教諭	【全体研修会】「エピペンの使い方」
５月	研究主任	【ミニ研修会】「Ｄタイム・自由進度学習の公開」
８月	佐野亮子氏	【全体研修会】「自由進度学習の単元開発について」
	小野三夫氏	【全体研修会】「教材の共同解釈（５年国語科『大造じいさんとガン』）」
１０月	５年担任	【 特設授業 】５年家庭科「ものを生かして住みやすく」
	１年担任	【 特設授業 】１年国語科「海のかくれんぼ」
１１月	３年担任	【 研究授業 】３年社会科「店ではたらく人々の仕事」
１２月	４年担任	【 研究授業 】４年社会科「伝統的な工業がさかんな地域」
	６年主任	【少経験者研修会】「学級・学年経営について」
１月	６年担任	【 研究授業 】６年音楽科「世界の音楽」「日本の音楽」
２月	２年担任	【 研究授業 】２年算数科「はこの形」

４　成果と課題

本年度の研究は、「個別最適な学び」の実践と検証を中心に進めてきた。歴任校で単元内自由進度学習を実践した教員がいるため、その経験をもとにさまざまな教科や単元で単元内自由進度学習を軸にした個別最適な学びの研究を進めていくことができた。その結果、どの実践においても、児童がそれぞれの課題に対して積極的に取り組み、児童間で交流しながら学習を進める姿が見られた。

しかし、児童が学習に主体的に取り組む成果が得られた一方で、単元の開発における視点のあり方や、児童の活動の見取り方などの、より学びを深める学習にしていくための課題もいくつか見えてきた。「教科で大事にしていることをどのように学習パッケージに反映させていくか」「児童が学びを深めている姿とは、どういう姿なのか」「教科のねらいに繋げていくために、どのような手だての工夫をするか」などである。今後はこれらの課題一つ一つを分析・改善を図りながら実践を積み重ねていき、本校の児童に合った個別最適な学びを推進していきたい。

目次へ

研究主題	自らの可能性を信じ、幸せな未来をつかみとろうとする児童の育成		
副　　題	～ウェルビーイングな学校を目指して～		
学 校 名	武豊町立武豊小学校	校 長 氏 名	水野　和広

1　主題設定の理由

本校では昨年度から、「ウェルビーイング」を主軸に、児童・教職員の自己肯定感・自己有用感を高め、将来に向けて前向きに活躍できる土台作りを目指して研究、実践および協議検討を行ってきた。特に、「３good things」を用いた振り返りを取り入れたことにより、各自が客観的に自分の現状を把握し、次の活動へのはげみや向上心につなげる一助となった。また、昨年度末に行った児童向けアンケートでは、昨年度当初の結果と比べ「自分のことが好き」「今の自分の人生は理想に近い」といった前向きな回答の割合が増加している。一方で、新しいテーマであったことから、振り返り以外の具体的な取組や授業や学級経営への生かし方については手探り状態であり、学校内での方向性や共有化に課題が残った。

国の次期教育振興基本計画にもウェルビーイングは明記されており、「人とのつながり・関係性に基づく要素が重要である」とされている。また、個人のウェルビーイングを支える要素として学力や学習環境、家庭環境、地域とのつながりなどが挙げられ、その環境整備が重視されている。

そこで、本年度は昨年の振り返りを継続するとともに、さまざまな場面での「聞き合い」「学び合い」「関わり合い」を大切にした授業や活動を取り入れ、他者とのつながりを意識した取組を通じて研究を進めていくこととした。

2　研究の仮説

自分自身の日々のよい行いやよい意識に焦点化することを習慣化していけば、児童と教職員のウェルビーイングが高まり、自らの可能性を信じて学び、幸せな未来をつかみ取っていく力が高まるであろう。

3　研究の手だて

（1）研修機会の充実

外部講師を招聘したり、校内の教職員が講師を務めたりする。（現職だよりを効果的に用いて、全体で共有する）

（2）振り返りの時間の確保

・教員による振り返り（指導日案反省時に記載）
・子どもによる振り返り（振り返りノートの活用）

（3）聞くことを重視した教育活動

・授業実践を各学年で年間１回実施する。その際には、学年間で十分検討した上で実施し、授業後の研究協議会で成果と課題の共有化を図る。（現職だよりを効果的に用いて、全体で共有する）
・聞くことを重視した授業に取り組み、聞き合い、学び合い、関わり合いの場面を授業の中に取り入れる。

4　研究の実際

（1）ウェルビーイングについての研修

昨年度の反省から、ウェルビーイングについて、教師が学ぶことから始めた。昨年度も自主

研修会として行ってきたが、今年度は、コーチカウンセラー・公認心理師である西川智恵氏を講師に招き、学期に１回、年間３回の研修会を現職教育として実施した。研修会では、ウェルビーイングとはどういう状態なのか、どういった取組をしていくとよいのかといったことを心理学の視点を踏まえて指導していただいた。研修会では、教師同士のグループワークも行い、お互いのウェルビーイングについての考え方や子どもの見立て方などについても意見交換をし、教師自身の見方や考え方を広げたり深めたりすることにつながった。

（２）３good things の取組

ア　教師の取組

指導日案の週反省として「３ good things」を記入した。内容は、「児童の様子」と「自分自身のこと」とし、自己のウェルビーイングにつながる振り返りを行ってきた。１週間の子どもたちの様子を振り返ることで、ふとした瞬間に見せる子どもたちのよい言動について、改めて着目することができるようになった。また、自分自身にも目を向けることで、自分の働き方や生き方について考えるきっかけとなった。

イ　子どもの取組

クラスや自分自身にあったよいことを振り返らせる時間を確保し、振り返りノートに書かせた。取組の前には、「３ good things」について学年の発達段階に応じた説明を行った。振り返りの時間を確保することで、クラスや友達、自分自身のよさを見つけることができ、自己肯定感や自己存在感を高めることにつながった。

（3）「聞く」ことを重視した授業

子どもの心理的安全性を高めるために、「聞くこと」を重視した教育活動を進めてきた。自分の話すことが聞いてもらえ、話した内容について共感を得たり、話し合いが活発化していく経験をしたりすることで、さらに話そうという意欲が高まったり、より伝わるようにするにはどのように話すとよいか考えたりすることにつながる。こうした聞く・話す活動が好循環していくことで、思考力・判断力・表現力が高まっていくと考えた。

実際の授業の中では、頷きなどの反応を返しながら相手の話を聞くことで、伝えやすい空間をつくり、安心して活動に取り組めるようにしたり、話す活動を通して自分の思いを大切にするとともに、聞く活動を通して友達の考えから自分になかった発想のよさを感じられるように話し合いを取り入れたりするなどの取組を行った。また、グループで聞き合う場面では、自分の意見が聞いてもらえる、取り入れてもらえる、反映される喜びを味わえるような取組も行った。

５　研究の成果と課題

教師がウェルビーイングについての理解を深めたことで、目指す子どもや学級の姿を具体化し、そのための学級経営や学習指導について検討することができた。また、聞くことを重視した取組を進めることで子どもたちの心理的安全性が確保でき、子どもたちが教室で自分の考えを思い切って話すことができるようになってきた。そして、振り返りを行うことで、自他のよさを見つけ、自己肯定感の高まりや他者とのつながりを大切にしようとする言動が見られるようになった。

今回行ってきた実践は、日々の教育活動の中で当たり前のように取り組むことができるものである。今後も、ウェルビーイングな学校を目指し、日々の積み重ねを大切にしていきたい。また、家庭や地域ともウェルビーイングな学校についての共通理解を図り、連携した取組について検討を進めていきたい。

目次へ

研究主題	「特別の教科　道徳」を要とした道徳教育の充実		
副　　題	－家庭・地域との連携を生かした道徳教育の推進－		
学 校 名	南知多町立豊浜小学校	校 長 氏 名	鈴　川　美　紀

１　研究の概要

（１）研究の仮説

①道徳教育の見識を深め、「特別の教科　道徳」の授業改善についての指導・助言を受けながら授業力向上に努めることで、話合い活動が活発化し、多様な見方や考え方に触れることで、自分の生き方について深く考えることができるだろう。

②授業の中で大人の考え方や親としての考え方を知ることで、視点を変えて考える多角的な見方ができ、深化した自分の生き方を考えられるようになるだろう。

（２）研究の手だて

①外部講師を招聘した計画的な研修による道徳教育の指導方法の工夫・改善

・道徳教育に造詣が深い大学教授を講師として招き、道徳の授業力向上（「中心発問」「補助発問」の工夫等）について研修を行う。

②家庭・地域との連携による道徳教育の充実

・道徳の授業公開や親子道徳の実施や地域人材をゲストティーチャーとして道徳の授業に招くことにより、児童が大人の考えに触れる機会を設ける。

・道徳教育の取組をホームページや学校だより等で家庭や地域に積極的に知らせることで、日常生活の中で道徳性を高める。

２　研究の内容

（１）外部講師(岐阜聖徳大学　山田貞二先生)による道徳の授業づくり研修会

（ア）示範授業（７月１１日）

岐阜聖徳学園大学教授の山田貞二先生を講師に招き、６年生対象「バスと赤ちゃん」の示範授業を全職員で参観した。「対話」を中心とした「考え、議論する道徳」への足がかりとして、意見を次々と発表させる「コミュニティーボール」や心のバランスを表す「心情メーター」など子どもたちの意見を出しやすく「見える化」する工夫を紹介してくださった。また、机の配置の工夫や子どもとの対話の仕方、構造的な板書、振り返りの仕方などこれからの授業の基盤となる授業を提案してくださった。



〈コミュニティーボールの紹介〉



〈対話中心の授業の様子〉

（イ）教材分析の実践（８月２３日）

第２回目の研修の実践として、３年の教材「仲間だから」、５年の教材「ロレンゾの友達」について、教材分析を行った。まず、全体で２つの教材を読み、感じたことや気づきを出し合った。それぞれの教材について、内容項目やねらいとする価値を確認して、道徳性曲線を書き、この教材の授業づくりのポイントを講義していただいた。



〈模擬授業をしている様子〉

その後、低学年、高学年のグループに分かれて授業の流れや発問を考え、中心発問のみ模擬授業を行った。その様子を参観されて、発問の仕方や意見の広げ方などのご指導をいただいた。また、教員が子ども役となることで、発問の仕方ひとつで子どもたちは答えやすくも答えにくくもなることを実感することができた。

（ウ）授業研究（１０月２日）

第２回の研修で扱った教材「仲間だから」を低学年部会で検討した指導案で、４年生を対象に研究授業を行った。授業では、心情メーターで児童の考えを可視化したり、ロールプレイを通して、登場人物の気持ちを体感させたりした。授業の最後に事前に保護者に答えてもらっていた体験談を紹介した。子どもたちは興味深く聞いていた。



〈研究協議会の様子〉

授業後に、職員で研究協議会を行い、発問や児童の反応、板書について協議した。その様子を含めて山田先生に指導・助言をいただいた。研修会で学んだことが活かされているかを確認することができた。

（２）家庭・地域と連携した道徳教育

（ア）学校公開日の取組（全校道徳授業公開）

６月２２日（土）の学校公開日には、２時間の授業参観のうち１時間は全学年で道徳の授業を行った。各学年とも家庭地域との連携を意識した授業を行い、ゲストティーチャーを招いたり、保護者に授業に参加してもらったり、事前にとった保護者アンケートを授業で紹介したりした。また、参観した保護者に感想を書いてもらい、ホームページや学校だより「浜っ子だより」で授業の様子や保護者の声を知らせた。

２年「しんじていいのかな」節度・節制

事前に、保護者に「留守番」についてアンケートに答えてもらい、導入の場面で結果を発表した。「安全」に対しての、児童と保護者の思いを比較することにより、より深く考えることができた。

３年「お祭りにこめられている思い」伝統文化の尊重

担任が地元豊浜の鯛まつりのお囃子の練習に出向き、練習をしている子どもたちの写真を撮影して提示したり、地域の方に祭りに対する思いをインタビューして紹介したりした。

５年「わたしにできることを」家族愛

中心発問について、ホワイトボードを使ってグループでの話し合いを行う際に、保護者にも入ってもらい、意見交換をした。最後に家族への感謝やこれから家族のためにしたいことを書き、保護者に伝える場面を設定した。



〈５年　家族への感謝〉

（イ）ゲストティーチャーを招いた授業の取組



〈祭りの魅力を伝える様子〉

①　６年「国や国土を愛する心」（６月２２日　学校公開日）

学校公開日の６年生の授業では、６年児童の祖父であり、地域の前区長会長をゲストティーチャーとして招いた。教材文「米百俵」で地域の未来を考えてあえて苦しい道を進もうとした主人公小林虎太郎の思いについて考えた後に、子どもたちはふるさと豊浜を大切にするために自分にできることを話し合った。その後、ゲストティーチャーに祭りの話を中心に町の魅力を話していただいた。教師でなく、地元の方が豊浜の古き良き伝統や祭りを継承していくことへの思いをお話ししていただくことで、子どもたちも親身になって聞き、地元豊浜について深く考えることができた。

②　６年「進んで社会の役に立つ」（９月１１日　学校訪問）

働くことについて多角的に考えることができるように、ゲストティーチャーとして、プラモデルやラジコンの部品を製作している方をお招きして、ゲストティーチャー参加型授業を行った。



〈ゲストティーチャーが答えている様子〉

山田貞二先生のアドバイスを活かした座席配置やコミュニティーボールや心情メーターを使用して、授業を進めることにより、活発な議論ができた。ゲストティーチャーには、児童の席に座ってもらい、子どもたちの発言について感想や意見を言ってもらったり、自分の体験を語ってもらったりした。ゲストティーチャーと担任が時間をかけて綿密な打ち合わせをし、随所でゲストティーチャーの意見を聞くことで、子どもたちはものごとを多面的・多角的に考えることができた。

（ウ）親子道徳週間の取組

１０月８日（火）～１０月１８日（金）を親子道徳週間とし、家庭で教材を読んで感想を書いてもらったり、中心発問の部分を子どもと一緒に考えてもらったりした。４年生は、教材『いつも心に「ファイト！」』の音読と感想や関連する身近な出来事の記入を宿題として出した。授業の中で、宿題で書いた感想を小グループで発表したり、学級全体で発表したりした。授業後は、学級通信で授業の様子を知らせた。この教材を通して、自分たちの生活は家族だけでなく、親戚や近所の人などたくさんの人たちによって支えられていることに気づき、その人たちに感謝できているか自分を見つめさせることを目指した。

３　研究の成果

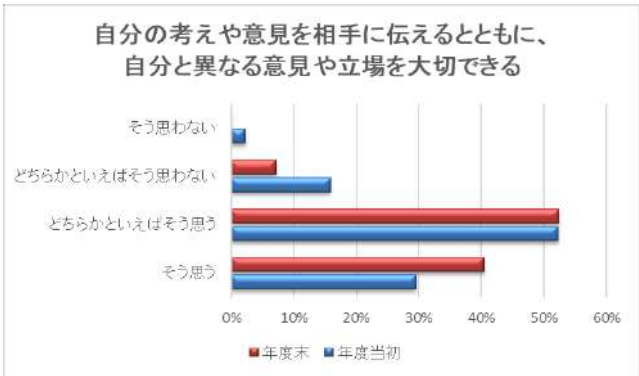
① 外部講師を招聘した計画的な研修による道徳教育の指導方法の工夫・改善

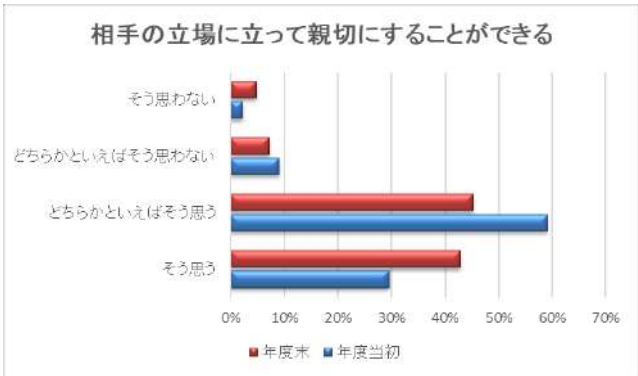
教師は、授業の流れ、主発問、効果的な追発問やゲストティーチャーの活用等を学び、道徳への考え方や授業展開を工夫しながら実践を繰り返すことで指導力向上に繋がった。

児童は、コミュニティーボールや心情メーター等を利用したことで、発言する機会が増え、話し合い活動が活発になった。５、６年生を対象に年度当初と年度末に行ったアンケート結果では、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、自分と異なる意見や立場を大切にできる」の質問に「そう思う」と答えた児童が年度末には１０％増加した。

また、「相手の立場に立って親切にすることができる」では、「そう思う」と答えた児童が年度末には１３％ほど増加した。グラフにはないが「友だちと互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲良く協力し助け合うことができる」でも「そう思う」と年度末に答えた児童が１０％ほど増えた。アンケート結果から、発言の機会や対話の場面を意図的に多く設定

することで、自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、自分と異なる意見や立場を大切にできたり、相手の立場に立って親切にすることができたり、男女仲良く協力し助け合ったりする児童の割合の増加に繋がった。

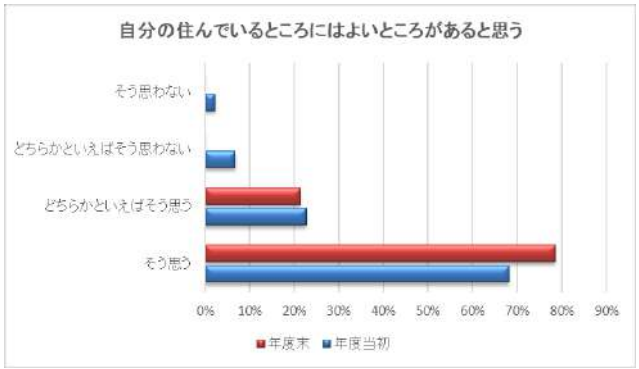


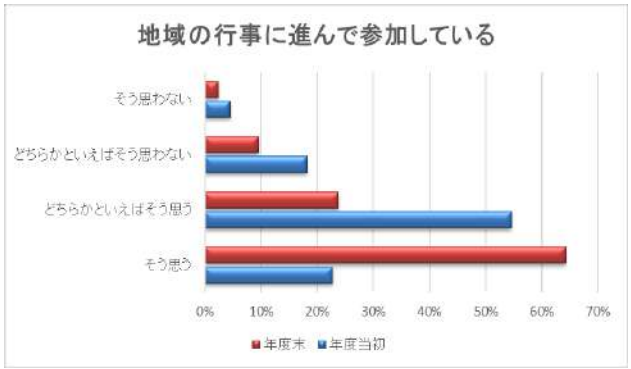


②家庭・地域との連携による道徳教育の充実

保護者や地域の方の意見やゲストティーチャーの話は子どもたちに興味をもたせ、授業が広がったり、深まったりすることを実感した。アンケートに答えてもらったり、ゲストティーチャーを招いたりする場合は、授業のねらいが伝わるように分かりやすいアンケート用紙にしたり、ゲストティーチャーと十分に打ち合わせをしたりすることで、ねらいにせまることができた。

５、６年生を対象にしたアンケート結果からは、「自分の住んでいるところにはよいところがある」「地域の行事に進んで参加している」で「そう思う」と答えた児童の割合が大幅に増加した。地域の祭りや行事などの時期に合わせて、ゲストティーチャーを招いたり、保護者へのアンケートを行ったりした授業実践の結果だと考える。





４　今後の課題と取組

授業者は授業の流れの中で、ねらいに迫るための追発問をどのように行ったら考えを深化させることができるか悩んでいる。今後も子どもたちが多くの価値観に触れ、新たな自分の生き方を見つけられるような「特別の教科　道徳」の授業づくりのため、授業実践を評価し、改善を続ける。さらに、教師が継続的に指導方法を学べるように現職教育を充実させたり、他市町の研修会に参加したりして、ワークシートの工夫や振り返りの方法等も含めた指導力の向上・深化に努める。

また、地域・家庭との連携を図るために、今後も学校だより、学年だより、ホームページ等で情報を発信していく。定期的に「親子道徳週間」を行い、親子で話し合うきっかけを作り、保護者と共に道徳の授業を作り上げていきたい。

目次へ

研究主題	ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな島っ子の育成		
副　　題	～ＩＣＴを活かした協働的な学びの工夫と基礎学力の向上～		
学 校 名	南知多町立篠島小学校	校 長 氏 名	木村　好伸

１　主題設定の理由

本校では、主体的・協働的な学びを中心に研究を行っている。朝の帯時間に取り組んでいるコミュニケーションタイムや各教科での話し合い活動などを通して、学力の向上と人間性豊かな児童の育成を目指している。また、本校の児童は基礎学力に課題があるため、漢字・計算のドリル教材への取組を全校で統一し、朝の帯時間や授業時間、家庭学習などを通して実践している。そして、国語と算数の基礎学力の定着を確認するため、学期に一回ずつ「漢字・計算テスト大会」を実施している。

しかし、基礎学力向上を目指したドリル教材での取組は、ドリルノートに何度も同じ漢字を書いたり、似た形式の問題を解いたりするもので、児童にとって決して楽しいことではなく、前向きな姿勢で取り組めない子もいる。さらに、漢字を間違えて書いたり、計算ミスがあったりしても、解答の確認をきちんとしないと正しい学習内容が定着しない。

そこで、子どもたちの基礎学力の向上を目指しつつ、漢字・計算の学習に対して前向きな姿勢で取り組むことができるようにするため、４・５年生のタブレット端末にタッチペンで書くタイプのデジタルドリル教材を導入することにした。また、タブレット端末はスライドやドキュメントなどを共同で編集することができるため、各教科や総合的な学習の時間のまとめをグループで協力して作業するのにも適している。このような特性を活かして、児童の協働的な学びにも活用していきたいと考えた。

２　目指す児童像

①主体的で協働的な学びを実践する児童

ＩＣＴを積極的に活用し、自分の学びを深めると同時に、他者との協働を大切にすることのできる児童の育成を目指す。デジタルツールを使って調べたり、発表したりすることで、個々の学びを広げ、チームワークを重視した活動に参加できると考える。また、ＩＣＴツールを用いたオンラインでのコミュニケーション活動で、意見交換やグループディスカッションを積極的に行い、他者と上手にコミュニケーションをとりながら学びを進められる力も育てていきたい。

②基礎学力がしっかりと定着した児童

学力の土台となるのは、国語・算数・理科・社会などの基礎的な知識や技能である。これらは反復練習や個別の理解度に応じた指導を通じて確実に身につけることが必要である。特に、漢字や計算などの基礎的な技能については従来、ドリルノートに繰り返し書くパターンの学習形式が多く取り入れられているが、繰り返し書くだけで理解に繋がらなかったり、作業そのものを苦痛と感じたりする子もいる。そのため、ＡＩ判定機能により書き順の判定や即時採点の機能を活かすことで、児童のやる気を喚起させ、学習効率を高めていくことにつながると考えた。

３　主題に迫る手だて

研究主題に迫るために以下の２点を意識し、児童が主体的・協働的に学ぶ姿勢と、基礎学力の向上を目差した取組をしたいと考えている。

①児童の一人一人が、主体的に学習に取り組むことができるよう、各教科の学習において協働的な学びの場を適切に設定する。ＩＣＴ機器を活用し、google ドキュメントやスライド等の共同編集機能をいかした作業や発表に取り組ませ、仲間とコミュニケーションを取りながら学びを深めていくようにさせる。

②紙媒体の漢字・計算ドリルノートだけではなく、タブレット端末で取り組むタイプの漢字・計算ドリル教材を取り入れることで、児童の学習意欲を高めつつ、基礎学力の向上を目指していく。

４　実践

（１）４年生：理科

単元「冬の生き物」の学習において、タブレット端末を活用した。単元の目標は、季節ごとの動物や植物を探したり、観察したりすることで、その成長の様子と季節の変化との関連について学ぶことである。

春・夏・秋の生き物については、外に出て昆虫や鳥、草、花の観察などを行ってきたが、本校の冬は海からの風が強く、校庭では生き物があまり観察できない。そのため、インターネット検索で冬の生物についてグループごとに調べ、協力してスライドの制作を行った（写真１）。



グループでのスライド制作（写真１）

スライドの制作については、これまでも総合的な学習の時間や社会科の授業などに、個人の作業として取り組んできているため、全体的にスムーズに進んだ。共同編集であるがゆえ、友達の編集したページの画像をうっかり変更してしまったり、スライドのページが入れ替わってしまったりと、多少のトラブルはあったが、友達同士で解決を図りながら前向きな姿勢で作業に取り組むことができた。

発表会では冬に見られる動物について、画像を入れたり、夏の姿との違いを示したりなど、児童が生き生きと発表する姿が見られた（写真２）。日本ではあまり見られないような寒い地方の動物について調べたグループや、寒い地域に住んでいる生物の分布について、地図を示しながら発表するグループなどもあり、聞いている側も熱心に発表に耳を傾け積極的に質問をすることができた。



グループでのスライド発表（写真2）

（２）５年生：総合的な学習の時間

５年生の総合的な学習の時間のカリキュラムに、岐阜県八百津町立錦津小学校との交流があるが、その際にもＩＣＴを活用をした取組を行った。まず、６月下旬に錦津小学校の児童が篠島小学校に来校した際には、本校の児童が錦津小学校の児童に篠島についてスライドで紹介をした。



篠島についてのスライド発表（写真3）

４年生の取組と同様、グループごとに制作を行い、体育館で発表を行った。篠島の自然や特産物などを中心に、友達と協力しながら制作・発表を行った（写真３）。

また、１月下旬ごろにはZoomを利用して錦津小学校とオンライン授業を行った。オンライン授業では、互いに交流を通して学んだことのまとめとして、それぞれの地元についてクイズを出し合った。これにより、双方の児童が他の地域と自分たちの地域の違いや共通点を意識し、地域の歴史や環境について意見交換をするなど、学びを深めることができた（写真４・５）。



錦津小とオンライン交流（写真4）



錦津小とオンライン交流（写真5）

（３）４年生・５年生：デジタルドリル教材

本年度の４月から、４・５年生においてデジタルドリル教材を導入した。昨年度までは漢字・計算ドリルは本体冊子とは別にドリルノートを購入して、学習の補充や家庭学習に活用してきた。しかし、繰り返し書くという作業そのものがあまり好きでない児童が多く、結果としてドリルノートの課題をやりきれず、基本的な漢字や計算がなかなか定着しないという課題があった。そこで、漢字・計算ともにデジタルドリル教材を取り入れることにした。

実際にデジタルドリル教材に取り組ませると、昨年度までなかなか課題が進められなかった児童も、前向きに取り組むことができた。漢字については、書き順や文字の「とめ」「はらい」などが正しいか判定し、採点してくれる（写真６）。計算についても即時答え合わせをしてくれるため、児童はすぐに間違えた問題のやり直しに取り組むことができた（写真７）。



漢字デジタルドリル（写真6）



計算デジタルドリル（写真7）

5　研究の成果と今後の課題

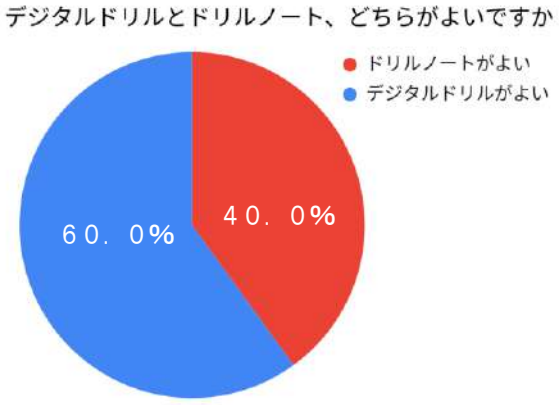
①主体的で協働的な学びを実践する児童の育成について

４年生の理科や５年生の総合的な学習の時間など、タブレット端末の共同編集機能を活用した学習を、本校では数多く取り組んできた。これにより、意見交換や情報共有を自然に行うことができるようになり、互いの意見を尊重し、受け入れる態度が育ってきた。また、協力して一つのものを作り上げる体験により、グループ内での役割分担が自然と生まれ、リーダーを中心に協力して問題解決にあたる姿が見られるようになってきた。

一方、グループでの協働編集であることで、個々の児童の作業量に差が生まれることがある。情報が一度に多く共有されるため、間違って画像を消してしまう、うっかりレイアウトを崩してしまうなどのトラブルもあった。また、評価をする際に、どの児童がどれだけの作業をこなしたかが、分かりにくいという課題もある。こうした問題を減らすために、常ににグループの新着状況を確認し、定期的に形成的評価にフィードバックしていく必要性を感じた。

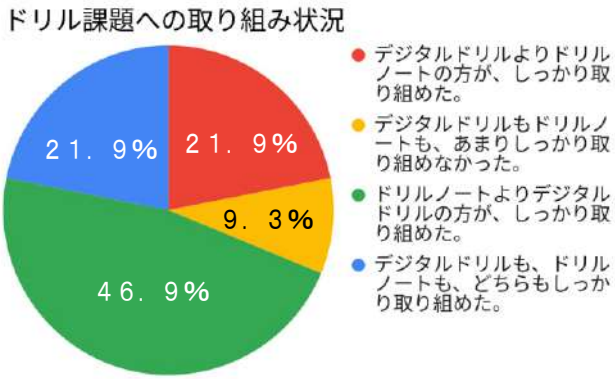
②基礎学力がしっかりと定着した児童の育成について

４・５年生が取り組んできたデジタルドリル教材について、１月の終わりごろに児童向けアンケート調査を行った。まず、「デジタルドリルとドリルノート、どちらがよいか」の質問については、６割の児童が「デジタルドリルがよい」と回答した（グラフ１）。想像していたよりドリルノートの方がよいと答えた児童が多かったが、その理由として、「文字の正解判定が厳しすぎる」「タッチペンを使わないと文字が書きにくい」「タブレット端末の持ち運びが重い」などの意見があった。



アンケート質問①（グラフ1）

また、本年度から取り組んでいるデジタルドリル課題と昨年度までのドリルノートの課題への取組状況について質問したところ、「ドリルノートのほうがしっかり取り組めた」が 21.9%に対して、「デジタルドリルドリルのほうがしっかり取り組めた」が 46.9%となり、デジタルドリル教材の方が、児童が取り組みやすいことが分かった。しかし、「どちらもしっかり取り組めなかった」と答えた児童が 9.3%いることは大きな課題である（グラフ２）。



アンケート質問②（グラフ2）

デジタルドリル教材については課題はあるものの、アンケート結果からは「タブレットが丸付けをしてくれる」「タッチペンが使いやすかった」「楽しく学べる」「間違っているところを教えてくれる」など、前向きな意見を聞くことができた。ＩＣＴ機器を活用した学習への取組については、まだまだ課題が多くあるものの、機器やソフトウェアのアップデートや、授業者の工夫により大きな可能性を秘めている。今後も、学力検査の結果などを分析しながら、よりよい指導法について研究していきたい。

目次へ

研究主題	自分の考えをもち、対話に参加できる子の育成		
副　　題	意図的な対話を取り入れた学習を通して		
学 校 名	美浜町立野間小学校	校 長 氏 名	吉戸　勝利

１．主題設定の理由

本校の児童は、反復の学習や作業などやるべきことが明確になっている活動には、一生懸命取り組むことができる。一方、他の児童や教師の話を聞いて、自分の考えを伝えることを苦手としている児童は多い。そのため、自分と他の児童の考えを比較・検討することが難しく、深い学びにつながらないことが課題である。

２．目指す児童像

自分の考えをもち、対話に参加できる子

３．手だて

・学習のゴールを明確にした単元計画の作成
・聞く力をつけるための土台作り
・全員が対話に参加する場の設定

４．研究の実際

（１）学習のゴールを明確にした単元計画の作成

ねらいや学習の目標を意識し、児童の実態に合わせ、何を学ばせるか（学習のゴール）を明確にした単元計画を作成した。また、本時のめあてを板書し、児童が「何を学ぶのか」を明確にした（資料１）。これにより、単元を通した学習のゴールや「本時に学ばせること」を教師が意識して指導することができ、児童はやるべきことが明確に分かった状態で学習することができた。



資料１

（２）聞く力をつけるための土台作り

ア　学習規律

児童に対しては、「話している人を見る」、「話し終わるまで待つ」などの指導をした。また、「児童を注目させてから話す」、「不規則な発言は取り上げない」など、教師が意識することを確認し、学習規律を確立させた。

「話している人を見る」指導について、２年生では、担任が手を挙げたら、児童も手を挙げ、全員が注目して静かになったら、手を下ろして教師が話し始めるということを繰り返し実践した。児童も朝の会などで自分が話す場面では、この方法を取り入れるようになった（資料２）。これにより、担任の話や発表している他の児童の話をしっかり聞くことができるようになった。



資料２

イ　コグトレ

見る力、聞く力、記憶力などの認知機能を育てる「コグトレ」を毎週火曜日、水曜日の朝の帯時間に実施した（資料３）。コグトレを効果的に活用するために、販売元である東京書籍の方を講師として、コグトレ研修会を開いた。研修会での話をもとに、コグトレを指導する際に効果的な助言ができたり、児童一人一人の現状に合わせて認知機能を育てられる「コグトレミッション」を取り入れたりした。コグトレを活用することで、「聞く力」を含め、児童の認知機能の向上を図った。



資料３

（３）全員が対話に参加する場の設定

目指す児童像にせまるために多くの授業で対話する場を設定した。また、教師が対話活動をコーディネートし、全員が参加できるようにしたり、児童の意見を整理・修正・調整したりして、深い学びになるように心がけた。

○実践例　３年生　社会科　「店ではたらく人びとの仕事」

単元の学習問題として設定した「どちらのお店にお客さんがよく来るか」を話し合う場を単元終末に設定した。その際、一人一人が考えを持てるようにワークシートを活用した。また、教師は、話し合う授業の前に児童の考えを把握しておいた。教師が「○○さんはどう思いますか？」のように意図的に指名することで、多くの児童が話し合いに参加することができた。また、意図的な指名により、「Ａのお店は、看板があって、商品がどこにあるか分かりやすいからです。」「Ｂのお店では、日用品が安くなっているからです。」など、さまざまな考えを全体で共有することができた。他の児童の考えを聞いたある児童から、「看板はＢのお店にもあるよ」との声が上がったため、みんなの考えを「どちらの店でもやっていること」、「片方のお店でしかやっていないこと」に整理していくことを児童に伝えた。その後、児童の発言を生かしながら、児童の考えを視覚的に分かりやすいようにベン図を用いて板書で整理した（資料４）。最後に、話し合いの内容を生かして、「どちらのお店にお客さんがよく来るか」についての自分の考えを修正したり、調整したりして、再度考えをまとめた。



資料４

５　成果と課題（○成果　●課題）

○学習規律を確立することで、話し合い活動で他の児童の話を聞くことができるようになった。

○教師が児童の考えを把握し、意図的に指名することで全員が話し合いに参加できるようになった。また、児童の考えを把握することで、整理することができ、考えの修正・調整につなげることができた。

●ＩＣＴ機器を活用し、効率よく児童の考えをできるとよい。

目次へ

研究主題	自ら課題を見つけ解決する児童の育成		
副　　題	プログラミングを通して、目的に応じた情報活用能力の育成を目指して		
学 校 名	美浜町立奥田小学校	校 長 氏 名	筒井　重光

1　はじめに

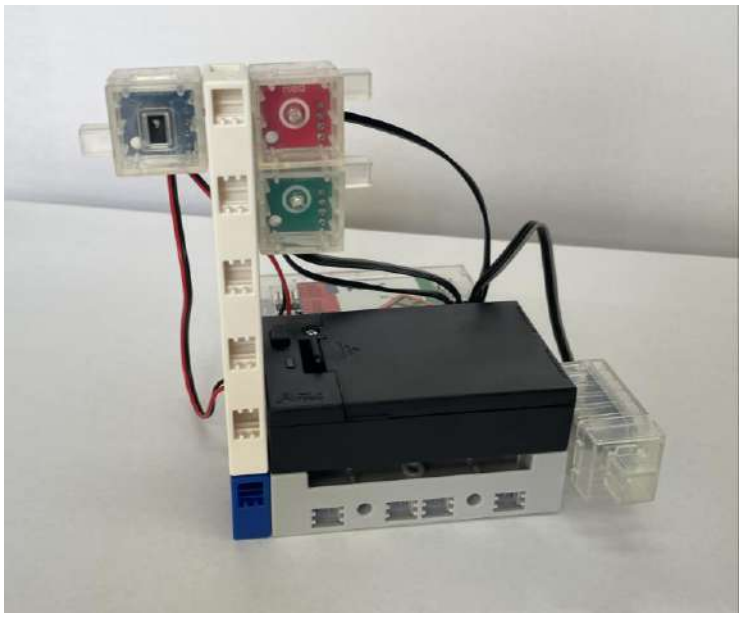
2020 年度から小学校でプログラミング教育が必修化された。必修化の目的は、子どもにプログラミング的思考を身につけさせることであり、コードや言語などの技術を習得することではなく、思考法を育てることである。プログラミング的思考とは、自分が意図する一連の活動を実現するために、どのような動きの組合せが必要であり、１つ１つの動きに対応した記号を、どのように組み合わせればよいのか、記号の組合せをどのように改善していけば、より意図した活動に近づくのか、といったことを論理的に考えていく力である。また、小学生において、コンピュータに意図した処理を行うよう指示することができるということを体験させながら、身近な生活でコンピュータが活用されていることに気づかせることも必修化のねらいである。

本研究では、身近な生活にあるコンピュータの存在に気づき、コンピュータに意図した処理を行うよう指示する ことが体験できる教材を導入して、自ら課題を見つけ思考を繰り返しながら行い、解決できる児童の育成を目指した。

2　教職員の研修

（1）教材の導入

2020 年度から小学校でプログラミング教育が必修化され、GIGA スクール構想によりタブレット端末は整備されたが、プログラミング教材はソフトウェア上で動作するもののみであったので、今年度信号機型の教材を８台配備した。



導入した　信号機型教材

（2）教材理解

信号機型の教材を整備したが、教職員への教材理解を深めるために研修を行った。プログラムの組み方や接続方法について学び、歩行者用のプログラムを作ることができた。そして、歩行者用の押しボタン式といった応用もできた。

（3）成果と課題

信号機型教材は、楽しくプログラミングを学ぶことができる教材であった。プログラミングが身近なものであることを体感することができた。課題は、一人につき一台ではないので、数人の



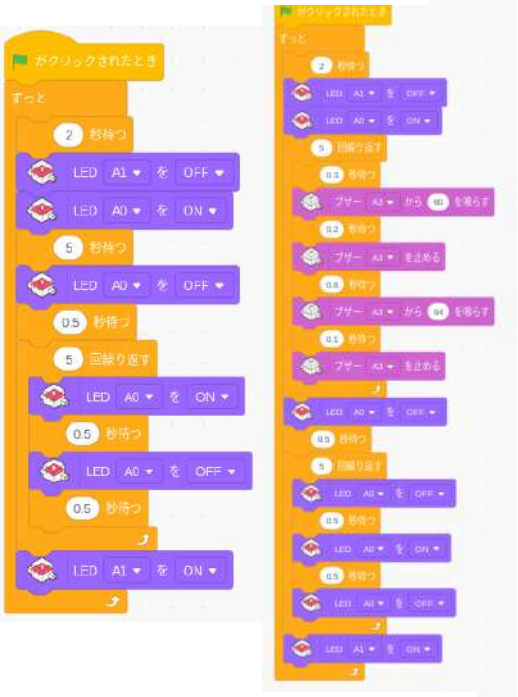
教職員研修で使用した資料

グループでの作業となってしまうことである。 特定の子どもだけが扱うのではなく、操作をする児童、計画書を持ちプログラムを確認する児童等、ローテーションで全ての作業ができるように役割交替するなどの配慮をする必要がある。事前の指示の吟味や予備実験をしておくことが大切であった。

3　協働的な学びにつながる研究

（1）理科における授業

信号機のＬＥＤを制御（点灯、消灯、点滅）するプログラムを作った。点滅は、点灯・消灯の間隔を決めるためにグループで話し合いながら試行を繰り返し、適切な時間設定を見つけていった。応用として、青信号が点灯しているときに音が鳴るようにプログラムした。



児童が作成したプログラム

（2）成果と課題

信号機の実物が目の前にあり、プログラムの実行による動作確認が瞬時にできるので、興味を持続させながら学習をすることができた。繰り返しのプログラムや分岐したプログラムを作ることができたり、音を鳴らすことができたりと実際の信号機の様子を再現することができ、プログラミングについて理解を深めることができた。

今後、各自の学習効率を上げたり、プログラミングの個性化を進めたりするために、一人一人がプログラミングに関わっていくことが必要であると感じた。

目次へ

研究主題	読解力の育成をめざして		
副　　題	リーディングスキルをもとにした資料の読み取りを通して		
学 校 名	一宮市立中部中学校	校 長 氏 名	伊藤　基生

1　研究内容

（1）主題設定の理由

本校の生徒は、上位と下位の学力差が大きく、自分の考えを書くのが苦手な生徒が多い。また、多くの生徒が、初めて見る文章や図を理解したり、問題を解いたりすることを苦手としている。

これらを改善するためには、学習内容の理解を促すために、しっかりと教科書を読むことが大切である。また、教科書や資料の読み取りを通して、読み取る際のポイントなどを、下位の生徒が理解することができるようにする必要がある。さらに、それをもとに自分の考えをもち、アウトプットを繰り返す経験が必要であると考える。文部科学省は教育改革のコンセプトとしてPISA型読解力を位置付けているが、その中では読解のプロセスとして「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」をあげている。これは本校が取り組んできた研究と共通する部分が多く、一つ一つのプロセスを具体的に確認、実践していくことが、生徒たちの思考力を含む、読解力の向上につながると考えた。

そこで本研究では、まず予習を行わせることで、事前に学習内容にふれる機会を設ける。次に、これまで読む力を育成するために取り組んできた「読み方レスキュー（正進社）」の「７つの力」を、「リーディングスキル（読解する技能）」として位置づけ、それを授業の中で具体的に意識させ、自ら情報を取り出すことができるようにする（インプット）。そして、その内容について自分なりに解釈させ、それを書いたり、話し合ったりさせる（思考＋アウトプット）。さらに、周りの考えをふまえて自分の考えについて熟考させ、教師や生徒どうしで評価をする（価値づけ）。教師または生徒どうしが価値づけることで、アウトプットの内容がよかったのかが吟味でき、学習への理解が深まる。それだけでなく、お互いに認め合うことで自己肯定感が高まり、思考することに対する意欲も高まると考える。これらを通して、読解力を育成していきたいと考え、本研究主題を設定した。

（2）研究の仮説

学習内容の定着を図るとともに、リーディングスキルをもとに資料を読み取らせ、自分の考えのアウトプット、価値づけを繰り返し行っていけば、読解力が高まるであろう。

（3）研究の方法

①　予習の実施
②　読む力の育成をめざした取り組み
③　読解力の育成に関する講習会の開催
④　PISA型読解力を意識した授業実践

2　研究実践

（1）予習の実施

５教科を中心に予習を行った。各教科・単元や生徒の実態に合わせ、以下の①～④のように取り組ませた。

① 教科書を読み、疑問点や気になる点に線を引かせる。
② 重要語句の意味を調べさせる。
③ 学習内容に関する映像資料を視聴させる。
④ 学習課題に関する身近な事例を調べさせる。

予習に取り組ませたことで、事前に教科書のわからないところをはっきりとさせたり、学習への見通しをもたせたりしたことで、授業における学習内容を理解し、知識や技能の定着につなげることができた。

（2）読む力の育成をめざした取り組み

「読み方レスキュー（正進社）」に週１回、朝の時間に取り組んでいる【資料１】。表裏合わせて約７分程度で解ける問題量で、実生活で見かける文章や数学・理科・社会の教科の設問文、生活上の豆知識など、進んで読んでみたくなるような題材になっている。スモールステップ形式で進めていくので、無理なく読む力を鍛えることができる。回数を重ねるにつれ、難易度が上がっていく構成になっている。生徒からは、「いろいろな問題があり、無理なくことができた」「写真やグラフを読み取る問題は、実戦練習にもなった」などの声が聞かれた。



【資料１】「読み方レスキュー」に取り組む様子

（3）読解力の育成に関する講習会の開催

１学期に応用教育研究所の方を講師としてお招きし、「リーディングスキル講習会」を開催した【資料２】。「リーディングテスト」での生徒の読み取る力の把握や、標準学力検査との相関関係などを、昨年度までの結果と比較しながら、現状の分析を行った。

また、愛知教育大学名誉教授の先生を定期的にお招きして、読解力の育成に関する研修会を行った。オンライン講習会では、各教科の学習指導案をもとに指導・助言をいただき、効果的な指導法について理解を深めることができた。



【資料２】リーディングスキル講習会の様子

（4）PISA 型読解力を意識した授業実践

１時間の授業において、PISA 型読解力の「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」の各過程を明確に位置づけて授業実践を行った。

① 国語科の授業実践（３年生「報道文を比較して読もう」）

２つの新聞記事を読み比べて、それぞれの内容や意図を捉えることをめざした。

＜情報の取り出し＞

見出しや写真から受けた印象や、リード文の主な内容をまとめさせた。

＜解釈＞

見出しや写真、リード文から受けた印象を表に自分の言葉でまとめさせ、グループや学級で考えを伝え合わせた【資料３】。



【資料３】学級全体で考えを伝え合う様子

＜熟考・評価＞

出された意見に対して、他の生徒に問い返したり、その意見に対して感じたことを表現し合わせたりした。

② 社会科の授業実践（３年生「現代社会の特色と私たち」）

少子高齢化が日本の社会にあたえる影響について、資料をもとに自分の考えをもつことをめざした。

＜情報の取り出し＞

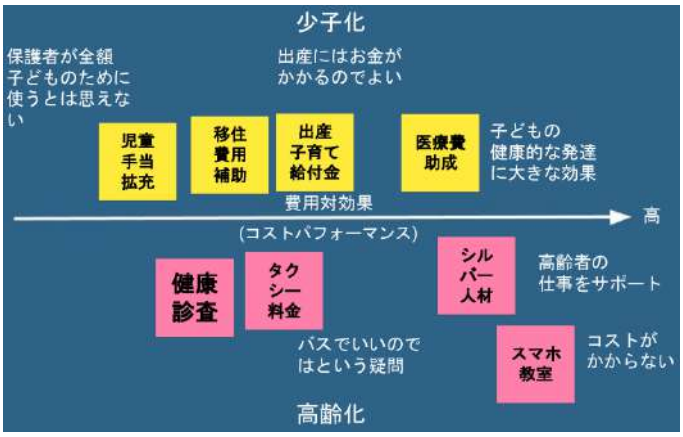
教科書の文章や資料から、少子高齢社会の課題を読み取らせた。

＜解釈＞

一宮市の少子高齢化に関する政策について、思考ツールを使って自分の考えを表現させた【資料４】。

＜熟考・評価＞

思考ツールを使って表した自分の考えを発表させ、それに対して考えたことや疑問に感じたことを伝え合わせた。



【資料４】一宮市の政策について自分の考えをまとめた思考ツール

③ 数学科の授業実践（３年生「平方根」）

√をふくむ式の値を求めるために、√の中を簡単な数にしたり、分母を有理化したりしてから代入し、計算することができるようになることをめざした。

＜情報の取り出し＞

教科書の例題について、計算の過程で何が行われているのか、読み取らせた。

＜解釈＞

正しい計算過程を提示し、その過程で解釈したことを自分のことばでまとめさせ、その後、ペアで話し合わせた【資料５】。

＜熟考・評価＞



【資料５】解釈したことをペアで話し合う様子

ペアで話し合わせたことを全体で共有し、他の生徒に問い直すなどして、それぞれの意見に対して、より深く考えさせる場面を設定した。

④ 理科の授業実践（１年生「いろいろな物質」）

３種類の白い粉（砂糖、食塩、片栗粉）を区別する方法を考え、実験結果を予想することをめざした。

＜情報の取り出し＞

物質の性質を調べる方法について、図と文章を対応させながら、正しく理解させた。

＜解釈＞

生活経験や既習内容を生かして、３種類の粉の特徴を個人で考えさせた後、スプレッドシートに入力させ、班員と共有させた。

＜熟考・評価＞

それぞれが考えた実験方法と予想される結果を班で話し合い【資料６】、その後、学級全体で共有し、効率よく正確に判別できる方法かどうか評価した。



【資料６】実験方法と予想される結果について話し合う様子

⑤　英語科の授業実践（２年生「Let's Talk2　ていねいなお願い」）

「May I ～？」や「Could you ～？」を使って、ていねいに依頼したり、許可を求めたりできるようになることをめざした。

＜情報の取り出し＞

イラストにえがかれている場面や状況を整理させ、注釈の表現を参考にしながら対話させた。

＜解釈＞

さまざまな場面をえがいたイラストを提示し、基本表現を用いてそれぞれの場面に合った会話を考えさせ、対話文を完成させた。

＜熟考・評価＞

さまざまなシチュエーションを設定し、これまでに学習した表現を使ってペアで対話をさせ、正しく伝え合うことができたか評価させた【資料７】。



【資料７】既習内容を使ってペアで対話をしている様子

３　研究の成果と課題

生徒アンケートでは、「授業は、よく分かりますか」という問いに対して、「よく分かる」「だいたい分かる」と答えた生徒は、75%以上であった。一方で「分からないことが多い」「ほとんど分からない」と答えた生徒は、５%以下であった。

入学時からのリーディングテストの得点の変容を分析した。読字力、語彙力、文法力、読解力とすべての項目で得点率が上がった。特に、どの項目においても、低位の生徒に得点率の伸びが多く見られた。読解力の項目について、入学時と令和６年度での全国比は、２年生が 117→123、３年生が 112→118 と、全国の同年代の生徒と比べても力を伸ばしていることが分かった（100 が全国平均）。授業でリーディングスキルを活用する活動の設定や、「読み方レスキュー」を週に１回継続的に行ってきた成果であると考える。また、標準学力検査では、２、３年生ともに、特に数学と理科の成果が大きく、特に低位の生徒に得点の伸びが多く見られた。

授業での生徒の変容は、リーディングスキルを用いて文章や資料の読み取る時間をきちんと確保することで、自分の考えの質が高まった。さらに、自分の考えをアウトプットし、教師や生徒どうし価値づけする場面を設定したことで、自分の考えを見つめ直し、よりよく自分の考えを表現しようとする生徒が多く見られるようになった。

全国学力・学習状況調査では、「思考・判断・表現」の問題において、全国と比較して正答率が高い問題が多かった。これは、自分の考えをアウトプットする授業を繰り返し行った成果であると考える。しかしながら、「記述式」の問題に無回答の生徒が一定数みられるなどすべての問題にあてはまるわけではなく、今後も取り組みを継続して、検証をしていく必要がある。

課題として、「深い学び」を実現するために、身につけた読解力を活用し、生徒自らが課題を見つけ、その解決に取り組ませる学習活動を設定していく必要があると考える。来年度、研究を進める際には改善していきたい。

目次へ

研究主題	個性を認め合える人間関係づくりができる生徒の育成		
副　　題	合唱コンクールを通した人間関係づくりの取り組み		
学 校 名	一宮市立萩原中学校	校 長 氏 名	細田　和樹

1　研究概要

（1）主題設定の理由

本校の教育目標は、「校訓（礼儀・感謝・責任）の精神を、学校教育の全面に生かし、知・徳・体の調和のとれた心豊かでたくましく『生きる力』をもった生徒を育成する」ことである。体育祭・合唱コンクールは、教育目標を実現するための３つの重点努力目標のうち、「人間関係力向上」をねらって、学校・学年・学級それぞれが一つになって取り組む行事として位置付けられている。

中学校学習指導要領解説・特別活動２．（２）では、**体育的行事で育ったよりよい人間関係を次の合唱祭の取り組みの基盤とし、更なる人間関係の深まりをねらい、個と集団の関わりに関する考え方**を培っていくことを目指すとしている。本校の合唱コンクールにおいても、体育祭で培った学級の団結力を生かし、さらに仲間同士が深いかかわりをもって取り組む行事として取り組んでいる。

これまでの本校の合唱練習は、合唱曲のイメージの共有を図りつつ、合唱コンクール本番に向けて、音楽科教員の協力のもとで練習を積み重ねていったが、主に合唱技術の面を重視したものになっていた。しかし、上記学習指導要領の内容や、「全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して、表現したいイメージを伝え合ったり、協同する喜びを感じたりする指導を重視する（中学校学習指導要領解説・音楽科２．（ⅱ）（オ））」とした音楽科における合唱の位置付けをふまえ、本校として、合唱のこういった目的を達成するための「手立て」を講じる必要があった。

本校の生徒は、合唱コンクールを大変楽しみにしている生徒が多い。本番に向けた練習に一生懸命取り組む姿が見られる。一方で、合唱が苦手な生徒も少なからずおり、学級全員がひとつになって、自分の学級の合唱をつくり上げることがうまくいかない場面があった。こういった場面を克服するためにも、また、合唱を通して学級が一つになっていくためにも、生徒一人一人が、合唱に取り組むための主体性をもち、仲間との深いかかわりをもつことができるよう「手立て」を講じる必要があると考えた。

本研究では、その「手立て」として、専門的に合唱にかかわる方（以下、プロの方と呼ぶ）に、生徒一人一人が合唱から得られる喜びや、仲間との心のつながりの深まりを実感できる指導をしていただくことにした。あらかじめ、プロの方には「学級として合唱で大切にしてほしいこと」、「合唱から得られるもの」、「うまくいった経験・うまくいかなかった経験」などについて、各学級で伝えてもらうように依頼した。また、本研究の目的に沿って、練習の方法や留意するところなどのポイントも指導していただくことにした。

（２）研究の仮説

合唱コンクールに向けた練習の取り組みの中で、生徒相互が合唱を通して心のつながりを深めれば、生徒一人一人が主体性をもって、人間関係づくりができる力を身に付けることができるであろう。

（３）研究の方法

①プロの方が各学級の合唱練習にかかわり、合唱についてのアドバイスをする。
②プロの方の講演会を実施し、生徒に「本物の」合唱に触れさせる。
③各学級で①②の活動を生かして練習に取り組む。

２　研究実践

①プロの方からの指導とアドバイス

体育祭を終えた１０月半ばから合唱コンクールに向けた本格的な練習が始まった。それまでは音楽の授業内にて、練習を積み重ねてきたが、この時期からは学級でも生徒が主体となって練習に励んでいくことになる。練習方法や気を付けるポイントなどは、音楽科教員から受けており、それを練習の中で身に付けていく・深めていくことになる。これまで生徒や担任から、「自分たちでどのように練習したらよいか」、「自主的に練習する生徒とそうではない生徒がいて、担任としてどう対応したらよいだろうか」といった声があった。

そこで、プロの方には、練習が本格的に始まったこの時期に学級に入ってもらうことにした。練習方法や気を付けるポイントも指導していただいたが、主に「合唱で大切にしてほしいこと」や「合唱から得られるもの」についてのアドバイスをしていただいた。







②プロの方による講演会・コンサート

各学級でのプロの方による指導を受けると同時に、全校生徒に向けて、プロの方に実際に合唱や講演をしていただいた。

前半はプロの方の合唱を聴かせていただき、生徒は、「本物に触れる」ことがで

きた。生徒自身が合唱のすばらしさや楽しさを実感できる機会であったと考えられる。

後半は、プロの方から『合唱とは？』という講演をしていただいた。合唱を通して、合唱をしている人の心が一つになると、聴いている人にとって一体感を感じ、合唱のすばらしさを伝えることができることを話していただいた。その後、生徒が合唱コンクールの練習の中で困っていることや悩んでいることに答える時間を持った。練習の進め方や、練習に取り組むときのポイント、プロの方が合唱する時に気を付けていることなど、生徒が知りたいことに答えてくださった。時間の都合上、代表生徒による質問ではあったが、全校生徒にとっても、その後の練習に生かすことができる話をしていただけた。



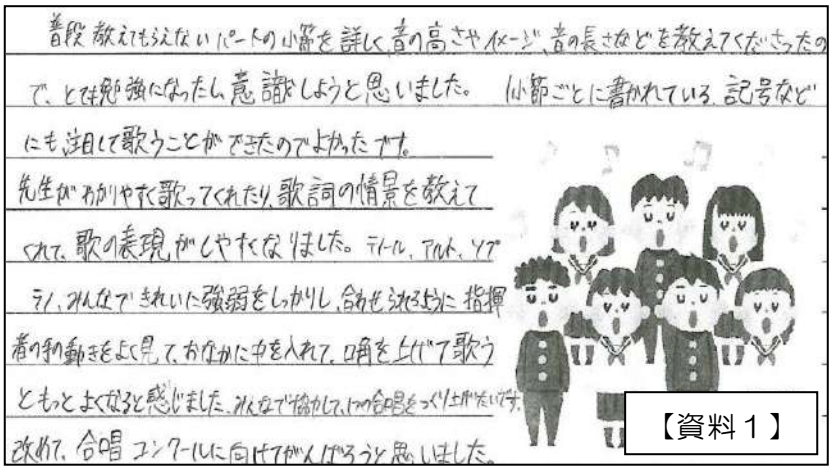




③指導を受けた後の感想とその後の練習

指導後の生徒の感想から、『学級で一つの合唱曲をつくり上げた時の達成感や感動を体験させたい』という本研究のねらいの達成度を確認することができた。

【資料１】は、ある生徒の感想である。細やかなところまで合唱曲や合唱の仕方についての指導をしていただいた感謝とともに、「みんなで協力して合唱をつくり上げたいです。改めて、合唱コンクールに向けてがんばろうと思いました」と、学級の仲間と一つになって合唱に取り組む意識を高められたと考えられる。


普段 教えてもらえないパートの小節を詳しく音の高さやイメージ、音の長さなどを教えてくださったので、とても勉強になったし、意識しようと思いました。小節ごとに書かれている記号などにも注目して歌うことができたのでよかったです。
先生がわかりやすく歌ってくれたり、歌詞の情景を教えてくれて、歌の表現がしやすくなりました。ソプラノ、アルト、ソプラノ、みんなできれいに強弱をしっかりし、合わせられるように指揮者の手の動きをよく見て、おなかに力を入れて、口角を上げて歌うともっとよくなると感じました。みんなで協力して、1つの合唱をつくり上げたいです。改めて、合唱コンクールに向けてがんばろうと思いました。

【資料１】

【資料２】は、伴奏者の立場で、感想を書いた生徒の感想である。伴奏を通して、学級の仲間の声を引き出して、支える立場にある。その立場の生徒も、「今いるこのメンバーで合唱できるのはもう二度とないという話を聞いて、合唱コンクールをいい思い出にできるようにしたいです」という感想をもった上で、「指揮者と合わせたり、歌うみんなと合わせたりして、協力していけるといいなと思いました」とも書いている。


合唱の中でどこをどう歌えばいいのかを教えてもらい、
「今居るこのメンバーで合唱できるのはもう２度と無い。」という
話を聞いて、合唱コンクールをいい思い出
にできるようにしたいです。
ぱんそう者をやる上で自分の練習も大切
だけど しき者とあわせたり歌うみんなと
あわせて協力していけるといいなと
思いました。ありがとうございました。
【資料２】

【資料１】【資料２】を通して、合唱する生徒も伴奏の生徒も、今回の指導を通して、学級が一つになって合唱に取り組む意識をもつことができたことが分かった。その上で、指導していただいたポイントを練習の中で声をかけ合うなどしながら、日々の合唱練習に一生懸命取り組むことができた。

３　研究の成果と課題

①研究の成果

プロの方からの指導がなかった昨年度と比較すると、合唱コンクール本番のハーモニーが美しかった、という参観者の声が多かった。単なる合唱の技術指導（発声の仕方・合唱曲の音程や抑揚など）以上に、合唱に取り組む「本来」の目的である「仲間と一つになる」ことを大切にした練習を積み重ねてきた成果であると考えられる。また、生徒自身からも、合唱コンクールを終えた時の充実感が伝わってきていたため、合唱に取り組んだことにより、仲間との心のつながりをもつことができたと考えられる。

②研究の課題

本研究で学んだことを、合唱コンクールのみでなく、様々な行事に生かしていくことが大切であると考えている。

学校行事は、学習指導要領で、全校又は学年の生徒で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深めることが目的とされている。プロの方にかかわっていただいた第一の目的は、学校行事の目的を実現させることにある。それが本校の重点努力目標の「人間関係力の向上」の具現化につながった。

今回、研究の機会をいただき、合唱コンクールについて、「本来」の目的を達成するための「手立て」を実践することができた。今後も生徒にとって、「仲間と一つになって取り組む」「仲間との心のつながりをつくる」教育活動を、職員間で共通理解を図りながら取り組んでいきたい。

目次へ

研究主題	「主体的で対話的な深い学び」を実現するための授業改善		
副　　題	主体的な学びにつながるグループ活動の工夫		
学 校 名	一宮市立木曽川中学校	校 長 氏 名	宇佐美　徹

1　はじめに

音楽科の教育課程の中に、和楽器の演奏がある。そこで、1年生の音楽科では、地域の箏奏者の方を講師としてお招きし、以下のように箏体験学習を実施した。

7月2日（火）3・4時間目：１－１　5・6時間目：１－４
3日（水）1・2時間目：１－２　3・4時間目：１－９　5・6時間目：１－５
4日（木）1・2時間目：１－８　3・4時間目：１－６
5日（金）1・2時間目：１－３　3・4時間目：１－７
※全学級（9クラス）　武道場にて実施。
※曲目は、「さくらさくら」「茶摘み」「よろこびのうた」他

毎年、このように箏体験学習を実施しており、地域の方との貴重なふれあいの場にもなっている。





2　研究主題にかかわって

①主題設定の理由

昨年度から「木曽川中授業６か条（教師向け）」「学習ルール５か条（生徒向け）」に重点を置き、基礎的基本的な学力を身につけさせるとともに、対話を通して学びが深まる授業づくりを実践している。また、これらの主体的な学習、対話を取り入れた学習などを通して教師と生徒及び生徒同士の人間関係力が高まる授業を目指している。人間関係力を高める手だてとしては、ペア活動やグループ活動を積極的に取り入れている。一方、昨年度の実践の反省として、ペア活動やグループ活動に重点を置くばかりで、自己の考えをもち、修正する時間を設けていないことが課題として見られた。そこで今年度は主題に「主体的・対話的で深い学び」を引き続き設定し、副題として、より主体的な学びにつながるようにグループ活動・ペア活動を工夫することを取り上げた。具体的には、授業の中で個々が追究する課題を明確に提示し、対話的な活動を取り入れながら、グループ活動の前に個人で考えさせた上で共有する時間を設けたり、共有後に自己の考えを修正したりする時間を設けるようにする。そのようなグループ活動の工夫を行うことで、他者と関わり合い、自己の考えをもったり修正し

たりしながら協働的に授業づくりができると考える。

②本時における研究主題にせまる手立て

箏に初めて触れる生徒ばかりなので、基本的には講師の指示にしたがって、箏の基本的な演奏方法を教えていただく形の授業であったが、その中でも生徒同士で学び合う場面を設定した。具体的にはグループで演奏を聴き合ったり、感想を言い合ったり、交互に演奏し合ったりすることである。このようにすることで、箏に触れることが初めてにもかかわらず、主体的に楽しく授業に臨むことができた。驚いたことに、2時間程度の授業時間にもかかわらず、講師の演奏に合わせて「さくらさくら」をクラス全体で演奏できるようになった。これも、講師の方の指導はもちろんのこと、グループ活動を取り入れた成果でもあると考える。

3　成果と課題

成果としては、やはりグループ学習など生徒同士で学び合う場面があった方が、主体的な学びにつながったことである。今回は音楽科の授業であるが、他の教科においても活発なグループ学習などを設定していきたい。

課題としては、グループ学習を教師が生かしきれないことである。生徒同士が対話をすればよいというわけではなく、対話の中から出た意見や考えを、どのように全体に広めて、理解を深めていくか、またそれをどう活用するか、すなわち深い学びの創造が実現できるように考えて授業を実施しなくてはならない。

4　終わりに

主体的に学ぶという意味では、「本物」を使うことも大切であることがわかった。現在はデジタル化が進化しており、電子黒板などで箏演奏の動画を生徒に見せるという方法もあるが、やはり、「本物」を目にすることで、生徒は緊張しながらも真剣に授業に臨み、2時間集中して取り組むことができた。生徒の自主性や集中力を引き出すためには、「本物」を扱うことも有効な手段であると考える。

また、今回の箏学習の大きな成果としては、「できなかったこと」が「できるようになった」ときの喜びを味わえたことである。この喜びの積み重ねが意欲の向上につながると思うので、今後の学校生活でもさまざまな場面で生徒が“できた喜び”を味わえるように教育活動を仕組んでいきたい。





目次へ

研究主題	心と体を整え、人とかかわり人とつながる子の育成		
副　　題	豊かな心づくり、健やかな体づくりを柱として		
学 校 名	瀬戸市立幡山中学校	校 長 氏 名	梶田　明敬

1　はじめに

近年の高齢化、情報化、国際化などの社会環境の変化に伴い、子どもたちを取り巻く生活環境はめまぐるしく変化し、予測困難な時代となっている。インターネットの普及により、生活習慣の乱れや視力低下、運動不足などの体の健康面だけでなく、人間関係の希薄化、ストレス増加などの心の健康問題も懸念された。そのような中、令和２年２月末から５月末までコロナ禍により全国一斉休校となり、生活様式の変化に加え、ＳＮＳの利用が増加し、生活習慣の乱れやコミュニケーション不足など、さまざまな健康問題に拍車をかけた。

本校においても、平成 30 年度より、年間 30 日以上欠席した不登校生徒の出現率は年々増加している。ゲームやＳＮＳなどに夢中になりスクリーンタイムが増加し、就寝時刻が遅く、ネットの世界に入り込んで睡眠が十分とれない生徒がいたり、自分の考えや主張を友達にどう伝えたらよいのかわからず、人を傷つける言葉を発したり、人とかかわることを避けたりする生徒がいたりするなど、心身の健康課題が浮かび上がってきた。

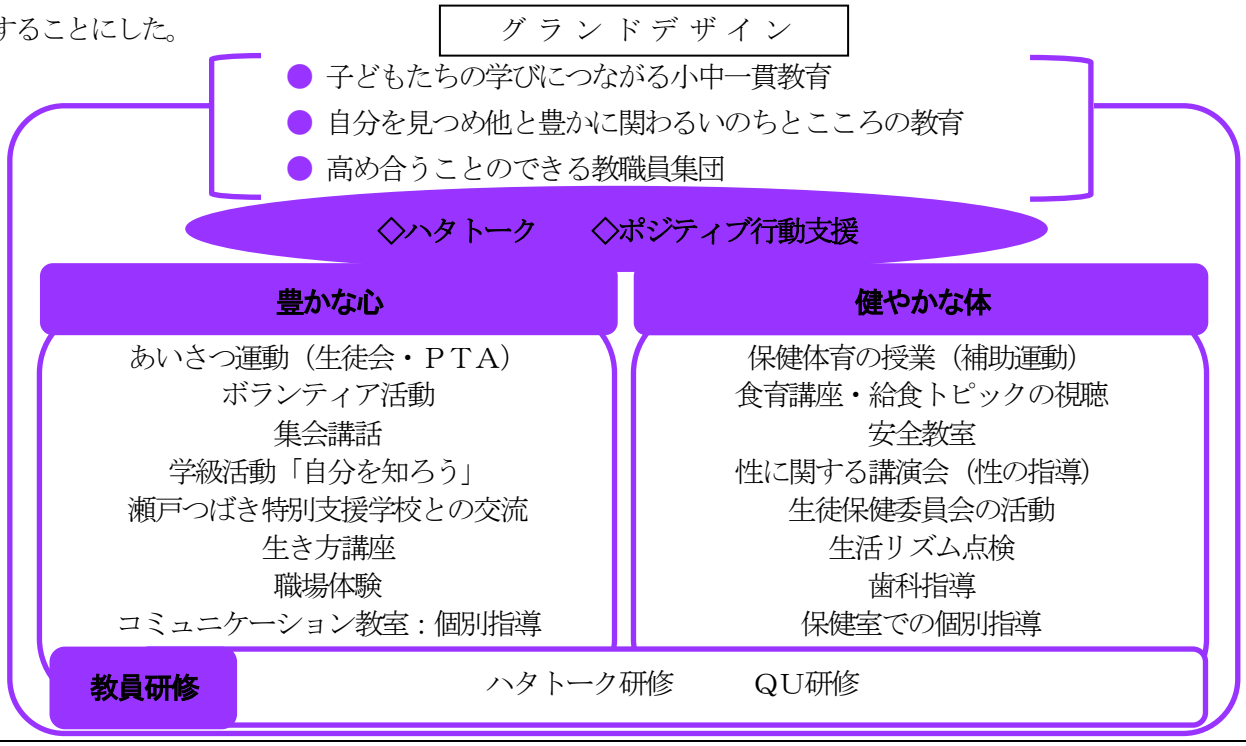
2　研究のねらいと計画

心身ともに健康だと、自分らしさを発揮し、思う存分に心や身体を動かし、自己実現を目指して充実した毎日を送ることができる。そこで、学校というコミュニティを生かし、目指す子ども像を「心と体を整え、人とかかわり人とつながる子」と掲げ、

◇　豊かな心づくり　　自己有用感を育み、人と関わる力を高める。また、直面する問題や危機にしなやかに対応する心を育てる。

◇　健やかな体づくり　望ましい生活習慣（睡眠、栄養、運動）を身につける。

の２つを柱とし、この柱を強化するために「かかわりの力を育成するプログラム」に重点を置いた健康教育を推進することにした。



幡山中生の健康課題

- 学校に足が向かない生徒が多い。
- 朝ご飯の摂食状況や長時間のスクリーンタイム、肥満傾向の出現などから、早寝・早起き・朝ご飯・運動などの望ましい生活習慣が身についていない。
- 自分の考えを友達にどう伝えたらよいのかを悩み、人とかかわったり気持ちを伝えたりすることを苦手とする生徒が多い。



3　活動の実践状況

A　かかわる力育成プログラム「ハタトーク」の取組

かかわりプログラムSlimple代表の曽山和彦氏が開発した「Slimpleプログラム」を令和元年度から「ハタトーク」と名付け実践している。実践にあたり毎年、曽山氏を講師に招き、教職員が一貫したプログラムの実践について指導助言を受けている。

ねらいは、ⅰ）よりよい人間関係をつくる技術やコツを身につける、ⅱ）自尊感情・自己肯定感を高めることとし、年間を通して週１回、火曜日給食後の 10 分間で取り組んでいる。また、ソーシャルスキルトレーニング（以下ＳＳＴ）と構成的グループエンカウンター（以下ＳＧＥ）を統合した活動である。ＳＳＴの部分で大事にしている約束事は、①あいさつ（「お願いします」「ありがとうございました」）、②うなずき（話す人の目を見て、心でうなずく）、③見渡して話す（聞いている人一人一人に向けて話す）、④指示を聴く（先生の指示をよく聴き、ルールを守る）の４つである。ＳＧＥの部分で大事にしていることは、活動を通して自他の表情や心の変化の気づきなどの感じたことを振り返ることである。内容は、「アドジャン」、「質問じゃんけん」、「二者択一」、「1 分間スピーチ」で、各学期末は「いいとこ四面鏡」の演習を行う。自分の意見を伝えて相手の話を聴く、人とかかわる力の向上をめざしている。実践を通して、子どもたちは「あいさつやうなずきなどのコミュニケーション力がついた」「あまりしゃべらない級友とも話す機会になり、よい体験になっている」など、人とかかわる力がついてきたことを実感している。そして、身につけた、①あいさつ、②うなずき、③見渡して話す、④指示を聴くを生かし、授業や集会等における話し合い活動の場面で、「ハタトークのように隣の子とどうぞ」の教師の言葉かけで、スムーズに話し合いが行われるようになってきた。意見交流に抵抗感がなく、活発に行うことができ、対話を重視した生徒同士の学び合いの学習スタイルにも役立っている。

また、瀬戸市では中学校ブロックごとの小中一貫教育が進められており、幡山ブロックではこのプログラムに小中連携で取り組んでいる。昨年度は、教員の合同研修会を２回実施した。教員のみならず、ＰＴＡ連絡会で保護者に紹介して実践し、新１年の中学校見学会では小６と中３が一緒に「アドジャン」に取り組んで交流した。他にも、中学教員が小学校に乗り入れて「アドジャン」「二者択一」を行う、かかわりつながり実践を投じている。

B　「豊かな心づくり」の取組

①あいさつ運動：生徒会主催のあいさつ運動を 12 月に行った。執行部・議員だけでなく、全校生徒にボランティアを募集した。応募した生徒らは執行部が考えたねらいを理解してあいさつ運動を実践した。また、ＰＴＡ主催は年間５回あり、あいさつの声が校舎に響き、明るく、活気あふれる雰囲気を感じることができた。

②ボランティア活動「通学路清掃」「ごみキャラバン地域清掃活動」：ＰＴＡ主催の 11 月あいさつ運動では、登校時の通学路清掃も行った。地域に貢献することで、郷土を大切にする心を養うことを目的としている。また、12 月には、地域と共にある学校～コミュニティ・スクールの一環として、山口地区の地域ボランティア活動に本校生徒が参加した。保護者や地域の人たちと共に、生徒たちが地域をきれいにしようと一生懸命取り組む姿は、地域に貢献できる喜びを味わうと共に互いに支え合う気持ちを育てることができた。

③集会講話：隔週に行う全校集会では、校長講話だけでなく、生徒指導主事、ＳＣ担当、進路指導主事、図書担当、清掃担当、保健主事など、各分掌担当の教員が輪番制で講話を行った。生徒に数多くの知識や価値観を伝え、生徒の社会性を高めている。

④学級活動「自分を知ろう」（１年生）：自分自身を客観的に見ることを通して、コミュニケーションの仕方を考えることをねらいとして、養護教諭・ＳＣ・学級担任が連携した授業を 10 月に実践した。エゴグラムの結果を周りの友だちと楽しそうに見せ合い、話し合う姿が見られた。また、振り返りでは、自分を知ることができたと答えた生徒が 98％で、多くの生徒が思っていた通りだったと自己を認識できたり、意外な一面が客観視できたりと自己理解を深めることができた。





⑤総合的な学習の時間「瀬戸つばき特別支援学校中学部との交流」（１年生）：６月につばきへ行き、１月につばき中学部１～３年生の生徒を本校に迎えて交流活動を行った。ねらいをⅰ）交流相手について知り、期待感をもって取り組む、ⅱ）交流校の友達とのやりとりを通して、経験を広げる、ⅲ）交流校の友達と一緒に遊んだり協力して活動したりすることで、互いに理解を深めることとした。「風船運び&ボウリング」「手作りボッチャ」「風船リレー&おおかみさん今何時」など、仲良く協力しながらレクリエーションを楽しみ、お互いに笑い合う姿、助け合う姿、考える姿が見られ、かかわり合う理解を深めることができた。

⑥総合的な学習の時間「生き方講座」（２年生）：キャリア教育の一環として「生き方講座」を実施した。令和５年度は、長年、国際支援、国際開発に携わってこられた、Forum2050（元 JICA 上級審議役）の戸田隆夫氏を迎え、「未来を創るのは誰？」～分けても分けても、使っても使っても、減らないものって何？～をテーマに、対話形式の講座を行った。生徒たちは、日ごろ考えたこともない世界情勢について正面から向き合い、今の自分、そして未来の自分は、世の中のために何ができるのかを考え、言葉で表現し、自分らしい生き方を考えることができた。

⑦コミュニケーション教室：月１回授業後、養護教諭とＳＣが連携して小集団指導に取り組んでいる。担任からコミュニケーションを苦手とする生徒に参加を促してもらい、保護者に教室の趣旨や内容を説明し、参加の承諾を得ている。自分のことを知ってもらい、自分の気持ちを受け入れてもらうために必要なことであるという体験をさせて、自信をもって学校生活を送ることができるよう工夫している。事後には、参加した生徒の様子や今後の課題を養護教諭とＳＣが打ち合わせて、内容を養護教諭から担任に報告し、学級での様子を観察してもらうよう依頼した。そして、授業中のレポート発表場面で大きな声で堂々と発表できるようになったり、自己表現することに自信をつけている姿が見られたりするなど、スキルを高めることができた。



Ｃ　「健やかな体づくり」の取組

①保健体育の授業：（ア　補助運動の導入）けが防止のために準備体操を通常行う。しかし、単元によっては不十分なときがある。通常から運動を行っていない生徒には、基礎的な動きを多く取り入れることでけがの防止となると思われる。そこで、準備体操後に補助運動を行うこととした。基礎的な運動をする機会を増やすため、サーキットトレーニングや縄跳びや５分間走などを行った。器械運動では関節の可動域を広げるため動物歩きを取り入れた。保健室来室状況のけがの状況を令和４年度と比較したところ、体育授業時の発生状況が７％下がり、足首の捻挫が減った。（イ　ＩＣＴ機器の活用）タブレットを活用し、意欲的に運動に取り組み、楽しさや技能の高まりを実感できるようにした。体の動きや技の出来栄えを友達と撮影し合い、動画を見て、動きを客観的に振り返り、技の習得を目指す姿が見られた。

②食育講座：１年生と特別支援学級では、年間７回の食育講座を実施した。市の栄養教諭を迎え、食に関する興味関心を高め、心身の健康を保持増進する望ましい栄養や食事のとり方など、給食後に 10 分程の食育指導を行った。栄養教諭が指導に入らない学級は、担任が事前に指導案とアドバイスを受け、食育指導に取り組んだ。「朝ごはん」講座では、食べることのメリットを考え、「脳の働きがよくなり、運動能力があがる」や「健康につながる」など、いろいろな意見を出した。食べた時の体温変化を学び、定番メニューを紹介してもらった。また「成長期に必要なカルシウム」講座では、中学生期に必要な１日の摂取量や給食で摂取できる量を質問形式で学んだ。体づくりのために栄養バランスを意識して給食を食べる生徒の姿が見られるなど、望ましい食習慣が形成されている。

③安全教室の開催：（ア　スマホ・ネット安全教室）法務局とＮＴＴドコモに依頼をして「スマホ・ネット安全教室」を年度当初の４月に実施した。ＳＮＳの発信編、使いすぎ編の二部構成で、情報技術の上手な活用とリスクを考えることができた。（イ　薬物乱用防止教室（３年生））瀬戸警察の方を迎えて６月に実施した。薬物乱用の恐ろしさについて学び、心の健康の大切さを考えることができた。（ウ　不審者対応緊急態勢訓練）瀬戸警察の方を迎えて、犯人役を演じてもらい、不審者が侵入した際の訓練を９月に実施した。教職員が適切かつ迅速に対応できるというねらいだけでなく、訓練を終えた後に子どもたちは署員の方から街中で不審者に遭遇した時の対応について学び、自分の命は自分で守ることを考えることができた。

④性に関する講演会（３年生）：講師に（財）愛知県助産師会所属の助産師を迎え、「一緒に考えよう！性のこと」というテーマで性教育講座を１月に実施した。性に関する○×クイズや動画を視聴した後、助産師からメッセージをもらった。男女が互いの人権を尊重し、性の自己決定について考えることができた。

⑤保健委員と体育委員と生徒会執行部とのコラボ企画：「免疫力アップキャンペーン」を年度末の３月に実施した。手洗いや外遊びを通して、体の免疫力を高めて本校を元気にすることをねらいとした。保健委員は手洗いを呼びかけ、体育委員は昼放課の外遊びを呼びかけるとともに、大縄跳びを企画した。キャンペーンへの参加度をクラス対抗戦とし、執行部から手洗い部門と外遊び部門それぞれにポイントが高い学級を表彰した。昼放課に 150 名程の子どもたちが外遊びを楽しんだ。委員の生徒は、学級対抗戦にしたために参加できたかを確認したことで、初日より昼放課に手を洗う人が増えたり、昼放課に外に出て遊んでいたりしていたことが分かり、自分たちの企画がみんなを動かしたという達成感を味わい、委員自身の自己有用感を高めることもできた。

⑥生活リズム点検：１年生に９月・１月の１週間、生活リズムを整える週間とし、「健康力&記憶力アップカード」に取り組ませた。２学期始業式後の学級活動で、養護教諭より、睡眠の役割・質のよい睡眠のとり方について保健教育を行った。カード点検項目は、メディア使用・就寝時刻・睡眠時間・起床時刻・出発１時間前の起床・朝ご飯・排便・朝の歯みがきの８項目である。記入は点数化して意欲をもたせた。振り返りは個々の生活に合わせて助言を記入して返却した。また、冬休み中もカードに取り組み、規則正しい生活を送る意識をもたせた。１日のメディア使用時間の多さや睡眠時間の短さなど、個々の健康課題に気づくことができ、「寝る前にスマホを触らないようにしたい」「寝る時刻を早めて７時間睡眠を確保したい」など健康目標を掲げる姿が見られた。

⑦歯科指導（特別支援学級）：学校歯科医の先生を迎え「歯科健口教室」を７月に実施した。歯肉炎について学び、歯みがきの予防方法を確認した。養護教諭が「ブラッシング指導」を３月に実施した。給食後に歯みがきをし、染め出しでみがき残しを確認した。歯ブラシの角度を変えて汚れを落とし、１本１本丁寧にみがくことを体験した。

４　成果と課題

心と体の健康教育活動に取り組む中で、自分に対して肯定的な評価を抱く生徒が増え「よくうなずいて反応する子と話をするときはすごく嬉しい」「うなずきながら聴くことで相手に勇気を与え、安心して気持ちよく話す聴き上手になりたい」「今後の人間関係につながる貴重な時間になっている」などの感想が見られた。ここから人とかかわる力を身につけたいと思う生徒が多く存在していることが分かった。あいさつでは、生徒同士や学校というコミュニティの場では、意識して実践することができている。「相手の気持ちを和やかにすると同時に、自分自身の気持ちも和やかにする」「心を整えることができる」「人とのかかわり方を学ぶ機会になる」という記述から、継続とともに、家庭・地域の方へのあいさつも考えられるような指導を考察していきたい。また、適度に体を動かすことはストレスマネジメント効果にもつながった。一緒に運動をする人とのふれあいを楽しんだり、日常生活の中で体を動かす楽しさを見つけたりと、適度に体を動かすことを取り入れた指導を考え、さらには、体を整える取り組みを継続し、生徒たちに日常生活がどうあると望ましいかを考えさせていきたい。

心配な生徒はなかなか減らないものの、生徒たちは人と楽しくかかわることで、自分のよさや自信を大切にしている様子がうかがえる。学校保健委員会では、学校医・学校歯科医・学校薬剤師・地域学校共同活動推進員・担当教職員等で意見交換を行った。今後も心と体を整えて人とかかわりつながる生徒の育成に力を注いでいきたい。

・研究主題・副題は１４ポイントです。変えないようにしてください。
・副題がない場合は空欄にしてください。
・本文の体裁は４４字程度×４３行程度、１２ポイントとしてください。
・写真や図表の資料を別添することはできません。論文内に掲載してください。
・このテキストボックスは削除してください。

目次へ

研究主題	自分を信じて学び続ける生徒の育成		
副　題	今日も学校楽しかった！と思える居場所づくり		
学校名	半田市立半田中学校	校長氏名	小嶌　正嗣

１　主題設定の理由

本校の不登校発生率は、令和３年度 7.52%から令和５年度 6.04%と改善したものの、不登校者数は横ばいの状態が続いている。特に、小学校から不登校が続いている生徒は、引きこもり状態となっている。

また、本校では、１・２年生を対象に行っているＱＵテストにおいて、気になる生徒の実態把握に努めている。その結果、集団に対して不満足群にいる生徒は、「集団が怖い」「自分のことを周りはどう思っているのだろう」「失敗したくない」「困ったときに相談できる人がいない」「一人の方が気楽」といった思いがある。このことから、気になる生徒の特性として、コミュニケーションが苦手、相手の気持ちがわからない、耳からの情報が入りにくい等、集団における生活や学習に困り感を抱いていることがわかった。

以上のことから、生徒の自尊感情を育て、ありのままの自分を受容する気持ちを養っていく必要があると考え、共感を大切にした対話により、認め合い、高め合える集団を形成することで、自分を信じて学び続ける生徒の育成を目指す。

２　研究の構想

(1) 目指す生徒像

「半中最幸！ やった、よかった、しんどかったけど楽しかった」を感じることができる生徒

半田市では、令和５年度より「幸せ教育」が導入された。自分にとって、周りにとっての幸せとは何か、自分や周りが幸せになるためにはどうしたらよいかを、あらゆる教育活動の中で考える機会を設定している。

そこで、本校では、目指す生徒像を「『半中最幸！ やった、よかった、しんどかったけど楽しかった』を感じることができる生徒」とし、生徒の自尊感情を育てることで、学び続けると考えた。本校が目指す「やった」とは、何かを成し遂げた喜びや感動である。「よかった」とは、居心地のよさや安心感である。そして、「しんどかったけど楽しかった」とは、一瞬の喜びではなく、本当の喜びを味わうために、自ら困難に立ち向かい、それを仲間と一緒に乗り越えたときに味わえるものである。

(2) 研究の仮説

目指す生徒像に迫るため、以下の仮説を考えた。

①集団の中で自分らしく生きることができれば、生徒は集団を承認し、居心地のよさや安心さを感じることができるだろう。
②よりよい生き方を考えたり、人の役に立つ行動に取り組んだりすれば、生徒は、自分を信じて学び続けることができるだろう。

①の手だてとして、対話活動「ホワイトボード・ミーティング」、人権教育「レインボープロジェクト」、校内教育支援センター「Ｉルーム」に取り組む。②の手だてとして、キャリア教育「地元民間企業研修」、地域学習「地域ささえあい活動」に取り組む。

３　研究の実践

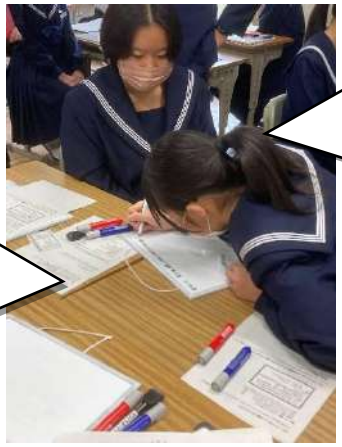
(1)　ホワイトボード・ミーティングの取組

ホワイトボード・ミーティングとは、進行役をファシリテーター、参加者をサイドワーカーと定めて、ホワイトボードに意見を可視化しながら進める会議手法である。また、ファシリテーターは、「質問の技カード」を用いながら、相手の話を、相手の立場に立って、相手の気持ちに共感しながら話し合いの進行を行うものである。

本校では、週２回、朝の読書タイムに、ホワイトボード・ミーティングを行っている。まず、隣同士のペアでコミュニケーションを行う。ペアは毎回変えるようにする。次に、片方がファシリテーターとなり、お題（例：最近、頑張っていること）に沿って「質問の技カード」を用いて、相手の話を聞きながらホワイトボードにメモをする。時間は、１人４分とし、３分インタビューを行い、残り１分でファシリテーターがホワイトボードに記入した内容を読み上げる。慣れてきたら、ファシリテーターは、最後に「良いこと１つ・困っていること１つ」を聞き、これからどうしたいか、どうなったらいいかを質問する。

１ うんうん
２ なるほど、なるほど
３ わかる、わかる
４ そうなんだあ
５ へえ
６ だよねえ
７ それで、それで
８ そっかあ

【あいづち】



１ ～というと？
２ どんな感じ？
３ 例えば？
４ もう少し詳しく教えて下さい。
５ 具体的にどんな感じ？
６ どんなイメージ？
７ エピソードを教えて下さい。
８ 何でもいいですよ。

【オープン・クエスチョン】

(2)　レインボープロジェクトの取組

人権教育の一環として、性の多様性を認め合えるようにするために、性の多様性についての理解を深める活動を、以下のように行う。

①教材（多様な性ってなんだろう）を視聴し、導入的な学習をする。（１年）
②道徳で、多様な性に関する教材を扱った授業を実践する。（全学年人権週間に近い時期に実施）
・１年：タンタンタンゴはパパふたり（Ｃ家族愛：３つの展開パターンを作成）
・２年：ふたりのももたろう（Ｃ相互理解）
・３年：サンタのおばさん（Ｂ相互理解　Ｄよりよく生きる喜び＊担任が任意で選択）
③ＬＧＢＴＱ当事者と出会い、思いを知り、理解を深める機会（講演会）を創出する。
④人権啓発活動として、生徒が学んだことを標語やイラストにして発信する。
⑤学年通信や保健だよりに取組を紹介し、自分らしく、ありのままであることを大切にしてほしいというメッセージを送る。

この取組により、性自認に少なからず違和感や悩みがあることを表出できる生徒が５人から３５人に増えた。この要因として、当事者＝理解者には自己開示できたことが考えられる。一番近くにいる大人（教員・保護者・地域）が、安心して自己開示できる理解者であることの必要性を強く感じる。

また、複数の当事者から話を聞くことで、ありのままであることの大切さについて考えを深め、あらゆる多様性を尊重しようとする心を育むことができた。教員や保護者など、生徒を取り巻く大人の理解をさらに深める必要がある。

自分には　自分にだけの　色がある
広がった　我が脳内の　多様性
性別は　他人が決める　ものじゃない
自分をかくさず　ありのまま　生きられる社会　創り出そう
認めあい　色とりどりの　笑顔咲く
認め合い　互いを受け入れ　一つの輪
固定観念　ゴミ箱へ　自分らしさを大切に
グラデーション　どんな性でも　個性だよ
男らしさ　女らしさではなく　今日から自分らしく
多様性に理解を求める呼びかけから　共存があたりまえとなる世界へ
多様性　理解できる世つくるため　まず変えるのは　自分の考え
性別は　レインボーだけじゃすまされない！人の数だけあるんじゃない？

【生徒が考えた標語】



【生徒が考えたイラスト】

(3)　校内教育支援センター（Ｉルーム）の取組

集団での生活や学習に困難さを抱え、学校に足が向かない生徒に対して、昨年度までは、校内フリースクール（登校支援室）を設けていたが、今年度より、不登校生徒の社会的自立に向けた支援を充実させるため、校内教育支援センター（Ｉルーム）を設置し、画一的な考えを押し付けず、多様性を受け入れて、生徒が自分のペースで自分に合った学習ができるようにする。

ア　校内教育支援センターの呼称

本校では、校内教育支援センターを「Ｉルーム（アイルーム）」とする。

（Ｉに込めた意味）

・私･･･「自分」を信じて学び続ける。自分の居場所が学校にある。
・identity（アイデンティティー）…「自分」の確立を目指す。
・ideal（アイディアル）…「自分」の理想を掲げる。
・infinity（インフィニティー）…「自分」の無限の可能性を信じる。

イ　基本的な考え方

・教室復帰ではなく、社会的自立を目指す。
・通常学級と同じく、一つの学級として扱う。
・いつでも温かく生徒を迎える体制を整える。
・画一的な考えを押し付けず、生徒の多様性を受け入れる。
・生徒を「育てる」から、生徒がともに「育つ」教室にする。

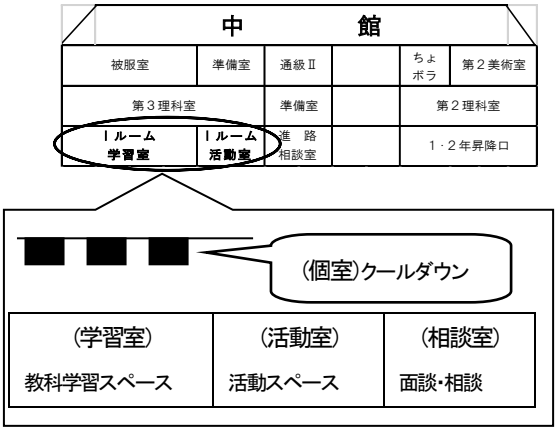
ウ　支援の方法

・教室復帰を促さない。

・入級と教室復帰は本人の意思で決める。
・必要に応じて、衝立等による個々の空間を確保する。
・登校時に、生徒が一日の生活や学習計画を立てる。
・学習支援ソフト「キュビナ」を活用した個別学習を行う。
・週１回、校内生徒支援連絡会を設け、Ｉルームにおける生徒の状況を共有し、教室復帰を希望する生徒がスムーズに復帰できるようにする。
・キャリア学習を推進し、自分の思いが実現できる体験活動を取り入れる。
・アイスブレイク、卓球、ボードゲーム、カードゲームなど、集団活動も取り入れる。

エ　入級までの流れ

①生徒・保護者からの相談
②Ｉルーム担任、支援員との面談
③入級申請書の提出
④お試し期間
⑤正式入級



オ　担任・担当

・指導力のある正規職員を担任として配置する。
・専属の支援員を配置する。

カ　成果・課題

・生徒と保護者との面談を通して、Ｉルームの入級を保護者に認められたことで、生徒が安心してＩルームで過ごせるようになった。
・これまで何もせず無計画に過ごしていた生徒が、自ら立案した計画に基づいてＩルーム内で過ごすようになった。
・ＰＴＡや地域の教育力を、Ｉルームの支援に活用できるようになった。
・通級指導教員やスクールカウンセラーと連携し、不登校に至った背景や集団における生活や学習の困難さを理解し、その解消に努めていきたい。

(4)　地元企業研修の取組

地元企業等との意見交換を通じて、何のために働くのか、自分らしい生き方とは何かを考えるとともに、地域の社会問題の解決に向けて、地域の大人と連携・協働して取り組むことで、半田市が好き、いつか半田市で働きたいという気持ちを養うことを目的に取り組んだ。

学習計画（１年：総合的な学習の時間）は、以下の通りである。

・第１次　第１時　　企業紹介シートを見て、地元の企業のことを知る。
　　第２時～第３時　追究したい企業を選択し、自分でも調べてみる。
・第２次　第４時～第５時　企業の取組や企業が抱える課題について話を聞く。(研修１)
　　第６時～第７時　企業が抱える課題に対して解決策を考え、まとめる。
　　第８時～第９時　企業側に解決策を発表し、意見交換する。(研修２)
・第３次　第10時　　成果物のよりよいまとめ方について学ぶ。
　　第11時～第12時　成果物を作成する。

研修１の前半は、企業の紹介として、社章の意味、社の理念や取組、商品開発、特色ある事業など、企業のよさについて説明していただいた。後半は、「今、こんな社会問題、企業が抱える問題がある。この問題を解決するために、企業としてもこんな努力をしているが、みんなだったらどう

考えるだろうか」と企業から生徒に課題を投げかけ、生徒なりに解決策を話し合った。

研修２では、生徒なりに解決策を考え、プレゼンにして発表した。企業側からは、生徒の発表一つ一つに対して、講評をいただいた。企業の中には、前回の授業で生徒の意見を実際に取り入れて、現地で生徒に体験させながらさらにその考えはよかったかを考えさせた企業もあった。また、生徒が作ったプレゼンの改善点を明確にして、再度、生徒がプレゼンに改善を加えて発表させた企業もあった。



【企業に提案する生徒】

海上保安庁	海洋汚染を減らすために海上保安庁ができることは？
マツイシ楽器店	ピアノをどう再利用するか？　幅広い世代に音楽を広げていくにはどうしたらよいか？
ミズノ	ミズノで働く人を増やすためにはどうしたらよいか？
黒牛の里	廃棄される食材をどう活用していくか？ 牛の糞尿の臭気問題をどう解消するか？
知多印刷	紙の価値をどう考えるか？　知多印刷が地域でできることは何か？
国際交流協会	外国籍の人にとって住みやすいまちにするためには何が必要か？
観光協会	各企業が継続して経営できるような支援の仕方はどのようにしたらよいか？
社会福祉協議会	どんな工夫があったら住みやすいだろうか？
生涯学習課	半田市で行うイベントを企画しよう！
半田信用金庫	円安の中で地域を活性させるためにどうしたらよいか？　特殊詐欺を防ぐ方法は？
Mizkan グループ	中高生のミツカンファンを増やすためにはどうしたらよいか？
八洲建設	人口が減らない魅力あるまちとは？　建築業が魅力的な仕事になるには？
LIXIL 半田工場	安全でおいしい水を守り、水を大切に使い続ける暮らしにするためには？

【各企業からの出された課題（ミッション）】

この取組を終えて、企業側から以下の感想をいただいた。

・これまで出前授業の講師を経験してきた。その時とは違う生徒の熱量を感じた。特に、プレゼン能力はよく育っていると感じた。単発のコミュニケーションではあったが、２週間でこちらの課題に対して解決策を考えてくれた。生徒にとっては、ホームグランドの学校で発信できたので、こちらと対等に話し合いができたと感じる。

・中学生はすごいと思った。以前、職場体験で生徒を受け入れたとき、元気がないなと思った。しかし、学校ではこんなにも自然体で学んでいて、生徒の発表を聞いて、企業として採用したい内容があった。事前に学校との打ち合わせがあるとよかった。

(5)　地域ささえあい活動の取組

地域の願いは、「安心して暮らせるまち半田」をつくるために、日頃からお互いさまの関係づくり、相談がつながるしくみづくり、歩いて行ける居場所づくり、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりを目指している。

そこで、本校では、半田市社会福祉協議会や地域のお助け隊と連携して、体の不自由な人や高齢者が困っていることを助ける活動として、地域の居場所となっているサロンやふれあいセンター等で、お茶を出したり、話し相手になったりする活動を行う。また、地域を元気にする活動として、地域行事の手伝い、赤レンガ応援隊の清掃ボランティアを行った。この活動は、ＰＴＡ活動にも位置づけられ、「地域とともに」を合い言葉に年間通して活動を行っている。

活動内容は、以下の通りである。

・はんだ山車祭り手伝い	・ごんの秋祭り手伝い	・夏夜防災フェス手伝い
・避難所運営訓練手伝い	・子ども科学体験教室手伝い	・音楽マルシェ手伝い
・地域のサロンの手伝い	・地域の神社の草刈り	・矢勝川彼岸花植栽作業
・小学生夏休みの宿題ボラ	・地域のお助け隊ボラ	・赤レンガ応援隊ボラ

参加した生徒の声は、以下の通りである。

地域ささえあい活動を通して、地域のサロンに、ボランティアスタッフとして参加しました。１年半、継続的に参加するうちに、顔を覚えてもらえて、地域のあたたかさに触れることができました。今、思えば、それはつながれてきた絆が交流を通して自分にもつながったということだと思います。

「今後の担い手がいない。」 他のボランティア先でも聞いた言葉です。変わりゆく社会でも、ボランティアでつながる絆を未来までつないでいけるように、少しでも「つなぐ人」になれるように、これからもボランティアに取り組んでいきたいです。



【サロンの利用者へお茶出し】

４　実践の成果と課題

本実践を通して、生徒自ら、「半中最幸」を地域に広めていこうとする姿勢に変化が見られた。これは、「半田中が好き、半田市が好き」といった学校や地域に対する愛着や誇りであると捉えている。また、QUテストにおいて、集団における生徒の満足群の値がよりよく改善した。ホワイトボード・ミーティングの取組やレインボープロジェクトの取組により、生徒の心理的安全性が大きく改善されたと分析する。また、学校評価アンケート「どの生徒にも活躍の場を与え、居場所のある学級・学年経営をしている」については、生徒の約８割が肯定感をもっていることが分かった。

保護者や地域からは、以下のような声が得られた。

・「失敗しても大丈夫」のように、集団において心理的安全性が確保できている。
・ペアやグループなどでの話し合いがよくできている。
・教員が、生徒の目線でよく話を聞くことができており、個別の支援も充実している。
・休み時間などに生徒と教員が楽しそうに話をしている。

一方、不登校者数は横ばいである。しかしながら、不登校の生徒も学校とつながり、Ｉルームを活用しながら心のエネルギーを蓄え、次の進路に備えて動き出している。課題を抱える生徒の心は見えにくく、家庭においても問題を抱えているため、卒業後を見据えて関係機関とつなぐようにしている。

本実践を通して、生徒の自尊感情は少しずつではあるが向上している。本年度の２学期最後に、キャリア教育講演会を計画し、ゴルゴ松本氏の「命の授業」を受けることができた。自分のよさを信じる力をテーマに、生徒がありのままの自分を受容し、何事も全力で、一生懸命に生きることや自分にも周りの人にも命を吹き込むことの大切さを感じ取ることができた。生徒が自分の可能性を信じ、挑戦する心、自分をよりよく変える心をさらに育てていきたい。

今後も、地域とともに、地域の中で育つ学校を目指して、実践を積み重ねていく。

目次へ

研究主題	学校や地域を愛し未来で活躍し続ける自律学習者を目指して		
副　　題	自分らしいキャリアを実現するための「協同学習」を通して		
学 校 名	半田市立乙川中学校	校 長 氏 名	波　田　　聡

1　主題設定の理由

協同学習を行う背景として、経済産業省より打ち出された『未来人材ビジョン』の中で、「好きなことにのめり込んで豊かな発想や専門性を身に付け、多様な他者と協働しながら、新たな価値やビジョンを創造し、社会課題や生活課題に『新しい解』を生み出せる人材」が『自ら育つ』教育をすべきではないか」という教職員への問いかけがある。そして、その解を生み出す力である、「人生100年時代を生きるための社会人基礎力」で示された「３つの能力／12 の能力要素」を身に付けた生徒を次のステージ、ひいては社会に送り出すことが学校の役割の一つになっている。また、教育実践活動の主語・主体は生徒であると、学習指導要領が示している。学校は生徒が主役であり、生徒が育つ場である。教職員がどのような力を身に付けさせたかではなく、義務教育を修了したあと、生徒たちがどのような力を身に付けたかが、学校の存在価値である。教職員が示したものを倣うではなく、自己選択・自己決定を行い、目標や夢を実現させる力を自分たちの手で身に付ける必要がある。教職員がこれまでの指導法を改めなければ、これからの未来で生きる生徒たちの妨げになることを理解したうえで、働くことが大前提となる。これまでの“教えることに依存した指導”を“生徒の自律を支える指導”に転換していく。そのために、今年度は研究主題に「自律学習者」を掲げることで、研究に関わる全員が本校の目指す生徒の姿をイメージできる実践を行う。授業を超えた教育実践活動全てにおいて協同学習の視点をもち、自分らしいキャリアを築く“地力”を自ら培う生徒を育てていきたい。

2　研究の仮説

未来を思い描く＝【自分】夢（キャリア）×【他者】自律（協同学習）×【社会】社会（地域交流）の教育実践活動を通して、未来で活躍し続ける自律学習者に育つだろう。




協同学習の様子

3　具体的な方策として

（1）単元計画 、授業計画の明示

・単元メニューや学習メニューに代わるものを事前に示し、学びの見通しを立てさせる。

（2）授業のふりかえりとフィードバック

・終業時にふりかえりや確認テスト等を行い、コメントや授業記録等で評価を示す。

（3）研修会の実施

・学習方法の指導ノウハウの伝達と実践

・ベースワーク、MD法やペンリレーといった学習方法を教員が習得する。

・外部講師を招いての講演、研修会の実施

4　研究成果について

（1）授業終了時の姿が明確に示されためあて数学科での実践（具体策１）

・「全員が長さを求めることができる」といったように、できるようになるべきことがはっきりと分かるようにめあてを提示した。「全員が」とすることで、グループ全員の協力（①互恵的な協力関係、③相互作用の促進）と個人自身が達成すべき課題（②個人の責任性）を強調した。また、授業の最後に、めあてに対応した問題に数問取り組むことで、めあてを達成できたかどうか確認した。

・単元メニュー・学習メニュー

授業で扱う内容やめあて、単元で身につける力などをまとめた単元メニューと、授業の流れを示した学習メニューを事前に配布することで、教師が逐一指示を出さなくても生徒同士が相談しながら授業を進めることができるようにする。（①互恵的な協力関係、③相互作用の促進）。

（2）授業の振り返りとフィードバック（具体策２）

・数学科では、授業終了時には確認テストを実施し、比を使って面積を求められるかどうかを確認した。確認テストの正解率は、１問目が 96%、２問目が 93%、３問目が 86%と、３問とも正解率が 80%以上であった。100%にはならなかったものの、ほとんどの生徒が面積比の概念を理解していることが確認できた。また、確認テスト後に、自発的に他の問題に取り組む姿が見られ、学習意欲の高さがうかがえた。

・授業のフィードバックとして、生徒同士の良い関わり方や工夫して取り組んでいる様子を他クラスに紹介し、望ましい行動に価値づけを行った。また、協同学習の効果をさらに高めるために、授業のフィードバックの仕方について、他の教員と意見交換を重ね、様々な視点からフィードバックできるようにした。

5　研修会の実施

現職教育及び、協同学習のより一層の推進を目指し、６月と９月に外部講師をお招きし講演と研修会を実施した。藤井英之先生（元有田市立初島中学校・元宮原小学校長）、下田喜久恵先生（有田市教育委員会相談員）をお招きした。研修では、自律学習の手引き～三種の神器と８つの学習方法を講演いただいた。また、授業見学をしていただき、授業コンサルティングもしていただいた。



また、３月には枚方市立第一中学校に本校の現職主任、教務主任、学習指導部員３名が訪問し、枚方第一中学校で行われている協同学習の実際を見学し、本校の現職教育にフィードバックをする予定である。

6　成果と課題

各授業で行ったアンケートでは、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の項目では、学期始めより上昇がみられた。これは、授業時に協同学習を行うことで、自分から取り組む生徒が増えたと考えられる。ゆえに、今回の研究により、自律学習者として学習できている生徒が増えたと考えられる。

しかし、「授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか」のアンケート項目では、学期始めから微増にとどまった。協同での学習目標が個々の学習目標と一致できていないのではないかと課題が残った。

生徒自身が個別最適な学びであり、他者との協同により自律学習者へとつながりがもてるようにさらに研究推進を次年度への課題としていきたい。

目次へ

研究主題	見方・考え方を伸ばす深い学びの構築		
副　　題	課題解決型学習を通して		
学 校 名	春日井市立石尾台中学校	校 長 氏 名	稲田　泰浩

1　研究の構想

近年、３Ｄプリンターを教育の一環として導入する学校が増えてきており。３Ｄデータを元に立体的な物を作り上げる３Ｄプリンターは、実際のビジネスの現場においても活躍の幅が広がってきている。

３Ｄプリンターを使用するということは、頭で想像した物を形にするということであり、実際に頭では想像できていても、形にするということは容易ではありません。そこで、３Ｄプリンターを使い、実際に作り出すことで想像力を豊かにする効果がある。仮に、うまく作り出せなくても、修正と挑戦を繰り返すことにより、自分で想像した物へと近づくことができる。そこで、以下の構想を元に、取り組むことにした。

（１）　あいちＳＴＥAM教育推進事業を視点に、５つの要素を盛り込み、知識や技能を学ぶだけではなく、それらを活用して問題を解決したり、創造したりする学びを育成する。

（２）　ＣＧやＣＡＤで創作したものを３Ｄプリンターから出力し、物事の捉え方や考え方の視野を広げる。

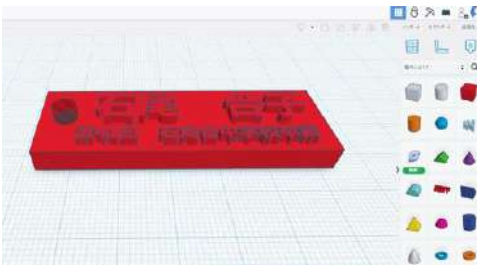
（３）形になる喜びを体感し、ものづくりへの興味や関心を高める。

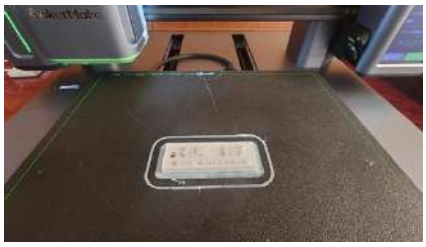
（４）実生活に関連した課題に取り組む機会を設ける。

2　取り組み

①＜ネームプレート＞

在校生から、卒業記念品として、「名前入りネームプレート（６センチ×２センチ)」を３年生へ贈呈した。３月の「卒業生を送る会」に向けて２年生を中心にプロジェクトを立ち上げ、現在一人一台端末として学習で使用しているＣｈｒｏｍｅｂｏｏｋから、ＣＡＤアプリ「ティンカーキャド（ブラウザ版)」を活用し、デザインから設計、数値の入力作業を行った。実際、３Ｄプリンターから出力してみると、画面上の設計とのイメージが異なり、数回にわたる修正をすることで完成度を上げイメージどおりの製品を作ることができた。





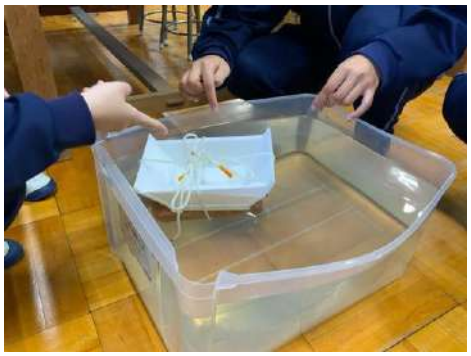
この取り組みを通じて、「イメージしたもの

が形になる」「データから造形につながる」「ものづくりの楽しさ」などを体感することができ、生徒自身が、積極的に横断的な学習の発展へつなげる過程を実感することができた。

②＜教具の製作＞



３年生理科「浮力」の学習単元において、小さな船が必要になった。教科担当教員は、８つの班に一艘ずつ船を与え、問題を解決させたかった。そのためには、教具が必要になるが、適当なものが校内には見当たらず、担当教員は、木材を加工して製作しようと考えていた。そこで、３Ｄプリンターを活用して製作してみることにした。水槽に対する船の大きさや、実験で絶妙に成功できる船側面の高さなどを慎重にＣＡＤで設計し、製作に取り掛かった。３Ｄプリンターのおかげで、同じものを８つ製作することが容易にできた。



授業でこの船を使った生徒たちは、これまで学習した知識を最大限に活用し、各班に与えられた教具を使って様々な仮説や実験、考察を行うことができ、本単元の学習を深めることができた。

３　考察

今回、本校へ３Ｄプリンターを導入するにあたり「技術を持った指導者がいない」「学校設備のパソコンのスペックが低い」「など、不安な要素がいくつかあった。しかし、悩んで踏み出さないことより、職員とともに「まずはやってみよう」という意気込みのみで進み、結果的には我々の不安など感じないほど、生徒たちは自ら積極的に取り組み、互いに教え合い、まさに求める力の一つである「協働学習」の展開が自然に発生するものとなった。

昨今、あらゆる業界で活躍の幅が広がる３Ｄプリンターは、近い将来、さらに身近な物として使用されることでしょう。生徒の将来を考える上で３Ｄプリンターは、あらゆる選択肢を多岐に渡って与える存在となり、アイデアをもつ想像力豊かな人材の創出へとつながるものと実感することができた。

目次へ

研究主題	業務効率化による教員指導の質的向上		
副　　題	デジタル採点システムの活用		
学 校 名	津島市立暁中学校	校 長 氏 名	服部　聡宏

１　はじめに

本校は学級数１６クラス（通常学級１０クラス、特別支援学級６クラス）の中小規模校である。その中で、授業を担当する教員の年齢層は４０代が７名、３０代が１７名、２０代が３名となっており平均年齢は３６歳である。中堅層が多い教師集団は熱意や使命感で幅広い業務を日々、積み重ねている。教員の業務は学習指導だけではなく、生徒指導や部活動、そして保護者や地域との連携など多岐にわたっている。その上に学校や教員に対する多様な期待と教員自身の使命感や責任が重なり、結果的に時間外の長時間労働という形に表れている。特に昨年度の在校時間の状況調査を見ると、定期テスト作成から成績処理が行われる月間（４月～６月、９月～１１月）の在校時間外勤務が大幅に増加している。そこで、今年度はデジタル採点支援システム「百問繚乱」を導入し、採点業務の負担軽減を推進していく。そこから、自己研鑽と子どもと寄り添う時間を生み出していき、教員指導の質的向上を図っていきたい。

２　研究の目的

- デジタル採点システムを進めることで教員の多忙化を解消し、これまで以上に子どもたちと向き合う時間を確保する。
- 個別個表や度数分布図を事後指導に活かし、個別最適化された学びを確立する。

３　研究の経過

時期	研究の内容等
４月	・業務改善に向けたＩＣＴ活用の検討会
５月	・成績の業務負担に関する教員向けアンケート実施 ・令和５年度より採点自動システムを活用している学校からの情報収集
６月	・環境整備のための業者及び教育委員会との打ち合わせ
７月	・百問繚乱サポートシステムによる研修会 ・デジタル採点システム「百問繚乱」の導入について保護者向け案内発送
８月	・環境整備　　・活用開始
１０月	・校内教務部会にて活用状況の報告 ・市の来年度予算要望にデジタル採点システム「百問繚乱」を申請
１２月	・校内教務部会にて活用状況の報告
１月	・市内の教務主任会にて実践報告
２月	・来年度、市内全中学校のデジタル採点システム「百問繚乱」の導入決定 ・活用後の教員向けアンケート実施 ・研究のまとめ
３月	・各中学校の教務主任による伝達講習会の立案

４　研究の実際

（１） 採点・成績処理業務の改善

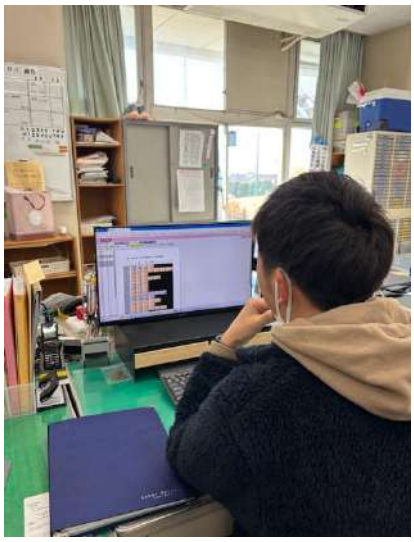
５月、教員向けに採点業務についてアンケートを実施した。普段の定期テストにおける業務（問題作成・採点・事後指導）に対して「大変」と答えた教員は９５％おり、実際に１クラスの採点業務（採点・集計・転記）にかかる時間の平均は８４分ということがアンケート調査で分かった。そこで、５月にデジタル採点システム「百問繚乱」をＷｅｂ上で試行していた教員とすでに令和５年度から「百問繚乱」を導入・活用している学校からの情報をもとに、９月の定期テストから本校でも「百問繚乱」を活用することを決め、環境を整備していった。



【夏休みにオンライン研修に参加する教員の様子】

教員は、夏休みを利用し、百問繚乱サポートの無料オンライン研修に参加した。操作方法を学ぶ研修動画（YouTube）を視聴するもので、実際に見た後、操作をしながら学びあう教員集団の姿が見られた。

８月に入ると、教員たちは９月初旬の第２回定期テストに向けて、テスト作成と採点システムの事前準備を始めた。その際に、解答用紙の作成で悩んだときは、すぐに教務主任に相談し、すでに導入している近隣の中学校の教務主任と連絡を取り合い、問題を克服することができた。活用後のアンケートを実施したところ、「業務の負担は軽減しましたか」という問いに対して、「とても軽減された」と答えた教員は９２％にのぼった。また、１クラスの採点業務にかかった平均時間は導入前の約半分の時間（４６分）で採点を終えることができた。



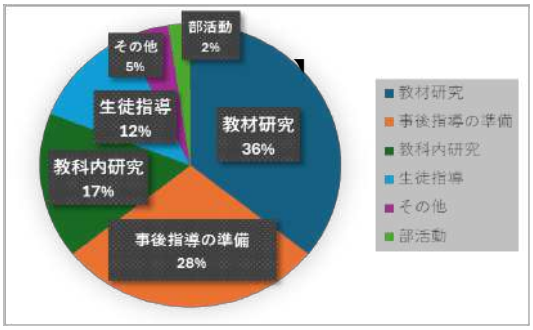
【テスト作成の様子】

（２） 事後指導の活用

「百問繚乱」は選択問題を自動採点するだけでなく、記述問題について同一問題を比較提示し、問題によっての解答率を一目で分かることができる。よって、答え合わせの際に、正答率の悪い問題に対して、より丁寧な事後指導をすることができた。また、定期テストだけではなく、小テストでも百問繚乱を活用し、度数分布などの分析をすることで、指導内容を見直すことができた。

５　研究の成果

デジタル採点システムを活用した後にアンケートを行った。その中で「採点時間が短縮されたことで、他のどの業務に時間を充てることができたか」の問いに対して、第１位が「教材研究」（３６％）、第２位が「事後指導の準備」（２８％）、第３位が「教科内研究」（１７％）といった回答結果になった**【資料１】**。採点時間の削減により、教員一人一人が指導の質を高めるための時間を確保することができた。また、「その他」と回答した５％の教員に内容を聞くと「家族との時間が増えた」といった回

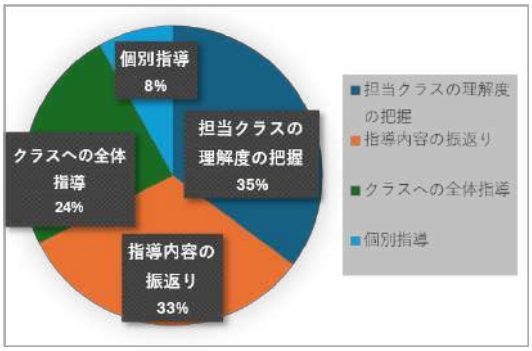


【資料１】

答があり、仕事と生活がともに充実し、理想的なワークライフバランスを実現することができた。

成績分析機能を利用した教員は９０％おり、「成績分析した結果は、どのような場面で利用したか」といった問いに対して、第１位が「担当クラスの理解度の把握」（３５％）、第２位が「指導内容の振返り」（３３％）、「クラス全体への指導」（２４％）の回答結果になった**【資料２】**。担当クラスの理解度や指導内容を正確に把握し、分析機能能を効果的に活用することで、指導力を向上させ、授業改善につなげることができた。

また、「百問繚乱」は年間契約のため、本校の取組を市内の教務主任会で報告し、持続可能なものにするために予算化を申請した。来年度は津島市の中学校で採用する運びである。



【資料２】

６　今後の課題と展望

（１）　課題

・　今回のテスト返却は紙媒体で行った。一度、生徒の解答用紙をシステムに読み込み、採点をし、さらに採点された解答用紙を印刷して、返却をするので用紙代がかなりかかった。

・　度数分布の分析結果をもとに事後指導をしたが、個別まで行き届かず、全体指導にとどまってしまった。

・　デジタル採点システム「百問繚乱」を活用しなかった教員から理由を聞くと、「特別支援学級の採点は少人数のため、従来のやり方が適当だから」「ＩＣＴ機器に慣れていないため」などの返答があった。

（２）　展望

今後は、テスト返却を紙媒体ではなくタブレットを用いて行うことを進めていきたい。そうすることで、ペーパーレス化が実現し、さらに返却ミスの防止や返却時間の短縮（授業時間の確保）が見込まれる。

また、個人のアカウントより、システムに入ることができる環境を整えていきたい。自宅の端末からテストの結果や個票を確認することが可能となり、見るための端末がない家庭には、個票配布期間に学校で使用しているタブレットの持ち帰りを許可していく。記録の蓄積と分析をもとに、個別最適化された学びを図っていきたい。

しかし、ネットトラブル発生の可能性もあり、未だタブレットの持ち帰りが進んでいない状況がある。これからは、生徒一人一人に割り当てられたアカウントに、アップロード禁止という制限をかけるなど、市と協力して対策を練っていきたい。

目次へ

研究主題	ともに学ぶ		
副　　題	主体的・対話的で深い学びの実現を目指して		
学 校 名	犬山市立城東中学校	校 長 氏 名	髙木　潔

１　はじめに

本校の現職教育テーマ「ともに学ぶ」は「生徒が仲間と」「生徒が教材と」「教師が同僚と」「教師が生徒と」「教師が教材と」という姿勢を大切にして教育活動を進めている。また、日々の授業の中で「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、各教科の具体的な手立てにおける「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現を目指した授業実践を行っている。今年度は、「対話的な学び」に焦点を当てて研究を進めている。しかしながら、「主体的・対話的な学び」について確実に理解し自信をもって授業実践を行っているとは言えない。発言する一部の生徒だけで授業を進めるのでなく、全員の生徒が授業の課題に対して、意欲的に参加することができる授業作りを目指したい。また、２０代の若手教師が多く、授業スキルが未熟である。彼らが自信をもって楽しく授業ができるようにしたい。



２　研究の実際

（１）　講師を招聘しての授業力向上

今年度は、対話的な授業作りの方法を学ぶために、名古屋学芸大学の土井謙次先生を招いて２回の現職教育を行った。

１回目は５月２日（木）に行った。全職員で全員参加型の対話的な授業作りを学んだ。

２回目は 12 月 19 日（木）に行った。２回目は、主に少経験者の授業力の向上を目指した。８名の少経験の授業を土井先生に参観していただき、授業公開を行った教師に指導をいただいた。授業は１時間で２名ずつ公開し、４時間参観していただいた。授業後の協議会では、授業者一人一人に本日の授業の良かった点と改善していく点をプレゼンテーションでご指導いただいた。

（２）　授業交流の活性化

教師の「学び合いの場」として、年２回「ともまなウィーク」（授業交流週間）を設けている。全教師がともまなプラン（授業デザイン）もしくは指導案を作成し、授業を公開した。「対話的な学び」のための工夫をともまなプランや指導案に記すことで、参観の視点を明確にした。また、授業者は多くの教師が参観できるように、数時間の公開を設定した。参観した教師は授業から得た学び、気づきやひと言を「授業参観記録」に記入し、授業者へ渡している。また、ともまなプランや指導案はＰＤＦで保存し、本年度の研究記録として残している。

本年度は前後期それぞれ２名の指導案をグループで事前検討した上で、授業実践を行った。多くの教師で指導案を練ったことで、授業者は、よりよい手立てや授業の流れを再考し、自信をもって授業を公開することができた。

３　成果

（１）　講師を招聘しての授業力向上





１回目は、共有化・視覚化・動作化・スモールステップ化・焦点化・授業のしくみづくりの６つの指導技術について、例を挙げながら具体的な手立てを教えていただいた。いただいた資料は、さまざまな場面での教師と生徒のやりとりが具体的に書かれており、誰でもすぐに実践できるものであった。その資料を参考に、日々の授業作りに生かす姿が見られた。



２回目は、少経験の８名の教師に焦点をあてて研修会を行った。他の教師も授業参観したり、指導会に参加したりした。１時間２名とし、公開時間を多く設定したことで、土井先生に教師の発言や支援、生徒の活動の様子などをしっかりと見ていただくことができた。授業後の協議会では、教師や生徒たちの当日の授業の様子の写真を基に、良い点を具体的に教えていただいた。実際の授業の様子や生徒たちの表情を改めて確認することで、生徒の反応から授業を構成するポイントを学ぶことができた。さらに、授業を考える際に参考になるウェブサイトの紹介や生成 AI の効果的な活用方法なども教えていただけた。

（２）　授業交流の活性化



ともまなウィークでは、前期１４名・後期１４名の教師が授業を公開することができた。どの教師も「対話的な学び」の手立てを入れ、全員参加の授業を実践し、力量向上に取り組むことができた。

特に、少経験者は授業公開の前にじっくりと時間をとって指導案の検討をすることができたので、不安感を払拭できたり、ベテランの技術を伝えたりすることができた。そのため、生き生きと授業に臨む姿が見られ、自信を深めることができた。

４　今後の課題

５月に現職教育で土井先生の講義を設定したことで、「主体的・対話的な学び」の手立てを講じながら、全員参加の授業を実践することができた。しかし、土井先生の指導やいただいた資料を実際の授業で十分に意識するところまでに至っていないように感じる。現職教育の機会に改めて読み返すなど振り返る機会をとっていきたい。

また、ともまなウィークは一ヵ月期間を設けているが、計画的に授業公開ができておらず、教師同士の学び合いを十分に行うことができなかった。来年度は、４月の計画段階で授業公開の日程を組み入れていきたい。

日々の業務は大変ではあるが、教師の授業力向上が生徒の成長につながり、よりよい学校となる。今年度学んだことを次年度の研究につなげていきたい。

目次へ

研究主題	自ら学び、常に向上しようとする生徒の育成		
副　題	各教科における「見方・考え方」を働かせ、深い学びにつなげるための指導の工夫		
学 校 名	常滑市立青海中学校	校 長 氏 名	榊　原　将　道

1　主題設定の理由

本校では、昨年度まで「自ら学び、常に向上しようとする生徒の育成―主体的、対話的で深い学びを実現させるための指導方法の工夫」を研究主題として教育研究に取り組んできた。そして、「自ら学び、常に向上しようとする生徒」を、①「受け身ではなく、自ら進んで学ぶことができる生徒」、②「身に付けた自分の力を発揮して、課題を解決できる生徒」と定義し、「主体的、対話的な活動」について全教職員の共通理解の下、各教科で手立てを講じ、実践し、検証してきた。

しかし、生徒が主体的・対話的に取り組む姿はある程度見られたものの、その「主体的、対話的な活動」が「深い学び」につながったかどうかの検証に関しては課題が多く残った。それは、「深い学び」に関して各教科の特性を踏まえて、どのように捉えるのかが焦点化できていなかったことが原因であると考えた。そのため、「深い学び」を捉えるための指標として、各教科における「見方・考え方」を意識し、「どのような見方で物事を捉え、どのような考え方で思考を広げていくのか」を中心に見直すこととした。このように、昨年度まで積み上げてきた「主体的・対話的な活動」を土台とし、各教科における「見方・考え方」を基に、「深い学び」につなげるための研究に取り組んだ。

＜教科の見方・考え方（例）＞

【国　語】言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童（生徒）が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり、問い直したりして、言葉への自覚を高めること

【数　学】事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的に考えること

【外国語】外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること

【音　楽】音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること

2　研究の仮説

○各教科における「見方・考え方」を引き出す働きかけをすることで、深い学びにつなげることができるであろう。

○深い学びを引き出していくことで、自ら課題を見つけ、課題を解決しようと取り組むことができるようになるであろう。

3　仮説に対する手立て

研究の手だてとして、現職教育部会で話し合い、以下のような骨子を作成し、職員会議で共通理解を図った。

①「見方・考え方」を働かせることができる学習課題を設定する。
②「見方・考え方」を明確にするための教師の問いかけや価値付けを行う。
③教具、ＩＣＴ機器、話型、シンキングツールなどを用いた話し合いの活性化の工夫を行う。
④考えのつながりや、分類、比較などを生徒が見えるよう板書をする。
⑤授業で理解したことや学んだこと、思ったことを振り返る場を設ける。

４　研究の計画及び実際

・研究主題を踏まえた公開授業を、1 年間に一回は全教員が行う。お互いに授業を見合う数を増やすことで、全教員で学び合い、高め合う意識を高める。

【公開授業の実施】

４月：２年理科「化学変化と物質の成り立ち」
５月：３年英語「Unit２ Haiku in English」、１年保体「球技：ネット型、バレーボール」
９月：２年社会「近世から近代へ」、３年国語「状況の中で」、２年音楽「合唱をよりよいものにするための工夫を考えよう」
12 月：３年数学「三平方の定理」、２年数学「図形の性質と証明」、２年英語「Research and Presentation」、１年国語「価値を見いだす」、３年音楽「曲想を感じ取り、曲の特徴を生かして歌おう」
１月：１年社会「武士の時代」、１年数学「空間図形」
２月：３年保体「球技：ゴール型、バスケットボール」　など。

・指導案には必ず「見方、考え方」を働かせた深い学びを行うための授業の工夫を、力点の箇所に記述する。
・大学の教員等を講師に招き、現職研修を行う機会も設定する。
①7月 29 日に愛知教育大学・生活科教育講座・加納誠司教授を講師に招き、「青海中の材を生かした総合的・探究的な学びの創造～生涯探究時代を見すえたカリキュラムをデザインする～」）をテーマに実施。
②８月９日愛知県総合教育センター出前講座「指導と評価の一体化を図る授業マネジメントシートの活用」（南海トラフ大地震臨時情報発表のため、紙面開催に変更）
・テーマを決めて、教務主任を中心に校内での自主研修会を実施。

５　研究の成果と課題

全教員による教育研究として、各教科の見方・考え方に焦点を当てて、手だてを工夫しながら主体的・対話的で深い学びに迫る実践をしたことで、教科の特性を踏まえた学習活動を以前よりも多く創出することができた。また、各教科の見方・考え方に関して全教員で理解を深めることで、教科学習の本質を振り返る機会となった。日々の授業でも、どのような側面でそれぞれの学習活動が各教科の見方・考え方と関わり、それらを働かせることができているのかを見直す機会となった。特に、少経験者にとっては、教科書に基づき授業を進めることに重きが置かれて、部分的に席の近い生徒同士対話をさせて、考えを交流させたり答えを説明させたりしている傾向があったが、それが教科学習の中で、どのようなねらいで行うべきもので、どのような位置付けの活動なのかについても理解を深める機会となった。経験が多い教員にとっても、旧来の講義式の授業から脱皮して、生徒をいかに主体的に動かすかを考え直し、授業改善を図る機会となった。

しかし、見方・考え方を働かせる生徒の姿について、依然イメージがあいまいであり、さらに具体化し、主体的・対話的で深い学びに迫ることができているかを追究していく必要がある。また、各論の部分で考えを詰めても、総論の部分で各教科や領域の学習を合わせて、生徒のどのような資質・能力を高めていくのかということについては、ベクトルを合わせて、さらに効果的な教育活動を展開できるように研究していく必要がある。今後さらに全教員で研究を進め、共通理解を図り、目指す生徒像に迫れるような教育活動を展開していきたい。

目次へ

研究主題	認め合い・高め合う授業を通して「学びを楽しむ生徒」を育てる		
副　　題	～「質の高い課題」で「夢中になる自分」に出会う喜びを～		
学 校 名	小牧市立北里中学校	校 長 氏 名	松浦　恵美

1　テーマ設定の理由

はじめに、本校は教育目標『認め合い　高め合う』、校訓「希望・協同・努力」を指針とし、知・徳・体の調和のとれた生徒及び、生徒の「自立」を支援する学校づくりに向けて、学びを楽しむ生徒を育成している。

本校の教員が研究を始めるにあたり、学校生活の中で子どもたちが一番長い時間を過ごす授業について、生徒がどのように感じているのか、何を思っているのか、生徒の生の声を率直に聞いてみることによって、そこから手がかりを得ようと考えた。そこで、令和５年５月に第１回「学びの達人アンケート」と題し、学び推進委員会等で精査した質問内容をもとにロイロノートで調査を行った。また、本校ではこれまでに年に数回、学びのスーパーバイザーを招聘し、実際に授業を参観した上で指導助言を仰いできた。

調査結果は次の通りである。『「学ぶこと」「勉強すること」は好きですか』という項目では、勉強をすることは好きではないと考える生徒が全体の多数を占めた。学ぶこと・勉強することが必要だと思っている生徒は多いが、勉強することは嫌いであるということが明らかになった。次に、『「授業」について、「分かった！なるほど！！と思う瞬間はいつですか」』という項目では、友達やグループ、ペア、全体で話し合っているときなど、関わりを通して学ぶときが上位を占めており、一人で学習をしているときについては、全体として少ない傾向であった。さらに、『授業の中で「退屈・つまらない」瞬間はいつか』という項目では、一人で考えているときや、先生の説明を聴いているときなどが上位をしめていた。また、学びのスーパーバイザーからは、次の４つについて指導助言を仰いでいた。①北里中学校の子どもたちは、表情が大変良く、学び合いの作法は身についている。一方、②教員は生徒のレベルに対して、学習課題の質が低い。また、③スモールステップでの授業が多い。さらに、④生徒の発言を拾って、つないでいく生徒主体の授業を目指してほしいが、教員が主体となって話をし、授業を組み立てていることが多い。

以上この２点から、生徒がよりよく学びを楽しみ、認め合い・高め合うためにはどうすればよいか、また、雑談やおしゃべりではなく、関わりの必然性があり、子どもたちを「夢中に」するためには簡単な内容やスモールステップの課題ではなく、生徒から教科の本質に迫る言葉や説明を引き出せるようにしたいと思い、『～「質の高い課題」で「夢中になる自分」に出会う喜びを～』という言葉を、現状を変えていくためのキーワードとして設定し、研究を進めることにした。

2　研究実践

（1）研究授業

月	学年	教科	課題
R5.7	3年	社会科	「何気ないことが他人ごとではなく、自分ごとになる」
R5.10	2年	数学科	「全員が数学に没頭し、誰一人こぼさせない全員でゴールを目指す」
R5.12	1年	国語科	「筆者の書きぶりの良さを自身の書く活動に生かす」
R6.3	1年	英語科	「言葉を用いて表現できる世界を広げる」
R6.5	3年	理科	「目に見えない現象を、仲間との対話から想像し、解決していく」
R6.6	2年	英語科	「生徒の推測や気づきをもとに、表現の幅を広げる」
R6.6	1年	特別の教科 道徳	「他社との価値観の差異に気付き、よりよい社会を共に築いていこうとする心情を育てることができる」
R6.9	3年	音楽科	「全ての生徒が自分のペースで達成感を味わいながら、学びを進めることができる」
R6.11	1年	数学科	「生徒同士が伝え合い、自分の考えを広げ・深める」

（2）学びの達人アンケート（令和５年５月・令和６年３月・７月）

・第１回アンケート項目

① 北中生は、そもそも「学び」についてどう考えているの？

② 北中生は、そもそも「授業」についてどう考えているの？

③ 生徒は、授業の「課題」について、どのように感じているの？

④ 生徒は、３つの「きく」を意識できているの？など

・第２回アンケートについて

同じ年の３月に、研究の経過をデータとして掴みたいと思い、第２回「学びの達人アンケート」を実施した。子どもたちには、年度初めと同じ質問項目及び、追加項目として、この１年で夢中になった授業について、調査した。その中で、特に興味深く考えさせられたことは「夢中になった授業」の調査項目では、技能教科の技術・家庭・音楽・体育・美術が圧倒的に多かったということである。国社数理英の中であれば、「理科の実験」が多く記述されていた。このことから改めて、雑談やおしゃべりではなく、関わりの必然性があり、子どもたちを「夢中に」するためには簡単な内容やスモールステップの課題ではなく、生徒から教科の本質に迫る言葉や説明を引き出せるような授業づくりを行うという、本校の実態が見え、技能教科の学びの中に研究テーマに迫る多くのヒントであることを得た。

（3）具体的な取組

学校が組織として、具体的に取り組んだ内容は２点ある。１点目は、「ききあえる」授業を目指すこと。そのためには、生徒の「わからなさ」から授業づくりをすることが必要であると考えた。また、「ききあえる」集団づくりとして、より具体的に３つの「きく」（聞く・聴く・訊く）を大切にすることを掲げた。聞くは「目を見て聞く」「身体を向けて聞く」「うなずいて聞く」、聴くは「自分と比べてみる」「違うところと同じところをみつけてみる」そして、最後に、訊くは「自分と仲間の考えをつなげて、新しい考えをつくる」ことを意図し、子どもからは、「なんでそうなるの？」「どうしたらそうなるの？」「どう考えたの？」「これってどうして？」などの言葉を、引き出したいと思い取り組んだ。

２点目は、研究テーマに迫るために「授業デザインの工夫」することを掲げた。具体的には、①授業者が考える本単元を学習した後の、生徒の「理想の姿」（ゴール）について、②本時における「質の高い課題」「夢中になる自分」に迫るアプローチについての内容を盛り込んだ授業デザインづくりを行った。また、授業デザインを作成するにあたり教科部会を適時設定したり、授業研究会の協議会では教科ごとに座席を組んだりするなどして、個人だけではなく、チームで考えるとともに、教科の本質についても同僚と語る機会を設け、他教科からも率直な意見を聞くことによって、広い視点から目指す授業づくりを行った。

3　成果と課題

令和６年度の１学期末に行った第３回「学びの達人アンケート」では、「授業の課題の質」について調査を行った。課題の難易度については、概ねこちらが意図する結果であったが、一定数は、授業の課題が簡単であると感じる生徒がおり、夢中になりきれていないのではないかととらえることもできた。また、逆に課題が難しいと感じている生徒が多いということも、生徒の実態に合わせた課題になってないのではないか感じた。また、「三つのきく」についての調査では、大多数の生徒が肯定的な回答であった。一方で、意識できていないときがあると回答した生徒が少なからずおり、その理由の多くが「自分のやる気」にあると答えた。だが、授業者の立場としては、やる気を引き出す働きかけや、子どもたちが気が付いたらやる気が出ていたと思わせる支援、指導がすべての時間にできていたかというと疑問が残る。

２年間の研究を通して、劇的に、全体の数値の上昇があったわけではない。しかし、個別に見ると、最初、意欲的でなかった生徒が、学年が上がるにつれて、意欲がある、学ぶことが好きへと回答が変化していった生徒がいる。また、認め合い・高め合う授業とはどのようなものか、生徒は自分なりに考え、イメージを持ち、「間違えても人の意見を尊重し、さらにそこから付け足して意見をいえる授業」「新しい考えに出会い、自分の考えをより深めること」「周りの子と意見を深め合え、みんなが楽しいと思う授業」など、自分の言葉で説明できるようになったことは大きな成果である。

授業者としては、ペアやグループで子どもたちに問いかける課題の質や内容について、意識して、吟味するようになった。さらに、授業内容が教科の本質に即しているのか、立ち止まって考える時間ができた。北中職員と生徒が一体となって共通理解を図ろうとし、本校の現状を、子どもたちの声を、具体的にデータとして掴み、それを少しでも改善し、良い方向に導こうとしてきたことに大きな価値があると思う。

研究発表を終えて、参加者からは多くの共感を得るご意見をいただいた。一方で、どの教科、どの単元でも生徒をいかに夢中にさせるか、教科に即した質の高い課題とはどのようなものかなど、生徒の主体性を生かした授業づくりについては、まだまだ課題は残っている。これらについて、今後も研究を続けていきたい。

目次へ

研究主題	主体性を育む防災教育		
副　　題	～地域で活躍できる人材の育成を目指して～		
学 校 名	小牧市立応時中学校	校 長 氏 名	坂下　憲司

1　はじめに

本校は、小牧市の南部に位置しており南北に細長い校区である。生徒数は720名で、小牧市では比較的大きな規模の学校と言える。「時に応じて　自ら学び　自ら鍛え　自ら磨く」という校訓を掲げ、状況に応じて主体的に行動できる自立した生徒の育成を目標に教育活動を行っている。

また、私たちが暮らす愛知県は、南海トラフ巨大地震が起こった際に、大きな被害を受けることが想定される。昨年度の能登半島地震に引き続き、今年度は南海トラフ臨時情報が発令され、大地震を意識せざるを得ない状況にある。本校では、かねてから防災教育の必要性を感じ、力を入れて行っていたが、この機会に学校として本格的に系統的な防災教育を行っていきたいと考えた。

2　研究の実際

（1）　防災すごろく「いえまですごろく」の実施

日本赤十字社の防災すごろくを用いて、教職員を対象に現職教育を行った後、生徒を対象にしてゲーム感覚で防災知識を身につけ、意識を高めることができた。「自分だけでなく、みんなで助かろう」という目標をもって、グループ全員の命が助かることがゲームのゴールである。防災教育と同時に、学級の人間関係づくりを兼ねた取組となった。



【防災関係の現職教育】



【学級での防災教育】

（2）　避難所体験

今年は、教職員を対象に避難所運営ゲーム（HUG）行ったり、本校の指定避難場所である体育館において、段ボールベッドや簡易ベッドを用いて避難所体験を行ったりした。HUGについては、さまざまな事情を抱えた避難者をどう受け入れるかを考えることで具体的イメージがつかめただけでなく、避難所では配慮しなければならないことがたくさんあることを改めて知るよいきっかけとなった。また、体育館において有事の際に使用する非常用電話やコンセント、配電盤の位置を確認したり、防災倉庫の中身を見たりすることで、学校が避難所となることについて漠然としたイメージしかなかった教職員の意識は、自分事となったように思う。

来年度より生徒たちにもＨＵＧと体育館での避難所体験プログラムは実践する予定である。



【段ボールベッド使用体験】



【ＨＵＧの現職教育】

（３） 地域とのつながり

防災教育とともに、日頃から地域住民のひとりとしての意識をもちながら活動することにも力を入れている。学校が地域の力を借りたり、地域のニーズに学校が応えたりすることで、中学生にとっては地域のために役に立っている実感を味わい、地域の方にとっても「地域の子どもは地域で育てる」という感覚を身につけることができると考えている。



【地域の夏祭りのお手伝い】



【地域の方とともにじゃがいも栽培】

３　研究の成果と課題

防災や減災に対する意識は、教職員、生徒ともに高まってきたように感じる。今後は、「自分の命は自分で守る、守った命で困っている人を助ける」というスローガンを掲げ、防災や減災に関する知識を身につけさせたい。

また、平時から、自分がおかれている状況を把握して、自分に何ができるかを考え、実行に移す訓練が必要であると考える。これは、本校の校訓にもつながるものである。そのために不可欠なスキルとして、人と協力して活動するためのコミュニケーション能力、だれかのために行動できるボランティア精神などがある。今後も系統的、継続的に防災教育を行っていきながら、それらのスキルを身につけさせたいと考える。

そして、有事の際には、中学生であっても地域住民のひとりとして、地域のために活躍できる人材へと育ってくれることを願う。

目次へ

研究主題	自他の安心安全を守るために、自ら気付き、考え、行動する生徒の育成		
副　　題			
学 校 名	稲沢市立明治中学校	校 長 氏 名	岡﨑　正和

１　はじめに

本校では、学校安全目標を「常に安全な行動ができ、万一事故が発生しても適切な対応ができるような態度や能力の育成をめざす」としている。また、「生活安全」「交通安全」「災害安全」の各領域において、自ら安全に行動したり、他の人や社会の安全のために貢献したりできるようにする「安全教育」、子どもたちを取り巻く環境を安全に整える「安全管理」について取り組んでいる。今年度は、特に、デジタル社会をよりよく生きるためのデジタル・シティズンシップ教育を推進し、ＳＮＳやメディアについて、情報における正しい理解とスマホやタブレットＰＣなど、ＩＣＴ機器のよりよい活用方法について考えていく。

２　具体的な取組例

（１）　安全教育について

①　生活安全に関する取組

ア　熱中症予防講座

「見直そう！水分補給」というテーマで、株式会社明治より講師をお招きし、全校生徒を対象とした熱中症予防講座を行った。人間の身体における水分の働きやなぜ体内の水分が不足すると熱中症になるのか、水分の摂り方のコツなど、クイズ等を交えながら話が進められた。生徒の感想から、室内でも熱中症になることや、寝不足や朝食を食べていないときに熱中症になりやすいことに驚いた様子がうかがえた。また、熱中症を予防するポイントを教えていただき、生徒は実際に実践していこうという気持ちをもつことができた。

イ　各学年の発達段階に応じた情報モラル教室

本校では、より生徒の実態に応じた指導を行うため、デジタルライフサポーターズネットより講師をお招きし、学年ごとに情報モラル教室を実施している。また、開催日を学校公開日に設定することで、保護者の方も参観しやすくなるようにし、学校と家庭が連携して生徒を指導できるように心がけている。生徒は、スマホにおける写真の取り扱いやＳＮＳの使い方など、個人情報漏えいやプライバシーの侵害についての話を聞き、今後のタブレットＰＣやスマホの取り扱い方について考えることができた。



情報モラル講演の様子

ウ　学級活動におけるデジタル・シティズンシップ教育

本校は、全生徒がタブレット端末を持ち帰り、日常的に使用できるよう環境を整えている。生徒たちが「デジタル市民」として、情報社会で自己と他者の権利を尊重し、適切に行動できる力を身に付けることを目指し、発達段階に合わせて系統的に実践を行った。

（ア）授業実践（１年生）

「メディアの見方を考えよう」と題して、情報の出どころや内容について確かめ、正しい情報をとらえられる判断力を身に付けるために授業を行った。いくつかのCMの視聴を通して、発信されている情報が本当かどうか考えた。その上で、CMの製作者の意図を話し合った。生徒は「物を売るために大げさに言って魅力的に発信している」「少

しでも売り上げを伸ばすために行っている」と冷静に分析していた。その後、今後はメディアから発信される情報をどのように受け取ればよいか考えた。振り返りには、「情報の根拠を調べようと思う」といった意見がみられ、情報をすべて鵜呑みにするのではなく、落ち着いて情報を確認し、判断したり活用したりすることが大切であると感じることができた。

（イ）授業実践（２年生）

多くの生徒は、スマートフォンを使って自分の好きなキャラクターを送受信したり公開したりするなど、連絡手段以外に日常的にＳＮＳを使用している。しかし、著作権について理解し、意識している生徒は少ない。

そこで、「著作物は誰のもの？」と題して著作権の概要や、著作物との関わり方について考えた。「著作物とどのように関わっていくべきか」という教師の問いかけに生徒は「著作物には人の思いが込められた大切な物なので、使用してよい物か悪い物かを考えることが大切」や「著作者を悲しませるようなことはしたくない」という発言があり、単に法律を守るだけなく、著作者の著作物に込められた思いを考えることが大切であると感じている様子であった。



著作物に関する授業の様子

（ウ）授業実践（３年生）

多くの生徒は、学校生活の中でタブレットＰＣを活用している。各教科の授業だけでなく、休み時間や委員会、部活動でも活用する様子が見られ、生徒自身の情報活用能力が高まっている。しかし、便利になった反面、自分の興味を優先し、目的とは異なる使い方をしてしまう生徒もみられる。

そこで、「みんなにとって気持ちのよい使い方って？」と題して個人用端末の使用によって得られる効果と、実際に使用している中で浮かび上がってきた問題について、実現可能な解決策を考えながら学んだ。活動の振り返りでは「便利だけど悪用もできる、だから正しい使い方をして周りに迷惑をかけてはならない」や「タブレットＰＣの使い方についてあまり考えてこなかったが、自身の行動に責任をもち、みんなと考えが共有できる利点を生かしていきたい」とあり、個人用端末の利点を生かしながら、周りや相手のことを考えながら活用していきたいと感じていた。

②　交通安全に関する取組（地区別生徒会）

本校では、約９割の生徒が自転車で通学している。そのため、毎年４月に地区別生徒会を実施し、登下校時の様子や地区ごとの危険箇所の確認、自転車点検を行うことで、安全に自転車に乗り、ルールを守って登下校する意識を高めている。

自転車点検では、両足は着くのか、ベルは鳴るのか、不要な改造はないのか、反射板は付ついているかなど、複数の点検項目を教師と一緒に確認しながら点検している。

また、地区別生徒会で確認した地域の危険な箇所をその地区の担当者が現場を訪れ、危険なポイントを撮影し、校区の地図に写真を貼り付けて作成した安全マップを配付している。道路の一時停止を守り、急に飛び出したりしないようにすることなど、交通ルールをしっかり守って登下校できるように随時指導している。

③　災害安全に関する取組

ア　避難訓練（地震・火災）

突然の災害に対して適切な行動がとれるように、毎年、年度初めに地震発生、秋に火災

発生を想定した避難訓練を行っている。また、秋の訓練では、消防署の職員を招いて、避難後に代表生徒による水消火器を使用した消火体験を実施している。秋の訓練では、生徒たちは、職員の方から火災発生時の注意事項を聞き、初期消火の仕方について消火器の基本的な扱い方を体験しながら学ぶことができた。

イ　日常生活の中でのシェイクアウト訓練

授業中や休み時間、部活動時など、どのような場面においても適切に行動できることを目的とし、緊急地震速報Ｊアラートの試験放送に合わせて、シェイクアウト訓練を実施している。このように、日常的に訓練に取り組むことで、生徒や職員の防災に対する意識を高めることができている。

④　心の安心・安全に関する取組

ア　ペップトークを生かした生徒保健・環境委員会の実践



学校保健委員会の様子

思春期になり友達関係で悩む生徒が多く、中には体調を崩す生徒もいる。そこで、人間関係を円滑にするために学校保健委員会の中で、「ペップトークでハッピースクールライフ」というテーマで、日本ペップトーク普及協会より講師をお招きして講演会を開催し、全校生徒、教職員、学校三師、保護者が参加した。事前に、生徒の興味・関心を高めるため、保健・環境委員会が全校生徒に「落ち込んでいたり、元気がなかったりする友達に声をかけることがあるか」「それはどのような言葉だったか」など、日頃の自分たちの言葉がけを振り返るためにアンケートを実施した。講演では、実際にペアワークで言葉を交わし合いながら、よりよい言葉の伝え方や、とらえ方を変えて前向きに励ます方法などを全校生徒で考えた。生徒の感想には「実際に部活動の練習試合でペップトークを行ってみたところ、気持ちの面でポジティブになれるだけでなく、体までポジティブになることができ、ペップトークのすごさを感じることができた」「言葉の力はすごいと思いました。『もう無理だ』を『まだできる』といった、マイナスな言葉ではなく、自分が前向きになれるように、ポジティブに捉えることが大事と学んだ」とあり、ペップトークとは、様々な場面の中で元気が出るように励まし、応援する言葉のことであると学ぶことができた。

さらに、学校保健委員会後に生徒の保健・環境委員会がキャンペーン活動としてペップトーク週間」を設け、ペップトークを積極的に使うことを呼びかけた。事後アンケートを実施すると、「部活動の大会で『ドンマイ！次がんばろう』と言葉をかけた」「音楽の歌のテストの前に『楽しんでいこう！』と声をかけた」とあり、ペップトークを実践することができたことがわかった。また、全校生徒の９７％の生徒が「ペップトークを今後も使っていきたい」と考えていることがわかった。このような言葉がけが増えることで、一人一人が認められ、いきいきと活動し、居心地のよい学級づくり、学校づくりにつながり、安心して学校生活を送ることにつなげていきたい。

イ　人間関係づくりをめざした活動（１年・構成的グループエンカウンター）

入学当初は人間関係に不安を抱える生徒も少なくない。そこで、第１学年の総合的な学習の時間の「よりよい学校生活について考えよう」という単元において、よりよい人間関係の在り方と題して構成的グループエンカウンター（以下、ＳＧＥ）を行った。４月の入学当初には、３小学校の生徒が仲よくなれるために、協力すること、コミュニケーションをとることが必要なものをテーマにして取り組んだ。学級において、名前や誕生日を利用した簡単なＳＧＥを行い、その後、同じ活動を学年集団でも行った。４月の後半には、話

し合って協力することが必要なＳＧＥを取り入れ、学級の班で交流することができた。４月当初は、授業の班活動においても緊張してうまく話し合えていなかった生徒も、活動を通して自分から積極的に話し合う様子が見られた。新しい環境の中でＳＧＥを取り入れたことで、学級や学年の中で、よりよい人間関係の構築や、円滑なコミュニケーションにつなげられることができた。

（２） 安全管理について

① 子どもたちの命を守るための取組

ア 救急救命研修（ＡＥＤ）

突然の緊急事態に対応できるよう、職員でＡＥＤ研修を行っている。消防署の職員をお招きし、対象者の状況や必要な措置に関する説明を聞き、人の模型やＡＥＤのモデル機を使用して、体験的に実習した。実際に手順や声かけなどを確認しながら、緊急事態における適切な行動の仕方について学ぶことができた。

イ 食物アレルギー対応シミュレーション研修

食物アレルギーの症状や発症時の対応を学び、緊急時に適切に行動できるように、職員を対象とした食物アレルギー対応シミュレーション研修を行った。藤田医科大学地域連携教育推進センターより講師をお招きし、食物アレルギーの基礎知識とエピペンの使い方を聞いた後、自分のクラスの生徒がアナフィラキシーを起こしたという設定で実習を行った。アレルギー症状を訴えた生徒役、その生徒の担任役、教室内にいた他の生徒役、隣の教室にいた先生役等に分かれてシミュレーションを行った。講師からは、対応のよかった点や改善点を教えてもらい、誰もが緊急時に落ち着いて対応することを学ぶことができた。



食物アレルギー対応の様子

② 生活環境を整えるための取組

毎月、職員による安全点検を実施している。主に施設管理場所の担当ごとに、机や椅子、ロッカーや扉など、細かなチェック項目を設け、破損や異常がないか点検している。異常箇所があった場合には、速やかに修繕するようにし、職員では対応が困難な場合は、専門の業者に依頼して直すようにしている。子どもや職員が安心して備品や施設を利用できるように、職員同士で協力しながら取り組んでいる。また、今後は、３年生による「３年間を過ごした明治中学校に感謝の気持ちを込めて、様々な場所を全員で整え、在校生によりよい環境を引き継ぐこと」を目的として奉仕作業を行う予定である。

（３） 家庭・地域との連携について

校区には道幅が狭く見通しが悪い道路や幹線道路が走り交通量が多い箇所もあるため、保護者と連携して、登校時間帯に通学路の危険箇所で立ち番指導を１年に１２回行っている。特に１年生が自転車通学に不慣れな年度初めや「交通事故０の日」（月の１０日、２０日、３０日）を中心に活動し、生徒が安全に登校できるように努めている。

３ おわりに

生徒や学校、社会は、日々変化し、安全や危機管理に対する考え方や行動の仕方も変化している。学校でも、従前の避難訓練や安全点検に加え、ＩＣＴ機器のよりよい活用の仕方など、生徒が安心安全に生活していくために新たに学ぶべき内容も多い。今後、変化の激しい時代を生き抜くためには、生徒が自他の安全に対して、主体的に考え、行動していくことが、これから生きていく上で必要な資質・能力であると思われる。教育現場である学校として、取り組むべき内容を精選し、実践していきたい。

目次へ

研究主題	自己の学びや成長を実感しながら探究的に学ぼうとする生徒の育成		
副　題	自己調整力を高める振り返りの場の設定や協働的な学びの場の工夫を通して		
学 校 名	稲沢市立治郎丸中学校	校 長 氏 名	近藤　慎二

1　主題設定の理由

現代は、情報化やグローバル化、ＡＩなど先端技術の高度化といった社会的変化がより加速度的に進展している社会であり、このような複雑で予測困難な時代においては、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に関わり合っていく姿勢と、変化を乗り越えるための力を育てていくことが求められる。

本年度から本校では、愛知県総合教育センターと３年間の共同研究で、主体的・対話的で深い学びを実現するための「探究的な授業づくり」の在り方について研究を進めていくこととなった。生徒が自分の学びや成長をこれまで以上に実感しながら、探究的に学ぼうとすることができるよう、単元構想や協働的な学びの方法を工夫して実践を進めていきたいと考え、研究主題を設定した。

2　目指す生徒像

ア　自ら何をどのように学ぶのか判断し、自分の学習を調整しながら、探究的に学習を進めることができる生徒

イ　仲間とつながり、相手の思いや考えを受けとめながら自分の考えを深めることができる生徒

3　研究の仮説

生徒が学ぶ必然性を感じる魅力的な単元や授業を工夫し、気付きを促し自ら学びを深められる活動を設定することで、生徒は自己の学びや成長を実感しながら探究的に学ぼうとすることができるであろう。

4　研究の手だて

⑴　生徒にとって学ぶ魅力や必然性のある「単元を貫く課題・めあて」の設定と振り返り

「やってみたい」「もっと深く知りたい」といった生徒の意欲を喚起することができるような「単元を貫く課題やめあて」を各単元で設定する。また、単元の終末段階における目指す姿（身に付けさせたい力）を明確に示し、生徒と共有することで、生徒が見通しをもって学習に取り組めるようにする。

道徳科においては、「単元を貫く課題やめあて」に代わり、特定の内容項目に関する授業だけを取り上げて小単元化し、授業での学びを一枚のポートフォリオ（OPP）にまとめていく。テーマに対する学習前の考えと学習後の考えを記録することで、道徳授業における自己の学びや成長を実感できるようにする。

⑵　生徒の心をつかむ授業導入の工夫

生徒の疑問や驚き、意外性、憧れなどを引き出すことができるような導入を行い、本時の課題やめあての設定につなげていく。また、生徒の実態や教科の特性に応じて ICT 機器を積極的に活用し、授業の導入を工夫する。

⑶　気付きを促し、学びを深化する「協働的な学びの場」の工夫

自らの学びを次の学習活動につなげ、深めるために、「協働的な学びの場」を工夫する。目的や必要に応じて、グループの形態や編成、座り方、ICT機器の活用など、効果的な方法を工夫する。

5　研究の実際【実践例　全校研究授業　第１学年社会　単元名「ヨーロッパ州」】

⑴　単元を貫く課題について

ヨーロッパ州にはどのような国があるかと問えば、生徒はイギリス、フランス、ドイツなど次々と国名を挙げることができる。また、「アルプス山脈がある」「歴史と伝統のある国が多い」など、地域の特色についても、断片的ではあるが知識として得ている生徒も多い。単元の導入では、ヨーロッパ州について知っていることを自由に述べ合ったあと、EUについて取り上げた。どうしてヨーロッパ州の国々は統合を進めることになったのか。統合によるメリットやデメリットは何だろうと問いかけ、意見交流した。「国境を越えて自由に行き来できる」といったメリットはもちろんだが、「みんなの意見がなかなかそろわない」「本当は反対でも、他の国に合わせなければならない」などデメリットについても多くの意見が出された。様々な考え方に触れ、生徒の中にEUは今後もヨーロッパ州にとって必要であり続けるのだろうかという問いが生まれた。そこで、「ヨーロッパ州は今後も地域統合を進めていくべきだろうか」という単元を貫く課題を設定した。

ヨーロッパ州について、文化、産業、経済、政治や人々の生活といった多様な側面から探究的に学びを深めていけるように単元計画を立てた。

⑵　授業の実際【第５時「なぜイギリスはEUを離脱したのだろうか」】

①　生徒の心をつかむ授業導入の工夫


【資料１】２枚の写真を見比べる生徒

授業の導入で、人々が笑顔で喜んでいる様子を写した２枚の写真を提示し、喜んでいる理由について問いかけた【資料１】。生徒は最初、どちらの写真も同じ理由で喜んでいると考えていた。しかし、片方の写真の人々はEUの旗を手にしているのに対し、もう片方の写真は自国の国旗を手にしているという違いに気付き、そこから考えを広げていった。この写真がそれぞれEUに加盟した喜びと、離脱した喜びの様子を写したものだと分かると、生徒は驚きとともに、なぜイギリスがEUを離脱したのか理由を知りたいという思いを強くもった。

②　気付きを促し、学びを深化する「協働的な学びの場」の工夫


【資料2】ペアでＥＵ離脱の理由を考察する様子

本時の課題は「なぜイギリスはEUを離脱したのだろうか」である。まず、生徒はそれぞれこれまでの学習内容を想起しながら離脱の理由を考えた。途中で、教師がEU加盟各国のGNIを示した資料Aを生徒のタブレットPCに配信し、EU内に経済格差があることを全体で確認した。

次に、EU加盟各国の拠出金の割合を示した円グラフ資料Bと、一人あたりのGDPと移民の移動数、受け入れ者数を示した地図資料Cを同じくタブレットPCに配信した。資料B・Cは、グループ内で分担して読み取るように指示した。ある班

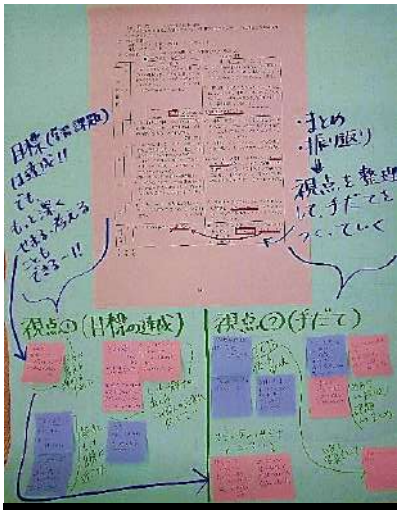
では２人組になって資料を読み取っていた【資料２】。その後、グループ内で読み取れた内容を説明し合い、意見を集約してイギリス離脱の理由をまとめた。資料を読み取ることが難しい生徒には、「拠出金は何に使うお金だろうか」などのヒントを用意し、タブレットPC上で見られるように支援した。


【資料3】代表者による発表の様子

資料の読み取りをグループ内で分担したことで、任された役割を果たそうと真剣に取り組む姿が見られ、話し合いでも進んで意見を述べることができた。班の考えはホワイトボードに書いて前面に提示し、代表者が全体に向けて発表した【資料３】。振り返りは、OPPシートに記入した。OPPシートを用いることで、単元を貫く課題に対する自分の学びの過程や状況を把握できた。本時で学習したイギリス離脱の理由を踏まえて、ヨーロッパ州が今後も統合を進めるべきか否かについて、自分の考えを記述した。

⑶　研究協議

研究協議では、①本時の目標の達成度、②手だての有効性の二つの視点から話し合った【資料４】。



【資料4】研究協議のまとめ

導入では、「意外性のある写真の提示により、生徒の『なぜ？』を引き出していた」「教師が発した『EU離脱の謎』という言葉が生徒の興味・関心を高めていた」など成果が多く挙げられた。本時の学習課題の設定の仕方について、「『イギリスのEU離脱の理由』と限定するよりも、『EU加盟と離脱のどちらがよいのか』と広く設定した方が、探究的な学びにつながるのではないか」という意見が出された。生徒が学びの必要感をもちながら、主体的に学習できるのはどちらの課題がよいかについて、意見を述べ合った。

課題追究の場面では、「資料が限定されていたため学びの広がりが生まれなかった」「苦手な生徒にとってヒントの提示は有効であったが、得意な生徒にとっては物足りなさを感じるので、自分で資料を探させてもよかった」という課題が挙げられた。限られた時間の中で、どのような資料をどれだけ与えるのがよいのか、どこまで生徒に委ねてもよいのか、生徒の実態に応じて吟味することが大切である。

タブレットPCについて、「本時では資料の投影が主だったが、意見交流のツールとして使用してもよかった」「班のまとめはホワイトボードに書くよりもタブレットPCを用いた方が、全員が書いてある内容を把握できるのではないか」との意見が出された。タブレットPCは、全体での意見共有には効果的だが、グループでの対面活動においては、ホワイトボードの方がより直感的にお互いの意見を反映できる面があるため、活動目的に応じて使い分けていきたい。また、タブレットPCは、操作の習熟度により、作業にかかる時間が大きく異なるため、日常的に活用することで、様々な場面でより効果的に利活用できるようにしていきたい。

６　研究の成果

⑴　生徒にとって学ぶ魅力や必然性のある「単元を貫く課題・めあて」の設定と振り返り

○　単元の導入部分において、学習内容に関しての生徒の疑問や気付きをもとに、単元を貫

く課題やめあてを設定したことで、生徒は学びの必然性を感じながら単元の学習に臨むことができた。

○　振り返りにOPPシートを活用したことで、単元を貫く課題やめあてに対する自分の状況を確かめたり、これまでの学習の過程や自分の考え方の変容が捉えやすくなったりして、見通しをもって学習を進めることにつながった。

○　道徳の授業における小単元化とOPPシートを用いた振り返りの蓄積により、学習前後の自分の考えの変容と道徳的価値の理解の深まりが分かり、自身の成長を実感することができた。

⑵　生徒の心をつかむ授業導入の工夫

○　授業の導入場面において、生徒の疑問や驚き、これまでの認識とのずれを味わわせるために、実物を提示したり、比較・対比させたりしたことで、生徒の「分かりたい」「できるようになりたい」という気持ちを生み出し、授業に主体的に関わろうとする気持ちを高めることができた。

⑶　気付きを促し、学びを深化する「協働的な学びの場」の工夫

○　ペアワークやグループ学習の方法を学習内容や生徒の実態の応じて様々工夫したことで、一人一人が当事者意識をもって活動に参加し、互いに考えを伝え合うことにつながった。

○　タブレットPCを資料の提示だけでなく、生徒同士の意見交流や共同作業にも活用することで、生徒の考えを広げ、深めることにつながった。

7　研究の課題

⑴　生徒にとって学ぶ魅力や必然性のある「単元を貫く課題・めあて」の設定と振り返り

●　生徒の多様な考えを引き出し、生徒の意見から単元を貫く課題やめあてを設定できるような単元がどれくらいあるのか、各教科で年間指導計画を見直して、複数の単元で設定できるようにする。

●　振り返りの観点を明確にして単元の指導計画に位置付ける。また、授業内に振り返りを十分に行うことができるように、時間の確保とともに、方法や内容を工夫する。

⑵　生徒の心をつかむ授業導入の工夫

●　授業の導入で、生徒が自ら「問い」をもてるような発問や資料提示を工夫し、本時の学習課題を自分事としてつかみ、学ぶ必要感をもつことができるようにする。

⑶　気付きを促し、学びを深化する「協働的な学びの場」の工夫

●　生徒一人一人が学びの主役となって、「知りたい」「学びたい」という気持ちでペア・グループ活動に参加できるようにする。そのために、「話し合い」「教え合い」ではなく、「聴き合い」「学び合い」となる協働的な学びの場面を設定することで、さらなる探究的な学びにつなげる。

8　おわりに

本年度は、単元を貫く課題やめあてと振り返りの場の設定、授業導入や協働的な学びの場の工夫について取り組んだ。探究的な授業は、従来の教師主導の授業ではなく、子ども都合の授業である。また、探究的な授業では、「問い」を発する主体は、教師ではなく、子どもである。どのように子どもに「問い」をつかませ、自分事として関われるようにしていくのかが、今後の大きなテーマである。

目次へ

研究主題	主体的・対話的に学びながら、深め合うことができる生徒の育成		
副　題	個別最適な学びと協働的な学びを通して		
学校名	知多市立中部中学校	校長氏名	横井　学

1　主題設定の理由

学習指導要領の改訂に伴って、これからの学校には一人一人の生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながらさまざまな社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められている。（平成２９、３０年改訂学習指導要領前文）また、教育課程全体や各教科などの学びを通して「何ができるようになるのか」という観点から、生きて働く「知識及び技能」だけでなくその「知識及び技能」をどのように使うかという、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」や学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱からなる「資質・能力」を総合的にバランスよく育んでいくことを目指している。「新学習指導要領の全面実施と学習評価の改善について」（令和２年１０月文部科学省初等中等教育局教育課程課）、及び、令和３年の中教審答申では、目指すべき新しい時代の学校教育（令和の日本型教育）の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言された。その姿の具体例として、ＩＣＴ機器の効果的な活用や、個別最適な学び（指導の個別化と学習の個性化を学習者の視点から整理した概念）と協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが求められている。そこで、本校の研究主題を「主体的・対話的に学びながら、深め合うことができる生徒の育成～個別最適な学びと協働的な学びを通して～」とした。

2　研究の進め方と取り組み方

(1) 研究の進め方

・「個別最適な学びと、協働的な学び」について理解を深める。

・「個別最適な学びと、協働的な学び」を意識した授業を行い、主体的・対話的に学びながら深め合うことができる生徒の育成に努める。

※学校訪問や研究授業を行う際は、指導案の指導の力点に個別最適な学びや協働的な学びに当たる部分を記載する。

・研究授業の記録や反省を残し、教科内および学校全体で共有し、さらなる授業力の向上に努める。

・指導技術（授業計画、発問、板書、ICT の活用など）の研修の場を充実させ、教職員の授業力の向上を目指す。特に、経験年数の少ない教職員の技術向上を目指す。

(2) 研究の取り組み方

ア　研究授業の実施

・学校訪問で研究授業を行い、授業検討会を通して授業を振り返りながらねらいを達成させるために指導の力点である「個別最適な学びと、協働的な学び」が有効だったか検証する。

・初任者研修、中堅教諭資質向上研修で授業実践する場合や、個人的に研究授業を行う場

合はできる限り空いている先生に参観してもらい、授業を一緒に振り返る。

イ　定期的な現職教育やフレッシュ研修の実施

・「個別最適な学びと、協働的な学び」に関する有効な手立てなどを紹介する。

・１か月に一回程度、６年目までの若手教師を中心とした研修を実施する。

ウ　手立ての詳細（個別最適な学びと協働的な学びの例）

個別最適な学び	協働的な学び
・課題に対して自分で学習方法やまとめ方を決める。 ・疑問に思ったことをネットで調べる。 ・学習用アプリ等を活用して、考えを深める。 ・習熟度別学習で、自分の学習ペースに合わせたコースを選択する。	・学習内容を他者に説明することで、新しい考えを学ぶ。 ・ペア、グループなど生徒同士での学び合いで課題解決に取り組む。

３　実践

第１学年　保健体育科「器械運動（マット運動）」

(1) 生徒の実態

体育で体を動かすことや仲間と協力して技を習得することが好きな生徒が多いが、一方でマット運動に関しては、「痛い思いをしたことがあるから」「体が硬いから」という理由から苦手意識をもっている生徒が多い。

(2) 具体的な手立て

ア　自己の課題に合った練習方法の選択ができるようにすることで、技を完成させるために必要な体の動かし方を習得できるようにする。

イ　異質的なグループ学習と同質的なグループ学習の２つを取り入れることで、多様な視点からアドバイスし合い、学び合える場面を増やせるようにする。

(3) 成果と課題（○成果　●課題）

○　課題別に学習の場を設定したことで、生徒自身で学習活動を決めることができていた。自己決定や自己選択させることが個別最適な学びとなっていた。

●　課題別学習を行わせることで待ち時間が長くなる場面も見られた。待ち時間に撮影した動画を見たり、手本の動画を見て技のポイントを確認させたりするなど指示ができるとよかった。工夫次第で、技を磨くための生徒同士の会話が生まれると考えられる。



〈練習の成果を動画で確認〉

第２学年　道徳科「法やきまりの意義」

(1) 生徒の実態

法やきまりを守ることは大切であると認識している。また、普段から学 校のルールやきまりを守って生活することができている生徒が多い。しかし、一時の感情や 何かやむを得ない事情があれば、法やきまりを破ってもよいと考える生徒もいる。また、発達段階として、親や教師に反感 を覚えたり、法やきまりは自分たちを拘束する、煩わしいものとして反発したりする生徒もいるのが現状である。

(2) 具体的な手立て

ア　立場の違う２通の投書を提示することで、法律を守ることに対しての意識やとらえ方を見つめさせ、さらに法律を守ることについて考えさせる。

イ　話し合いの際、始めに自分の意見と似た者同士で共有し合うことで、意見に自信をもたせ、 その後の異なる意見同士の共有の場面で、話し合いの活性化を図る。



〈ロイロノートで意見を共有〉

(3) 成果と課題（○成果　●課題）

○　気持ちの変容が分かる心グラフや色分けされたテキストカードなどロイロノートを活用して協働的な学びを進めることができた。

○　一般化の話し合いでは、法やきまりに関わる事例をいくつか挙げて、自分の考えたい法やきまりを選択させることで個別最適な学びにつなげることができた。

●　自分の意見に対して、その根拠をしっかり考えさせたり、反対の意見に触れさせることで考えを深めさせたりする十分な時間を確保することができなかった。生徒が考えやすい場を設定したり、提供したりすることが大切である。

全校授業ー行動コミュニケーションー

一般社団法人　行動コミュニケーション協会代表理事　鈴木崇司氏を招き、行動コミュニケーションについて学んだ。現職教育で教員向けの研修会を行った後、生徒に対して全校一斉に授業を行っていただいた。客観的に自分や他者を知ることができ、それぞれのよさを生かして、互いに思いやることの大切さを改めて実感することができた。思考の違いを学　ぶことは、個別最適な学び、協働的な学びを進めていく上でも大切であると考える。行動コミュニケーションを学級経営に生かしながら、よりよい授業実践につなげていきたい。





〈全校授業の様子〉

生徒の感想

・性格が違ったらやっぱり接しにくいと思っていたけど、その性格だからこそいいこともあることに改めて気付くことができました。「みんな違ってみんないい」とはまさにこのことだなと思いました。

・今日話を聞き、相手のことを思いやり理解することが大事だと思いました。今まで考えてこなかった関わり方や相性について学ぶことができてとても楽しかったです。

4　研究のまとめ

普段は互いの授業を参観したり、教材や授業内容について検討したりする時間がなかなか確保できないため、チャットを使って授業者が授業の力点や生徒の様子を日々発信し、教員間で共有し意見のやりとりをしている。今後も、研鑽を積み、個別最適な学び、協働的な学びを取り入れた授業展開の研究を継続していきたい。

目次へ

研究主題	考え、議論する道徳のさらなる推進		
副　題	自分の考えを他者と共有し、議論する活動を通して		
学 校 名	尾張旭市立西中学校	校 長 氏 名	伊藤　彰浩

１　はじめに

平成３１年より「特別の教科　道徳」として実施されるようになってから、６年が経過し、生徒たちは「特別の教科　道徳」を学ぶことが当たり前となってきた。しかし、これまでの流れに影響され、いまだに道徳教育を忌避しがちな風潮があることや、登場人物の心情理解にとどまる形式的な指導が行われる例があることなど、多くの課題が指摘されている。実際にわが校でも、道徳の教材研究について積極的に取り組めている教員は多くはない。また、形式的な指導により、子どもたちの考えも形式化されてしまうことがある。特に「特別な教科　道徳」には決まった正解がなく、正解や結果をすぐに求める傾向のある現代の生徒にとっては、自分の中の正解を探る前にうわべの言葉や当たり障りのない意見を述べるにとどまり、その行動や思いの裏側まで考える前に授業が終わってしまうことがある。

また、本校生徒の現状として、自分の意見を表に出すことが苦手な生徒が多いことや、発言を求められても答えることができない生徒が一定数いること、劇場型の授業展開にせざるを得ない状況がある。このままでは、「考え、議論する道徳」を実現させることは難しい。

そこで「学習指導要領　特別の教科　道徳」の目標をもとに授業展開を見直しながら、「考え、議論する」機会を設け、自分の考えを表出するための手立てを講じることとした。

２　研究の内容

⑴　手立て

ア　授業展開を見直し、考え議論する道徳授業をつくるための手立て

「学習指導要領　特別の教科　道徳」の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解をもとに、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」である。目標になぞらえて、

①　この授業のテーマは何かを明確にする（道徳的諸価値の理解）。
②　テーマに対する自分の考えをもつ（自己を見つめる）。
③　自分以外の考えに触れる（物事を広い視野から多面的・多角的に考える）。
④　これからの自分について考える（人間としての生き方についての考えを深める）。

この４ステップを繰り返し行うことで、授業展開がつかみやすくなり、生徒も流れがわかり取り組みやすくなることをねらう。

イ　自分の考えを他者と共有し、議論を深めるための手立て

４人班をつくり話し合い活動を行う。それぞれに役割を与えることで、確実に自分の考えを表出しながら、他者の考えに触れ、考えを深めることをねらう。

①Ｆ（ファシリテータ）Ａの考えをより深めるために質問をしていく役割。
②Ａ（アンサー）　自分の考えを述べ、Ｆからの質問に答えていく役割。

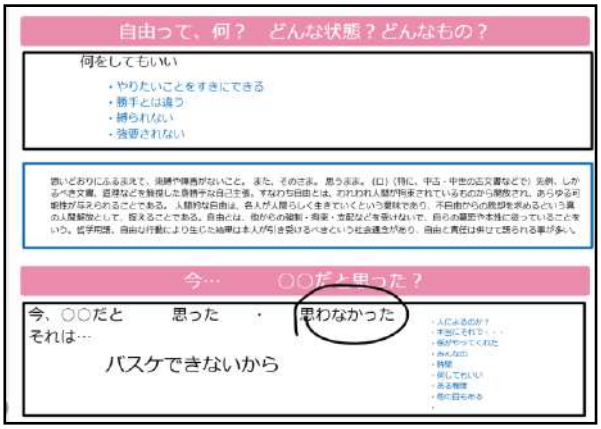
③Ｓ（書記）　学習用ホワイトボードにＡの意見を記入する役割。
④Ｆ２（ファシリテータ２）Ａの考えを全肯定する役割。Ｆの手助けも行う。

⑵　実践の内容

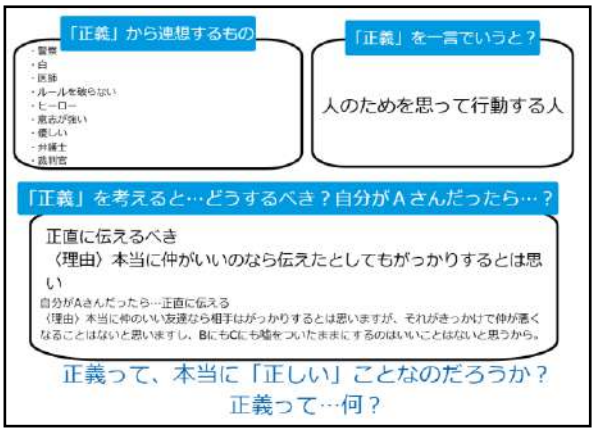
ア　授業展開を見直し、考え議論する道徳授業をつくるための手立て

下記の表のように、①～④の流れをもとに授業展開を考える。形が決まると、主発問を考えることに時間を割くことができるようになった。また、生徒たちは考えることが焦点化されることで考えやすくなったり、他者の考えを知ることで考えを表出する手助けになったり、④の段階で考えが変わったり深まったりする姿が見られるようになった。

	A　自由と責任	C　公正・公平・社会正義
①この授業のテーマは何かを明確にする	「自由」に対するイメージを問う	「正義」から連想するものを考える
②テーマに対する自分の考えをもつ	「自由」とは何か、スクールタクト（学習支援アプリ）に記入する	「正義」を表す一言を考える
③自分以外の考えに触れる	共同閲覧モードで他の意見を知る 実際に５分間「自由」に過ごす	登場人物の立場になって、自分ならどうするかを話し合う
④これからの自分について考える	改めて「自由」とは何かを考える	改めて「正義」とは何かを考える



【　図１　スクールタクトの記入例①　】



【　図２　スクールタクトの記入例②　】

イ　自分の考えを他者と共有し、議論するための手立て

【話し合いの流れ】
①４人班を作り、図３のように役割を分担する。
②「今日のお題」として主発問を伝える。
③教師の合図で、Ｆが今日のお題を問う。
④Ｆの問いに対し、Ａが答える。
⑤Ｆは質問の技カードをもとに追質問をし、Ａが答える。
⑥ＳはＦとＡの会話をホワイトボードに記入していく。
⑦Ｆ２は相槌をして、話しやすい雰囲気をつくる。
⑧時間で区切り、④へ戻る。図４のように役割を動かす。

S	F2
A	F

【図３　はじめの役割分担】

Ｆが時計回りに動く。
Ｆを基準に、Ｆの前がＡ、
Ｆの隣がＦ２、Ｆの対角
にＳがくるように動く。

F2	S
F	A

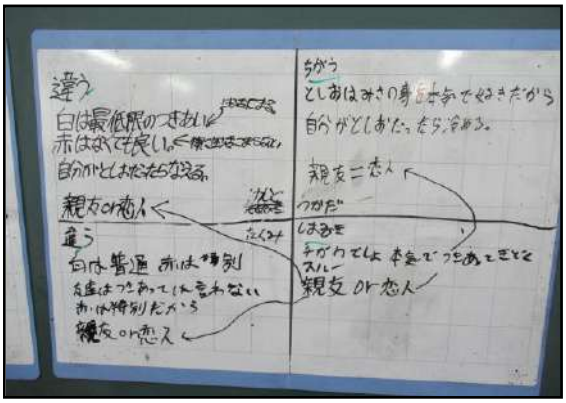
【図４　２回目の役割分担】

この活動を毎時間取り組むことで自分の考えを伝えることにまずは慣れていった。その後、４人の考えを比べたり、その中庸を探したりする活動につなげていった。

授業の振り返りの中で「今まで思いやりのある行動だと思っていたけど、みんなの話を聞いておせっかいにもなることがあるのだと思った」「みんなの考えを聞いて、ただ楽しいだけが友達ではなくて、信頼できるかどうかが大切という考えもあると知った」など、視野を広げることにつながった。また「今まで、働くなら給料が高いほうがいいと思っていたけど、人脈が広く、助け合える職場を重視する方がいいなと思った」など考えが変容していった生徒もいた。



【　写真１　話し合っている様子　】



【　写真２　話し合いをまとめたホワイトボード　】

３　研究のまとめ

「考え、議論する道徳」をテーマに研究を進め、学級の様子や行事等に合わせた教材選びや、考えやすい発問の工夫を模索しながら、実践を組み合わせた。よりテーマを理解しやすい導入の仕方や、心情メーターや場合分けなどＩＣＴの効果的な活用、話し合いの場の設定と方法の確立など、生徒が自分の考えをもち、他者の考えを受け止める中でさらに自分の考えを深めていくことや、他の教科でも、ペア活動やチームで取り組むことが行えるなどの有効性が見られ、一定の成果を得ることができた。

しかし一方で、時間配分がうまくいかないケースが多かった。意見交換に時間を割いてしまい、改めて自分の考えを深める時間を確保することが難しかった。班の中で意見を伝えあうことができるようになってきたからこそ、さらに広げる活動まで行い、より多くの考えに触れ、考えを深めるきっかけを与えられる授業にしていく必要がある。

今年度明らかになった改善点をもとにさらに教材研究を深め、よりよい授業を展開できるよう追求し、引き続き「考え、議論する道徳」を創り上げられるようにしていきたい。

目次へ

研究主題	誰一人取り残されない学校を目指して		
副　　題	タブレット端末を活用した不登校対策		
学 校 名	日進市立日進中学校	校 長 氏 名	武田　光史

1　はじめに

本校では、授業改善の一つとして教師のタブレット端末の活用能力の向上と、授業改善を積極的に進める意識改革を進めている。

今後は不登校対策としてもタブレット端末活用していけるのではないかと考え、不登校生徒の現状や課題を把握するとともに、「誰一人取り残されない学校」の実現に向けて、タブレット端末の有効な活用方法を不登校対策と関連付けて研究を深める必要があると考え、本主題を設定した。

2　研究方法

生徒一人一人の学びを最大限に引き出す支援を意識して、積み重ねてきた実践とＩＣＴを活用した生徒の個別最適な学びを支援する方法を提案する。その最適な方法を教師が実践することで、学びを支援する環境を整え、教師の取組の増加を図る。

3　事前・事後アンケート

○　６月と９月に授業を行っていた教師に次のアンケートを行った。

> １～３の取組について、実践していますか。最も当てはまるものを答えてください。
> 1　積み重ねてきた実践とＩＣＴを活用した生徒の居場所づくり（環境的・物理的・心理的）や支援
> 2　積み重ねてきた実践とＩＣＴを活用した生徒の個別最適な学び
> 3　積み重ねてきた実践とＩＣＴを活用した生徒の協働的な学び

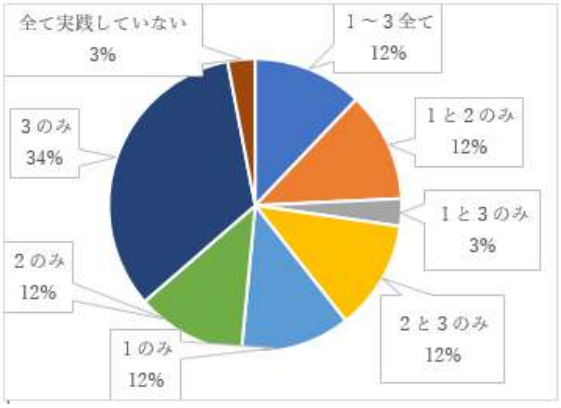


図1　事前アンケート

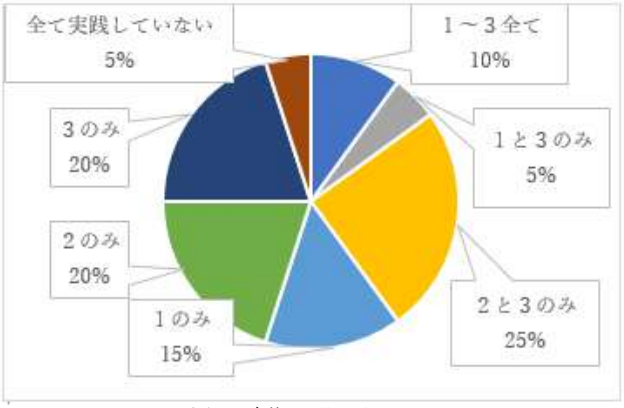


図2　事後アンケート

アンケートの結果から、「２」と「３」のみが 12%から 25%へ、「２」のみが 12%から 20%に変容したことが分かった。また、「２」の積み重ねてきた実践とＩＣＴを活用した生徒の個別最適な学びについて、実践している教師が増えていることが分かった。

4　研究の実際

培ってきた実践とＩＣＴを最適に組み合わせた支援策として、本校では授業支援アプリケーションソフトとしてＳＫＹＭＥＮＵを利用している。現職教育では、一人一人が学ぶ意欲がもてる

ように、ＩＣＴの効果的な活用と個々の生徒の状況に合わせた学びついて、研究を進めた。

（1）　ＳＫＹＭＥＮＵの発表ノートによる授業改善

実態：　発表ノートでは、考えを記述したり、観察や記録のまとめを提出したり、情報共有などを行ったりしている。ただし、入力が終わった後に、提出箱に提出しないと情報を共有することができない。また、作成途中で提出することが難しいため、授業後に提出することを忘れる生徒が見られた。

内容：①　作業中のノートをリアルタイムで共有することができる、ライブ公開提出箱を活用する。

②　ツールであるスタンプを活用したノートづくり。

結果：　入力する前に提出することができるため、リアルタイムで情報を共有することができた。スタンプを活用することで、自分の意見をノートがまとめやすくなった。生徒の意欲を引き出し、個別最適な学びを引き出せるような授業につながった。（図３）また、授業後に提出し忘れることが少なくなった。

（2）　タブレット端末を利用した遠隔授業

実態：　本校では、さまざまな理由で教室に入れない生徒がいる。市の不登校支援として今年度から正式に校内ハートフレンド（教育支援センター）が設置されている。校内ハートフレンドでは、自主学習が中心であるが、教室に復帰するための支援に取り組んでいる。

内容：　タブレット端末を利用したオンライン授業を行う。

結果：　タブレット端末をＺｏｏｍでつないで授業を実施した。（図４、５）これをきっかけとして、教室に復帰できる生徒が現れた。授業の場面によっては、教師の話が聞きとりづらいことがあった。また、オンライン授業に対応できる端末の台数が限られており、全ての授業で実施することは難しい。



図３　ライブ提出箱の利用の様子



図４　遠隔授業の様子



図５　別室で遠隔授業の様子

５　考察（まとめと課題）

アンケート結果から、「２」の積み重ねてきた実践とＩＣＴを活用した児童生徒の個別最適な学びについて、実践することができる教師が増えていることから、個別最適な学びについて、教師の意識の高まりを感じることができた。

培ってきた実践とＩＣＴを最適に組み合わせた支援策として、多くの教師がＳＫＹＭＥＮＵの発表ノートを活用して授業改善を行うことができた。今後も随時アップデートされる機能を積極的に利用することで個別最適な学びを目指し、魅力的な授業を増やすことで不登校対策につなげていきたい。また、オンライン授業では、授業の場面によっては、教師の話が聞きとりづらいことがあった。また、オンライン授業に対応できる端末の台数が限られており、全ての授業で実施することが難しいなどの環境面での課題が残った。今後も、教師の声が聞き取りやすくなるようにスピーカーを購入するなど、環境面を整えながらオンライン授業を行い、不登校対策につなげていきたい。

目次へ

研究主題	主体的に学級づくりをする生徒の育成		
副　　題	学級活動における「学級力アンケート」を用いた話し合い活動を通して		
学 校 名	日進市立日進西中学校	校 長 氏 名	大津　正仁

1　研究の概要

これからの時代を生き抜いていくためには、人間関係調整力を育んでいくことが大切である。生徒同士が認め合い、信頼関係を高めていくことができれば、よりよい学級をつくることができると考える。そこで、「学級力アンケート」を用いた話し合い活動を行う。この活動を行うことで、生徒自身が学級の現状を把握したり、他の生徒がどのように評価しているかを客観的に理解したりできるようになり、主体的に学級づくりをする生徒が育成されると考えた。

2　研究の実際

（1）学級力向上プロジェクト

日進市の小中学校では、「学級力向上プロジェクト」に取り組んで２年目となる。「学級力向上プロジェクト」とは、「明日からも来たくなる明るく安心できるクラス」をつくるために、子どもたちが学級づくりの主人公となって教師と子どもたちが協力して学級づくりを行える、早稲田大学教育・総合科学学術院教授田中博之氏が提唱している学級経営のシステムである。これを受け、「支持的な学級風土を育み、学び合う仲間としての学級」に迫るために、子どもが見出した課題を中心に話し合い、よりよい学級について考え、学級力を高めることを目指している。（「支持的」とは、「失敗を恐れず、発言や行動ができる環境であり、他を認め、助け合う姿が見られること」と定義している。）

「学級力向上プロジェクト」では、「学級力アンケート」を用いて、生徒が主体的に話し合い活動を行う。アンケートの大項目は「達成力」「自律力」「対話力」「協調力」「安心力」「規律力」の６つあり、項目ごとに、４つの観点から評価する。研究の実践の前後でアンケートを行い、生徒の評価をもとに作成したチャートを示し、学級の課題について自分たちで気付き、解決策を考えさせる。

（2）人間関係調整力の向上を目指した講演会の開催

愛知県小中高スクールカウンセラーの山口力氏をお招きし、講演会を開催した。講演では、「わすれもの」をテーマにご講演いただき、次のことが話題にあげられた。

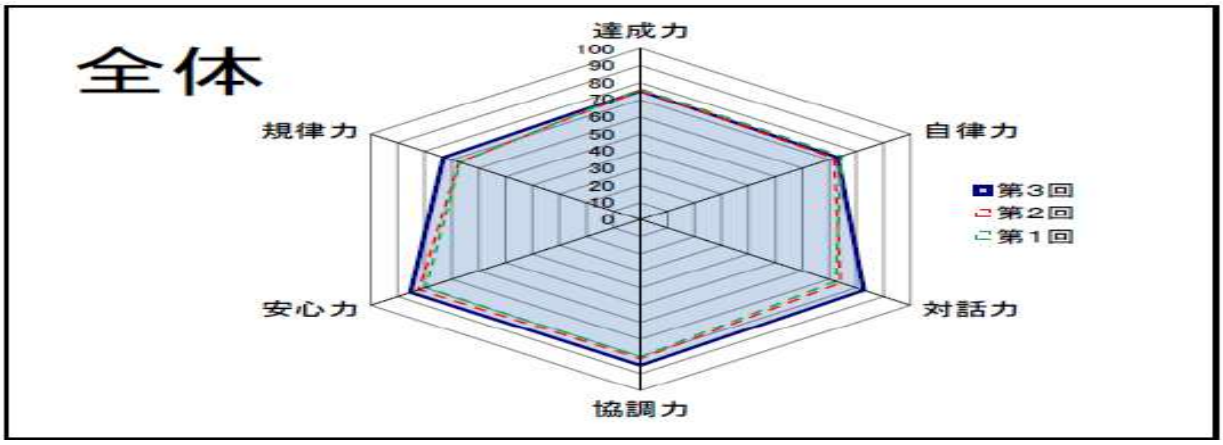
・スマホとの向き合い方
・勉強の仕方
・フェイクニュース
・実際にあった人間関係トラブル
・相談する力＝生きる力
・「競争」ではなく「協走」
・劣等感を終わらせるために必要なものが「ありがとう」と「ごめんなさい」
・みんなで失敗できる学級

３　研究の考察

（１）学級力向上プロジェクト

「学級力アンケート」は、「学級力アプリ」を利用すると、瞬時に次のようなレーダーチャートができあがる。【資料】

ある学級では、１学期に第１回アンケートを行った際には、「対話力」や「規律力」が低い値を示していた。しかし、生徒主体で行う話し合い活動を重ねたことで、生徒の意識に変化が見られ、３学期に行った第３回アンケートでは、【資料】が示すように、「対話力」の数値が上昇した。



【資料】「学級力アンケート」の結果のレーダーチャート

研究を始めた頃は、生徒も教師もただ単に「学級力アンケート」で可視化されたレーダーチャートの輪の中で低いところに目を当てていただけだったが、２年間継続して取り組んでいく中で、考え方が変わっていった。子どもたちは「自分の学級」という帰属意識が芽生え、「この学級を良くしたい」「自分にとってだけではなく、学級の仲間にとっても過ごしやすくなるように」と学級全体に目を向けるようになった。レーダーチャートを不確実で流動的な数値として捉え、子どもたち自身が教師とともに学級をつくり出していく手段となった。アンケートを取ることで、学級を生徒全員で評価したことも大変良かった。客観的に出てきた課題を全員で目に見える形で捉えることができ、改善策を自然な形で考えていくことができた。学級会では、一人一人の生徒が自分自身の意見を伝えたり、他者の意見を受け入れながら自分自身の考えを深めたりすることができた。

（２）人間関係調整力の向上を目指した講演会の開催

スマホを例に話が始まるなど、生徒の興味関心のある話題が豊富であり、親しみやすい内容ばかりであった。講演会の最中、生徒は常に笑顔であり、主体的に自分自身や学級のことを考えたり、話し合ったりすることができていた。

４　研究のまとめ

学校全体として、「教師が学級をつくる」という雰囲気から「生徒が主体的に学級をつくる」という雰囲気に変わっていった。今後も、これからの時代を生き抜いていける人間関係調整力を育ませるために、主体的に学級づくりをする生徒の育成に力を注いでいきたい。

目次へ

研究主題	「生きる力」を育む防災教育		
副　題	～震災・津波被害現場から学んだことを、自分事として捉える活動を通て～		
学 校 名	愛西市立佐屋中学校	校 長 氏 名	吉次　章浩

１　はじめに

本校は、昭和２２年に開校し、今年で７７年目を迎えた。愛西市の南東部に位置し、学級数２０、生徒数５２６名（12/1 現在）の中規模校である。本校では、「感謝の気持ちをもち、命を大切にできる生徒」「失敗からも学び、よりよい行動ができる生徒」を目指す生徒像とし、複雑で予測困難となってきている世の中においても、生徒がたくましく生き抜くことができるよう、「生きる力を育む」を校訓としている。

愛西市では、「ひと」や「もの」、「実社会」など対象となる実物に関わっていく「直接体験」が重要という考えのもと、中学生体験学習（東日本大震災被災地視察）が昨年度より実施されている。本校としては、本事業を通じて、中学３年生が東日本大震災被災地を視察する中で、被災者と出会い、当時や現在の状況を直接見聞することにより、生徒が自分や自分の周りにある問題を発見し、どうすれば解決していくことができるかを考える、「生きる力」を育みたい。

併せて、南海トラフ巨大地震等の有事の際、地域が一つのまとまりとなって災害に対応することができるよう、「共助」の重要な担い手として、生徒が地域との「絆」を深める一助となるよう指導したい。さらに、教職員一丸となって学校安全をすすめていく上で、自治体や地域団体の活動とも連携しながら、より実際に即した訓練や安全教育の実施、従来想定されなかった新たな危機事象の出現などに応じて、学校安全の在り方を柔軟に見直していきたい。

２　実践の計画

月	活動計画	関連行事
4	組織作り、施設・器具の使用法の確認及び点検　学校防災委員会・現職教育（防災）	
5	第１回避難訓練（避難心得、避難経路確認）	
6	「愛西市中学生体験学習事業」（東日本大震災被災地視察）	
7	第２回避難訓練（地震想定）、引き渡し訓練	
9	学校防災委員会・現職教育（防犯）	防災の日
１０	文化祭「中学生体験学習事業発表」	防火運動
１１	３回避難訓練（無告知避難訓練）・「愛知県・愛西市　津波・地震防災訓練」	
１２	愛西市日赤奉仕団「炊き出し訓練」	
3	校内放送によっての広報活動	火災予防運動

３　実践の概要

⑴　校内現職教育　「ー災害が起きた際に取るべき行動についてー」

年度当初に、校内現職教育として、保健指導部会による「ー災害が起きた際に取るべき行動についてー」という職員研修を行った。

本市を含む愛知県において、多大な影響を及ぼす地震として、南海トラフ巨大地震や活断層による巨大地震の発生が懸念されている。また、本市の地盤は、沖積層が厚く、軟弱で、ほぼ

全域がゼロメートル地帯となっている。大地震時には地震動により、地盤の亀裂、沈下、液状化現象などの地盤破裂が発生する可能性が高く、家屋の倒壊、水災や火災、その他人命の損傷などの災害が広範に生じるおそれがあることを確認した。



このような状況において、本校として、より実際に即した避難訓練を行うべきとして、教職員の取るべき行動について、昨年度よりいくつかの見直しを行った。具体的には、避難人員の確実な把握（欠席者の把握）方法の改善、校内の各ポイントにホワイトボード・マーカー等を設置し、各フロアの避難完了を目視できるようにすること、さらに、本年度、生徒の安全な避難のため体育館シューズを持たせること（そのために常時机の横に体育館シューズを掛けておく）などを見直した。

⑵　学校保健部会



本校では、毎週学校保健部会を行い、避難訓練の計画をはじめとした年間を通した学校安全教育の推進に努めている。とりわけ、本年度は新たな試みとして、大規模地震発生時における生徒引き渡し(引き取り)訓練を実施するため、昨年度より準備・計画をすすめてきた。各取組の実施後は、職員、生徒にアンケートを実施し、次年度に向けてさらなる見直しをすすめてきた。

⑶　「愛西市中学生体験学習事業」（３年生修学旅行）



６月に、中学３年生が愛西市の中学生体験学習事業として、東北地方へ東日本大震災被災地視察を行った。４月より、総合的な学習の時間を活用し、防災事前学習をすすめてきた。そして、実際に気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館、三陸復興国立公園岩井埼海岸、3.11みらいサポートなど被災地を訪れ、語り部の方から話を聞いたり、当時のまま残された遺構を見学したりした。このような直接現地で見聞きする「直接体験」をすることで、防災について事前学習をしてきたことを、より自分事として受け止めることができる貴重な経験となった。

⑷　大規模地震発生時における生徒引き渡し（引き取り）訓練



愛西市では、生徒が登校後に大規模な地震（震度５弱以上）が観測された場合などに、生徒を速やかに帰宅させたり、家族や代理人に引き渡したりすることを保護者へ通知している。この対応をふまえ、本校では、生徒引き渡し（引き取り）訓練を本年度初めて実施した。年度当初に、保護者に「下校方法確認書」提出してもらい、引き渡し（引き取り）を希望した生徒は学校に待機させ、保護者（代理人）の確認ができた生徒から順次引き渡していった。昨年度の準備・計画から、

本年度の綿密な打ち合わせ・シミュレーション、保護者への周知を徹底した結果、スムーズに実施することができた。当日は、職員間の連絡をスムーズに行うため、小型トランシーバーを活用した。また、保護者への連絡として、本年度から本格的に運用している保護者連絡アプリを活用して、引き渡し（引き取り）のタイミング等を連絡した。

本年度は、運動場を車の待機場所としたため、よりスムーズに実施できたが、本市で懸念されている液状化現象や浸水により、運動場が使用できないことも想定されるため、次年度以降、運動場を使用しない引き渡し（引き取り）訓練についても検討していきたい。

⑸　保健室前掲示板（防災）

９月の「防災の日」をふまえ、保健室前の掲示板に、防災に関するコーナーを設置し、生徒に、いざというときには、「自分の身は自分で守る」ことなどについて啓発した。







⑹　文化祭総合発表（３年）



１０月、３年生の代表者が、「愛西市中学生体験学習事業」で学んできたことを、文化祭の場で全校生徒に発表した。代表生徒は、今回の震災学習を経て、「語り部として伝えてくださる被災者の親族の方々の多くは『とても辛い思いをした。でも、そのことを多くの人に伝え、同じ思いをしてほしくない』という思いで、このような活動をされていたことを知った」「いつ起こるかわからない自然災害の恐ろしさを知り、命の大切さを実感した。どんなときでも家族や周りの方に感謝の気持ちしっかりと伝えていきたい」など、実際に被災者の方に会い、話を聞かなければわからない思いを、全校生徒に伝えることができた。

⑺　愛知県・愛西市　津波・地震防災訓練



１１月、地震及び津波被害時における総合防災体制の確立及び県民の防災意識の高揚を図ることを目的として、愛知県と愛西市による合同訓練が行われた。

本校もメイン会場のひとつとして実施され、体育館では、３年生の代表が地域住民に対して、愛西市中学生体験学習事業を含めた総合的な学習の時間で学んできた防災学習についての発表を行った。

⑻　無告知避難訓練



１１月、生徒や職員に事前の予告をしない「無告知避難訓練」を実施した。本年度は、昼の清掃活動の時間に巨大地震が発生したという想定としたが、職員も生徒たちも、落ち着いた避難行動をすることができ、運動場での集合や人員確認をしっかりと行うことができた。また、「けが」や「気を失った」ことなどにより、

「逃げ遅れた生徒」を複数か所に設定したが、職員はそうした状況に対して、連携をとりながら対応することができた。

⑼　愛西市赤奉仕団炊き出し訓練

１２月、愛西市の日赤奉仕団佐屋分団による炊き出し訓練が行われ、本校の生徒も有志で参加した。災害時に食器等がなくても簡易に米を炊くための訓練が行われた。炊き出しの準備を終えると、AED を含めた心肺蘇生法の講習や、毛布を使ったガウン・簡易担架の作り方、段ボールベッドの組立、簡易テントの組立などを行った。地域団体とも連携しながら、「自助」「共助」について実体験をしながら学ぶことができた。



４　実践の成果と課題

昨年度より始まった本市の中学生体験学習（東日本大震災被災地視察）を含め、これまで本校の学校安全教育について、より実際に即した対応や防災教育の見直しを行ってきた。

とりわけ、保健安全指導部会を中心に、現職教育校内研修を実施したり、避難訓練や引き渡し（引き取り）訓練を、実際に想定される困難や混乱を想定しながら計画・シミュレーションを重ねたりしてきたことにより、教職員の防災教育及び学校安全管理に対する意識の高揚が図られたことが、大きな成果であった。無告知避難訓練における教職員の反省からは、「巨大地震が発生した場合は、校内放送が使用できない可能性もあるため、より実際を想定した避難指示の方法を考える必要がある」「本校の運動場は液状化・浸水する恐れがあるため、体育館に避難する方が適切では」「逃げ遅れた生徒がいた場合、誰が救助に向かうのか、より詳細に確認しておきたい」など、さらなる改善の必要性を訴える意見が多く出た。このように、巨大地震がいつ発生しても対応できるよう、教職員が自分事として捉えている姿勢が生徒にも伝わり、生徒自身も各種訓練に真剣に取り組むことができたと考える。

無告知避難訓練の生徒の反省からは、約９割の生徒が、「緊急放送が入ったとき、すぐに行動を止めてシェイクアウトできた」「『お・は・し・も』の４原則を守ることができた」「避難後は静かにして周りの動きに協力できた」と回答した。一方で、清掃時間中の訓練であったため、「近くに先生がいなかったため、避難が不安だった」「本当に巨大地震が起こったら、慌ててしまいそう」「廊下に清掃道具が散乱していたため、実際に地震が発生したら、避難の妨げにならないように除けておかなくてはならないと思った」など、生徒自身も、より実際を想定した感想を記載していた。

南海トラフ巨大地震や活断層による巨大地震の発生が懸念されている状況において、常に自分事として防災・減災にむけた取組をすすめていかなくてはならない。液状化現象や浸水時への対応、放送機器・通信が遮断された際の対応など、本年度の取組で浮き彫りになった課題をふまえ、より実際に即した避難訓練や引き渡し（引き取り）訓練とするため、課題に対応した防災計画の見直し・改善を引き続きすすめていきたい。

さらに、今後の大きな課題である、学校が避難所となった際の行政との連携や、その先の学校再開に向けた動きについても、今後マニュアルの整備等をすすめていかなければならない。

今後も、教職員全員が、「直接体験」を含めた防災教育をすすめていき、どのような困難な状況においても、生徒がたくましく生き抜くことができる「生きる力」を育んでいきたい。

目次へ

研究主題	自ら考え、ともに認め合い、学びを深める生徒の育成		
副　題	学びをつなぎ、絆をつなぐ活動を通して		
学校名	愛西市立八開中学校	校長氏名	市川　昇

1　はじめに

価値観が多様化し、グローバル化・デジタル化が急速に進み、先行き不透明な未来が予測される中、学校では、とりわけ人材育成の観点から個性に合わせた学びや協働的な学びの必要性が叫ばれている。

本校は、蓮田が広がる農村地帯にあり、全校生徒９０名、学級数５（特別支援学級２クラス含む）の小規模校である。素直で穏やかな生徒が多いが、幼少期からの固定化された人間関係や人と関わる経験の少なさから、自分自身に自信がもてず、活発な議論ができない場面が見受けられる。また、指示されたことには前向きに取り組むが、積極的に発言する生徒は限られる。学習アンケートで、「ＩＣＴ機器を利用すると、話し合いや全体での発表がしやすくなる」と答える生徒が多く、その理由として、「友達の意見や考え方を画面で共有できるから、説明しやすい」「友達の意見を知り、自分の考えに自信がもてる」と感じていることが分かった。

一方、文部科学省初等中等教育局視学官　田村　学　氏によれば、「主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を進め、課題の解決に取り組む学習活動を行っている学校ほど学習場面でＩＣＴ機器の活用頻度が高く、そのような場面で課題解決に向けて自ら取り組んだ生徒ほど正答率が高い」と述べている。

そこで、ＩＣＴ機器を積極的に活用することで、生徒が自信をもって自分の考えを表現し、仲間と考えを共有しながら課題解決に取り組む姿を期待し、各教科において授業改善を行うこととした。また、関わりのスキルを高めるための活動を並行して行い、ともに認め合い、学びと絆を深められる生徒の育成に取り組んだ。

2　研究の方法

（1）　目指す生徒像

・自ら考える　：　学ぶことに興味・関心をもち、主体的に考える生徒
・ともに認め合う：　互いの考えを認め合い、自己肯定感を高める生徒
・学びを深める　：　多様な考えを比較検討・関連付けをしながら理解を深め、「わかる」と感じる生徒

（2）　研究仮説

各教科の授業において多くの価値観に触れて認め合う場を設定したり、絆を育む活動を通して互いの良さに気付く機会を多く設定したりすれば、生徒は自己肯定感を高め、主体的に取り組むことができるようになるであろう。

（3）　研究の手立て

①　協働的な学びの充実（課題提示や授業展開を工夫）
②　ＩＣＴ機器を活用した学習活動の工夫
③　系統立てたコミュニケーションスキルトレーニングの継続

3　研究の実際

（1）　２年数学「図形の性質と証明（三角形）」の実践

①　協働的な学びの充実

ア　課題提示の工夫

前章「図形の調べ方」を通して、図形の性質や三角形の合同条件、証明することの意義と意味及びその方法について学習した。

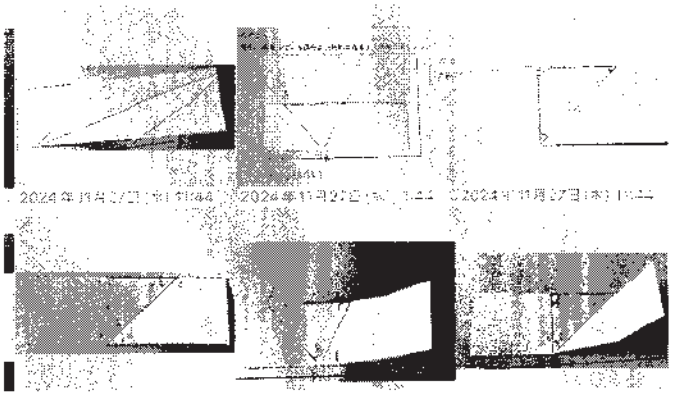
本実践は、前章の学習を生かし、図形の性質や三角形の合同条件を用いて三角形の基本的な性質を論理的に確かめたり、証明を読んで新たな性質を見出したりする学習内容である。本実践で取り上げる二等辺三角形に関する性質の多くは、小学校で学んでいる。「分かりきっているのに、なぜ堅苦しく説明し直すのか」という疑問をもたせないために、常に証明の必要性と意味を確認させた。そして、証明問題に抵抗なく主体的に取り組めるよう、生徒にとって身近なものやことがらの中から課題を提示することにした。



資料１　話し合う姿

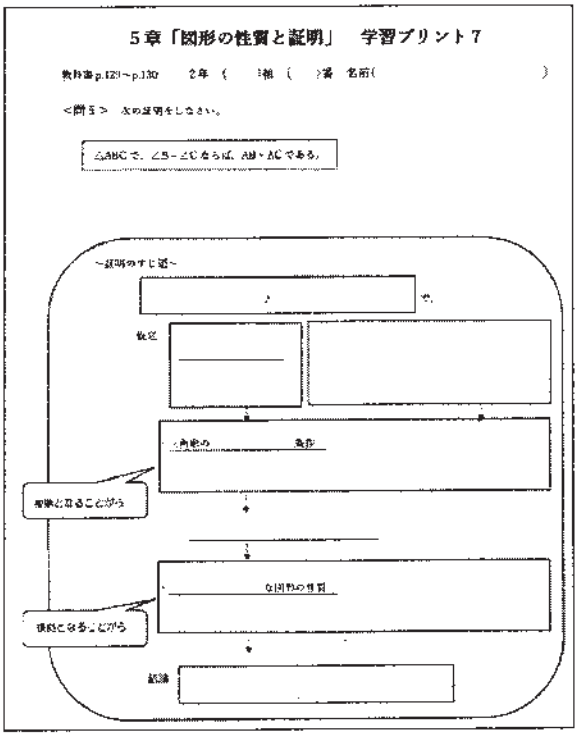
第１時の導入では、命題や命題の逆を考えさせる時間を設定した。『10000 は大きい数字である』と命題を示し、それぞれの理由を生徒同士で話し合わせた。（資料１）すると、「1 や 100 のような数字と比べると 10000 は大きい数字になるよ」「お金（紙幣）で考えると一番大きいよ」「1 億や 1 兆に比べると大きいとは言えない」などの具体例や、「10000 を、仮定として大きい数字であると結論とすると、その逆は、『大きい数字は 10000 である』になる」と命題の逆を理由に考える生徒もいた。意見交流を通して、正しい判断のためには、様々な条件のもと、根拠を明らかにして証明し、必ずそれが成り立つと言えることが必要だと気付かせることができた。

第３時は、２角が等しい三角形についての学習を行った。導入では、生徒全員に付箋を配付し、重なっている部分が三角形になるように折らせた。（資料２）そして、その三角形の部分を直線で囲ませ、三角形の特徴を個人で考えさせた。生徒全員の三角形をタブレット端末を使って共有すると、自分の三角形の特徴が、友達の三角形にも当てはまるかを考える姿が見られた。



資料２　付箋を折ってできた三角形

「三角形の形はそれぞれ違うが付箋の辺は平行だから、錯角は等しくなる」「∠ｂと∠ｃは、錯角なので、角の大きさが等しくなるのでは」「どの折り方をしてもＡＢとＡＣの長さが等しい」「２角の大きさがそれぞれの三角形で異なる。ＡＢとＡＣの長さが等しくなっているのはどうしてだろう」という反応が見られた。そこで、『△ＡＢＣで、∠Ｂ＝∠Ｃならば、ＡＢ＝ＡＣであることを証明しよう』という学習課題を提示した。実際に付箋にできた三角形に関する生徒の気付きをつなぎ、本時の学習課題をはっきりとさせることができた。



資料３　証明のすじ道

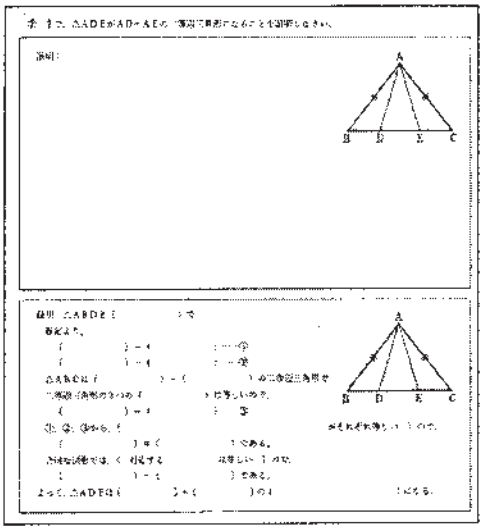
イ　授業展開の工夫

課題に対する考えを段階的に深めていけるように、証明のすじ道を考え確認する活動を行ってから、証明する活動に取り組んだ。

第３時の証明のすじ道では、プリントを使用して、「三角形の合同条件を使えば、合同な図形の性質から、

ＡＢ＝ＡＣであることがいえるのではないか」「∠Ａの二等分線を引くと合同な三角形ができる」などと、結論を導くために必要な条件や性質を、根拠となることがらとして押さえることができた。（資料３）

証明をする際には、各自の力に応じて取り組むことができるように、自由に記述することができる枠と、穴埋めで考えることができる枠を用意した。（資料４）記述方法を生徒自身が選択できることで、証明に意欲的に取り組む生徒が増えた。証明が完成すると、合同な三角形を示す以外に、ＡＢ＝ＡＣであることがいえる方法を、さらに追究する生徒が見られた。



資料４　選択できるワークシート

すじ道を考える活動、証明をする活動、どちらの活動も「個人→グループ→全体」の流れで行った。個人の考えを記入した後、３・４人の少人数グループで互いの考えを伝え合うことで、話し合いに参加しやすくなり、自分の意見と比べたり、質問したりと学びを深める姿が見られた。そして、自分の考えに自信をもつ生徒が増えた。全体の話し合いでは、学習プリントをモニターに映し、生徒は、映った図や計算式を進んで活用して全体の前で説明することができた。（資料５）グループでは気付かなかった方法を共有することもでき、見い出す三角形の合同条件によって、様々な証明ができることを学ぶことができた。



資料５　全体の場で発表

② ＩＣＴ機器を活用した学習活動の工夫

生徒は小学生の時から、学習支援アプリ（ロイロノート）を使用しており、自分の考えをタブレット端末に書き込むことで、自分の考えを可視化することに慣れている。そこで、数学の授業でもロイロノートを使い、共有機能を活用することにした。互いの考えを共有する際に、タブレット端末を活用することで、図を指し示しながら、より分かりやすい説明ができ、仲間の考えを把握しやすくなった。また、自分の考えと友達の考えの比較や関連付けがしやすくなり、活発に意見交流することにつながった。

（2）学級活動「はちミツタイム」

③ 系統立てたコミュニケーションスキルトレーニングの継続

	はちミツタイムのテーマ		はちミツタイムのテーマ
４月	仲間づくり	10月	仲間に入ろう　基礎・発展
５月	聞き上手になろう　基礎・発展	11月	相手を思いやる言葉を伝えよう基礎・発展
６月	質問上手になろう　基礎・発展	12月	
７月		１月	共感してみよう　基礎・発展
９月	誘い上手になろう　基礎・発展	２月	やさしく頼もう　基礎・発展

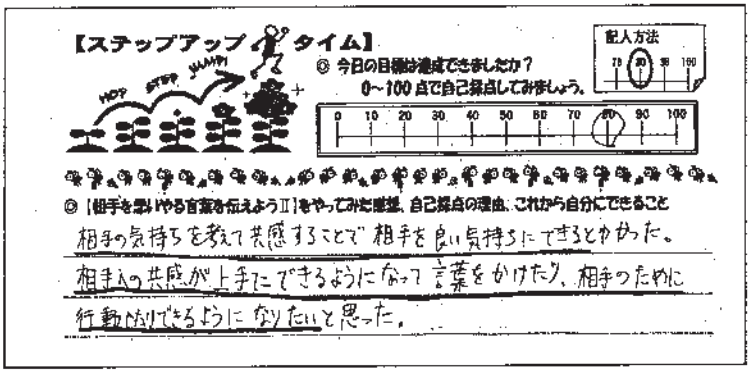
コミュニケーションスキルを養う活動を「八開meetタイム」（はちミツタイム）とし、月に２回２０分程度、学級活動の時間を使って実施した。本年度は、基本的な関わりのスキルから、仲間関係の発展・共感的スキルまでを、段階を追って計画的に行った。毎月、同じテーマの活動を２回設定し、１回目は、基本的な

関わり方を学ぶ「基礎」の時間と、2回目は、実際にロールプレイング等で関わり方を身に付ける「発展」の時間にした。ロールプレイングの実践では、実践を見る役をつくり、友達の関わり方でよかった点、友達の意見を聞いて納得した点などを伝え合うようにした。また、生徒の感想を集約したワークシートを次時の活動時に配付し、学級全体で仲間の意見を共有し、皆で認め合い高め合った。

前期の基本的な関わりのスキルを身に付ける活動について、ポイントをつかんで実践できたと達成感を得た生徒が多く、定期的なアンケートの結果も伸びていた。後期の共感スキルを身に付けるための活動については、生徒にとって理解することも実践することも難しく、時間を要した。相手の本当の気持ちを言動や表情から察するだけでなく、相手の気持ちに沿った言葉を考え、伝えることを目標に、繰り返し実践をした。共感スキルを身に付けようとする中で、自分とは異なる考えや反応を知り、相手を認め、分かり合おうとする雰囲気を醸成することができた。



資料6　はちミツタイムの様子



資料7　はちミツタイムのワークシート（生徒の感想）

4　研究の成果と課題

（1）　成果

協働的な学びの充実を通して、「自ら考え、ともに認め合い、学びを深める生徒の育成」を目指してきた。数学の授業では、生徒にとって身近なものやことがらに関連させて課題を提示し発問することで、多くの生徒が証明の学習に興味をもって取り組もうとする様子が見られた。

つまづきやすい学習内容では、段階的な学習展開を意識し、それに沿ったワークシートを作成した。また、生徒の力量に応じて記述方法を選択できるワークシートを提示したところ、「わかる」「できる」「さらにやりたい」と、生徒の意欲を持続することにつながった。

また、話し合いでは、数人のグループでの交流後、全体で発表する場を設定することで、より多くの考え方を共有し考えを深めていくことができた。タブレット端末で生徒の意見を共有すると、仲間の考えを把握しやすく、自分の考えと比較しやすくなった。それをもとに、自信をもって説明する様子が見られた。

学級活動で系統立てて行ってきたコミュニケーションスキルトレーニングは、授業中の話し合いを活発にさせる一助となった。基本的なスキルを身に付けたことで、相手の気持ちを考え、互いの思いや考えを認め、生徒間の絆を育むことができた。

（2）　課題

生徒同士の学び合いにより、生徒の理解力と意欲を高めることができたが、授業時の発問では教師の誘導も多く、主体性を伸ばすことに難しさを感じている。全ての教育活動において、生徒自身が課題を見つけ、仲間と共に解決できる活動を目指して、協働的な学びの充実や、より効果的なＩＣＴ機器活用を研究する必要がある。生徒の自己肯定感をさらに高め、主体的に取り組むことができるように、学校全体の取組を発展させていきたい。

目次へ

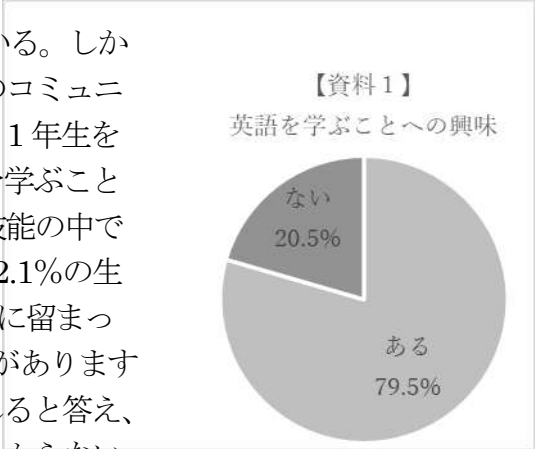
研究主題	主体的に取り組み、他者と協働しながら自分の意見や考えを伝えようとする生徒の育成		
副　　題	対話活動を通して		
学 校 名	愛西市立佐織西中学校	校 長 氏 名	中山　政彦

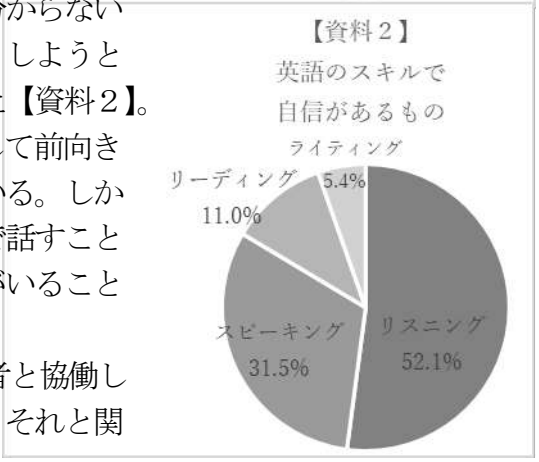
「主体的に取り組み、他者と協働しながら自分の意見や考えを
伝えようとする生徒の育成」
～継続的な対話活動を通して～

愛西市立佐織西中学校　岩田光史

1　はじめに

英語で話す力は、現代社会でますます重要となっている。しかし、英語を学習して間もない中学生にとって、英語でのコミュニケーションは難しく、適切な指導が重要である。４月に１年生を対象にアンケート調査を行った。79.5%の生徒が英語を学ぶことに興味があると答えた【資料１】。一方で、「英語の４技能の中で自信があるものを選んでください」という質問には、52.1%の生徒が「リスニング」と答え、「スピーキング」は31.5%に留まった。また、「英語を話すときに不安や緊張を感じることがありますか」という質問には、57.5%の生徒が不安や緊張を感じると答え、話したい英語が分からなかったとき、伝わっているか分からないとき、即興で話さないといけないとき、間違えたらどうしようと思ったときなど、不安や緊張を感じる場面が挙げられた【資料２】。





アンケート調査の結果から、１年生は英語学習に対して前向きな生徒が多く、英語を話せるようになりたいと考えている。しかし、英語で話すことを苦手と感じる生徒も多く、英語で話すことに自信がなかったり、不安や緊張を感じたりする生徒がいることが分かった。

そこで、本校では「ものごとに主体的に関わり、他者と協働しながら高め合える生徒の育成」を研究課題としており、それと関連させ、本研究主題を設定した。

2　研究構想図と仮説

めざす生徒像:：主体的に取り組み、他者と協働しながら自分の意見や考えを伝えようとする生徒

研究仮説①

英語で話すことに慣れさせたり、見通しをもたせたりすれば、英語で自信をもって意見を伝えようとしたり、相手の意図をくみ取ろうとしたりし、主体的に取り組むことができるようになるだろう。

研究仮説②

対話活動をペアや教員と振り返り、話し合いから対話内容を互いに振り返れば、対話活動でより自分の意見や考えを自信をもってスムーズに伝えることができるようになるだろう。

手だて①主体的に取り組むための工夫

ア　継続的に同じテーマで活動を行う。
イ　活動の前に、使える英語表現を全員で考える。

手だて②他者と協働して意見を伝える工夫

ア　対話活動の後に、クラスで確認する。
イ　録画した対話の映像を見て、ペアで振り返る。

○生徒の実態

英語学習に興味はあるが、英語で話すことに苦手意識をもち、不安になったり緊張したりする生徒が多い。

3　研究の方法

⑴　仮説に対する手だて

①　　主体的に取り組むための工夫

ア　英語を話すことに慣れさせるために、授業の冒頭１分間を使い、２週間ずつ同じテーマでペアで対話活動を行う。ペアは毎回変えて行うが、最後は初回と同じペアと行う。テーマは教科書に出てくる表現を応用したものとする。

イ　見通しをもって英語を話すために、各テーマの最初に、対話の流れや自身が対話するときに使いそうな単語をクラスで考える。また、会話を弾ませるために、テーマに対する正しい文法での答え方を事前に確認し、会話の最初に沈黙することがないようにする。

②　　他者と協働して意見を伝える工夫

ア　毎回の対話活動の後に上手く伝えられなかったことや、英語で何と伝えればよいか分からなかったことをクラスで共有する。その後、何と伝えればよいのか生徒から引き出したり、教師が伝えたりして次回の活動に生かす。

イ　初回と最後の対話活動をタブレットで撮影・録音し、話した内容や立ち振る舞いを客観的に見返して、ペアにアドバイスをする。また、自分の成長を感じて自信をもたせるために、初回と最後の映像を見比べ、活動を振り返って感じたこと、考えたこと、次回頑張りたいことをワークシートにまとめさせる。

⑵　仮説の検証

①　アンケート調査（４月・７月に実施）

ア　４技能で自信があるものはどれか。

イ　英語を話すときに不安や緊張を感じるか。

ウ　対話活動を通して、自分の意見や考えを英語で伝えられるようになったか。

②　生徒の変容

授業での様子や、アンケート調査の記述、振り返りワークシートから検証する。

4　研究の対象　本校１年生６８名

5　研究の実践

⑴　手だて①　主体的に取り組むための工夫

ア　同じテーマでの継続的な対話活動

同じテーマで何回も対話活動を行った。自分が伝えたいことを何回も練習したり、ペアになった生徒からいろいろな表現を学んだりできるように、毎回ペアを変えるようにした。

生徒は活動中、英語で１分間会話し続けるようにした。また、会話の流れで話の内容がテーマから外れてもよいこと、わからないときは日本語を一部使ってもよいことを事前に共有した。

対話活動でのテーマは生徒の身近な話題にした。また、小学校で学習した会話表現や、中学校で学んだ文法事項を対話活動の中で使えるようなテーマにした。

＜実践したテーマ＞

① What food do you like?

② What do you want to do after school?

③ What time do you get up?

イ　どのような英語の表現が使えるかクラスで考える活動

見通しをもって英語を話すために、各テーマの最初の活動の時に、対話の流れや自身が対話するときに使いそうな単語をクラスで考えた。

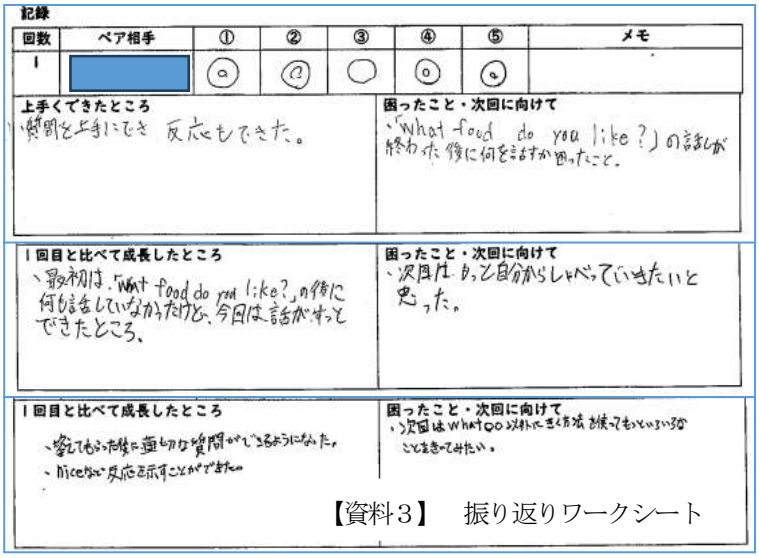
⑵　手だて②　他者と協働して自分の意見を伝える工夫

ア　どのように英語で伝えたらよいか分からなかったことをクラスで確認する活動

対話活動の後に上手く伝えられなかったことや、英語で何と伝えればよいか分からなかったことをクラスで共有した。

イ　録画した対話活動の映像を見たり、録音を聞いたりして自分の改善点や、相手のよかったところをペアで振り返る活動

初回と最後の対話活動をタブレットで撮影したり録音したりした。最後の対話活動を終えた後、初回のころと比べ、自分や相手が使った英語表現や話した内容や、立ち振る舞いがどう変わったかを分析し、ワークシートに考えをまとめさせた。その後、ペアにアドバイスをする時間を設けた。また、ワークシートに自己評価をする欄を用意し、５つの評価項目を設定した。◎・○・△の３段階で振り返り、回を重ねるごとに活動の上達を振り返るようにした【資料３】。


記録

回数	ペア相手	①	②	③	④	⑤	メモ
1	[redacted]	◎	◎	○	◎	◎	

上手くできたところ	困ったこと・次回に向けて
質問を上手にでき 反応もできた。	「What food do you like?」の話しが終わった後に何を話すか困ったこと。

1回目と比べて成長したところ	困ったこと・次回に向けて
・最初は「What food do you like?」の後に何も話していなかったけど、今日は話がずっとできたところ。	・次回は もっと自分からしゃべっていきたいと思った。

1回目と比べて成長したところ	困ったこと・次回に向けて
・答えてもらった後に違う質問ができるようになった。 ・Niceなど反応を示すことができた。	・次回はWhat ○○以外にも色々な方法 お供えもいいかなどいろいろきいてみたい。

【資料３】　振り返りワークシート

６　研究の成果と今後の課題

⑴　成果

同じテーマで何度も対話活動を行うことで、１分間英語で話し続けられる生徒が多くなった。初回の活動では、多くの生徒が１分間話すことができなかった。振り返りのワークシートでも「What food do you like? の話が終わった後、何を話すか困った」という振り返りが多かったが、最後の対話活動の時には、「１分間ずっと話し続けることができた」「What food do you like?に関連した質問をして、話を続けることができた」「相手の話にあいづちを打てた」など、繰り返し同じテーマで対話をして慣れさせることで、自分のことを発信できるようになった。また、英語が得意な生徒は正しい文法で話そうとしたり、英語が苦手な生徒は英単語を並べたりして、なんとか自分のことを伝えようとしたりするなど、回を重ねるごとにその人数も増えていった。

毎時の振り返りの際に、自己評価をしたことで、回を重ねるごとに自分の成長を目で見て実感していた。また、相互にアドバイスをすることで、伝える相手がいるということを意識することができ、「難しい単語を調べて使っても伝わらないと思う」「相手が知っていそうな単語で自分のことを伝えたほうがよい」など、どうやったら自分の考えが伝わるのかを、試行錯誤して考えようとする姿が見られた。

７月に行ったアンケートでは、「授業最初の対話活動は話す能力向上に有効か」という問いに対して、89%の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と答えた【資料４】。また、「４月と比べて、思っていることや考えていることを英会話で伝える能力が上がった

と思うか」という問いに対しては、90%の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と答え、「相手の話している英語を聞き取れる量が増えた」「会話を続ける力がついた」「英語でコミュニケーションを取ることに対して自信がついた」「相手との会話の中で、話題が思い付くようになった」という意見が多く出た【資料５】。

⑵　課題

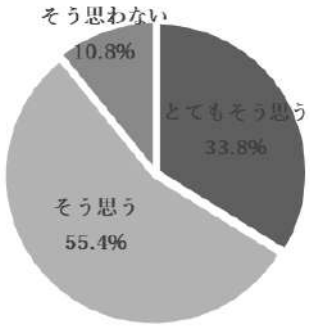
アンケートで、「英語の４技能の中で自信があるものを選んでください」という問いに、「スピーキング」と答えた生徒は４月が31.5%、７月が18.5%と、スピーキングに対する自信がなくなっている生徒が増えた【資料６】。また、「英語を話すときに不安や緊張を感じることがありますか」という問いに、「不安や緊張を感じる」と答えた生徒は４月が57.5%、７月が60%あった【資料７】。授業の様子を見ていると、対話活動を通して、英語で会話をスムーズに行うことのできる生徒が増えてきたように感じるが、生徒自身は自信がついたというわけではなく、スピーキングに対して苦手意識を引き続き感じている生徒が多いことが分かった。活動を始めた当初、英語で会話する時は、質問に単語等で答え、相手と意志疎通が取れればよいと考えている生徒が多いと感じた。しかし、本研究の活動で、できるだけ正しい文法で会話することや、１分間話し続けることを指導してきたことによって、「単語ではなく文章で会話がしたい」「自分から話題を提供して話を広げたい」など、英語で会話をすることに対して意欲が高まったことも原因だと推察する。

今回の活動は生徒のコミュニケーションを取ることに対する自信を向上させることで、主体的に英語で表現することができるようにしていくことを目標に取り組んできたが、自分のことを具体的に話したり、内容を広げたりする必要があることから、正しい表現や高度な表現をしなければと不安や応用表現を使うことへの緊張感を高めてしまった。一方で、生徒たちは、対話活動を継続させるために、相手の話す内容をしっかりと聞き取ることを意識して活動を行っていた。その結果、生徒のリスニングの能力を向上させることにつながった。

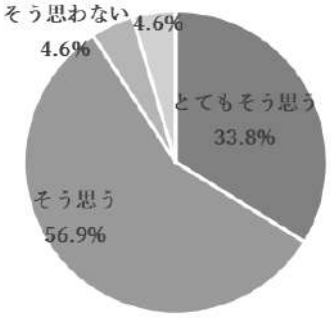
以上のことを踏まえ、今後は毎回の活動で、表現の幅を広げていきたい。また、分からなかった表現を確認しつつ、活動でよかったところも全体でフィードバックを行い、自信をもたせていきたい。

ワークシートの振り返りの様子から、うまく英語で伝えられない生徒については、個別で助言をしたり、活動の様子を見守り、サポートしたりする必要があると感じた。引き続きこの活動を続けながら話すことの能力を高めつつ、適切なフィードバックを行い、他者と協働しながら、自分の意見や考えを伝えようとする生徒を育てていきたい。

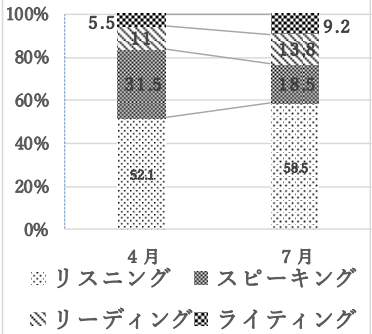
【資料４】
授業最初の対話活動は
話す能力向上に有効



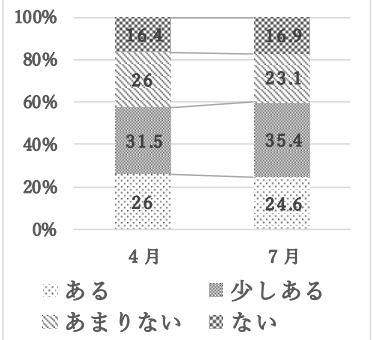
【資料５】
４月と比べて英会話で
伝える能力が上がった



【資料６】
英語のスキルで自信があるもの



【資料７】
英語を話すときの不安や緊張



目次へ

研究主題	自ら課題に気付き、主体的に課題解決に取り組む生徒の育成		
副　　題	―「学習課題の設定」と「振り返り」による「自律」の心の向上を目指して―		
学 校 名	清須市立西枇杷島中学校	校 長 氏 名	西尾　博人

１　主題設定の理由

本校では、教育活動を貫く方針・土台を、「『自律』の心の育成」とし、生徒一人一人が、自ら考え、判断し、実行できるような活動を行ってきた。しかし、その一方で、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めることのできる生徒が少ないのが現状である。

そこで、学校で学んだことが、生徒たちの「生きる力」となって、今後の人生につながり、予測困難な時代になっても、自ら課題を見つけ、自ら考え、判断し、実行できることで、激変する社会を生き抜き、将来、社会や地域の一員として貢献できる人材の育成を念頭に、「学習課題の設定」と「振り返り」を重点とし、「学習を自分事」とする「当事者意識をもった学び」を目指し、研究を行った。

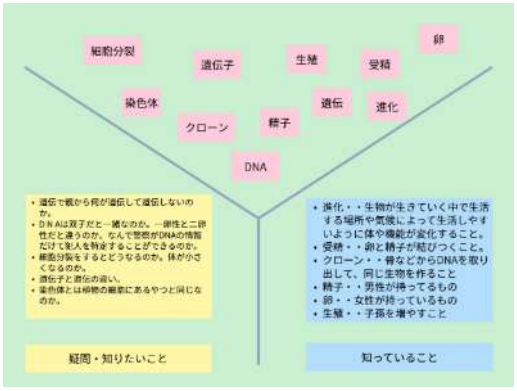
２　研究の手だてと内容

「学習課題の設定」と「振り返り」について、以下の段階を経ながら行った。

手だて１　学習課題の設定

ステップ１　「問い」を意識できるようにする

単元や授業の始めに生徒たちが自分の「問い」を出す場面を設定して、自分の「問い」を発散できるようにすると、自分事になる学習が始まる。また、生徒たち自身が「考えることっておもしろいな」と思い始めることができるように、一人一人の「問い」を大切に受け止める。



【「問い」を意識させるための導入シート】

ステップ２　「問い」を生かした課題を教師がつくる

生徒たちが考えた「問い」を生かし、単元や授業で大事にすべきことを見つけて学習課題を設定し、「自分たちが気になったことを、自分たちで解決する」という意識をもたせる。

ステップ３　「問い」を生かした課題を生徒たち自身でつくる

生徒たちの中で「問い」を意識させ、自分（たち）の「問い」を中心に学習を進められるようにする。そして、生徒たちが、これまでの経験から「どんな『問い』を生かして学習を進めていけばよいか」を考えられるようにする。

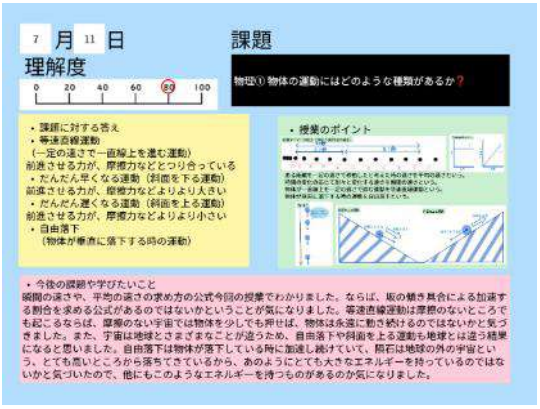
手だて２　振り返り

ステップ１　「感想」から「振り返り」へシフトする

「感じたことや考えたこと」「明らかになったこと」「友達の意見でいいなと思ったこと」「気になったこと」「次の時間に考えたいこと」など、振り返りの視点を明示する。

ステップ２　内容だけではなく「学び方」も振り返る

自分が学んだことを振り返るだけでなく、自分の「学び方」についても振り返らせる。そうすることで、生徒たちはお互いのつながりの中で学び合っていることを意識するようになり、学びをよりよくするのも「自分たち」だという意識をさらに高めることができる。



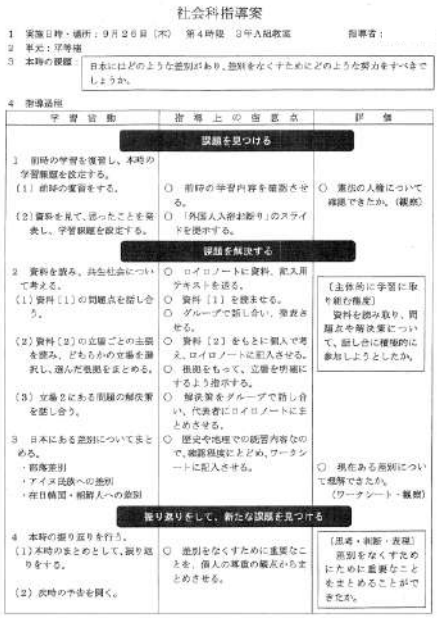
【視点を明確にした振り返りシート】

ステップ３　振り返りの視点を絞る

「振り返り」の視点を生徒たち自身で選択したり、新たな視点を見つけられたりできるようにして、自分のこだわりが出るようにする。また、生徒たちにとって振り返ることの目的を明確化し、「振り返る」ことが大事だということを実感できるようにする。そして、「振り返り」から「問い」を生み出し、新たな学習課題を設定できるようにする。

３　授業研究について（ミニ指導案による授業研究）

本校では、教師側の視点に立った「授業改善」と、生徒側の視点に立った「学習改善」がうまく絡み合い、新たな「学び」に展開していくよう、すべての教員が研究授業を行い、自己研鑽に努めている。研究授業に向けて授業者は、ミニ指導案を作成し、授業展開の中に、研究主題に迫る３つの場面（①課題を見つける　②課題を解決する　③振り返りを通して、新たな課題を見つける）を設けるようにした。参観者は、授業研究シートに参観コメントを記入し、教務主任に提出する。教務主任は参観者が記入した授業研究シートのコメントをまとめ、全員に配付して共有を図り、研究協議会は原則行わず、助言は自身で適宜、もらうようにした。


社会科指導案

【授業研究ミニ指導案】

４　成果と課題

４月に実施した全国学力・学習状況調査における生徒質問の「１、２年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」と「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」の２つの質問に対して、肯定的に回答した３年生の割合は、それぞれ74.3%、73.0%で、全国平均を大きく下回っていた。実践後（令和７年１月）、３年生に同様の調査を行ったところ、肯定的に回答した３年生の割合は、それぞれ87.4%、85.1%と、全国平均および実践前を大きく上回った。

子どもたちが、変化の激しいこれからの世の中を生き抜くためには、「受け身で対応するのではなく、主体的に関わり合う」ことが求められている。そのような資質を養うために、生徒の模範となるよう、まず教員自らが自己研鑽を忘れず主体的に関わり合う意識を常に心にもち続けることが必要である。そして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現に向けて、より研修を深め、「主体的に課題解決に取り組む生徒の育成」に取り組んでいきたい。

目次へ

研究主題	「心と体を一体としてとらえ、主体的に体力向上を目指す生徒の育成」		
副　　題	～運動する楽しさや喜びを実感できる体育活動を通して～		
学 校 名	北名古屋市立西春中学校	校 長 氏 名	小出　泰司

１　はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響により、保健体育の授業や部活動にも様々な制限が必要とされ、生徒の運動量を確保することが難しく、運動に親しむ機会が減少した。その結果、運動による心と体への効果や、心の健康が運動と密接に関係していることを実感できず、運動する楽しさや喜びを味わう機会も減少した。そこで、心と体の健康の保持増進を図りながら、運動する楽しさや喜びを実感できるような体育活動や学校行事を実践することで、心と体を一体としてとらえ、主体的に体力向上を目指す生徒を育成したいと考え、令和５年度から継続的に本実践に取り組んでいる。

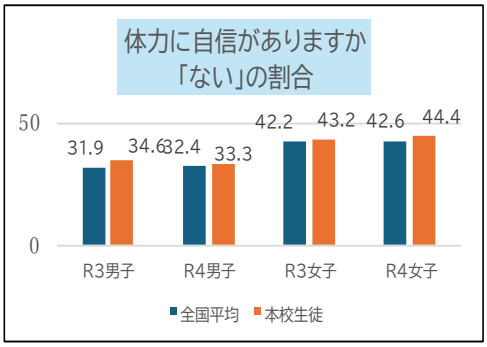
２　実践内容

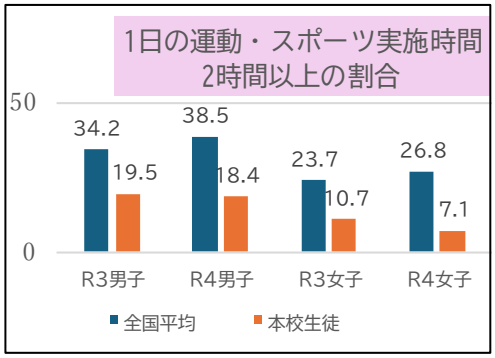
①　新体力テストの分析≪令和５年５月≫

全校生徒の体力の実態や運動習慣について、課題点や改善点を明らかにするために、体育委員会が中心となって、令和３年度・４年度の新体力テストの結果とアンケートの分析を行った（資料①）。新体力テストの結果を見ると、ほとんどの種目で各学年男女とも全国平均を下回っていることが分かった。アンケート結果の分析では、「自分の体力に自信がない」と回答する生徒は全国平均並であったが、１日の運動・スポーツの実施時間について、「２時間以上実施している」と回答している生徒は、全国平均を大きく下回った（資料②）。このことから、学校生活の中で、生徒が楽しみながら体を動かす場の設定をする必要性を感じた。そこで、生徒会・体育委員会と協力しながら、学校全体で取り組める活動を検討し、実践することにした。



【資料① 体育委員会の分析の様子】





【資料② 新体力テストアンケートの分析】

②　保健分野の授業の充実≪通年≫

心と体を一体としてとらえ、生涯を通じて心身の健康保持増進するための資質・能力の育成を目指して、体育分野と保健分野の一層の関連を図った。その一例として、保健分野「心と体のかかわり」、「がんとその予防」の授業において、養護教諭が保健師を招き合同授業を実践したり、各部活動の部長を対象に熱中症予防の学習会を行ったりした。実践後は、心と体は密接に関係していることを実感するとともに、生涯を通じて楽しく運動するためには、健康な心と体が大切であると学ぶことができ、心と体の繋がりを大切にしていこうという気持ちの高まりが見られた。また、自分や相手の気持ちに向き合い、

これからの生き方を前向きに考えるきっかけとなった。

③　休み時間の活用≪６月～３月≫

ア　クラス対抗ドッジボール大会・長縄大会

体育委員会が企画し、楽しく体を動かす喜びを実感できるように、休み時間を活用して「クラス対抗ドッジボール大会」と「長縄大会」を開催した。実践してみると、普段は運動場で体を動かす機会が少ない生徒も積極的に参加し、楽しく運動することができた。生徒に感想を尋ねると、「体を動かしてリフレッシュできて、次の授業に集中できそう」「他の種目もやりたい」という意見を聞くことができた。

イ　学年別増やし鬼

「他の種目もやりたい」という生徒の声を受け、学年別で「増やし鬼」を行った。今回、生徒の興味を惹くための工夫として、事前に各クラスで掲示物を作成したり、活動中にＢＧＭをかけたりして、「楽しみながら運動する」という目的を重視した。当日は多くの生徒が運動場に出て、全力で走る姿が見られた。また、今回の実践を行ったことで、休み時間に運動場で遊ぶ生徒の割合が増えてきた。

ウ　Nishiharu sports No1 battle

５月に実施した新スポーツテストからの体力の向上や自身の運動課題に気付くために、個人参加の「Nishiharu sports No1 battle」を行った（資料③）。今回の種目は体育館種目の「反復横跳び・握力・長座位体前屈」の３種目とした。また、より多くの生徒が積極的に参加できるように、各学の上位入賞者への賞状を作成したり、最高記録の掲示や給食時の放送で順位を発表したりして、生徒の意欲向上を図った。各学年の最高記録を競い合ったことで、練習とチャレンジを繰り返し、自然と友達同士で声をかけ合いながら活動する姿が見られ、運動に苦手意識をもった生徒も意欲的に楽しく参加することができた。



【資料③ Nishiharu sports No1 battle】

④　動的ストレッチの導入≪通年≫

保健体育の授業では、例年静的ストレッチを行ってきたが、生徒が体を動かす楽しさを　実感できるように、動的ストレッチを中心とした体操を保健体育科で考案した。動的ストレッチは、腕や足などを中心に体のさまざまな部分をリズミカルに動かすことで、筋肉の活動が活発化し、静的ストレッチに比べて、怪我防止にもつながる効果がある。今では、体育の授業の準備体操や体育大会のプログラムに取り入れ、全校生徒で実施している（資料④）。さらに、軽快なＢＧＭに合わせて体を動かすことで楽しみながら友達とともに動的ストレッチを行うことができている。



【資料④ 動的ストレッチの様子】

⑤　ダンスの授業実践と学校行事≪９月～１１月≫

ア　「zumba の習得とタブレット端末の活用」

ダンスには、心の健康を促進させる効果があり、友達と一緒に励まし合いながら楽しく踊ることで、自分の気持ちを表現したり、一体感を感じたりすることができる。そこで、現代

的なリズムのダンスのウォーミングアップとして、コロンビアの振り付け師によって創作された、ダンス系エクササイズである「zumba」を取り入れた。基本のステップは教師主導で指導し、その後は、タブレット端末の動画機能を使って練習したダンスのステップを確認し合い、友達と励まし合いながら技能の定着を目指した（資料⑤）。さらに、学習支援ソフトのロイロノート・スクール（株式会社LoiLo）を活用して、全校生徒に「zumba」の振り付けや他のダンスの基本ステップを配信し、自宅でも「踊りたいときに楽しく踊る」ことができるように工夫した。



【資料⑤ 動画を確認する様子】

イ　リズムトレーニングの実践

リズムトレーニングは、リズム感を高めることで運動のパフォーマンスを向上させ、怪我の予防にも繋がるとされており、運動能力に関係なく、気軽に楽しく行うことができるトレーニングである。本校では、体つくり運動や体力を高める運動、ダンスの授業の導入でリズムトレーニングを取り入れ、音楽に合わせて様々なジャンプ運動を行い、運動能力・柔軟性の向上を目指した。生徒は自分の動きと仲間の動きをタブレット端末で比較しながら、互いに楽しみながら運動する姿が見られた。

ウ　リズムダンスコンクールの実践

体育科の授業で「zumba」や「リズムトレーニング」など、音楽に合わせ楽しく体を動かす習慣が高まったことで、生徒会から、「リズムダンスコンクールをやってみたい」という声があがった。生徒会や生徒議会で何度も意見交換を行い、文化発表会でクラス対抗の「リズムダンスコンクール」を実践することにした（資料⑥）。実践してみると、「zumba」や「リズムトレーニング」を実践していたこともあり、生徒は楽しみながら活動することができた。また、学年ごとに最優秀賞を設け、クラスごとに演技を競わせたことで、生徒が主体的に隊形の配置や動き変化を提案し、完成度を高めるための話し合いをしながら練習する姿が見られた。本番では、各クラス息の合ったダンスを披露することができ、生徒は達成感を味わい、運動する楽しさや喜びを実感できる学校行事となった。



【資料⑥ リズムダンスコンクール】

⑥　全身持久力向上に向けての実践≪令和５年12月～令和６年５月≫

令和５年度10月に、本実践に対する成果を振り返った。その中で、「運動に親しむ習慣は身に付いてきているものの、令和５年度の新体力テストの結果は、ほとんどの種目で各学年男女が全国平均を下回る結果となり、体力向上を実感できるまでには至らなかった」という課題が挙げられた。そこで、以下の理由から、「シャトルランを活用した全身持久力の向上」に継続的に取り組むこととした。

① １ターンの距離が 20mと短いので、生徒の目標本数が設定しやすく、走るのが苦手な生徒にも取り組みやすい。
② １分間の電子音により、一定のペースを保ちやすい。
③ １分間の電子音を使い分けることで、授業のねらいにあった負荷を選択することができる。

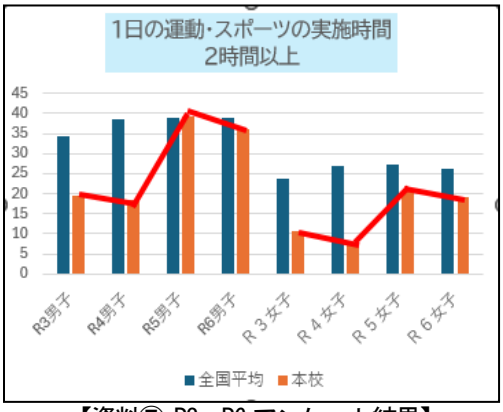
３　研究の成果

心と体のつながりを大切にしながら、体を動かす楽しさや喜びを実感できる活動を工夫したことで、生徒は大変意欲的に運動に取り組むことができた。その結果、令和５年度・６年度の１日の運動・スポーツの実施時間について、「２時間以上実施している」と回答した生徒の割合は、男女とも大きく増加させることができた（資料⑦）。体を動かす楽しさを味わうことができるような体育活動や学校行事の実践を通して、運動への興味関心が高まったことが分かる。

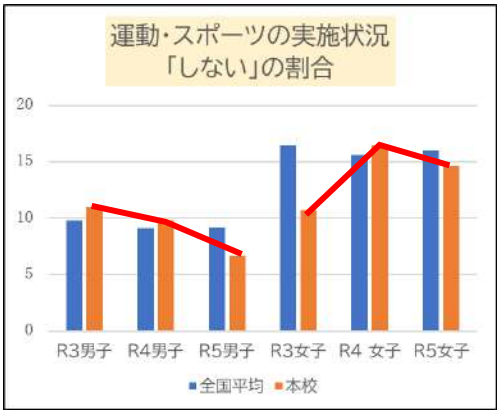
また、スポーツの実施状況についてのアンケートでは、「運動しない」と回答した生徒も減少し、全国平均を下回ることができた（資料⑧）。タブレット端末を効果的に活用し、自宅でも運動できる環境を整えたことで、学校生活以外の時間でも運動する機会が身に付いてきたといえる。また「休み時間で楽しく運動できる機会があって運動することが楽しくなった」や「自宅でも動的ストレッチやダンスをすることができて楽しかった」という意見が多く挙がり、主体的に運動に親しもうとする姿勢も身に付いてきたといえる。

さらに、「シャトルランを活用した全身持久力の向上」に取り組んだことで、令和５年度と令和６年度の得点を比較すると、10 点～８点の割合が増え３点～１点の割合が大幅に減ったことが分かる（資料⑨）。また、全学年において昨年度の得点平均を大幅に上回ることができ、学校全体の全身持久力の高まりが見られた。

このようなことから、心と体の健康の保持増進を図りながら、体育の授業や学校行事の実践を充実させたことは、心と体を一体としてとらえ、主体的に体力向上を目指す生徒の育成に有効であったといえる。



【資料⑦ R3～R6 アンケート結果】



【資料⑧　R3～R5 アンケート結果】



【資料⑨　持久走・20m シャトルラン結果】

４　今後の課題

継続的な様々な取組から、新体力テストの結果は少しずつではあるが向上してきている。しかし、ほとんどの種目で各学年男女が全国平均を下回る結果であることは変わりがなく、体力向上を実感できるまでには至らなかった。

今後は、生徒が楽しみながら体力向上を図ることができるような機会をさらに増やしていくとともに、体力向上につながる効果的な取組を計画・実践していきたい。

目次へ

研究主題	仲良くなれる！授業が盛り上がる！「ハートーク」		
副　　題	～みんながホッとする！あたたかくて安心できる学級づくり～		
学 校 名	あま市立甚目寺中学校	校 長 氏 名	籠島　篤司

1　ねらい

本校では、人権教育を全ての教育活動の根幹に据え、生徒一人一人の存在と可能性を大切にして教育活動を行っている。令和２年度からは、構成的グループエンカウンターの手法を取り入れたソーシャルスキルトレーニングとして「ハートーク」を行っている。継続することにより、自分の思いや意見を伝えようとする生徒や、他者の意見から学び、考えを深める生徒が増えてきた。また、深い学びを目指した道徳科の授業研究を行い、多様な考えを引き出せるような発問を考えたり、自分の立場を明確にして話し合いをさせたりと、研究を重ねてきた。ねらいとする道徳的価値に迫ることができるような授業展開を目指し、授業の流れを工夫し、本校のスタイルとして確立している。

生徒の実態に関して、毎年度はじめに行っている「人権アンケート」の結果から「あなたは、ふだん自分の思いや考えを積極的に人に話す方だと思いますか」の問いに対しては59%の生徒が「とても思う・やや思う」と回答しており、昨年度より４%減少した。また、「あなたは、他人の考えから自分の考えを見つめ直すことがありますか」の問いに対しては、86%の生徒が「よくある・ややある」と回答している。これらの値はここ数年で上昇傾向にある。これまでの実践の課題として、「ハートーク」を継続して行ってきたことにより生徒は学級活動などで積極的に自分の考えを伝え合うことができるようになっているが、授業においては十分に高まっていないことが分かった。そこで、環境を整えることで、自信をもって意見を発信することにつながるのではないか。また、生徒同士が互いを尊重しつつも本音で意見を交換し、深い学びを目指していくことができるようにするために、昨年度までの方針を継続しつつ、課題点を改善すべく、本研究主題を設定し研究を進めていくこととした。

2　目指す子ども像

・対話的な活動を通して、安心して自分の考えを伝えられる生徒
・対話的な活動を通して、多角的に自分の考えを深めることができる生徒

3　手だて

（1）「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の実践
（2）深い学びを目指す道徳科の授業の実践

4　実践

（1）「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の実践

①　実践内容

令和２年度から生徒同士が自分の思いを伝え合うことができる素地づくりや生

徒の自尊感情・自己肯定感を高めるために、毎週水曜日の朝読書の時間に「ハートーク」という活動に取り組んでいる。「ハートーク」とは、①あいさつ、②頷き、③周りを見渡して話す、④指示を聞く、これらのことを意識して、４～５人の班で行う構成的グループエンカウンターの手法を取り入れたソーシャルスキルトレーニングである。実践を重ねていくたびに、自分の思いを伝えたり聞いたりする生徒が増えてきた。その一方、活動の中ではできるが、授業で自信をもって自分の考えを発表できるところまでには至っていないことが、昨年度の課題として挙げられた。そこで、授業の中で生徒が安心して自分の考えや思いを伝えられるような場の設定をして、対話的な学びの充実を目指した実践を行った。

（ア）「問題を出し合い・解き合う」場の設定

数学科の各単元の最後の授業で、「先生になりきって、確認テストを作成してみよう」と学習課題を設定して、学習した内容について自分たちで問題と解説を作成し、学びを確かめ合う活動を行った。その際、ただ問題を難しく作成するのではなく、この単元で学んだ内容を確認し、作成するように指示をした。解説を作成するときのポイントとして、その問題において大事だと思う考え方が相手に伝わるように記入することを伝えた。問題と解答の作成が終わると、互いの問題を解き合う時間を１０分設けた。最後に、仲間同士で答え合わせと問題の解説を伝え合う時間を設けた。また、安心して解説を伝え合えるように、互いの問題の良かった点を伝え合う時間も設定した。そして、解説を伝え合う時間では、対話的な活動ができるように、「ハートーク」と同じ４人１グループで、分からない問題や疑問に思ったことを伝え合えるように机を向き合わせて活動を行った。

（イ）「リカトーク」による協働学習の設定

理科の授業では、ペアワークやグループワークを毎時間取り入れ、互いの意見を交換する機会を増やした。「ハートーク」と同様、グループで互いの意見を伝え合い、学び合うことを目的としたのが「リカトーク」である。話し合い活動に自発的に取り組むことができるように、ワークシートに「リカトーク」のテーマを載せた。「なぜ物体が見えるのか」や、「物体に色がついて見えるのはなぜか」といった日常生活との結び付きの強いテーマも取り入れるようにした。

②　考察

数学科の実践では、ふだん数学が苦手な生徒も、教科書やノートを見ながら積極的に問題を作成する姿が見られた。仲間が理解しやすいように、解説を丁寧に作成する生徒の姿も多く見られた。このような姿から、問題を作成することを通して、互いのことを考えながら自分の考えや思いを表現し、伝えようとする思いが高まったように感じられた。問題を解き合う時間には、仲間が作成した問題だからこそ、意欲的に問題を解く姿が見られた。ふだんの授業では難しい問題に直面するとすぐに諦めてしまう生徒も、問題を作成した生徒にヒントを聞きながら問題を解き、解けたときは嬉しそうな姿が見られた。教師からの一方的な問題提示ではなく、生徒同士での問題作成や対話的に学び合うことで、自信にもつながったと考えられる。問題を解き終わり、生徒同士の答え合わせが終わると、自発的に「なんでここの答えがこうなるの？」と

聞き始める姿があった。それに対して、ただ解説を読むだけでなく、教科書をなぞったり、指で数字を数えたりしながら教え合うなど、仲間同士で学びを深める様子が見られた。授業の振り返りでは、「友達の問題は難しかったけれど、解説を聞いて分かったので、これからも数学を頑張りたいです」や「オリジナルの問題を解くのが楽しかったです」とあり、問題を出し合い・解き合うことで、仲間同士で学び合うことに意欲を高めていたことが分かる。

理科の実践では、学習に対して苦手意識のある生徒も、「リカトーク」の際は話し合いに参加することが多く、その生徒の発言で話し合いが活発になる様子も多く見られるようになった。日常生活に関連したテーマも取り入れるようにしたことで、多くの生徒が話し合いに参加し、身近な疑問の考えを伝え合い、新たな疑問や発見に気付くことができた。また、グループ内で、分からないことは分かる生徒に聞き、分かる生徒が説明するということが自然にできるようになってきた。このことから、ペアワークやグループワークを毎時間継続し、「リカトーク」を充実させたことが、安心して自分の考えを伝えることができる関係につながったと考えられる。実践後のアンケートでは、「理科の授業では、自分の意見や考えに自信をもって発言をすることができる」の質問に対して、「そう思う」「どちらかというとそう思う」と答えた生徒は 44%で実践前と比べて 17%増加した。このことから、目指す生徒像である、対話的な活動を通して、安心して自分の考えを伝えられる子に近づいたと考えられる。今回の実践では、基礎的な知識を身に付けた状態で、発展問題等に取り組ませた。実践後の生徒の振り返りには、「グループで発展問題に取り組むことで、考えが深まったり新たな考えが生まれたりした」という記述があった。このことから、基本的な知識を身に付けた状態で、発展問題等に取り組むだけでなく、「リカトーク」と同様の形で活動を行うことで、生徒のより深い理解につなげることができたと考えられる。

（2）深い学びを目指す道徳科の授業の実践

① 実践内容

〈主　題〉自らを高めていく生き方とは、どんな生き方だろう【内容項目 A―（3）向上心、個性の尊重】
〈教　材〉「嫌われるのを恐れる気持ち」（「中学道徳２年　きみがいちばんひかるとき」　光村図書）
〈ねらい〉他人に嫌われることを恐れ、本心を表に出せないことに悩む生徒の相談を通して、いろいろなものの見方や考え方を伸ばしていこうとする判断力を育てる。
〈概　要〉自分の性格に劣等感や不安をもった中学生が書いた手紙を通して、個性について考えていく内容である。

導入では、授業支援アプリを使用し、「自分の長所、短所は何か」を問いかけ、自分自身のことに近づけて教材に入れるようにした。「長所はいろいろなことにチャレンジする」などの意見が挙がった。次に、資料を読ませ、「嫌われるのを恐れることが、ひきょうで臆病なことか」と発問した。前面黒板に「そう思う」「そう思わない」を示し、自分の意見に近いところに名札を貼らせた。理由を聞く際、「A君の意見に対して何か意見がある人はいるか」と問いかけながら、一人の生徒の発言から他生徒の意見につなげるようにし、異なった様々な意見を出していた。次に「嫌われることを恐れている僕に対してのアドバイス」を考えさせる活動を行った。話し合った内容をふまえ、自分自身の経験と結び付けて考えるよう声をかけた。タブ

レット端末に自分の考えを入力した後、グループ内で発表させた。発表する際に自分と異なった意見を大切にするよう声をかけた。最後に、導入で取り上げた自分の個性を振り返らせ、「自らを高めていく生き方とは、どんな生き方だろう」と問いかけた。この発問に対して、「自分の悩みを考えたり、人に聞いたりしながら試し、自分に合った考え方を見つけていくこと」や「自分を隠さずに本当の自分で生きて、いろんな人と関わっていくこと」というような生徒の意見が出た。

② 考察

導入のＩＣＴを活用した場面では、ふだんあまり発言しない生徒も含めて、全員が自分の考えや思いを安心して表現することができた。またそれらを共有することで、全員がクラスメイトの意見にふれることができ、より自らの考えを深める機会となった。その回答の中に「長所は優しいところ、短所は気が弱いところ」というような、長所でもあり、短所にもなり得る意見があった。導入において、そのような表裏関係にある回答を取り上げられたら、めあてにより迫ることにつながったのではないかと考えた。さらに、グループで話し合わせる際に異なった意見を大切にするように声をかけたことで、生徒同士はうなずいて話を聞く様子や、「なるほど」と相手の意見を受け入れる様子が見られた。しかし、「なぜそう思ったの？」「でも～じゃない？」と相手に意見をしたり、質問をしたりしている様子があまり見られなかった。そのため、ふだんの授業から相手に質問をしたり、意見をしたりする習慣を付けるなど、授業内の話し合いの方法や中身をより明確にする必要があると考えた。

５　研究の成果と今後の課題

仲間とともに一人一人の存在と可能性を大切にできる生徒の育成というテーマのもと研究を進めた。それらを育成するために一貫してきたことは、生徒に自分と他者の大切さを自覚させることであった。そのために、教師が生徒に温かく寄り添うこと、生徒同士の対話を大切にすることを、手だてこそ違え、継続して実践してきた。例年 12 月に行っている人権アンケートの質問項目「ふだん自分の思いや考えを進んで行動に移しますか」に「はい」と回答した生徒の割合は 63%から 68%に上昇した。「ハートーク」を継続して行ってきたことにより、生徒は授業や学級活動などで積極的に自分の考えを伝え合うことができるようになってきた。生徒同士が温かい人間関係を築くことができるようになってきたことで、自信をもって行動に移すことにつながったと考えられる。また、授業で「ハートーク」を生かした協働学習をすることによって、自信をもって自分の考えを発表できる生徒が増えつつある。ただ、自分の考えを発表できる生徒の割合が十分に高まったとは言えない。今後も、安心して発表できるように言語活動の更なる充実、授業形態の工夫、発問の工夫をしていきたい。また、道徳の授業に関しては、生徒の多様な意見を共有するのにタブレット端末の活用は有効であることが分かった。多様な意見を共有した後、生徒の考えを深めさせるためには、どのような言葉がけをしていくかを考えるなど、話し合い活動をさらに深めることができるような手立てを考えていきたい。来年度以降も、対話的な活動を通して、安心して自分の考えを伝え、多角的に自分の考えを深めることができる生徒の育成を目指した取組を継続していきたい。

目次へ

研究主題	不登校・不登校傾向の生徒をはじめとする多様な学びのニーズにこたえる学校づくり		
副　　題	～学びの場の個性化を図る取組を通して～		
学 校 名	東郷町立諸輪中学校	校 長 氏 名	上村　直樹

１　研究のねらい

（１）研究主題・副題について

文部科学省の『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要』では，令和５年度の小・中学校における不登校児童生徒数は346,482人であることが報告された。さらに，不登校児童生徒について把握した事実として，小・中学校においては「学校生活に対してやる気が出ない等の相談があった。」（32.2%）が最も多く，続いて「不安・抑うつの相談があった。」（23.1%），「生活リズムの不調に関する相談があった。」（23.0%），「学業の不振や頻繁な宿題の未提出が見られた。」（15.2%）の順で多かったとしている。

本校の状況は，全校生徒205人の内，不登校・不登校傾向の生徒は11人（5.4%）おり，その生徒の割合は大きい。不登校・不登校傾向になる主な要因としては，「朝起きられない」や「他にやりたいことがある」，「嫌な思い出がある」など，ほとんどが本人に係るものである。しかし，学習に対して「やらなきゃいけない」や「小学生からやり直したい」など，前向きに捉えている生徒も少なくない。さらに，不登校傾向はなくても日本語の支援が必要な生徒もおり，次の不登校・不登校傾向生徒につながりかねない。

そこで，不登校・不登校傾向の生徒が教室でなくても学べるように，アシストルーム（校内教育支援センター）を設置し，不登校・不登校傾向の生徒にとって居心地のよい居場所となるような環境整備を進めたい。また，心身のコンディションを整える工夫などもすることにより，通常学級での生活を目指したり，行事への参加を促したりしていきたい。校内の居場所としての役割と学びの保障という役割，通常学級での生活に向けたトレーニングという役割を担ったアシストルームとなるように整備を進めていく。他にも，学業の不振をサポートする体制の構築をすることにより，不登校・不登校傾向の生徒とならないような未然防止策を構築していきたい。

（２）目指す生徒像について

○　通常学級で生活することができない生徒が，アシストルームを居場所として，自分なりの成長を目指したり，自分にとってよりよい進路を選択したりできる生徒。

○　学習に対して粘り強く学ぶ姿勢を高めたり，基礎・基本の定着により自信をつけさせたりすることで，学校生活を前向きに取り組むことができる生徒。

２　研究の方法

（１）研究の仮説について

仮説１　不登校・不登校傾向の生徒にとっての居場所を設置したり，その生徒たちのニーズに対応したりしていくことで，自分なりの成長を目指したり，自分にとってよりよい進路を選択したりすることができるようになるだろう。

仮説２　個別指導や学習内容の習熟の程度に応じた指導など，指導方法や指導体制の工夫や改善し，個に応じた学習指導の充実を図れば，生徒は学業への意欲を高めたり，学級での自己存在感を感受したりすることができるだろう。

（２）研究の手だてについて

ア　アシストルーム（校内教育支援センターの通称）の環境整備

○　照明や放送設備を整える。

○　教室内にパーティションを設置して個室のようにし，他の生徒の目線を遮る。

○　アシストルームの運用方針を検討する。

○　リラックスを狙いとしたストレッチ器具を整備する。

イ　指導方法や指導体制の工夫

○　１年生の数学科と英語科では，ＴＴ（ティームティーチング）の授業体制を組む。

○　２年生と３年生の数学科では，学習内容の習熟の程度に応じた少人数指導を行う。

○　日本語の支援が必要な生徒には，国語科の時間に取り出しによる日本語指導を行う。また，社会科や数学科，理科などの時間は，隣で学習をサポートする教員を配置する。

○　既習事項はいつでも学び直しができるようにする。

３　研究の実際

（１）アシストルームの環境整備

○　照明や放送設備を整える。

保健室の隣にあるアシストルームは，これまで物置として使われていた。そこで，生徒が日常的に生活できるように，照明を増やして必要な明るさを確保し，スピーカーを設置し，放送が入るように整えた。



写真１　アシストルームの様子

○　教室内にパーティションを置いて個室のようにし，他の生徒の視線を遮る。

アシストルームを居場所とするためには，パーソナルスペースの確保が最優先ということで，パーティションを設置した（写真１）。教員からは，活動の様子が分かるように区画しておき，生徒同士では視線が合わないようにレイアウトを工夫した。

○　アシストルームの運用方針を検討する。

特別支援教育部が中心となって，アシストルームの運用方針について検討した。どのような生徒が利用できるのか，利用するときはどのような約束があるのか，通常学級との行き来についてはどのように捉えるのか，給食はクラスに取りにいくのかなど，あらゆるケースを想定して検討した。

○　リラックスを狙いとしたストレッチ器具を整備する。

アシストルームを利用する生徒の中には，就寝時間が著しく遅いなど，生活習慣が整わない生徒が少なくない。登校しても座ったまま寝てしまうこともある。また，家ではゲームや動画視聴をしていることが多いというアセスメント結果から，不登校・不登校傾向の生徒の多くは日常からほとんど体を動かしていない，という実態が浮かび上がった。そこで，アシストルームにヨガマットやフォームローラー，バランスボールなどを置いて，ストレッチや簡単なエクササイズに取り組めるようにした。アシストルームでは，いつでも固まった筋肉をほぐしたり，少しずつ体幹を鍛えたりすることで，血行促進や代謝や柔軟性の向上，姿勢の改善，疲労回復や睡眠の質の向上，副交感神経の働きによるリラクゼーション効果など，心身ともに働きかけられる環境を設けた。

（２）指導方法や指導体制の工夫

○　１年生の数学科と英語科では，ＴＴの授業体制を組む。

中学校に入学した生徒が，小学校と異なる環境や生活スタイルに適応できず，不登校やいじめなどの問題に直面する中１ギャップの解消のため，教科の特性を考えて中学１年生の数学科と英語科でＴＴの授業体制を組んだ。英語科では教科担任（Ｔ１とＴ２）に加え，ＡＬＴも含めた３人体制で授業を行えるようにした（写真２）。



写真２　１年生の英語科の授業

○　２年生と３年生の数学科では，学習内容の習熟の程度に応じた少人数指導を行う。

１年生と比べて，中学校の生活に馴染んでいる２年生と３年生の数学科については，学習内容の習熟度別に少人数指導を行った。基礎コースと発展コースの２コースを設けて，生徒と保護者で相談してコースを選択してもらうようにした。

○　日本語の支援が必要な生徒には，国語科の時間に取り出しによる日本語指導を行う。また，社会科や数学科，理科などの時間は，隣で学習をサポートする教員を配置する。

本校には，ネパール語を母国語とする１年生の生徒が在籍している。簡単な会話は日本語で行うことができるが，文字や文章は小学校２年生程度の学力である。週４時間ある国語科の時間に取り出し，別室で個別の日本語指導をするようにした。また，社会科や数学科，理科など，本人と保護者が教室での授業を希望している教科については，隣でサポートできる教員を配置し，授業の補助などを行った。

○　既習事項はいつでも学び直しができるようにする。

本校では『映像授業とデジタルドリルで学べるＩＣＴ教材 eboard（イーボード）：ＮＰＯ法人 eboard』様のご協力を受け，そのサイトで学び直しができるようにした。自分自身が学習でつまずいた単元やもう一度学習したい内容を選び，映像を見ながら自分のペースで学習を進めることができる。タブレット端末を使って，場所を選ばずに学習できるところは大きなメリットだと言える。

４　考察

（１）アシストルームの環境整備

○　照明や放送設備を整える。

今年度，アシストルームを日常的に利用していた生徒は３人だった。しかし，アシストルームで給食だけ食べたり，一時的に心身を休めたりした生徒も一定数見られた。照明の数を増やして明るさを確保したり，スピーカーを設置して放送設備を整えたりしたことで，不登校・不登校傾向の生徒も通常の教室と同様の最低限の環境を整えた。

○　教室内にパーティションを置いて個室のようにし，他の生徒の視線を遮る。

アシストルームを利用する生徒に行ったアンケートには「パーティションがあったおかげで，人の目を気にせずに過ごすことができた」という感想があり，他の生徒の視線を遮るようにしたことで，利用する生徒は安心して生活をすることができた。

○　アシストルームの運用方針を検討する。

運用が始まると，利用する生徒同士でトラブルが起こったり，特別支援教育部と学年部で方針が食い違ったりすることが起こった。また，利用する保護者からも運用方針について疑問の声があがることもあった。そこで「利用する生徒の実態に合わせた内容」でないと，実行力が伴わないということに気付き，利用者が守る約束事は３つのみとした（写真３）。

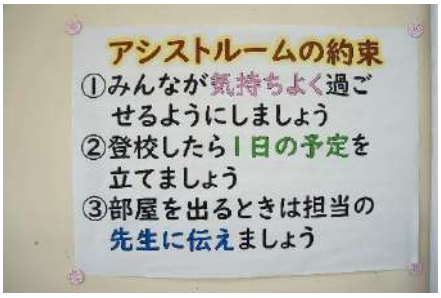


写真３　アシストルームの約束

○　リラックスを狙いとしたストレッチ器具を整備する。

ヨガマットを整備したことで，ストレッチをすることでリフレッシュする生徒の姿が見られた。また，バランスボールを使ったエクササイズを調べて実践することもあった。通常学級での活動に参加する前や戻ってきた後に，使用することが多く，ストレッチ器具を使用する場面も調節しているように見受けられた。ストレッチ器具の配備は大変有効であったと感じた。

（２）指導方法や指導体制の工夫

○　１年生の数学科と英語科では，ＴＴ（ティームティーチング）の授業体制を組む。

この授業体制を組んだことで，生徒の学習進度を細かく把握することができた。英語科のテストでは，自分の名前をアルファベットで書くことができなかった生徒に対し，Ｔ２の教師が授業中に素早く対応したり，ＡＬＴが発音に戸惑う生徒の隣で実際に見本を見せたりしながら学習を進めることができた。

○　２年生と３年生の数学科では，学習内容の習熟の　程度に応じた少人数指導を行う。

基礎コースと発展コースで，希望した人数を比較すると基礎コースの方が人数は少なく，基礎問題についてじっくりと考える時間を取ったり，図形では模型を使って体験を通して学んだりすることができた。発展コースにおいては，発展問題や応用問題だけでなく，実用的な問題にもグループでチャレンジするなど協働的に学習を進められる場面を多く設定することができた。

○　日本語の支援が必要な生徒には，国語科の時間に取り出しによる日本語指導を行う。また，社会科や数学科，理科などの時間は，隣で学習をサポートする教員を配置する。

日本語指導の成果としては，日本語の支援を必要とする生徒が不登校・不登校傾向になることなく，毎日生き生きと学校生活を送れたことに他ならない。小学校の学習に戻って小学生が学習する漢字や物の数え方の学習をした。また，社会科や数学科，理科の時間に学習をサポートする教員がいたことで，難しい言葉の意味を理解し，課題解決を図ったり，自分の考えを示したりすることができた。

○　既習事項はいつでも学び直しができるようにする。

『映像授業とデジタルドリルで学べるＩＣＴ教材 eboard（イーボード)』は，自分自身が学びたい内容を選択できることと選択した内容には映像付きで学習を進めることができる点が大変優れている。アシストルームを利用する生徒は，１年生の内容まで遡って学び直しをしていた。生徒指導提要にも書かれているが，オンライン教材は，不登校・不登校傾向の生徒に対する手立てとして大きな可能性があると感じた。

（３）アシストルームを利用する生徒のアンケートより

アシストルームを利用していた３人の生徒にアンケートを取った。回答内容は以下の通りとなった。

質問①　アシストルームは，学校に来るきっかけとなったか。

・　なった。（３名）

質問②　アシストルームの環境はどうだったか。

・　安心感がある。居心地が良い。とても落ち着く環境で心が休まる。

質問③　アシストルームがあってよかったことはどんなことか。

・　先生だけでなく，多くの大人が出入りするので，心の相談員やカウンセラーさんとも話ができたこと。学校に行く理由にもなったし，心が落ち着いて教室にも入りやすくなった。自分を見つめ直せた。人と話しやすくなり，学校に来やすくなった。教室に入ることができるようになったのは，アシストルームが安心できる楽しい場所だったからだと思う。

質問④　アシストルームで過ごすことで，どのような力がついたと思うか。

・　コミュニケーション能力や自分で考える力，自分を客観視する力。一番は何事も楽しめる力がついたと思う。集中力。人と話す力と学校に通う力，勉強する力，体力。

３年生のうちの一人は，保健体育科の水泳の授業を参加することをきっかけとして，通級指導を受けたり，給食を通常学級で食べたりできるようになった。２学期になると，他の教科の授業を教室で受けられるようになった。何よりよかったのは，メンタルヘルスが落ち込んだときなどは，アシストルームで一息つくなど，心休まる場所にしたことだと思う。自分にとって何が必要かじっくりと考えることができたことは，進路選択のときでも有効に働いた。２年生の生徒は「３年生を送る会の合唱は歌いたい」と音楽の授業に出るようになった。自分のペースで登校し，自分のペースで成長しようとしている。これらの生徒の欠席状況は昨年度と比較して右の表のように変化した（今年度の欠席日数は１月末現在）。

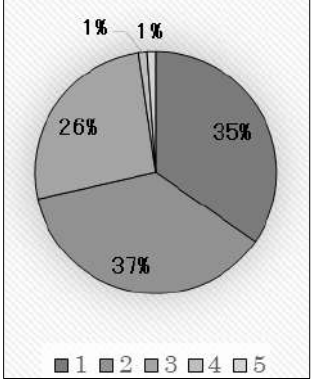
	性別	昨年度の欠席日数	今年度の欠席日数
３年　生徒Ａ	女子	６３　日	１　日
３年　生徒Ｂ	女子	１４１　日	１０　日
２年　生徒Ｃ	女子	６２　日	４５　日

（４）少人数指導やＴＴに関するアンケートより

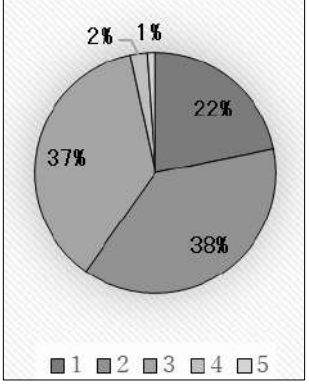
少人数指導やＴＴに関するアンケートを全生徒対象に行った。その結果に注目すると「少人数指導やＴＴで行う授業は分かりやすいですか」という質問に対して，１の「よく分かる」と回答した生徒が 35%，２の「どちらかというと分かりやすい」と回答した生徒が 37%になり，７割を超える生徒が分かりやすいと感じていたことが分かった（資料１）。

また「少人数やＴＴで行う授業では質問しやすいですか」という質問に対して，１の「とてもしやすい」と回答した生徒が 22%，２の「どちらかというとしやすい」と回答した生徒が 38%になり，６割の生徒が質問しやすいと感じていたことが分かった。

資料１
少人数指導やＴＴで行う授業は分かりやすいですか



資料２
少人数やＴＴで行う授業では質問しやすいですか



これら２つの質問に対する回答からは，少人数指導やＴＴの授業は分かりやすいと感じる場面が多く，気になったことや疑問に思ったことも積極的に質問することができる。また，その質問のしやすさが「少人数指導やＴＴの授業は分かりやすい」ということに再度つながってきていると感じた。

（５）まとめ

以上の結果から，仮説は一定程度立証されたと言える。

６　今後の課題

アシストルームの環境整備の実践では，社会のニーズ，生徒のニーズの高まりを感じたことがきっかけとなったが，近隣市町の学校でも校内教育支援センターのあり方はまだまだ定まっていないのが実状である。誰が担当するのか，加配はあるのか，誰が利用できるのか，その生徒は何をして過ごすのか，など，行政を交えての模索が続いている。今後どのようになっていく不明な点も多い取組だが，生徒にとってよりよい場所となるよう，行政に対しても声を届けていきたい。今年度の本校の実績が成功体験と確信している。

指導体制や授業方法の工夫については，生徒指導提要にも求められている内容である。まずは，その内容職員全体で周知していかなければならない。現職教育などの時間を使い，今日必要とされている生徒指導のり方を学校全体で理解し，実践していくことが求められている。また，指導体制や授業方法を工夫するに当り，最も必要なのは，やはり人材である。少しでも多くの教員が配置されるよう求めていきたい。

目次へ

研究主題	命の大切さを学ぶ		
副　　題			
学 校 名	蟹江町立蟹江北中学校	校 長 氏 名	森　敦睦

①『思春期講座～自分や相手の命を大切にするための行動を考えよう～』（３年生）

令和６年６月 14 日（金）５・６限に名古屋医専助産師学科の伊藤先生を講師に招き、授業を行った。

（１）　性感染症広がりについて

性感染症の広がり実験を行った。【資料１】

水の入った透明なコップを配布し（１つだけ炭酸ナトリウムを入れておく）、相手のコップに自分の水を全部入れ半分返した。次に、ペアを変えて同じことを５回繰り返した。水交換終了後、全員のコップにフェノールフタレインを垂らすと多くの生徒の水の色が変わった【資料２】。実験から、性感染症の広がる仕組みを実感することができた。



【資料１】性感染症の実験

性感染症を予防するためには、性的接触をしないことが最も有効だが、特定のパートナーとのみ性的接触をする、より安全な接触をする（コンドームの使用）があるが、性感染症を知り、自分の体を観察し気付くこと、恥ずかしがらずに専門家に相談すること、パートナーと話すことが重要であることを学んだ。



【資料２】色が変わったコップ

（２）　よりよい人間関係について（デートＤＶ）

「デートＤＶ」とは、恋人やパートナーとの間で起こる「暴力」のことであり、身体的暴力だけでなく、精神的暴力、経済的暴力、社会的暴力、性的暴力などがあることを学んだ。お互いに対等につきあえるよう、自分の気持ちや考えを話すことが大切であること、困ったら信頼できる大人に相談することを学んだ。

（３）　まとめ

『思春期講座～自分や相手の命を大切にするための行動を考えよう～』では、性感染症（ＳＴＤ）やエイズ、避妊の方法についての知識と理解を深めた。また、デートＤＶについて知り、よりよい人間関係の築きくことが大切であることを学んだ。

②『思春期講座～命の授業～』（１年生・２年生）

令和６年 10 月 25 日（金）５・６限（２年生）、令和６年 11 月 21 日（木）５・６限（１年生）に名古屋医専助産師学科の伊藤先生と学生さん５名を講師に招き、授業を行った。

（１） 生命誕生と着床、胎児の発育について

学生さんが子宮パネルを使用し、排卵、受精、着床の様子について説明があった。その後、それぞれの月齢に応じた胎児モデルを見たり、触ったりして胎児の成長過程や大きさ、重さを知ることができた【資料３】。



【資料３】胎児モデル

（２） 出生時の回旋の様子について(大きな子宮袋から生まれる体験)

出産時に胎児は陣痛により体中押しつぶされそうになりながら、骨盤の形に合わせて回旋し、産道をくぐり抜けてくると学んだ。その後、大きな子宮袋に生徒が入り、出産時体験した【資料４】。生徒からは「陣痛が来て（押されて)、体を回旋するのが大変でした。」と出産の大変さを感じる感想が聞かれた。



【資料４】出産時体験

（３） 赤ちゃん誕生の瞬間について

赤ちゃんは生まれた瞬間、空気を吸って肺を膨らませることについて説明を聞いた。その後、生まれた瞬間の第一呼吸（容器に水をいれ長さ２ｍくらいのチューブを差し込んで吸わせ、水が 40～80ｃｍ上昇するまで吸う）体験をした【資料５】。



【資料５】生まれた瞬間の第一呼吸の体験

（４） まとめ

『思春期講座～命の授業～』では、受精から出生までの仕組みを科学的に学ぶことができ、一人ひとりがかけがえの無い存在であることに気付くことができた。授業後の生徒振り返りからは「受精することがすごいのに、それからお腹の中で育たないといけなかったり、産まれたときに泣かないといけなかったり、いくつもの試練があることを知らなくて、今自分が生きていることがすごいなと思いました。」といった感想があった。

③ 研究の成果と課題

思春期講座を行うことで、命の大切さを感じ、一人ひとりがかけがえのない存在であることに改めて気付くことができた。自分を大切にすることだけでなく、相手のことも大切にできる生徒を育成できたと考える。今後は、よりよい人とのかかわり方（パーソナルスペース）や性被害の加害者、被害者にならないための『命の安全教

育』に力を入れたいと考える。

目次へ

研究主題	主体的に考え、判断し、行動できる生徒の育成		
副　　題	「探究的な時間の活動」の授業実践を通して		
学 校 名	東浦町立北部中学校	校 長 氏 名	青木　俊

1　主題設定の理由

本校では、令和２年度からは、各教科の授業において、学習を生徒に委ねる実践を通して、主体的に考え判断し、行動できる生徒の育成に重点を置いてきた。今年度も生徒の主体性を育むために、研究主題をこれまでと同じとした。

2　研究の仮説

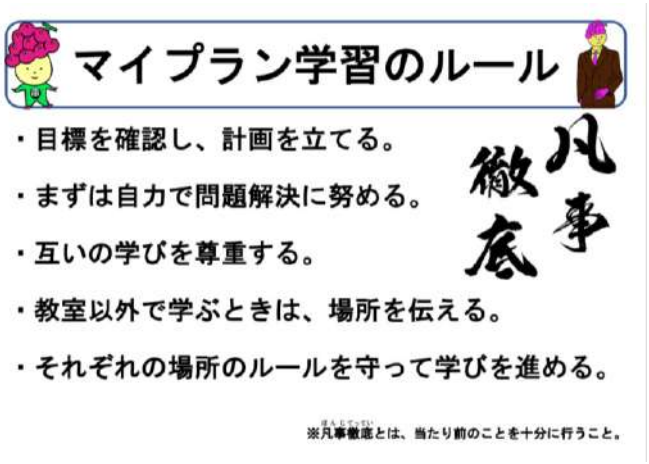
・生徒に事前に単元構想を伝え、単元の目標を明確にし、見通しをもたせて、生徒に学ばせることで生徒の主体性を育むことができるであろう。

・自学の時間や探究的な活動の時間の中で、教科の特性を踏まえたり生徒の実態に応じたりした指導、個に応じた支援をすることで、生徒の主体性を育むことができるであろう。

3　実践内容（単元内自由進度学習（マイプラン学習）の実践内容）

第１学年　英語科　Unit5　A Japanese Summer Festival

単元の導入でオリエンテーションを実施した。オリエンテーションでは、単元の目標、学習内容、学習の進め方（参考程度）、ヒントや解説の在りか、探究活動の内容について生徒と教師が共有する。これらの内容を示したものが「学習の手引き」で、オリエンテーションの後、生徒は与えられた時間数の学習計画を立て、「学習の手引き」を参照しながら一人で学習を進めていく。



また、単元内自由進度学習では、生徒に学習内容や学習方法だけでなく、時間、場所に関してもゆだねる。そのため、北部中学校では、学習を生徒にゆだねる際の最低限のルール（マイプラン学習のルール）を設けており、オリエンテーションの際に共有する。また、それだけでなく、それぞれの教室にも掲示してある。

先述したように、オリエンテーションを終えると、生徒は学習計画を立てる。①学習内容を確認し見通しをもって計画を立てようとする生徒、②学習内容も確認せずに形だけの計画を立てようとする生徒、③学習内容を確認しても学習の仕方が分かっていないためか計画をなかなか立てることができない生徒、④全く計画を立てられない生徒など、さまざまな生徒の姿が見られた。研究の仮説にあるように、「見通しをもたせて、生徒に学ばせる」ことができていなければ、本研究の意義がないため、②、③、④のような生徒には個々に指導、支援をしていく。例えば、②のような生徒には、学習内容を確認した上で計画を立てたのか確認をする。単純に計画さえ立てればよいと思っていた生徒は、改めて学習内容を確認し、計画を立てようとする姿が見られた。中にはすでに予習を済ませており、学習内容を把握しているという生徒もいた。このように、②のような生徒は、計画内容が似通っていても、生徒の実態はさまざまである。教師が生徒一人ひとりを見とり、声をかけることで生徒理解につながると考える。

また、③のような生徒は、メタ認知能力が低いことが分かる。そのため、例えば「教科書の○○の英文をどれくらいの時間で日本語にすることができるかな」といった具合に、まずはスモールステップでの見通しをもたせられるような声かけをした。生徒はこれまでの学習経験からなんとなくの数字を答えるが、中にはそれでも全く見通しをもつことができない生徒もいる。そういう生徒に、単元の見通しをもって学習計画を立てるというのは効果的でないと考える。そこで、まずは２時間程度の計画を立ててみようかといった具合に、当面の見通しをもたせて学びに向かうことができるように支援した。

④のような生徒は、自分で計画を立てて学習を進める経験が少なかったり、そもそも学習に対して苦手意識をもっていたりする場合が多い。先述した③のような生徒同様に、小さな見通しをもたせることで学習に向かうことができる生徒もいれば、自力ではどうにもできない生徒もいる。そういう生徒には、自分で学習を計画し、進める経験を積ませつつ、成功体験を味わわせる必要がある。そこで、本来の意図とは方向性が異なるが、こういった生徒には寄り添いながら個別に学習指導し、学習の仕方を分かってもらうところから始めた。すると、ある時、④のような生徒が休みの日を使って勉強したと報告してくれた。学習の仕方が分かってきたから自力で学習に向かってみようと思ったのだと考えられる。



学習計画を立て、それぞれが自分のペースで学習を進める。教科書の新出単語を確認する生徒、新出文法の解説動画を視聴する生徒、教科書の英文の和訳に取り組む生徒、新出文法の演習問題に取り組む生徒、音読の練習をする生徒など、さまざまな姿が見られる。最低限取り組む内容を終えた生徒は、チェックテストを受けることとなっている。このテストに合格すると、探究活動に取り組むといった流れとなっている。単元を通して身に付けた力を他者のために発揮する機会である。単純に単元のまとめの時間ではなく、アウトプット先を明確にした上での活動となるため、生徒は試行錯誤しながら活動する姿が見られた。ある生徒たちは、４人のグループを作り、「小学生にも分かる前置詞解説動画」を作ろうとしていた。それぞれがねらいを達成するために、役割分担し、協働しながら学びを進めていた。先述したように、身に付けた力を他者のために発揮してほしいという願いから、「小学生は小学生でも、具体的にどの学年のどんな子に向けて作るのか」といった助言をした。こういった助言でまた、生徒は試行錯誤しながら探究をしていた。

単元が終わると、生徒は単元のふり返りをすることとなっている。計画を立てる際と同様に、ていねいにふり返りができる生徒とそうでない生徒に分かれる。言語によるアウトプット能力が乏しいことが考えられる。

４　成果と課題

単元内自由進度学習を実践した後、生徒にアンケートを実施した。多くの生徒がメリットを感じているように思われた。

しかし、中には「先生の授業を受けた方が効果的だ」という意見もある。こうした意見に対してニーズに応える必要はあるが、こういう意見を出す生徒こそ主体性が乏しいと考えられる。つまり、言われたことだけをこなせばよいと考えている生徒が該当すると考えられる。今後、一斉授業と学習を生徒にゆだねる授業のバランスを取り、生徒の主体性を育んでいきたいと考える。

目次へ

研究主題	主体的に取り組む生徒の育成		
副　　題			
学 校 名	武豊町立武豊中学校	校 長 氏 名	鈴木　和久

１．はじめに

ＩＣＴ機器が導入され、生徒がより身近に実験の映像資料を見ることができるようになった。しかし、映像資料だけでは、生徒の理解は深まるものの、主体的に学習をすることは難しい。実物資料に触れたり、体験したりすることで、より主体的に学ぶことができると考え、家庭科と理科で実践を行った。

２．家庭科での実践（３年生　保育）

この単元では、乳児や幼児の生活・食事について学習し、学習の一環として近隣の保育園を訪問している。乳児や幼児がおもちゃを用いて遊んでいる映像資料を見ても、実際にどのように使えばよいのかが分かりにくい。そこで、実物資料として「乳児・幼児のおもちゃ」を授業で使うことで、おもちゃの素材や扱い方の注意点、遊び方について学び、理解を深めることができた。生徒からは、「自分たちの頃のおもちゃよりも進化している。おもちゃに事前に触れたことで、保育園実習で扱い方に注意しながら園児と遊ぶことができた」という声が聞かれた。



３．理科での実践（２年生　生物）

この単元では、生物の体のつくりについて学習をしている。教科書には解剖図が掲載されているが、その図だけで学習を深めることは難しい。グループごとにイカと解剖ばさみを準備して、実際にイカの解剖を行った。生徒はあまり触れることのないイカに触れながら、臓器やその役割の説明を確認しながら解剖を行った。生徒からは、「写真よりもわかりやすかった。ほかの生物も解剖をしてみたい。」など今後も主体的に学習を進めたいと考える発言が見られた。



４．おわりに

家庭科や理科で実物資料を用いた授業の実践を行った。準備や実際に触れる時間をとることで、時間はかかるものの、生徒が驚いたり、感心したりしながら授業を受ける様子が見られた。今年度購入したものは来年度も活用することができるものも多い。来年度以降も活用していくことで、生徒が主体的に学習に取り組むことのできる生徒を育成していきたい。

・研究主題・副題は１４ポイントです。変えないようにしてください。
・副題がない場合は空欄にしてください。
・本文の体裁は４４字程度×４３行程度、１２ポイントとしてください。
・写真や図表の資料を別添することはできません。論文内に掲載してください。
・このテキストボックスは削除してください。

目次へ

研究主題	人との関わりの中で　自らを高め　つながりを大切にする子の育成		
副　　題			
学 校 名	豊橋市立松葉小学校	校 長 氏 名	松河　由美子

はじめに

本校は、豊橋市の中心部に位置し商店や事業所が集中している。16の自治会から成り、歴史的な祭事の伝承や人とのつながりを大切にする校区である。一方で、分譲マンションが続々と建設されており、地域とのつながりが少なくなっている地区もある。また、85%が核家族世帯である。

子どもたちは、明るく素直で、言われたことをしっかりやろうとしたり、学習に前向きに取り組もうとしたりする児童が多い。さらに、家族や地域に支えられ，見守られていることを感じながら登校している。

このような実態をふまえ、研究主題を『人との関わりの中で　自らを高め　つながりを大切にする子の育成』とし、教育活動をすすめることとした。

1　めざす子ども像

・知的好奇心や探究心をもって、友達と協力して問題解決ができる子
・他者との関わりを通して自己を見つめ直し、将来に向けてあこがれや夢を抱く子
・たくましい心身を備え、自律した生活をしようとする子

2　てだて

（1）〈授業をつくる〉もっと知りたい、やってみたいが持続する授業づくり（個が輝き、学級が響き合う授業の推進）

子どもたちが主体的に問題解決的な学習を進めていけるように、教材の構造（学習内容の系統性、発展性）を捉え、子どもの思考に寄り添った単元を構想、授業づくりを進める。さらに、積極的に外部講師を招聘したり、校外学習に出かけたりすることで、講話を聞くことや体験活動をすることができる授業を展開する。

（2）〈夢をデザインする〉自己有用感を高め、あこがれや夢を抱く子の育成

生き方を見つめる「夢デザインプロジェクト」を中心にし、子どもが主体となり、家族・校区・地域などとのつながりを意識したキャリア教育を軸にした授業づくりをすすめる。また、授業を支える「聞く力・話す力」を鍛える場として、朝の活動「おはなし あのね」の時間の充実を図る。縦割り班活動を軸として、縦（上学年と下学年）のつながりを充実させるとともに、学年集会やクラスマッチを通して、横（同学年同士）のつながりの充実を図る。

（3）〈心と身体をつくる〉たくましい心身を備え、自律した生活の営みを導く教育活動の展開

3つの委員会（運動・給食・保健）が連携して活動し、健康的な生活習慣を啓発するとともに、学校保健委員会など、計画的な保健指導を通し、自分を見つめる機会に出会わせる。

3　研究の実践

（1）授業実践

一人一実践として全担任および専科教員が授業研究を行った。そのうち、3人が教科等指導員を招聘し全体授業研究会を実施した。すべての研究授業において、目の前にいる子どもたちの実態に即して、どんな力をつけさせたいかを明確にし、単元や本時のねらいを絞り、そのねらいを達成するためのてだて（支援）をどのようにすればよいかを考え、実践した。また、ペアやグループ活動を通して、自分と友達の考えを比較したり、自分の考えを深めたりすることができるような関わり合いを重視して取り組むことができた。

（2）出前講座や校外学習など

各学年でさまざまな出前講座を実施したり、校外学習にでかけたりした。以下に主なものを一覧で示す。

〈出前講座〉

学年	講座名	講座名
1	動物の「いのち」について考えよう	中村正義の《顔》でふくわらい
2	自分の身を自分でまもるには！	貯金箱を作ってお金の大切さを知ろう！
3	体験！発見！はじめてのユニバーサルデザイン	火災について学ぼう！
4	ピカピカの水～私たちのくらしと水道・下水道	ごみはどこへ行く
5	スマホ・ネット安全教室	わくわくするモノづくりUHOLABO
6	楽しく学ぼう！「ＳＤＧｓ」	バイオマス発電所について

〈校外学習〉

学年	内容等	学年	内容等
1	豊橋公園にて秋見つけ	2	親和産業ほか４事業所で施設見学
3	あいトピア・消防署見学	4	校区ハザードマップづくり
5	トヨタ自動車・花王工場見学	6	修学旅行

それぞれにおいて、外部講師のかたや保護者、地域のかたがた等の協力のもと、体験的な活動を実施することができた。特に、４年生では、特殊なアプリが入ったタブレット端末を借りて校区ハザードマップづくりを行った。班ごと校区を分担し、タブレット端末で危険だと思われる道路や建物等を写真撮影した。アプリでは写真の位置情報が記録されるため、どのように危険で、どう対応すべきかをまとめたハザードマップを作成した。そのハザードマップを校区防災訓練に展示し、学んだことを発信した。さらに、避難所開設や災害時に自分たちができることを考え、実践したことや提言をまとめ、校区自治会長等に発表した。

（3）「夢デザインプロジェクト」

低学年では、友達や家族との関わりから自分を知ること、中学年では、仲間や校区との関わりから自分を振り返ること、高学年では、地域社会との関わりから自己を見つめ直すことをねらいとして、６年間の学びを系統的に組み立てた「夢デザインプロジェクト」を軸とした、各学年の発達段階に応じたキャリア教育をすすめ、夢の実現に向けて努力する子どもの育成を目ざした。特に、５年生では、夢 work 体験として、校区内および近隣の 25 事業所の協力を得て、職場体験学習を実施し、働くことの意義や大変さを実感することができた。さらに、４年生以上が参加する年２回の「ようこそ先輩（クラブ活動）」では、延べ 35 人の講師のかたを迎え、花のあるくらし～生け花～，火起こし・煮たきを楽しもう！，バスケットボールを楽しむなど、延べ 25 の講座を開設し、さまざまな体験活動をした。



（4）「おはなし　あのね」

毎週金曜日の朝の活動（８：２０～３５）に、自分の考えを相手にわかりやすく伝えることができるようにする。（話す力）友達の考えを聞き入れ、自分の考えを広げたり深めたりできるようにする。（聞く力）をねらいとして、「おはなし　あのね」を実施した。それぞれ発達段階に応じて２つの目標を設定して取り組んだ。低学年は、自分の考えをたくさん発言することができる，自分の考えの理由を言うことができる。中学年は、ハンドサインを使うことができる。（つけたし，反対，質問など），友達の考えとつなげて、自分の考えを発言することができる。高学年は、

自分たちだけで話し合いを進行することができる。（テーマ選び，司会，板書など）出された考えをまとめて、発言することができる。また、それぞれの学級で、座席の位置や向きや話し合いの形式を工夫して実践した。話し合いのテーマは、多岐にわたり、２択のものやオープンエンドのもの、学級で結論を出そうとするものなど、各学級でテーマを決め、実施した。また、あるテーマに沿って班で話し合い、他の班の考えとバッティングしないように相談する活動や班ごとアドジャンなど、学級全体ではなく、班活動も実施した。



（５）「縦のつながり」と「横のつながり」の充実

「縦のつながり」については、縦割り班活動を赤，白，青の３色に５班ずつ計 15 班編成で年間 10 回実施した。そのうち学期に１回ずつ、ペア学年での活動も行い、上級生が企画・運営していく力を少しずつつけていくようにした。また、運動会において、全校種目として縦割り班の色対抗で大玉おくりを行った。それぞれの活動において、上級生が下級生に対して上手に指示を出し、楽しく過ごすことができた。また、「横のつながり」については、各学年において、学年の代表が企画したクラスマッチを実施することで、学級や学年のきずな（仲間意識）を深めることができた。



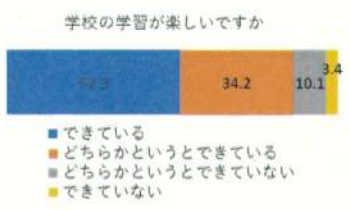
（６）学校保健委員会

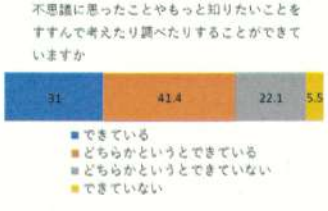
今年度は、「めざせかがやきさん　～最強の心と身体になるために～」をテーマとして、２回学校保健委員会を実施した。１回めは、健康な体を作るために、規則正しい生活を身につけることが大切であることを理解し、自らの生活を見直し、改善しようとする意識をもつことをねらいとして、運動・給食・保健委員会が発表した。２回めは、スクールカウンセラーの松﨑拳太氏を招聘し、上手なコミュニケーションの取り方について話を聞き、自他の心に関心をもち、自分も周りの人も気持ちよく過ごせるよう行動する意識を育てることをねらいとして、アンガーマネジメントについて講演していただいた。

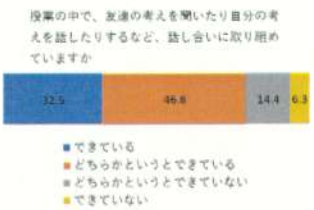


４　研究のまとめと考察（てだての考察から）

（１）てだて１〈授業をつくる〉について子どもたちの思考に寄り添った単元を構想し授業を展開したり、さまざまな出前講座での体験活動や講話を聞いたことで、「学校の学習は楽しいですか」，「授業の中で不思議に思ったことやもっと知りたいと思ったことを、すすんで考えたり調べたりすることができていますか」，「授業の中で友達の考えを聞いたり、自分の考えを話したりするなど、話し合いに取り組めていますか」というアンケートに対して、肯定的な回答をした児童の割合が、それぞれ、86.5%，72.4%，79.3%という結果であった。この結果から、てだて１は有効であった。

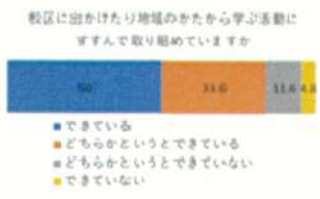


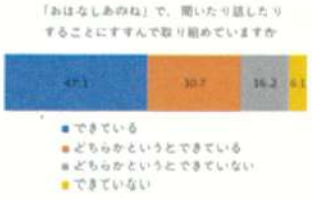




（２）てだて２〈夢をデザインする〉について家族、校区、地域などとのつながりを意識したキャリア教育を進め、「おはなし あのね」を充実させ、割り班活動を軸とした縦のつながりと学年集会やクラスマッチを通した横のつながりの充実を図ったことで、「校区に出かけたり地域のかたから

学ぶ活動に、すすんで取り組めましたか」，「『おはなしあのね』で聞いたり話したりすることにすすんで取り組めていますか」，「児童集会や縦割り班活動は楽しいですか」というアンケートに対して、肯定的な回答をした児童の割合が、それぞれ、83.6%，77.8%，80.2%という結果であった。この結果から、てだて２は有効であった。

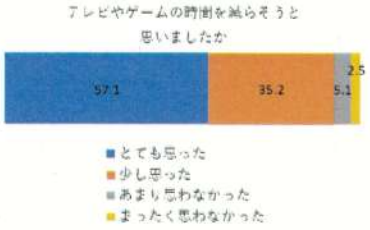


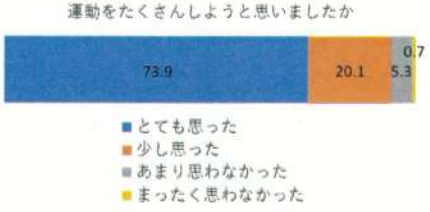


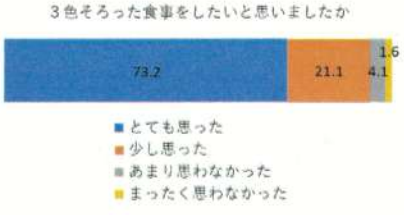


（3）てだて３〈心と身体をつくる〉について

学校保健委員会では、保健・給食・運動委員会が連携して、劇を交えて生活を見直すよう呼び掛けたり、講話を聞いたりして、健康に過ごすための意識を高めたことで、「テレビやゲームの時間を減らそうと思いましたか」，「運動をたくさんしようと思いましたか」，「３色そろった食事をしたいと思いましたか」というアンケートに対して、肯定的な回答をした児童の割合が、それぞれ、92.3%，94.0%，94.3%という結果であった。この結果から、てだて３は有効であった。







５　研究の成果と課題

〈授業をつくる〉では、子どもの思考に寄り添い、単元を貫く問題解決的な学習を実践したことで、子どもたちの意欲が高まり、主体的に学習する姿が見られたので、来年度も継続していきたい。さらに、ペアやグループ活動を通して、自分と友達の考えを比較したり、自分の考えを深めたりすることができつつあった。さらに、考える力を高め、学びを深められる授業づくりができるよう、さまざまなグループ活動の形態を模索しつつ、話し合いが活発になるための切り返しの発問や、新たな気づきや課題を生むような展開の工夫についても研究を進めていきたい。

〈夢をデザインする〉では、今まで以上に、それぞれの学年で、他者と関わりながら「夢デザインプロジェクト」を実施することができた。全学年で出前講座や校外学習に出かけ、多くの講師の講話を聴いたり、体験活動をしたりすることができた。来年度も地域とのつながりを意識し、今年度以上の活動を実施できるようにしていきたい。さらに、「おはなしあのね」では、子どもたちが活発に発表するための工夫や友達の意見を聞く雰囲気づくりをしたことで、少しずつ自分の考えを発表する楽しみを感じ、自分の思いと友達の考えを比較しながら話を聞くことができる子どもたちが増えてきた。来年度以降も、継続して取り組んでいきたい。

〈心と身体をつくる〉では、運動委員会、保健委員会、給食委員会の３つの委員会が中心となり、今年度は「健康な心と身体をつくる」について関連性をもって活動したことで、子どもたちの意識の高まりを感じた。来年度も今年度同様、運動・食事・睡眠の３つがそろって心身ともに健康に過ごせるということを基盤に、児童自身が健康に過ごすためにできることをできるような内容（姿勢、給食、運動、けがの防止、心の健康、病気の予防など）について重点を置いて取り組みたい。

目次へ

研究主題	「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業・活動の創造		
副　　題			
学 校 名	豊橋市立花田小学校	校 長 氏 名	山田　昌弘

1　研究のねらい

子どもには、共に生きる豊かな社会を創ることができる資質・能力、真の生きる力を育成したい。この育成には、問題解決的な学習における「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業・活動づくりの工夫・改善・充実が不可欠である。この考え方に立ち、「学び合い、深め合う授業・活動」づくりに焦点を当て、有効な教師支援のあり方を実践的に研究していく。

2　目指す子ども像

・互いのよさを生かし合い、協働的して追究を深めたり、活動を工夫したりする花田っ子

3　研究の仮説

・花田っ子の興味・関心を把握し、一人一人の問題意識を軸に据えた問題解決的な学習を構想し、一人調べとかかわり合いのもち方を工夫することで、互いのよさを生かし合い、協働的に追究を深めたり、活動を工夫したりする子どもが育つだろう。

4　具体的な手だて

(1) 4年社会科防災学習において、問題解決的な学習が展開できる単元を構想する。
(2) 追究の目標を明確にした上で、一人調べの時間を確保する。
(3) 一人調べを支えるために自作資料を提示したり、ゲストティーチャーを招へいしたりする。
(4) 追究を深めるためのかかわり合い、追究を振り返るかかわり合いを意図的に設ける。

5　研究の実際（一部）

(1) 単元

4年社会科「南海トラフ大地震に備え、みんなで実現する減災～自然災害からくらしを守る～

(2) 単元目標

・過去に発生した地震災害や、これから想定されている南海トラフ大地震とその備えについて調べ、地震災害の被害から暮らしを守る活動が行われていることを理解する。
・愛知県・豊橋市・校区自治会の協力に注目し、想定される南海トラフ地震の災害から人々のくらしを守る活動をとらえ、その動きを考え、表現することができる。
・南海トラフ大地震における豊橋市の課題や自分たちの備えについて、見出した問題を解決するために、自ら追究方法を計画したり、学習を振り返ったりしながら粘り強く追究活動に取り組もうとしている。

(3) 授業実践

①　単元の導入　第1時～第3時

子どもたちに南海トラフ大地震の臨時情報が出たことを思い出させたり、日向灘の地震被害の様子を調べさせたりすることで、教材に出会わせた。その後、話し合いの場をもった。子どもたちは「いつ地震が起きるかと思って怖かった」「日向灘では１５人の人がけがをしたってニュースで言っていたよ」などの意見が出された。また、「地震では国や市が対応していたよ」といった自治体の対応に着目した意見や、「南海トラフ大地震が起きたらどうなるのだろうか」といった問題意識が出された。



この問題意識を高め、追究目標を明確にすることを意図して、かかわり合いを設けた。そして、かかわり合いにより「南海トラフ大地震が起こったら、僕らのくらしはどうなってしまうのだろうか」という追究目標にまとめ、一人調べの時間を設けた。

② 追究の実際　第４時～第７時

くらしがどうなるかを考えるためには、被害の予想を把握しなければならない。そこで、子どもたちに助言し、まず被害予想を把握することから調べを進めた。この一人調べを支援するために、愛知県や豊橋市、花田校区のハザードマップや自作の被害予想のデータ等を資料として提示した。


校区自治会長さんのお話を聴く

調べが進んだところで、追究を深めるかかわり合いを設けた。「愛知県は大体震度６を超えているよ」「海に近い所は津波が来るよ」「水道が復旧するまで６週間もかかるよ」などの意見が出され、被害の様子が明らかになってきた。そこで追究の方向を「愛知県」「豊橋市」「校区自治会」の３つに分類し、地震の備えをする各機関・団体の具体的な取り組みを追究していけるようにした。そして、子どもの求めに応じて、校区自治会長をゲストティーチャーとして招へいし、校区防災訓練の様子や自治会の取り組み、コンテナ内の避難所関係の備品の見学などの機会を設けた。

> 私は自治会のはたらきがすごいなと思いました。理由は自治会が防災訓練をしているからです。自衛隊だけが防災訓練をしていると思っていましたが、自治体もやっていてすごいなと思いました。（校区自治会長さんのお話を聴いて）

この後、３つの方向からの一人調べが進んだところで追究を深めるかかわり合いを設けた。一人調べの状況を把握し、話し合いのテーマは「豊橋市の減災対策は十分なのか」とした。

【十分と考えた子ども】
- 県や市は災害の情報を出したり、万が一の時に対応したりしてくれるから安心
- 十分だけど、住民の努力が必要ではないかな

【十分ではないと考えた子ども】
- 地域によって被害が違うから、必要なところに支援できるようにしたほうがよい

・避難はできるけれど、備蓄が足りないよ

などの意見が出され、備蓄や家具の固定などの自助の必要性や、共助や公助の充実が必要になるといった考えが広がった。特に自助の必要性を考える子どもが多かったため、全校の保護者を対象に、「防災アンケート」を実施することにした。アンケートの質問は子どもたちが考え、調査はWEBによる回答で集約することにした。

> 予想したよりも水や食料などを用意している家は少なかったし、十分でないと思った。もっとみんなが備えをしないといけないと思った。自分の家も、まだまだ。家で話し合って備えていきたい。　（防災アンケートの集約後）

③　追究のまとめ

本調査後、これまでの追究のまとめとして、一人一人に防災新聞を作成するよう促した。防災新聞には、アンケート結果を上手にグラフ化し、自分が家族や校区の人に必要と考えた地震の備えが分かりやすくまとめられていた。自分の命は自分で守るという自助の大切さを実感している子どもが多く見られた。また、その備えを、水〇リットル、食料〇個というように、家族の人数と３日分の備蓄から具体的に数量化するなど、備えへの意識の高まりがうかがえた。



6　研究の成果と課題

(1) 成果

・防災に関わる教材開発をし、子どもの思考に沿った問題解決的な学習となるよう単元を構想でき、追究を深めることができた。

・一人調べに対する支援として、ゲストティーチャーは有効だった。

・当初予定になかった保護者に対する防災アンケートは、より校区の実態が把握でき、防災意識を高めることに有効だった。

(2) 課題

・一人調べが深まった段階でかかわり合いを設けたが、さらにその有効なタイミングを考えていきたい。

・保護者への防災アンケート結果は、保護者や地域に還元し、子どもたちの学習が地域に役立つことを実感させたい。その方法を探りたい。

(3) その他

・２年生活科学習「校区のすてきを見つけよう」、３年総合的な学習「未来に伝えよう　花田の自慢」においても、この研究実践と同様に、教材開発をし、問題解決的な学習により、子ども主体の学習を展開した。

・今後も、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業・活動を目ざして、実践的に研究を深めていきたい。

目次へ

研究主題	学校になじめない子どもたちの自立に向けた支援のあり方		
副　　題	～生活サポート担当を核とした校内適応指導教室（ほかほかルーム）の運営をとおして～		
学 校 名	豊橋市立汐田小学校	校 長 氏 名	中　神　和　也

１　はじめに

平成から令和の移り変わりとともに、全世界を襲った新型コロナウイルス感染症によるパンデミック。全国一斉休校に突入し、卒業式から入学式、１学期の途中まで子どもたちは互いの顔を見ることすらできなかった。「学びをとめない」として、「ギガスクール構想」も前倒しされ、一人一台端末が配備された。コロナウイルスが感染症上、５類に移行されるまで、検温やマスク、手指消毒とソーシャルディスタンスなど人間関係を希薄にする行動が推奨され続けた。

コロナが収束し、大人たちは、コロナ前の生活を思い描きながら、教育環境の再生を見直すとともに進めた。子どもたちはマスクを外すことを恐れ、なかなか以前のような笑顔は戻ってこなかった。コロナの影響だけではないと考えられるが、低学年の登校渋りが増加傾向にあり、集団のなかでの学校生活に不適応を起こす子どもが多くみられるようになってきている。

２　実態と解決のための手だて

―【実態】――――――――――――――――――――

○なんとなく学校に足を向けられない子ども
○久し振りに登校し、しばらく会っていない友達と仲良く遊び、翌日再び登校しない子ども
○学校へは来れないが、放課後に楽しく友達と遊ぶ子ども
○通学班と一緒に親子登校をする子ども
○元気な声や雑踏が気になって教室にいることが苦痛に感じる子ども

――――――――――――――――――――――――

学校として現状の中、できることを模索した。

■校内で安心していられる居場所をつくる
○場所と人を保障すること
○自己決定と自己実現ができる場所
○人とつながれる場所
○人と離れられる場所

３　具体的な手立て

（１）校内適応指導教室（ほかほかルーム）の設置

――――――――――――――――――――――――

・何もない教室を居場所として開放する
・専任として午前中の時間に教員を配置する

――――――――――――――――――――――――

保健室を心身の不調や相談のための居場所として活用してきたが、来室者が多いこと、体調不良による在室は１時間までなどの制約がある。そもそも「居場所」とは、その子にとって居心地のよい場所である。自分たちの手でつくっていくことを大切にしたいと考えた。

生活サポート主任（校務主任）の午前中の授業をすべて無くし、いつ登校しても対応できるよう、ほかほかルームの専任の担当とする。

（２）自己決定と担当の寄り添い

活動内容は、担当が相談に乗りながら、個別に来室者が決める。活動を中心に展開し、状況や希望に応じて、補充学習も取り入れる。

（３）対応方針の協議（生活サポート小委員会）

担任からの報告・相談を受け、委員会を開催し、情報共有とともに対応方針を協議する。

――――――――――――――――――――――――

◎生活サポート主任（校務主任）
○特別支援コーディネーター　○養護教諭
○当該児童の担任、学年主任、他の担任
○校長・教頭・教務

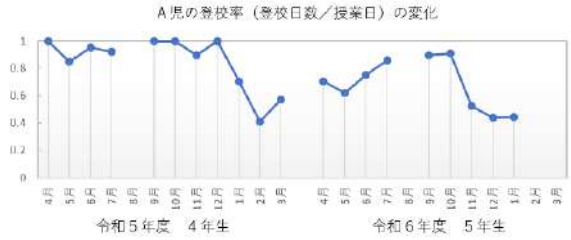
――――――――――――――――――――――――

４　実践の様子

来室回数で多い２名の児童を中心に担当のアプローチや児童の様子について述べる。

【A児】５年生

昨年度の２学期以降、登校しぶりが見られた。保護者に送迎されての登校であったが、教室には入らず、保健室、校長室などを転々としていた。



【B児】４年生

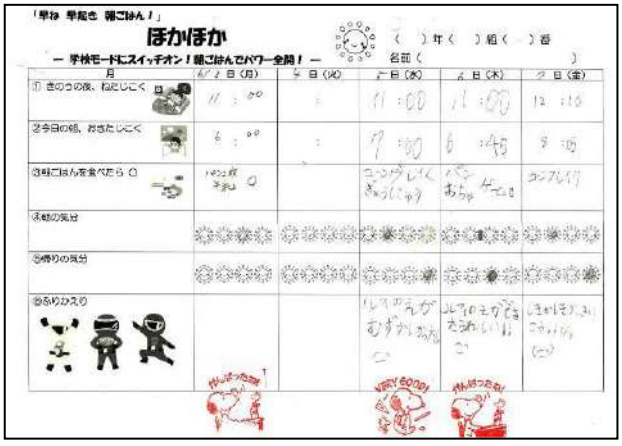
欠席や早退、遅刻もやや多い児童である。担任から母への相談のなか、「ほかほかルーム」を紹介し、生活サポート小委員会で対応が協議された児童。雑踏や元気な会話等で集団のなかに身を置くことがつらくなる。

■「ほかほかルーム」での生活スタート

４月 16 日４時間目、A児は、ほかほかルームに自分用の机といすが欲しいと希望し、１セット用意し、体に合うように高さ調節をする。

■体を動かすことと生活リズムを整えること

５月、給食前に母親に送られて登校する日が続く。表情は明るかったり、暗かったりと気分も不安定で、家庭ではゲームにはまっている様子である。表情がよいタイミングで、バドミントンを提案し、何もない教室を使って、体を動かすようにさせた。５分くらい行うとへとへとになってしまう。担当は、生活リズムの乱れを自覚させようと睡眠時間や起床時間、今日の気分をチェックできるように「ほかほかカード」を用意して記入させるようにした。また、高まっているゲームへの興味を学校での活動につなげようと「スクラッチでゲームをつくろう」と誘ってみた。すると５月 15 日頃から４時間目をめどに「プログラミングをやりに来た」と登校するようになった。ほかほかルームでプログラミングゲームの製作に熱中した。



そんななか、B児が、１日１時間程度、入室することになった。また、B児は、ほかほかルームに行きたいと担任に言いづらいため、家で意思表示カードを作り、それを担任に示すことで来室するように自ら工夫した。

■今日は４時間がんばる

A児は、５月 24 日の朝、「今日は４時間がんばる」と言って登校。プログラミングに取り組むが、多少複雑だったため不具合が出た。さらにせりふを入れるのがローマ字であったため、悪戦苦闘する。気持ちは下がったが、NHK for school を視聴し、担任とトランプをしたり、バドミントンをしたりして過ごした。「４時間がんばった後の給食はおいしい」とつぶやいた。

■ほかほかルームが僕だけの部屋じゃない

５月 28 日、母親と登校するが、無理やり連れてこられた様子。「給食のときに、またおいで」と声をかけると、12 時頃に再び登校する。はじめは気分がのっていなかったが、バドミントンで体を動かすと気持ちも落ち着いていった。翌 29 日、母親と登校するが、30 分程度ローマ字の練習をし、「ほかほかルームが僕だけの部屋じゃない。いかない。」と言って帰宅する。

６月３日、母の車で登校するが、教室に行くようにせかされている。本人は自分から行くと反発している。担当は、先日の「自分の空間」という思いを受け、段ボールを使って壁づくりに取り組むことにする。段ボールや図工準備室から必要な道具を運び、切り広げ、色塗りを進める。立たせるためには、「支柱が必要」と考えて、A児自らが用務員さんに支えになる木材があるかどうか尋ねることができた。

■「自分の空間づくり」と「学級目標の絵」

６月６日、朝、車から降りられず、いったん帰ることになる。３時間目に登校し、色塗りの

提案をすると「する」と答え、母とともに、ほかほかルームで過ごす。給食の時間には学年主任が来室し、絵を褒められ、うれしそうに返事をした。主任は所属感を意識させようと、「学年目標『ワンピース』の掲示の近くに絵を飾らせてほしい」と提案した。本人は意欲を高め、この日のほかほかカードの３つ目に印を入れた。どうして４にならなかったのか聞くと、「自分から学校にこれなかった」と答え、自ら行動することの大切さは認識しているようであった。

新たな目標となった「学年目標の絵」と「空間づくり」が活動の中心となった。３時間目からの登校で、バドミントン、オセロ、NHK for school、給食委員の当番など、自分自身で決めた活動を進めた。また、空間づくりでは、用務員さんと相談するなどし、完成を目指した。

６月 25 日、「空間づくり」を進めた。前回は、壁が高く、風などで倒れてしまったりした。一人だけのときは使わないので、移動できるようにしたいと考えた。高さを半分にすればよいのではと考え、パーテーションの壁ができあがった。壁を机の周りに設置して満足顔であった。




■６時間目までがんばる　慣れれば大丈夫

７月３日、４時間目に学習用具をもって登校した。妹と帰るため「６時間目までがんばる」「算数を勉強する」と語った。タブレットで算数の学習、NHK for school の視聴、池にメダカ捕り、家庭科の裁縫などをした。６時間目終了後、妹と車で帰宅した。翌日は２時間目からの登校。今日の予定をホワイトボードに記入してスタート。九九テトリス、タイピング練習、学年目標の絵、昼休みに友達と一緒に九九テトリスとプログラミングゲームで交流をした。午後はタブレットで算数の学習をして帰宅した。しかし、翌５日の様子は違った。玄関先まで来るが、母に反発している様子が見られた。

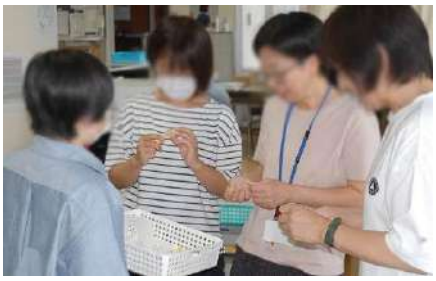
一方、B児は、７月８日、朝から教室で泣けて来室。ほかほかルームでドリルの復習や九九テトリスづくり、絵の製作などをしてほぼ一日を過ごすことになった。当初、嫌がっていたA児だが、B児と一緒に過ごす時間が増え、一緒に活動するようになっていった。

A児は、３、４時間目に登校し、自分で計画を立て活動する日が続いた。「５時間目も慣れれば大丈夫だね」とつぶやいた。７月 10 日には、来室しないB児が気になり、休み時間に様子を見に行くA児の姿が見られた。ここで新たな活動として、担当はできるだけ多くの人とかかわれるようにと、くじ引きを作って、その景品としてあたりを引いた人に渡すための紙工作を提案した。



■喜んでもらえるとうれしい

くじ引きを難しくしたいと、くじの数を多くしたり、担当がつくった紙工作の見本を見たりして、気持ちを高め、活動に取り組んでいった。職員室へ行き、先生たちにくじを引いてもらったり、当たりが出て、紙工作を喜んで受け取ってもらったりする姿を見て、「喜んでもらえるとうれしい」と語った。



その後A児は、２，３時間目に登校し、ときにB児や他の児童等と、紙工作、トランプ、百人一首、夏休みの日誌などに取り組み、終業式の前日には「学年目標の絵」を完成させ、学年目標の横に掲示してもらった。



■運動をしているからだね

９月、新学期がスタートした。夏休みを過ぎて生活リズムが乱れ、登校することに不安定さが増した。A児は、くじと紙工作を作り、職員室へ行くという活動を続けた。担当は、ここで新たな提案をし、夏休み前から全校で集めていたペットボトルキャップが何個あるのかを調べる活動を行った。そしてその後、くじと紙工作、バドミントン、タイピング、トランプなどの活動を行っていった。９月の健康診断の記録を見て、「体重が減った」と喜び、「バドミントンなどの運動をしているからだね」とつぶやき、学校へ来ていることの意義を実感していた。

■プレッシャーになる学校行事

10 月下旬に宿泊を伴う野外活動がある。「太ってきている」「野外活動の参加」が、プレッシャーになっているようで、担当は、「自分のペースで参加できればいいよ」と声をかけた。

B児の他にも、友人関係のトラブルなどで入室した数名が、バドミントン、トランプ、百人一首、オセロなどで過ごし始め、児童同士での活動も多くなっていった。

B児は自習することも多くあるため、担当は、A児にも学習へのチャレンジを試みてみることにした。３年生の内容を中心に、当時、「得意だ」と言っていた算数の学習に挑ませた。

■やってみたら平気だった

10 月 10 日、トヨタ工場の校外学習の日である。前日に担当と共に持ち物を確認した。当日、緊張でおなかが痛くなったようだが、登校することができた。朝はほかほかルームで過ごし、出発時に合流した。帰ってくると「バスに乗ると、〇〇君がみんなを笑わせて楽しく過ごせた。やってみたら平気だった」と答えた。しかし、疲れたようで１週間程は、登校できないでいた。

その後は、くじと紙工作、算数テストなどを行っていった。また、昼の放送での給食メニューのアナウンス、就学時健康診断のお手伝いなど、学校での係活動や仕事に積極的に取り組む姿が見られた。そして、10 月 31 日からの野外教育活動には、朝から参加し、食事づくり、班別活動などすべての活動に参加することができ、笑顔で過ごしていた。

■〇〇先生いないから（担当の不在）

10 月の中旬、ある学級で担任不在となり、担当が担任を引き継ぎ、担当が不在となった。他の教員で対応したが、A児は「〇〇先生、いないから」と、家庭で過ごす時間が自ずと増えていった。３学期から別の担当を置いたが、元のとおりとはいかなかった。現担当も、今まで取り組んできた運動や活動などを引継ぎつつ、児童に寄り添いながら、自己決定の場を与え、支援を続けているところである。



５　おわりに

何もなかった教室に、自らやってきて、自分で予定を立て、運動したり、作品づくりや学習、仲間との交流に取り組んだりしながら、自分のペースで活動した「ほかほかルーム」。

A児を中心に述べてきたが、すべてが順調に進んだわけでなく、心のあり様は天気のように移り変わり、一進一退を繰り返し、必ずしも成果が出たとは言えるものではない。

また、学校に足を運ぶことができない、長期に渡り不安定な児童については、興味から見学することができても、なかなか自らの足で入室へとつなげることは難しかった。

一方、他の児童には、避難場所として機能し、自己調整に向けた支援となり、「新たな一人を出さない」の一助となったと考えられる。B児の現在は、本人の意思により教室内で静かに過ごすことを選択している。

学校という枠組みが問われる中、登校だけが目標だとは思っていないが、学校が子どもたちの社会への自律に向けた役割を担うべき場所であることに変わりはないと思う。今後も、校内での支援のあり方を模索していきたい。

目次へ

研究主題	地域のよさに関心をもち自己の生き方を見つけようとする子どもの育成		
副　題	～地域の「もの・ひと・こと」に注目してふるさとのよさに気づく実践を通して～		
学校名	豊橋市立植田小学校	校長氏名	近藤　久弥

1　研究主題

「地域のよさに関心をもち自己の生き方を見つけようとする子どもの育成」
～地域の「もの・ひと・こと」に注目してふるさとのよさに気づく実践を通して～

2　主題設定の理由

植田小学校は、平成２６年度より３年間、「地域の教育力を生かした問題解決的な学習」についての研究を行ってきた。本校の児童は、子どもらしくのびのびとしていて、とても元気な姿を見せている。また、子どもたち自身が自分の問題に向かって主体的に学び、考えを深め、更に身につけたことをすすんで発信したり、行動に移したりできるようになりつつある。一方、地域に目を向ければ、多くの人材発掘により学校の教育活動を支援してくれる保護者や地域住民の方々は、これまでとかわらず協力的である。このように学校の教育環境としても大変よいものになっていると感じる。しかしコロナの影響で、これまで培った地域との交流が減り、学校の教育活動の中で地域の「もの・ひと・こと」とかかわる場面がすくなくなってきた。これまでは各学年に合う学習内容で地域と関わる場を意図的に設け、子どもと対面し学ぶ場を設けてきた。昨年からコロナが明け段階的に地域との交流を戻してきた。本年度は周辺の状況と地域の方々の様子を確認した上でコロナ以前と同様の状態で教育活動を行うことができた。そこで、地域と学校との関わり合いを見つめ直し、地域の「もの・ひと・こと」に注目し探究することでふるさと植田のよさに気づき主体的に学びそのおもいを発信する力を身につけることができると考え本テーマを設定した。

3　目ざす子ども像

地域のよさに関心をもち自己の生き方を見つけようとする子ども

○地域の「もの・ひと・こと」に興味、関心をもち，自分自身の生活や生き方などとの関わりを大切にしながら体験，追求していく中で、主体的な問題解決力を伸ばし，生きる力を育みながら力強く自己の生き方を見つけることができる子ども

4　研究の仮説

○協働的な学習活動として、子どもたちにとって魅力的な教材による問題解決的な学習を展開する中で、意図的に地域の「もの・ひと・こと」と出会う場面を設けながら適切な教師支援を行うことで、あらためてふるさと植田のよさに気づき主体的に学び発信する能力が育ち、考え方を深めていくことができるであろう。

5　研究の仮説と手だて

（1）手だて1　各学年の教育課程に沿った地域の素材「もの・ひと・こと」を適切な時期に出会う機会を設ける。

① 各学年の教育活動に対応した地域の学習の精選

② クラブ活動での地域講師の活用や学習ボランティア、読み聞かせなどで地域の「ひと」「こと」との出会いの場を設ける。

（2）手だて2　「話す・聞く・話し合う」などのコミュニケーション能力をみがく場を設ける。

① 「いなほトーク」（自由発言時間）の設定

② 「学習発表会」等で地域に発信する機会の設定

6　研究の実際と考察

（1）手だて1　各学年の教育課程に沿った地域の素材「もの・ひと・こと」を適切な時期に出会う機会を設ける。

【実践例1】　手だて1－①各学年の教育活動に対応した地域の学習の精選
第1学年　生活科単元「おいもをそだてよう」　図画工作単元「おいもをたべたよ」
第2学年　生活科単元「花ややさいの大きくなるひみつ」

1年生の「おいもをそだてよう」2年生の「花ややさいの大きくなるひみつ」の学習では、さつまいもの栽培を行った。芋の苗を一人一本用意し、校内にある畑に植えた。苗を植える際、校区内で農業に携わっている「おいもせんせい」を講師として迎え、芋を植える際に気をつけることや、今後栽培するにあたって注意することなどについて学んだ。（資料1）子どもたちは自分の苗を大切そうに持ち、おいもせんせいのアドバイス通り畑の畝を少し堀り、いもの苗を置いた上に土を優しくかけて苗付けは終了した。毎日の水やり、草取りなどを経て苗は大きく育ち、待望の収穫となった。自分が植えた場所の周辺を掘ると丸々と太ったおいもの収穫に子どもたちは歓声を上げ喜んだ。（資料2）収穫したいもは子どもたちが日ごろ使っている昇降口に保管した。いもの茎は乾燥し、丸く造形してクリスマスリースを作った。また焼きいもをして収穫したいもを味わい、自然の幸に感謝した。「おいもせんせいが教えてくれたから美味しい焼き芋ができた」など、子どもたちからは「おいもせんせい」への感謝の気持ちがあふれた。（資料3）その後、この日の感動を図工の作品で表現した。いもを持つ手といもが画面から飛び出たレリーフでの作品を作り楽しかった思い出を表現した。2月の学校行事「ありがとう集会」では手紙を書いてお世話になった「おいもせんせい」に渡し感謝の気持ちを伝えた。


（資料1）


（資料2）


（資料3）

【実践例２】　手だて１―②　クラブ活動での地域講師の活用や学習ボランティア、読み聞かせなどで地域の「ひと」「こと」との出会いの場を設ける。

第４学年・第５学年・第６学年　　クラブ活動

クラブ活動では校区の「ひと」「こと」に焦点を当てて多くの方が講師となり子どもたちにそれぞれの奥深さやおもしろさを教えてくれている。１２種類あるクラブのうち１０種類に校区の各種経験者を募り、講師をしていただいている。お茶、生け花、琴のような名前は知っていても普段なかなか体験できないような日本の伝統文化を学んだり、料理クラブでは学校ではなかなかできないような料理やクッキーなどのお菓子をつくったりして学校の教育課程では触れることのない体験をすることができた。子どもたちはクラブの時間をとても楽しみにしていて、「次の時間は何をするんですか」と講師の先生との交流を楽しんでいる。講師「ひと」種類「こと」と深くかかわることで、初めての体験にも物おじせず主体的に学習する姿が養われた。




（お茶・生け花・琴　のような日本の伝統文化が学べる）




（料理クラブではクッキーやケーキなどを作る）




（自然観察クラブでは地域の自然をまなび　専門の講師にバドミントンを学ぶ）

（１）手だて２　「話す・聞く・話し合う」などのコミュニケーション能力をみがく場を設ける。

【実践例３】　手だて　２－①　　「いなほトーク」（自由発言時間）の設定

月に２回、朝の帯時間（１５分間）を利用し、自由発言を促進する活動（いなほトーク）を行っている。本取組の目的として、①温かい仲間意識（共感的人間関係）を育てる学級づくりの場とし、学校行事などタイムリーな話題について話すことで，行事に対するみんなの気持ちを共有する。②「話す・聞く・話し合う」などのコミュニケーション能力をみがく場 として、自分の思いをしっかりともち，その思いを伝える方法を身につけるだけではなく、友達の考えを受け止める構えを身につける場とする。としている。自ら意見を言いやすい環境を作るために、楽しく話し合える場の設定として、お互いの顔が見えるような座席配置（コの字型が基本）としている。また、児童同士で，話の流れや話すタイミングを考えながら話し合うことを意識で



（自由発言で子どもの主体性を伸ばす）



きるように発言のルールを示し、関連した発言を連続して出てくるよう配慮した。自分が言える（関連した）内容のときに立ち，話がずれたら座るなど、主体的に話し合いに加わり、話題を変えたり，戻したり焦点化するなど自ら話し合いを深めていくということを意識しながら話し合いを進めた。教師は児童の話を笑顔で聞き，板書を行った。児童の意見に必要以上に反応しないなど子どもの寄り添いながら話し合いの経緯を見守った。テーマ（題材）の設定は生活の中でいきいきと関われるテーマ（題材）として、低学年では身近なことや経験したことなど共通の題材、中学年では、自然，生活，学習などで気にとめている題材から、高学年では、身近な問題や心を打たれた題材から決めている。「いなほトーク」を通して、自分の意見を伝える喜びや友達の意見を聞く力がつき、日ごろの授業や校内外の発表の場などで生かされている。



（お互いの顔が見えるような座席配置）



【実践例４】　手だて　２－②　「学習発表会」等で地域に発信する機会の設定

１１月の学習発表会では、各学年が学んだ事を表現豊かに発表することができた。２年生の発表では、校区探検を行った経験から植田校区にはたくさんの商店があり、それぞれの商店がお客さんの気持ちを考え、お客さんが気持ちよく商品を購入できる工夫をしたり、食事を提供しているのかを知り、今まで知らなかった地域の人の思いを知ることができたことを発表した。また、３年生の発表では、植田校区をテーマとしたオリジナル音楽劇を作り、保護者や校区の方が集まる会場で発表した。校区の文化祭ではクラブ活動で制作した生け花の写真を展示したり、琴の発表をして身についた能力を発信する場となった。



（植田校区にかかわる発表ができた）



7　研究の成果と今後の課題

校区の財産である「もの・ひと・こと」を最大限利用して教育活動に生かしていくことを目的とした本研究において、コロナの影響で減ってしまった地域との関わりを復活させることが大きな課題となった。本研究で子どもたちは地域にまなび、地域のよさを実感し、地域に愛着を深めてきていると感じた。多くの場面で地域の「ひと・もの・こと」とかかわる活動を多く取り入れることで子どもたちの学習意欲の高まりを感じることができた。しかし、講師の高齢化や学校の多忙化など外部講師を導入した授業などを行うことが困難になり、意思に反して積極的に地域との連携を深めることができなかった。また、「いなほトーク」では教員の技量の差により目標が達成できていない場面も大きくあった。今後は研修などを行い教員のスキルアップを図るとともに校区との連携を図る。そのためには PTA や自治会、地域の諸団体等とさらに連携を深め、地域に眠っている「ひと・もの・こと」教育財産の発掘し教育活動に生かしていきたい。

目次へ

研究主題	他者と関わり合い，考えを深めることができる下条っ子の育成		
副　　題	～身近な「ひと・もの・こと」とのつながりを大切にした活動を通して～		
学 校 名	豊橋市立下条小学校	校 長 氏 名	鈴木　立子

1 主題設定の理由

本校の子どもたちは，どの子も素直でなにごとにも真剣に取り組むことができる。小規模校ならではの細やかな指導を通して，学力テストでは，どの学年も平均以上の結果が表れ，確実に学力はついてきている。しかし，授業においては，友達との話し合いによる課題解決よりも，教師主導による授業が多くみられた。そこで，一昨年度からお話タイムの充実を図るとともに，意図的に他者と対話する場を設定し，「ひと・もの・こと」と関わり合うことを通しながら主体的に課題を解決していく姿を育てたいと考え，一人一実践に取り組んできた。

今年度も，学習面だけでなく，朝のお話タイムや縦割り活動，行事などにおいても，より一層地域の「ひと・もの・こと」と積極的に関わる活動を充実させ，自分の考えを発信するだけでなく，友達の考えと比べながら聞くことで，自分の考えを改めて見直し，深めることができるようにしていきたい。

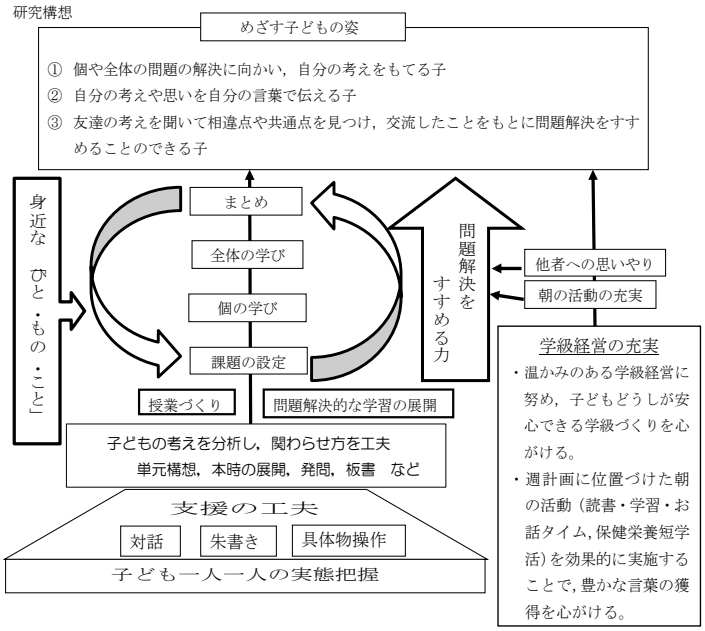
2 研究の構想（右図）

3 研究の仮説

⑴子どもの問題意識を掘り起こし，身近な「ひと・もの・こと」と絡めた単元構想を構築して授業を行えば，自分ごととして考えることができるだけでなく，個々の考えを深めることができるであろう。

⑵子どもの思考を助ける思考ツールの活用や話し合い活動の充実を図れば，他者の意見を生かした息の長い発言になるであろう。

⑶個に合った支援を工夫すれば，自信をもって発言でき，友達と積極的に関わりながら考えを深め，問題を解決に導くことができるであろう。



4 研究のてだて

⑴教材研究をしっかり行い，身近な「ひと・もの・こと」と絡めた単元を構想するとともに，子どもの問題意識や子どもどうしの関わり合いを大切にした問題解決的な授業に取り組む。

⑵子どもの思考の流れや意見の関係性がわかる思考ツールを用いて話し合ったり，お話タイムを展開したりする。

⑶個の実態を把握し，対話や朱書き，体験活動など，個に合った支援をする。

5 研究の実際

⑴6年　総合的な学習の時間「下条はぼくらが守るんだ」

①「ひと・もの・こと」とのつながり

【ひと】・地域の方・市役所の防災危機管理課の方々

【もの】・防災マップ　　【こと】・下条校区の水害

② 授業実践

総合「下条はぼくらが守るんだ」では，防災マップづくりに取り組んだ。全校で通学班ごとに取り組んだ５月の校区ウォーキングからのDIGを参考に，もっと地域の方の役に立つ防災マップを作るにはどうしたらよいかを考えた。どんな情報を載せるとよいかを話し合うと，下条校区はやはり水害から身を守ることが大切ではないかという意見が多く出た。そこで，ふだん生活していて大雨のときに危険だと思うところを調査した（資料１）。



資料１危険な箇所を調べる児童

また，下条校区は農家が多いので，一昨年の大雨で被害を受けた大葉農家にも当時の様子を教えていただいた（資料２）。自分たちで調査したことをもとに，防災マップに載せる写真を選んだ。写真を選ぶ際には，水害のときに役立つという視点で選んだ。たくさんの写真があったので，優先順位をつけて考えられるようにダイヤモンドランキングという思考ツールを用いた（資料３）。選んだ写真を入れて仮のマップを作った。完成したものを校区防災訓練の際に地域の方に発表した。KEYNOTEを使って写真を選んだ理由を伝えたり，アンケートをお願いしたりした（資料４）。



資料２　被害の話を聞く児童



資料３　選んだ写真を発表する児童



資料４　校区の方に発表する児童

③ 成果

通学班で危険だと選ばれた場所へ実際に調査に行ったことで，自分ごととしてとらえ，問題意識がさらに掘り起こされた。話し合いの中では，調査から得た根拠をもって自分の考えを伝えようとする姿が見られた。また，思考ツール「ダイヤモンドランキング」を活用することで，話し合いが充実し，友達の考えを取り入れたよりよい意見を発表することができた。子どもたちは防災マップの考えがまとまると，地域の人に見ていただいて意見をもらいたいという思いをもつことができた。校区防災訓練での地域の方との関わりを通して得られた貴重な意見を生かしてさらに，個々の考えを深めることができた。

⑵5年　社会科「オー米ガー下条米が食べられなくなっちゃうの？～米の師匠たちから学ぼう～　」

①「ひと・もの・こと」とのつながり

【ひと】・個人農家，企業，ＪＡ，市役所

【もの】・下条米

【こと】・米作り，農家の現状，米農家の未来

② 授業実践

本実践では，教材との出合いを工夫した。まず下条米のおいしさを全体で共有するためにタイ米と下条米を炊いて食べる活動を行った（資料５）。

資料５　下条米を味わう子どもたち





（資料６）本やタブレットで調べる子どもたち





その後，米農家の方のメッセージ動画を通して，子どもたちは米農家の抱える課題について初めて知り，下条米がなくなるかもしれないという問題意識をもった。

子どもたちが米作りについて考えられるように「MY米文庫」を用意したり，タブレットの「学びネット」の中にあらかじめおすすめのサイトや動画を示したりして，子どもたちが調べやすいように工夫した（資料６）。

（資料７）授業の様子



さらに多様な視点で米作りについて学びを深められるように，さまざまな立場の方をゲストティーチャーに招いた。個人農家，企業，農業支援課の方にお話を聞き，米作りについて学んだ（資料７）。様々な立場の方から学ぶことで子どもたちの学びも深まった。子どもたちが自分の考えを整理するために思考ツール「Yチャート」（資料８）やコラボノートを用いたり，話し合いの机の位置を工夫したりすることで，意見交流がしやすくなり，子どもたちが積極的に話し合う様子が見られた。

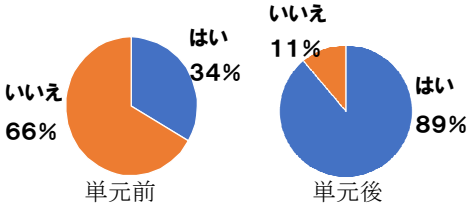
（資料８）思考ツールを使って考えを整理する様子



③　成果

単元導入で下条米のおいしさを実際に味わうことで，おいしい下条米をなくしてはいけないという思いが高まり，主体的に解決していこうとする意欲が高まった。個々に合った仕方で一人学びができるように，学びの環境を工夫したことで自信をもって発言し，友達と積極的に意見交流をすることができた。さまざまな立場のゲストティーチャーから米作りについて学び，話し合い，関わり合うことで，多角的な視点で考えを深める力が伸びた。単元後のアンケート（資料９）「自分の意見を友達に説明することに自信がもてますか」という質問では，ほとんどの児童が自分の意見に自信をもって取り組む姿へと変容した。

（資料９）アンケート結果の比較



６　成果と課題

身近な「ひと・もの・こと」とのつながりを大切にした授業実践に取り組んだ。児童の学校生活アンケートの「あなたは授業がよくわかって楽しいですか」の質問に対して，昨年度の肯定率が 85.5%であったが，今年度は 97.0%に上がった。このことから授業の中で主体的に課題を解決し，学びを深めることができた充実感がうかがえる。また，学習面だけでなく，朝のお話タイムや縦割り活動，行事などにおいても，より一層地域の「ひと・もの・こと」と積極的に関わる活動を充実させてきた。保護者用学校教育についてのアンケートでは，「学校は子どもの学力向上をめざしわかりやすい授業をするよう努めている」は肯定率が昨年度 84.9%であったが，今年度 94.1%に伸びた。また，「学校・家庭・校区が協力して子どもの教育を進めている」については肯定率が昨年度 94.3%から今年度 100%に増えた。これは，地域との関わりを大切にした研究の成果と言える。今後も問題解決的な学習単元を積極的に実践し，子どもたちにとって，授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり，生かしたりすることができる経験を増やしていきたい。そして，地域の「ひと・もの・こと」とのつながりが持続可能となるようなカリキュラムを校内現職研修で研究していきたい。

目次へ

研究主題	かかわりの中で自分らしく表現し、ともに学び深める子の育成		
副　　題	温かな人間関係で思いや考えを伝えあう授業の工夫		
学 校 名	豊橋市立小沢小学校	校 長 氏 名	杉浦　隆夫

１　主題設定の理由

本校の子どもたちは、素直で明るく何事にも真剣に取り組むことができる。縦割り班活動では、上級生が下級生のことを考え、思いやりをもって優しく接する温かな光景が数多く見られる。また、学校全体の児童の仲がよく、異学年の児童との交流も多い。お互いに十分なコミュニケーションをとらなくても、おおよそ気持ちが通じる状況である。そのため、自分の考えや思いを言葉を駆使して相手に伝えようとした経験はほとんどない。また、学習の場面においても、示された課題にこつこつと堅実に取り組むことはできる子が多いが、自分で課題を見つけ追究しようとする子は少ない。そのため、受け身で学習に取り組むことが多く、自分からこんなことをもっと知りたいと主張する姿がほとんど見られない。

本校では、「心豊かなたくましい子の育成」を目ざし、教育活動を進めている。学習指導要領が目ざす、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向け、各教科はもちろん総合的な学習や特別活動、お話タイムなどで効果的な言語活動のあり方を研究し、子どもたちが学び合い、考えを深めるための言語能力の育成を図ってきた。さらに、道徳や各教科では導入の工夫や ICT の活用などで学習の意欲づけをしたり、他の子どもたちとのかかわり合いを深めるための支援をしたりした。

子どもが「自分の考えや思いを友達に伝えたい」「友達の考えを聞きたい」という思いをもつには、子どもたちが興味をもってかかわることのできる教材や題材との出合い、発問、かかわらせ方の工夫が大切である。同級生や異学年の子たちとの温かい人間関係を築いた上で、小沢校区の特徴である自然や歴史豊かな地域教材の活用や校区の人々とのふれあい、子どもが自分の考えを周りの人に伝えたくなり、友達の考えを知りたくなるかかわりの工夫をすることで自分らしさを発揮し、学びを深めることができると考える。

２　研究の構想

（1） 自分らしく表現し、学びを深めるために
- ① 自ら調べ、思いや考えを伝えたくなる単元構想の工夫
- ② 子どもどうし、地域の方とかかわりたくなる場の工夫
- ③ 子どもたちの思考や伝え合いを支援したり、意欲づけしたりするための ICT の活用
- ④ 次の学習活動に活かせる振り返りの充実
- ⑤ 自分の考えが書けるように、振り返りや日記指導などで書く機会の保障
- ⑥ 段階を踏んだ話し合い指導

（2） 温かな人間関係を築き、思いや考えを伝えあうために
- ① 清掃や遠足など、異学年が楽しくなかよくかかわる浜っ子班活動
- ② 地域教材に触れ、地域の方や保護者とかかわりの場としての体験活動

（3）主体的に学びに向かうことができるようなキャリア教育の充実

① 自ら課題を見つけ、主体的に問題を追及しようとする態度を育成する単元の工夫

② 地域教材・人とかかわる活動、伝え合う活動、体験活動等の場の設定

3 研究の実際

（1）授業実践

5年 総合的な学習の時間「目指せ！米博士！！～受け継げ、僕らの小沢米～」

① 地域の方とかかわりをもつ

学校の田んぼで地域の方と米作りをしている。田んぼだけでなく、プランターを使って自分たちだけで米作りを始めた。水を欠かさないように気をつけて取り組んだが、うまく育たなかった。「なぜ、学校の田んぼは稲が育っているのに、ぼくたちの稲はうまく育たなかったのだろう」という問いをもち、話し合ったり調べたりした。水だけではなく、温度なども必要なことがわかったが、調べたことだけでは不十分だと思ったため、農家さんに話を聞くことになった。



（資料1）地域の農家さんに稲の育て方を教えてもらう児童

地域の伊藤さんに、稲の育て方を教えてもらい、「水だけ気をつけてもだめなんだ」「お米を育てるのは、こんなに大変なんだ」と気づいた。同時に、

田んぼの稲が育っているのは、地域の方が自分たちの知らないところで世話をしてくれていることを知った。

子どもたちは米作りの仕方を教えてもらったり、学校の田んぼのお世話をしてもらったりしている現状を知り、「田植えだけでなく稲刈りもお世話になった」「地域の方に何か感謝の思いを伝えたいな」と感謝の気持ちが生まれた。



（資料2）友達の意見と自分の意見を比べて話し合いをする児童

② 子どもどうしでかかわりをもつ

「感謝の気持ちを伝えるに何ができるだろう」という発問で話し合いをした際には、思考ツールを用いることで、農業感謝の会の目的から外れないように話し合いを進めることができた。「手紙を書いて渡したい」「おにぎりを握って一緒に食べたい」など、さまざまな意見が出された。「手紙は書いて地域の方に持っていきますか」「感謝の会として来てもらったときに渡したらどうですか」など、友達の意見に代案をだし、実現できるようにしていた。

プランターで米作りをすることで、「地域の方に育て方を聞きたい」という思いが芽生え、教えてもらうことができた。一緒に活動することで、学校の田植えは地域の方に助けられていたことに気づくことができた。また、「プランター米作りや感謝の気持ちを表そう」では、話し合いを設定することで、自分が考えた内容に「こうすればいいよ」など、代案が加わった。どうやって、どこでなど具体的に話し合うことで、ますます地域の方への感謝の気持ちが高まった。

１年　音楽　「だがっきのおもしろさ　だいはっけん！　～がっきとなかよくなろう～」

① じっくり体験することのできる場の設定

すずやカスタネット、タンバリンなどの打楽器が教室に並んだ。「やりたい」と言い出す子どもたち。打楽器に触れる時間をとった。

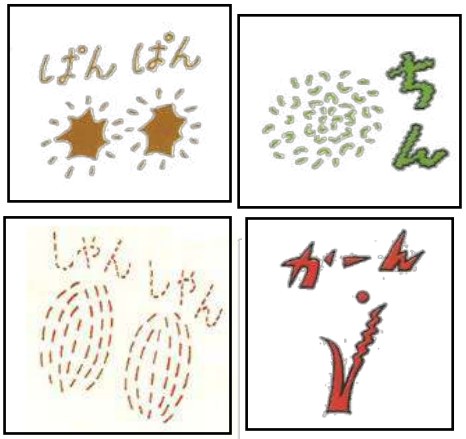
「すずはシャンシャンって音がするね」「細かく振るとシャラララという音もするよ」と同じすずでも、違う音が出ることに気づいた。他の楽器でも試してみることにした。「タンバリンも打つのと、ふるのとでは音が違うよ」と気づくことができた。



（資料３）同じ打楽器に何度も触れて音の違いを比べる児童

② 見つけた音を伝え合う活動の工夫

４枚の絵を提示し、絵や擬音語からイメージする音を打楽器で表現する活動に取り組んだ。楽器で表現する活動では、打楽器の音色と演奏の仕方とのかかわりを思い起こしながら各楽器コーナーで音を鳴らして確かめたり、ワークシートに見つけた音を記入したりする子どもたちの姿が見られた。実際に音を鳴らして確かめる際には、音の高さが違う２種類のすずを同時にどちらも鳴らして確かめたり、音色の違いがあるクラベスを順番に鳴らして確かめたりする姿も見られた。



また、楽器を打ったり、振ったりする強さをいろいろと試して音色を確かめる姿も見られた。 

をタンブリンの音、 

をトライアングルの音、 
をすずやマラカスの音、 

をクラベスやカスタネットの音で表すなどの表現があった。紹介し合う場では、子どもたちは、自分が見つけた音をすすんで友達に伝えたり、友達が見つけた音を知り、新たな発見をしたりすることができた。



（資料４）見つけた音を紹介する児童

６年　算数「いざ勝負！どっちが勝てるかな」　～確率の学習を通して～

① かかわりたいと思う導入の工夫

「くじは先に引いた方が得か後から引いた方が得か」について、いろいろな種類のくじを用意して調べた。グループで何度もくじを引き、結果を記録していくことで「次こそは○○がでるはず」と確率を意識した発言がでた。その後は、「じゃあ、３つのくじがあったらどうなるのか」という新たな問いが生まれ、その確率をみんなで求めた。

② かかわりを生む活動の工夫

「カエル４面とイチゴ２面のサイコロがあり、サイコロを２個投げ、カエル・カエルの面とそれ以外の面では、どの面が出やすいのか」の予想を立てた。

グループでサイコロを振る人、記録をする人と役割を決めて活動することで、何度もサイコロを振っていると「次はカエルがでるのではないか」とともに予想したり、話し合ったりする姿が見られた。



（資料５）何が出るか予想しながら、サイコロを振る児童

（２） 講師を招いての研修会

渡辺道治先生を講師として研修会を行った。若い教師が多いため、指名や対応の仕方、かかわりの仕方など、授業における基本的な内容で示範授業を依頼した。

講演会では、かかわりは子どもどうしに話し合わせたり、グループ活動をしたりすると考えがちだが、かかわるためには、まず自分自身で考える時間を多くとることが大切だという話があった。教員離れが加速する現状の中、教師として何を大切にするか、自分の強みは何かなど、今後の教師生活においても勉強になる話であった。



（資料６）児童のノートを見てアドバイスをする講師

４ 本年度の成果と課題

本年度は、子どもたちどうし、教師と子ども、地域の人と子どもというように「かかわり」をキーワードに実践を行ってきた。それぞれの教師が教材研究を進め、互いに協力したりアドバイスしたりしながらの１年間だった。かかわり合いの場を仕組み、学びを深めるのは難しい。グループ活動をして話し合ったとしても深まったとはいえない状況がよく見られる。活動の形態だけでなく、活動の際の声かけや指示が大切なのだと感じた。

授業案の検討を通して、授業者だけでなく、参加者全員の学びになった。今後の課題として、問題解決的な学習を展開していくうえで、子どもたちの思考に沿った授業をし、自分の考えを表現しやすくするために、ＩＣＴ活用の仕方を研究し取り組んでいきたい。

目次へ

研究主題	主体的に学び　問題を楽しみながら解決する　賀茂っ子の育成		
副　　題	協働的な学びを重視した授業づくりの工夫		
学 校 名	豊橋市立賀茂小学校	校 長 氏 名	村松　博道

1　はじめに

小規模校の本校（児童数 63 名）の子どもたちは，保育園からともに過ごしてきた気心知れた仲間どうし，多くを語らなくても安心して過ごせる環境にある。素直で優しく，お互いを思いやり，困っている友達がいるとそっと声をかけることができる。また，手伝いや仕事をすすんで行うこともできる。学習では，「知りたい」「わかりたい」と真面目に取り組む姿が見られる。しかし，自らすすんで考えを主張したり行動したりすることに対しては躊躇してしまう場面も見られる。

これまで，「かかわり合い」「学び合い」を大切にした学習過程の実践を積み重ね，息の長い発言や自分の考えを見直し深く考える姿勢も徐々に見られ始めている。

昨年度は，自分の考えを深めたり，新たな問いを見つけたりして，深い学びの実践を目ざした授業改善に取り組むことで，仲間と一緒に学びを楽しむ子どもの姿を目ざしてきた。単元導入時には，「解決したい」「なぜだろう」「やってみよう」と思える出会いの場を設定し，子どもの思いに寄り添って学習活動を展開することで，主体的に学習に取り組む姿を引き出すことができた。

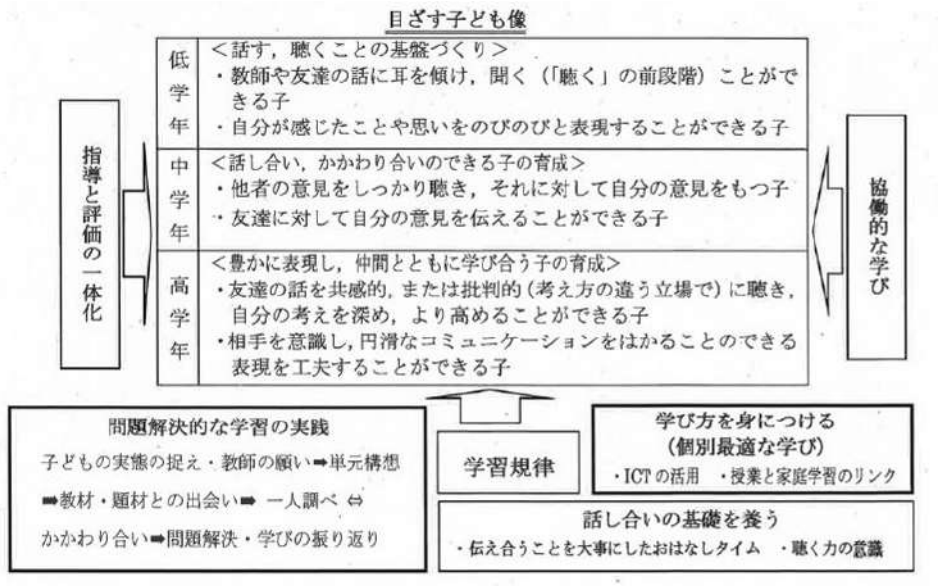
本年度は，協働的な学びに重点を置き，自分の考えと他者の考えを比較・分類・関係づけしたり，自分の考えを多角的に捉え直したりすることができる子どもの育成を目ざしていく。また，ICT を効果的に活用し，協働的な学びをより豊かなものにしていきたい。

2　研究の方向性

⑴　目ざす子ども像

・学びを楽しみ，自らすすんで学ぼうとする子
・他者の考えを聴き，自分の考えを修正し，より高め深めることができる子
・学びを振り返りで確かなものにする子

⑵　研究の構想



⑶　本年度の重点的なてだて

①　学びたくなる教材題材・課題づくりの工夫

・子どもたちを生活全体から捉え，興味や関心をもっていることをもとに教材・題材を探す。
・「切実感」につながる問題となるような出会いの場を設定する。
・子どもたちのよさや得意なこと，好きなこと等を捉え，子どもの意識や思いに寄り添った単元を構想する。

②　さまざまな角度から考える視点の提示の工夫

・立ち止まり，自分とは異なる考えにふれさせる。子ども同士，あるいは地域のかたがたをはじめ多様な他者と協働する。
・ゆさぶりや切り返しの発問で，別の視点に目を向けるようにしたり，今までとは違う考えを引き出したりする。
・ICT 機器を積極的，効果的に活用する。

③　一人調べ・一人学びの支援

・自分ごととして，じっくり問題に向き合う時間を確保する。
・朱書きや対話で子どもの考えや思いを認め，自己有用感を向上させる。

④　地域の授業力の活用

・地域の素材，人材を積極的に活用する。
・学習のねらいにそった家庭での働きかけや支援を呼びかける。

⑤　学習を振り返る視点と場の設定

・振り返りの視点を提示する。
・振り返りのノートや発言から，子どもの意識を捉え，新たな課題を見つけさせたり，次の授業への見通しをもたせたりする。

3　研究の実際

⑴　４年国語科「題名に隠れたヒミツ」～一つの花にこめられた思い～

〈単元を貫く「一つだけ」の言葉に注目〉

本教材は物語文であり，作中で「一つだけ」という表現が繰り返される。それにより子どもたちは物語を読み進める中で，この言葉が物語の中で大事な言葉だと認識しやすい。そして，登場人物のゆみ子，ゆみ子の両親の三人ともがこの「一つだけ」という言葉を発している。しかし，それぞれ異なる思いからこの言葉を発しているので，同じ言葉でも場面によって言葉に含まれる気持ちが違うことに気づかせることができれば，物語を読むおもしろさをより感じることができるであろう。また，題名が物語の山場に関係しており，ゆみ子の父がゆみ子に花を渡すというできごとの意味について話し合いをすることで主題に迫っていくことができると教材であると考えた。

本単元では，「一つだけ」という言葉を共通課題とした。追究するポイントが絞られていることもあり，ただ自分の考えを主張するだけでなく友達の考えを自分の考えと比較しながら聞いている子どもの姿が見られた。そして，「きれいな花をゆみ子にあげて」「一輪」などと，ゆみ子の父の思いに関する発言も出てきた。そこで，「何で一輪なの？」とか「たくさんあげればいいのに何で一つだけなの？」などと切



お父さんの「一つだけ」を考える授業の様子

り返すことで，「一つだけ」により深く迫っていくことができたかと考える。

本単元の学習に入るまで子どもたちは主に自分の想像で登場人物の心情を考えていたが，本単元の学習を通して文中の言葉を根拠に心情を考えられるようになった。また，友達の考えを聞くことで文中の表現からさまざまな考えができることの楽しさを見出している様子もうかがえた。そして，みんなで一つの課題をじっくり追究することで，登場人物の心情を想像するために言葉のもつ意味や題名について考え，物語の主題を捉える楽しさにも気づけるようになった。

⑵　６年英語科「伝えたい！聞きたい！世界の魅力！」

〈「リピーティング」によるインプット〉

英語を聞き取ることに問題意識を抱いた子どもたちは，なぜ聞き取れないのかその理由を考えた。子どもたちからは「速すぎるから」「習っていない英語を使っているから」という二つの考えが出た。そこで，ALT と海外に留学経験のあるＫ先生の英語でのやり取りの動画を，子どもたちに 0.8 倍速にして見せた。また，やり取りに使われた英文（スクリプト）を示した。これによって子どもたちは，話す速さが速すぎることや習っていない英語を使っていることが聞き取れない原因ではないことを知った。すると，児童Ａが「全然違う英語に聞こえる」とつぶやいた。そのつぶやきに多くの子がうなづき，「もっとゆっくりにして聞いてみたい」という要求があがった。そこで，動画を 0.3 倍から 0.8 倍までさまざまな速さに編集したものを用意し，子どもたちの学習用タブレットへ送った。子どもたちは，ALT がどのような英語を話しているのかを明らかにし，ALT が話す英語の音でインプットするという目的に向かって，自分に合った速さの動画を選択してリピーティングを行った。



リピーティングをする児童

ALT からの「Where do you～？」「What can you～？」「What is～？」という疑問文に焦点を当て，リピーティングを通して気づいたことをワークシートに書き込んだ。児童Ａは「ウェアードゥーユーと言っていたけど Where do you をウェァジュと言っている」「キャンユーと言っていたけど Can you の最初がケンみたいなふうに言っている」「ワットイズと言っていたけど What is をワッリズとトを言っていない」と記述していた。「～と言っていたけど～と言っている」という記述からは，児童Ａがふだん自分が話していた英語の音と ALT が話しているリンキングやリダクションが発生する英語の音の違いに気づくことができたと言える。

さらに，友達の「今のいい感じに似ていた」やＫ先生の「すごくきれいな英語で話せていて，ちゃんと英語を聞きこんでインプットしてきたことがわかったよ」という児童Ａの英語を客観的に聞いた第三者からの言葉，そして，児童Ａの「よく聞いてまねして直しました」という記述からも，音の違いに気づいた児童Ａがリピーティングを続けたことで，ALT が話す英語の音で発生できるようになったことがわかる。

⑶　６年社会科「賀茂小の今を未来にも」～願いを実現する政治～

〈子どもの思いを高めたり，粘り強い追究を支えたりする場の設定〉

賀茂校区を活性化するにために，もっと魅力的な場所にする必要があると考え，その方法を考えた。子どもたちは自力でできることと，市に依頼が必要なことがあると気づいた。そこで，子どもたちが考えた賀茂校区を活性化するための要望９個をオンラインで市役所職員に伝える場を設定した。職員の方には，「限りある税金を使って，優先順位が高いことから実施する

ので全部はできません」「市の政治の仕組みを勉強してね」「みんなの意見を校区の人はどう思うかな」などの話をしていただいた。


オンライン会議の様子

その後の学習で，要望が叶うまでの市の政治の仕組みや税金のはたらきはわかったが，どんな要望の優先順位が高く，叶えてもらいやすいかという点が調べてもはっきりしないことに子どもたちは困っていた。そこで，要望を叶える立場である市議会議員の経験のあるN氏の存在を子どもたちに伝えた。N氏の考えや優先順位のことを聞いてみたいという声があがり，アドバイスをいただく場を設定した。すぐに対応しないと手遅れになる『緊急性』，多くの人のためになる『公益性』，お金に見合った効果が期待できる『費用対効果』が高い要望から実施されることがわかった。

うまくいかなくて悔しいという思いが，粘り強い追究につながると考え，市役所職員の方には要望を断っていただいた。その場を設定したことが，「市役所の方に断られてしまったので，きちんと勉強してから要望したい」と振り返りの記述のような，次の学習への追究意欲の高まりにつながった。また，「賀茂の人にも意見を聞いてみたい」「調整区域はどのように決めているか知りたい」「市の政治の仕組みを調べたい」などの今後の学習への見通しをもつこともできた。児童Aは，市の政治の仕組みを調べた後，「優先順位のことをまだ勉強していないので，調べてみたい」と自分から追究を進めていく姿が見られた。また，N氏の話の後には「公益性など，３つのことを中心に決めることがわかった。この３つのことをふまえて，どれがいいのか考えたい」と新たにわかった事実も踏まえて追究を進めようとしていた。単元の始まりから自治会長に要望を伝えるまで，児童Aのように追究意欲をもち続ける子が多く見られた。


N氏との交流の様子

4　研究の成果と課題

⑴　成果

・子どもたちが「知りたい」「考えたい」「解決しなければならない」など，必要感や追究意欲を伴った導入の工夫をすることができた。

・教具の工夫や子どもの思考の流れに添った授業展開をすることで，主体的な学びにつながり，粘り強い追究をすることができた。

・ゲストティーチャーから直接思いや考えを聞く場を設定したり，共通体験を行ったりすることで，自分の考えをもつことができた。

⑵　課題

・かかわり合いの場では，子どもの考えをより深めたり，高めたりする教師の出場や舵取りのさらなる工夫・改善を図っていきたい。

・自分の考えを見つめ直す時間があると，自分の考えを深めるところにつながっていく。少し考えれば乗り越えられるような壁をつくることも考えていきたい。

・ICT の活用は，担任によって温度差がある。ICT スキルの向上を図り，話し合いを深めるための効果的な活用を模索していきたい。

目次へ

研究主題	見通しをもって課題を追究できる子供の育成		
副　　題			
学 校 名	岡崎市立岡崎小学校	校 長 氏 名	鈴木　勝久

【研究の視点】

さまざまな問題を抱えている子が少なくない。どんな子でも、安心して安全に通うことができ、全ての子が自分の居場所を感じることができる学校にしたいと思う。

その基本の一つが、授業だと考える。子供たちが、この問題を解いてみたいと思うような授業。今日分かったことを、次の時間に使ってみたいと思うような授業。このようにできた・分かった、もっと知りたい・もっと使いたいと思う授業を作っていきたいと考える。そのためには、子供がこの考え方を使ったら問題を解くことができるという見通しをもつことができ、その見通しをもとに課題解決に取り組むことだと考えた。そのような授業を作ることができれば、子供たちに、達成感や有用感を感じさせることができ、子供たちが学校に通いたいと思うことができると考えた。

そこで、昨年度までの研究を継続し、研究テーマを「見通しをもって課題を追究できる子供の育成」とし、目指す子供の姿を次のように考え、仮設や手立てを設定した。

○　目指す子供の姿

見通しをもった子供の姿を以下のようにとらえる。

- ●　既習事項を生かして、学びをつなげられる子
- ●　自ら課題を設定し、追究できる子

○　仮説

「～したい」という思いをもち、今までの学びを生かして課題に向き合うことができれば、見通しをもって課題を追究できる子供を育成できるであろう。

○　手だて

（1）前時の学習を振り返り、本時の導入を工夫して、子供たちの「～したい」という思いを導き出す。

（2）課題を解決するために必要な既習事項を子供から導き出し、板書で整理したり、掲示したりして、今までの学びを生かして、課題に向き合えるようにする。

（3）ゴールを明確にすることで、自分で学ぶ方法を決定し、継続して追究できるようにする。

（4）授業の終末で振り返りを行い、本時での理解度や課題を把握して、次時の授業に生かす。

【実践の内容】

①１年　図画工作科　「ふわっふわっゴー」

○子供たちの思いを導き出す

単元のねらいの一つに、はさみや両面テープなどの用具の使い方の学習がある。作品作りの前に用具の使い方の学習を行った。子供たちは、はさみや両面テープをもっと使ってみたいと振り返りをしていた。この振り返りをもとに、動くおもちゃ作りを行った。導入として、子供たちの前でプラスチック容器に切り込み入れ、うちわで扇いで容器の動き方を見せた。さらに、切込みの形を変えて、動き方を見せた。子供たちは、容器に切込みを入れ、



容器を動かしていた。容器をできるだけ多く用意させておき、子供たちが自分のイメージする動きを見つけられるようにした。子供たちは、切込みの形を変えながら何度も動き方を試し、求める動きを見つけることができた。子供たちは何度も容器の動きを試したり、確かめたりする活動を通して、自分が作りたいもののイメージをもつことができていた。



○ゴールを明確にする

容器の動きや扇ぎ方から作品のイメージを広げられるように、容器の動きと扇ぎ方をオノマトペで表現する活動を行った。また、教師が作った作品を提示し、「パッとあおぐと、スースと動くから、カメにしました」とオノマトペを使い、説明をした。そのうえで、容器の形や動き方をもとに、設計図を作る活動を行った。子供たちは自分が考えたオノマトペをもとに、設計図作りに取り組んでいた。作品作りに取り組んでいる子供たちが、動きを確かめ発想を広げられるように、「おためしエリア」を設けた。飾りを付けてみると、自分のイメージする動き方をしないために、切込みの大きさを変えてみたり、扇ぎ方を変えたりする子もいた。また、設計図に付けたしをしている子もいた。

②３年　国語科　「サーカスのライオン」

○導入を工夫する

単元のまとめとして、「サーカスのライオン」と同じテーマの本を紹介することで、子供たちの読書の幅を広げたいと考えた。導入として、４冊の本を使いブックトークを行った。「サーカスのライオン」と比較しやすくするために「中心人物」「似ているところ」などのヒントカードを掲示し、あらすじや内容を聞く活動を行った。また、中心人物と絵を照らし合わせることができるように、中心人物のペープサートを本の前に立てた。「おおかみときつねだ。」「満月にうさぎがいるよ。」など、ペープサートを指さしながら反応する姿が見られた。ブックトークの最後に、「大きな木」の読み聞かせを行った。「じんざと一緒で木は犠牲になった。」「男の子が大切だからこそできたこと。」など、紹介した本や「サーカスのライオン」と比較しながら中心人物や似ているところを考えることができた。ブックトークが終わると、子供たちから読書に時間にしてほしいという声が自然と聞かれた。その後設定した読書の時間では、子供たちはもくもくと本を読んでいた。多くの子供たちは、ブックトークで紹介をした本を手に取っていた。振り返りでは、もっと時間を取ってほしい、今まであまり読んだことがない本だったなどとあった。子供たちの読書への意欲を高められ、幅を広げることができたと感じた。



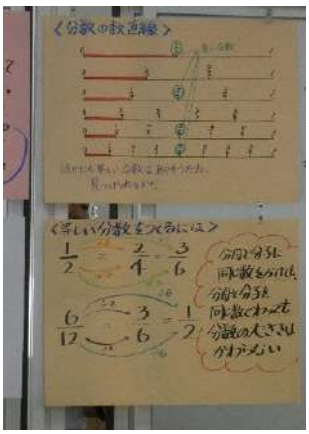


③５年　算数科　「分数」

○今までの学習を生かす・理解度や課題を把握する

既習事項を結びつけて考えることができるように、授業の始め既習事項を整理する時間を設定した。また、見通しをもつ活動の際に、どの既習事項を使えば課題が解決できそうかを問いかけた。そして、まとめの活動の際には、本時で課題解決に使った既習事項を確認した。異分母分数のたし算では、既習の同分母分数のたし算と同じところを考えさせた。そこで、既習事項の何が使えそうかを問いかけた。子供たちは、授業の導入で確認した既習事項や教室の掲示を見ながら、

同分母分数の加減や等しい分数などを使えば異分母分数のたし算ができそうだという見通しをもつことができた。授業の終末では、既習の同分母に直せば、異分母分数の計算ができると振り返ることができていた。その一方で、公倍数や最小公倍数を求め方に不安を感じている子がいた。次時に、公倍数や最小公倍数の求め方を確認し、たし算やひき算の練習問題を行った。振り返りの活動で、使った既習事項を確認する活動を行ったことにより、子供たちが習ったことを使うと新しいことができるようになる喜びを感じているようだった。さらに、習ったことを教室に掲示することで、常に既習事項を確認でき、既習事項を積極的に使おうとする姿が見られた。



【研究のまとめ】

子供たちが見通しをもって、課題を追求できる授業を目指し、研究を行った。

１年図画工作科の学習では、「はさみや両面テープの使い方」の学習の振り返りや導入時で課題の提示の仕方を工夫したことにより、子供たちの動くおもちゃを作ってみたいしたいという思いを導き出すことができた。（手だて１）また、子供たちの活動のモデルとなるように教師が作った動くおもちゃを使い課題を提示することにより、子供たちは活動内容を理解、決定し、継続して追究できることができた。（手だて３）

３年生国語科の学習では、導入にブックトークを行うことにより、子供たちの本を読みたい、読んでみたいという思いを導き出すことができた。（手だて１）

５年算数科の学習では、授業の始めや課題提示後に既習事項を確認して黒板で整理したり、授業の足跡を教室に掲示したりすることで、子供たちは既習事項を使い、課題解決に取り組むことができた。（手だて２）また、授業の終末で、本時で分かったことや疑問に思ったことなどのまとめを行うことにより、子供たちは本時での学びについて整理することができていた。この振り返りを生かし、次時の授業の組み立ての参考にすることができた。その一方で、本時の振り返りを次時からの学びに生かそうとする子供をあまり育てることができなかった。（手だて４）

このように、見通しをもって課題を追究できる子供の育成には、４つの手だては有効だったと考える。しかし、振り返りを学びに生かそうという意識が低かったり、単元の見通しと本時の学び結び付けて考えられなかったりしたために、次時の学習につなげられなかった子供もいた。そのために、単元の見通しをもてていても、学習の思考が切れてしまうことがあった。

子供たちは、見通しをもち、追究できるようになっている。振り返りや単元の見通しの充実を図り、子供たちがさらに学びをつなげるように研究を進めたいと考える。

目次へ

研究主題	わくわくがある、学びがある、喜びがあふれる　子どものための学校の創造		
副　　題			
学 校 名	岡崎市立三島小学校	校 長 氏 名	柴田　知子

1　はじめに

令和６年３月に開校 150 周年を迎えた本校は、児童数 484 名、19 学級の中規模の学校である。岡崎市の中心部にあり、学区内には世界的にも有名な自然科学の研究施設があり、保育園・幼稚園から中学校・高等学校もある文教地区である。また、私鉄の駅を中心に発展した地域と、閑静な住宅街とが混在している。長年にわたって学区に在住する家庭も多い。子どもたちは明るく元気であり、学校は保護者や地域の皆様からも温かく見守っていただいている。

令和４年度からは、感染症と共存しながら、学校としての本来の姿を取り戻すことにした。そして、子どもたちが互いに関わり合って学び、高め合って成長していく「子どものための学校」を作り上げたいと考え、研究主題「わくわくがある、学びがある、喜びがあふれる　子どものための学校の創造」に取り組むことにした。

2　研究の仮説

本校の校訓「誠」のもと、研究主題「わくわくがある、学びがある、喜びがあふれる　子どものための学校の創造」を達成するために、次のような仮説を立てて実践に取り組むことにした。

(1) 子どもたちの自主的な活動やチームによる学習や活動の場を取り入れ、人とのかかわり方を学ぶ場を設定すれば、互いを思いやる、心優しい子を育てることができるだろう。

(2) 文化に触れたり子ども自らが体験したりする場を設定すれば、子どもたちの感性を豊かに育むことができるだろう。

3　具体的な手だて

仮説を検証するために、次の手だてを設定した。

仮説(1)について
①学習場面における「チーム学習」の導入と活用
②児童学級委員会による「あいさつ運動」の実施
③ソーシャルスキルトレーニングの実施

仮説(2)について
④「読書タイム」「読み聞かせ」と背面黒板の「今月の詩」の継続
⑤学校行事の充実と体験活動の取り組み

4　研究の実際

手だて①学習場面における「チーム学習」の導入と活用

５年１組国語科「物語の組み立てについて考えよう」の第６時　学習課題「なぜ、ガヤガヤの町は静かになったのだろう」の授業では、物語の中の２つの場面を比べて人々が変化した様子とその理由を考えさせた。続いて授業では、まずチームで話し合う場をもった。



写真１　５年1組　国語科



写真 ３　6年3組　算数科

６年２組道徳科では、主題「社会正義を貫く」では、ユダヤ人にビザを発給した外交官杉原千畝を取り上げたものである。第３時　学習課題「自分の正義を貫いたときの気持ちを考えよう」の授業では、杉原の立場になって、ビザを発給する



写真2　6年2組　道徳科

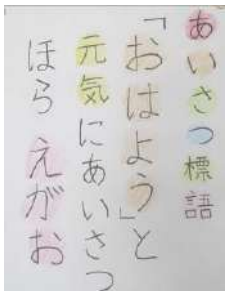
かどうかを考え、チームで意見を交流した。

６年３組算数科「対称な図形」では、線対称の特徴を使って、オリジナルの図形をプログラムする学習に取り組んだ。子どもは、作成したい図形とプログラムについて、チームの友達と伝え合った。やり方を理解できない場合は、友達に尋ねて進める姿が見られた。

手だて②児童学級委員会による「あいさつ運動」の実施

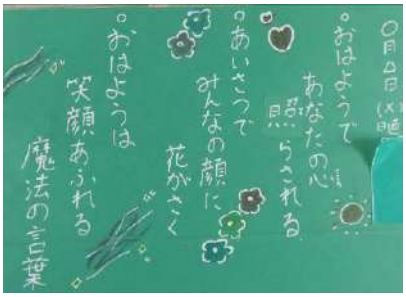
学級委員会が「あいさつ運動」に取り組んだ。子どもたちは「自分から進んであいさつできる人になる」「あいさつ運動を通して、友達や先生、三島学区の方ともっとなかよくなる」を目標と決め、次のような活動に取り組んだ。

〔1〕アンケートの実施	〔2〕あいさつ標語とポスターの作成・掲示
〔3〕あいさつカードの活用	〔4〕あいさつを推奨する動画の作成と放映
〔5〕「にこにこスター」の発表	〔6〕あいさつについての作文を書く



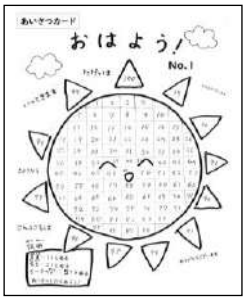
資料１あいさつ標語

〔1〕アンケートの実施では、活動前後の子どもの意識の変容を調べるため、全校児童を対象に５つの項目について、アンケートを実施した。



資料 ２ あいさつ標語のポスター

〔2〕あいさつについて子どもの意識を高めるために、「標語づくり」に取り組ませた。資料１は、学級委員が考えた「あいさつ標語」の１つである。資料２は、子どもたちが考えたもののなかから、３点を取り上げて作成したポスターである。これを校内の掲示板に掲示し、各教室に配付した。



資料３あいさつカード

〔3〕あいさつカードの活用では、6/17～21 と、11/13～18 の２回「あいさつ運動週間」を実施し、その期間に、子どもがあいさつをした数を記録するのに活用した。カードは表紙の他に「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「ありがとう」「さようなら」「またね」の６枚を準備した（資料３は「おはよう」のカードである）。

工夫したこととして、子どもたちがあいさつをした相手によって、色塗りするマス目の数に違いをもたせ、「友達１マス」「先生２マス」「地域の方５マス」とした。これによって、より多くのマスを色塗りするために、校内では先生に、校外では地域の方にあいさつをしよう、と子どもたちが考え、行動することをねらった。


写真4 あいさつカードに記録する様子

〔4〕あいさつを推奨する動画の作成と放映については、低学年の子どもたちにわかりやすく、高学年にはもう一度、あいさつの方法と意識を高めさせることを目的に、学級委員会が「お手本となるあいさつの場面や方法」を考え、自分たちで演じ、撮影をして動画を作成した。その後、お昼の放送の時間を使って、全校に紹介した。

〔5〕「にこにこスター」とは、「あいさつが上手な子」のことである。今回のあいさつ運動週間では、学級委員が登校時・休み時間等に、進んであいさつをすることができている子を見つけ「にこにこスター」として認定することにした。そして、あいさつ運動週間中、お昼の放送で「にこにこスター」に選ばれた子を全校に紹介した。あいさつを頑張っている児童を称賛すると共に、「にこにこスターに選ばれたい」という意欲をもたせることをねらってのことである。また、認定された子どもには、名札に付ける「にこにこスター」（写真５）のカードを贈った。



写真5「にこにこスター」

〔6〕あいさつに対する意識を高められるよう、「あいさつについて

の作文を書く」場を設け、６年生が取り組んだ。あいさつについてどのような意識をもっているのか、子ども自身に明らかにさせるためである。「あいさつはした方がよい」「あいさつすると気持ちがいい」ということを述べる一方で、「なんとなく恥ずかしい」「面倒くさい」などの本音も出てきたので、作文を書いた後、チームで話し合う場をもった。それぞれの考えを伝え合った後、「あいさつをできる場面を少しでも良いから増やしたい」と多くの子どもが述べた。

手だて③ソーシャルスキルトレーニングの実施



写真 ６ 6年3組 SST
「いいとこ四面鏡」

令和４年度は、学校に登校しても教室に入ることができない子どもや、自分の気に入らないことがあると物を叩いたり蹴ったり教師に暴力を振るったりする子どもが在籍していた。これらのことを改善するための方法として「ソーシャルスキルトレーニング」が有効であることを知り、令和５年度から取り入れることにした。

今年度は、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れて２年目である。担当者を養護教諭とし、右のような年間計画を立案した。そして、毎月、指導計画やワークシートを提供してもらうことで、学年や全校が同じ内容を学ぶことができた。また、担任の負担を少なくすることができた点もよかった。トレーニングは、学級毎に、学級活動の時間などを使って実施した。写真６は、11 月に６年３組で「いいとこ四面鏡」に取り組んでいる様子である。チームの友達について、「おもしろい」「元気がある」など、その子のよいところを見つけ、に決められた数だけ、選ぶものである。そして、返してもらったものを見て、うなずきながら確認し、友達に「ありがとう」という。友達によってよいと感じることが異なることや、自分の知らなかったよさに気付かせることもできた。

手だて④「読書タイム」「読み聞かせ」と背面黒板の「今月の詩」の継続



写真 7 保護者による読み聞かせ

毎週木曜日の「読み聞かせ」と背面黒板に担任が選んで書く「今月の詩」は、本校の伝統である。令和５年度から、始業後 10 分間を「読書タイム」として、時間を確保している。一日の始まりが落ち着いたものとするとともに、読書の楽しみを味わうことができるようにしている。

手だて⑤学校行事の充実と、体験活動への取り組み

体育的な行事として運動会とマラソン大会、学芸的な行事として学芸会を実施している。運動や演奏・演技を通して新たな経験することで、子ども自身が努力することを学び、成長を実感することができた。これを支える教職員の働き方にも考慮して、行事の時間を短縮したり、方法を見直したりすることで、効率よく練習・準備をし、当日、実施できることを目指した。運動会では、２学年ずつでの表現運動に熱心に取り組ませ、徒競走とリレーによって、体育科の学びを高めている。学芸会では、１・３・５年は音楽、２・４・６年は劇を発表する。子どもたちは熱心に練習し、多くの人の前で演奏したり、演じたりすることを楽しむことができた。11 月に行った人権集会では、全校で「すてきな一歩」を歌って人権についての意識をもった後、人権標語作りを実施した。



写真8 人権標語づくり

体験活動としては、山の学習・修学旅行にもちろん、図画工作科では美術博物館での作品作り、社会科でクリーンセンター・消防署・スーパーマーケットの見学、生活科の町探検、生き物の飼育、学年園での野菜の栽培を行っている。講師招へいでは、理科で星の観察、総合的な学習で、盲学校や地域の人との交流、音楽科で打楽器奏者を招いて音楽会を開催したりした。

５　成果と課題

仮説(1)　子どもたちの自主的な活動やチームによる学習や活動の場を取り入れ、人とのかかわり方を学ぶ場を設定すれば、互いを思いやる、心優しい子を育てることができるだろう。

①学習場面における「チーム学習」の導入と活用

子どもが自分の考えをもったとき、また、自分の考えに自信がもてないときでも、チームで話しをする場であれば、自分の考えを発表したり、友達の話を聞いたりすることができた。これは、子どもが安心して話すことができる環境を整えた成果であると考える。さらにチームであれば、自分がわからないことを友達に尋ねて、理解することができた。一人では不安だが、友達と一緒なら学ぶことに対する意識が育まれたので、学習に対して前向きに取り組める児童が増えた。チーム学習によって、友達と共に学ぼうとする子どもを増やすことができたと考える。

②児童学級委員会による「あいさつ運動」の実施

児童学級委員会に働きかけて、「あいさつ」を自分事として考えさせ、様々な方法を計画させて活動に取り組ませた。学級委員の子どもたちは「三島小を挨拶ができる学校にしたい」「全校のみんなのために頑張りたい」と熱心に活動した。事前事後にアンケートを実施したところ、あいさつの仕方や意識について、全ての項目で改善したことがわかった。また、２学期末に実施した教育活動アンケートの保護者の結果でも、子どもたちがよく挨拶をするようになったという保護者が 83.4%となり、前年よりも 6.2%増加したことは、大きな成果と言える。

③ソーシャルスキルトレーニングの実施

子どもたちは、自分が困ったときにどのように行動するとよいか学ぶことができた。日常生活においても、子どもたちから周囲の人に感謝することや相手を気遣う言葉をかける場面が増えてきている。事前事後にアンケートでは、４種類 12 の基本のスキルの全項目において、改善が見られたことから、トレーニングの効果を実感することができた。

④「読書タイム」「読み聞かせ」と背面黒板の「今月の詩」の継続

仮説(2)　文化に触れたり子ども自らが体験したりする場を設定すれば、子どもたちの感性を豊かに育むことができるだろう。

「本を読みなさい」と子供に声をかけるのではなく、「本を読む環境を整える」ことが読書タイムで、子どもたちが本に向かう場を設定できたと考えている。しかし、本を準備できない子や活字よりも漫画のような本を手にする子もいるので、読書の楽しみ方を学ばせていく必要がある。

「読み聞かせ」は、読み手の表情や声色などにより、子どもは楽しく読み聞かせを聞き、お話の世界を感じ取っていた。また、担任が子どもたちへの思いをもって読み聞かせの本や詩を選ぶことにより、言葉を通して担任の思いを伝えることができたと考える。教育活動アンケートでは、読書が好きではないという子どもが 3.6%から 1.7%に減少したことから、改善が見られたと考える。

⑤学校行事の充実と、体験活動への取り組み

学校行事や校外学習や体験活動を実施した日は、欠席者が少ない。これは、子どもたちが行事や体験活動を楽しみにしていることを表している。運動会では友達と力を合わせて練習に取り組み、学芸会では初めての楽器に挑戦したり、役になりきって演技をしたりしていた。４年社会科のクリーンセンター見学後の感想では、「ゴミの量が多くて驚いた。ごみの分別の仕方を確認して、これからはきちんとやるようにしたい」と述べた。校外学習では、自分の目で見ることによって、対象に対する興味関心が高めることができたと考える。

６　おわりに

子どもたちが登校したい学校には「わくわく(希望・期待・楽しみ)」「学び(興味関心)」「喜び(達成感・成長)」がいっぱいである。そして、学校の役割は、子どもたちが互いに関わり方を学んで「友達」となり、力を合わせて楽しい学校生活をおくることができるようにすることである。今回の取り組みを通して、本校は一歩、歩みを進めることができた。これからも私たちは、「明日も学校に行きたいな」という子どもを育てられるように、努力を続けていきたい。

目次へ

研究主題	「分かる・できる」喜びを実感する授業		
副　　題	～　子どもが主体的に取り組む授業づくり　～		
学 校 名	岡崎市立井田小学校	校 長 氏 名	牧野　守

「『分かる・できる』喜びが実感できる授業」～　子どもが主体的に取り組む授業づくり　～
この研究主題の達成のために行った実践を以下にまとめる。

・「子どもたちが互いを認め合い、より高め合おうという意欲をもった学級づくりに努める。」について

○国語（３年）物語文「ワニのおじいさんのたからもの」の実践

単元の終わりに、この物語の「紹介カード」を作成する活動を行った。紹介文を書くにあたり、「短くまとまっているか」「物語の大事な出来事や言葉がはいっているか」「言い換えたり、言葉を付け加えたりしているか」と三つの紹介文を書くポイントを担任は示していた。その後、チーム学習を取り入れ、紹介文を見直す活動をした。担任から示された紹介文のモデル文を読んで気付いたことを、三つの視点で付箋に書き、子どもたちがホワイトボード上で分類・意見交流をした。紹介文の推敲の方法を身につけた子どもは、一人一人が自分の書いた紹介文を自主的に読みなおしていた。学んだことを生かし、自分の文章をさらによりよいものにしていこうとする意欲を引き出すことができた。

さらに、現職研修として、本授業を職員全員で参観し、愛知教育大学　加納誠司教授に助言していただくことで、チーム学習の方法・効果的な意見交流について全職員が考えるきっかけとなった。



▲ホワイトボードを使った意見交流

○生活支援（特別支援）「『イダリンピック』を楽しもう」の実践

パラリンピックでも話題になった「ボッチャ」を取り入れた。この単元で、担任は互いの温かい声かけを重視した。始めは勝敗に強いこだわりをもっている子どももいたが、プレーを重ねるにつれて、子どもはチームメイトのミスにも、相手チームのナイスプレーにも、チームを超えて温かい声かけをすることができた。ルールも覚え、得点係や判定係、記録係と役割を分担して、



▲ボッチャを楽しむ様子

自分たちでゲームを進めていく姿がみられ、自主性が育っていることがわかった。この取り組みにより、互いを認め合う、温かい雰囲気を作り出すことができた。

・「学習課題、発問、切り返しの工夫など、子どもたちが授業に見通しをもち、考えを深めていくことができるようにする。」について。

〇算数（３年）ドローンの模範飛行を導入としたプログラミング学習の実践

本校の部活動にはパソコン部がある。全校発表の場で、プログラミングによる自作のゲームやドローンの模範飛行を披露した。子どもからも歓声が上がり、パソコン部員も満足そうであった。その後の教室で、算数の教科書にプログラミングのページを見つけた子どもは「やってみたい」とすぐに反応した。そこで、教師は「プログラミングが使われているものを見たことないか」と問い返すと、すぐに「発表会のドローンだ」と想起することができた。プログラミングがゲームの制作や、ドローンにつながると分かった子どもは、意欲的にプログラミング学習に取り組むことができた。今は、タブレット内でのプログラミングにとどまっているが、互いに改善案を出し合って、イメージ通りにキャラクターを動かすことができるプログラムを組もうと試行錯誤することができた。ただ、現状ではドローンの数がまだ十分にはなく、多くの子どもが実際にドローンに触れることができないことが課題でもある。



▲ドローンのプログラミングの披露

・「国語、算数を中心として、基礎学力を確実に定着させる方法を工夫する。」について

〇「基礎確認テスト」（全校）に向けての実践

本校は「基礎確認テスト」と称して学期に一回のテストを行っている。合格することも大切だが、そこまでの過程も重視されており、各担任がそれぞれ学習方法を工夫している。対策プリントを印刷し、自由に何度でも子どもが取り組めるようにしているクラスもあれば、子どものつまずき具合を把握して、チーム内で教え合う活動をとりいれているクラスもある。担任のさまざまな手立てにより、子ども同士が協力して、皆で合格に向けて取り組もうとする雰囲気を作り出すことができている。



▲かけ算の筆算の方法を説明する様子

ドローンやボッチャなど子どもの興味を引くものを活用しながら、基礎基本の習得も大切にすることで、子どもたちが自主的に互いを高め合うことにつながることが、今年度の実践で分かった。

目次へ

研究主題	将来「自立」できる児童の育成		
副　　題			
学 校 名	岡崎市立福岡小学校	校 長 氏 名	磯村　彰久

1　研究主題

将来「自立」できる児童の育成

2　目指す子供像

・自らの課題の解決に、試行錯誤しながら繰り返し取り組む子供

・互いの良さを認め合って協働的に活動に取り組む子供

3　研究実践

（1）健康推進教育（６年目）

・具体的な自己目標を設定できる児童アンケート「すこやかアンケード」を学期ごとに実施し、児童が自ら健康面での課題を見つけ、健康的な生活に改善していけるようした。

・命、人権に関わる授業参観を行った。

・外部講師を迎え、命・健康についての専門的な学年集会を行った。

・保護者や地域の人が参加できる学校保健集会や「手洗い教室」などを開催した。



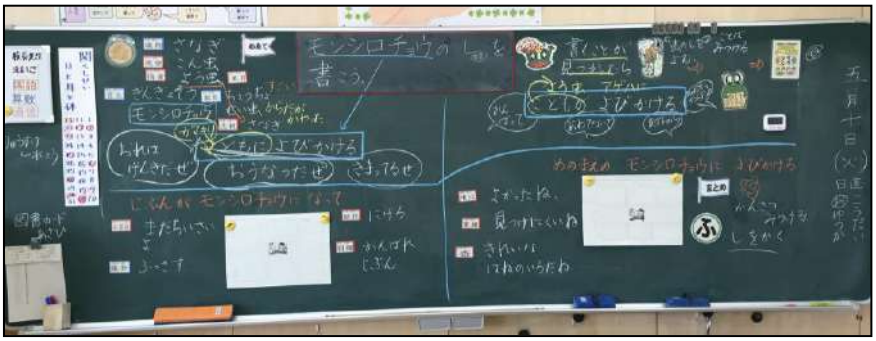
▲「命の教育」授業参観



▲外部講師を招いた「すこやかサミット」

（2）児童詩教育（５５年目）

・全校児童の詩を載せた「学校詩集」を発刊した。



▲詩を書く授業の板書



▲学校詩集

（3）主体的に学び続ける児童の育成（４年目）

・「まちガエルになろう」を合い言葉にした温かい学校・学級作りを行った。
・「自分や友達の『きらめき』（良さ）を見つけよう」を合い言葉にした活動を行った。
・助け合う「チーム学習」を導入した授業を実践した。
・「みちガエル」姿を設定し、「まちガエル」となって積極的にチャレンジし、活動を「ふりカエル」となりながら試行錯誤を粘り強く繰り返すことで、「みちガエル」くらい成長することを目指す学習を行った。

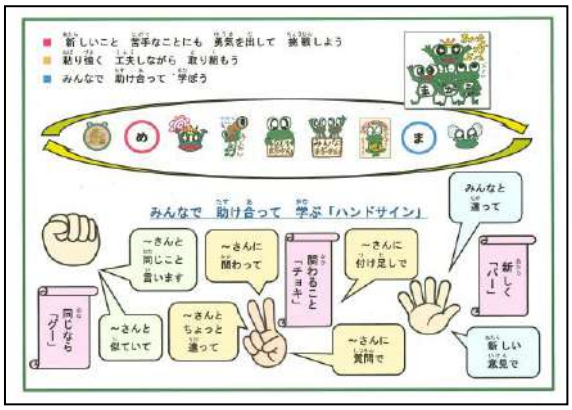


▲「まちガエル」朝会



▲児童会主催「まちガエル」集会





▲「まちガエル・かんガエル・ふりカエル・みちガエル」の授業

４　成果

・「すこやかアンケート」に子供たちが生活状態を数値として入力することで、自らの健康状態のチャート分析が行えるようにした。それによって、自らの生活の課題に気付き、改善するための取組を実行できるようになった。さらに最後に振り返ることで、その後の生活についても改善の見通しももてた。主体的に健康増進を図ろうとする子供の増加した。
・詩の創作によって自らの思いを素直に表現し、それを読み合うことで、お互いの違いや良さを認め合う姿が見られるようになった。
・お互いの良さ「きらめき」を見つけ合う活動を通して、人の多様性を認め合い、安心して学校生活が送れるようになり、「まちガエル」になることを恐れずに、新しいことや苦手なことにチャレンジする子供が増えた。
・学習でのＰＤＣＡの経験を通して、学級活動や行事や普段の生活において自らの活動を調整しながら粘り強く取り組むようになった。

目次へ

研究主題	思いや考えを語り、事故の成長を認め、学びを深める子の育成		
副　　題	協働と対話、学びの場をとらえ直した教育活動を通して		
学 校 名	豊川市立千両小学校	校 長 氏 名	亀甲　真史

１　研究主題

思いや考えを語り、自己の成長を認め、学びを深める子の育成
～協働と対話、学びの場をとらえ直した教育活動を通して～

本校は、自然豊かで、豊川市を見渡せる高地にある。児童数 107 名、どの学年も一学年 15～20 人程度の小規模校であり、子ども同士のかかわりが密である。特別支援学級は、４つの障害種別の学級を開設し、外国にルーツをもつ子どもは全校の約 20%おり、まさに多様性に満ちた学校である。こうした特性を背景とした本校の子どもたちは、明るく穏やかな人柄の子が多いが、自分の思いや考えを表現し切れていない様子も見られる。

子どもたちの向かっていく未来は、日々刻々と目まぐるしく変化し、ますます多様性に満ちた社会となろう。そのような社会の中で生きぬく力を身につけていくために、多様な仲間とかかわりあい、さまざまな考えにふれる場を設定することで、居心地のよさや楽しさを感じながら、ともに成長していくことが必要だと考えた。そこで、「思いや考えを語り、自己の成長を認め、学びを深める子の育成」を研究主題とし、実践を行っていくこととした。

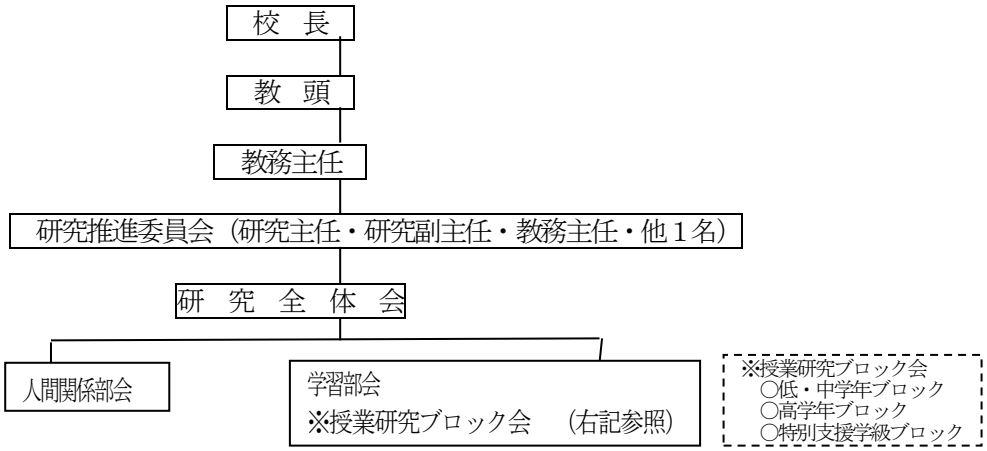
本研究では、人間関係部会と学習部会、それぞれのアプローチから実践を行っている。

人間関係部会では、代々続いている「たてわり活動」を通して、異年齢の子ども同士が協力できる場を設定することで、思いやりの心を育み、子ども同士のつながりをより密にすることを目標に取り組んでいる。また、学級においても子どもが居場所をもち、温かいかかわりがもてる学級活動を行っている。

学習部会では、授業の中で、子どもの主体性を引き出す場、多様な考えにふれる場、学びを深める場となる場面を「授業の山場」として設定し、それを子どもと共有することで、子どもは「できた・わかった」を実感し、「学びの自覚」を得て、自己の成長を実感していくのではないかと考えた。

子ども自身が主体的に学びにかかわっていくことで、充実感や達成感が得られ、また、そこに安心できる仲間との一体感のある居心地のよい場があることで、子どもは自己肯定感が高まり、学びを深めていくと考える。

２　研究組織



３　めざす子どもの姿

○安心して人とかかわり、自分の思いや考えを語ることができる子
○自己の成長を認め、学びを深めることができる子

４　仮説

仮説Ⅰ

さまざまな集団や組織を形成し、豊かな人間関係づくりのための協働と対話の場をとらえ直すことで、子どもは安心して人とのかかわりをひろげ、自分の思いや考えを語るようになるだろう。

仮説Ⅱ

授業における子どもの学びの場をとらえ直すことで、子どもは、自己の成長を認め、学びを深めることができるだろう。

５　教育活動をとらえ直すとは

（１）人間関係づくりの場をとらえ直すとは

たてわり活動をはじめとした人間関係づくりの場をどういう場とすればよいか
①自己を開示する場　②他者と協働する場　③感謝を探知する場

（２）学びの場をとらえ直すとは（学習の山場の場面に接する教師のとらえ方）

授業において、ちぎりグラムを提示する場をとらえ直す
ちぎりグラムの提示により、授業において何を求めるのか
①子どもの主体性を引き出す場　②多様な考えにふれる場
③学びを深める場（新たな知見を得る・納得する・成長を感じる・自分の考えが再構築される）

６　実践

【人間関係部会の取り組み（仮説Ⅰに対する手立て）】

（１）たてわり活動

小規模校の特性を活かし、１年生から６年生までを８班に分け、年間を通じてさまざまなたてわり班活動を行う。異年齢集団でのかかわりの中で、「たてわり班で過ごすことが楽しい」と感じられることを目的とする。互いが思いやりの心をもてるような活動をめざす。さらに、役割意識を身につけるため、学年に応じためあてを設定し、他学年とのかかわり方を考えさせる。活動後には振り返りを行い、めあてにかかわる振り返りを行ったり、友達のよかったところやがんばっていた様子を発表し合ったりする場を設定する。これらの活動は、キャリア教育の基礎的・汎用的能力の育成として人間関係形成や自己理解・自己管理能力を育むことにつながると考える。（次ページ参照）

（２）千両星（全校の友達のよいところを見つける活動）

「～をがんばっていたね。」と、友達のよい姿を見つけたり、「～してくれてありがとう。」と、感謝の気持ちを表したり、「～と言ってくれてうれしかったよ。」と、言われて嬉しかった言葉を伝えたりするなど、全校でメッセージを贈り合う。さらに高学年には、公共性の高いものや人の目に映らないような善行にも注目させて書かせる。月１回程度、木曜５限の学級活動で書く時間を設けるが、行事等の活動後にも随時書くようにする。また、贈られてきた千両星を学年の掲示板に掲示したり、放送や集会で紹介したりすることで、自己肯定感や自己有用感を高める。全員に届くように、ペアやたてわり班、「今週は○年」などと書く相手を適宜指定する。

（３）学級活動（構成的グループエンカウンターSGE・ソーシャルスキルトレーニングSST）

各学級でＳＧＥやＳＳＴを行う。全校で学活ウィークを設け、取り組む。ＳＧＥ一覧表や、ＳＳＴファイル等を参考に、学級の実態に合わせて実施する。また、学級の実態に応じて、

随時実施することで、友達に対する見方や捉え方を養い、よりよい仲間づくりを行う。

たてわり活動	ねらい	活動内容
学年ごとのめあての設定	学年のめあてなどからたてわり班で頑張りたいことを明確にし、たてわり班活動を通した自分の一年後の姿を意識することができる。	・一覧になったものを教室に掲示し、学年ごとに楽しく遊ぶために気をつけることやがんばることを明確にする。 ・活動前後に教室でめあての確認をすることで、自分たちのめあてを意識したたてわり遊びになるようにする。 ・キャリアパスポートにたてわり班の目標を書くことで一年後の姿を意識することができるようにする。
たてわり遊び	高学年のリーダーシップを育てる中で、子どもたち自身で主体的に活動できた実感を味わわせることで、人とかかわることの楽しさを感じることができる。	・年3回(6月、10月、1月)、木曜5限に行う。 ・高学年が計画を立て、活動報告書を作成し、各たてわり班担当教員と打ち合わせる。 ・6年生が細かい段取りを考える。高学年として低学年にどんな配慮が必要なのか具体的に考えさせることを大切にする。
誕生日集会	たてわり班で、互いに誕生日をお祝いする中で、その喜びを共有できるようにする。	・年5回(1学期2回、2学期2回、3学期1回)、金曜の朝(千両タイム)に行う。 ・児童会が計画を立てて実施する。 ・誕生日を祝う側、祝われる側を意識し、全校で楽しむことを大切にする。
たてわり清掃	仲間と協力して役割を分担しつつ、所属感や連帯感をもって取り組めるようにする。	・年3回(6月校庭の草取り、12月落ち葉拾い、3月ワックスがけ前の床拭き)に行う。 ・人間関係部会を中心に、たてわり清掃担当教員が作業内容を計画して実施する。 ・各たてわり班で、高学年が準備、役割分担をし、「班で協力して清掃する」という目標をもって活動できるようにする。
千両いも活動	たてわり班の仲間と仲良く活動し、畑の世話をしてくれた方々に感謝する。	・苗さし(5月)、草取り(6月・9月)、芋ほり・収穫祭(11月)に行う。 ・年間を通して、さわやかグリーンミュージック委員会を中心に活動する。 ・①たてわり班の仲間で仲良くする②いもの世話をしてくれた方に感謝するの2点を目的として、いもにかかわる活動をたてわり班で協力して行う。 ・キャリアパスポートめあてに促したたてわり活動で感じた思いを積み上げる。自己の成長、学びの自覚がもてるように声掛けをする。
行事と関連した活動	「たてわり班でいることが楽しい」と感じられるようにする。	・ 新入生を迎える会…たてわり班でレクリエーションに取り組む。 ・運動会…たてわり班で競技を行う。 ・長なわ大会…たてわり班で8の字とびを行う。

【学習部会の取り組み（仮説Ⅱに対する手立て)】

（1）「できた・わかった」（学びの自覚を得て、学びを深める姿をめざす授業）

子どもが「できた・わかった」を実感し、学びの自覚を得ることができるようにするために、授業の山場となる場面において、「であう」「つかむ」「みつめる」「やってみる」「ふかめる」「ひろげる」の６つの合言葉の中で、子どもの主体性を引き出す場、多様な考えにふれる場、学びを深める場となる手立てを講ずる。子どもに馴染み深い学校マスコット千両（せんりょう）ちゃんを用いた「ちぎりグラム」を山場に応じて明示し、教師と子どもでその学びの場を共有することで、子どもは周りとかかわって学びあうことを楽しみ、自分の思いや考えを語っていくだろう。さらに、今の自分はどのような感じなのか振り返ることで、学びの自覚を得て、自己の成長を実感していくと考える。

（2）「できた・わかった」を下支えするもの

ア　「話す聞く７つのめあて」「伝え方レベル５」

授業の中で、子ども同士がつながるためには、友達の考えをわかろう、自分の考えをわかってもらおうという気持ちで、聞いたり話したりすることが大切である。そのため、聞いたり、話したりすることに焦点を絞った「話す聞く７つのめあて」と「伝え方レベル５」を意識して、日々の授業に取り組む。めあての掲示物に名前を貼り、可視化することで、自分が特に何を意識して授業に取り組むかわかりやすくする。

イ　音読

自分や周りの子の思いや考えを、伝えたいように語ったり、正しく聞き取ったりするために、国語の授業や朝の学習、日々の宿題で音読を行う。目で文字を追い、声に出したり、聞き入れたりすることで、言葉や文章を確実に理解できるようにする。また、友達と聞き合ったり、評価し合ったりすることで、意欲を高め、自信をもてるようにする。音読カードの評価の視点を全学年で統一することで、継続的に力をつけていくようにする。

7　現職研修

（1）授業研究

・『できた・わかった』を実感し、『学びの自覚』を得ることができる授業を意識して取り組む。
・授業ブロック会で、学級の実態を把握し、共通理解を図る。(会の取り回しは学習部会)
・全校研（６月初旬）で、千両小がめざす「協働と対話、学びの場をとらえ直した教育活動」について共通理解を図る。（３・４年　高橋教諭・西野教諭　教科：体育）
・１人１回、教材研究をし、授業を行う。
・研究２部会とは別に、授業研究ブロック会（低・中学年、高学年、特別支援学級）を設け、以下について研究する。(授業研究に向けて、事前、事後検討会を行う)

8　３年体育「フラッグフットボール」（ゴール型ゲーム）の授業を振り返って

（1）山場において「できた・わかった」を導くための手立て

ア　チーム練習で作戦を考えながら、ゲーム（３対２）をする。基本となる作戦カードを提示することで、作戦の有効性を実感し、すすんで作戦を考えることができるようにした。

イ　短い時間で区切って、ハドルと攻撃を繰り返し行いながらメインゲーム（３対２）をする。チームで話し合いながら作戦を考えることができるようにした。

＜成果＞

基本となる作戦があることで、その作戦を試したりオリジナルの作戦を考えたりして、チームで試行錯誤しながら練習をしており、作戦作りを楽しみながら運動することができた。また、コートの工夫やタイマーを使った時間管理が有効に働き、効率よくゲームを進行することができた。ハドルの時間を確保することで、その都度やるべきことを確認して、作戦の遂行に集中して運動できた。

（2）ちぎりグラムの提示・・「やってみる」

本時は「パスプレーで点を取るためにはどうすればいいかな」と投げかけ、新しい作戦カードを追加し、やってみようとちぎりグラム「やってみる」を提示した。

＜成果＞

新たに追加された作戦カードに興味をもち、やってみたいという思いをもつことができた。自分たちで考えた作戦でやってみたいという思いをもち試しているチームもあった。

（3）自己の成長を認め、学びを深めたいと取り組む子どもたちの姿

＜成果＞

対戦記録表を毎回書き込むことで、自分たちのチームはこの作戦が得意だと自信をもって言うことができていた。また、「私のパスよかったでしょ」と、運動が苦手だと思っている子らも自分の得意なプレーを見つけ、嬉しそうにしている姿が見られた。

目次へ

研究主題	生活をよりよくしようと工夫する子の育成		
副　題	５年生　家庭科「食べて元気に」の学習を通して		
学校名	豊川市立国府小学校	校長氏名	竹本　智

１　主題設定の理由

私が家庭科の授業を担当する５年生の児童は、自信をもって自分の考えを発言できる子が多い。また、食の題材では調理実習をとても楽しみにしている。ただ、実習には意欲的ではあるが、調理計画や実習後の意見交換の場面では自分の意見を発表するにとどまり、友達や教師の話を聞いて自分の意見を見直したり、よりよくしようと考え直したりする姿があまり見られなかった。

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）家庭編の目標には、「（２）日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う」と記されている。生涯にわたって健康で豊かな生活を送るために、自分の生活を見つめることを通して、その中から問題を見いだし、解決すべき課題を設定することが大切であると考える。５年生家庭科の「食べて元気に」の題材は、私たちの生活にとって身近な米飯とみそ汁を扱う。特に、みそ汁は家庭ごとの味があり、「だし」「みそ」「実」などの組み合わせは多種多様である。食事の役割や栄養素についての基礎的な知識を学んだ後に調理計画を立て、実際に調理をし、実践活動の評価・改善ができる題材である。本主題の生活をよりよくしようと工夫する子供を育てることに適した題材であると言える。

子供たちの実態を把握するために、５年生 134 名にアンケート調査を行った。「みそ汁をどのくらいの頻度で飲みますか」という設問に対して、95%の子供が「週に 1 回以上は飲む」と答えた。「飲まない」と答えた児童は、わずか５%だった。また、「家庭で使われているみそやだしの種類を知っていますか」という設問に対して、73%が「知らない」と答えた。みそ汁は子供たちにとって大変身近な献立でありながら、どのようなみそやだしが使われているかを知らないという実態が見えてきた。また、「一人でみそ汁を作ったことがありますか」という設問に「ある」と答えた児童は13%と、調理計画を立てたり調理をしたりしたことのある子供は少ないことが分かった。

これまでに私が見聞きした授業実践は、学校での実習の後に家で実践してみることを教師が提案し、学校での学びを家庭につなげていくことがほとんどであったように思う。しかし、本学年の子供たちは、調理経験が少ないことや仲間の意見を受けて検討する力が乏しいことを踏まえたところ、実際に調理を経験する機会を大切にし、調理を評価・検証するところまで丁寧に学ぶことができるような題材を構想したいと考えた。そして、本題材に取り組む中で、失敗から課題を見いだし、よりよい解決策を試すことを通して、工夫することの面白さや大切さに気付き、自らの生活をよりよくしようとする子供たちを育てたいと願い、本研究に取り組んだ。

２　目指す子供像

○おいしく食べるための調理計画を立てることができる子
○実習での問題点を見いだして、よりよくするための解決策を考えることができる子

3　研究の仮説と手立て

仮説Ⅰ　みそ汁の調理について調理経験が豊富な人から学ぶ機会を設けることで、おいしく食べるための調理計画を立てられるだろう。

【手立てⅠ－①】栄養教諭との連携

・献立表を分析し、栄養についての知識を学べるようにする。

・給食を作る際に食べる相手（児童）に対して、どのようなことに気を付けて調理計画を立てているかを学べるようにする。

【手立てⅠ－②】家族へのインタビュー

・家庭でよく使うみそ汁の食材（だし、みそ、実）や、調理の仕方について家族にインタビューする機会を設ける。

仮説Ⅱ　２度の調理実習を位置付けた題材を構想することで、次の調理に生かすためのよりよい解決策を考えることができるだろう。

【手立てⅡ－①】話合い活動の工夫

・１回目の調理実習を振り返り、課題に対する解決策を話し合う時間を設ける。

・２回目の調理実習を振り返り、家庭でどのように生かしていきたいか話し合う時間を設ける。

【手立てⅡ－②】解決策を試す調理実習の設定

・１回目のグループ実習での課題に対して、考えた解決策を試す場として２回目の調理実習（個別調理）を位置付ける。

4　検証の方法

本研究では、抽出児Ａの変容を中心に追い、学級全体との関わりも加味しながら仮説における手立ての有効性を検証していく。

Ａ児は、教師が示した課題をすぐに理解し、何事にも自分の力で取り組むことができる。また、グループ活動では、自分の考えを仲間に分かりやすく説明することができ、全体の場での発言も活発である。しかし、課題を終えると満足してしまい、自分の考えを見直したり、よりよい方法はないか模索したりする姿はあまり見られない。

実践前に実施したアンケートでは、Ａ児は週に４～５回みそ汁を飲むが、一人で作ったことはなく、みそやだしの種類も知らないと答えていた。こうした実態からも、栄養についての基礎知識や、調理計画の立て方をしっかりと学ぶこと、調理経験を増やしてよりよくするための解決策を試す場がＡ児にとって必要であると考える。

調理計画を立てる際には、栄養教諭や家族から教えてもらったことを基に、おいしく食べられる計画が立てられるようになってほしいと考えた。また、実習をした後で解決策を考えさせることで、経験に基づいた振り返りから、仲間との積極的な意見交流をし、自分の計画をよりよくしようと工夫することができるようになってほしいと考え、本題材を構想した。

5　研究の成果と課題

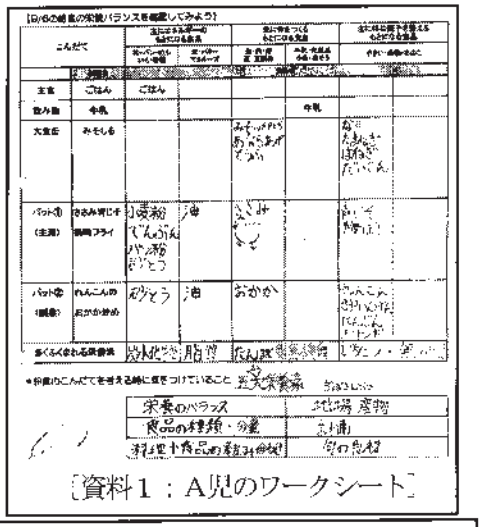
（1）仮説Ⅰについて

【手立てⅠ－①】栄養教諭との連携

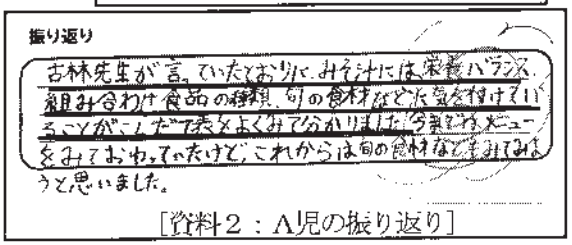
ふだん子供たちは、給食の献立に注目することが多いが、授業でどのような食材が使われているのか分析することを通して、食材の組み合わせや栄養素に着目することができた。また、食材の絵カードを用いて板書したり、ワークシートの表にまとめたりしたことで、給食は５大栄養素がバラ

ンスよく含まれていることを視覚的に捉えることができた（資料１）。

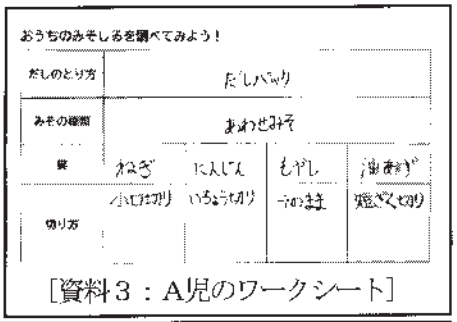
給食の調理に携わっている栄養教諭から、子供たちにおいしく食べてもらえるように調理計画で気を付けていることを教えてもらい、「食品の組み合わせを考えること」「旬の食材を積極的に使用すること」が大切であると、実感を伴った理解につなげることができた（資料２）。また、これらの気を付けていることは、どちらも食べてもらう相手のことを考えていると知り、相手意識をもたせることにもつながった。単元が終わった後も「今日のみそ汁は赤みそだね」「旬の里芋だ！」などと給食の時間に会話をしている子もおり、献立そのものだけでなく食材の組み合わせについても興味が持続している。担当の教員が教科書を用いて教える方法もあるが、食の現場で働く人の生の声を聞くことで、子供たちは納得感をもって栄養についての専門的な知識を得ることにつながった。



［資料１：A児のワークシート］



［資料２：A児の振り返り］



［資料３：A児のワークシート］

【手立てⅠ－②】家族へのインタビュー

家族へインタビューをすることによって、題材開始前のアンケートで「家庭のみそ汁に使われているだしやみそについて知らない」と答えていた約73%の子供たちは、家庭の味を知ることができた。このことは、学校と家庭をつないでいくための第一歩となった。また、「いちょう切り」や「小口切り」などの切り方の名前を覚えるとともに、全て同じ切り方ではなく食材に合わせた切り方があることも家族から学ぶことができた（資料３）。さらに、多くの子供が家庭から学んだことを調理計画に生かすことができた。家庭でよく使う実を調理計画に取り入れる姿や、インタビューで知り得た実の切り方を話合いの中で友達に伝えている姿が見られた（資料４）。個別調理では、家庭でだしをとる際に使っている昆布やかつおぶしを持参する子や、家で作っている手作りみそを使う子もいた。インタビューをすることで、家族がいつも作っているように調理をしたいという思いをもって、おいしく食べるための計画を立てることができた。

C１：油揚げってどうやって切るの？
A　：(ワークシートを指さして)
　　短冊切りはどう？
C２：あ、一緒。
C１：短冊切りってどんなの？
A　：細長い四角みたいな形。
C１：ああ！じゃあそれにしよう。
A　：ねぎは小口切りでいいよね。
C２：うん、いいよ。
C１：実を入れる順番って全部一緒じゃいかんの？
A　：だめだよ。
C２：ごぼうは最初に入れないと。
　　でも、ねぎと油揚げはどっちが先？
A　：ねぎは生でもいいから最後にしたら？
C２：オッケー。

［資料４：調理計画の話し合い］

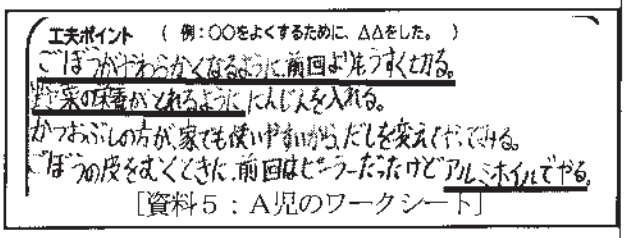
課題としては、家庭環境がさまざまであり、一部の子供は家族へのインタビューが難しいことがある。家庭環境に配慮し、難しい場合は教師や栄養教諭などにインタビューする機会を設けることで、どの子も参考にできる情報を生かして調理計画を立てることができるだろう。

（２）仮説Ⅱについて

【手立てⅡ－①】話合い活動の工夫

調理経験の少ない子供たちにとって、調理実習をする前の話合いは、イメージの段階に過ぎない。

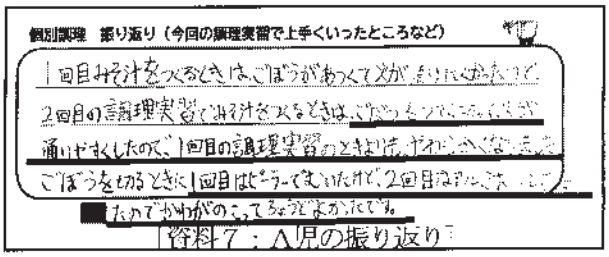
話合いのタイミングが適切であれば、子供たちは実体験から上手くいったことを友達と共有したい、失敗したことは話し合って解決したいという思いになる。一人では考えが思いつかない場合、共有する機会を設けることで、友達から解決方法を教えてもらい調理計画に反映させることができた。A児のワークシートには、「ごぼうがやわらかくなるように、前回よりもうすく切る」「野菜の栄養がとれるようににんじんを入れる」など、改善したいことをワークシートにくわしく書くことができた（資料５）。また、話合いで「ごぼうの皮はアルミホイルでこすってむくとよい」とアドバイスをもらい、次回の調理実習で試したい工夫として書き込むこともできた。子供たちがみそ汁作りを１度経験した上で話し合う時間を設けることは、よりよい解決策を考えるために有効であると感じた。


工夫ポイント　（例：○○をよくするために、△△をした。）
ごぼうがやわらかくなるように前回よりもうすく切る。
野菜の栄養がとれるようににんじんを入れる。
かつおぶしの方が家でも使いやすいからだしを変えてみる。
ごぼうの皮をむくときに前回はピーラーだったけどアルミホイルでやる。
［資料５：A児のワークシート］


［資料６：実習の様子］

【手立てⅡ－②】解決策を試す調理実習の設定

初めは「だし」や「みそ」などを指定し、グループでの調理を行うことで基本的なみそ汁を作る経験をした。グループ調理、個別調理、家庭での調理というステップを踏んでいくことで、工夫の幅をだんだんと増やしていくことができた。また、調理経験が増えていくごとに、「次はもっと○○を工夫したい」という思いが高まった。A児は、前時の話合いで学んだごぼうの皮のむき方を試す様子が見られた（資料６）。計画を試す場として２度の調理実習を設定することや、調理を評価・検証するところまで丁寧に学習することで、次の調理に生かすためのよりよい解決策を考える姿が見られた。A児のワークシートには、１回目と２回目の調理を比べた振り返りが書かれていた（資料７）。工夫を加えたことでよりよいみそ汁づくりができた。


個別調理　振り返り（今回の調理実習で上手くいったところなど）
１回目みそ汁をつくるときは、ごぼうがあってよかったけど
２回目の調理実習でみそ汁をつくるときは、ごぼうをうすくしたら
通りやすくしたので、１回目の調理実習のときより、ずっとやわらかくなった。
ごぼうをむくときに１回目はピーラーでしたけど、２回目はアルミホイル
たかでやわらかくなってよかったです。
［資料７：A児の振り返り］

課題としては個別調理を行う環境面に配慮することが上げられる。個別調理は準備から片付けまでを一人で行うため子供たちの自信にもつながる。今回は、栄養教諭の協力を得て、２人体制で見守ることができてよかったが、最後まで安全に実習をするために多くの準備や配慮が必要である。

7　おわりに

本研究では、自分の生活を見つめ直し、生活をよりよくしようと工夫する子供の育成を願い実践を行った。食の題材において、調理計画の立て方を学んだ上で計画を練り、実践、改善を積み重ねるという試行錯誤の過程が特に重要であると感じた。成功や失敗を経験すること、失敗から解決策を話し合うことで、次の調理をよりよくしようと工夫する姿が見られた。また、出来上がったみそ汁を食べて、自分と家族が笑顔になった経験から、食生活を工夫することの面白さや大切さを感じてもらえ、うれしく思う。

６年生の家庭科では、「こんだてを工夫して」という食の題材がある。主食や汁物だけでなく、主菜・副菜にも視野を広げ、一食分の献立を考えていく。本研究で大切にしてきた試行錯誤する経験が、この題材でも生かされるだろう。私自身も、授業の中で子供たちの生活から学ぶことが多い。家庭科は、生活そのものを学ぶ教科であると改めて感じる。今後も、子供たちに多くの経験をさせることを大切にした授業を工夫し続けていきたい。

目次へ

研究主題	わたしが好き！なかまが好き！金屋小が大好き♡		
副　　題	～ねばり強く取り組み、ともに学ぶ喜びを味わう子をめざして～		
学 校 名	豊川市立金屋小学校	校 長 氏 名	伊藤　克裕

はじめに

本校では、「わたしが好き、なかまが好き、金屋小が大好き♡」を合言葉に、学習と生活の両面から「ねばり強く取り組む子」「ともに学ぶ喜びを味わう子」をめざすことにした。

研究を進めるにあたり、トップダウンではなく、教員の主体性を大切にしたいと考え、校内の研究組織に三部会「授業部会」「人間関係部会」「情報活用部会」を設け、力量向上に努めてきた。

研究三部会の取組

①「授業部会」では、授業力向上をめざし、二つの取組を行った。一つ目は、話し方や聞き方の向上である。学年や子どもの実態に応じた目標を、教室の黒板上に掲示した。発表時や聞く時に意識させることで、子どもたちの話し方や聞き方が向上した。

二つ目は、授業公開週間である。簡略化した授業案を用いて互いに授業を見せ合う場を設定したことで、気軽に学び合う素地ができた。また、授業を見る目を養うために、兵庫教育大学教授山内敏男先生を講師として四回お招きした。ALACTモデルに基づいた教師と子どもの一致やずれを見取った協議会をご教授いただき、子どもの思考をとらえる大切さを学んだ。山内教授のご助言により、子どもが夢中になる単元構想や、子どもの思いを大切にするICTの効果的な活用法など、子どもに寄り添った授業を実践することができた。



【互いに見合い授業力UP】

アクティブラーニングの発達段階(第５段階)

2024年5月　16.7%　→　2024年11月　58.3%

②**「人間関係部会」**では、研究の土台は、安心できる人間関係であると考え、二つの取組を行った。一つ目は、WEBQUの活用である。結果からさらなる効果的な手立てを考えるために、名古屋産業大学准教授本田真先生をお招きし、見識を深めた。その後、学級担任は抽出児を決めて個をとらえ直したうえで、適切なタイミングで声をかけたり、意図的に役割を与えて賞賛したりすることで、学級や子どもたちを支えてきた。

「親和的な学級」数(2024年)

5月　７学級　→　11月　11学級

二つ目は、よりよい人間関係のために、朝学の時間にSST等を行い、コミュニケーション能力の向上をめざした。また、互いに学び合う場を設定し、実践することで、教員の力量向上につなげることができた。

③**「情報活用部会」**では、本校の教育DXの推進に取り組んできた。そのため、Googleアプリを活用し、クラウドでの会議資料や教材の共有を進めたり、クラスルームを用いて学級活動や委員会活動の交流を行ったりした。また、フォームを活用した学校生活アンケートを行うこと

時間外勤務の合計時間の平均

2023年9月　53.17時間　→　2024年９月　38.5時間

で、集約や分析が容易になり、問題を抱える子どもへの対応が瞬時に行うことができるようになった。教育DXを進めることで、業務時間が削減し、教員の子どもと向き合う時間を増やすことにつながった。

おわりに

研究に終わりはない。今後も、研究主題を大切に金屋小にかかわるすべての人が、金屋小が大好きと思える研究を進めていきたい。

目次へ

研究主題	『自己を見つめ、他者との関わりを通して、よりよく生きようとする子の育成』		
副　題	～語り合い、深め合う道徳の授業の実践を通して～		
学校名	碧南市立鷲塚小学校	校長氏名	原田　朋浩

1　主題設定の理由

本校の児童は、とても明るく元気いっぱいで、日々の学習だけでなく、学校行事にも前向きに取り組むことができる。特に挨拶は、OMJR（大きな声で・目を見て・自分から・礼をして）を合い言葉に全校で力を入れており、誰にでも自然と挨拶することができる。

また、本校の特色として、市内で最も多くの外国人児童が在籍していることがあげられる。学区を見てみると、古くから鷲塚に住む人の多い地域もあれば、新しい住宅がたくさん建っている地域もあり、外国人児童のみならず、多様なルーツをもつ児童が同じ教室で学んでいる。これは、現代日本の縮図であり、未来を生きる子どもたちには、自分にとっての当たり前が、誰にとっても当たり前でないことを知り、他者の多様な考えを受け入れ、自己の考えを柔軟に広げていく力が必要になるのではないだろうかと考える。

平成30年の学習指導要領改正により道徳が教科化され、今年度で7年目を迎えた。目まぐるしく変わる社会情勢の中、未来を生きていく子どもたちのため、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことはとても重要である。

そのためには、自分の今までの経験をもとに自分の考えを整理し、他者と対話をすることで、自己の価値観を深め、未来を力強く生きていく力を養うことができるのではないかと考えた。

2　目ざすこども像

自分の考えを他者と分かち合うことで、自己の考えを深め、よりよく生きようとする子

3　研究の仮説

【仮説１】※「語り合い、深め合う道徳の授業」を継続的に実施することができれば、児童が自己と向き合うことで自分の考えを深めることができるようになるだろう。

【仮説２】他者の多様な考えや価値観に触れることで、他者の思いを大切にすることができるようになるだろう。

※「語り合い、深め合う道徳の授業」とは…

主体的に自分との関わりで考え、多様な考え方・感じ方と出会う授業。

4　仮説１に対する手立て

○【語り合い、深め合う道徳の授業】の確立

（１）授業展開の工夫

子どもたちが自分の考えを整理し、自分の考えをもったうえで対話活動に参加できる

ように、【一人道徳】の活動を実施した。



【一人道徳】とは、考えるべき内容について、他者と話し合う前にまず自分の中で考えをまとめたり、書いたりする活動のことである。「人が大事なことを判断するためには一人の時間が必要であり、一人の時間をもつことで、心を整理することができる。」という考えを基に、特に深く考えてほしい中心発問で、ワークシートに自分の意見を書いたり、まだ書くことが難しい低学年や特別支援学級では、静かに自分と向き合ったりする時間【一人道徳】を取り入れた。

また、授業終末の振り返りの場面では、一時間のうちに考えたことを子どもたち自身が視点を決めて整理し振り返ることができるようにした。具体的には、４つの振り返りの視点（授業の中で大切だと思ったこと、授業の前と後での考えの比較、今後の活動にどう生かしたいか、他者のなるほどと思った意見）を提示し、その視点を参考にして、自分の心と対話できるようにした。

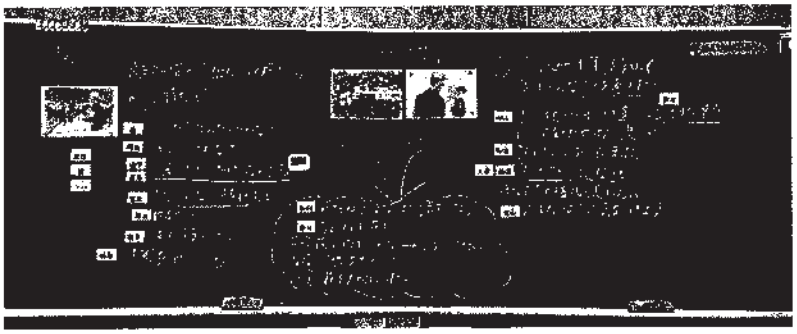
（２）道徳的諸価値の理解を引き出す発問の工夫

道徳科においては、子どもが将来さまざまな問題場面にあった際に、その状況に応じて自己の生き方を考え、主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うことができるよう、道徳的価値の意義やその大切さの理解が必要であるとされている。

本校では、一時間の授業の中で、人間理解、価値理解、他者理解の三つの側面からとらえさせたい価値について考えられるよう発問を工夫した。

特に、普段の授業では深めることが難しい人間理解に焦点を当て、本音で語り合うことで、より道徳的諸価値の理解が深まると考え、教師の問いかけ方を工夫した。

（３）板書の工夫



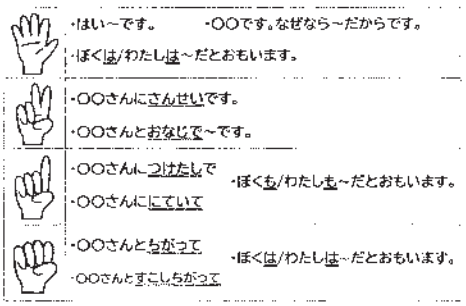
人間理解を深めることで、とらえさせたい価値を深めることができるという考えのもと、人間理解の発問の答えと価値理解の発問の答えが見比べやすいように板書を工夫した。また、授業の終末で板書を見て、振り返りがしやすくなるにはどうしたらよいか、教員間で板書の仕方について共有し、検討した。

５　仮説２に対する手立て

【他者と考えを分かち合う対話活動】の充実

（１）学習規律の確立

子どもたちが安心感をもって授業に集中して取り組み、自己表現をするためには、学習規律が大切であると考え、次のような取り組みを実施した。



○ハンドサインの積極的な活用

子どもたちが進んで授業に参加できるための手立てと

して、シンプルで使いやすく、発言をすることが苦手な子どもも自分の思いを示すことができるハンドサインを検討、導入した。

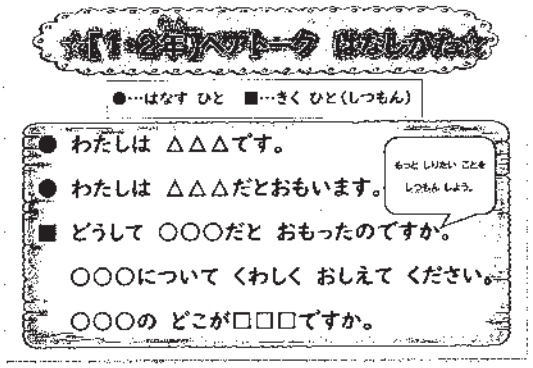
○ペアトークのルール作り

対話活動の基礎となるペアトークでは、ペアトークの対話の型を提示し、子どもたちが話しやすくなるよう工夫した。

また子どもの発達段階に合わせて、話す時間や話す内容を増やしたり、紙を見ないで話したりするなど、ルールを検討した。

（2）ペアトーク・グループトーク

子どもたちが話す楽しさを感じられるように、週に１回、朝の１０分間を使って、ペアトーク・グループトークのトレーニングタイムを実施した。



〈ペアトークタイムの例〉

テーマ：「旅行に行くなら海と山どちらに行きたい？」

①ペアトーク

お互い意見を言い合い、質問や感想を伝え合う。

②グループトーク

グループでテーマについて話す。

その際、ハンドサインを用いて、自分の考えを表す。

また相手の意見を聞き、話を繋げていくことを意識する。

（3）対話活動の充実

自分の考えを伝える楽しさ、他者の意見を聞いて自分の考えが広がる面白さを感じられるよう、道徳の授業に限らず、国語や社会、生活科など他教科の授業でも積極的にペアトーク、グループトークなどの対話活動を取り入れた。



６　成果と課題

研究の成果として、「語り合い、深め合う道徳」の継続的な実施を行ったことで、多くの子どもたちが道徳の授業の中で対話し、新しい考えに触れる面白さを感じられるようになった。その中には、日頃の授業の中ではなかなか自分の意見を発表することができなかった子どもたちも含まれており、「道徳の時間を通して自分の考えが認められることの楽しさ」に目覚めたようである。

今回の実践を通して多くの子どもたちから、「道徳好き！楽しい！」という嬉しい声が聞かれるようになったことも大きな変化である。

以下のアンケートは、「道徳の授業は好きですか？」という問いに対する子どもたちの答えである。道徳の授業は、行ってすぐに心の変容が見られるものではないが、「心の漢方薬」として子どもたちの心を耕す第一歩となったようである。

【子どもたちの声】道徳の授業が好き！なぜなら…

友達と意見がちがったとき、なんでそう思うのかなと考えるのがおもしろい。

自分の意見だけでは１つの方向しかむけられないけど、他の人の意見を聞いてちがう方向性を見つけられるから。

わたしは、発言するのは苦手だけど、みんなの意見を聞くと、自分が考えていなかった考えが知れておもしろいし、がんばって意見を言った時に、ハンドサインを出してくれるとうれしいから。

道徳の授業がすきな理由は答えがなく、思った事をどんどん発言できるからです。

※アンケートより抜粋

また、研究に取り組む以前は、「道徳の授業の組み立て方がよくわからない。」と話す若手教員も多かったが、道徳の授業づくりのポイントを学校全体で共有したことで、道徳の授業の組み立て方が明確になり、授業の組み立て方が明確になり、日々の授業の質を向上させることができた。

その一方で、「対話を中心とした道徳の授業があまり好きになれないと言う児童がいる。」「発言が苦手な児童に自分の思いを言わせるのが難しい。」という意見もあった。子どもたちに対話活動の良さを感じさせるためには、互いを認め合う温かな学級・学校づくりも併せて行っていく必要がある。

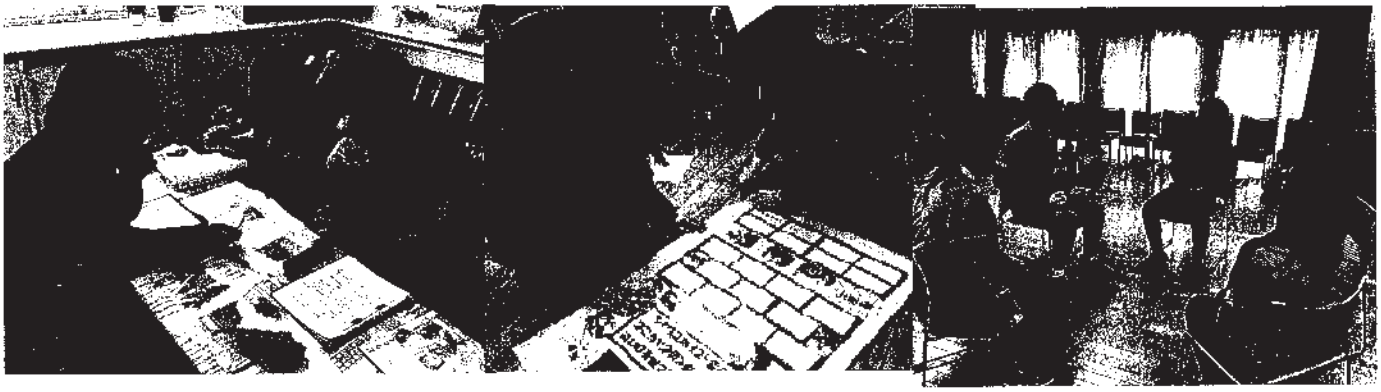
７　終わりに

本校では、研究を進めるにあたり、授業研究部、対話研究部、共有研究部という３つの部会を組織し、職員全員がいずれかの部会に所属して研究を進めてきた。それぞれの部会では、定期的に部会を開くだけでなく、部報を活用して情報共有をはかった。

また、各研究部会で検討したことを学年でも共有していくことで、教師一人一人が前向きに研究に取り組むことができた。これからも「語り合い、深め合う道徳の授業」を継続して行うことで、さらなる分析を進めていきたい。

本研究は、まだ実証の途中であり、子どもの実態が大きく変わるところまでは至っていない。しかし、木が枝葉を伸ばし、根を深くはるように、大きく成長するためにはそれを支える土台が必要である。

今後は対話活動を行うために必要な土壌として、互いを認め、尊重し合う学級集団づくりにも尽力していきたい。



目次へ

研究主題	自ら学び、学びを生かそうとする子の育成		
副　題	～単元を貫く目的意識から生まれる課題解決の実践を通して～		
学校名	刈谷市立小垣江小学校	校長氏名	牛山　晴登

1　はじめに

本校では、学級経営を基盤にした授業づくりに取り組んできた。学ぶ子どもたちのよさを更に伸ばしたいという思いから「単元を貫く目的意識」の見直しを行った。目的意識を追究する過程で、立ち止まって自分たちの取組を振り返り、よりよい方法を考える場面を設定すれば、子どもたちは学んだことを振り返り、課題を解決する方法を考えるだろう。このような学習活動を通して、子どもたちは学びの成就感を味わうことができるのではないかと考えた。

以上の理由から、本校では、研究主題「自ら学び、学びを生かそうとする子の育成」を設定し、研究を進めることにした。

2　めざす子ども像

「自ら学び、学びを生かそうとする子」

・目的意識をもち、課題解決に向けて考えようとする子

・学んだことを振り返り、課題解決の方法を考えようとする子

3　研究の仮説

他者意識のある学習活動を構想すれば、子どもは単元を貫く目的意識をもち追究していくだろう。また、追究過程において取組の改善を考える場面を設定すれば、子どもたちは学んだことを振り返り、課題解決の方法を考えようとするだろう。

4　研究の手だて

＜手だて１＞　他者意識を含む、単元を貫く目的意識のある学習活動を構想する。

＜手だて２＞　目的意識を追究する過程で、学びを振り返ったり新たな視点を得たりしなければ乗り越えられないような課題（【かべ】）を設定する。

5　実践紹介

（1）他者意識を含む、単元を貫く目的意識のある学習活動の構想

２年生活科「わたしの町はっけん」では「１年生がおがきえの町をもっとすきになるために、町のすてきを見つけてつたえたい！」という目的意識をもち、町探検で見聞きしたことについてまとめ、１年生に発表した。活動を終えて、子どもは「１年生のために小垣江の町を調べて、１年生が喜んでくれてうれしかったし、自分も小垣江のことが分かったのでよかった」という思いをもつことができた。

３年理科「電気の通り道」の授業では、出会う段階で、校務主任から「クリスマスツリーを飾りたいが数がないので、助けてほしい」と、依頼文が届いた。「先生を助けてあげたいし、みんなにも喜んでもらいたい」などと話す子どもたちの姿が見られ、「クリスマスツリーを作ってみんなを喜ばせたい」という目的意識をもてた。

（2）【かべ】の設定

１年生活科「かぜとなかよし」では、車を何度か作り直したが、より遠くまでいけない子がいた。また、振り返りにも「作り直したけど遠くに行かない」と書いている子が何人かいた。そこで「風を受けてより遠くに走るおもちゃにするためにはどうしたらいいのかな」という【かべ】を設定し

た。よく走るおもちゃとよく走らないおもちゃを比べて、風の受け方について振り返る活動を通して、子どもは風をより効果的に受けるには帆の大きさに着目することが必要だという視点に気付くことができた。



（写真①：原因を探る子どもたち）

3年理科「電気の通り道」の深める段階では、まず豆電球に明かりを点ける仕組みを学んだ。いざ、クリスマスツリーに飾りを付けていくと、点灯しないツリーがいくつか出てきた。回路が一つの輪になっているはずなのに、明かりが点かない事象から「回路になっているのに豆電球が点灯しないのはどうしてだろう」という【かべ】が現れた。子どもたちは、導線のつなぎ方を振り返る活動を通して「電気を通す物と通さない物がある」という新たな視点に気付き、目的意識を達成するための見通しをもつことができた。その後、原因となった箇所を修正し再度クリスマスツリーのスイッチを付けると、見事に豆電球が点灯し、子どもたちは「点いた」と喜びの声を上げた。（写真①）広げる段階で、子どもたちは、ミニクリスマスツリーを製作して、全校に配付した。学校中のみんなを喜ばせることができ、さらに依頼主の校務主任や全校の子からお礼の手紙をもらい、子どもたちは喜んでいた。



（写真②：考察を確かめるこどもたち）

4年理科「ものの温度と体積」では、子どもたちの振り返りを基に「何度やっても大きいシャボン玉をつくる条件ってなんだろう」という【かべ】が現れた。その後、グループで既習事項を振り返り、話し合った。自分たちで考えて実験方法を試しながら、しゃぼん玉の膨らむ大きさを確かめた（写真②）。その後、各グループの実験結果を全体で共有し、一度空気を冷やすことで、より温度差が生じることに気づくことができた。【かべ】を乗り越えようと子どもたちは、話し合い、確かめることで「温度差を作ることで、体積の変化が大きくなり、何度でも大きいシャボン玉が作れそう」という新たな視点に気付くことができた。

6　おわりに

他者意識のある学習活動を構想すると、子どもたちは単元を貫く目的意識をもち、課題解決に向けて考えようとすることができた。さらに学習活動に対する成就感を得たり、学んだことを日常生活に生かそうとする意欲をもったりすることもできた。他者意識を含む、単元を貫く目的意識の設定は、子どもたちの学習の強い動機付けと、学習活動の成就感を得やすくするために有効な手だてであるということが分かった。一方で、この目的意識をより効果的に設定するためには、日常から子どもの観察を進めたり、会話をしたりすることによって、子どもの気持ちを「掘り起こす」手だてが必要であることが分かった。また、【かべ】を設定し、課題解決していく過程で立ち止まって再思考することで、その単元において核心となる視点に気付き、その教科の本質に迫ることができた。【かべ】の設定は、子どもが課題解決のために新たな視点を見つけ、教科の本質に迫りやすくするために有効な手だてであるということが分かった。一方で、この【かべ】を設定するためには、教師が教科の本質を理解し、子どもの思考や理解の程度を予想する必要があるため、教師の力量が強く問われる手だてであることが分かった。

目次へ

研究主題	自ら学びを追究する子どもの育成		
副　　題	～ふり返りで学びを見つめ直す活動を通して～		
学 校 名	刈谷市立　朝日小学校	校 長 氏 名	金　子　一　郎

１　主題設定の理由

本校では一昨年度より、研究主題を「自ら学びを追究する子どもの育成　～ふり返りで学びを見つめ直す活動を通して～」として研究を進めてきた。継続した研究の成果として、子どもたちが観点に沿ってふり返る力や自分自身の変化についてふり返る力を伸ばすことができた。今年度は、子どもたちが伸ばしたふり返る力を生かし、一人一人の気付きや考えを利用して授業を構成し学びのつながりを意識したり、既習事項と関連させて考えたりすることで、自ら学びを追究する子どもたちの姿をさらに引き出したいと考えた。そのため、今年度も引き続き研究主題を「自ら学びを追究する子どもの育成　～ふり返りで学びを見つめ直す活動を通して～」とし、ふり返りを活用し、子どもたちが自分の考えをもって学習に臨み、子どもたち同士の関わり合いを他者の考えと自分の考えを比較しながら自らの考えを見つめなおし、さらに学びを追究する活動にできるようにするため、研究を進めることとした。

２　目指す子ども像

学びをふり返ることで、自ら追究する子ども

ふり返りを次の学びへとつなげることで、「知りたい」「なぜだろう」「友達の考えを聞きたい」という思いを強くもち、自ら進んで学習に取り組み、単元の途中や終末でのふり返りの中から、自分の考えの変化を自覚する、学習内容のつながりに気付く、理解の深まりを感じる新たな疑問を見つけることで、より深く学ぼうとする子ども。

３　研究の仮説

○　単元構成を工夫し、学習のふり返りを効果的に生かしながら学習することで、意欲が持続し、自ら進んで学習したいという思いを高めることができるだろう。

○　ふり返りの視点や書き方を工夫し、自らの変容や学習・生活とのつながりを意識したふり返りを行うことで、学習内容への理解が深まるとともに、さらに追究したいという思いをもつことができるだろう。

４　ふり返りについて

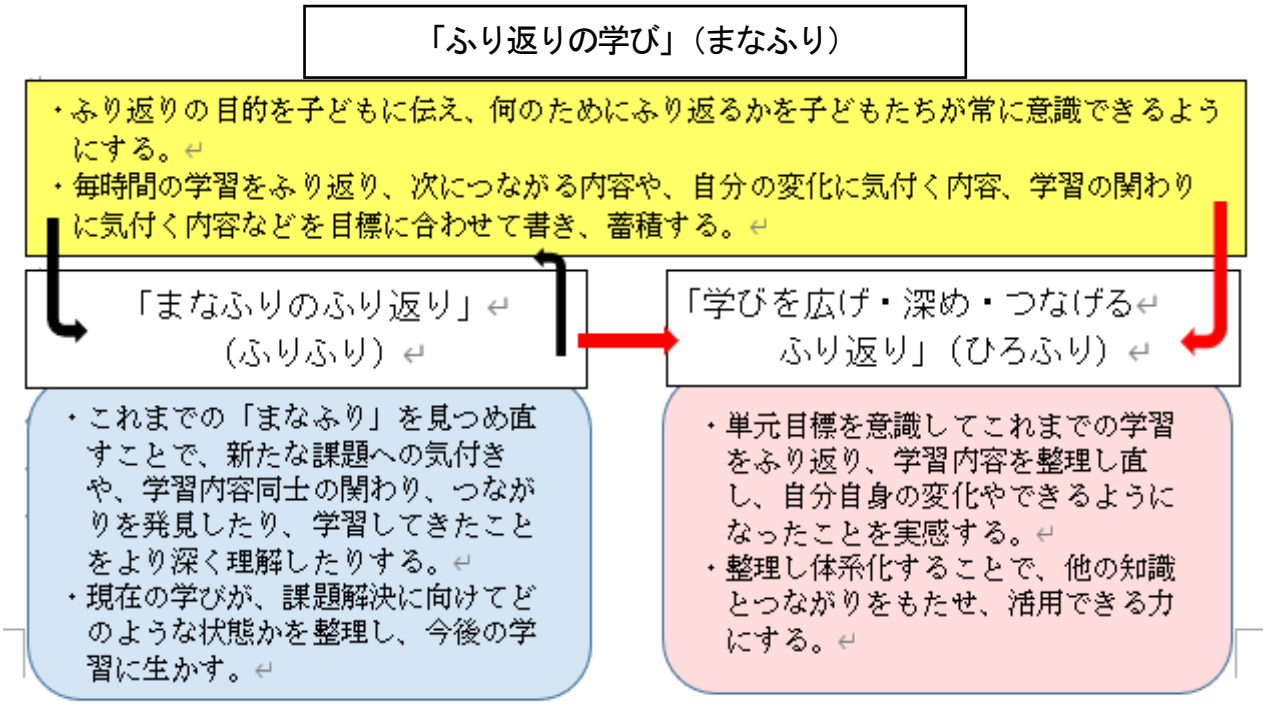
（１）　本校のふり返りの捉え方

本校の考える「ふり返り」とは、その時間に学習したことを使って、これまでに学習したことや生活経験を活用したり、自分の考えの変化に着目したりしながら思考する活動全般を示す。

したがって、本時をふり返って、次時の課題について考えたり、本時をふり返って全体を貫く課題に対して考えたりすることも含む。また、これまでの学習から、新たに見つかった課題について考えたり、学習内容をまとめたりするような活動も「ふり返り」と捉える。従来の、本時に何をしたか、何が分かったか、考えが変わったところはどこかといった内容に加え、学習したことを使って考えた内容も含める。

（２）　ふり返りの概要

各時間のふり返りを「ふり返りの学び（まなふり）」として位置付け、学びの足跡を蓄積する。単元途中には単元目標に対する学びの状況を整理し、学びのステップアップを図るふり返りとして、「まなふりのふり返り（ふりふり）」の時間を設定する。単元終末には学びを広げ、深め、つなげることを図るふり返りとして、「広げるふり返り（ひろふり）」の時間を設定して単元構成をする。



5　研究の手だて

（1）　単元構成の工夫

教材や題材との出合わせ方の工夫や、学びのつながりや広がりを意識できるような単元構成の工夫により、追究する意欲を高めたり、持続したりできるようにする。

（2）　「まなふり」を活用することで、意欲を持続させ、自らの学びと向き合う

次につながる内容や、自分の変化に気付く内容、学習の関わりに気付く内容などが書けるように、ねらいに合わせた視点を明確に示し、次時の導入や展開に活用することで「やりたい」という思いをもって次の学習に臨むことができるようにする。

また、「ふり返りシート」を工夫し、学習の足跡を蓄積しておくことで、これまで学んだことや、自分自身の変化を、いつでも確認できるようにし、学習内容の理解を深める。

（3）　「ふりふり」を活用することで、学びを整理し、見通しをもつ

単元の途中に、これまでの「まなふり」をふり返る時間を設定することで、自分自身や学級全体の学びの状態を整理し、今後の学習の見通しをもったり、課題解決の方法を見つけたりする。また、学びのつながりや関わりに気付いたり、より深く理解したりすることで、もっと知りたい、もっとやりたいという思いを高める。

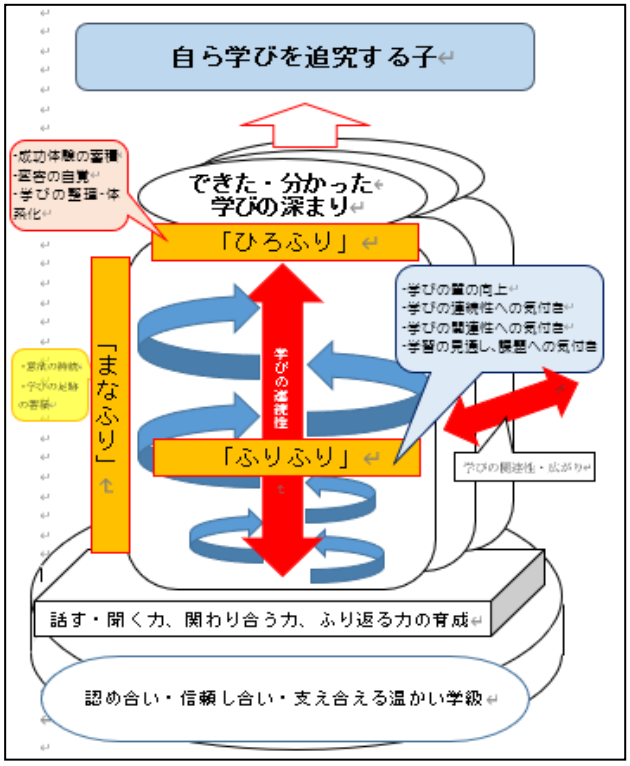
（4）　「ひろふり」を活用し、達成感や肯定感を実感したり、学習内容を体系化したりする

学習全体をふり返って、自分自身の変容に気付くことで、達成感や自己肯定感を実感することができる。さらに、学習内容を整理し、体系化することで、他の場面でどのように生かされているのかに目を向け、もっと知りたいという思いをもったり、生かせる知識、技能として身に付けたりすることができる。

（5）　ふり返りの視点を掲示し、常に意識できるようにする

「ふり返リスト」を掲示し、教師が書く内容を伝える際に活用することで、視点を明確にするための助けとする。また、子どもたちがリストを見ることで、さまざまな視点のふり返りを常に意識することができるようにする。

６　研究構想図（右図参照）



７　研究実践

見えないものが見えてくる、立場を変えて見てみよう

～６年社会科「世界に歩み出した日本」～

（１）　単元観

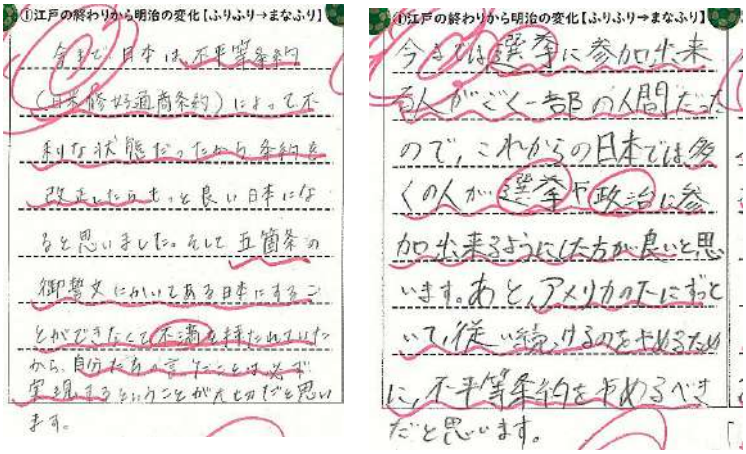
本単元では、不平等条約の改正と日清・日露の戦争を中心に、日本が戦争を繰り返してきた時代が、どのように進んでいったのかを学んでいく。単元のはじめには、【ふりふり】で幕末から明治の学習をふり返り、政治、軍事、国どうしの関わりなどの面から、世界と関わりをもつことで複雑化する社会を捉える視点を整理する。子どもたちは、不平等な条約を改正したいという思いはあるものの、戦争に勝利することで、国際社会における存在感を強めることに関しては否定的な意見をもつことが予想される。【ふりふり】での学びを生かし、現代の私たちの「戦争は繰り返してはならない」という漠然とした感覚だけでなく、当時の人々の考え方を想像できるようにしたい。そして、【まなふり】として日本の経済、軍事力などの視点に加え、さまざまな立場の人々の思いを予想しながら書くことで、当時の様子について実感をもって感じられるようにしたい。終末には【ひろふり】として、第１次世界大戦に参戦するかどうかを、これまでの学習をふり返って話し合う。人々の思いを予想して【まなふり】を行ってきたことを生かし、戦争を繰り返さないという思いを大切にしつつも、当時の情勢や人々の思いに着目しながら、参戦する・しない理由を多面的、多角的に考える力を高められるようにしたい。

（２）　単元計画　（８時間）

第１時　江戸の終わりから明治の変化をふり返ろう【ふりふり】

・幕府を倒そうとした当時の様子をふり返る。
・明治時代になって変わったことをふり返る。
→幕末から明治を中心に【ふりふり】を行い、政治、軍事、国どうしの関わりなどの面から、これからの学習の視点を養う。


江戸から明治の変化の話し合い



日本の発展に必要なことを考えたふり返り

（ま）日本の発展のために大切だと思ったことを書こう。

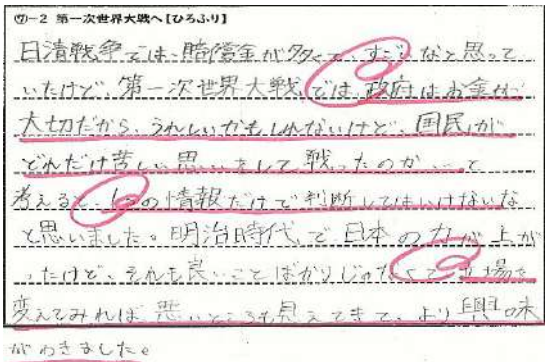
第２時　不平等条約について考えよう

・発展のために大切だと思ったことを発表する。
・ノルマントン号事件の風刺画を見て、気付いたことを交流する。
・不平等な二つの条項について確認する。

・条約改正の取り組みについて考える。
（ま）不平等条約でどのように困っていたか、当時の人の思いをふり返ろう。
第３時　発展していく日本の様子について考えよう
・工業の発展と貿易品目の推移のグラフを基に、どのような産業が発展したか考える。
・領事裁判権をなくす交渉に成功したことを知り、成功した理由を考える。
（ま）欧米諸国の立場から、経済が発展した日本についてふり返ろう。
第４時　この頃活躍した人たちについて調べよう
・この時代に活躍した人々について調べる。
（ま）国際社会で活躍を始めた日本人になったつもりで、自分の功績を紹介しよう。
第５時　日清戦争について調べよう
・日本周辺の地図を基に、朝鮮半島の重要性を話し合う。
→朝鮮半島が日本（太平洋側）から大陸へ、大陸から日本（太平洋側）への要所であることを地図から読み取れるように、満州鉄道やシベリア鉄道などが記載された地図を用意する。
・日清戦争の戦費、戦死者数、日本が得たものを調べてまとめる。
（ま）日清戦争について、日本政府の立場からふり返ろう。
第６時　日露戦争について調べよう
・三国干渉について知り、日本がロシアなどの国に対してどのような思いをもったか予想する。
・日露戦争の戦費、戦死者数、日本が得たものを調べてまとめる。
（ま）欧米諸国の立場から軍事力が高まってきた日本についてふり返ろう。


第一次世界大戦に参戦するか
話し合う子どもたち

第７時　世界に進出する日本の変化について考えよう
・二つの戦争を経て、日本が世界の中で存在感を増してきたことをふり返る。
・関税自主権が回復したことを知り、当時の人々の気持ちを想像して発表する。
・日本による韓国の植民地支配について調べる。
（ま）日本の周りの国々の立場になって、日清・日露の戦争後の日本について書こう。
→植民地となった国や地域について考えることで、日本が得ることで、何かを失った国や人もいることに気付けるようにする。
第８時　第一次世界大戦に参戦するか考えよう【ひろふり】
・これまでの学習のふり返りを発表する。
・欧米諸国が参加した第一次世界大戦が起こったことを知り、日本は参戦すべきかどうか考える。
・大戦によって日本に起きた変化の資料を見て気付いたこと、感じたことを発表する。
（ひ）これまでの学習を通して新しく得た見方・考え方や、自分の考えの変化を書こう。
→学習の前後の自分について見つめ直し、これからの学習や生活に生かせるようにする。


⑦-2 第一次世界大戦へ【ひろふり】
日清戦争では、賠償金が多くて…すごいなと思っていたけど、第一次世界大戦では、政府はお金が大切だから、うれしいかもしれないけど、国民がどれだけ苦しい思いをして戦ったのか…って考えると、1つの情報だけで判断してはいけないなと思いました。明治時代で日本の力がよかったけど、よいことばかりじゃなくて立場を変えてみれば悪いところも見えてきて、より興味の未がわきました。
新しい見方・考え方や自分の考えの変化について書いたふり返り

８　成果と課題
・視点を与えてふり返りを書かせることで、子どもたちの学びの深まりや足りないところが分かり、次時の学習に生かした授業を構成することができた。また、子どもたちの「書く力」を高めることにもつながった。
・教科や単元によっては各種のふり返りを設定しづらいものがあった。また自分自身の変容に結び付きにくいものがあり、学んだことのまとめで終わってしまうものがあった。どう設定していくか今後の課題としていきたい。

目次へ

研究主題	楽しく体を動かすことで体力向上を図る児童の育成		
副　　題			
学 校 名	豊田市立根川小学校	校 長 氏 名	天野　亜弓

1　主題設定の理由

本校では、「一人ひとりを大切にし、笑顔あふれる学校」を目指して、心身ともに健やかで、人間性豊かな、たくましい根川っ子の育成に取り組んできた。普段の体育の授業や体育的行事などの運動する場面では、生き生きと体を動かす児童の姿を多く見ることができる。

しかし、児童の体力低下に拍車がかかった状態であり、本校の今年度の体力テストの結果を見ると、高学年の男女別の記録が昨年度より４項目から６項目下回った。昨年度の全世代の体力や運動能力を調べるスポーツ庁の調査結果が公表された結果では、３０代女子を中心に子ども時代にスポーツをしない、経験をしない人が増えている。社会全体でライフスタイルの変化により、運動やスポーツに対して苦手意識をもつ人が増えている。

そこで、児童が生涯にわたって、体を動かしたりスポーツに親しんだりすることで、体力向上や健康保持増進ができるようにするために、児童自身が主体的に体を動かす機会を設け、楽しむような取組を行っていくことが必要と考え、研究主題を設定した。

2　研究の概要

（1）体力アップシートを活用し、授業や特別活動、休み時間を使って体力向上を図る。

・児童が自分の前年度の体力テストの結果から自分の長所や短所を知り、体力アップシートを基に改善を図ろうとする。

・授業でコーディネーショントレーニングを取り入れるなど、様々な運動の機会を設け、体力の向上を図る。

（2）授業や体育委員会を中心に、児童の自主性を生かした運動の機会を設ける。

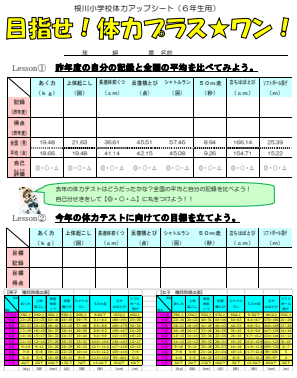
・球技スポーツを中心に、グループやチームで作戦を立て、作戦が実行できるような練習を計画実践することで、積極的に運動に取り組む。

・体育委員会を中心に、児童が企画運営した全校活動を実施する。

3　研究の実際

（1）体力向上に向けた取組

体づくり運動の単元において、全学年で体力テストに向けての体力アップシートを活用した取組を行った。体力アップシートには、昨年度の児童本人の記録が印刷してあり、自分自身で長所や短所を把握し、改善を図るための個人の目標をもたせた。授業では、個人の目標をもとにしてグループごとに１時間の目標や計画を設定し、めあてが達成できるような練習内容を体力アップシートから選び実践するよう促した。また、紙鉄砲を鳴らす活動や紐を通したバトンを投げることで投動作の向上を図るなど、楽しみながら動きを高める活動を紹介して取り組ませた。自分たちでトレーニングメニューを選択することで、自主的に、楽しく体力づくりに励む姿が見られた。また、運動が苦手な子も、自分の能力に合った練習内容を選ぶことができ、前向きに体力アップを目指す姿が見られた。さらに、体力テスト後には結果を記載して、今後の体育活動に目標をもたせるこ


根川小学校体力アップシート（６年生用）
目指せ！体力プラス☆ワン！
年　組　番　名前
Lesson① 昨年度の自分の記録と全国の平均を比べてみよう。
Lesson② 今年の体力テストに向けての目標を立てよう。
<体力アップシート>

とができた。

（2）自らの考えをチームに生かす活動　～ティーボールの実践を通して～

本校では、４～６年生がティーボールの学習を行い、学年に応じた取組を行った。

４年生では、単元の導入部分で、トヨタ自動車野球部の選手との交流を行った。選手からボールの投げ方やバットの打ち方を学び、簡単なゲームを行った。社会人野球のトップレベルのパワーや技術を間近に見た児童は、ティーボールの面白さを知り、意欲的に活動することができた。



＜ティーボールの様子＞

５，６年生は、簡単なゲームを行った後、グループごとに作戦を立てる機会を設けた。うまくボールを当てられないグループは、学習用タブレットで打つ姿を撮影し、どのようにバットを振ればよいか話し合い、スイングやミートポイントを意識した練習を行った。ボールが飛んでいった方向に守備がいてとられてしまうことを課題に挙げたグループは、守備隊形で空いているところを狙った練習を行い、ゲームではチーム全体で相手の陣形を見ながら打つように声をかけ合って取り組む姿が見られた。

野球型のゲームはルールが難しいため、打ったら１塁に走ることやノーバウンドで捕球したらアウトなど簡単なルールで行い、判定が難しい場合が出てきたら、その都度児童で相談をして判定をしたり、ゲームが終わった後にルールについて話し合いを行って次のゲームから適応したりした。児童が自分たちの活動に適したルールを考えて実施したことで、全員が判定に納得し、楽しく取り組むことができた。

（3）体育委員会を中心とした児童が主体的となる活動

体育委員会が、全校が楽しく運動を行うために、「根川っ子体操」と「根川体育祭」を計画、実施した。根川っ子体操は、ウォーミングアップが楽しく、リズムに乗って行うことができるように、児童が選曲し、運動に必要な動作や振り付けを考えて作成した。全校に周知するために、ビデオを作成して配付し、各学級で視聴するようにした。運動会の練習では、体育委員が各学年の教室へ赴き、練習を行った。





＜上：根川っ子体操、下：根川体育祭

根川体育祭は、委員会が運動会とは別に企画運営を行い、全校児童が楽しく体を動かす機会を設けた。体育委員が、種目の選定や必要な道具、事前の準備や依頼などを行い、短距離のリレーや玉入れなどを行った。当日は、全校が一生懸命走ったり、ダンスや玉入れを協力して行ったりして、体を動かすことの楽しさを味わうことができた。

４　研究の成果と課題

（1）成果

・児童自身が、自分の運動能力を知り、改善や向上を目指した目標を設定して、取り組むことにより、記録を伸ばすために必要な運動を選択して意欲的にトレーニングを行うことができた。

・児童一人一人の考えを生かしてチームの作戦や練習に取り入れたり、全校行事を行ったりすることで、主体的に体を動かす良さを味わい、自ら運動しようとする意欲を高めた。

（2）課題

・体力アップシートを、各単元でも生かせるように活用を検討していく。

・普段の授業でも、児童の考えを生かした取組を行い、運動能力や運動する意欲を高める。

目次へ

研究主題	見通しをもって学び、関わり合いを通して考えを深める児童の育成		
副　題	学び合い・関わり合いの実践を通して		
学校名	豊田市立伊保小学校	校長氏名	小松　ゆかり

本校は、研究主題を「見通しをもって学び、関わり合いを通して考えを深める児童の育成」と設定し、児童が協力し合うことを根本に、自ら学び、自ら考え、主体的に問題を解決する上で必要な力を身に付けていくことを目指してきた。今年度は、学び合い活動と仲間づくりの２つの柱で実践した。特に、ICT 機器を活用した個に応じた支援を充実させ、児童全員が主体的・協働的に学べる学校づくりに力を入れてきた。

1　学び合い活動

（1）「見通し」と「振り返り」を大切にした授業展開

児童が考えを深める学び合い活動を行うために、「見通し」と「振り返り」を大切にした授業を目指してきた。まず、児童自身が、今の学習が単元の中でどんな意味をもち、次にどうつながるかを意識できるように授業を計画した。次に、学習のめあてや単元のスケジュールを提示し、児童が見通しをもてるようにした。さらに、児童が「分かった」「できた」と実感し、自ら次の学びにつなげることができるように「振り返り」の時間を確保した。

児童が振り返りをする際には、「わたがし」というキーワードを示し、「わ」かったこと」、「た」のしかったこと」、「が」んばったこと」、「し」りたいこと」を中心に書く実践を進めた。児童が書いた振り返りをクラス全体で共有することができるように、教師が意図的に指名して発表したり、振り返りの言葉をプロジェクターに投影したりした。

（2）ICT 機器を活用した主体的・協働的な授業の実践

児童が目的をもって ICT 機器を活用し、個別最適な学びや協働的な学びを展開して学びを深められるように授業を行った。

①３年生算数科：「３桁の筆算」では、教科書に掲載されている２次元コードを学習用タブレットで読み取り、筆算の仕方を視聴した。授業での活動だけではなく、家庭でも自分で２次元コードを読み取り、筆算の問題を解いて答え合わせをする等、個別での学習を進める姿が見られた。

②４年生社会科：「わたしたちのくらす町」では、興味のある市や町の特色を調べ、「発表ノート」にまとめた。インターネットで市や町の特色を調べ、自分が必要な情報を取捨選択し、級友に分かりやすく伝えられるようにまとめる活動を行った。

③５年生図画工作科：「形に命をふきこんで」では、コマ撮りアニメーションの仕組みを使って物語を作成した。形や色、材料を生かして面白い動きを考え、「コマコマ」アプリを活用して撮影した。音楽やテロップは、



【図工の授業で作品を作る児童】

「クリップス」アプリを活用して入れた。グループで意見を出し合い、工夫を凝らして表現を楽しんだ。

④特別支援学級：児童の実態に応じて楽しく学ぶことができるように、SkyMenu でワークシートを段階的に作成した。絵カードと文字を合わせたり、自分の名前を空欄に一文字ずつ入れたりする学習に取り組み、一歩一歩難しい課題にチャレンジした。また、「なぞっておぼえよう」「かずタッチ」等のアプリを活用して学ぶ時間を設定した。



【アプリを活用した学習を行う児童】

（3）学び合いの時間の確保

どの教科でも、ペアやグループで話し合う活動を授業の中に設定した。隣同士やグループの仲間同士で話し合いができるように、意図的にグループを編成し、全員が表現する場面を確保した。話し合いでは、考えたことや気付いたこと、調べたことなどを共有し、互いの考えの差異を知った。また、相手に説明することで理解を深めることができるようにした。活動の際には、学習用タブレットの「発表ノート」を活用し、互いの考えを見ながら話し合いを進めた。話し合い活動を行うことで、相手の考えを受け止め、自分の考えをより深めることができるようになった。

2　仲間づくり活動

（1）フレンド遊びの実施

1年生から6年生までが所属するフレンド班を編制して縦割り活動を行ってきた。1年を通してフレンド遊びの活動を5回実施した。それぞれの班の中で、6年生が遊びを企画し、遊びの道具や方法、ルールを工夫して、1年生から6年生までの児童が一緒になってゲームを楽しんだ。特別支援学級の児童にも分かりやすく説明し、楽しく、安全に活動できるように配慮する姿が見られた。



【フレンド遊びで仲間と交流する児童】

（2）仲間づくりのための手立てを学ぶ

自分の学級に生かせるように学級力向上プロジェクト（Research―Plan―Do―Check―Action を1年間繰り返す学級づくり）を軸とした取組を継続している。手立ての一つとして「レーダーチャートを用いた振り返りと話し合い」を学級活動の中に位置づけた。児童自身が自分の学級を振り返り、自分たちの学級の改善点を話し合った。自分たちで決めた目標に向かって声をかけ合い、協力して取り組むことで、主体的に行動する力が付いてきた。

以上のように、ICT 機器を効果的に活用し、授業において見通しをもって学び、関わり合う活動に重点をおき、実践を進めた。また、仲間づくり活動を通して、児童が主体的に考え、協力して学ぶ場を設定することで、考えを深め、豊かな心を育成することができた。今後も、職員自身が積極的に学び、児童の成長を支える支援を継続していきたい。

目次へ

研究主題	「意欲的に追求し表現する子」を目指して		
副　　題			
学 校 名	豊田市立加納小学校	校 長 氏 名	野村　幸弘

１　はじめに

本校は昨年１５０周年を迎えた伝統校である。現職教育の重点目標として、「意欲的に追求し表現する子」を掲げて取り組んでいる。本校の目指す「意欲的に追求し表現する」とは、地域の人・もの・ことを学ぶ機会を生かしながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向け、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えをもとに創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ることである。ここで、本校の取組をいくつか紹介していく。



【資料１】１５０周年の様子

２　学習の土台となる授業の約束事「加納小スタイル」

言語環境の整備と言語活動の充実として、現職教育では、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、児童生徒の言語環境の充実を図り、併せて読書活動の充実を図っている。そして、児童が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動や、教科等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるように工夫をしている。

基本的な学習規律を整えるため、「加納小スタイル」を作成し、授業づくりを進めている。学年や担任が変わっても、基本的なことが統一されていることによる子どもたちの安心感や、若手教員にとっては授業マニュアルとなるよう活用していった。


【資料２】TT による授業支援

３　ICT 機器を活用した主体的・協働的な授業の創造

GIGA スクール構想により児童一人一人に学習用タブレットが整備され、学習用タブレットを活用した授業改善とともに、一人一人の能力や適性に応じた学習や、協働的に考えをまとめたり、表現したりする学習が求められる中、まずは、教員の授業における活用指導力や、校務における情報活用能力を高めることが必須となっている。

ICT 支援員の派遣も依頼し、研修・授業支援を受けた。１年生の Scratch を使ってのプログラミング授業にはじまり、高学年は、Teams でのファイル共有、複数児童での共同作業の授業に取り組んできた。

夏季休業中に、実施された ICT 活用推進研修では、初級・中級・上級のすべての研修に参加し、研修後は校内 OJT を実施し、教職員全体で、ICT スキルの向上に努めている。

今後は、協働的な学びを意識した授業を行い、OneNote、Class NoteBook を使って共同作業に取り組むことを予定している。


【資料３】日頃の授業の様子

４　学習発表会での学びを表現する場の設定



【資料４】学習発表会の様子

生活科や総合的な学習の学びで培ったことを授業参観で紹介したり、学習発表会で他学年や保護者に伝えたりする場を設けた。わかりやすく伝えるために、powerPoint を利用するなど、ICT 機器の活用にも力を入れた。保護者に褒められたり、下学年が喜んでくれたりした経験により達成感を感じ、自分に自信がもてた児童もいる。こうした全校での取組を通して、思考・判断・表現についても力をつけていきたい。

５　「地域ぐるみの教育」の充実



【資料５】地域ボランティア

平成３１年２月にも地域学校共働本部が立ち上がり、令和５年度からはコミュニティ・スクールと名称変更となった。

本校には、以前から「地域交流室」があり、地域ボランティアの活動も活発である。４人の地域コーディネーターの方が、学校と地域をつなぐ役割を担いさまざまな団体や個人とのつながりを築いているため、各方面での地域ボランティアが学校への協力を惜しまず活動している。

地域ボランティアは、「環境整備」「図書館整備」「読み語りグループ（さとの声）」「見守り隊」「伝承芸能（棒の手・ざんざ節）」「地域講師（生活科・総合的な学習の時間）」などに携わってくださっている。「環境整備」としての活動は、野菜の畑の整備がメインである。全学年の作物が見事に育つ畑が整備され、下学年児童も高学年の作物について質問する場面が見られる。苗の植え方や収穫の仕方なども教えていただき、野菜作り名人として子どもたちと関わってくださっている。

「見守り隊」の方は、学区が広く、１時間ほど歩かなくてはいけない児童もいるため、登下校の付き添いをしてくださっている。本当に心強い存在である。そのほか、５、６年生の家庭科の時間に「ミシンボランティア」、２年生の生活科の時間に「川の生き物調べ」の付き添いなど、得意分野を生かして個々に教えてくださる姿が見られた。また、１１月には、「伝承芸能の棒の手・ざんざ節」も、地域講師の方に教えて頂いて、運動会で披露した。

活動に携わってくださる方は、活動後に「子どもから元気をもらっているよ」と笑顔で話してくださって、地域ぐるみで学校教育が実践できていることを実感している。

６　結びに

本校のある加納地区は、地域素材に恵まれており、生活科、総合的な学習の時間に地域の人・もの・ことを活用した活動が展開できている。



【資料６】桃の剪定の様子

学校に植樹されている桃の木を、地域の桃農家の方にご指導いただきながら、児童とともに育て収穫し、桃についての課題追究学習を進めている。講師の方には、自分の桃園の作業の傍ら、学校の桃の消毒や枝打ち、摘果や収穫の指導にも協力していただいている。

これからも、地域の人・もの・ことを学ぶ機会に恵まれている本校の良さを十分に生かし、意欲的に追求し表現する子を目指し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善いきたい。

目次へ

研究主題	自己有用感を高め、互いに学び合う児童の育成		
副　題	～相手を意識した話し合い活動を取り入れた授業づくり～		
学校名	豊田市立朝日小学校	校長氏名	柴田　みどり

1　テーマに迫る取組

（1）相手を意識して聞く



①話す人を見て聞くなど、聞き方の「あいうえお」を意識して話を聞くことができるように掲示物を作成し、児童が授業の中で意識できるような声掛けを随時行った。掲示物や教師の声掛けにより、初めのころは体の向きを変えずに聞いていたり、うなずいたりできなかったが、話す人の方に体の向きを変えたり、うなずいたり、「なるほど」など反応をしたりする児童が多く見られるようになった。

②相手の話を自分から聞けるようになってきたたことで、相手と自分の意見の同じところ、違うところ、疑問に思ったことなど、自分の考えと比べて聞くことができるようになってきた。また、その比べたことから、さらに自分の考えを伝えたいという思いをもつ児童も出てきた。そのような意見を聞き合い伝える場面で、自分の意見を付箋等で書いて話し合う際には、付箋を貼った後に自由に動かすことができ、書き込むことのできる「まなボード」は大変効果的であったと考えられる。

（2）相手を意識して話す



①聞くことと同じように話し方の「かきくけこ」を意識できるように掲示物を作成したり、教師が声掛けをしたりしてきた。初めのころは話したい相手が教師だけで、前を向いて話している児童が多く見られた。しかし、掲示物や教師の声掛けを継続することと、聞いてくれる仲間の姿の変化からみんなに話したいという気持ちをもつようになってきた児童が見られるようになってきた。話す人の態度が良い方向に変化したことで、聞く側もさらに良い方向に変化してきたと考える。

②自分の意見をあらかじめ付箋にメモをして話すことで、自分の意見をまとめたり、落ち着いて話したりする自信をもっている様子が見られた。

（3）話し合い活動



①帯学習の時間に、少人数の話し合いを繰り返し行うことで、話し合いに対する児童の意欲や関心が高まったと感じる。まずはペアで、その次は3，4人のグループで、様々なテーマで話し合いを行った。その際に、「まなボード」を活用してきた。「まなボード」に出てきた意見を分類する際に短い時間で動かしやすく、さらにそこにみんなの意見をまとめて書きやすく、便利だったため、話し合いが活発に行われた。

②大人数での話し合いの際も、何人もの意見をまとめる際に、まなボードを中心に活動することで、スムーズに話し合いをまとめることができた。また、意見をたくさんの人数の前で発言することが苦手な児童も、まなボードに付箋で意見を貼ることで、以前よりも意欲的に参加できた。そのことが自信につながり、次の時間には発言してみようという気持ちをもつことがでた。

2　研究の実際

（1）　基盤となる授業づくり

昨年まで現職教育で振り返りを中心に実践を積んできた。しかし、話し合いが十分できないという反省をもとに、今年度は上記のテーマで実践することにした。全校で「聞き方のあいうえお」「話し方のかきくけこ」を基本として、一人一授業実践を行った。一単元を学年で研究し、代表授業者と先行授業者に分けた。一緒に授業を考える中で若手が経験のある教員から学んだり、逆に若手から学んだりする機会となった。ペアやグループ及び学級での話し合いを学習過程に入れた。学年の発達段階に応じた話型、司会などの設定も検討した。

（2）代表授業の参観および研究協議会の開催について



教科領域等指導訪問（家庭科）では、６年生の教材「夏をすずしくさわやかに」では、SDG’ｓも踏まえて、エアコンだけでなく、涼しく過ごせる方法を調べ、検証した。インターネットを使って調べ、自分たちで実方法を考え、細かいデータを取った。その後、実験結果について発表ノートを使ってまとめた。グラフや写真を取り入れ効果的に伝わるように工夫し、聞く相手に分かりやすくプレゼンテーションを行うことができた。聞く側にとって分かりやすかったという振り返りも見られた。友達の意見を聞き、自分の意見と比べたり、取り入れたりすることで、さらに考えを深めることができた。



１年生国語科「ことばあそびうた」では、自分で集めたり見つけたりしたことば（オノマトペ）を使って文をつくり、その文をグループでつなげ「たべものうた」を完成させた。その際に発表ノートを活用すると、１年生でも簡単に入力できた。また、グループで文の順序を変えたり比較したりして、学級のみんなに発表する際に、大きく提示できることなどの効果的な面が多かった。しかし、学習用タブレットの操作の説明に時間がかかることが課題である。そのため、低学年でも学習用タブレットの操作に慣れるために、常に学習用タブレットを使う時間を計画的に実践してきた。

（3）学力・授業力向上に向けた取組



「聞く力・伝える力」の基盤となる学級経営を安定させることを目的に、教員のhyper-QUの理解を深め、hyper-QUの結果を有効に活用するための活動に取り組んでいる。研修を８月に行い、自分の学級の表の読み方、分析を行った。分析結果に驚きの声や感嘆の声が上がった。自分の学級の強み、弱みを知り、夏休み明けの学級経営に役立てた。学級経営が安定することで相手を意識して話すこと、相手を意識して聞くことができるようになってきた学級も見られた。

3　成果と課題

以上のような取組を行うことにより、子どもたちが自分の思いを話し、友達の考えを聞くということで互いに認め合う気持ちが高まってきた。分からないときに教え合ったり、いろいろな考えに出会うことで、考えを深めたりすること、安心して学習し、学び合うことの楽しさを感じることがことができている。今後は話し合いの内容をより深められ、主体的に学びにつながるような、課題の提示や内容を工夫していきたい。

目次へ

研究主題	地域に学び、かかわり、発信する子どもの育成		
副　　題	～「みんな大好き!足助の町」の実践を通して		
学 校 名	豊田市立足助小学校	校 長 氏 名	成瀬　美香

1 主題設定の理由

豊田市足助町は三河山間部にあり、自然が豊かであると同時に、歴史と伝統のあふれる地域である。そうした地域の中心部にある本校の児童たちが、自分たちの住む地域の自然や人、もの、歴史や文化に触れ、地域のよさを感じることで、足助地区に根ざした伝統や文化、自然などを守り育てていく人材に育ってほしいと願い、本研究を実践した。

2 研究の内容

(1)目指す児童の姿　地域の「ひと・もの・こと」と深く関わることで、地域に対する愛着と誇りをもち、その思いを他者に主体的に伝えようとする児童

(2)研究の計画　児童の発達段階に応じて、幅広く地域の人や自然、伝統文化に触れる活動を計画した。

学　年	活　動　内　容
1　年	・重要伝統的建造物群保存地区学習（足助のまち、スタンプラリー） ・地域の自然を知ろう(足助地区・御内・椿立地区)
2　年	・重要伝統的建造物群保存地区学習（足助のまち、スタンプラリー） ・地域の宝物を見つけよう(足助地区・御内地区　ゴンゾレ・トレイル)
3　年	・高齢者介護施設「月人」訪問（高齢者との交流活動）
4　年	・重要伝統的建造物群保存地区学習（昔の道具と建物　火災編） ・防災マップ作り(地域防災会議と連携)
5　年	・川の調査（御内川・足助川・水源公園） ・香嵐渓クリーン活動（地域ボランティア活動） ・もみじ植樹（足助観光協会との連携）
6　年	・重要伝統的建造物群保存地区学習（足助の歴史～町並み重伝建編～） ・社会科と総合的な学習の時間の教科横断的学習「そのとき　足助は」

3 研究の実際と考察

(1)地域の自然や人とかかわる　「あすけの　おたから　はっけん！」（2年生活科）

足助小学校は１９８６年に隣接の１校が統合され、１９９４年にさらに２校が統合されている学校である。統合された地域の子どもたちはスクールバスを利用して通学している。

２年生は、生活科「あすけの　おたから　はっけん!」の単元で、足助地区のよいところを発見しようと、地域探検に出かけることにした。例年、地域探検は徒歩で行くことができる範囲に限られていたが、今年度は、地域からの要望もあり、バスを利用して、統合された学校の跡地を訪れ、校内やその周辺の自然を地域の方に紹介してもらう活動に取り組んだ。そして、自然をそのまま楽しむ「ゴンゾレ・トレイル」の活動をしている方の話を聞いたり、森の自然に思い切り浸った



【ゴンゾレ･トレイル　自然の木で遊ぼう】

りするなどの貴重な体験をすることができた。また、「あすけの　おたから」として見つけたことを、グループに分かれて、地図、紙芝居、クイズなどにまとめ、授業公開日で保護者に発表するとともに、１年生や６年生を招いて、校内発表会も行った。

視野を広げて、地域の人や自然と関わり合うことで、地域のさらなるよさに気付き、それを多くの人に知らせたいと考えて、主体的に発信活動に取り組むことができたと考える。

(2)地域のことや人とかかわる

「あすっこ防災探検隊～足助の町の防災マップを作ろう～」

（4年総合的な学習の時間）



【防災町歩き　防災士さん･防災会議の方と】

足助の町並みは重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。毎年４年生は専門講師や豊田市文化財課に協力していただいて、その町並みを生かした学習プログラム「昔の道具と建物の工夫　火災編」を実施し、社会科の学習と関連付けた防災マップ作りに取り組んでいる。

今年度は、足助の地域防災会議と連携し、防災士さんや防災会議に参加している地域の方と一緒に町歩きをして、様々な防災のポイントを学んだ。その後、自分たちが学んだ防災のことを広めたいと考え、学習したことを防災マップにまとめたり、地区にポスターを貼ったり、チラシを配ったりする活動に取り組んだ。地域の方と一緒に活動して思いを共有したことで、地域のためにという思いをもって、意欲的に情報を発信する活動に取り組むことができたと考える。

(3)地域の歴史やひととかかわる「そのとき　足助は」(6年社会科･･･関連　総合的な学習の時間)

足助は室町時代に山城が建てられ、江戸時代には物流の起点となった町である。重要伝統的建造物群保存地区学習で足助の歴史を学んだ６年生に､｢歴史｣をより主体的に学んでほしいと考え、総合的な学習の時間と社会科を教科横断的に扱い、単元を貫く課題を「そのとき　足助は」として、足助の歴史と日本の歴史と関連付けながら、学習を進めることとした。



【足助城見学　戦国時代の足助は】

戦国時代の学習では再建された足助城を実際に見学し、子ども自身が課題を発見することができた。個々の課題を全体で共有し、名古屋城など他の城の役割と比較しながら、自分たちなりの考えを構築した後、再度足助城を訪問した。地域講師に説明を聞き、戦国時代に足助の町や足助城が果たした役割について、さらに考えを深めた。今後は、総合的な学習の時間のまとめとして、学習してきた足助の歴史を踏まえて足助の未来像を創造し、自分たちが取り組むべきことをまとめて、足助支所に提案する予定である。

地域の歴史事象を学習課題の中心に据えたことで、自分と歴史がより関連付けられ、その先の未来へと考えをつなげることができたと考える。この思いが、地域への愛着や誇りをもって、地域の未来のために積極的に関わろうとする心情に育っていくだろう。

５　研究の成果と課題

児童の発達段階に応じて、地域の「ひと・もの・こと」を積極的に学習に取り入れることで、子どもたちが地域に愛着をもつと同時に、地域のよさを伝えたい、広めたいと考え、実際に発信することができた。様々な活動の中心にいたのは「ひと」である。多くの人の思いを深く感じたからこそ、次の「ひと」につながる思いが子どもたちに芽生えたと感じている。地域素材が豊富にあるので、それらを教科学習と関連付けながら、より効果的に学習を進められるように教育課程を工夫することがこれからの課題となる。今後も、人との出会いを大切にしながら、地域の「ひと・もの・こと」を愛し、自ら関わっていくことができる子どもたちを育てていきたい。

目次へ

研究主題	へき地における国際教育		
副　　題	旭地区の魅力を世界へ発信		
学 校 名	豊田市立小渡小学校	校 長 氏 名	中島　弘嗣

1．　交流する他国の学校について

今年度は、パリオリンピックの年度だったので、フランスのテオフィル・ゴーティエ公立小学校と新しく交流することができた。この学校を知ったのは、YouTube の番組「ボンソワール TV」にこの学校が出ていて、校長先生が日本の学校と交流がしたいという話を番組上でしていたことがきっかけだった。これに３年前から交流している台湾の嘉義縣成功国民小学校も加え、郷土の学習と外国についての学習を行う計画を立て、「国際教育」として展開していくことにした。

2．　国際教育の展開

今年度本校の子どもたちに世界に旭地区の魅力を発信していくためには、①世界にはどんな国があってどのような人がいて、どのような特徴があるのか。②交流する国はどのような国で、交流する学校はどんな学校なのか。この二点についてまずは子どもたちに知ってもらう必要があると考え、３～６年生に世界の知っている国について簡単に地球の位置や国旗、そして特徴などを探究させ、まとめさせた。また、交流する国については、その学校のホームページを見たり、YouTube の番組を全校に見せたりして理解を深めた。その上で、日本や自分たちの学校や地域について、探究して発信してもらおうと考えた。



【フランスの学校から贈り物が届いた時】

世界の国々については、校内にコーナーを作り、それぞれの国について調べた内容を同じ形式にまとめて掲示した。また、パリオリンピック・パラリンピックが近づいてきたら、興味を持ってもらえるように、交流する学校から送られてきたオリンピックのマスコット「フリージュ」とともに、競技日程や日本人選手の参加する種目や選手の顔写真付きの名前などを同じコーナーに掲示した。また、学校として取り組んでいる漢字や計算コンテストで合格した児童にご褒美として配布するシールを世界の国旗シールにした。さらに、夏休み後に世界の国旗クイズや世界地理クイズなどを、折を見て行い、世界について知識を深める機会とした。



【国についての調べ学習とパリ五輪】

交流する学校については、９月に台湾の小学校とオンラインで交流した。フランスとは時差の関係でオンラインではつながることができなかったが、ボンソワール TV に学校に来ていただき、学校の様子や地域の様子を紹介することができた。それ以外は、主に国の文化を代表する文房具や品物を送り合ったり、メールを交換したりして交流した。台湾で地震が起きた際には、子ども

たちからのお見舞いメールも送ることができた。

3．　国際教育の成果と課題

今年度の国際教育では、①他国への興味関心を深め、積極的にかかわろうとする態度を育成する、②自分たちの暮らす地域について、体験、探究活動をして郷土愛を深める、③自分の意見を社会に向けて発信し、行動を起こす態度や能力を育成する、の３点を狙いとして実践してきた。成果を述べると、①については、世界について知識を深め、大陸の名前や海洋の名前を低学年児童でも言えるようになり、関心は深まった。②③については、自分たちの郷土について、特徴を知り、中学年はその発表を学習発表会で行うことができた。そして、高学年では地域の問題点である、少子高齢化、過疎化について、観光を通して活性化させようとアイディアを絞り、小渡観光半日コースプランの作成や地域の観光資源の新しい発見とそれを広める活動、具体的には学校周辺が県内でも有数のとんぼの群生地であることを専門家に教えていただき、それを観光資源であるとアピールするために、看板を制作してその地に立てることを行った。活動を通して、地域をよく知り、郷土愛も深まった。



【交流した台湾の児童たち】

課題としては、子どもたちが興味関心を深めた世界の国々について、せっかく世界つながったこの経験を、教職員の人数が少ないため、来年度継続、発展できるかという点である。



【台湾へ地震のお見舞いの手紙を送った時】

目次へ

研究主題	子どもが主役の授業づくり		
副　　題	聞き合い、話し合う活動を通して		
学 校 名	豊田市立浄水北小学校	校 長 氏 名	鈴木　康代

本校は、地域とともに子どもを育成する地域協働型学校としてスタートし、今年度で開校１１年目となる。当初から子どもたちの主体性を大切に育ててきた。教職員集団は、比較的若い教員集団である。これまで主体的・対話的で深い学びの実現を目指して、話し合い活動、聞き合う活動を意識した授業や、振り返りを大切にした授業に取り組んできた。現職教育での本主題の取組も３年目を迎える。今年度はこれまでの取組に加えて、子どもが主役になるための授業のスキルやポイントを学び、子どもとともに授業づくりを進めていきたいと考えて、本主題を設定した。

実践では「外部講師による研修」「ちょこっと現教」「一人一実践の授業公開」を軸に研究を進めた。外部講師から学んだこととちょこっと現教で得た新しい知識や技術を生かしながら、授業実践を積み上げ、その成果として一人一人が授業公開を行った。

１　外部講師を招聘した子どもが主役の授業づくりの研修

今年度の現職教育を始めるにあたって、もう一度子どもが主役の授業づくりについて今の自分たちの現状を見つめるために、外部講師をお招きして授業を見ていただき、ご指導いただいた。研修は５月と８月の合計２回行った。１回目の研修では授業を見ていただいた後、業後に子どもが主役の授業づくりについての講義と模擬授業をしていただいた。模擬授業の中で、子どもたちがどう反応するのか、子どもたちの意見をどのようにつないでいくのかなど、授業の基本となる大切なことを学び、授業づくりについての具体的なイメージをもつことができた。模擬授業後も、個別に参観していただいた授業についてご指導を受けたり、今後に向けてのアドバイスをいただいたりした。とても有意義な研修となった。



１回目の模擬授業の様子



２回目の模擬授業の様子

１回目の研修でご指導いただいたことを共有し、そこから教員自身が課題を設定し、２回目の研修までに日々の授業の中で実践を重ねてきた。２回目の研修では、１回目の研修をふまえて、特に机間指導に焦点を当てて、模擬授業を行っていただいた。どのように子どもの様子を看取り、声をかけていくのかを子ども役をしながら、体験的に学ぶことができた。

2　ちょこっと現教


「Kahoot！」の活用の研修

本校では、「ちょこっと現教」という名称で、毎週木曜日を基本として参加自由型の自主的な教員研修の場を設けている。今年度は、ちょこっと現教の担当者をおいて、昨年度よりも活発に活動できるようにした。担当者が新しいことや気になったこと、授業に役立つことなどを紹介したり、時には別の教員に講師を依頼して研修会を開いたりした。また自由参加ではあるが、これまでに多くの教員が参加をしており、業後の短い時間の中でも有意義な研修となっている。ICT 環境の変化に伴い、教育方法や学習スタイルも給食に進化している。豊田市で、児童生徒一人一人に貸与している学習用タブレット（iPad）を生かして取り組める ICT 教材を選んで、実技研修を行った。

3　一人一実践の公開授業


５年部での一人一実践の様子

本校では、校内現職教育の一つとして一人一実践として、授業公開を行っている。昨年度に引き続き、板書計画シート（本校独自の様式）を作成し、授業者が本時の中で特に意識するポイントを明確にすることで、授業を参観する側も視点をもって臨むことができるようにした。

今年度は、板書計画シートに「単元計画シート」「協議会シート」を追加した。子どもとともに学習計画を立てることを意識するために、学年部単位で公開授業を行う単元を決め、「１単元の中で学年部全員が実践を行うこと」「単元の計画を子どもとともに作ること」「単元終了後、協議会をもつこと」という課題を設定して取り組んだ。同じ単元で授業をしたことで、先行して行った授業をもとに公開授業の修正をしたり、単元や授業展開について、協議会以外の場でも学年内で活発な意見交換の様子が見られたりするなど、教師自身が主体的に授業改善に取り組もうとする姿も見られた。

4　成果と課題

今回の研究では、研修で学んだことを日々の授業にフィードバックして生かしたり、子どもとともに授業計画を立てて単元を構想したりした。このことは、子ども主体の授業を行なっていく上で、具体的な授業のイメージを持つことにつながった。今後は、今回の取組を継続して積み上げていくとともに、教員一人一人が課題意識をもって日々の実践に取り組めるようにしていきたい。

目次へ

研究主題	学びのエネルギーをもとに、仲間と共に考え続ける子の育成		
副　　題	－多様な考えをいかす授業づくりを通して－		
学 校 名	安城市立錦町小学校	校 長 氏 名	矢野　裕二

1　研究のねらい

本校の子どもたちは素直で穏やかであり、落ち着いて授業に取り組もうとする傾向にある。しかし、長いコロナ禍を経て学びが受動的になり、自分なりに考えをもって課題に取り組もう、仲間と協力して課題を解決しようという意識が希薄になったと感じられた。

子どもたちは、本来未知のものやこと、新しい発見や体験に興味をもったり、何とかしようと考えたりするエネルギーをもっている。本校では、それを「学びのエネルギー」として捉え、授業で引き出していくことを考えた。また、他者と関わりながら学び、自分の考えを深めていくことを通して、人と関わるよさや楽しさも実感してほしいと考えた。主体的に課題を追究する楽しさや、他者と関わることで学びが深まり自らが成長していく喜びを実感させたい。

2　研究の仮説と手立て、ソーシャルスキルトレーニング

仮説１　学びのエネルギーを高める単元構想
単元構想を工夫することで、「できるようになりたい」、「もっと～～したい」という学びのエネルギーが高まり、主体的に課題解決に向かうであろう。

【手立て１】
・教材を工夫したり課題との出合いを演出したりすることにより、課題に対する興味や関心を引き出し、学びのエネルギーを高められるようにする。
・生活に関わる問題を取り入れたり、社会と子どもの認識のずれを自覚させたりすることで、課題を自分事として捉え、必要感もって追究できるようにする。

【手立て２】
・振り返りを活用し、子どもの考えや問題意識を取り入れて授業と授業をつなぐことで、子どもが学びのつながりを実感できるようにする。
・単元での学びをどのようにいかすか（誰に伝えるか、どんなものを作るかなど）を子ども自身が考え、明確にすることで、目的意識をもって主体的に追求できるようにする。

仮説２　学び合いを活性化させる教師支援
学び合いを活性化させる支援を工夫すれば、子どもは他者の考えや視点に気付き、自らの考えを広げ、学びを深めていくであろう。

【手立て３】
・ＩＣＴを活用して意見を共有したり、意図的にグループを編成したりすることで、他者の意見に触れ、自らの考えを広げたり新たな考えを生み出したりできるようにする。
・思考ツールの活用により、思考を整理したり学びの変遷を振り返ったりできるようにする。

【手立て４】
・新しい資料の提示、意図的な指名、議論の焦点化などの教師の切り返しにより、思考を立ち止まらせ、新しい視点をもつことができるようにする。
【ソーシャルスキルトレーニング】
・朝の学習にソーシャル・スキル・トレーニングを取り入れ、学び合いに向かう学級づくりや「聞く・話す」を中心としたコミュニケーションスキルの向上を図る。

３　研究発表会参加者の感想

（１）本校の研究について
・学びのエネルギーを上手に引き出し、持続させるために、自分事として捉えられるような生活に関わる問題を設定している授業が多かったように感じた。
・教材や単元の工夫やゲストティーチャーの登用は、主体的な学びを引き出すために有効であることが成果として表れていたと思う。
・子どもの興味から課題を設定しており、同じ単元構想でも全く違う授業になっていた。子どもたちの意見を大切にしているからこその成果だと感じた。
・学びのエネルギーという言葉の意味が抽象的な印象を受けた。

（２）公開授業について
・Padlet を活用し、友達の計画書をいつでも見ることができるようにすることで、友達の意見を直接聞いてみたいという気持ちが高まり、対話が生まれ、それをもとに自分にいかしていきたいという思いをもつことができていた。効果的な ICT の活用だと感じた。
・よく聞き、よく話し、前のめりで授業に臨んでいる児童が非常に多いと感じた。
・学びのエネルギーが単元の途中や終末まで継続してきているのであれば、先生が話をしなくても授業を進められるのではないか、授業の中で子ども自身から疑問が湧き出てくるのではないか。
・児童は学び方をどう捉えているのか。児童が学び方をより自分のものにしているならば児童の会話の中から思考の立ち止まりを生む意見が出てもいいのではないか。

（３）その他
・本研究において、もっとも重要なのは単元の入り口なのではないかと感じた。その意味で、今回の授業の中で単元の導入部分を扱うものがなかったのはとても残念だった。

４　研究の成果
・教材を工夫し、単元との出合わせ方を演出したことで、子どもたちにとって単元や課題が自分事となり、学びのエネルギーが高まった。それにより、何とかして課題を解決したいという思いが強まり、級友と協力しながら主体的に課題に取り組むことができた。
・ＩＣＴや思考ツールの活用により、子どもたちは効率的に情報を共有したり、自らの考えと級友の考えを比較したりしながら、じっくりと考えを深めることができた。また、学びのエネルギーの高まりにより、もっとこうしたいという意欲をもって次時にのぞむ姿が見られた。

５　今後の課題
・子どもの思考を立ち止まらせ、新しい視点をもたせることができるような教師の切り返しに課題が残った。話し合いの中のどのタイミングでどのような言葉や資料で切り返せば、子どもたちの考えを深めるきっかけとなるのか。授業の中での「その瞬間」を見極める力を教師が伸ばしていくことが必要である。

目次へ

研究主題	学びを　つなげる　かさねる　広げる　桜井っ子		
副　　題	桜井のひと・もの・ことを生かした横断的な学習を通して		
学 校 名	安城市立桜井小学校	校 長 氏 名	早川　　慎

学びを　つなげる　かさねる　広げる　桜井っ子
～桜井のひと・もの・ことを生かした横断的な学習を通して～

１　主題設定の理由

本校ではこれまで「分からなさ」を抱いた子の問いかけから「分からなさ」を共有し、ともに解決に向かおうとする営みを「確かな学力を身に付けるための学び合い」ととらえ、研究を進めてきた。一方で、教科・領域によっては、「分からなさ」というより「自分の考えを確かなものにしたい」という思いをもって友達との関わりをもとめる子がいたり、Ｍｙタブレットの活用により、「分からなさ」があっても「何とか自分で解決したい」と思う子がいたりと「学び合い」だけでは収まりきらない場面も多く見られるようになってきた。

改めて子どもたちの授業での様子を見ると、子どもたちがそれぞれもっている考えを出し合い、知識をつなげて考えの質をあげていく子どもの姿や、友達の思いに自分の思いをかさねて学びを確かなものにしていく子どもの姿、授業で得た知識を教科横断的に広げて総合的な学習（以下 さくらい学習）に活用しようとする子どもの姿が見えてきた。そういった子どもの学びを支える教師の営みをていねいに行うことで、子どもたち自身が、学びに手ごたえを感じることができるのではないだろうか。そしてそれは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に通ずるものであり、将来の「自立した学習者」への土台づくりにもつながると考えた。

また、知識を活用・発揮するためには、さくらい学習と他教科との関わりが欠かせない。地域素材が豊富な桜井学区の特徴を生かして、桜井のひと・もの・ことを活用し、教科横断的な単元を構想すれば、知識を活用・発揮できるのではないかと考えた。

以上のように、知識をつなげて質を高めたり、思いを重ねたりすることで学びを実感し、得た学びを活用・発揮できる子をめざしたいと考え、本主題を設定した。

２　めざす子どもの姿

・得られた学びを生きて働く知識として活用・発揮できる子
・つながりやかさなり、広がりに手ごたえを感じて学びを実感できる子

３　研究の仮説

≪仮説１≫

桜井のひと・もの・ことを教科に取り入れたり、教科で得られた知識を桜井のひと・もの・ことを学ぶ場で活用したりといった往還的な取り組みができる単元を構想すれば、得られた学びを生きて働く知識としてさまざまな場面で活用・発揮できるだろう。

≪仮説２≫

既習事項や生活経験など子どもたち一人一人がもっている知識をつなげ、思いをかさね、教科横断的な広がりを感じられる授業を展開すれば、つながりやかさなり、広がりに手ごたえを感じて学びを実感できるだろう。

４　研究の手立て

手立て１　教科横断的な単元づくり

・さくらい学習と他教科を関連付けた教科横断的な単元構想（教科横断関係図の作成）

手立て２　学びのつながりやかさなり、広がりが可視化された板書・掲示

・ネームプレートやアンダーライン、矢印の活用

・教科横断的な広がりを示した㋪プレートの活用

・つながりやかさなり、広がりを意識したつなぎ言葉

・学びの足あとの活用（掲示・Ｍｙタブレット等）

手立て３　「分からない」「教えて」が言える学級・授業づくり

・安心して自分の考えを述べることができる学級をめざした「きずなタイム」（アドジャン）

・「分からない子が動く」を基本とした授業づくり

手立て４　振り返りの工夫

・Ｍｙタブレット等やミニノートを活用した学びのポートフォリオ

・知識の活用・発揮の場、学びの実感の場としての振り返り

５　実践

（１）子どもたちと考える「つなげる　かさねる　広げる」

本校では研究主題である「つなげる　かさねる　広げる」姿を各学級で考え、実践している。以下はその一部である。

つなげるとは

２年２組：知っていることを増やしてみんなで理解する

４年４組：友達と自分の知識をつなげてより詳しくなっていく

かさねるとは

１年２組：ネームプレートが集まった様子を見て同じ考えだと気付く

３年１組：おもわず「なるほど」と口に出る

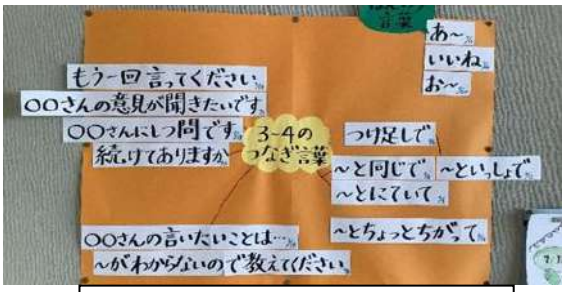
広げるとは

さくら組：成功体験を自信とし、他のこともやってみようと考える

５年４組：知ったことをさらによくする。生かしていく

（２）子どもたちとつくる「つなぎ言葉」

つなげる　かさねる　広げるための手助けとなるのが「つなぎ言葉」である。そのつなぎ言葉は子どもたちとともにつくり、積みかさねるものとしているため、各学級独自のつなぎ言葉となっている（資料１）。



資料１：学級独自のつなぎ言葉

（３）「つなげる　かさねる」　子どもたち

６年さくらい学習「つなごう！さくらいの未来」

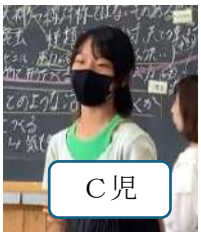
地域の方の協力を得ながら桜井凧の「特徴」「歴史」「思い」について学んだ子どもたちは、今後の活動について、つなげたりかさねたりしながら話し合った。



A：○○さんと同じですけど、僕たちだけが歴史とか特徴とか知っているので、地域の人により知ってもらえるように、ポスターにまとめて知らせたいです。

B：ぼくも地域の人に広めたいのは同じですけど、もっとやりたいことがあって、桜井凧を実際に作ってみたいです。作っているときの気持ちは分からないので味わってみたいです。





C：私も地域に広めたいと思っているけど、これだけじゃ情報が足らなくて、やっぱり実際に作ってみて思いをたくさんもって広めたいです。

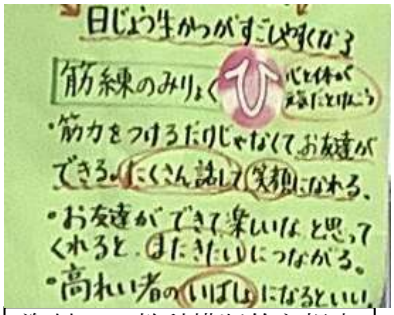
D：自分も実際に作るのもいいと思うんですけど、作り方や、作った感想とか、作っているときの写真なんかもポスターに載せるといいと思いました。



（４）「広げる」　子どもたち

３年さくらい学習「桜井を元気にし隊！！」

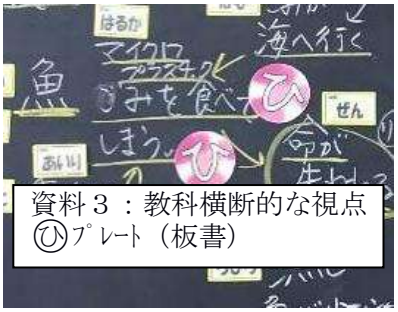
本単元では、教室側方に学びの足あとを掲示し、可視化した。特に教科横断的な気付きがあった時は㋑プレート（広げるプレート）を使い、より意識できるようにした。お年寄りを招いた「さくりんふれあい祭り」を成功させるためには何が大切かについて話し合った際、道徳科の学びから「思いやりが大切だと思う」といった広がりをもった発言がみられた。他にも、振り返りの場面で「保健で健康のことを学んだから『さくりんけんこうふれあい祭り』にしたらどうか」といった発言が見られるなど、子どもたち自身が教科横断的な視点をもって臨むことができた（資料２）。



資料２：教科横断的な視点
㋑ﾌﾟﾚｰﾄ（学びの足あと）

４年さくらい学習「さくらいクリーン大作戦」

地域にごみがあるとどういうことに困るかについて話し合った。「魚がごみを食べてしまう」という考えに対して「社会科から広がって、マイクロプラスチックも食べてしまうからやっぱり魚にとってよくない」と社会科での学びをさくらい学習に生かすことができた（資料３）。



資料３：教科横断的な視点
㋑ﾌﾟﾚｰﾄ（板書）

６　成果と今後の課題

（１）　成果

・教科横断的な単元づくりを通して、子どもたちが得た学びを生きて働く知識として活用する場を意図的、計画的に配置することができた。さらに、学びの活用の場として期待される生活科やさくらい学習において、地域のひと・もの・ことを軸に据え、主体的な子どもの活動を生み出すことができた。

・「つなげる　かさねる　広げる」を学校全体で一律に定義づけるのではなく、子どもたちと一緒に考える活動を通して、各学級でその姿を目指すことができた。子どもたちが３つのキーワードを常に自分事としてとらえられるように支援することにより、友達と自分の意見を比較する、他教科や他の意見と関連付ける視点をもって学び合うことができた。

（２）　課題

・教科横断的な見通しをもてるよう教科横断関係図を構想したが、子どもたちはそれ以外でも様々な場面で教科横断的な視点をもち始めている。今後は得た学びを生きた知識としてさらに活用・発揮できるよう研究を進めたい

・つながりやかさなり、広がりを意識した振り返りを書くことができたが、今後は子どもの学びの深まりにも着目し、学びの深まりを自覚し、学びの有効性を実感することでさらに自立した学習者に近づけるようにしたい。

目次へ

研究主題	心身共に健やかで　笑顔あふれる梨っ子の育成		
副　題	～拓かれた学校づくりを目指す 学校・保護者・地域との連携を通して～		
学校名	安城市立梨の里小学校	校長氏名	吉本　敦

１　はじめに

教育基本法第１条では、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。」としている。様々な教育活動を展開する上で、基盤となるものは、子どもたちの心身の健康だと考える。本校は令和４年度に愛知県健康推進学校の指定を受け、「心身共に健やかで　笑顔あふれる梨っ子の育成－拓かれた学校づくりを目指す学校・保護者・地域との連携を通して－」を研究テーマにして取り組んできた。

２　学校概要

ＪＲ三河安城駅を学区にもつ本校は、平成１８年４月に市内２１校目の小学校として開校し、本年度で１９年目を迎えた。児童数は４６５名（５月１日現在)、学級数は１８学級（特別支援学級２学級を含む）である。この地域は、何代も続く家とベッドタウンとして建ったマンション群が混在している学区である。

保護者や地域の方の学校への関心は高く、行事には惜しまず参加・協力をしていただける。そのため、環境教育やボランティア活動にも、学校と地域が一体となって取り組んできた経緯があり、現在も各種ボランティア活動への参加が継続的に行われている。

温かい学区、ゆとりあるホールや階段、中庭のある校舎、恵まれた環境の中、児童は、素直で明るく、大人への信頼感も厚く、言われたことに一生懸命取り組もうとする従順な子が多い。

しかし、学校評価アンケートの結果から、「友達や学級のために行動している。」「自分にはよいところがある。」といった自己有用感・自己肯定感を問う項目で、他の項目に比べて否定的な回答が多い傾向が見られた。日々の姿からも、はじめてのことへの抵抗感が大きい児童や小さな失敗や挫折から立ち直れない児童もみられる。また、保健室利用状況をみると、外科よりも内科・その他の理由での保健室利用者が多い。話の背景に、「メンタルヘルスの問題」や「生活習慣の乱れ」がみられる児童が多くいた。特に生活習慣については、新型コロナウイルス感染症の終息とともに児童の意識が少しずつ低下している様子がみられ、基本的生活習慣の定着に向けた継続的な取組が必要であると考え、「支え合う仲間づくり」「たくましい体づくり」「折れない心づくり」の３つを研究の柱とした。

２　実践内容

（１）支え合う仲間づくり

児童相互の仲間意識を育んだり、児童と教師の交流を深めたりする行事を通して、自他の存在価値に意識をもたせたいと考えた。１学期に行われる「梨っ子まつり」は、児童相互の仲間意識をはぐくんだり、児童と教師の交流を深めたりするのに欠かすことのできない児童会行事である。新１年生を迎える行事として、企画から運営までをすべて児童代表が行った。「梨っ子まつり」後、にこにこしながら教室に戻る全校児童の姿を見て、企画・運営をした児童は「みんなが楽し



【梨っ子まつりの様子】

んでくれてよかった」とうれしそうな顔をみせた。

また、委員会活動は、高学年のボランティア活動の一環として、自主的・奉仕的・創造的な活動として位置づけている。

児童会のマスコットキャラクターである「梨っ子くん」と「はなまるちゃん」にちなんで名付けた「児童はなまるあいさつ運動」は、「梨っ子の挨拶力を高めよう」と執行委員が中心となって行った。



【はなまるあいさつ運動の様子】

また、同学年の横のつながりだけでなく、異学年との交流を通して、それぞれの発達段階における接し方も意識させたいと考えた。１・６年、２・４年、３・５年をペア学年とし、読み聞かせやゲームなどを楽しんだ。相手を考えて読む本を選んだり、一緒に遊ぶ中で、やさしく声をかけたりする姿は、だと感じた。このような活動を通して、社会生活を営む上で欠かすことのでないコミュニケーション能力の向上が図れたと考える。



【ペア活動の様子】

（２）たくましい体づくり

本校では開校より「すこやか週間（生活点検）」を学期に１回ずつ設定している。「早寝・早起き・朝ごはん」を中心とする望ましい生活習慣の確立を目指し、生活点検カードを使った生活点検を実施する。そこには、以下の３点の工夫が取り入れられている。



【すこやかファイル】

①児童が自分の目標と、その目標を達成するための具体的手だてを事前に記入し、意識して「すこやか週間」を過ごせるようにする。

②保護者、担任、養護教諭の３者のチェック欄を設け、連携・協力が得られるようにする。

③児童が楽しんで取り組めるようにするため、また、保健教育に活用しやすくするために、元気コインが貯められる形になっている。点検の結果は、掲示物や保健だよりで児童・家庭へ発信し、使用した点検カードはすこやかファイルに入れて、入学時から卒業まで保管し、保健教育の資料として活用するなど点検期間だけのものにならないようにしている。

下記は生活点検カードの１学期の結果から、各項目で５日間ともできた人の割合（%）を示したものである。



1位	朝ごはん・・・・・93.3%
2位	歯みがき・・・・・84.4%
3位	おもいやり・・・・80.5%
4位	早起き・・・・・・61.3%
5位	運動・・・・・・・56.0%
6位	うんち・・・・・・52.4%
7位	**電子メディア・・・51.9%**
8位	**早寝・・・・・・・43.5%**

【生活点検カードと１学期の結果】

下位に注目すると、「電子メディア」と「早寝」の数値が低くなっている。

メディアを利用する頻度が多くなり、児童の生活習慣の乱れや視力の低下が懸念される。そこで、今ある視力を守るために、「自分のできることをやり、視力低下を防ごう」ということで、メディアルームを新設した。眼球を動かすビジョントレーニングや保健委員会の児童が考えたクイズコーナーを用意し、目に関心をもったり、目を休ませたりする部屋としている。ＰＴＡの保健福祉委員会の方にも協力していただき、子どもたちの様子を見守っていただいている。


【メディアルームの様子】

また、目にやさしい生活を意識して、上手にメディアと付き合える子の育成を目指し、メディアコントロールデーを毎月設定した。メディアコントロールデーには、チェックシートを配付し、使う時間や姿勢などを意識できるようにした。

毎年２回、学校保健委員会（すこやか会議）を実施している。令和５年度は、保護者からの要望が特に強かった「心の健康」をテーマに行った。２回目については、健康教育推進学校の取組について保護者の方にも紹介し、今後の活動について話し合った。令和６年度第１回目は、視力とも関係の深い「正しい姿勢」について、市内にあるすずき接骨院の鈴木清吾先生を講師としてお招きし、体験を交えながら３年生の児童が学んだ。よい姿勢を保つことができるように、日ごろから体を動かす活動を生活に取り入れていくことが大切であるということで、椅子の下をくぐったり、片足でバランスをとったりするなど簡単にできる運動を教えていただいた。

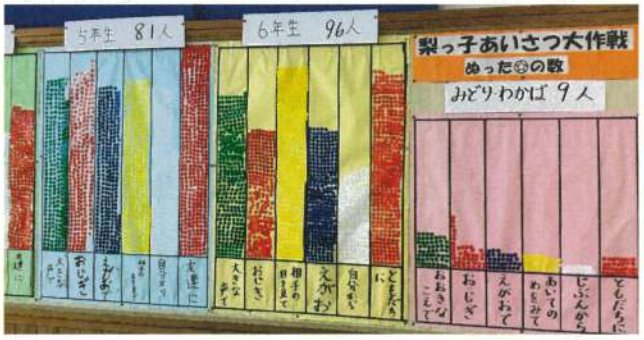


【メディアコントロールデーチェックシート】


【すこやか会議の様子】

（３）折れない心づくり

本校の昇降口は一か所で、全校の子どもたちが毎日必ず目にするのが、昇降口前にある「梨っ子掲示板」である。「梨っ子による、梨っ子のための掲示板として生まれ、毎回児童会の企画で工夫された内容が掲示されている。毎日、掲示板を見るのを楽しみしている児童も少なくない。



【梨っ子掲示板】


【各種ボランティア活動】

また、児童の元気と安全を守るための、保護者の方、地域の方によるボランティア活動も盛んに行われている。登下校見守り隊をはじめとする安全・安心プロジェクト、図書館・読み聞かせボランティア、学習補助ボランティアなど、学校の職員以外の人たちの活動に触れることで、児童には多くの人に支えられているという意識が芽生えている。こうした学校応援活動は今後も受け継いでいきたい学校風土の一つである。

私たち教師も児童の生活や心を知るために各種アンケートを実施したり、児童との何気ない会話や個別の教育相談など、日々の教育活動の中で実態を把握したり、本人や担任の困り感の解決に向けて専門家を交えてのケース会議を行ったりしている。令和６年度は、専門家を招聘して児童理解を深める職員研修を行い、「折れない心づくり」に生かせるようにしている。

３　成果と課題

研究以前の令和３年度と令和６年度の学校評価アンケートの関係ある項目を比較した。

学校評価の結果より	R3(%)	→	R6(%)
友達や学級のために行動している			
あてはまる	50.4	→	55.3
少しあてはまる	38.5	0.7 ↑	34.3
自分にはよいところがある			
あてはまる	51.5	→	53.0
少しあてはまる	30.3	1.1 ↑	29.9
早寝早起きや手洗いなど、きちんとできている			
あてはまる	66.7	→	47.7
少しあてはまる	26.2	7.6 ↓	37.6

私は、早起きがとても苦手でした。けれど今回のすこやか週間で早起きをしようとして6時前には起きられるようになったので、これからも続けていきます。(5年児童)

【学校評価アンケートの結果と児童の振りかえり】

自己有用感や自己肯定感を問う項目で肯定的な回答が増えたことから、児童の自主的・奉仕的・創造的活躍の場を確保したり、教師が児童理解を深めたりする手立てが、自己肯定感の高まりにつながったのではないかと考える。しかし、基本的な生活習慣を問う項目では、個々の振りかえりからは、意識をしていることがうかがえるものの、全体的にみると肯定的な回答が減っている。このことから、すこやか週間において、生活点検カードを工夫し、児童がその期間意識することはできたが、継続的に児童自ら健康行動がとれるよう、判断力・実践力をつけていく必要があると考える。そこで、以下の５点を課題としてあげる。

①基本的生活習慣が定着できるよう、望ましい健康行動の実践力を育成する（すこやかファイルの有効活用、保健委員会等の児童発信の取組、家庭との連携）

②要支援群児童を適切な支援へとつなぐ（各種アンケートの有効活用）

③低視力の悪化を防ぐ（「メディアルーム」の充実と効果的な活用、家庭へ働きかけ）

④生涯にわたって健康の保持増進を図る（保健教育の充実）

⑤学校・家庭・地域の連携強化（PTA 活動やボランティア活動の充実）

心身共にすこやかで　笑顔あふれる梨っ子の育成を目指した本校の実践は、学校・家庭・地域が開校当初から取組続けてきた活動を土台に、今日的な健康課題を解決するための見直しや強化を図ってきたものである。今後も学校・家庭・地域の力を最大限に生かしながら進めていきたい。

目次へ

研究主題	見通しをもち、筋道を立てて考えを説明できる矢田っ子		
副　題	算数科等における「矢田小スタイル」を通して		
学校名	西尾市立矢田小学校	校長氏名	鈴木　健吾

1　主題設定の理由

本校の子供たちは、与えられた活動や指示された問題に対して、真面目に取り組もうという姿勢がある。また、友達の意見につなげて発言したり、うなずきながら聞き合ったりする姿も見られる。振り返りの場面では、自らの学び方を見つめ直し、今後の取り組み方を向上させたいと記述する子供が増えてきている。しかし、追究の過程で出会った新たな課題に対して、見通しをもち、自ら解決しようとする子供は多くはない。また、自分の考えをもつことはできても、根拠をもとに相手に分かりやすく説明することができる子供は一部に留まっている。学力テストの結果からも、国語科、算数科ともに上位層の小さな山と下位層の山の存在が確認できた。

こうした児童の実態は、私たち教師のさらなる授業改善の必要性を示していると考えた。学力の上位層だけが活躍するのではなく、下位層を含めクラス全員が課題解決に向けて第一歩を踏み出したり、相手意識をもち根拠をもとに伝えたりすることができる手立てを取り入れる必要性を強く感じた。

「算数科」には、学習内容の系統性が明確であるという特性がある。他の教科にも言えることではあるが、とりわけ「算数科」においては、基礎的・基本的な知識と技能を定着させながら、それをもとに新しい学習を積み重ねて発展させていくという側面が強い。そのため、既習事項をもとに見通しをもって考えやすい。また、自分の考えを図や数式などを使って筋道を立てて説明（アウトプット）しやすいという面もある。さらに、どの学級、どの教師、どの単元でも統一した授業スタイルで実践しやすい教科でもある。このようなことを踏まえ、本校では、まずは「算数科」で本研究に取り組んでいこうと考えた。

本研究を通して、新たな課題に出会ったときに、解決に向けて見通しをもって進んで取り組もうとする子供を育てたい。そして、筋道を立てて考えて説明し合うことで、学力をさらに高めていってほしいと願い、本主題を設定した。

2　目指す子供像と研究の仮説

Ⅰ　課題に対して見通しをもち、自ら解決しようとする子供
Ⅱ　根拠をもとに、筋道を立てて考え、自ら説明できる子供

Ⅰ　課題解決に向けて、第一歩を踏み出すための働きかけをしていけば、課題に対して見通しをもち、自ら解決しようとする子供が育つであろう。

Ⅱ　課題解決に向けて、目的意識や相手意識をもったかかわり合いに重点を置いた授業展開（矢田小スタイル）を積み重ねていけば、根拠をもとに、筋道を立てて考え、自ら説明できる子供が育つであろう。

3　研究の手立て

（1）　目指す子供像Ⅰに対する手立て

① 算数用語の提示

既習事項を想起させ、根拠をもとに自分なりの詳しい考えがもてるように、既習の算数用語をホワイトボードにまとめ、提示する。根拠をもって筋道を立てて考えて説明するための手がかりとする（資料１）。



資料1

② 既習事項を引き出す問い

既習事項とのつながりに気付き、子供の「やれそうだ」「やってみたい」という思いを引き出すために、問いかけをする。既習事項を共有し、解決に向けて踏み出す一歩にする。

③ 思考ツールの活用

子供たちが自力で課題を解決したり、自分の考えを整理したりするために、具体物、図、シーケンス、ヒントカードのような思考ツールを活用する（写真１）。


写真1

（2）　目指す子供像にⅡに対する手立て

④ かかわり合いのめあての提示

教師は、かかわり合いの場を設定する際、意図を明確にしてから行う。子供たちには相手意識をもって取り組めるように、「かかわり合いめあて」（資料２）①～⑤の中で、どれをめあてにするのかを伝える。

かかわり合いのめあて（中・高学年用）

①自分の考えを整理しよう
②新しい考えを見つけよう
③友達の考えと比べよう
④「はかせどん※」で考えよう
⑤分かったことを使って説明しよう

※「はかせどん」とは、はやく、かんたんに、せいかくに、どんなときも使える考え方を意味する。必要に応じて使う。基本的には、自分なりの理由で最適解を見出すことのよさを認めていく。

かかわり合いのめあて（低学年用）

①かんがえを　はっきり
②あたらしい　かんがえ
③おなじところ・ちがうところ
④「はかせどん」
⑤ともだちに　おしえる

資料2

⑤ 問い返し

子供たちの説明が曖昧で、言葉が足りない場合、根拠となる言葉を引き出すために、「なぜ○○になるのか」と問い返しを行う。あえて誤解答を示すことで、根拠を引き出す場合もある。

⑥ 本時の学びを発揮するための適用題

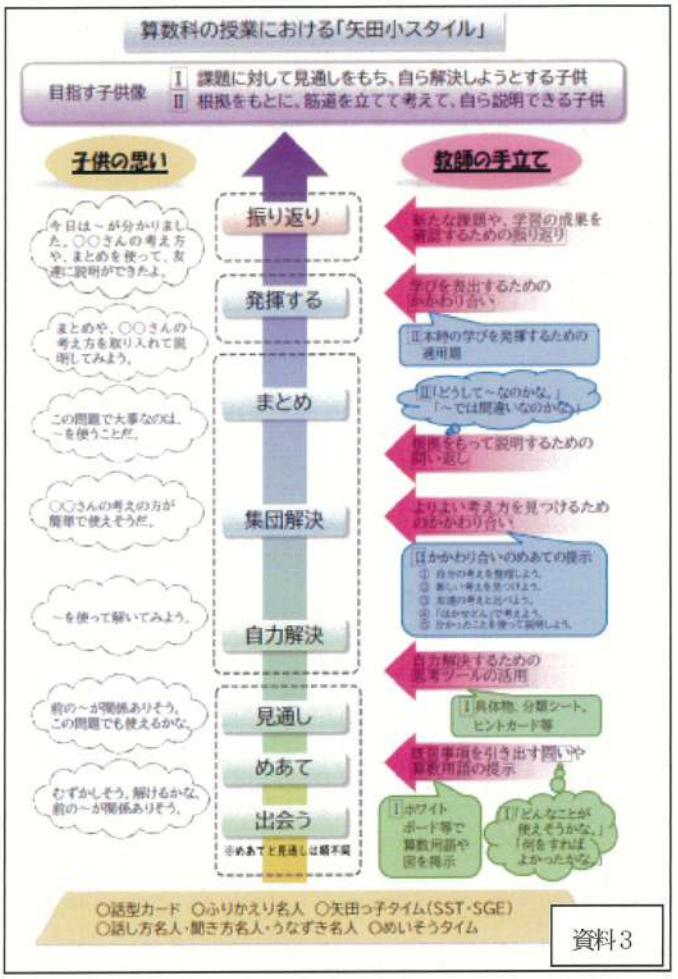
話し合いやまとめをいかして求めることのできるような適用題（本時の課題と同じレベル）を出題する。子供たちが自力解決した後、その解き方や考え方をペアで説明し合う場を設ける。その際、数学的表現や数学的活動、まとめを取り入れた説明をするように促す。また、相手意識をもって取り組めるように、具体物の操作活動を取り入れたり、考えをまとめたノートやワークシートに指を差し示したりしながら伝えるように指示する（写真２）。


写真2

4　研究の構想

算数科の１時間の授業展開の中で、「出会う」→「深める」→「発揮する」→「振り返る」の段階を踏む（資料３）。

「出会う」段階では、学習課題と出会い、本時のめあてを共通認識し、課題解決に向けての見通しをもつ。「深める」段階では、既習事項を用いて、自力解決をする。次に、考えを共有し、本時の課題への理解を深めるために、ペアや全体で集団解決に取り組む。そして、課題解決の考えや根拠を共有するために、まとめを行う。「発揮する」段階では、筋道を立てて考えを説明する力を高めるために、学びをいかし、適用題を解き、ペアのかかわり合いで解決方法を説明し合う。「振り返る」段階では、新たな課題を見付けたり、学習成果を確認したりするために、本時の学びを振り返る。これを「矢田小スタイル」の授業展開とし、毎時間、積み重ねていくことで、根拠をもとに、筋道を立てて考え、説明する力が高まっていくと考えた。



資料３

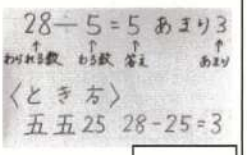
5　実践

（１）見通しをもち、自力解決に向かう子供たち（小３「あまりのあるわり算」）

「３５人が長椅子に４人ずつ座ると、長椅子は何脚必要か」という問題提示をし、子供たちが自分で考えている場面で、Ｔ１の問いをした。子供たちは、提示された既習事項（資料４）を見て、わり算を使って求める見通しを答えた（Ｃ１，Ｃ２）。

また、Ｔ３では、これまで解いた問題との違いに気付かせる問いかけをした。違いを尋ねたことより、子供は、本時の課題解決方法で大切な考え方を共有し、自力解決への糸口をつかんだと考える（Ｃ４）。

Ｔ１：どうやって考えたらいいかな。
Ｃ１：わり算を使います。
Ｃ２：Ｃ１さんに付け足しで、３５÷４をすればいいと思います。
Ｔ２：わり算の答えはどうなりますか。
Ｃ３：３５に近い九九は四八３２。３５－３２＝３だから、８余り３です。
Ｔ３：ということは、３５人全員が座るには、長いすは何脚いるのかな。今までの問題との違いは何ですか。
Ｃ４：今までは、「何箱できて何個あまりますか」っていう問題だったけど、今日の問題は、「何脚いりますか」だから、余りをかかないんだと思います。



資料４

（２）思考ツールで考えを深め、根拠をもとに自ら説明する子供たち（小１「３つのかずのけいさん」）

１年生の子供たちは、知っている算数用語が少ないため、言葉だけで説明することは難しかった。そこで、３つの数を足したり、引いたりする考え方を、数図ブロックを動かして一人で考える時間をつくった。かかわり合いのめあて①（資料２）を示し、問題文を声に出しながら、数図ブロックを動かし、ペアのかかわり合いで、相手に分かるように説明するように指示した。

集団解決の場面で、教師が、たし算の１０の根拠を尋ねる（Ｔ１）と、子供は、数図ブロックを動かして説明した（Ｃ２）。説明を聞いた子供は、「ぼくも同じです。」とうなずいた。そこで、教師が式を比べてどちらがよいかを問い返す（Ｔ２）と、子供は、初めの数を根拠に、「７＋３－８」の立式が適している理由を述べた（Ｃ３）。思考ツールを使って、足す、引くの動きを視覚的に確認したこと（写真３）が、子供の理解を深めた。さらに、問い返しが、子供から考えの根拠を引き出したと言える。

Ｃ１：１０－８で、答えは２です。
Ｔ１：この１０は、どこから出てきたのかな。
Ｃ２：右と左のねずみを合わせたら、１０になります。
Ｃ３：７＋３－８だと思います。答えは２です。
Ｔ２：１０－８でも、７＋３－８でも答えは同じだけど、どちらの式がいいかな。
Ｃ３：問題に数が３つかいてあるから、それを使う方がいいと思います。
Ｃ４：なるほど。７＋３－８の方がいいね。


写真３

（３）学びをいかして、ペアで説明する子供たち（小５「合同な図形」）

本時の課題解決後、「合同な図形を見つけるには、回したり、ひっくり返したりして、対応する辺の長さや角の大きさが全て等しいかを調べる」というまとめをした。その後、適用題を提示し、自力解決をした後、ペアでのかかわり合いの場をもった。ペアに説明する際に、かかわり合いのめあて⑤（資料２）を提示し、「対応する辺の長さや角の大きさに着目して、合同かどうかを判断した理由を伝える」ように促した。子供たちは、本時で解決した方法を使い、まとめの言葉を用いて、自信をもって説明することができた。「図形㋐と図形㋑は、回したり、裏返したりすると、ぴったりと重なったから合同です。対応する辺の長さも全て同じです。㋐と㋒は、対応するはずの角アと角カの角度が違うから、合同ではないです。」と、学んだ算数用語を使い、図形を指さしながら、説明する姿が見られた。子供たちの説明する様子から、学びを発揮する姿が表出したと考える（写真４）。


写真４

6　研究の成果と課題

（１）　成果

ア　仮説Ⅰについて（手立て①②③）

・算数用語を示し、既習事項を引き出す問いをしたことは、子供に、「解けそうだ」という思いをもたせ、見通しをもつ子供の姿が見られた。
・自力解決が難しい子供にヒントカードを配付すると、解き方のきっかけを得ることができた。数図ブロックで思考を視覚化すると、考えがより明らかになったり、分かりやすく説明できたりした。思考ツールの活用は、考えを整理し、自ら解決しようとすることを促した。

イ　仮説Ⅱについて（手立て④⑤⑥）

・かかわり合いのめあての提示によって、友達に説明することのよさを子供たちが認識した。
・適時の問い返しは、問題解決の根拠となる言葉を引き出し、根拠にもとづく説明を促した。
・適用題の提示とかかわり合いにより、自信をもち、根拠をもとに考えを説明する姿が増えた。

（２）　課題

・１時間で完了する「矢田小スタイル」を構築してきたが、内容によっては、単元の中にスタイルを組み込むなど、汎用性のあるものへ発展させたい。

目次へ

研究主題	自他を大切にし、よりよく生きる寺津っ子の育成		
副　題	生活科・総合的な学習の時間における「ふるさと単元」の実践を通して		
学校名	西尾市立寺津小学校	校長氏名	和田　保彦

1　主題設定の理由

グローバル化や人工知能（AI）などの技術革新が急速に進み、予測困難なこれからの時代、子供たちには、自ら課題を見つけ、自ら学び、他者と協働しながらよりよい社会を創造したり人生を切り拓いたりする力が求められている。

これまでにも本校では、生活科や総合的な学習の時間を中心に、地域を教材にした課題解決学習「ふるさと単元」に取り組んできた。「子供を共に育てる」という地域の温かい思いに支えられての実践である。６年「寺津防災レスキュー隊」の実践では、「命を守りたい」という切実な課題に向かい、一人一人が熱心に探究活動に取り組む姿が見られた。その過程においてある子供が、「友達や家族、地域の人とも話し合って、もっとよい方法をみんなで考えていきたい」と語った。この言葉をきっかけに、自ら他者とかかわり合いながら、主体的・協働的に学びを深めていく子供たちの姿が次第に増えていったのである。単元のゴールでは、地域みんなの命を守るために、学んだことの情報発信を行ったり、自発的に地域の防災訓練に参加したりと、自分たちにできることを考え行動する姿が見られた。

このように、自他の考えを大切にしながらよりよく課題を解決したり、学んだことを生かしてよりよく生きていこうとしたりする姿こそ、私たちがめざす子供の姿である。その願いを込め、研究主題を次のように設定した。

自他を大切にし、よりよく生きる寺津っ子の育成
～生活科・総合的な学習の時間における「ふるさと単元」の実践を通して～

2　めざす子供の姿

○自他の考えを大切にし、よりよく課題を解決する子供
○学んだことを生かし、地域の人・もの・ことのために行動する子供

3　研究の仮説

地域を教材にした「ふるさと単元」の学びにおいて、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、学びを生かす場を工夫すれば、自他を大切にし、よりよく生きる子供が育つだろう。

4　研究の手立て

探究の過程における３つのステージにおいて、次の４つの手立てを講じる。

「見つける」

手立て①　課題を見つけるために、地域の人・もの・ことを「ふるさと単元」として教材化したり、教材との出会わせ方を工夫したりする。

「広げる・深める」

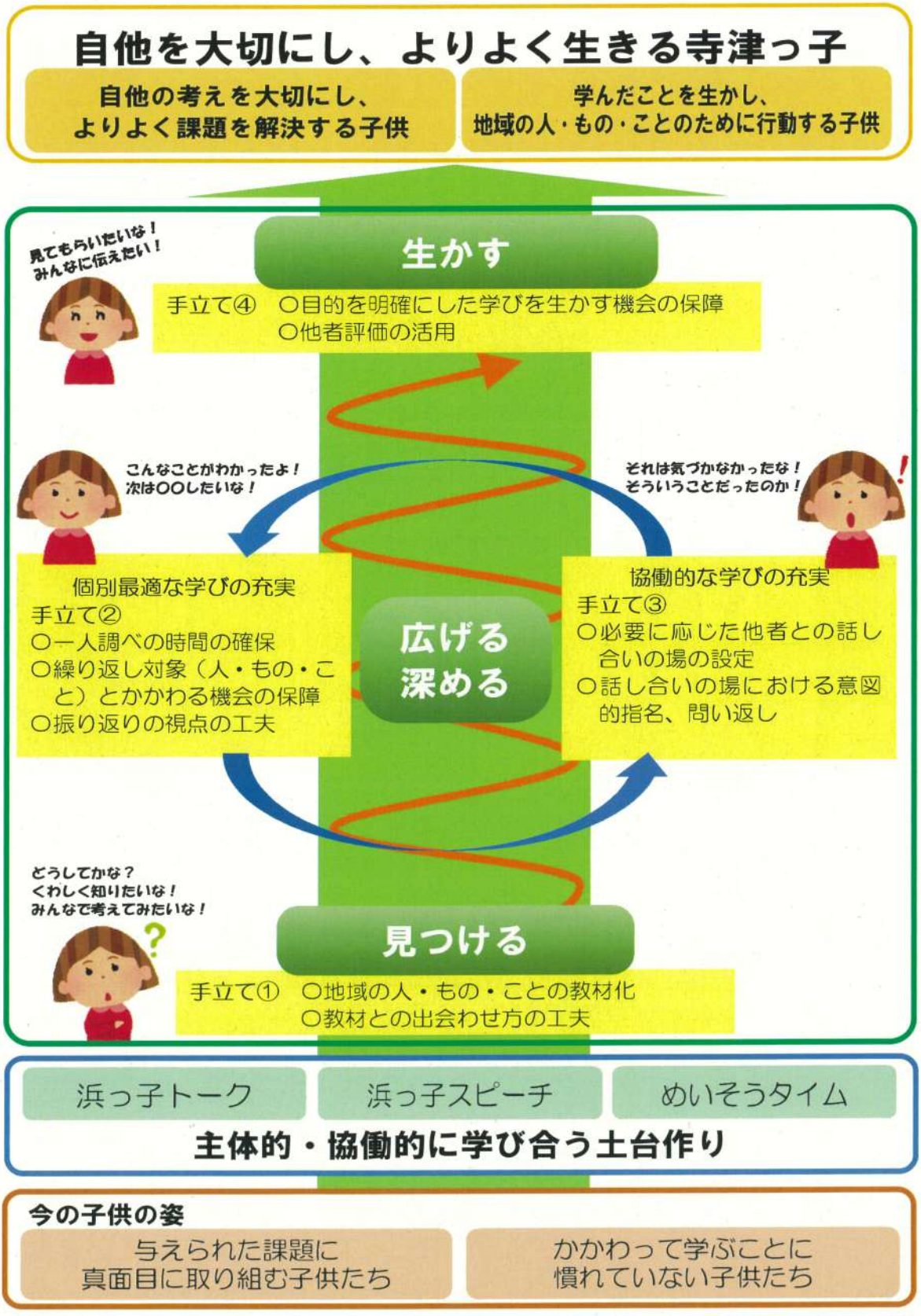
手立て②　個別最適な学びを充実させるために、一人調べの時間の確保や繰り返し対象（人・もの・こと）とかかわる機会の保障、一人調べを支える対話や問いかけ、振り返りの視点の工夫をする。

手立て③　協働的な学びを充実させるために、必要に応じた他者との話し合いの場を設定したり、話し合いの場における意図的指名や問い返しをしたりする。

「生かす」

手立て④　学んだことを生かし、自ら行動するために、目的を明確にした学びを生かす機会を保障し、他者評価を活用する。

5　研究構想図



6　実践の様子

（1）1年「あきだいすき、だいさくせん　～あきとともだち～」

ア　見つける

五感をつかって秋の様子に気づくことができるよう、「あきみつけビンゴカード」を作成した。これにより、子供たちは様々な視点から夏から秋への変化に気づき、「見つけた秋でみんなと遊びたい」とやりたいことを見つけることができた。

イ　広げる・深める

子供の興味・関心から、どんぐりゴマを作り、コマ回し大会を開くことになった。「どうしたら長く回るコマを作れるのかな」という課題に向かい、一人ひとりの追究が始まった。何度も繰り返し作成できるよう教室環境を整えたり、必要に応じて友達とアドバイスし合う時間を設定したりしたことで、子供たちは試行錯誤しながら、「自分の満足するコマ」を完成させることができた。その後、まつぼっくりなど他の素材も使って工夫しておもちゃを作成し、友達と楽しく遊ぶ姿が見られた。

ウ　生かす

「楽しかった秋の遊びを、みんなに教えてあげたい」と願いをもった子供たちは、2年生、6年生を招待して、秋まつりを開催した。喜んでもらえたことに達成感を味わい、「みんなと協力して、また楽しい遊びを考えていきたい」と今後につながる思いをもつことができた。

（2）4年「みんながくらしやすい町に」

ア　見つける

社会科の学習の中で SDGｓのことを知った子供たちは、「みんなが笑顔になれるように、自分たちもできることに取り組みたい」と思うようになり、「おじいちゃん、おばあちゃんにっこりプロジェクト」を立ち上げることとなった。

イ　広げる・深める

高齢者疑似体験をしたり、地域包括センターの方の話を聞いたり、お年寄りが集まるサロンを見学したりしたことで、課題が具体化し、にっこりプロジェクトの計画を考えることができた。一回目のプロジェクト活動に取り組んだ後、学級全体で振り返る場を設定したことで、新たな課題が見つかった。話し合いを重ね、二回目はよりよい活動へと高めることができた。

ウ　生かす

プロジェクトを通して、お年寄りの気持ちに寄り添いながら接することが大切であると学んだ。学んだことをたくさんの人に知ってもらいたいと願い、学習発表会で発信する活動に取り組んだ。参観者から寄せられた声から、伝わった達成感を味わうと共に、これからも自他を大切にしていきたいという思いを高めることができた。

7　成果と課題

（1）成果

本研究の手立てにより、自他の考えを大切にしてよりよく課題を解決していく子供たちの姿や、学んだことを生かして地域の人・もの・ことのために行動する子供たちの姿を数多く見ることができた。

（2）課題

本研究は、生活科・総合的な学習の時間における「ふるさと単元」で取り組んできた。今後は、他教科等にも広げ、子供たちの力をさらに伸ばしていきたい。

目次へ

研究主題	自ら動き出す白浜っ子の育成		
副　　題	個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業づくり		
学 校 名	西尾市立白浜小学校	校 長 氏 名	野口　智昭

1　研究のねらい

本校の児童は、優しく人懐っこい性格の子が多く、何事にも前向きに取り組むことができる。また、学校規模は、全校児童135名（R7.2.1現在）で全学年単学級の小規模校である。児童数が少ないことで、教職員も全員の児童の名前を知っていたり、縦割り活動が活発に行われ子供同士が他学年の子と関わったりする機会が多い。地域の方々も協力的で、「10歳の夢を語る会」「お帰り・ただ今運動」等地域と共に教育目標「つながって育つ白浜っ子」の育成に努めている。

一方で、与えられたことに対して一生懸命取り組むことができるが、自分で考えたり、新たなことに進んで取り組んだりすることが苦手な傾向がみられる。また、小さな地域・小規模校がゆえに、人とのかかわりは小さなコミュニティにとどまっていることが多く、児童がふれる情報や価値観についても限られている。

中央教育審議会は「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の中で、学習活動を「個別最適な学び」と「協働的な学び」という視点から捉え直し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが重要とされた。そこで、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業づくりに取り組み、児童が自分で考え、自分で学習方法を選択して、興味関心に応じて学習活動や学習課題に取り組む姿を期待している。また、子ども同士をはじめとする多様な他者と協働しながら、相手を尊重し、異なる考え方を組み合わて、新たな考えをつくりだしりして、次の学びへと自ら動き出す白浜っ子の育成を目指して実践に取り組んだ。

2　研究のねらいにせまるための手立て

【手立て①】個別最適な学びの支援

・単元の見通しをもたせることで、自分一人でも学習がすすめられるようにする。

・学び方を選択できるように工夫することで、自己選択・自己決定できるようにする。

【手立て②】協働的な学びの支援

・子どもの困り感や解決したいことを教師が取り上げ、全体で共有してみんなで取り組むことで、学びをさらに広げられるようにする。

3　実践の様子

1年　体育　表現リズム遊び（リズム遊び）～レッツリズムワールド～

単元の導入で、教師は児童にとって身近な音楽や見たことのあるダンスを取り上げ、一緒に踊ることで児童のリズム遊びに対する意欲を高めた。次に教師は、いろいろな曲のリズムに乗って、いろいろな動きを考える活動をした。子どもたちは少しずつ曲に合わせて動けるようになった。教師はリズムに合わせて踊った動きから「動きカード」を作成し、子どもたちのダンスの参考になるように体育館に掲示した。「学んだ動きを組み合わせて、踊ってみよう」の授業では、いろいろな体の動かし方を習得できるようにするために、動きカードを使って考えさせたり、よい動きをしていた子を取り上げて動きをまねしたりする活動の時間を設けた【手だて①】。その結果、動きの組み合わせを増やそうと「動きカード」を見に行って動きを考えたり（次項の写真①）、動き方がわからない児童は友達の動きをまねて活動していたり（次項の写真②）して、自分で考えて行動する姿がみられた。「友達とダンスをよりよくしよう」の授業では、よりよい動きにしていくために、子供たちの困り感を取り上げ、全体で共有し、解決策を考えたり、アドバイスし合ったりする時間を設けた。グループでダンスをお互いに見

せ合ったり、よい踊りを考えたりする中で、もっとかっこいいダンスにしたい、曲の最後まで踊り切れないという課題が出てきた。教師は一度全体を集めて、グループ活動で出てきた課題を取り上げて全体で共有した【手だて②】（写真③）。児童からは「ノリノリの動きを入れる」「動きカードをよく見る」「いろいろなパターンの動きを入れるとよい」などの意見が出た。その後もう一度グループ活動に戻すと、動きカードを見に行く児童、他のグループの様子を見てまねる児童などが出てきて、よりよい動きを考えたり、曲の最後まで踊り切れたりする児童が増えた。



【写真① 動きカードで学ぶ様子】



【写真② 友達の動きをまねる様子】



【写真③ 全体で考えている様子】

4年　国語　段落どうしのまとまりを考えて、リーフレットを作ろう　わたしのクラスの「生き物図かん」

既習の「ヤドカリとイソギンチャク」という単元で段落どうしのまとまりをとらえ、問いと答えが書かれているとわかりやすいことを学習した。その後「わたしのクラスの生き物図鑑」の単元で、子ども一人ひとりの興味関心に応じて、好きな生き物を選びリーフレット作りに取り組むことになった。個々の進度に合わせてリーフレット作りが進められるように単元の流れを提示した【手立て①】。図鑑で調べる児童やインターネットで調べる児童など、調べ方も自分で選択しながら自らの進度に合わせてリーフレット作りをすることができた（写真④）。しかし、リーフレット作りにおいて、段落どうしのまとまりをとらえ、問いと答えを作ることが目標であるため、問いや答えが作れない児童もいた。そこで、児童の困り感を取り上げ、リーフレット作りが早く進んでいる友達の発表ノートを参考に、自分の問いと答えを見直す場を設けた【手立て②】。「自分の問いには「どうして」「なぜ」がつかないから、ちがうことを問いにしたほうがいいな。」と友達の考えを自分のリーフレット作りに取り入れて進めていくことができた（写真⑤）。





【写真④ 図鑑やインターネットなど自分で調べ方を選択して進める様子】



【写真⑤ 児童が作成したﾘｰﾌﾚｯﾄ】

4　実践の成果と課題

○実践を通して、見通しをもって自分の進度で学習を進めたり、必要な情報の調べ方や活動方法を自ら選択したりできることで、学習が受け身にならず、自分で考えて取り組む姿が見られた。

○学習が停滞してきたときに、教師が適切なタイミングで協働的な学びの支援を行ったことで、児童は新たな視点を得て学びを広げたり、考えを深めたりすることができた。

○道徳の授業で自分の考えを伝え合ったり、他校の児童と交流したりしたことで、児童は多様な考えに触れることができた。

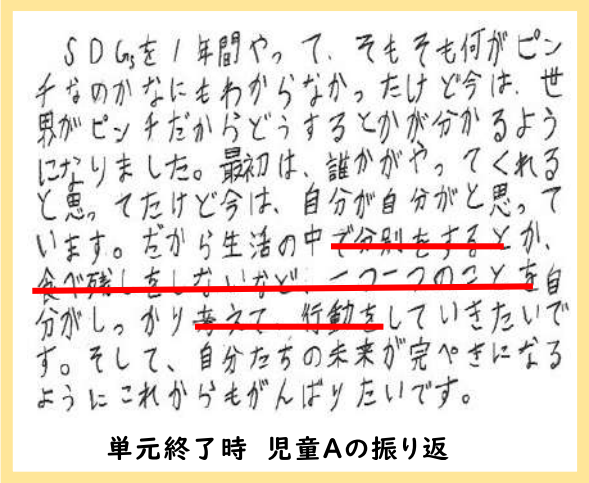
●本校としての「個別最適な学び」「協働的な学び」のとらえを明確にして、手立てとその検証方法を考えていく必要がある。

目次へ

研究主題	地域とともに　心豊かに生きるとがみっ子		
副　　題	～かかわりを大切にした学びを通して～		
学 校 名	蒲郡市立蒲郡東部小学校	校 長 氏 名	小島　千典

１　めざす子どもの姿

右は，令和５年度，５年生総合的な学習の時間『わたしたちにできるＳＤＧｓ』の学習を終えたの振り返りである。児童Ａは，世界がどのような問題を抱えているのか，自分にできることは何なのか，と自らの問いを追い続けた。ＳＤＧｓにかかわる様々な人との出会いや仲間とのかかわりを通して，他人事のように考えていた自分の未来が自分事に変わり，「一つ一つのことを自分がしっかり考え，行動をしていきたい」と，自分なりの答えにたどり着くことができた。そして，自分一人ではなく，他者を含めた「自分たちの未来」に向けて，これからもがんばりたいという思いをもった。このように，自他を大切に，自分の生活や未来をよりよくしていこうと動き出し，生き方を探していく児童の姿こそ，わたしたちがめざす子どもの姿である。家族や友だち，地域の人など，他者から愛され，認められ，必要とされることで，自分のよさや可能性に気づき，自他を大切に思う心や，自分の生活や未来をよりよくしていこうとする心を育むことができるだろう。そこで，令和４年度より，「地域とともに」をキーワードに，自立活動・生活科・総合的な学習の時間を中心として，他者とのかかわりを大切にした学びの実践を進めてきた。変化の激しい時代・多様化の進む社会において，次代の地域社会を創る子どもたち一人一人が，心豊かに生きていくことを願い，研究主題を『地域とともに心豊かに生きるとがみっ子』と設定し，本研究を進めることにした。


ＳＤＧｓを１年間やって，そもそも何がピンチなのかなにもわからなかったけど今は，世界がピンチだからどうするとかが分かるようになりました。最初は，誰かがやってくれると思ってたけど今は，自分が自分がと思っています。だから生活の中で分別をするとか，食べ残しをしないなど，一つ一つのことを自分がしっかり考えて，行動をしていきたいです。そして，自分たちの未来が完ぺきになるようにこれからもがんばりたいです。

単元終了時　児童Ａの振り返

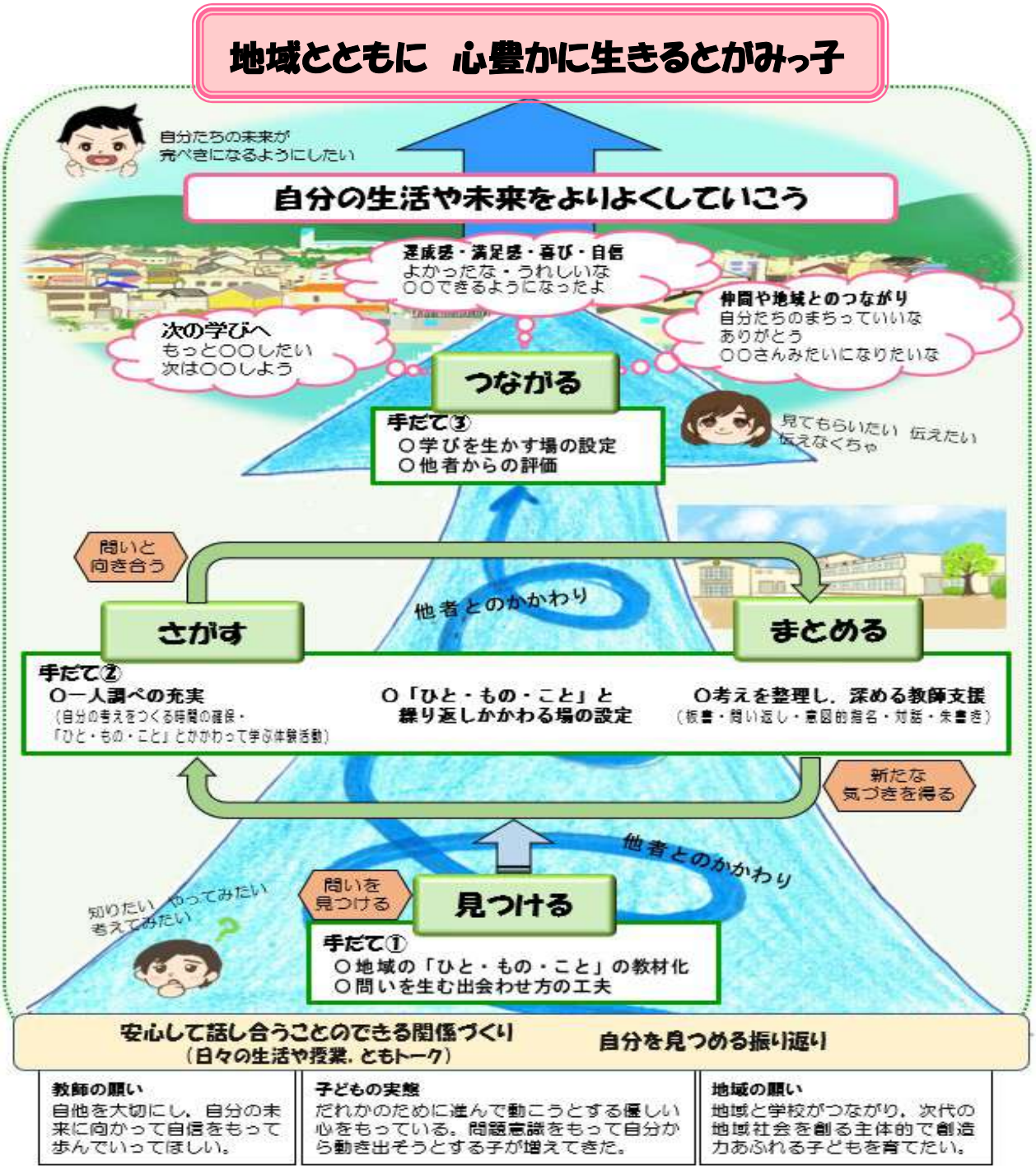
２　研究の仮説

地域の「ひと・もの・こと」をはじめ，他者とのかかわりを大切にした学びの過程を構想すれば，自他を大切にし，自分の生活や未来をよりよくしていこうとする子を育てることができるだろう。

(1)　各学年のめざす子ども

高学年　・自分のよさや可能性を認識し，自分も他者も大切にできる子
　　・地域社会の一員として，自分たちにできることを考え，よりよい未来のために動き出す子
中学年　・他者とかかわりながら，学ぶ喜びや達成感を味わう子
　　・地域の特徴や問題を見つけ，自分にできることを考えて，行動しようとする子
低学年　・自分の成長を感じ，意欲や自信をもって生活しようとする子
　　・自分のよさを知り，仲間や家族，地域の人と進んでかかわろうとする子
特別支援・自分を知り，周りの人たちから愛される子
　　・自分らしさを発揮しながら，よりよい行動をしようとする子

(2)　研究構想図及び手だて



3　研究の実際と考察

(1)見つける＜手だて１＞単元を貫く「問い」を掘り起こす

①地域の「ひと・もの・こと」の教材化

○６年総合「蒲東歴史プロジェクト！

～未来へつなごう 150 周年の伝統をつなぎ隊～」

開校 150 周年という節目に卒業生となる子どもたち。150 年続く学校の歴史を調べることで，自分の学校にある不変的なものの価値に気づき，伝統の担い手として動き出すと考え，蒲郡東部小学校の歴史を教材として取り上げた。子どもたちは，「校訓は 150 年前から変わっていないのか」



校章について探求する子どもたち

「そもそも校章はいつからあるのだろう」など，今まで当たり前に見てきたものが，実はわからないことが多いことに気づいた。そして，「150 周年の卒業生だからこそ，学校の歴史や伝統を調べて，下級生に伝えていきたい」と思いをもたせることができた。

○特別支援学級　自立活動「話したいな！聞きたいな！スマイルすごろく」

すごろく遊びが大好きな子どもたち。この実態をもとに，地域の人とかかわって遊ぶ「スマイルすごろく」という教材を開発した。すごろくのマスを工夫したり，クイズを行ったりし，楽しみながらコミュニケーションの基礎を身につけていけるようにした。マス目ごとに，さまざまなミッションを用意したことは，「○○くんスマイルカードだ」「ミッションカードだ」など，特別支援学級の仲間とかかわりながら，楽しんで活動する姿につながった。

②問いを生む出会わせ方の工夫

○４年総合「見つめよう蒲郡の環境　～海の生き物を守るためにできること～」

国語『ヤドカリとイソギンチャク』の学習をきっかけに，海の生き物に興味をもった子どもたち。そんな子どもたちを蒲郡の海（竹島周辺）と竹島水族館の生き物に出会わせた。竹島の海にどんな生き物がいるのか観察したり，竹島水族館の副館長さんに話を聞いたりすることで，自分たちの身近な海には，まだまだ知らない生き物やおもしろさがたくさんあることを知った。それにより，子どもたちは，「竹島にはいろいろな生き物がいることがわかったからもっと知りたい」「生き物のすみかがどこにあるか知りたいな」と振り返り，自分の問いを見つけることができた。

(2)　さがす・まとめる　＜手だて２＞個の学びを深める

①一人調べの充実（「ひと・もの・こと」とかかわって学ぶ体験活動）

○３年総合「はじめよう！福祉の一歩 ～みんなでハッピー～」

自分たちの町には，みんなが幸せに暮らすための工夫があるのかを知るために，子どもたちは本やインターネットで一人調べを始めた。その後，実際に見に行ってみたいという子の考えを受けて，蒲郡駅と市民病院に調査へ出かけた。音声案内の機械や点字など，実際に自分の目で見て，多くの工夫があることに気づいた。子どもたちは，「いろんな形の不自由があるから，たくさんのバリアフリーがあるといい」と振り返り，その必要性を感じ，自分の身の周りのバリアフリーを探し始めた。

②「ひと・もの・こと」と繰り返しかかわる場の設定

○２年生活科「めざせ！東部の町マスター ～お店探検編～」

「東部の町マスターになりたい！」という子どもたちの思いをもとに，東部の町のお店探検に出かけた。子どもたちは，そのお店ではどんなものを売っているのかについて調べた。その後の話し合いで，疑問が生まれたことをきっかけに，二度目のお店探検に出かけた。繰り返し探検に出かけ，お店の人とかかわり，友だちと気づきの交流を重ねた。自分が調べたお店の人の工夫や，「Ｋさんだけじゃなく，どのお店の人も，お客さんのためにがんばっていてすごい」と，がんばっていることを知り，気づきの質を高めていくことができた。

(3)　つながる　＜手だて３＞よりよい生活や生き方につなげる

①学びを生かす場の設定

○１年生活科「みんなでつくろう にこにこだいさくせん」

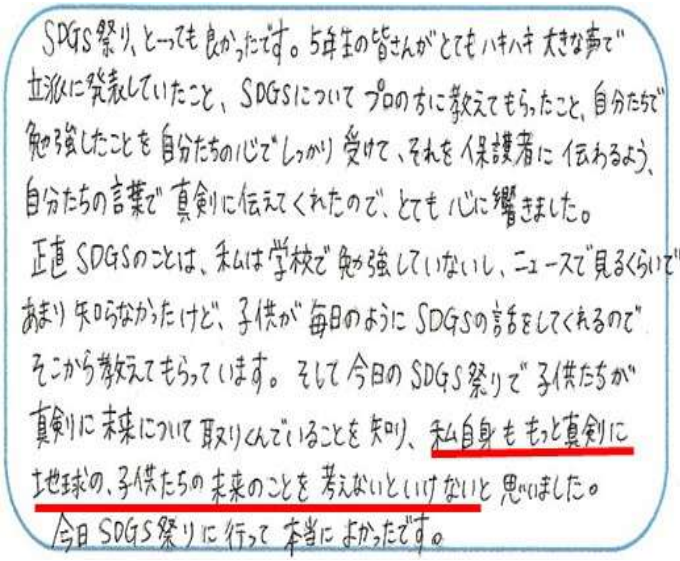
単元の最後に，これまでやさしくお世話をしてくれた６年生を招待し，お店を開いた。

６年生を楽しませようと一生懸命に活動していた子どもたちは，６年生が笑顔でお店を回ってくれたことに大喜びだった。子どもたちは，「６年」「おうちの人」「１年のみんな」「自分」など，いろいろな人をにこにこにできた喜びをワークシートいっぱいに表現した。さらに，その思いをみんなの前で発表し，自信や学びの達成感を得た。

②他者からの評価

○５年総合「わたしたちができるＳＤＧｓ　～ＳＤＧｓ同盟でつながる 蒲郡の未来～」

ＳＤＧｓに取り組むさまざまな人との出会いを通して，ＳＤＧｓの達成には多くの人の協力が必要だという思いを強くした子どもたちは，ＳＤＧｓ祭りを計画し，実行した。祭りには，これまで出会った人を招待し，直接感想を伝えてもらった。また，来てくれた保護者にアンケートを実施し，後日子どもたちに紹介した。他者からの評価により，学びを認められた嬉しさや自分たちの思いが伝わった実感をもち，大きな自信を得た。そして，「これからも蒲郡の未来のためにできることを考えていきたい」と振り返り，自分の未来をよりよくしていこうという思いを高めた。


SDGs祭り、とっても良かったです。5年生の皆さんがとてもハキハキ大きな声で立派に発表していたこと、SDGsについてプロの方に教えてもらったこと、自分たちで勉強したことを自分たちの心でしっかり受けて、それを保護者に伝わるよう、自分たちの言葉で真剣に伝えてくれたので、とても心に響きました。
正直SDGsのことは、私は学校で勉強していないし、ニュースで見るくらいであまり知らなかったけど、子供が毎日のようにSDGsの話をしてくれるのでそこから教えてもらっています。そして今日のSDGs祭りで子供たちが真剣に未来について取りくんでいることを知り、私自身ももっと真剣に地球の、子供たちの未来のことを考えないといけないと思いました。
今日SDGs祭りに行って本当によかったです。

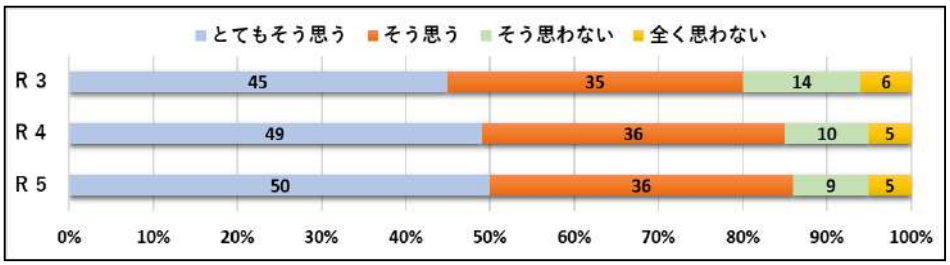
SDGs祭りの保護者アンケートより

４　成果と課題

○右に示した児童アンケートの結果より，自分のよさや可能性に気づく子が増えていることがわかる。

これは，他者とのかかわりを大切にした学びの過程を通し，他者から認められたり，必要とされたりすることで，達成感や満足感を得たことが，子どもたちの自己肯定感の向上につながったと考える。

令和4～6年度　学校評価アンケート結果比較「自分にはよいところがあると思う」



○各学年の振り返りや話し合いの様子から，自分の生活や未来について考え，動き出す児童の姿があった。子どもたちにとって身近な地域の「ひと・もの・こと」を教材化し，自らの問いを見つけ，他者とかかわりながら自分なりの答えにたどり着く探究学習を積み重ねた成果だといえる。

●アンケート結果から，１割強の児童が自分によいところがあると思わないと感じている現状がある。すべての児童が自分のよさや可能性に気づき，自他を大切にしながら，自分の生活や未来をよりよくしていこうと動き出し，心豊かに生きていけるように，さらに研究を続けていきたい。

目次へ

研究主題	子どもが主体的に学ぶ学校		
副　題	～対話を通して学びを深める「みがく」の実践		
学校名	新城市立八名小学校	校長氏名	河部　拓

1　実践の概要

目指す児童像は、課題を発見し、解決に向けて主体的に活動する姿である。そして、それを支える教師は、「今、何が必要なのかを考え、そのためにできることを積極的に進める教師」を目指す。そのように児童と教師が主体的に活動することを本校では「みがく」と呼ぶ。

また、児童が身に付けたい資質・能力を「自分で考え、みんなで深める力」とし、その力が様々な場面で発揮できる授業を行う。さらに、教師はお互いの主体性を尊重し、それぞれの強みを生かし合う教師集団を目指す。

2　活動内容

(1) 目標の共有のために

・「主体的」の意味の共有：主体性≒エージェンシー　→　自分でPDCAサイクルを回せる能力とする。（P：計画する　D：行動する　C：振り返る　A：改善する）

(2) 主体性を育てるための児童の「みがく」

・「八名っ子トーク」（スピーチ・話し合い活動）：「話す力」「聞く力」「プレゼン力」の獲得を目指す。
・「みがくノート」（自由研究）：「課題を見つける力」「考えを再構築する力」の獲得を目指す。
・ICTの活用：情報の収集、編集、発信をする力の獲得を目指す。

(3) 主体性を育てるための教師の「みがく」

・教師は子どもの実態をとらえ、興味関心に沿った授業を構想し実践する力を身に付ける。
・教師が主体的に研究に取り組むために、個別のテーマを設定し、情報を共有する中で切磋琢磨しながら、授業力の向上を目指す。

3　実践の様子からみる成果と課題

以下に手立てとして取り組んだ内容に照らし合わせて研究の成果と課題を記す。

(1) 成果

①主体性＝自分たちでPDCAサイクルを回せる能力と捉えての分析

授業後の検討会では、授業での児童の発言記録を「p：目標（課題）」「d：発問に対する意見」「c：質問や疑問」「a：新たな方向性の提案」に振り分け、主体的に本時に取り組めているかの判断材料とした。特に「c」や「a」といった発言の出現の有無について、その理由や課題を検討しあった。発言の種類付けを行ったことで、検討会の内容がより焦点化した。また検討会の終末には、「授業」と「研究」の両観点から本時における「成果」「課題」「次回にむけて」の3領域でまとめを行っていった。


PDCAサイクルが回せていたかの検証の様子

②主体性を育てるための児童の「みがく」

朝の時間を活用し、週4回程度「八名っ子トーク（スピーチ、話し合い活動）」を行い、子ど

もたちの話す・聞く・表現する力を育成した。また「相互参観」の時間を設け、他の学年の八名っ子トークをお互いに参加したり、助言したりすることを行った。相互参観の期間は、教師の希望もあり昨年度より期間を延ばし、児童も教師も切磋琢磨して、他学年のよいところを学び、自己の学級のレベルアップに努めた。


「八名っ子トーク」で話題を深める児童

また、児童が個別の取り組んでいる、自己の追求課題「みがく」については、その進捗状況も含めて、八名っ子トークにて一人年数回の発表を行った。発表の中で他の児童からの質問を受け、それが次の課題になったり、自己の研究の方向性に繋がったりした。年間を通じて発表を行うため、内容が洗練され充実したものになっていった。またプレゼンの際には「Keynote（端末のプレゼンソフト）」を用いて、自分の「みがく」について発表を行った。情報取集はもちろん、写真だけでなく動画もうまく組み込んで発表するなど、児童のICT活用能力は高まりを見せている。

③主体性を育てるための教師の「みがく」

子どもの実態をとらえ、興味関心に沿った授業、主体性を発揮できる授業を構想し実践することを目指した。授業案作りでは、抽出児を設け、その児童の普段の生活における主体的な姿をとらえる。そこから本単元における願う姿を設定し、「普段の主体性」から考えられる、その児童ならではの手立てを講じていく。また、授業内においては教師主導ではなく、児童の思考に沿った「対話を中心とした授業展開」を考え、複線化をすることで、自然な流れでの目標到達を目指した。

その他、「ICTの活用」「教師の出」「運動技能の向上」など、児童だけでなく教師も自分の個別追究テーマ「みがく」を設定し、日々の研鑽に努めた。現職教育等の中で、個々の取り組みの情報を共有、相談しながら年間を通じて切削琢磨した。また職員室に「みがくカレンダー」を設置し、研究授業だけではなく、普段の授業を他の教師に公開する日を書き込むこととした。見てほしい場面を公開し、指導を仰いだり、他の教師に対して新しい授業の提案を実際の授業場面で紹介をしたりして、学校全体を通じて授業力アップに努めた。


「みがくカレンダー」で日頃の授業も公開

(2) 課題と今後

今年度において行われた学力テストの結果から、昨年度よりさらに「話す・聞くこと」の能力に高まりを見せた学年は増加した。また、「思考力・判断力」の項目も市平均よりも高い数値が見られた学年が多く、日々の八名っ子トークや対話を中心とした授業を重ねた結果が表れてきていると言えよう。しかし、一部の学年ではあるが、「読む」「書く」といった項目に弱さを感じる児童もいた。また授業内における「PDCAサイクル」を見たとき、「c（質問・疑問）」の発言が出て、自分たちで課題について追究していく姿勢が見えたことはよかったが、話し合いの方向を自分たちで提案したり、次への課題を創り上げたりする考えである「a」の発言の出現率がまだまだ低いことがあげられる。今後も主体性を育むことに重きを置きながら、その中で児童の学びをバランスよく鍛え、自分の未来を自分で創り上げていける子の育成を目指していきたい。

目次へ

研究主題	関わりの中で自分の思いや考えを進んで発信できる子の育成		
副　題	～関わりを楽しみ、学びを深める～		
学校名	新城市立作手小学校	校長氏名	服部 智子

（1）主題設定について

作手の子どもたちは、全体的に素直で思いやりのある子たちが多い。何事にもまじめに取り組む様子もある。しかし、授業場面では決まった子が発言し、その他の子たちは、自分で考えたことを伝えようとせず、決まったことに対してはこつこつ取り組む傾向にある。

そこで、一人一人が自分の思いや考えをもって、「主体的」に活動する子どもの姿はどのような姿でありたいと願うかと出し合うと「関わり合いをもつ子」「進んで発表する子」「自らの学びを楽しむ子」等、これらのキーワードから話し合い、具体的な主題に絞ることとした。結果、目ざす子どもの姿を「自分の思いや考えを進んで発信する（伝える）ことのできる子」に絞った。しかし、ただ一方的に自分の思いを発表することに終始するだけでは目指す姿にはなり得ない。そこに作手の特色、作手の子どもの強みである、作手との関わりがあって初めて「自分の思いを相手に伝えたい」「お互いに伝え合う中で問題を解決したい」など、関わりをもって自分の思いや考えを進んで発信する（伝える）姿が見られるようになるであろう。そしてそれをきっかけとして主体的に学ぶ姿へとつながり、将来的に大人になった時、時代に大きな変化がもたらされても、自分で考え、行動することができ、いきいきと生き抜く礎になるであろうと考える。

（2）研究にあたって

「主体的な学び」や「自ら学びを楽しむ」というレベルは本校の子どもたちにとってはかなりハードルが高いと思われる。また、教師によって捉えるイメージは当然それぞれ違うため、年度当初から各教師が目ざす姿をお互いに意見を出し合って共有し合い、子どもが自分の思いや考えを進んで発信（伝えることの）する姿が見られる授業のイメージを統一したい。そして、そこから有効であった手立てをお互いに共有し合う中で、『やりたい、伝えたい、知りたい(聞きたい)』といった子どもの主体的な姿を授業の中で見られるよう、授業の流れを考えていく。自分の思いや考えを進んで発信（伝えることの）できる子どもを育て、その延長に「主体的（『やりたい、伝えたい、知りたい(聞きたい)』）に学ぶ」子を育てることにつながっていくだろうと考える。そして、自分の思いや考えを進んで発信（伝えることの）するための手だてとして、「作手との関わり」が大きな手だてになると考え、「関わりの中で、自分の思いや考えを進んで発信（伝えることの）できる子どもの育成」について研究をすすめていくこととする。

研究を進めるにあたり、教師が互いの授業や朝の会での「友だちの話」などを見合う時間を学期ごとに設定したり、次に生かせる事前・事後検討会のもち方を見直したりすることに重点を置くことにした。また、本校では「板書型指導案」を採用している。これは板書に役立つのみではなく、子どもの発言をどこに位置付けるかを考えることで、話し合いにおける子どもの思考のずれを教師が意識でき、子どもにとっても、自分と友達の考えの違いに目を向けやすくなり、それらを比べながら話し合いを進めることができる。さらに板書型指導案のよさを最大限に発揮するために、発問や課題に対する子どもの考えをどう取り上げ、どう整理するとより効果的かを模索した。

（3）研究実践



特別支援学級（情緒）に在籍する１年生男子児童は、自分の好きなキャラクターの世界に入ってしまい、他者との関わりが希薄になってしまう傾向が見られた。そこで、コミュニケーションや学習の基礎となる「聞く力」「話す力」「推論する力」を楽しく身につけるためにカード教材「あそびっくす！まなびっくす！」を活用して、人と関わる力（関わって会話をする力）をつけたいと考え２つのゲームを取り入れた。１つ目は、「相手の話を最後までよく聞く力」をつけるために、３ヒントクイズを行った。９枚の絵カードから、３つのヒントが示すカードを選ぶというもので、最後までヒントを聞かないと答えが絞れないようにしたところ、よく聞いてカードを選ぶことができた。２つめは、カードの絵を見てお話を作って説明するという「お話ビンゴ」に取り組んだ。男児は、ぬいぐるみを他者として絵カードの内容を「男の子が椅子に座ってテレビを見ています。」と話した。「男の子が粘土で遊んでいます。」に対して「何を作っていますか。」と聞くと「蛇を作っています。」等と質問をすることで担任と関わり、話をつなげ、会話を楽しむことができた。

（4）今後の取り組み

本研究２年目の成果と課題を受け、更に共通理解を深め、授業研究を通して指導の改善を図ることで「他者との関わり・対話」にフォーカスし、関わり・発信という視点から授業分析を行ってきた。今年は特に地域社会との関わりや他校との交流、また、市議会への参加等、自分たちの思いや考えをより多くの人へ発信することができた。これも地元作手を愛する気持ちが今まで以上に育ってきていることの表れではないかと思われる。さらに来年度は発表の年を迎える。これまでの成果を生かしつつ、今後に向けてこれからもチーム作手小の団結力とふるさと作手の魅力を大切にするとともに、子どもが関わりの中で自分の思いや考えを進んで発信していくため、教員一丸となって授業力向上に励んでいく。

目次へ

研究主題	情報社会の中で自分らしさを発揮する子		
副　題			
学校名	知立市立知立小学校	校長氏名	伊藤　雅彦

本校の子どもたちの様子

地域との関わり　　タブレットの日常的な活用



人　場所　こと　授業　行事　委員会　休み時間等

浮かび上がってきた課題

- ICT機器を用いた情報収集に偏る
- 情報を活用した探究的な学びに至っていない
- ICTの使い方を考える場や経験が不十分

- 体験とICTの両方を大切にしながら、思いや願いに合わせて情報を活用してほしい
- ICT機器をよりよく活用し、情報社会を生きていく力をつけてほしい

研究主題

情報社会の中で自分らしさを発揮する子

目指す子ども像

思いや願いに合わせて情報を活用する子

ICTをよりよく活用しようと絶えず考え続ける子

実現の主な手だて

体験×ICTを取り入れた授業

- 体験×ICT
- 探究的な学習過程
  (1)課題設定　(2)情報収集
  (3)整理・分析　(4)まとめ・発信
- 情報活用能力表

デジタル・シティズンシップ教育

- 情報の時間
- デジタル・シティズンシップ項目表
- 知小デジタル・シティズンシップモデル
- 情報委員会

イ　実践の概要

○提案授業

６年　情報の時間　　「SNS と個人情報」　　授業者　保田大輔 教諭

５年　国　　語　　「学区の魅力をもっと伝える広告記事を考えよう!!
～知立小学区の魅力を伝え隊～」　　授業者　木股和希 教諭

講　　師　　愛知教育大学教育ガバナンス講座　　江島　徹郎　教授

「体験×ICT を取り入れた授業（教科等）」「情報の時間」の提案授業として、全体会授業を行った。講師の江島先生から、体験活動を生かした単元計画やタブレット端末の効果的な使用の仕方、「知立小デジタル・シティズンシップモデル」、指導案の形式等についてご助言をいただいた。



1 活動名「SNSと個人情報」

2 目標

ソーシャルメディア上において、個人情報が流出する可能性のある発信について考えることを通して、自分や他人の情報を守る方法について検討し、今後の行動にいかそうとする。【Ⅲ－5 自分や他人の情報を守る】

3 本時について

本学級の児童の実態	本学級の子どもたちのスマホ所持率は、6割以上である。クラスの半分以上の子どもたちがInstagramやTikTokなどの世間ではやっているSNSを知っているし、利用している。一方、SNSで発信経験のある子は2割以下である。デジタルの世界に参加はしているが、まだ
本時で育成したいデジタル・シティズンシップ	子どもたちは、成長するにつれて、さま 自分や友達の発信、面識のない人との れるかわからない。子どもたちが個人情 し、豊かなデジタル生活を送っていくため 動する態度を養いたい。

4 指導過程　【定義】⇒【事例】⇒【検討】⇒【行動】⇒【家庭】

学習内容・予想される児童の思考の

1　インターネット上における「個人情報」とは何かについて

【定義】個人情報とは、大勢の中から自分を特定できる情報（名

2　SNSの投稿の事例を見て、問題点について考える。

・友達と一緒に写っている写真がある。許可を取ったのかな？
・授業参観の写真がある。　・自分の家が写っている写真がある。

主発問　自分や友達を守りながらＳＮＳを利用するには

③　SNSを利用する際にどんなことに気をつけ、行動すればよ

(1)個人で考え、ロイロノートで提出。

(2)ペアで意見交換。　(3)全体で意見交換。

・自分の居場所が分かる写真や文章には気をつけなきゃいけないね。
・知らない人が見ていることを考えながら発信しないといけない。
・友達の情報がばれないようにしないといけない。

SNS
メージ
し、投

本時
にする
場面を

ふりかえり

これからインターネットなどで発信をする際に、どんなこと

・個人情報を誰かに知られることはとても怖いと思った。よく考
・友達に迷惑をかけることがある。自分だけでなく、友達の情報
・ロイロノートで友達に送るときに、許可を取らずに友達の写真

5 評価

ソーシャルメディア上において、個人情報が流出する可能性のある発

人の情報を守る方法について考えることができたか、発言やワークシー

「情報の時間」
学習指導案

5年生　国語科「知立小学区の魅力をもっと伝える広告記事を考えよう!!
－知立小学区の魅力を伝え隊－」　単元計画
（本時6／11＋α）

情報活用能力　A：調べる　B：記録する　C：整理・分析　D：関わる　E：まとめ・発信

単元の流れ　　数字…時数

1　「学区の魅力度の状況から課題をつくろう！」
・知立駅はすごく栄えているけど、あまり魅力が伝わっていないのかな
・知立神社の歴史的な場所もあるのにね　・ちりゅっぴは知立市だから違うかな
・もっとみんなに知ってもらいたいね

「出動だ!!　知立小学区の魅力をもっと伝えるための広告記事を作成せよ!!」

2　「記事の書き方をプロフェッショナルから学ぼう」
・順序立てて書けるように、「プロット」を作ろう　・事実と考えを区別して書こう
・大事な記事が伝わるように「選ぶ情報」をきちんと考えよう

3、4＋α「どんな情報を集めたらよいのか計画し、実際にいろいろな情報を集めよう」

・インターネットやインタビュー活動、フィールドワークで学区の魅力を調べる（A－Ⅳ）

・集めた情報をタブレットやノートなどに文字や絵、写真や動画などで記録する（B－Ⅳ）

・インターネットではあまり意見が出てこなかったな
・フィールドワークをしてみたら「歴史的な建造物」が学区には多いと分かってきたよ
・サポート隊の人に聞いたら「いい人が多い」って話していたよ

5　「集めた情報を整理しよう」

・集めた情報をフリーボードや思考ツール（X、Yなど）に整理する（C－Ⅳ）

・分類していくと、やっぱり「人と人とのつながり」が魅力だということが分類してわかったよ
・駅や高速道路が近いことが関連してくのかなということが整理して見えてきたような気がするよ

6、7　「どの情報を「中」にいれるととより魅力が伝わるのかみんなで話し合おう」

・整理した情報を根拠にしながら自分なりの考えを話し合う（D－Ⅳ）

＜知立神社＞	＜公園＞	＜知立まつり＞	＜知立駅周辺＞
歴史的な場所で、いろいろな人もすごいっていっていたので一番伝えたい。	学区にはたくさんの面白い公園があるのでそれをみんなに伝えた方がいい。	５月の本祭りはすごかった！これは伝えないわけにはいかないと思う。	いっぱい新しいものができていて、これからに向けても伝えていきたい。

8　「どのような順序で文を作ったら良いか話し合おう」

・思考ツール「ステップチャート」を使って伝える順序を考える（C－Ⅱ、D－Ⅲ）

・一番初めに「重要な情報」を入れた方が見てもらえると思うよ
・中の１つ目の分量を一番多くして、あとの２つは小さくしたらどうかな

9・10＋α　「実際に記事を作成しよう」

・記事の作成方法を、ＩＣＴや紙など伝わる形を選択する（E－Ⅱ）

・「事実と自分の考え」を分けて書かないと相手に伝わらないな
・「見出し」もすごく大事だからきちんと考えて書きたいな

11＋α　「記事を関係する方々に発表しよう」

・インタビューした方や知立小学校のみんなに学区の魅力を伝える（E－Ⅴ）

・喜んでもらえてやってよかったなと思いました
・これから記事を作るときには、今回のようにやったら伝わることがわかりました

「体験×ICT を取り入れた
授業（教科等）」単元計画

○学年部会での授業実践

６・７月に実践した取組は、特低・中・高学年部会として行った。それぞれの部会で指導案検討をし、参観・協議会は主題推進委員も参加して行った。

月日	学級	教科等	単元名・題材名・主題名	授業者
６月12日	すみれ	自立活動	食で楽しく ～食べ残し、食品ロスについて考える～	田邉　節子 教諭
６月21日	もも			平野　伸一 教諭
７月17日	１の１	情報の時間	デジタル足あとってなんだろう？！	岩田　和江 教諭
７月　２日	１の３	生活	しゃぼん王国にとどけよう！ ～ぼくのわたしのすてきなしゃぼんだま～	平野由希菜 教諭
７月　３日	２の３	音楽	なきごえをつかってあそぼう ～お気に入りのなき声で音楽をつくろう～	村上　文依 教諭
７月17日	３の３	ちりふ (総合)	知立のすてき大発見！～みりょくいっぱいの知立～	稲熊ひとみ 教諭
７月　２日	３の４	情報の時間	作った人の気持ちを大切に使用	中野小百合 教諭
７月　３日	４の２	音楽	いろんな木の実　いろんなリズム！ ～拍に乗っていろいろなリズムを感じ取ろう～	伊籐　実萌 教諭
７月　１日	４の４	情報の時間	情報の信頼性	佐藤ひとみ 教諭
６月28日	５の３	音楽	音で表現 ～山の学習がもっと楽しみになるアンサンブルコンサート～	渡辺　愛優 教諭
６月27日	５の４	図工	つくろう！もっと学校が好きになるピクトグラム地図	前田　航太 教諭
６月26日	６の１	国語	プレゼンテーションをしよう ～考えよう！学校のために私たちにできること～	森　扶紀子 教諭
６月28日	６の３			林　　玲名 教諭

ウ　知立市教育委員会委嘱研究発表会　１１月７日（木）

「情報社会の中で自分らしさを発揮する子」

・全体会（研究概要）

・公開授業（イ実践の概要「学年部会での授業実践」以外の全学級）

・講演会「青になれ！～子どもたちのICT活用とその支援」

愛知教育大学教育ガバナンス講座　　江島　徹郎　教授

(参加者の感想)

今はICT機器等を強く推進しているように思いますが、ICT機器を使うことを強制せず、ICT機器はあくまで１つのツールとして、子どもたち自身がどのように学ぶのかを選べることが良いと思いました。

情報の時間では、正しく情報を扱うための意識を学ぶだけでなく、「自分ならどう使うか」というように自分事として捉えて学んでいる印象を受けました。

教科の授業でも自分の思いを表現したり、情報を比較・整理しやすくするために「タブレットを活用」したりしており、結果子どもたちそれぞれの「自分らしさ」が表れているように感じました。実際の体験も大切にしながら、タブレットに頼りすぎることなく上手く活用していくことが大切だと学ぶことができました。

教員だけでなく、児童も委員会活動でICT機器の活用方法を考えて全校に発信しているのはすばらしいと思いました。

目次へ

研究主題	学び合うって楽しい！		
副　　題			
学 校 名	高浜市立翼小学校	校 長 氏 名	村越　茂樹

１　主題設定の理由

本校ではこれまで、学習指導要領で示された「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すために、令和４年度は研究主題を、児童が生き生きと主体的に学ぶ姿に重点を置き「分かるって楽しい！」とした。令和５年度は、より具体的に授業の中で児童が互いに関わり合い、学びを深めていく姿に重点を置き「学び合うって楽しい！」を主題として設定し、実践を進めてきた。この２年間の実践において、本研究の基礎の部分となる「教材・題材との出会いの工夫」と「個の学びを充実させる」の二つの手だてについては、効果を十分に確認することができた。昨年度の実践では、各学年の実践の中心が、三つ目の手だてとなる「『学び合う』１時間の授業をデザインする」へとシフトしてきている様子が見て取れた。そこで今年度は引き続き「学び合うって楽しい!」を主題とし、特に「『学び合う』１時間の授業をデザインする」を手だての中心に据え、昨年度の実践に改善を加えながら研究を継続していきたいと考え、主題を設定した。

２　目指す児童像

本研究において、目指す児童像は次のとおりである。

自己の考えを広げたり、深めたりして「学び合う」ことの楽しさを実感することができる児童

３　研究の仮説

研究主題と目指す児童像を受け、次のように仮説を立てた。

自分の思いや考えをもち、他者と交流することで、自己の考えを広げたり深めたりして「学び合う」ことの楽しさを実感することができる児童が育つだろう。

４　具体的な手だて

仮説を立証するために以下の(1) ～(3) を手だてとして講じる。特に、今年度は(3) に重点的に取り組む。

(1)　教材・題材との出会わせ方を工夫し、単元を貫く課題をもたせる。
(2)　宝物をたくさんもたせる。
(3)　「学び合う」　１時間の授業をデザインする。

ア 主発問の吟味、イ 意図的な指名、ウ 教師の出場、エ ツール、オ 振り返り

５　研究構想図

資料１　研究構想図

学び合うって楽しい！

現在の児童

目の前の児童を見つめる

興味・関心　どんな力をつけたいか

「翼トークタイム」で土台を育てる

毎週１回朝の時間に話し合いの場を設け、自分の思いや考えを自由に話し合える土台づくりを行う。

手だて(1)　教材・題材との出会わせ方を工夫し、単元を貫く課題をもたせる

→　教材との出会いを工夫し「なぜだろう」「〇〇ができるようになりたい！」「どのような〇〇にすればいいだろう」と単元の終わりまで、探究エネルギーが持続する課題をもたせる。

手だて(2)　宝物をたくさんもたせる（個別探究、知識構成型ジグソー法）

→　児童にとって自分だけの考え【宝物】をもたせる。Ex 生活科シャボン玉作り「大きなシャボン玉をつくろう」宝物とは「自分だけの液の配合、ストローの工夫、吹き方など」

2023 年度主題研究授業　理科「水溶液の性質」

液性を調べた児童×加熱実験をした児童

→学び合いたい（話し合いたい）へ

学び合いの授業

見る・聴く・話す

関わり合う

手だて(3)　（主となる手だて）「学び合う」１時間の授業をデザインする

ア　主発問の吟味

→　授業の根幹に関わる部分、児童に何を学ばせるのか。そのために何を問うのか。

イ　意図的な指名

→　児童の考えを深めるために、事前に児童の考え（宝物）を把握して指名する。

ウ　教師の出場

→　児童の考えを揺さぶったり、軌道修正をしたりする教師の出場を想定する。切り返し、補助発問。

エ　ツール（板書、名札、ポートフォリオ、教室掲示、ミニホワイトボード、ロイロノートなど）

→　児童の学び合いが深まるために必要な物の工夫、どのように活用するかを想定する。

オ　振り返り

→　学び合いによって、児童全員が自分の考えを見直し、次の学びにつながるように記録を残す。

未来の児童

単元後の「目指す児童の姿」

６　研究の実際

(1) 第４学年総合的な学習の時間

単元名「４ゆうプロジェクト～あなたの勇気と優しさが、共に歩む地球の未来へ結ぶ～」

①　単元の捉え

「環境」の学習を通して、環境問題と自分たちの生活にはつながりがあり、自分たちの意識や行動が地球の未来に大きく関わることに気付いた。そこで、得た知識を使って学校でできることを考え、実践する単元計画を立てた。個々の気付きや考えを全体で共有したり、課題解決に向けて話し合う場を設定したりすることで、仲間の見方や考え方から新たな視点や多くの考えを得て、課題を自分事として捉えながら、自分の考えを広げたり深めたりすることができるのではないかと考えた。

②　主となる手だて

・手だて(1) 教材との出会わせ方の工夫

全校児童の環境問題に対する知識や行動意識に関する実態調査の結果を提示する。

・手だて(3) オ 振り返り

「振り返りの視点」をもたせ、自分の見方や考え方が広がったり変わったりするきっかけとなった仲間の意見を、自分の考えと共に記述するよう助言する。

③　実践と考察

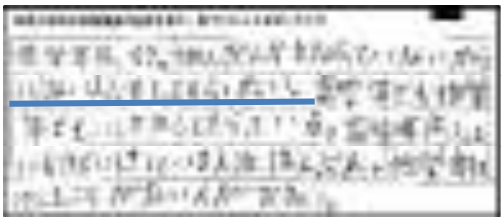
調査結果を児童が差や違いを読み取りやすいグラフにして提示することで、低学年が環境についてほとんど知らないことや、高学年は知っていても意識できていない人が半数以上いる現状が、一目で視覚化された（資料２）。A児は、低学年と高学年の知識量の差や行動意識の違いに気付くだけでなく、それを踏まえて、「低学年にも環境問題について知ってもらいたい」と課題を見つけることができた（資料３）。このように「憶測」ではなく確かな「実態」を見せることで、児童にとって課題がより自分事となり、課題解決への気持ちを高めることができた。さらに、実態に合った工夫の必要性を児童が実感できたことで、話し合いの目的が明確になった。

振り返りでは、仲間の考えで「なるほど（新たな気付き）」や「そういう考えも大切だな（共感）」と感じたことを自分の考えと共に記述するように「振り返りの視点」を明示した。そうすることで、児童は板書や話し合いを振り返り、何をきっかけに自分の考えが広がり、深まったのかを再度分析し、整理して書く姿が見られた。振り返りを通してA児は、仲間の考えを受けて、みんなのやる気が出る工夫の必要性に気付き、自分の思いをどのように伝えるといいか、新たな視点を得て、自分の考えを深めることができた（資料４）。

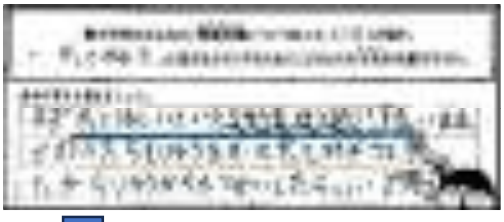
資料２　黒板に提示した資料の様子



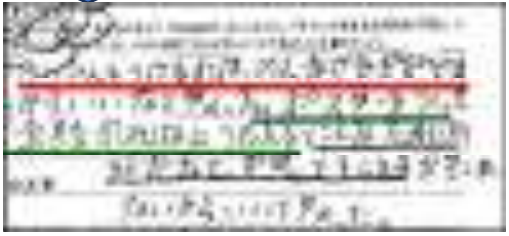
資料３　A児のワークシート



資料４　A児の考えの深まり



仲間の考えを受けて



７　研究の成果と課題

児童が互いに関わり合い、学びを深めていく姿に重点を置き「学び合うって楽しい！」を研究主題として設定し、次のように成果を上げた。

４年生の総合的な学習の時間では環境についての学習を行い、それらを基に全校に学びを広げるための単元を仕組むことで、児童に課題を解決しようという強い思いをもたせることができた。また、振り返りで「具体的な視点」を示すことで、仲間との関わりの中で自身の考えがどのように変化したのかを明確に認知させることができた。

他にも、運動会の練習において、ICT機器を活用し、運動会の成功に向けて学年全体で児童同士が関わり合い、学び合うことできた。タブレット端末で撮影した練習動画を即座に学年全体で振り返り、児童たちはよりよい運動会にするために思いを伝え合い、学び合い、技と心を磨いていくことができた。そうした練習を積み重ねながら、本番では運動場に生き生きと踊り、声を出し、皆と思いを一つにしたソーラン節を披露する児童たちの姿があった。運動会後の振り返りでは、達成感や全員で心を一つになった喜びを表現していた。

資料５　運動会の様子



いずれの学年においても、児童と児童が関わり合うための「学び合う」場を設定することで、児童は新たな視点を得て考えを広げたり、自身の考えを再考して考えを深めたりと価値ある学び合いを行うことができた。このことは本研究における最大の成果である。互いに意見を出し合う児童の姿からは、学び合いの授業を価値のあるものとして、楽しいと感じている児童も多くいるだろう。

一方で、その学び合いを楽しいと感じるという感情面を、目指す子ども像に設定したが故の苦しみもあった。今年度までの成果を生かしつつ、次年度以降よりよい研究にしていくために、研究の根幹となる部分を見直していくことが今後の課題である。

目次へ

研究主題	「学び合い、学びを深める」授業づくり		
副　題	聴き合い・振り返り		
学校名	みよし市立緑丘小学校	校長氏名	江上　俊郎

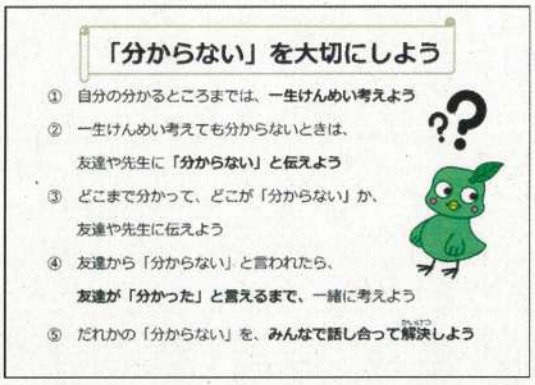
1　研究の概要

「緑丘小の子どもたちには力がある」、この言葉を合言葉として、子どもたちの力を信じ、子どもたちの活躍できる場をより多く設定していくことで、みんなの「笑顔があふれる学校」をめざしている。授業は、子ども同士が相互に認め合う、学び合いのある授業を目標とし、「学びを見通す」「学び合いを生み出す」「学びと学びをつなぐ」ことで、学び合い、学びを深める授業ができると考え、研究を進めている。

2　研究の実際

（1）「分からない・困った」を大切にした授業や学級づくり

どの教科においても、「自分の言葉でまとめる力」が要求されている。そのために、友達の考えを聴いて自分の考えを深め広げるように、聴き合いや振り返り活動に取り組んできた。また、安心して互いの考えや違いを認め合える関係を築けるような学級づくりや学び合いに力を入れてきた。授業の中で、話を聴く、聴いてもらえる安心感、「分からない・困った」が言える雰囲気づくりを大切にすることで、失敗を恐れずに挑戦しようという意欲と自己有用感を高めることができる。そこで、「『分からない』を大切にしよう」という掲示を教室に掲げ、授業者も子どもたちも常に意識できるようにしている。また、授業者の経験年数に関わらず、子どもが安心して学ぶことができる授業のポイントを明確化した「みどりのいっぽ」を令和６年度版に改訂し、今年度も取り組んできた。



算数科２年「直線で囲まれた形をしらべよう！」では、課題に取り組んでいく中で、長方形を大きさの違う正方形で埋めようとすると、考えに行き詰まる子どもが出てきた。その様子を見つけた授業者が全体に「何か困っていることあるかな」と問うと、「隙間ができちゃう」「２行空いちゃう」など、困っていることを素直に伝え、学級全体で共有することができた。また、算数科４年「面積博士からの挑戦状」では、グループで考えた解法を発表した後、「分かったかな」という問いかけに、他グループの子どもが挙手し、自分の理解を加えて再度説明をする姿が見られた。教師が「分からない」を大切にすることで、子どもたちが自由に言いやすい雰囲気と、みんなで解決しようという意識が定着していることが分かった。


【「分からない」に応える姿】

新たな課題としては、自由に言い合える授業ができるようになってきたことで、大人の想定を越える突拍子もない考えが出てくるようになったことがある。そうした意見は、子どもたちの思考を揺さぶる。そして、「どう思う？」「他の言葉で言える？」など、子どもの言葉を基に学級全体に問い返していくことで、さらに深めていくきっかけとなる。予想外の意見や他の子どもたちには理解し難い意見を受け止め、子どもたちに戻していくこと、「子ども

の言葉、考えで授業をつくっていく」こと、これらは継続して取り組んできた授業づくりの考え方である。教師が子どもたちの意見で授業を展開していく意識を高くもち、どの子も大切に、子どもたちの力を信じて授業していきたい。

（2）ペア・グループを活用した仲間づくりや授業

本校では、「にこトレ」という活動を行っている。「にこトレ」とは、コミュニケーション能力の向上と人間関係の構築を図るための取組のことで、水曜日の朝の帯時間を利用して行っている。学年の実情に合わせ、難易度やグループの人数を調整することで、どの学年、学級でもさっと取り組めて楽しめる、そんな取組である。また、「にこトレ」の前には、約束事を復唱し、みんなが気持ちよく楽しむための素地を作る。５月には、１年生はペアの二人で「肉まんじゃんけん」、２年生以上は３、４人で「ぎょうざじゃんけん」を行った。じゃんけんとは言っても、勝ち負けが決まるのではなく、全員が別々の手を出すことができたら、にくまんやぎょうざが完成、足りない手があったら、「肉（グーのこと）がない～」など足りない手をグループのみんなで言う、というトレーニングである。勝敗ではなく、うまく手が分かれれば肉まんや餃子ができ、できなくてもみんなでそれを悲しむという活動は、子どもたちが引き込まれ、連帯感が生まれ、自然と笑顔があふれる時間となった。

<やくそく>
1　ともだちが　いやなきもちに
　なることを　いいません。
2　ともだちの　はなしは　めを
　みて、うなずいてきこう。
3　おわったら「ありがとう」を
　つたえあおう。


【前のめりになっていくグループ】

授業でも、ペア・グループ活動で、子どもたちは関わり合いながら一緒に考え、高め合っている。国語科３年「モチモチの木」の性格マップ作りでは、「理由はどうしよう…」「○○さんは？」など、友達の意見を聴きながら自分の考えを明らかにしていく姿が見られた。「思いついた！」「あ、分かった！」と、歓声を上げながら考えを深めていくうちに、頭が近づき、記録者の手元をのぞき込んでいった。算数科６年「円の面積」では、教師からグループになることを指示するのではなく、子どもたちが自分たちのニーズによって選択する展開を取り入れた。自分たちが必要性を感じたグループ活動では、友達に聴いたり、見合ったりすることで、課題解決に向けて主体的に活動する姿が見られた。

グループ活動は、個の学びを強化するもの。答えを一つにまとめたり、絞ったりすることはねらいではなく、他の意見を取り入れ、考えを深めたり広げたりするものである。そして、ペア・グループの活動ありきではなく、子どもたちが学びの中で必要性を感じた時に行うべきものである。本年度の実践を通して、この認識を深めることができた。みんなの意見を聴き合う場となるように、例えば、「分かりやすいのはどちらか」「違いは何だろう」といった視点をもってグループ活動ができるようにすること、自分の考えと比較し、自分とは違う考えを見つけること。そのために、「同じで…」「違って…」といった論理的説明力を高める指導を次の課題としたい。

（3）新たなジャンプ問題への挑戦

子どもたちが「学び合い、学びを深める」授業づくりのために、今年度も算数科の授業で、ジャンプ問題を取り入れた。一見難しそうだが、今まで学習したことを生かせば分かる問題、友達と「ねえ、これってさ…」と会話が始まる問題などをジャンプ問題として提示した。子どもた

ジャンプ問題
～学級の力でのりこえる！～
ひとりじゃない
仲間がいる



ちは算数科でのジャンプ問題を楽しみにしている。５年生では、「ジャンプ問題をやるよ」と言うと、「やったー！」と歓声が上がる。継続的に「これまでの学びを生かし、協働で考えると求めることができる」という感動を積み上げていくことで、学びの意欲につながっている。

子どもたちが自分たちの力で思考していくために、学びの足跡、見出し付けなど、足場かけを意識した授業展開を図ってきた。その際、子どもたちの言葉で残すことで、活躍の場とすることも大切にした。





【子どもの言葉で付けた見出しがいつでも見られる「学びの足跡」】

算数科１年「みどりにんじゅつがくえん～かたちのくにからのちょうせんじょう～」では、子どもたちが擬音語を使って色板を動かして説明した。その言葉を「スーッの術」「くるんの術」と名付けることで、全員が共通のイメージをもって動きを理解することができた。算数科５年「どんな図形でもこうかばつぐん！～めざせ面積マスター～」では、学びの足跡を見ながら、「三角形の分身方式と台形で…」「ずらす方式で考えたい」と、自分で命名した方式名を活用して説明し合っている姿が見られた。また、いろいろな方式を活用することで、いくつもの解法を導き出すことができていた。その結果、どんな方式を使っても答えは同じであることに気付くことができた。算数科１年「みどりにんじゅつがくえん～どうするながさくらべ～」では、学習の最後に、本時で学んだことの見出し付けを考え、「ひもの端をそろえて長さを測ることが大切」と確認することができた。



【自分の意見を堂々と発表する姿】

今年度は、３年「モチモチの木」で、国語科でのジャンプ問題に挑戦した。協議会では、国語科におけるジャンプ問題とは何かについて考えた。「算数科では、一人では難しい問題にみんなで取り組んで乗り越えることをめざしていたが、国語科では、友達の意見を聴いて違いを楽しむことをめざすとよい」「読み取ったことから自分の生活につなげて感じ取ることができる発問がよい」といった意見が出された。国語科では、教材から離れすぎず、叙述を根拠にすることが必要である。そのうえで、読みの違いを楽しむことをジャンプ問題として設定していくとよいことが分かった。違いを拾い、それを認め合うこともジャンプ問題となる。講師としてお世話になっている愛知教育大学特別教授・土屋武志先生からも、学びを深めるものがジャンプ問題なので、どの教科でもできるというご指導をいただいた。今後は、算数科以外の教科でのジャンプ問題に積極的に挑戦していきたい。

次年度への課題として「振り返り」の活用も挙げられる。異学年交流で取り組む縦割り清掃、６年生が企画・運営する避難訓練など、全校児童の振り返りを生かし、自己有用感を高め、さらなる課題を見つけ出している。授業で行っている一人一人の振り返りを、学級全員が共有し、互いの学びを認め合いつつ、次の課題を子どもたち自身が見つけ、解決していく授業づくりをめざしていきたい。

目次へ

研究主題	豊かな心をもち、目を輝かせて学び、たくましく生きる子の育成		
副　題	伝えたい！聞きたい！という意欲を高め、伝え合う力を育てる授業・学級づくり		
学校名	幸田町立坂崎小学校	校長氏名	都築　孝明

研究主題にある「豊かな心」、「目を輝かせて学」ぶ、「たくましく生きる」から、本校では知・徳・体のバランスが取れた子どもの育成を目指している。その研究主題に基づき、副題を上記のように設定した。副題にある「伝え合う力」を育てるには、子どもたちが「伝えたい」「聞きたい」という意欲をもつような課題を設定していくこと、その上で仲間に伝える技能を各教科を通して高めていくこと、また、子どもたちが安心して自分らしさを発揮できる学級を作っていくことが大切だと考え、研究を進めてきた。以下に今年度の取組の具体をまとめる。

１．一人一実践の授業研究

各教科・領域において一人一実践の授業研究会を行った。幸田町の教科等指導員を招いての指導員訪問や、学年部に分かれての部会研究授業を行うことで、教員一人一人の授業力向上を目指した。今年度は、特に「伝え合う力」を育てることを意識した授業づくりを行うために、指導案に「伝え合う力を育てる教師支援」を明記するようにした。それにより、学級全体での話し合いを取り入れたり、ペアやグループで考える場を設けたりするなど、工夫を凝らした授業を行うことができた。

指導員訪問として、特別活動（学級活動）の授業を行い、指導を受けた。子どもたちが考えた課題を実践していくことで、子どもたちの主体性を育てようと考えた実践であった。指導員の先生から、学級づくりについてのお話を伺うことができ、本校の研究に関わるご指導を受けることができた。



学級活動で話し合う子どもたち

また年度末には、今年度、重点的に行ってきた取組をまとめたものを、研究紀要として作成している。一人につきＡ４版１枚の簡単なものではあるが、１年を振り返り次年度へつなぐ意味でも続けていきたいと考えている。

２．「わくわくタイム」の新設

２学期から新たな取組として、全校でかかわりの力を育てるための「わくわくタイム」を新設した。「わくわくタイム」とは、「かかわりプログラム Slimple」代表の曽山和彦先生が提唱された「スリンプルプログラム」を基にしたもので、週に一回１０分間、全校一斉に各クラスで行っている。内容は、教師の指導の下、ペアやグループで題目に沿って話をし、それを広げたり、振り返ったりすることで、ソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンカウンターのねらいに迫っていくものである。



「わくわくタイム」で話をする子どもたち

始めた当初は、仲良しの友達でないとなかなか話ができない子もいたが、繰り返し行っていくうちに、子どもたちの笑顔も増え、小グループでならどの子とでも話ができるという様子が増えていった。１１月には講師に曽山先生をお招きし、各クラスの実践の様子を見ていただいた上で、スリンプルプログラムの理論や効果についてお話を聞くことができた。

指導を受けた後、指導方法等を修正しながら、現在も週に

一回継続して行っている。どのクラスもずいぶん定着してきたように感じる。

3．成果と課題

今年度から始めた取り組みである「わくわくタイム」は、すぐに効果の表れるものではないと言われているが、少しずつ手ごたえを感じられている。また、授業と連携して行うことで効果はより上がるものと考えられる。しかし、指導者が意識をもって継続することで子どもたちの力になると考えられるため、来年度以降も継続していくことが大切だと思われる。とくに「わくわくタイム」は全校一斉に行うものであるため、教員が共通の意識をもつことと、続けることへの負担が少ない形を考えながら、職員構成が変わっても継続して行けるようにしていきたい。

目次へ

研究主題	本郷発、校区・学校をよくし隊		
副　　題	－生徒の手による自主的な生徒会活動の取り組み－		
学 校 名	豊橋市立本郷中学校	校 長 氏 名	中村　招弘

1　はじめに

本校は、高師小地区・芦原小地区から生徒が集まる、学級数２０学級（特別支援学級４学級を含む）、生徒数５７５名の中規模校である。戦後急速に発展した新興住宅地域で、昭和６１年４月に高師台中学校より分離した。校区には高師緑地公園があり、地域の憩いの場となっている。また、校区の南には梅田川が流れ、校章ともなっている白鷺等の鳥が飛び、田畑で体を休めるのどかな自然を感じることができる。商業施設も多く、鉄道（豊橋鉄道渥美線）の駅があり、豊橋港方面や豊橋市中心部方面への幹線道路が通っており、生活や交通の便がよく交通量も多い。

家庭環境は、共働き、母子・父子、寮生活等さまざまであるが、地域との関わりをもち、教育への関心が高く、子どもたちの健全な成長を願い、学校の教育活動に協力的である。生徒は素直で明るく落ち着いた学校生活を送っている。生徒会・委員会活動や部活動にも積極的に取り組む姿が見られる。

地域で育ち成長してきた生徒たちが、自分たちのできることを考え、積極的に校区や学校をよくしていきたいという思いを強め、地域との関わりをよりいっそう深めていくことができればと考え、本研究に取り組んだ。

2　研究の仮設

> 地域や学校のために何ができるのかを生徒が主体的に考えて活動することで、人のために貢献することに対して喜びを感じるとともに積極的に関わろうとする生徒を育成することができ

3　研究の手だて

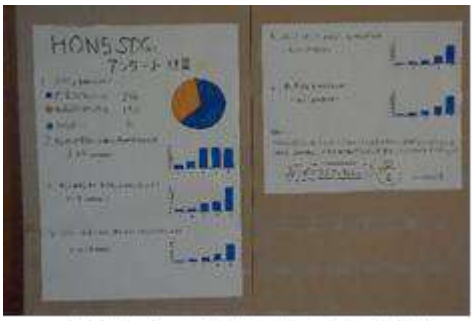
（１）　全校で取り組む大きな目標を定め、その具現化に向けた方策をさまざまな場面で考え実行する。

（２）　生徒の自主的・主体的活動を重視し、その成果を検討し次の活動へとつなげ、意欲喚起を図る。

4　研究の実際

（１）ＳＤＧｓへの取り組み

本郷中学校として全校生徒が SDGs を推進していくことができるようにという目標のもと、生徒会を中心に本郷中版 SDGs の作成を進めた。まずは、「学校での生活や人との関わり、行事の取り組み等について自分のことについて振り返り、どのようなことに心がけていきたいか」というアンケートを実施した。アンケート結果は生徒会が集約や分類をし、全校集会において発表することで生徒全体への意識高揚につなげた。アンケート結果を発表し



全校集会で発表したアンケート結果

HON5 SDGs

- 地域や学校の活動に積極的に参加します
- 楽しく給食を食べ、食べ残しを減らします
- 差別・偏見をなくし、誰もが安心して生活できるようにします
- あいさつをして、あたたかい関係を作ります
- 常に感謝の気持ちを伝えます

た後、更に具現化できるようにと裁量の時間を使って縦割り班による話し合いの場を設けた。各班から出された意見等をもとに生徒総会を開き、１７の項目にまとめたりそれぞれの表記について検討したりした。また、17の項目すべてを目ざすのではなく、年ごとに重点的に実施していく5つの目標「HON5 SDGs」を決めた。この目標をもとに、各委員会で企画を考えたり、全校集会や各種行事に取り入れたりと、さまざまな活動を展開するようにした。

（２）小中合同企画（合同オンライン会議）

HON5 SDGsの4つめにある「あいさつをして、あたたかい関係を作ります」の取り組みとして、校内のあいさつ運動だけでなく、小学校や校区との関わりを増やしていきたいという思いが生徒会役員の中から出た。そこで、実施方法や内容について、小学校との打ち合わせ会を行った。移動時間や各学校の状況を踏まえ、対面で打ち合わせ会を行うのではなく、オンラインで打ち合わせる形とした。打ち合わせでは、各校の現状や課題についての意見交流を行った。その中で、あいさつ運動の充実だけでなく、本郷中が取り組もうとしているSDGsを3校でも推進していきたいといった意見も出された。まずは、小中で合同のあいさつ運動を実施するとともに、各校でSDGsの実践を生徒会や児童会が中心となって進めていくことになった。今後の取り組みとして、オンラインの会議を今回限りとするのではなく、6月・12月・2月に実施し、各校の現状と問題点について話し合うことで、オンライン会議を通して小中連携を推進していこうという共通認識をもつことができた。


小中合同でのオンライン会議

（３）小中合同あいさつ運動

オンライン会議を通して芦原小学校・高師小学校2校の児童会とあいさつ運動について具体的な計画をたてた。生徒会役員の呼びかけで、小学校でのあいさつ運動に参加したい生徒を全校から募集したところ、多くの参加者が集まった。活動日には、参加生徒それぞれが母校に出向き、朝、登校してくる小学生にあいさつ運動を行った。小学校の児童会役員だけでなく、地域の方も一緒にあいさつ運動に参加した。生徒会役員や有志生徒、児童会役員、教職員、地域の方の参加により、元気なあいさつが響き渡る活動となった。中学校の生徒にとっては、母校で成長した姿を見せる活動になっている一方、小学校の児童にとっては、中学生への親近感を感じる貴重な機会となった。



小中合同でのあいさつ運動

（４）アクト本郷（校区での清掃活動）

地域の方が参加したことにより盛り上がりをみせたあいさつ運動から、今度は自分たちが地域のために何ができるかを考えて取り組みたいという意欲につながった。HON5 SDGs の1つめにある「地域や学校の活動に積極的に参加します」の項目の具現化に向けて考えるきっかけとなった。校区には、豊橋市の代表的な河川である梅田川や市内有数の公園である高師緑地公園、校区の方の憩いの場となっている高師本郷公園・東上紫雲庵池公園等がある。全校生徒からボランティアを募り、地域の清掃活動を実施することとした。授業

日にはなかなか時間が取れないため、夏休みや冬休み、春休みといった長期休業を利用し、部活動の開始前に活動をするようにした。夏休みには梅田川と高師緑地公園に分かれ、冬休みには高師本郷公園と東上紫雲庵池公園に分かれて活動を行った。毎回100名近い参加者が集まり、大々的に取り組むことができた。また、春休みには、新入学生徒を迎えるために、学校周辺の通学路の清掃活動に取り組むことを計画している。


高師緑地公園での清掃活動


東上紫雲庵池公園での清掃活動

（５）届けよう、服のチカラプロジェクト

本校３年生は、総合的な学習の時間に単元「豊かな未来をつくる －行動しよう、持続可能な社会に向けて－」を設定し、現在世界が抱える問題やそれに対して自分たちにできることを探究課題と　して取り組んでいる。その中で、「世界には貧困で苦しんでいる人たちが多くいること」「ユニクロが『届けよう、服のチカラプロジェクト』を展開していること」について学んだ。そこで、生徒会執行部がこの活動に本校も協力していこうと、全校生徒に提案し呼びかけた。生徒会執行部から全校生徒へ、全校生徒から各家庭へ、各家庭から地域へと呼びかけの輪を広げ、服の回収を行った。回収については、保護者会で来校する際に持ってきてもらったり、資源回収での回収品目に追加し集めたりした。回収に適したものであるかどうかも有志を募り、昼放課や部活動のない授業後等を利用して行った。多くの方の協力のおかげで、大きな段ボール１６箱いっぱいに服を詰め、ユニクロに提供することができた。総合的な学習の一環として取り組むことができ、全校で貧困や難民、環境問題について考えるよい機会となった。また、生徒会活動の取り組みを地域に発信することができたことは、生徒たちの大きな自信につながった。


古着の回収の様子

（６）活発な委員会活動

①　美化委員会：お掃除し隊　（校内での清掃活動）

「学校を美しい状態に保ち、みんなで過ごしやすいようにしたい」と、美化委員会がお掃除し隊の活動を計画した。定期テスト最終日の午後に実施し、多くの参加者が集まった。活動場所は、美化委員会が割り振りを行ったが、そこでどのようなことに取り組むのかは生徒各自が考えるなど、生徒の主体的な活動となっている。生徒たちは、ふだんの清




お掃除し隊の活動の様子

掃活動では時間をかけることができず、気にかかっていた場所や雑草が生えてしまっていた運動場の整備などを大がかりに行うことができた。年３回実施したが、毎回５割を超える生徒が「黙働」を意識して清掃に取り組んだ。

② ピアサポート委員会：人権標語コンクール



人権標語の優秀作品

人権週間に合わせて、ピアサポート委員会が人権標語コンクールを実施した。各クラスのピアサポート委員が朝の連絡で実施内容と期間、方法について説明をした。各クラスから集まった応募作品は委員会の時間に選定し、優秀作品については給食時の放送で紹介をしたり、学年掲示板に掲示したりした。前後して実施した全校道徳や各クラスでの人権にかかわる道徳の授業ともタイアップし、相手の気持ちを考えることの大切さを再認識することができた。ＨＯＮ５　ＳＤＧｓの３つめにある「差別・偏見をなくし、誰もが安心して生活できるようにします」に直結する活動となった。

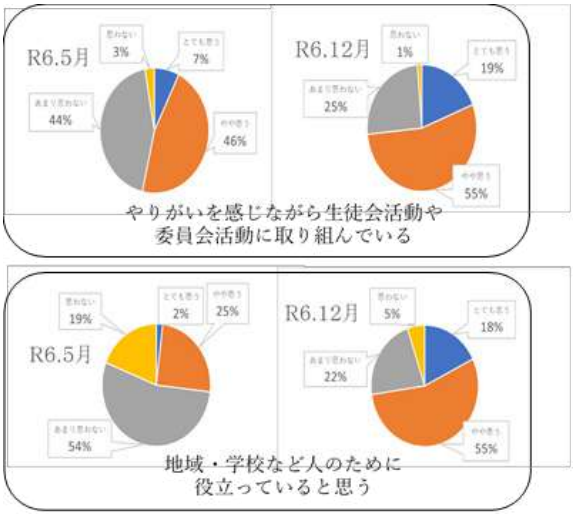
③ 図書委員会：「ハクッポン」しおりの配付


配付されたしおり

図書館の利用者や本の貸し出しを増やそうと、図書委員会がしおりを配付した。本校の校章である白鷺をモチーフとしたキャラクターである「ハクッポン」を印刷してラミネーターを通した後、２枚を組み合わせてホッチキスで綴じるというシンプルな作りではあるが、本に挟みやすく閉じたときにもすぐに開くことができると生徒からはとても好評であった。製作についてはテレビ放送で説明するとともに製作についての用紙を配付した。ラミネートされた用紙を受け取った後は、生徒各自がはさみやカッターを使って切り抜いたり、ホッチキスで止めたりしたため、委員会の仕事として負担にならなかった。このしおりをきっかけに、図書館の利用者数や貸し出し数は急激に増加する結果となった。

この他にも、給食委員会の「目ざせ！『残飯ゼロ』キャンペーン」や生活委員会の「『ノーチャイム』で時間を意識して学校生活を過ごそう」など、各委員会が工夫を凝らした活動を行った。

５　研究の成果と今後の課題



これまでも、本校では特別活動に力を入れて取り組んできた。行事や生徒会活動は活発に行われ、活気のある学校づくりができていたように思う。しかし、それらの活動は主に『自分たちが楽しむもの』が中心であり、楽しいことに一生懸命になることに重きが置かれてきたように感じる。本研究を通して、地域や学校のために自分たちのできることを考えて行動することにより、地域や学校など人のために貢献する自分を意識し、自己肯定感や自己有用感を高めることにつながったと思われる。本校は、「生徒が自主的に活動する」という基盤があったからこそ今回の活動が生きてきたと思う。

これからも、今回行った地域や学校のための活動を継続することで、よりよい地域や学校づくりを目ざしていきたい。また、それらの活動を通して、生徒の自主性をさらに育んでいきたいと考えている。

目次へ

研究主題	未来をつかむ「みらい学習」		
副　　題	くすのき特別支援学校との交流を通して		
学 校 名	豊橋市立南稜中学校	校 長 氏 名	久野　哲司

１　生徒の実態

本学級には、明るく元気にふるまえる生徒が多く、休み時間には教室が笑い声であふれている。５月に行われた体育祭では、競技に負けても「一番楽しめた自分たちが優勝」と前向きな言葉をかけ合い、次の団対抗をがんばろうという意欲に変えるパワフルさを発揮していた。一方で、ふだん関わりの少ない特別支援学級の子と接する際には、よく知らないからと距離をとったり、相手の気持ちを想像で決めつけたりと、関係を深めていくことに消極的な姿が見られる。そのような生徒が、社会には自分たちだけでなく、さまざまな立場の人がいることに気づき、相手の気持ちに寄りそって行動できるようになってほしいと考えた。

２　実践のねらい

本実践は、３年間のみらい学習(総合的な学習の時間)の中の１年生の実践に焦点を当てていく。南稜校区にある豊橋市立くすのき特別支援学校との交流活動を通して、誰一人取り残されない社会の実現に向けて、自分にできることを考え、自ら実践していこうとする生徒の育成を目ざす。

３　主な実践

くすのき特別支援学校との交流に向け、事前に訪問して特別支援学校の先生に生徒の様子をうかがったり、福祉体験教材を用いた高齢者体験や、校区内のユニバーサルデザインを調査したりする活動を通して福祉への学びを深めていく。話し合いでは思考を可視化することで仲間と協力しながら得た情報を整理できるようにする。そして、交流活動を通して学んだことをまとめ、発表する場として「南稜ＥＳＤサミット」を設定した。

ア．テキストマイニングツール(※1)を用いた生徒の思考の可視化

本校の総合的な学習には「みらい学習」という名前がついている。そこで、生徒が未来という言葉にどんなイメージをもっているかイメージマップに書き表す時間をとった。さらに、生徒のプリントをコンピュータで読み込み、テキストマイニングツールを使って感情分析をすると、図１のように生徒が未来に対して恐れや怒りをもっていることがわかった。この原因にせまるため、別の処理をしてワードクラウドを作成したところ、図２のようになった。赤い文字は動詞、青い文字は名詞、単語出現頻度が高いほど文字が大きく示され、学級で多くの生徒が感じていることを表している。図１、図２をもとにした学級での話し合いで、生徒の多くが未来に対して不安をもっていること、少子高齢化や障がい者に対して知識が少なく、実態がよくわからないことに由来する心配があることがわかった。そこで、まずは身近な高齢者に着目し、生活について考えることで現在の福祉のあり方を知り、自分たちにできることを考える活動を行った。



図1　感情分析

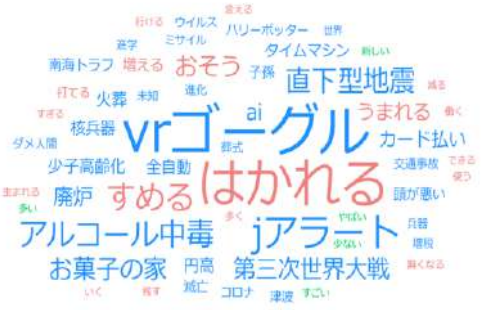


図2　ワードクラウド

※1 ユーザーローカルAIテキストマイニングによる分析
(http://textmining.userlocal.jp/)

イ．高齢者疑似体験

探究を進めていく中で、「高齢者はどんなことに困っているか」「高齢者にどんな助けをしてあげたらよいのか」という疑問が出てきた。そこで、社会福祉協議会の協力を得て、高齢者疑似体験を行った（図３）。車いすに乗ったり、関節が不自由になる装具を着用して階段の上り下りをしたりする経験を通して、体が思うように動かないことによって日常生活に多くの場面で暮らしにくさが生じていることに気づいた。特に、目が不自由で、耳も聞こえにくい状況での歩行や階段の上り下りに恐怖心が伴い、手すりやスロープのありがたみに多くの生徒が共感していた。また、介助者の支えがあると安心して歩けるようになることや高齢者のペースに合わせてゆっくり歩くことが大切であると、身をもって実感することができた。図書資料やインターネットでも情報は得られるが、自身で体験することにより、より根拠に裏づけされた自分の考えを構築することにつながった。



図3　高齢者疑似体験

ウ．くすなん会の実施

単元の導入で、障がい者に対してマイナスイメージをもっていた生徒たちにその理由を尋ねてみると、「お店で急に追いかけられた」「何もないところで笑っていて怖い」など過去の経験から意見をする生徒ばかりでなく、「仲良くしたくないと思っていそう」「周りの状況と違うことを考えていそう」と何となくのイメージで意見している生徒がいることもわかった。そこで、校区にあるくすのき特別支援学校（以下くすのきとする）へ行き、障がいのある生徒の様子を観察したり、先生から話を聞いたりする機会を設けた。見学に行った生徒からは、「みんな明るい子」「世の中に出ても大丈夫なようにがんばっている」といった前向きな意見がたくさん出て、自分たちのイメージが偏っていることに気づいた。その後、明るい未来を創っていくためには、体に障がいのある人もない人も手を取り合っていくことが大切であるという意見から、くすのきとの交流会である「くすなん会」を開催することにした。「くすのきさんを楽しませる会を考えよう」をテーマとした話し合いでは、「くすのきファースト」を合言葉に、障がいに配慮したさまざまな企画が提案された。自分たちの企画における「くすのきファースト」を明確に示したホワイトボードをもとに、ワールドカフェ方式で話し合いを行ったことで、意見の共有化や改善点の書き出しが容易にできた(図４)。ゲストティーチャーとして参加したくすのきの先生から「配慮は全員に同じではなく、個に応じてほしい」「お客様としてくすのきの子を招待するのではなく、一緒にくすなん会を創り上げるようにしてほしい」というアドバイスをいただいた。このアドバイスは、無意識にくすのきの子たちを一様に手助けのいる子と考えていた生徒たちにとって、障がい者に対する見方を見直す絶好のタイミングとなった。これ以降、テーマを「くすのきさんと一緒に楽しめる会を考えよう」に変更し、オンラインでくすのきと連絡を取り合いながら、ゲームのルールや準備するものの分担を一緒に考えるようになった。１２月に予定していたくすなん会は、インフルエンザによる学級閉鎖により延期になってしまったが、南稜中とくすのきで協力して準備を進めてきたくすなん会は必ず実施したいと考えている。



図4　ワールドカフェ方式での話し合い

４　研究の成果と課題

体験活動やテキストマイニングツールの活用によって、生徒がより多くの情報を収集したり、意見の共有化をはかったりすることができた。また、話し合いでは根拠をもとにした発言ができるようになった。くすなん会を企画するにあたっては、オンラインで交流したり、くすのきの先生から直接アドバイスをもらったりすることが、生徒の思考を深めていくことにつながった。その一方で、授業時間が少なく、十分な話し合いや準備の時間をとることができなかった。少ない授業時間でも、探究のプロセスを意識し、生徒の学びを深めていくことが課題である。

目次へ

研究主題	他者とかかわり合いながら、自己の考えを深め、更に学び続けようとする生徒の育成		
副　　題	ＩＣＴを活用した「問題解決的な学習」を通して		
学 校 名	豊橋市立北部中学校	校 長 氏 名	堀井　章行

１　生徒の実態と主題設定の理由

本校の生徒は、教師の指示を聞き、素直に行動することができるよさをもっている。情報を素直に受け入れ、仲間と協働しながら、自分の成長につなげていこうとしている姿に、伸びる芽を感じた。このような生徒だからこそ、情報を受け身で捉えるだけでなく、さまざまな人とかかわり合いながら、生活や社会の中にある問題の解決に主体的に取り組む力を身につけてほしいと願いをかけた。同時に、生徒のニーズや学習状況に応じて学習を進めたり、生徒同士が考えをかかわらせ合いながら学び進めたりすることが、円滑に、かつ多様な形態でできるように、ＩＣＴ環境が整備され、授業改善をしていくことが重要になってきた。このように、生徒の実態や社会的な要請を踏まえて、ＩＣＴを活用した新たなスタイルの問題解決的な学習のあり方について研究を進めることで、これからの時代を生き抜いていくために必要な力を身につけ、主体的に学び続ける生徒を育てていきたいと考えた。

２　研究の構想

⑴　目ざす生徒の姿

他者とかかわり合いながら、自己の考えを深め、更に学び続けようとする生徒

○「他者とかかわり合いながら、自己の考えを深め」とは…

他者とは…同じ学級・学年・学校の仲間、他校の生徒、地域の人、専門家など、生徒が自ら立てた問いを解決するために必要な相手のこと。

これまでの経験や一人調べでもった自らの気づきや考えを他者とのかかわり合いの場で伝え合い、学び合うことで、他者の考えにふれ、自分の考えに自信をもったり、考えを新しくしたり、見つめ直したりする。そして、さらに、一人調べに還元していくことで、自分の考えを再構築していく。

○「更に学び続けようとする」とは…

自分の学びを振り返ることで、自分の学びの成長の段階を自覚しながら学習を自己調整し、更に自分を成長させるために次の学びに向かったり、学びを生活に生かそうとしたりする。

⑵　研究の仮説

①ＩＣＴを効果的に活用しながら、問題解決的な授業づくりを続けていけば、他者とかかわり合いながら、自己の考えを深める生徒を育成することができるだろう。

②自分の学びを調整したり、学びの成長を見いだしたりできるように、毎時間、そして単元ごとに振り返りをしていけば、更に自分を成長させるために学び続けようとする生徒を育成することができるだろう。

⑶　研究のてだて（資料１）

◇仮説①に対するてだて

てだて⑴ 生徒の心が動く問題解決的な授業づくり

・生徒の心が動く教材の選定や出会わせ方の工夫
・一人調べ（個別最適な学び）とかかわり合い（協働的な学び）の一体的充実
・生徒の思考を揺さぶり、深める教師支援

てだて⑵ 生徒の学びたいを叶えるＩＣＴ活用

６つのパターンに分類し、ねらいをもって授業実践を進めていく。

・「つながるツール」としての活用：
時間、距離、空間などの制約を取り払い、人やものとつながる活用。
交流や活動の幅を広げることを可能にする。
・「記録するツール」としての活用：



資料１　研究構想図

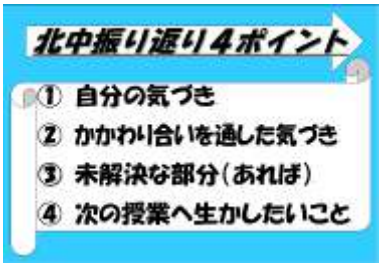
運動や実験、演奏や発音を静止画や動画で記録しておき、いつでも
見返して客観視する活用。視覚的、感覚的に事実を確認したり、理解を促進したりすることを可能にする。

・「思考を深めるツール」としての活用：
アプリを用いて実際には操作できないものを操作したり、シミュレーションしたりして、考えを引き出す活用。各教科の見方・考え方を働かせながら思考することを可能にする。

・「効率化を図るツール」としての活用：
文の推敲や作品の更新、データを利用した表・グラフの作成などを効率よく行う活用。分析や話し合いにかける時間の確保につながり、自分の考えを生み出すことを可能にする。

・「共有するツール」としての活用：
一人調べのまとめを共有したり、リアルタイムで考えを共有したりする活用。他者の考えにふれ、自分の考えに自信をもったり、考えを新しくしたりすることを可能にする。

・「振り返るツール」としての活用：
学びを蓄積しながら、自分を見つめたり、学びをつないだりして、学習を自己調整する活用。自分の成長を自覚し、更に学び続けようとする意欲につなげることを可能にする。



資料２　振り返りの視点（教室掲示）

◇仮説②に対するてだて

てだて⑶ 自分を見つめ、学びをつなぐ振り返り

・学びを自分で調整したり、学びの成長を見いだしたりできるように、振り返りの視点の明確化（資料２）
・生徒の追究を捉え続け、支えるための朱書きや対話

３　研究の実際と考察

⑴　生徒の心が動く問題解決的な授業づくり　てだて⑴

実践例：１年数学科「データを整理・分析して　紙コプターを開発しよう　～データの活用～」

紙コプターの羽の長さの違いによって落下の仕方や滞空時間が異なることに興味・関心や疑問をもった生徒は、「データを整理・分析して、より滞空時間の長い紙コプターを開発したい」という問題意識をもち、追究を始めた。いろいろなタイプの紙コプターの滞空時間のデータを集め（資料３）、代表値を求めたり、度数分布表やヒストグラムに整理したりして、その傾向を分析しながら追究を深めていった。


資料３　紙コプターの滞空時間の
データを集める生徒

この実践の中で、自分の分析結果と仲間の分析結果を比較しながら紙コプターの改良を粘り強く続けていく姿、データの傾向を読み取ったり判断したりすることについて理解を深める姿が見られた。このような姿が見られたのは、紙コプターの開発という生徒の心が動く教材に出会わせたこと、一人調べの状況を捉えながら必要なタイミングでかかわり合いを設定して仲間の考えに目を向かせたこと、生徒の思考の流れを大切にして単元構想を修正しながら実践を進めたことが有効であったと考える。

⑵　生徒の学びたいを叶えるＩＣＴ活用　てだて⑵

実践例１：「つながるツール」としての活用

３年社会科「思いがあるなら届けちゃえばええじゃないか 北部校区活性化プラン ～地方自治と私たち～」

地方公共団体と北部校区が似たような課題を抱えていることを知り、その解決策について考えた生徒は、「北部校区を活性化させるために何に力を入れたらよいかもっと考えたい」という問題意識をもち、追究を始めた。人々の交流、商業の活性化、交通網の充実の観点から活性化プランを考え、仲間とかかわり合いながら新たな視点に気づいたり、考えの幅を広げたりすることができた。


資料４　専門家とつながり、
アドバイスを受ける生徒

この実践の中で、地元の食材を扱った無人販売や道路の整備・街灯の設置など、実現の可能性を高めるために、自分たちができることについて考えを深め、プランを練り直す姿が見られた。このような姿が見られたのは、実際に市政に関わっている専門家とＺｏｏｍでつながり（資料４）、自分たちが

考えたプランに対して直接アドバイスをもらったことが有効であったと考える。

実践例２：「思考を深めるツール」としての活用

２年技術科「効率的に風をとらえるのはどのブレード？　～エネルギー変換の技術～」

発電効率のよいブレードを製作した生徒は、「実際の風力発電の仕組みはどのようになっているのかな」という新たな問題意識をもち、追究を進めた。「停電ってこうして起きるんだ」など、自分たちの生活と結びつけながら電気の供給の仕組みについて理解を深めた。

この実践の中で、自分たちの生活に欠かすことができない電気は、さまざまな発電をバランスよく組み合わせて生み出されていることや、災害や問題時に備えて蓄電されていることを実感しながら、学ぶ姿が見られた。このような姿が見られたのは、シミュレーションソフト（電気バランスゲーム）を利用して（資料５）、実際には体験することができない電気の供給の仕組みを体験できたことが有効であったと考える。

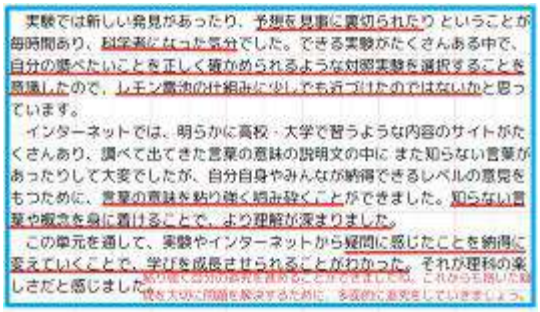


資料５　ゲームに没頭しながら
電気の供給の仕組みを体験する生徒

⑶　自分を見つめ、学びをつなぐ振り返り　てだて⑶

実践例：３年理科「食べ物が電池に！？レモン電池の仕組みを解き明かそう　～イオンと電池～」

レモンで電流が流せることを知った生徒は、「レモンから電流が流れる仕組みを解き明かしたい」という問題意識をもち、一人調べやかかわり合いを繰り返しながら、水溶液の性質や金属のイオンへのなりやすさについて考えを深めていった。振り返りでは、「酸性の水溶液は電流が流れたから中性やアルカリ性も調べてみたい」「金属の組み合わせを変えても電流が流れるのか調べてみたい」と、自分の学びを見つめながら、次時へと学びをつなげていく姿が見られた。また、単元の終末の振り返り（資料６）で、「実験で予想を裏切られたりしながら追究を続けたことで、レモン電池の仕組みを解き明かすことができた」「疑問に感じたことを納得に変えていくことで、学びを成長させられることがわかった」と、自分の学びの成長や足りなさに気づき、次の学びに向かっていこうとする姿が見られた。このような姿が見られたのは、学びを振り返る視点を明確にしたことが有効であったと考える。教師が振り返りで生徒を捉え、朱書きや対話で生徒の追究を支え続けたことも有効であったと考える。



実験では新しい発見があったり、予想を見事に裏切られたりということが毎時間あり、科学者になった気分でした。できる実験がたくさんある中で、自分の調べたいことを正しく捉かめられるような対照実験を選択することを意識したので、レモン電池の仕組みに少しでも近づけたのではないかと思っています。

インターネットでは、明らかに高校・大学で習うような内容のサイトがたくさんあり、調べて出てきた言葉の意味の説明文の中に また知らない言葉があったりして大変でしたが、自分自身やみんなが納得できるレベルの意見をもつために、言葉の意味を粘り強く調み取ることができました。知らない言葉や概念を身に着けることで、より理解が深まりました。

この単元を通して、実験やインターネットから疑問に感じたことを納得に変えていくことで、学びを成長させられることがわかった。それが理科の楽しさだと感じました。

資料６　単元の終末の生徒の振り返り

⑷　研究の基盤となる活動

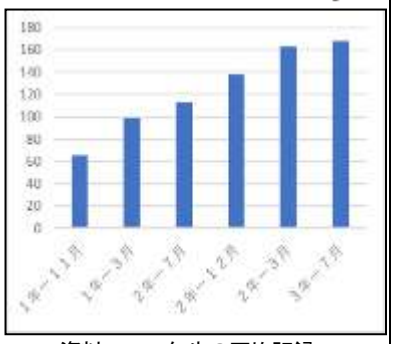


ＩＣＴタイム（一人調べを進めたり、自分の考えをまとめたり、振り返ったりする力につながる活動）

○目的…ホームポジションを身につけて、タイピングスキルの向上を目ざす。

○内容…毎週火曜日の朝に 10 分間で活動を行う。
ホームポジションを身につけられるように、タイピングサイトでトレーニングする。全校でタイピングコンクールを行う。(学期１回)

○成果…毎週のタイピング練習だけでなく、学期に１回タイピングコンクールを行うことで、生徒は意欲的に、休み時間にもすすんで練習する姿が見られた。タイピングスキルとしては、３年生の平均記録（資料７）を見ると１年生の 11 月から右肩上がりで向上していることがわかる。タイピングスキルが向上したことで、一人調べのまとめや振り返りなど自分の考えを蓄積していくことが可能になった。



資料７　３年生の平均記録

ほくほくトーク（かかわり合いの場で考えをかかわらせたり、仲間の考えを受け入れ共感したりする力につながる活動）



○目的…話す・聞く力の向上とお互いを理解し認め合える温かなつながりづくり。

○内容…毎週木曜日の昼に 15 分間で活動を行う。（資料８）
「北中話し方五箇条」（資料９）を意識し、立場を明確に伝えることや、仲間の意見に乗ることなどが定着できるようにする。

○成果…前日のうちにテーマを伝えたことで、自分なりの考えを用意してトークに臨んだり、積極的に発言をしようとしたりする生徒が増えた。

「北中話し方五箇条」の定着を図ったことにより、仲間とかかわり合うことを意識して話そうとする姿が広まるとともに、授業でも具体的かつ息の長い発言ができる生徒が増えた。

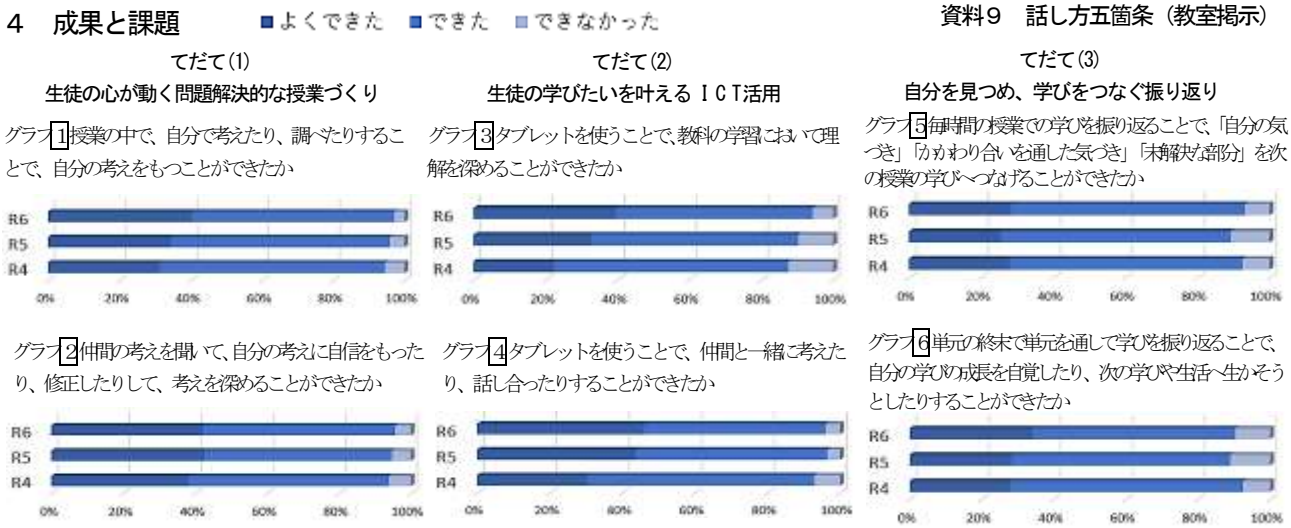


資料８　ほくほくトークの様子



資料９　話し方五箇条（教室掲示）

４　成果と課題



資料10　生徒アンケート結果（Ｒ４．２月、Ｒ５．７月、Ｒ６．７月実施）

てだて(1) 生徒の心が動く問題解決的な授業づくり について

グラフ1、グラフ2の質問に、約９割の生徒が肯定的な回答をした。「自分で追究していく授業は楽しいから、たくさん追究の授業をやりたい」「仲間の考えを聞くことで、自分の考えの幅が広がり、自分の考えを深めることができた」などの生徒の声があった。問題解決的な授業づくりを続けていくことが、生徒が主体的に問題解決に取り組み、他者とかかわり合いながら、自己の考えを深めることにつながっていることがわかる。

てだて(2) 生徒の学びたいを叶えるＩＣＴ活用 について

グラフ3、グラフ4の質問に、約９割の生徒が肯定的な回答をした。「タブレットを使う授業は、使わない授業に比べてどんなところがよいと思うか」の質問には、「先生は一人しかいないけど、タブレットは一人一台あるから、すぐに自分の疑問を解消できる」「効率よくたくさんの人の意見を知ることができ、自分の考えを広げることができる」などの回答があった。ＩＣＴを効果的に活用していくことも、他者とかかわり合いながら、自己の考えを深めることにつながっていることがわかる。

てだて(3) 自分を見つめ、学びをつなぐ振り返り について

グラフ5、グラフ6の質問に、約９割の生徒が肯定的な回答をした。「学びを振り返ることは、あなたの学びにどのようにプラスに影響しているか」の質問には、「理解できたところ、疑問に思ったところを整理しておくことで、次の目標をもつことができ、効率よく学習ができる」「自分の考えの変化を比較でき、自分の成長が目に見えてわかった」「これからの学びへのモチベーションを上げるきっかけになる。更によい学習を作るためには必要だと思う」などの回答があった。視点を与えて、振り返りをすることが、自分の学びを調整したり、成長を見いだしたりする力を育み、更に自分を成長させるために学び続けようとすることにつながっていることがわかる。

ＩＣＴを活用した新たなスタイルの問題解決的な学習のあり方についてはまだまだ研究の余地がある。今後も、他者とかかわり合いながら、自己の考えを深め、更に学び続けようとする生徒の育成に努めていきたい。

５　おわりに

生徒が学習者として学び続けることが求められるように、私たち教師も学び続けることが求められる。一人調べとかかわり合いを一体的に充実させながら、主体的・対話的で深い学びを実現させ、私たち教師の使命を果たしていきたい。

目次へ

研究主題	未来を見つめ、自己の創造に向かう生徒の育成		
副　題	意欲的に参加する教科外活動を通して		
学 校 名	岡崎市立竜海中学校	校 長 氏 名	児玉 洋行

１　目指す生徒像

（１）自らの追究心を高め、自己向上をめざす人間

（２）不撓不屈の精神と体力をもち、健康で明朗な人間

（３）勤労を尊び、責任感の強い人間

（４）実践力をもち、進取の気性に富む人間

（５）生命を尊び、寛容と礼節のある人間

２　研究仮説

学校生活における特別活動を充実させることで、多様性を認め合い、お互いの個性を尊重することができ、生徒一人一人が輝いて生活することができる。そして、輝きの中で自信を深め、未来を見つめ、自己の創造に向かう生徒を育てることができるだろう。

３　研究の実際

≪体育大会≫

体育大会では、競技種目等だけでなく、学級の絆を深めることができる応援や応援旗の制作を大切にしている。特に応援旗の制作では、デザインを考える際に自分たちの学級を見つめ、学級のよさに気付くことで、学級への愛着をさらに高めることができた。本番に向けて、応援旗の色塗りをしたり、応援方法を考えたり、応援グッズを作製したりと全員で仕事を分担した。応援活動や応援旗の制作があったことで、一人一人に役割があり、運動が得意な生徒だけでなく、全ての生徒が生き生きと活動することができた。

そして、体育大会当日は学級旗を自分たちの支えとしながら級友を一生懸命に応援する姿が見られた。応援旗や応援グッズによる応援が充実していたことで、競技種目に出場する選手は、応援してくれる仲間への感謝の気持ちを育てることもできていた。準備段階の時間を大切にすることで学級が一つとなり、行事を通じて絆を深めることができた。

≪文化祭≫

文化祭テーマは「Connecting Up! ～ようこそ with C ランドへ～」であり、生徒会学校像「Colorful Connect Challenge 幸せあふれる学校」を反映したものであった。特に「Connect＝つながり」をより強くすることで、みんながより幸せになると考えて取り組んだ。生徒会が中心となりながら、日常的に掲げている学校像の達成を意識していることに大きな意味があった。

また、副題にある「with C ランド」には、生徒会学校像の３つの「C」が意識されており、テーマパークのような楽しい空間にしようという思いも込められていた。全校制作物として、幸せの象徴「カラフルドラゴン」を制作した。このカラフルドラゴンには一人一人の思い（生徒自身が幸せになれるもの）が集まっており、ステージに登場した際には全校生徒の思いが一つになる瞬間であった。また、実行委員が中心となって会場である体育館を装飾した。テーマパークを意識したものであり、会場全体の雰囲気を盛り上げることができた。

他にも、竜海ステージと称した有志による特技発表や文化部による日常活動の発表も行われた。竜海ステージや文化部発表では、生徒自身が好きなこと、興味があって夢中になっていることを発

表する姿が見られ、未来への大きな可能性を感じることができた。文化祭に参加している全ての生徒が輝きを放つことができた。

≪外国人教育（日本語教室）≫

本校では、さまざまな国籍の生徒が一緒に生活する中で、言葉や文化の違いにより困り感を感じている。そして、多くの生徒が日本語教育を必要としている。そのため、特別の教育課程を計画し、取り出しによる日本語教育と入り込みによる日本語のサポートを行っている。特に取り出しによる日本語教育指導では、「中学生のにほんご（教科編）（学校生活編）（社会生活編）」「にほんごこれだけ！」「こどものにほんご」「かなり役立つ日本語ドリル」などの新規購入テキストも活用し、個に応じた日本語教育を行った。集中力を継続し、意欲的に参加できるように授業時間を３分割（①前半②中盤③後半）とした。①前半では、日本語の文法（言葉の使い方）を中心にドリル演習的な学習を行った。 ②中盤では、各自が持参した質問（普段の授業で、学習語句等が理解できずに困っている内容）に答える時間を確保した。③後半では、日常会話等を含んだゲーム的要素を含んだ活動を行った。カルタ（ことわざ・都道府県）などは、生徒にも人気であった。

日本語教育に取り組んでいる生徒は、語学相談員や同じ国籍の仲間とともに困難や課題に一生懸命取り組んでいる。その頑張りは、同じ学級や学年の仲間にも伝わっている。生徒たちは、国籍の違いを個性とも捉えることができ、日常生活の中でお互いを認め合い優しい気持ちで助け合いながら生活することができている。

≪長期欠席対応≫

本校には、「Ｆ組」（＝校内フリースクール）が設置されている。今年度で、Ｆ組は３年目となり支援体制も整いつつある。全国的に不登校は増加傾向にあり、本校においても同様の傾向が見られるため、この「Ｆ組」は非常に重要な存在となっている。本校のＦ組の特徴の１つは、教室が２部屋確保できていることである。「Ｆ組第１教室」は、利用生徒にとって基本となる部屋である。コミュニケーションスペースとしての場所でもある。「Ｆ組第２教室」は、落ち着いて学習等に取り組むことができよう、個人集中スペースとしている。

人と人との関わりを増やし、お互いを認め合うことができるように、新たな取組としてＦ組菜園での野菜栽培活動を行い、オクラ・なす・きゅうり・ほうれん草を育てた。土づくりや畝の準備、水やりや草取りなど、世話の大切さを実感しながら、仲間と協力し合いながら笑顔で活動することができた。また、心を育てるために話し合い活動にも力を入れた。話し合いのテーマとして、「こども菜根譚」や「ことばのかたち」といった本を活用した。「こども菜根譚」では、「自分を強くするためのヒント」「人に好かれるためのヒント」「困難を払いのけるためのヒント」「人生を後悔しないためのヒント」がたくさん詰まっている。時期や生徒の様子からテーマを選び、一緒に考えることができた。また「ことばのかたち」では、日常的に使っていることばが目に見えたら、どんなかたちや色なんだろうと想像することで、ことばの使い方や相手に与える影響について深く考えるきっかけとなった。心のエネルギーをためることができた生徒は、学級への参加も挑戦するようになり、将来に向かって一歩ずつ歩むことができている。

４　研究の成果と課題

特別活動を充実させることで、生徒はさまざまな活動に対して意欲的になってきた。体育大会や文化祭では、実行委員として参加したり、各担当のリーダーとして活躍したりする生徒が現れた。新たなことに挑戦し、自信を深めることで心の余裕が生まれ、仲間を尊重し、優しくすることもできるようになってきた。生徒が未来を見つめ、自己の創造に向かうことができるような力を身に付けることができるよう、特別活動の取組をより向上させていきたい。

目次へ

研究主題	自分の良さや可能性に気付き、進んで挑戦できる生徒の育成。		
副　　題			
学 校 名	岡崎市立福岡中学校	校 長 氏 名	森　竜師

１．はじめに

本校では、生徒主体で活動できるように多くの行事等で実行委員を募り、活動を進めている。体育大会や文化祭などの行事では、多くの生徒が実行委員として活動し、会の成功を通して達成感を味わっている。そのように自主的な活動を通して得た達成感は、自己肯定感を高め、多くのことに挑戦する意欲を高めていくと考えられる。また、その活動の中から、自分の良さや可能性を見つけ、さらに挑戦することができる生徒に育っていくだろうと考えた。

２．活動の実際

①　実行委員や縦割り活動を通して自己肯定感を高める活動

本校の体育大会では、実行委員主導で競技を考案したり、異学年交流（縦割り活動）で競技や応援合戦を行ったりしている。

競技を考える実行委員は、どのような競技が交流を深めることができるかを考慮して考えていた。また、応援合戦の実行委員は、踊りや衣装を考えたり、縦割りの連合のネーミングを考えたりした。すべて生徒が主体となって活動していくことで、達成感や充実感を味わい、それが自己肯定感の向上につながったことが分かる。（資料１の感想から）

実行委員をやって、みんなから楽しかったとか、ありがとうといってもらえたことがうれしかった。
【３年Ａ男の感想より】　資料１



【縦割り競技　長縄跳びの様子】



【縦割りでの応援合戦の様子】

体育大会後に、交流学級にお礼の手紙の交換を行う学級もあった。その中には多くの「ありがとう」の言葉があふれており、それぞれの学級で自己肯定感が高まったことが分かる。（資料２より）



２年生へ。
TOP（縦割りの応援合戦）を盛り上げてくれてありがとう

【交流学級へのお礼】

先輩からの「ありがとう」がたくさんあり、次からもがんばろうと思いました。
【２年Ｂ子の感想より】　資料２

②　教育講演会を通して自己肯定感を高める活動

１１月に「コトバノチカラ研究所代表・日本ペップトーク普及協会認定講師」の鈴木孝氏をお招きし、「自己肯定感を育む言葉の力」と題して講演をしていただいた。

鈴木氏の話では、主に「とらえかた変換」「あるもの認証」の２つについてお話をしていただいた。



【PEP　TALK　講演会】

「とらえかた変換」では、ネガティブな言葉をポジティブな言葉に変換していくことで前向きに活動できるようになること、「あるもの認証」では、ないものやできないことばかり探すのではなく、今あるものやできることを考えることで自分を肯定することができるようになるというお話を聞くことができた。今回の講話を通して、生徒は自分の良さを再度考えるようになり、さまざまなことに挑戦していこうとする姿勢が育まれたことが分かった。（資料３・４・５・６・７・８の生徒の感想より）

今回の話を聞いて、ペップトーク（とらえかた変換やあるもの認証）をこころがけようと思いました。そうすれば、自己肯定感が上がると思ったからです。
【１年Ｃ子の感想より】　資料３

自分の良いところを見つけようとしても、３個ぐらいしか見つかりませんでした。だから、これからは自分の良いところをたくさん見つけていきたいです。
【１年Ｄ子の感想より】　資料４

とらえかた変換をしていこうと思います。失敗を恐れず、何事にも挑戦できるように頑張ります。今日の講演を聞いて、自分のことを好きになれるようになりたいと思いました。
【２年Ｅ子の感想より】　資料５

僕は実行委員に挑戦して、失敗しても成長できた実感があるので、お話に納得しました。さらにもっとたくさんの挑戦をして、どんどん成長していきたいです。
【２年Ｆ男の感想より】　資料６

「失敗」をいつまでも引きずると、挑戦することから逃げてしまいます。「失敗」は「成長の近道」です。今回のお話を生かして、苦手なことにもどんどん挑戦していきたいです。
【３年Ｇ子の感想より】　資料７

前向きになるような言葉を考えたいです。失敗したとしても、また何回も挑戦したら成功や成長につながることがわかったので失敗しても次につなげてがんばろうと思いました。
【３年Ｈ男の感想より】　資料８

３．おわりに

今回は２つの事例をあげて検証をしたが、自分の良さや可能性に気付く場面は、学校生活には数多くある。その場面を見逃さずに、生徒に寄り添った自己肯定感が高まるような声掛けや支援が大切になってくる。

今後も、生徒が自己肯定感を高めることができる場面を多く設定し、さまざまなことに進んで挑戦していく生徒を育成していきたい。

目次へ

研究主題	自己肯定感を高める岩中教育		
副　題	―学ぶ楽しさを実感し、自他を愛する生徒の育成―		
学 校 名	岡崎市立岩津中学校	校 長 氏 名	小野　隆義

1　研究経過

令和３年度から「自己肯定感」というキーワードを設定し授業研究を進めている。自己肯定感とは、「できる」「分かる」を実感したり、自分の判断に自信をもったりすることで高まると考え、その実現にむけて本年度の研究を進めることとした。

2　めざす生徒像

・主体的に追究し、学びを深めようとする生徒
・他者とのかかわりの中で考えを深め、積極的に自分の思いや考えを表現しようとする生徒
・多様な価値観に触れ、互いの違いを理解し、自分のよさを受け入れたり、他者へのかかわり方を考えて行動したりする生徒

3　研究の仮設

① 生徒自身の学びの振り返りや思い、気付きや考えから、授業課題の設定を工夫すれば、生徒が理解したいと思っている内容を主体的に追究し、学びを深めることができるであろう。
② 授業展開の中で、目的を明確にした上で協働的な学びを取り入れれば、他者とのかかわりの中で多面的・多角的に追究を進め、考えを深めながら積極的に自分の思いや考えを表現しようとすることができるであろう。
③ 考え、議論する道徳科の授業を展開したり、活動の振り返りの場を工夫したりすれば、互いの違いを理解し、自分のよさを受け入れたり、他者へのかかわり方を考えて行動することができるであろう。

4　仮説に対する手だて

＜仮説①に対して＞
ア 生徒の思いや気付き、考えをもとに課題を設定する。
イ 学習課題につながる思いや考えを表出させるために、生徒の考えを揺さぶる教材・資料の提示や設定、発問の工夫を行う。

＜仮説②に対して＞
ア 個の考えをもとに、必要に応じてチームで話し合う場を設定する。
イ 協働的な活動の場面での発問を吟味する。

＜仮説③に対して＞
ア 道徳科の授業で、「自分とのかかわりで考える」「多面的・多角的に考える」「自分の生き方を考える」ことができる展開を考える。
イ 他教科・領域と関連付けながら、道徳的価値を補充・深化・統合する。

５　成果と課題

（１）８月に愛知教育大学准教授の神門大知先生をお招きし、現職研修を行い、価値のある教材を準備し「問い」を生むことの大切さを再認識した。その後、各教科部会で一つずつ、単元構想を練り合い作成した。２学期以降、単元を貫く「問い」や、単元を通した生徒の思考の流れをよく考え授業を組み立てられるようになった。

（２）　仮説①については、授業内での見取りに加え、スクールタクトや学習カードによる振り返りを有効活用し、学習状況を把握したり、生徒の考えを生かした課題設定を工夫したりすることができるようになってきた。



＜タブレットを利用し話し合う様子＞

（３）仮説②については、研究主任が「個が考えをもつ」ことの大切さを繰り返し伝えることで、意識が一層高まった。その上で、目的を明確にした必然性のある協働的な活動（チーム学習やペア学習）を展開できるようになってきた。各学級に配備しているホワイトボードや、マイタブレットを場面に応じて使い分け、積極的に活用することでチーム学習が定着していると感じる。

（４）豊かな心を育む道徳科の授業を大切にするため、外部講師による研究授業を毎年自主的に行っている。今年度は５月と１０月の２回、実施することができた。個の考えを深め課題とじっくり向き合うことで、疑問や確かめたいことを自然と聞き合うチーム学習ができるようになってきた。



＜道徳科の研究授業を全職員で参観する様子＞

（５）今年度のアンケートで「授業では、進んで自分の意見や感想などを発表している」と答えた生徒は、昨年度とほぼ変わらず54%だった。一昨年度から４ポイント増えており、仮説②の手だてについて一定の成果が得られていると考える。一方で、「授業は、分かりやすく楽しい」と答えた生徒は、昨年度から３ポイント減り 80%だった。生徒たちは自分の考えを伝えることが出来るようになりつつあるが、それが「できた」「分かった」につながるところまで達していないと考察できる。

（６）（１）の考察にあるように、単元全体を見通し、生徒の思考の流れを考えた授業を展開できるようになってきた。また、実生活と結びつきがあり、生徒が自分事として捉えられるような教材を準備し、個の考えを大切にした授業が展開できるようになってきた。

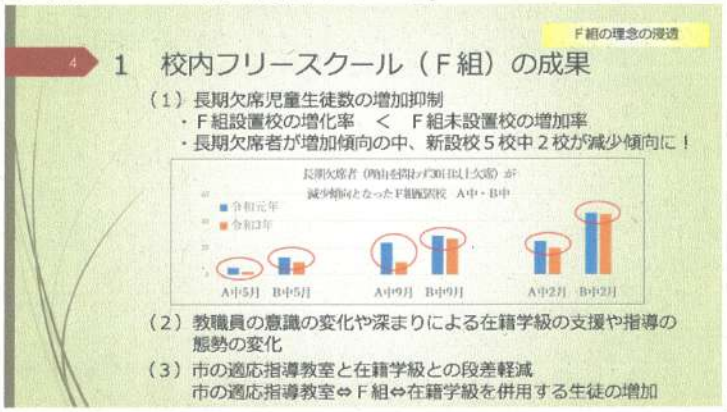
（７）今後の課題として、今一度、「自己肯定感が高まった姿」とはどんな姿なのか、各教科で具体的に示すことができるよう検討したい。そして、その実現のための「手だて」を再度練り直し、研究主題に迫っていきたい。また、教師が生徒の学びを揺さぶるよりよい課題を設定するためには、生徒一人一人の実態を的確に把握できるようにする必要がある。事前アンケートや学習活動の様子、振り返り、レポートなどから生徒の学習状況を見取り、「診断的評価」や「形成的評価」をその都度行い、連続的に授業改善する習慣が身につくようにしていきたい。そして、個に合わせた学習目標を設定し、多くの生徒が自分に自信をもつことで自己肯定感を高められるよう今後も研究を進めていきたい。

目次へ

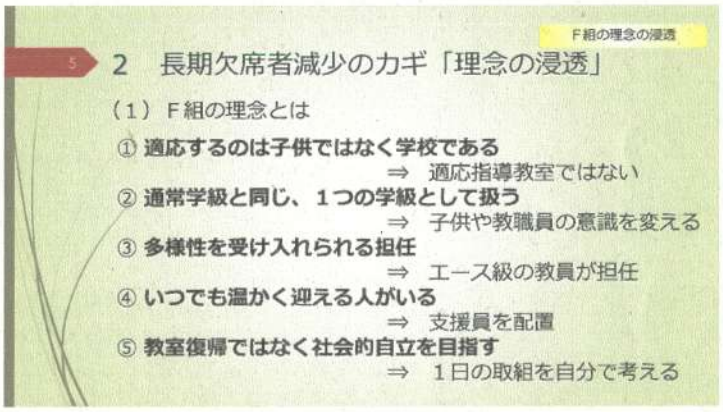
研究主題	長期欠席生徒の自立に向けた校内フリースクールＦ組と夜間学級Ｓ組の取組		
副　　題	Ｆ組の理念の展開による真の個別最適化をめざして		
学 校 名	岡崎市立矢作中学校	校 長 氏 名	山内　貴弘

１　本校は、市内に先駆けて令和元年より校内フリースクールＦ組を設置し、今年で５年目を迎えた。Ｆ組を通してこれまで全国的に課題となっている不登校児童生徒の対策について組織的に取り組み、その解決に向けた「チーム学校」の在り方について研究を進めている。

その成果として①長期欠席者のうち、回復傾向となる生徒数が増えた。②長期欠席者数の増加抑制(未然防止)の効果が見られた。その理念がＦ組以外の学級にも浸透し、学校全体の支援体制や指導の在り方が変化してきたこと。である。



これらの成果が出たのは、Ｆ組という環境を整えたこともあるが、それ以上に「Ｆ組の理念」が学校全体に浸透したことにあると考えている。そこで、今年は、その理念の更なる拡大と深化を研究の核に据えた。



Ｆ組の理念は、大きく、右の５つにまとめられる。この理念はＦ組だけでなく、全学級に浸透させることが、長期欠席者減少のカギになると考えている。Ｆ組設置校は、初年度本校を含めた３校で、その後拡大し、昨年度、市内全校に設置された。どの学校もＦ組の理念を浸透させ、誰一人取り残さない学校運営のために「ひと、もの、こと」を充実させ、取り組んでいる。本校は、これまでの成果と課題を踏まえ、本年のテーマとして、『改めて』地域の学校として長期欠席生徒の自立や個別最適化された教育の実現の為、家庭、社会との連携の在り方を研究することにした。を目指した。

２　研究の内容

①　Ｆ組の一層の機能充実を図りつつ、新たに夜の居場所づくりとして夜間学級Ｓ組を設置し、地域の学校としての居場所づくりを推進する。

②　個に応じた学びの場の創出と自己肯定感を育む体験活動等の取組を充実させる。

３　本年度の研究内容（重点目標）　＊下線部が今回の助成に関わる内容

（1）校内フリースクール「Ｆ組」の機能充実と夜間学級Ｓ組の立ち上げ

①夜間学級Ｓ（スター☆のＳ）組の開設と支援の充実　（構想図次頁）

②ペットロボットの導入と飼育活動による心の安定化　☞☞☞



③「Ｆ組畑」で行う農作物の育成

校内に畑を作り、野菜の栽培活動を行った。土を耕し、種をまき、

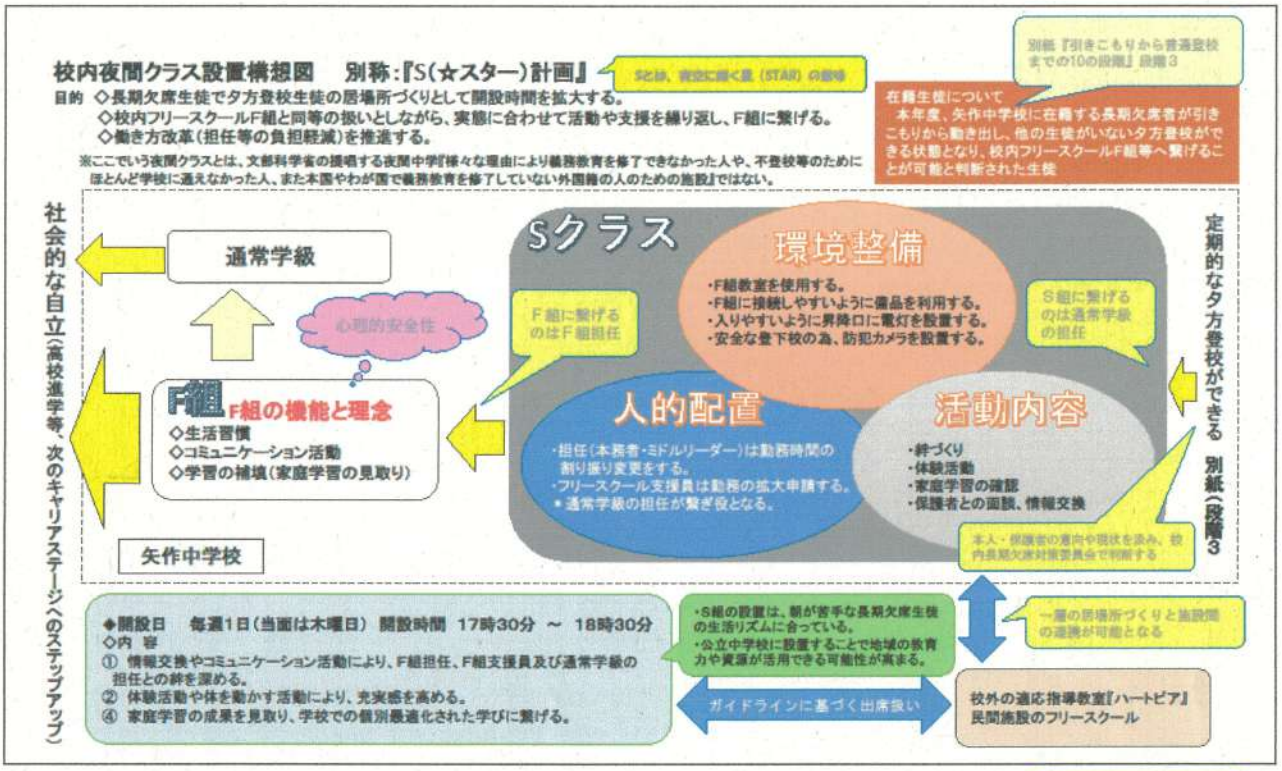
世話をすることで、Ｆ組生徒の心も耕され、登校する目的が自然に生まれた。収穫した、大根等の野菜をみんなで調理したり、先生たちに振る舞ったりして、自己肯定感を高めることもできた。



（2）個に応じた学習サポートのためのＩＣＴの充実及びソフト

④学習支援ソフト「COG-TR（コグトレ）」の導入

認識力を高め個別最適化を図った教材により、『そろえる教育』から、『伸ばす教育』への転換を図ることができた。



資料①　Ｓ組構想図

⑤Ｆ組Ｓ組交流スペースの制作

Ｆ組生徒手作りで交流スペースを製作した。

（3）交流・体験活動の弾力的な設定

⑥「臨床美術士による絵画教室チャレンジマイアート」

クリニカルアートとも言い、作品作りを楽しみながら達成感を味わったり、周りの人に認めてもらったりしながら心を軽くする活動を実施した。



⑦「パリオリンピック応援旗」制作活動 ☞☞☞

本校卒業生であるバレーボール石川祐希選手の応援旗を製作し、寄せ書きを呼び掛けた。

⑧「スポーツ大会」の実施 ☞☞☞

仲間とコミュニケーションを深めるために様々なスポーツ活動を実施した。



⑨医療連携講話「発達障害と長期欠席」（児童精神科医）の実施

⑩臨床心理士（本校スクールカウンセラー）による研修会

4．活動を通した生徒の変容、成長について

これまでのＦ組運営を通して、右の資料のように不登校支援のメソッドを明らかにした。以下具体的な事例を挙げてみる。

メソッド① **長期欠席はひとつの現象**に過ぎない。今、その生徒は支援を必要としているかを見取ることが大切となる。
メソッド② Ｆ組は新たな一人を生まない、**未然防止**の効果も高い。
メソッド③ Ｆ組で自分の得意なことを知り、さらに強みにする活動を実践することで自尊感情が**自己肯定感**に高まる。
メソッド④ Ｆ組で生徒を取り巻く教師の役割を整理することで、真の『**チーム学校**』ができあがる。
メソッド⑤ 学校に保健室があるように**Ｆ組は「心の保健室」**だという認識を校内外で共有する。
メソッド⑥ 長期欠席対策の最も大きな支援は**「待つ」こと**である。その子にはその子の層がある。
メソッド⑦ 長期欠席生徒の多くが、**発達の特性を持つ**。大切なのは自分で自覚し生きていく術を身につけることである。
メソッド⑧ おそらく「長期欠席」がなくなることはない。だが、学校は一人の**「独り」を救い、繋がること**はできる。
メソッド⑨ 心にエネルギーを貯め、自己肯定感が高まった生徒は、**自然に「みんなの中で生きたい」と思うようになる。**

資料② Ｆ組の運営を通して明らかになった指導支援のメソッド

事例Ⅰ（メソッド⑤）校内の全生徒や地域に積極的にＦ組の存在を周知することで、Ｆ組の生徒に対する理解が進み、学校の内外で温かく見守ったり、寄り添ったりする環境が整った。当初、「Ｆ組に落ちる」というイメージがあったが、やがて「その子なりの事情がある」という前向きな受け止めを周囲がするようになり、校内外でのＦ組の認知が高まっていった。

事例Ⅱ（メソッド⑥）中１ギャップとコロナ禍で欠席が続いた生徒が、３学期になって突然登校した。理由を聞くと「勝手に体が動いた感じ」と語った。次年度に向けた意識が高まったようだったので、すぐにＦ組に繋ぎ、心を醸成させたことで、２年生の欠席は、殆どなくなった。

事例Ⅲ（メソッド⑨）Ｆ組にいることで通常学級への復帰の可能性がかえって低くなるのではないかという意見がある。だが実際、各校のＦ組では、多くの生徒が年度の後半には、通常学級と併用して生活できるようになってきているという。心のエネルギーが蓄積されることで、自ら教室復帰を果たしたという報告は少なくない。

事例Ⅳ（メソッド⑨）音楽室にあったギターに興味を示し、練習を繰り返した生徒が、文化祭で全校生徒に向けて弾き語りを披露した。この時の拍手は、小４から中２まで殆ど欠席であった彼のエネルギーを高め、最終的に高校進学を果たした。

資料③ Ｈ中学校の生徒達が卒業期にまとめた「Ｆ組のいいところ」。Ｆ組は生徒の「心の居場所」として存在している。



5．活動が周囲に与えている影響

Ｆ組に関する世間の関心は高く、開設初年度から多くのマスコミ、行政、学校関係の視察依頼があった。視察や見学を通して、Ｆ組で自分のやりたいことを見つけ、心のエネルギーを満たしていく生徒に対して、「長期欠席生徒に対してもっとネガティブな印象を持っていたが、コミュニケーションもとれ、普通の中学生と同じ印象を持った」「他の生徒の見る目や理解を知り、校内でＦ組がひとつのクラスとして認知されていることを知った」「校内の他の先生たちの長期欠席に対する考え方や行動が変わってきていることに共感した。長期欠席という課題は学校運営全体の

課題であることを知った」等の声を頂いた。



資料④　☆「S組」のSは、「夜空に輝く星（STAR）」の意味

他の児童生徒が学校にいる時間帯は登校できないが、夕刻以降であれば登校できる、各校にもそのような状態の児童生徒がいるのではないでしょうか。 夜間学級「S組」は「F組」の開設時間を拡大し、子供のもつ特性や心理的要因等を踏まえた支援を通して、F組での学びに繋げる学級です。（S組構想図より）

6．まとめと考察

令和4年12月27日、岡崎市の近隣にある幸田町民会館「さくらホール」にて岡崎市教育委員会主催の「岡崎発！校内フリースクールフォーラム」を実施した。市内外の参加者（会場参加者440人、オンライン参加者725人）からは、「選択肢が多いとチャレンジできるという視点を教えていただき、校内フリースクールの意義を改めて学ぶことができた」「誰にとっても魅力ある学校づくりの難しさを感じたが、学校がもっと多様であるべきだと感じたし、公教育の可能性を強く感じた」という声があり、『F組の理念』について多くの共感の声を頂き、魅力ある学校づくりの必要性を発信することができた。その後、市内の各学校では、F組の理念が一層浸透し、夜間学級S組の発想や小学校のF組設置の機運が高まっていった。以下、本事業のポイントを示す。

○「地域の子供は地域で育てる」　公教育だからこそ学校と地域が一層連携した教育の実現を目指すことがポイントである。

○「不登校ではなく長期欠席」　不登校という定義ではなく、学校は生徒の困り感を把握し、受け止めることがポイントである。

○「F組に完成形はない」　学校は、前の子供たちの状況を個々に把握し、支援の在り方を追究することがポイントである。

目次へ

研究主題	未来をたくましく生きる力を育む教育の創造		
副　　題	～仲間と学ぶＳＯＺＯの時間を核に据えて～		
学 校 名	岡崎市立翔南中学校	校 長 氏 名	寺坂　信久

【研究授業】

〈仮説①〉実社会・実生活の事象を学びのきっかけにすることで、生徒の想像力・好奇心・探究心を高め、現実に立ち向かう主体的な追究活動と必然性のあるかかわり合いに導くことができるであろう。

（手だてＡ）実社会・実生活の事象を導入した課題解決型の学びを構成する。

〔実践〕・各気候帯の家の写真をスライドで見せた。各気候帯の特徴的な家から、徐々に最近の均一化された家へと提示する写真を変えていくことで、暮らしの変化に目が向くようにして、課題へつなげた。（社会科）【写真①】

・いくつかの砂時計を提示し、砂の量の違いによって、砂の落ちる時間が異なることに着目できるようにして、関数関係の意味や比例、反比例の学習につなげた。（数学科）【写真②】

・手持ち花火が水の中でも燃え続ける様子を見て、その理由を考えるという課題につなげた。（理科）【写真③】



【写真①】



【写真②】



【写真③】

〈仮説②〉追究活動やかかわり合いにおいて、協働的な課題解決の場を設定し工夫することで、対話的な思考・吟味から新たな価値の発見に導くことができるであろう。

（手だてＢ）教具やICTの活用と学習形態の工夫により、協働的な課題解決の円滑化を図る。

〔実践〕・コラボノートを使って、情報の共有や整理を行えるようにし、作業や話し合いの効率化を図った。（社会科）【写真④】

・「東京タワーとスカイツリーが同じ高さに見える場所はどこだろうか」という学習課題を解決するための手助けとして、タブレット端末の写真機能を使った。（数学科）【写真⑤】

（手だてＣ）協働的に生み出した学びの成果を表現する場を設け、焦点化を図ったり、新たな視点を導いたりするよう教師支援を行う。

〔実践〕・気候帯をまたいだ共通点を考え、それを学級全体で共有することで、世界各地に共通の課題があることに気付くようにし、今後の各気候帯の暮らしに焦点を当てた。（社会科）【写真⑥】



【写真④】



【写真⑤】



【写真⑥】

〈仮説③〉課題の解決後に改めて実社会・実生活を見つめられるようにすることで、解決できた事柄から深く考えを進ませて、学びを使いこなし、新たな課題や価値をＳＯＺＯ（想像・創造）することができるであろう。

（手だてＤ）課題整理後に改めて実社会・実生活の事象を見つめる場（ＳＯＺＯの時間）を設け、学びを新たな課題やＳＯＺＯ（想像・創造）へ発展させていこうとする姿勢を認める教師支援を行う。

〔実践〕・生徒の意見に自由にかかわる場を設けて、考えを広げた。（全教科）

> ・自然を守りつつ、自分たちが豊かに暮らせるようにするためには、その世界の自然や気候がどのようになっているか、しっかり見ていかないといけない。（社会科）
> ・図書室で音の鳴るタイマーが使えないから、砂時計はよいと思った。（数学科）
> ・線香花火が途中で落ちてしまうのも、酸素がなくなってしまうからかなと思いました。（理科）

《成果》導入の段階で、実社会・実生活の事象を扱うことで、生徒の学習内容に対する興味は高まった。事象は、より身近なものを提示することで、その後の学習への意欲にもつながった。また、タブレット端末を利用して、個人の考えを書き込み、その後、グループや学級全体で共有化することで、他者の考えを取り入れて新たな考えを構築する姿が見られた。

《課題》課題整理後に改めて実社会・実生活の事象を見つめる場では、学びを新たな課題や視点へ発展させていくことができないこともあり、教師支援の在り方を再度考える必要を課題としたい。

【行事】

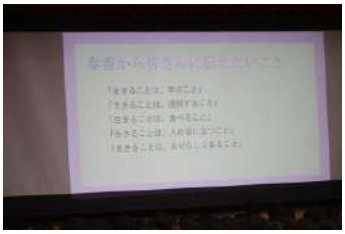
（　学校保健委員会　）

講　師：坂野　貴宏　氏（滝中学校・滝高等学校教諭）

演　題：「『春の香り～脳腫瘍と闘い十八で逝ってしまった最愛の娘へ』から学ぶ命の授業」

18歳という若さで脳腫瘍により亡くなった次女の春香さんへの思いを通して、命を大切にすることを学んだ。涙ぐみながら話を聞く生徒もおり、どんなことがあっても命を疎かにしてはいけないと考えることができた。





（　翔南の夢プロジェクト　）

講　師：矢野きよ実　氏（書家・パーソナリティ）

演　題：「一人じゃないよね」

毎年、生徒の豊かな心の醸成を目指し、講演会を行っている。今年度は、矢野きよ実氏をお招きした。東日本大震災をはじめ、能登半島地震の支援などをされている。その中で生まれた、被災地の子どもたちの書の作品を紹介しながら、「生きること」「命の大切さ」について講演された。作品には、被災した子どもたちの、経験から生まれた心の底から湧き上がってくる言葉が書かれており、それを目にした生徒たちは、生きることの意味を考えることができた。





目次へ

研究主題	学びの楽しさ、わかることへの喜びを感じられる生徒の育成		
副　　題	～自分自身を見つめるための「学びの見える化」の活用～		
学 校 名	豊川市立西部中学校	校 長 氏 名	加藤　正明

１　昨今の教育課程の理念と本校生徒の実態

文科省「新しい学習指導要領の考え方」では、新しい時代に必要となる資質・能力の育成と学習評価の充実が求められている。そこでは、

・学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性などの涵養
・生きて働く知識・技能の習得
・未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成

の３つが示されている。修得した知識や技能を人生や社会において適切につかいこなし、問題の解決や未知の状況への対応力を身につけさせることが重要視されている。

本校の教育目標は、心身ともに健康で、学ぶ喜びと豊かな心を育み、常に最善を尽くす生徒の育成である。どんな困難や問題に直面しても、自らのもてる知識や力を生かし、最善を尽くす生徒の育成を目ざすという意味では、新しい学習指導要領で求められているものと通じるところがある。研究に先立ち、生徒の学習の実態をアンケート調査した。その結果、令和４年度７月の調査では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答（※以後「肯定的回答」）した割合は、下の表の通りであった。

質問項目	肯定的回答の割合（%）
授業で「わかった」「できた」と思える	８１．２
生活の中で、学習したことを思い出したりする	７６．５
学習したことを「この内容は面白いな」「もっと知りたいな」と思う	６７．３

約８割の生徒が「わかった」「できた」と感じている反面、生活の中で学習内容を思い出すことや、学習内容についてもっと知りたいと感じるといった、学びに対する意欲的な姿勢については数値が低いものとなっている。また、学校評価アンケートでは自己肯定感に関する質問に対して、肯定的な回答をした生徒は全体の６割と低いものであった。また、９割以上の生徒が、仲間との協働・協同的な学習を好む反面、全体の場で自分の意見を言うことに対して抵抗感を示す傾向も見られた。

昨今の教育現場で求められている、学びを生活や社会の中で生かしていけるような資質・能力の育成を本校の生徒の実態をふまえてどのように進めていくべきかが本校の研究の出発点となった。が本校の研究の出発点となった。

２　研究主題の設定と「学びの見える化」

「わかった」「できた」という感覚は学習に対する達成感や充実感であることは言うまでもなく、学習意欲の向上にも密接に関係している。学びの楽しさやわかることへの喜びを感じさせられるような授業づくりをすすめることで、生徒は課題解決に向け、最善を尽くすだろうと考え、研究の主題を「学びの楽しさ、わかることへの喜びを感じられる生徒の育成」とした。研究主題に迫るために、目ざす生徒像を、①「わかりたい」「できるようになりたい」と意欲的に学習に取り組む姿、②問題の解決やさらなる高みを目指して、仲間と切磋琢磨する姿、③学びによって得た力を自分なりに生かして、目の前の課題の解決をはかる姿の３点とした。

①に対しての仮説は、自らの学びの足跡や成長を確認できるようなワークシートや学習ツールを活用させることが「わかるようになりたい」「できるようになりたい」といった気持ちを湧き立たせることにつながるだろうとした。

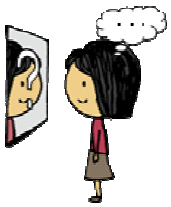
②に対しては、グループ学習を好むという生徒の傾向を踏まえ、課題解決や自己表現の場面での関わり合いに着目した。意図的に仲間との意見交流する場面を設けることで、学習に対する自己有用感や充実感を高め、自分らしさや自分自身のよさを知るきっかけになるだろうと仮説を立てた。

③に対しては仮説を、学んだ内容を応用・活用して解決を目ざす課題や教材に出合わせ、実際に解決する経験を積ませることで、学習に対する満足感や有用感につながり、さらなる学習への意欲を高めるだろうとした。

これら３つの仮説を検証するための具体的な手だてを考えた時、共通することは、「生徒自身に客観的な視点で、学習してきた内容を含め、自分の現状を捉えさせること」である。そこで、目ざす生徒像にせまるための軸となる主な手だてとして、授業のさまざまな場面において自分自身を見つめる機会を意図的に設けることとし、これを「学びの見える化」とした。

３「学びの見える化」について

「学びの見える化」は「鏡を与え、自分自身をチェックさせる」イメージである（図１）。例えば、学習や話し合いの前後に、意図的に“学びの見える化”を行うことにより、生徒は「自分自身（の状態）」を自分の目で確認することができる。自分を知ることで、「なりたい自分」「改善すべき点」を見出せるようになり、自らの学びの方向性を自らの意思で指し示すことができるようになる。また、他者と比較することで、多面的・多角的な視点に気づくことができる。さらには、できるようになった自分にも気づくことができる。



自分自身を意識的に見つめさせることで、
・その時点での自分自身の学びの現状を知る。
・他者との考えの違いがわかる。
・問題解決のための改善点や目標が具体的に見えてくる。
・過去の自分と比べることで、成長に気づく。

【図１　学びの見える化は“鏡を見る”イメージ】

学習活動の要所に「学びの見える化」を取り入れ、レベルアップした自分に対して、充実感や満足感、達成感を得られるような授業づくりを目ざすことにより、本校生徒の“弱み”を“強み”に変え、新しい時代に求められている生徒を育てることができると考えた。

４「西中ＢＡＳＥ」の設定

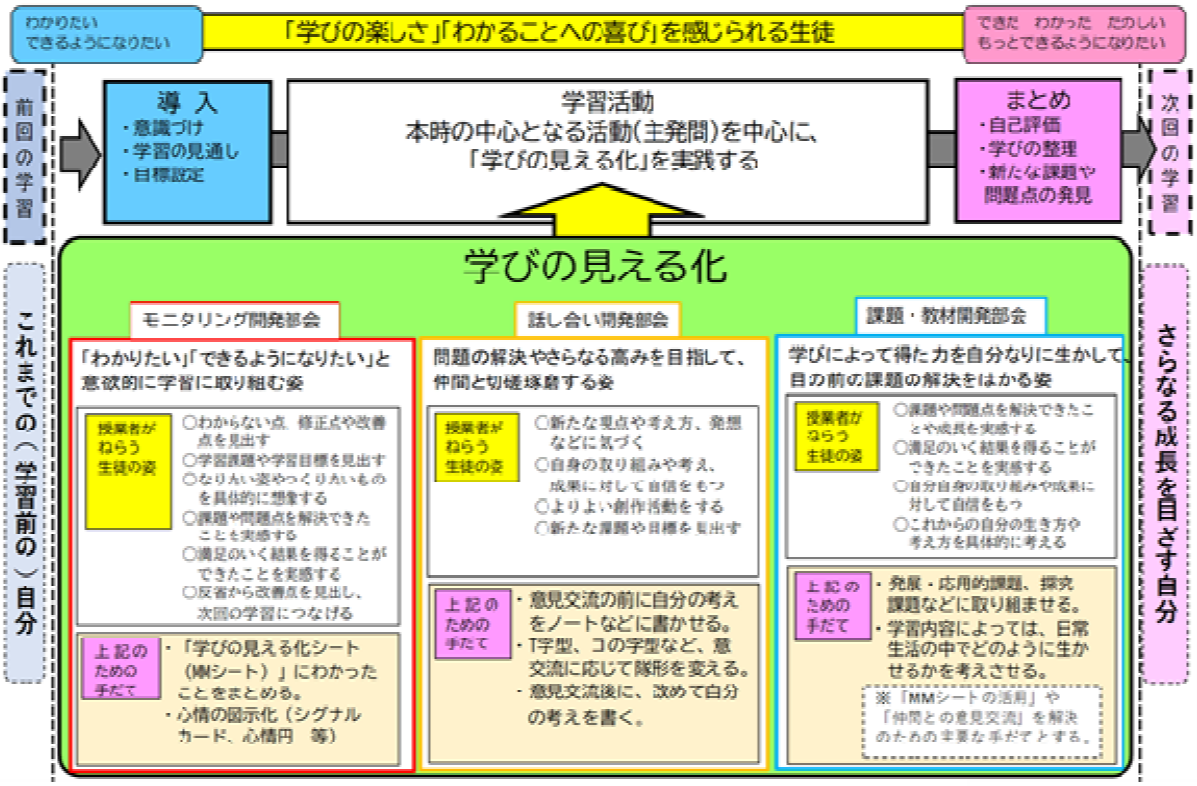
「西中ＢＡＳＥ」とは、研究を行っていく中で大切にしたい授業づくりの土台のことであり、生徒と教師双方に向けた授業に対する姿勢である。これまでの西部中学校の授業に見られた「意見を言うことに消極的でなかなか自分の考えを出したがらない」「教師と発言した生徒のキャッチボールで授業が進みがち」「意見が『単語』で終わってしまいがちで、話し合いが深まっていかない」といった現状を改善するための土台として設定した。「西中ＢＡＳＥ」は「学びの見える化」をより効果的に実践するために、「思いをきちんと相手に伝えること」「相手の思いを聴き、きちんと理解すること」「他者の考えに触れて、今一度考え直してみること」という３点の向上を目指している特別教室を含めた各教室の前面に「西中ＢＡＳＥ」掲示し、授業だけでなく、特別活動等でも仲間との関わりの中で意識をもって取り組ませるようにした。

５　現職研修部会の立ち上げと実践の情報共有

研究に対し、３つの目ざす生徒像に迫るために、「モニタリング開発部会」「話し合い開発部会」「課題・教材開発部会」の３つの部会を立ち上げた。各部会の代表は現職研修委員が務め、そのほかの教員は各自、選択制でいずれかの部会に所属することとした。同じ教科の教員が複数いる場合は、それぞれ違う部会に所属することにした。

月１回「現職研修の日」を設定し、そこで部会を開いて情報交換と実践報告を行った。集まった情報は各部会の代表が取りまとめ、現職研修主任が集約して「現研通信」などで全体に共有を図った。これにより、研究に対する意識を向上させ「ワンチーム」で研究を進めていくと同時に、若手教員に向けたＯＪＴとなることを意図した。

６「学びの見える化」を取り入れた授業づくり



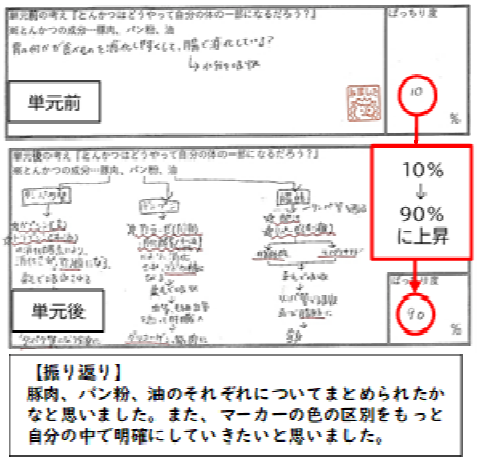
上図は、研究の主軸となる「学びの見える化」を取り入れた授業のイメージである。教科共通の事項としては、①生徒自身が学びの足跡から成長を実感することができるワークシートとして、「学びの見える化シート（通称　MMシート）」を実践していく　②意見交流の場では「話し合い開発部会」の提案に沿って、発言のさせ方や隊形を統一する　③単元のどこかで、学んだことを意識して活用・応用できるような課題や教材を設定するの３点とした。

７　成果と課題

（１）MMシートから見る生徒の学び

図２は理科「消化と吸収」において、生徒がまとめた MM シートの一部である。単元の前後で同じ発問をしたが、明らかに単元後の方が情報量は増え、発問に対して学習内容を生かして詳しくまとめているのがわかる。心情的な手ごたえを表現させた「ばっちり度」についても上昇していることがわかる。振り返りでは、自分のMMシートのまとめ方への満足感とさらに理解を深めるための改善点が書かれていた。

このような表現はこの生徒に限ったことではなく、ほとんどの生徒にその子なりの表現が見られ、理解を深めたことやうまくまとめられたことに対する「満足感」や「充実感」「有用感」を感じている記述が多く見られた。



【図２　生徒がまとめたWIシートの例】

（２）学習アンケート結果からの考察

①「わかりたい」「できるようになりたい」と意欲的に学習に取り組む姿

R4.7	R5.7	R6.7
81.2%	**88.7%**	**92.5%**

「授業で『わかった』『できた』と思える」という質問に対する、肯定的な回答の割合は、令和４年度から比べると今年度は１１．３ポイント上昇した。学びの見える化は生徒自身が学習する中での成長を自覚することができるようになっていることを示していると言える。

②問題の解決やさらなる高みを目ざして、仲間と切磋琢磨する姿

グループで、すすんで意見を伝えたり、仲間の考えを聴いたりしている。	**91.0%**
全体で、すすんで意見を伝えたり、仲間の考えを聴いたりしている。	**81.3%**
仲間の考えを聴いて、考えが深まったり、わからなかったことがわかったりする。	**93.0%**

仲間との関わりに関する質問については、以前より数値は高めながら、全体の場で意見を伝えることは、グループ内で伝え合うことに対して、１０ポイントほど少なく、今後の研究に向けての課題であると言える。

③学びによって得た力を自分なりに生かして、目の前の課題の解決をはかる姿

	R4.7	R5.7	R6.7
生活の中で、学習したことを思い出したり、使ったりする。	**76.5%**	**79.0%**	**79.7%**
勉強していて、「この内容は面白いな」「もっと知りたいな」と思うことがある。	**67.3%**	**72.9%**	**78.7%**

学びを自分なりに生かすことができているか、学習に対して「さらに知りたい」という思いをもてているかどうかに対する肯定的回答は、年々上昇したものの、８割に満たない結果となった。生きて働く知識・技能の習得、学びを人生に積極的に生かそうとする生徒を育む授業づくりについても課題があると言える。

（３）課題に対する新たな取り組み

今回の研究では、全体の場で自分の意見を伝えることに対して苦手意識が高いままであるという課題が残った。このことについての一つの改善策として、新たに「あいあいタイム」を考案し、取り組んでいる。

「あいあいタイム」とは、多様な意見が出されるようなテーマを設定し、気軽に自分の考えを全体の場で伝え合う１０分間の活動である。クラスごと、担任中心に行うが、テーマに対して結論を出すのはなく、互いの考えを伝え合い、聴き合うという、活動そのものを楽しく行うことを目的としている。また、生徒の発言を引き出すような問いかけや切り返しなど、活発な意見交流のための教師のスキルアップもねらいのひとつとしている。

「自分の考えを仲間に聴いてもらえるって嬉しい」「いろいろな考えが聴けて面白かった」という経験を積ませることができれば、さらに学習意欲を高めることができ、主体的、対話的な学習が活発になると考えている。今回の研究で目ざしたことは、これからの学校教育で求められることにおいても不易なことだと考えている。今後も、生徒のための研究を続けていきたい。

目次へ

研究主題	主体的に学び、意欲的に自分の思いを表現する生徒の育成		
副　　題	さまざまな手段で自己表現ができる学習活動の工夫を通して		
学 校 名	碧南市立西端中学校	校 長 氏 名	石原　竹春

１　テーマ設定の理由

本校の生徒は、実直で穏やかであり、行事には覇気ある姿で燃えることもできる。地区で行われるボランティアにも多くの生徒が参加する姿も見られる。しかし、授業については、まじめに臨むことができている反面、自分の考えを述べたり表現したりする場面では尻込みしてしまう傾向が強い。そこで、自分の思いを表現できる生徒の育成をめざし、研究テーマの主題を「主体的に学び、意欲的に自分の思いを表現する生徒の育成」と設定した。単元構想、教材教具やワークシート、言語活動、教師の切り返しなどの指導技術、共感的人間関係の構築など、さまざまな観点から工夫を模索した。

２　研究主題に沿った実践

（１）　自主公開授業

全員が互いの授業を公開しあい、授業の質を上げていくことを職員間で共通理解した。授業の感想や工夫を交流しやすくするため、「授業公開シート」をもとに、視点を明らかにした感想交流をおこなった。お互い時間のない中で、参観した授業の感想交流がポイントを絞ってできた。



【授業公開シート】

（２）　多様な言語活動の工夫

いきいきと自分の思いを表現する生徒の姿を求め、話し合いの場をどのように設定するかについて工夫をした。「まなボード」「ライティングシート」等教具ツールを活用して活性化を図ったり、ＩＣＴ機器を活用したり、ペア活動を組み込みながら発表・表現の場の設定をしたりするなど、アウトプットの場面を授業に意識的に設定し、言語活動を増やし、能動的な授業になるようにした。



【まなボードを活用した授業のようす】

（３）　人材の活用

地域の人材に講師として来校いただき、対話を通じて自己の考えを広めたり深めたりした。実際に人から学ぶ経験は、生徒の目を輝かせることとなった。生徒数の少なさを生かし、学年集会で講師の方と講話の内容をふくらませて、対話をする時間をとった。

（４）　現職教育

自分の言葉で思いを表現できる生徒の姿を引き出すには、教師が生徒をより深く理解することが必要である。また、授業のレベルを上げるためにも不可欠な要素である。現職教育の場を設定し、互いの引き出しを増やせるよう取り組んだ。講師の先生方にも多くの教示をいただいた。

３　成果と課題

生徒によるアンケートでは「授業がよくわかる」が 84%に対し、「自分の考えを発表できる」は67%と現実には差がまだある。今回、さまざまな角度から生徒理解について研鑽を積み、生徒が自分の言葉で思いを語りたくなるような授業を願った。

定型の語形を示し、継続したことで少しずつ意欲的になった生徒が増えた手応えが見られるとの

教師の声を聞くようになってきた。また、ペア→グループ→ペアの往復の中で活性化する場面がみられたり、「まなボード」等の教具の導入により、フリートークの場面で息の長い発表ができたりと、一定の成果が出てきている。

しかし、生徒が自分の言葉で思いを語りたくなるような教材の開発・単元構成や教材の開発・問いの工夫など、まだまだ充分とは言えず、課題は残っている。今後もめざす生徒像の実現にむけ、継続した取り組みを行っていく必要があると考えている。

目次へ

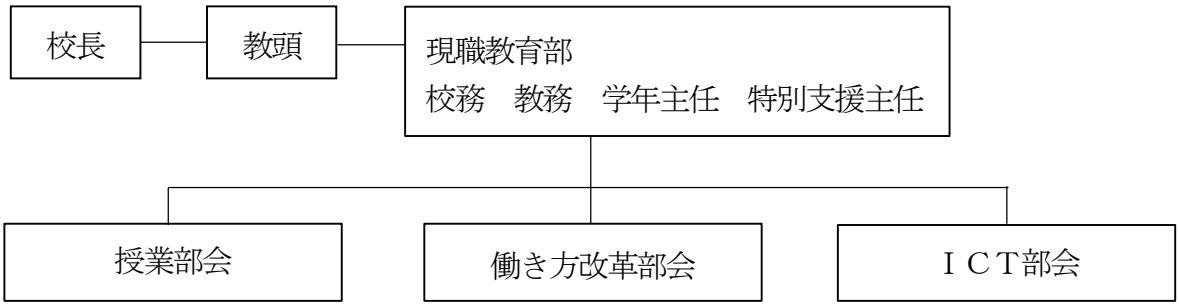
研究主題	仲間と関わりながら、自分の考えを深める台中生の育成		
副　　題			
学 校 名	豊田市立猿投台中学校	校 長 氏 名	三浦　秀一

1　はじめに

仲間と関わりながら、自分の考えを深める台中生の育成を目指して現職教育に取り組んでいる。昨年度までは、ICT 機器を活用した話し合い活動に取り組んできた。本年度は、話し合い活動をより充実させるために、話し合いのルールをつくり取り組んでいる。

2　研究組織

今年度から、現職教育の組織を変更し、授業部会、働き方改革部会、ICT 部会をつくり、すべての教員がいずれかの部会に所属するようにしている。３部会のまとめ役に学年主任を配置し、各学年の担当者が均等に分かれるようにした。これによって、すべての学年が各部会に関わるようになり、学校全体で歩調を合わせて活動している。



3　研究実践

（1）部会での目標設定

4 月の現職教育で、各部会の目標を設定した。各部会の目標は表の通りである。今回の研究は、授業部会が中心となって行っている。

部会名	部会の目標
授業部会	仲間と関わるための基礎基本の徹底。
働き方改革部会	自分の余暇を充実させる。
ICT 部会	ICT 機器を上手に活用し、生徒と関わる時間を増やす。

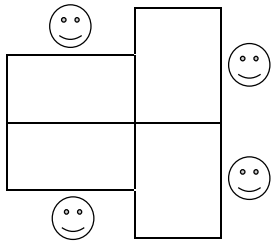
昨年度は、ICT 機器を活用した話し合い活動の工夫を行い、授業実践を行ってきた。昨年度の反省から ICT 機器の活用はある程度進めることはできたが、話し合いの際にお互いの顔を見ながら、話し合いをする生徒が少ないことが課題となった。そこで、今年度は、話し合い活動をする上で、仲間と関わるための基礎基本をつくり、話し合い活動で意識して指導することにした。

「仲間と関わるための基礎基本」
①話すときは人の多い方を向く。
②話を聴くときは話している人を見る。
③学習グループとコの字隊形を効果的に活用する。

（2）道徳科の模擬授業

すべての教職員が「仲間と関わるための基礎基本」を確認するために、道徳の模擬授業を行った。

代表授業者を決めて、他の教員は生徒役となり、授業の進め方を確認した。授業後の話し合いでは、授業中の机の配置、話し合い活動での班の人数などが話題に上がり、今年度は生活班と学習班を同じ人数で構成し、4 人班とすることが提案された。また、机の配置についても意見が出され、図のように机を配置した方が、お互いの顔を見やすく、話し合いがしやすいということからこの配置で話し合い活動を行うことが確認された。


【机の配置】

（3）教科領域等指導訪問での取組

７月の教科領域等指導訪問では、２年生の総合的な学習で研究授業が行われた。今回の授業では、職場体験学習の発表会に向けての話し合いを行い、改善点について意見交換をした。話し合い活動では、４月の提案にあったように、４人班で話し合いを行った。話し合いの場面で、お互いの顔を見ながら話し合いをする姿が多く見られるようになり、授業部会が進めている取組の成果が見られた。



教科領域等指導訪問に合わせて、全校体制で「お互いの授業から学び合う週間」を設定した。この期間に「仲間と関わりながら、自分の考えを深める授業の手立て」を意識した授業を行った。学年部でペアをつくり、お互いに授業を見合ってアドバイスするようにした。

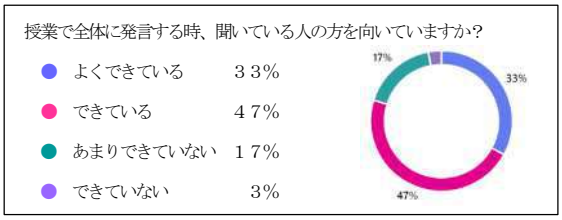
教科領域等指導訪問の研究協議会では、教科部に分かれて協議題「仲間と関わりながら、自分の考えを深める授業の手立て」について話し合いを行った。話し合いの結果、①仲間と関わり合えるツール②話す必然性をもたせる動機付け③自分の意見をもつ④話し合いの方法⑤意見の根拠などが大切だという意見が出された。

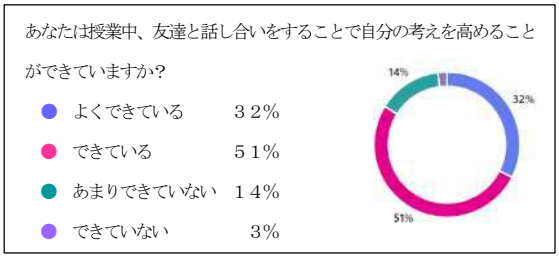
（4）愛知県総合教育センターの講座の受講

９ 月には愛知県総合教育センターの研究指導主事を講師に招いて、「指導と評価の一体化を図る授業マネジメントシート活用」の講座を全職員で受講した。先進校での実践をもとに授業マネジメントシートの活用について説明していただいた。評価には、「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」があり、これを分けて考えていくことが必要であることが示され、後者の評価については、3 観点を評価する場面を精選していくことが大切であることが示された。講座後のアンケートから今回の研修を活用したいという教員は９０％以上おり、授業改善のために評価を生かしていこうという姿勢が見られた。

４　成果と今後の課題

話し合い活動で「仲間と関わるための基礎基本」を、どの程度意識できているのかを調べるために、アンケート調査を行った。アンケートの結果から話すときに聞いている人の方を向いて話していると回答した生徒は８０％、話を聞く時に話している人を見ていると回答した生徒は８３％だった。話し合い活動を通して自分の考えを高めることができますかという問いには、８３％の生徒ができていると回答していた。このことから、今回の現職教育の取組で、仲間と関わりながら、自分の考えを深める生徒を育てられていることが分かった。今後もこの取組を継続して、さらに自分の考えを深められる生徒を育てていきたい。





目次へ

研究主題	「自らの考えをもち、主体的に学び続ける生徒の育成」		
副　　題	～ふりかえり活動を軸とした授業づくりをめざして～		
学 校 名	豊田市立松平中学校	校 長 氏 名	川村　典子

校内研修の実践

（１）３つの部会を中心とした組織の構築

昨年度から若手・中堅をリーダーとした３つの部会「トーク」「授業づくり」「ＩＣＴ」で構成している。

どの授業でも必ず振り返りを行うようにすることで、教師の授業力向上をねらう。生徒が振り返りを行うためには、授業者が授業のねらいと評価方法を明確にして授業に臨み、導入や生徒の主課題への取り組ませ方を充実すると考えた。

３つの部会からは４月に部会を行い、５月に各部会から職員へ提案し、現職教育に取り組んだ。８月には各部会から中間報告を行い、今後の取組について確認を行った。

（２）研究主任による模範授業

５月に、研究主任による社会科の研究授業を行った。研究授業に向けて、ほかの職員へ見せるべき内容を現職教育部で相談し、「見通しをもった単元構想」「振り返りの方法」「生徒の言葉で作る授業」についてわかるように模範授業を行った。授業者・生徒がともに笑顔で授業に臨んでおり、素敵な取組となった。授業では、授業者の簡潔で効果的な指示や、生徒の発言に対する的確な問い返しが参観者には勉強になった。また、振り返りシートの工夫が単元を見通して作成してあり、生徒自身が変容を感じられる構成となっており、振り返りの１つのかたちの例となった。

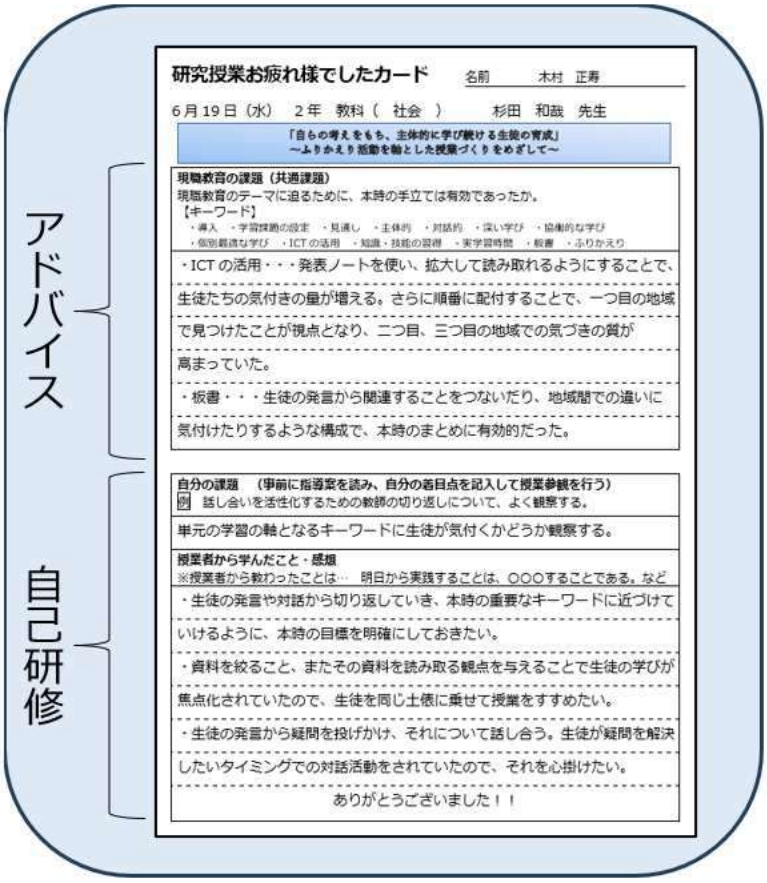


（３）一人一実践の実施

昨年度からの反省を生かし、若手育成に力を入れられるように、職員を２グループ（Ａベテラン・Ｂ若手）に分け、Ａグループが前半に実践を行うようにした。また、一人一実践の指導案は３部会のメンバーを中心に検討し、実践授業当日も３部会のメンバーは参観するようにした。しかし、指導案検討の相談時間の確保が難しかったり、授業実践の時に見に行けないメンバーがいたりするなど、体制の課題も残った。

教職員の授業力向上のために、昨年度は役職者が中心に実践授業を参観していたが、今年度は部会のメンバーが中心に参観するようにした。参観授業に臨む前に指導案を読み込み、自分なりの課題をもって参観に臨むことで、授業者だけでなく参観者の力量向上を図るねらいで試みた。

また昨年度、参観者が行っていた授業評価シートを見直し、若手の授業力向上の目的から、参観者が自分なりの課題をもって授業参観できるように、ワークシート（お疲れさまでしたカード）の工夫をした。参観者の自己研修の内容と、授業者に対してアドバイスを送る内容の両方を記述できるようにした。



【お疲れ様でしたカード】

（4）黒板の有効活用

ICT 機器が導入されてから、黒板に貼り付けるスクリーンによって、黒板に直接板書するスペースが狭くなってしまうことも少なくない。そこで、プロジェクターの映像は黒板以外のスクリーンに映し出し、黒板は直接板書するスペースとして使用することが望ましいと考えた。黒板全面を直接板書するスペースとして活用することで、授業の流れを子どもが振り返ることができ、思考を整理することのできる構造的な板書を行うことで、子どもの学力の定着を図ることができた。



目次へ

研究主題	かかわり合いを通して、考えを深めることができる生徒の育成		
副　題	自ら考え、議論する道徳授業づくりを通して		
学校名	豊田市立美里中学校	校長氏名	田口　賢一

本校の現職教育テーマは今年度で３年目となる。テーマを具現化するために、道徳部会、ミサトーク部会、授業づくり部会の３つの部会が中心となって、現職教育を進めた。各部会による取組については以下の通りとなる。

1　道徳部会の取組

ア　年間計画

・今年度の研修計画を検討し、道徳の美里スタンダードについて共通理解を図る。（4月）
・研究授業に向けた指導案を検討する。（6月、１１月）
・若手教員による道徳代表授業を実施し、講師の先生を招聘して協議会を行う。（7月、１２月）
・外部講師を招聘し、「自ら考え、議論する道徳授業づくり」について学ぶ。（8月）
・今年度の成果と課題を検証し、共通理解を図る。（3月）

イ　研修内容

これまで道徳の授業においては、①コの字隊形での授業、②主題にせまる主発問、③生徒同士の活発なかかわり合い、④考えの深まりがある振り返りの４つを大切にする美里スタンダードを作成して取り組んできた。しかし、授業実践において、心情理解レベルでとどまり、道徳的価値に対する考え方や感じ方、生き方について、個々の考えの深まりまでは至っていないという課題があった。

そこで、今年度は現職教育のサブテーマを、「自ら考え、議論する道徳授業づくり」とし、全教員がよりよい道徳授業づくりを目指し、同じ目的意識をもって研究を進めることができるようにした。若手教員による年２回の代表授業では、外部講師を招聘し、効果的な発問や切り返し、板書の工夫などについて研修を進めた。また、８月には、「自ら考え、議論する道徳」とはどのような授業なのか、代表教員が他の教員たちを生徒に見立てて実践を行い、外部講師から具体的にご指導いただいた。

また、ローテーション道徳（学年部の教員が全クラスで同じ教材で授業を行う）を各学年で実施し、一つの教材で何度も同じ授業を行うことで、教材の生かし方や道徳的価値の深め方など、一人一人の力量向上につなげることができるようにした。

2　ミサトーク部会の取組

ア　年間計画

・今年度の研修計画を検討する。（4月）
・ミサトーク全体会を行い、毎週水曜日朝に行うミサトークの実施について、共通理解を図る。（4月）
・全体会にて、各クラスや学年の取組について課題を出し合い、実施方法の修正点を検討する。（１０月）
・今年度の成果と課題を検証し、共通理解を図る。（3月）

イ　研修内容

人とかかわる力を磨くため、朝の帯学習（毎週水曜日）で、「ミサトーク」（話し合い活動）を継続して行っている。毎年、美里中に赴任した教員が理解して指導できるように、４月の現職教育で、「ミサトーク部会」の提案のもと、教員が生徒役になってミサトークを体験したり、担任として生徒に価値付けする役割の大切さを確認したりしている。また、これまでの課題として、「朝の１０分間では意見を深めるところまではいけな

い」「価値付けをする時間が足りない」などが挙げられ、今年度から朝の帯学習を１５分間で実施している。朝の帯学習、授業での話し合い活動を継続してきたことで生徒たちが話し合うことに慣れ、楽しい雰囲気で話し合いをしたり、抵抗なく相手に自分の意見を伝えたりすることができるようになってきている。さらに、今年度は生徒会の新たな企画として、縦割りミサトークを実施するなど、ミサトーク（話し合い活動）への生徒の意識も高まってきている。

3　授業づくりの部会の取組

ア　年間計画

・現職教育を支えるサブテーマを各教科部会で作成する。（4月）
・授業づくり部会による提案授業、協議会を通して、美里スタンダードの授業づくりについて共通理解を図る。（5月）
・今年度の成果と課題をPDCAサイクルで検証し、共通理解を図る。（2月）

イ　研修内容

４月に「授業づくり部会」からの提案授業を全職員で参観し、美里スタンダードの授業づくり（①オリジナル単元目標の提示、②見通しがもてる学習課題の提示、③学びを可視化するピクトグラム、④かかわり合う時間の設定、⑤学びにつながりがうまれる振り返りの設定）について共通理解を図った。また、各教科で現職教育テーマを支えるサブテーマを設定し、代表授業を行ったり、他校の研究授業を参観したりするなど、PDCAサイクルを通して、それぞれの実践を見直し、教科ごとに力量向上を目指している。研究授業を行った際は、具体的な視点を示した参観シートをもとに参観できるようにし、授業者へのフィードバックも行っている。

さらに、２０１９年に、独立行政法人教職員支援機構主催のセミナーで示されたピクトグラムを、美里中版として２年前から活用している。指導案を作成する上で先生方が授業づくりをイメージしやすくすること、また板書に活用することで生徒の学びを可視化することにつなげている。

4　成果と課題

3年前、全国学力学習状況調査の結果から、本校生徒の課題として示された「話し合う力を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりする」ことを高めたい力ととらえ、研究主題を設定した。それを具現化するという視点で、教員一人一人が授業改善を図ることができるように研修を進めてきた。授業づくり部会では、校内での授業研究だけでなく、他校の実践を率先して学び、OJT研修で広げるなど、個々の力量向上につなげることができた。また、今年度力を入れて取り組んだ道徳授業づくりについては、研修を通して、「道徳の授業づくりは難しいけれど、もっと勉強して力をつけたい」「発問や切り返しの仕方、タイミングで生徒の考えの深まりが変わる」など、道徳の授業づくりにおける一人一人の意識が高まったことがうかがえた。

これまでキーワードの一つとして掲げている「かかわり合う」ことで、個々の考えを深めることができるように、ミサトーク部会を立ち上げ、話し合う力の土台づくりを目指して朝の帯学習に取り組んできた。今では、どの授業においても、「ミサトーク」という言葉が教員から投げかけられると、生徒同士が意見を伝え合うことで、問題解決を目指す姿がみられる。ただ、生徒の意見が「出し合い」だけに終わってしまい、個々の考えが深まらない、広がらないという課題もある。今後は、各学年の発達状況に応じて、伸ばしたい生徒の力を教員間で共通理解したり、話し合う目的を明確にしたテーマを設定したりすることで、朝の帯学習をより充実させ、一人一人の話し合う力を高めていく。また、来年度は3年間で高めてきた「かかわり合う」力をさらに伸ばしていくことができるように、「対話」をキーワードにし、ミサトークをベースにさまざまな話し合い活動について、授業等でいかすことができるよう研修をすすめていく。生徒にとって、「わかる、できる、やってみたい」を実感できる授業づくりにも取り組んでいきたいと考えている。

目次へ

研究主題	自ら課題を見つけ、自ら学び、未来を切り拓く生徒の育成		
副　　題	生徒一人一人が寄り添い合う　深い対話を目指した　授業改善		
学 校 名	豊田市立梅坪台中学校	校 長 氏 名	西原　理浩

1　研究の概要

「仲間の多様な考えを認め合う場において、『書く』『話す』『説明する』等の表現活動を通して協働し、自分の考えを問い直す場を設定すれば、これまでの自分の『見方・考え方』を更新させながら、自分の考えを深め広げて発信・評価することができるだろう」という仮説の下、①協働学習の工夫　②振り返りの効果的な活用　③話し合いトレーニングの実施　④学習用アプリによる個別最適化学習の推進　という４つの手立てを柱として、授業改善に取り組んでいった。

2　研究の実際

⑴　現職教育の取組

・４月８日　対話トレーニングと梅坪台型授業スタイルについて
　　部会に分かれてミーティング
・４月18日　問いと発問トレーニング
・５月９日　ファシリテーターの心得について
　　再学習について
・８月21日　単元デザインについて
　　ルーブリック評価について
・10月28日　AI型の活用と個別最適化学習について
　　対話トレーニング
・２月20日　今年度の成果について
　　次年度に向けて

⑵　一人一実践の取組

・10月７日　保健体育科「柔道」
・10月10日　保健体育科「器械運動」
・10月18日　国語科「故郷～話し合いを通して考えを言語化する・深める・合意する力を高める」
・10月23日　国語科「大人になれなかった弟たちに……」
・10月23日　社会科「世界の諸地域　アジア州～急速な都市の成長と変化～」
・11月20日　社会科「生産と労働」
・11月20日　保健体育科「球技（ゴール型)」
・11月21日　音楽科「日本の音階を使って旋律を作ろう」
・11月21日　数学科「平面図形」
・11月27日　数学科「平面図形」
・12月10日　英語科「Stage Activity2　Research Your Topic」
・12月13日　音楽科「曲の構成に注目しながら、曲想の変化を味わおう」
・12月13日　国語科「平家物語で名作映画を撮れ－登場人物の思いを想像する－」
・12月20日　道徳科「銀色のシャーペン」

⑶　教科領域等指導訪問（９月24日）

・教科と単元名　理科「白い物質の区別」

・協議会テーマ　「会話」から脱却し 「対話」を実現させるための 梅台授業スタイルの在り方 ～ 深い対話を目指した授業改善 ～

⑷　豊田市教育研究協議会提案（８月23日）

・外国語教育

「自分の英語に自信をもち、テーマについてわかりやすく説明し、伝えあう生徒の育成
～３年　タブレット学習とプレゼンテーション活動を通して～」

・総合的な学習

「主体的に地域と関わっていくことで自己の将来像を描くことのできる生徒の育成
～職場体験学習、未来学級の活動を通して～」

⑸　各種研修会参加（豊田市以外のもの）

・７月５日　第６４回東海北陸中学校長会研究協議会福井大会
・８月２日　三教研特別支援教育部会夏季研修会
・８月２日　三河教育研究会特別活動部会夏季研修会
・８月21日　愛知県数学教育研究会小中学校部研究大会
・10月30日　東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会三重大会

３　研究の成果

・校内現職教育の取組では、毎回教務主任を中心に各部会から学習に関する様々な提案がなされた。資料を読むだけでなく、実際に教員同士で対話トレーニングを行ったり、単元構想の立て方をシミュレーションしたりするなどの実技を多く取り入れることで、教員の資質を向上させることができた。


資料「対話トレーニングの様子」

・毎週金曜日の朝の活動を「対話トレーニングの日」と定め、対話部会から出されたテーマをもとに、各教室で対話トレーニングを行った。司会や掲示係といった役割を与えたり、マニュアルをもとに対話に参加したりと、生徒全員がファシリテーターを経験できるような手立てを施したことで、生徒の対話スキルも高まっていった。
・一人一実践の取組では、話し合い活動などの生徒が活動する場面に授業時間の多くを用いて、生徒のスキルを育てようとする授業が多く見られた。中でも12月13日の国語科の授業では、解決したい課題に対して、どのグループも与えられた時間いっぱいを使って対話を繰り返す姿が見られ、生徒のスキルの高まりを感じるとともに、教員の授業力も向上していることを感じた。
・同じく一人一実践の取組では、ルーブリック評価を取り入れた授業も多く見られた。振り返り活動を充実させ、効果的に用いることで生徒の意欲を引き出すことができたと考える。
・AI型教材キュビナの再学習の取組を重視し、授業では前時や本時の復習をしたり、家庭学習の復習をキュビナタイムで行ったりしたことで、やって終わるのではなく、分からなかった点を見直す良い習慣が身に付いてきた。

４　終わりに

教務主任のリードの下、４つの手立てを意識して授業改善に取り組んだ結果、一定の成果を得ることができた。来年度も定期的な現職教育と一人一実践の取組を軸に、梅坪台型授業スタイルと対話の融合を目指して、授業改善に取り組んでいきたいと考えている。

目次へ

研究主題	令和時代を生き抜く藤中生の育成を目指す教育の実践		
副　　題	－個別最適な学びと協働的な学びの充実－		
学 校 名	豊田市立藤岡中学校	校 長 氏 名	堀　　秀　雄

１　はじめに

開校以来８０年目を迎える本校は、藤岡地区の唯一の中学校として地域に愛され、支えられてきた伝統校である。平成初期には、製造業のベッドタウンとして他地域からの流入により人口が急増し、生徒数が 800 名を超えるマンモス校となった。その後、平成２３年に藤岡南中学校との分離を経て地区の過疎化が進み、生徒数が 200 名あまりに大きく減少した。地区の環境の急激な変化と生徒数の大きな増減により、本校の特色は、大きく様変わりしてきた。

今後も続くとみられる過疎化を見通して、これまでの教育活動を土台に、今後の社会を見据えた新しい時代に必要となる資質・能力の育成を図っていきたいと考えた。

２　研究の内容

生徒たちがこれからの時代の変化に対応し、それぞれの場所で生き抜く力を育成することを目指し、研究主題を「令和時代を生き抜く藤中生の育成を目指す教育の実践－個別最適な学びと協働的な学びの充実－」と設定した。個別最適な学びと協働的な学びを充実させ、「自ら学びに向かい、主体的に他者とかかわりながら、協働して課題を解決したり考えたりすることができる生徒」、「相手の思いを考えながら聞いたり、自分の考えを的確に伝えたりすることで、自らを高めることができる生徒」の育成を目指し、授業研究部・ＩＣＴ活用部・健康教育部の３つの部会を設け、その推進に取り組んだ。

（1）授業研究部：自ら学びに向かい、協働して課題を解決したり考えたりする授業づくりの追究

個別最適な学びには、生徒たちが異なる方法等で一定の目標を達成することを目指して学習を進める「指導の個別化」と、異なる目標に向けて学習を深め、広げる「学習の個性化」とがある。これらを区別し、より単元の目標に近づけるように学習形態を工夫することが重要であると考える。また、協働的な学びにおいても、誰と、どんな形態で、どんな機器を使ってよりよい学びを生み出すのか、その方法を工夫することが重要であると考える。さらに、個別最適な学びと協働的な学びについて、学校の実態に即した具体的な姿や目指す姿を明確にし、教職員が同一歩調で授業づくりを進めることが必要であると考え、「藤岡モデル」の作成に取り組んだ。

（2）ＩＣＴ活用部：学習用タブレットを目的に応じて適切に活用した授業づくりの追究

これまで、Qubena を用いた個別最適な学び、SKY MENU「発表ノート」や PowerPoint を用いた協働的な学びについて研修を行い、その推進に取り組んだ。学習用タブレットを「文房具」として活用することを目指して実践を続けてきた。今年度は、「紙ノートからデジタルへ」と題し、SKY MENU「発表ノート」をデジタルノート化した取組を紹介し、その良さや活用のポイントなどについて学び合った。発表ノートで使うノートを、「ノート型」「ワークシート型」「ホワイトボード型」の３つの形式に分類して活用し、目的に応じて適切に活用した授業づくりについて研究を進めた。

（3）健康教育部：食や健康、安全に関して主体的に学ぶ授業づくりの追究

本校の現状として、自分に自信がもてずに、積極的に発言などができない生徒が多く、さらには友人関係のトラブルも少なくない。昨年度行われた学校保健委員会の中でも、地域の方々から、自己肯定感の低い生徒が増えてきているのではないかと話題になった。そこで、構成的グループエン

カウンターを年間計画の中に位置づけ、自己理解や他者理解の機会を設定し、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができる生徒の育成に取り組んだ。

３　研究の実際

（１）個別最適な学びと協働的な学びの具体的な姿を示した「藤岡モデル」の推進【授業研究部】

部会で協議して選定した各項目について、全体会で審議し、下記のようなリストを作成した。今年度は、その中から、特に力を入れたいものを教職員が個々に１つ選択して、授業実践を行った。前期末に各自で振り返りを行い、成果や課題を明確にし、後期に生かすようにした。年度末にも振り返りを行い、成果や課題を個々の授業づくりに生かすとともに、藤岡モデルそのものの内容や文言、推進方法についてさらに吟味していく。

個別最適な学びと協働的な学びの具体的な姿**「藤岡モデル」**

個別最適な学び
<指導の個別化>
個① 一人一人が異なる学習方法（一斉授業でない形態）で学びながらも、子どもたち自身が自分の特徴や自分に合った学習方法で一定の目標をクリアする活動を行っている
個② 一人一人の特性や進度に応じて学習内容を決めている。
個③ 学習履歴を元に、一人一人の課題や方針を決めて学習をすすめている。
個④ 課題を早く終わらせた子どもが、発展的な課題に取り組めるように教材を用意している。

<学習の個性化>
個⑤ 子どもたち一人一人が自分の興味関心に基づいて学習テーマを選び、探究的に学ぶ機会をつくっている。
個⑥ 子どもたちが疑問に思ったことや気になったことをすぐに調べたり質問したりできる環境をつくっている。
個⑦ 課題に対して自分で学習方法や追究方法を決める場面をつくっている。
個⑧ 自分で課題を決めて取り組めるような家庭学習を推進している。

協働的な学び
協① 子どもが説明をしたり聞いたりしながら問題解決をする授業を構成している。
協② ペアやグループで意見を交流する時間を設定している。
協③ 学習用タブレットやホワイトボード等を活用しながら、効果的に意見交流ができるように工夫している。
協④ 「導入」「展開」「まとめ・振り返り」の各場面において、異なる考え方を取捨選択したり、組み合わせたりする活動を取り入れている。

前期	特に力を入れる項目【協働的な学び】 子どもが説明をしたり聞いたりしながら問題解決をする授業を構成している。
	目指す具体的な**子どもの**姿（評価基準） ペアや班で、様々な解き方を出し合い、より良い解き方を吟味している。
	～振り返り・反省～ ・平方根や二次方程式の利用の場面で、発表ノートのグループ機能を使って様々な解き方について話し合い、自分にとって最適な解き方を追究することができた。 ・全体での話し合いをもっと活性化させ、考えを伝え合う場がつくれるとよい。
後期	特に力を入れる項目【協働的な学び】 子どもが説明をしたり聞いたりしながら問題解決をする授業を構成している。
	目指す具体的な**子どもの**姿（評価基準） 全体での話し合いの場で、タブレットやホワイトボードを活用して論理的に自分の考えを説明している。
	～振り返り・反省～

（２）SKY MENU「発表ノート」を活用した３年理科「運動とエネルギー」の実践【ＩＣＴ活用部】

デジタルノートを活用する授業実践を行った。授業の流れと、デジタルノートとしての「発表ノート」の利点は以下の通りである。

①小単元ごとに名前をつけてノートを配布
・小単元ごとに名前をつけることで、回収がしやすくなる。
・生徒がフォルダを整理しやすくなり、前のノートを振り返ることができる。
・小単元ごとに評価しやすい。

②使用する写真や資料を資料置き場にて配布
・写真やグラフをノートに貼ることで、直接画像に書き込みながらまとめることができる。
・図絵が的確で分かりやすく、時短になる。そのため、思考や交流に時間をかけられる。

③実験結果(写真・気づき)を班のグループメモに投稿して交流し、ノートへ送信
・生徒の思考がリアルタイムに可視化され、実験結果を瞬時に共有することが可能であり、小さな発見を大きく発展させることができる。
・ノートに送る際、友達の考えは自動で色が変わるので、友達の意見を取り入れながら考察することが可能になる。

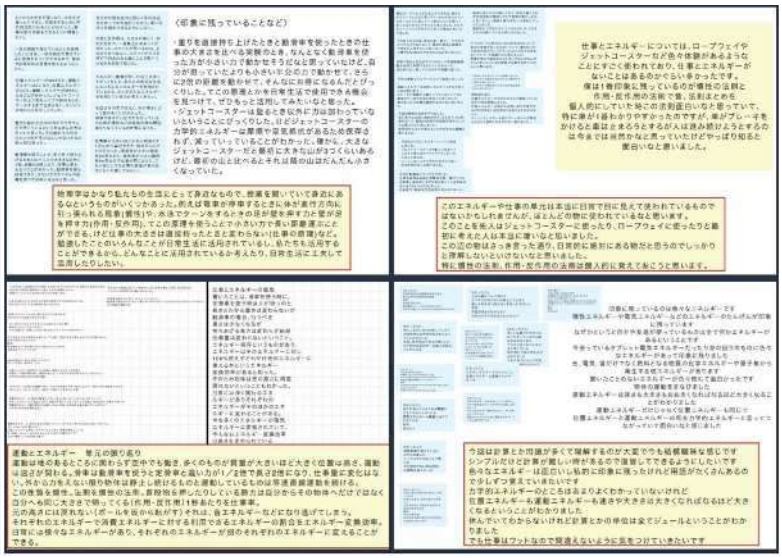
④プロジェクターにノートを提示し、根拠を指し示しながら発表
・これまで言葉でしか伝えられなかったものを、具体的に指し示しながら表現することができる。しかも、瞬時に提示することができる。
・視覚的に理解しやすく、生徒が自分たちで意見の共通点や差違点に気づくことができる。

⑤終末に「気づきメモ」で今日の振り返りを投稿
・生徒同士で共有したり、ノートに貼り付けたりすることが容易である。
・教科、タグをつけて蓄積することで、単元末に単元を通した振り返りをすることができ、自己の変容をつかむことができる。

⑥提出箱の期限を 24 時間後に設定
・帰宅後もノートの修正が可能である。復習しながらまとめたり、自分でさらなる調べ学習をしたりして、学びを深めることができる。
・いつでも提出や回収が可能で、いつでも教師が見ることができ、随時評価もできる。



＜実験結果をグループメモへ投稿＞


＜振り返りの蓄積＞

「発表ノート」以外にも、デジタルノートは他にいくつもあるが、発表ノートは、良い意味で機能が限られており、授業で必要なものはほとんど揃っている。多機能なアプリもあるが、教師のねらいとは異なることにこだわってしまう生徒もいるので、ある程度は機能を絞る必要があると考える。また、発表ノートで作成したワークシートを一元管理できることも利点である。さらに、調べたときに使った URL を貼り付けることも効果的であり、ノートを振り返って見られるのはもちろんのこと、調べる方法まで振り返ることができるのも利点の１つである。

（3）自己理解・他者理解・自己受容を深める構成的エンカウンターの実施【健康教育部】
～１年生の実践～
①題名　「冬山からの全員脱出大作戦」
②内容
冬山で遭難して動けなくなり、１０種類の道具を大切な順に並べる。個人で考えた後、グループでも話し合い、班で１つに絞る。

【活動後の生徒の感想】
・一人一人の意見が違うので、相手の考えを知りたくなり、積極的に話すことができました。
・友達と話し合いをすることで、自分一人で考えているときには思いつかなかった新しいアイデアが出てきて、楽しかったです。
・自分の意見を押し通すのも違うけど、簡単に人の意見に乗っかるのも違うと思います。だから、考えた理由までしっかり聞いたり、少ない意見も大切にしたりして、話し合いをしていきたいです。



＜話し合いをする様子＞

自分の意見をあらかじめ決める時間を設定したことで、話し合いの際にそれぞれが自分の考えた順と理由を話すことができた。そこから班で１つに絞っていく活動をすることで、お互いの意見をよく聞く姿が見られた。これまで相手の気持ちを考えながら交流する機会が少なかったため、よい経験となった。相手の意見を大切にする生徒が多くいた一方で、自分の意見を曲げられない生徒もいたため、継続的に取り組み、適切なコミュニケーションについて考える機会を設定していきたい。

～３年生の実践～

①題名　「私のしたいことベスト５」

②内容

ワークシートに「２０歳までにしたいことベスト５」を書く。グループ内で理由を発表し合い、質疑応答を行う。グループ内でシェアリングした後、全体で話し合う場を設定し、感想の共有と振り返りを行う。



＜話し合いをする様子＞

【活動後の生徒の感想】
・友達のしたいことが自分と同じだったけど、理由が違っておもしろかったです。
・友達のしたいことに興味をもったので、いつかやってみたいなと思いました。
・みんな考え方ややりたいことが違っていて、もっと知りたいと思いました。

友達の発表を聞き、自分の考えと比較したり、認めたりする様子が見られた。活動を通して、他の考えに寄り添うよい機会になるとともに、自分の考えを伝えるよい機会にもなった。

４　研究のまとめ

「藤岡モデル」を作成したことで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」における目指す姿が明確になり、教職員が同一歩調で授業づくりをすすめることができた。さらに、特に力を入れたいものを各自１つ選択して授業実践を行うことで、教職員の授業づくりへの意識が高まり、授業の質の向上と授業力の向上につながった。今後は、生徒の学力向上と教職員の授業力向上に向け、「藤岡モデル」のさらなる改善や推進方法の見直しをすすめるとともに、その成果について、エビデンスに基づいた分析・判断を行うための基準の数値化など、さらなる改良を行っていきたい。

ＩＣＴの活用においては、授業でデジタルノートを使用する機会が増え、その利便性と機能性を生かした授業実践が増えてきた。個別最適な学びと協働的な学びを促し、楽しく分かりやすい授業を目指して、教職員のさらなる授業力向上を図っていきたい。本校では、ＩＣＴ機器の効果的な活用について気軽に職員室で話ができる雰囲気があり、気になった機能や活用方法はすぐに共有することができる。今後もこの空気感を大切にし、教職員同士が協働的に学び合う集団でありたい。

構成的グループエンカウンターについては、どの学年の実践からも、生徒が楽しみながら他者と関わる様子が見られた。仲間と楽しく取り組むことで、生徒同士の理解や友情が深まったり、自己開示をすることができたりという効果が見られた。ただ、他の場面では関わりに消極的になる姿もまだ多い。継続的な活動や、活動と生活を結ぶ支援が今後の課題であると考える。今後も、継続的に構成的グループエンカウンターに取り組むことで、仲間と共に過ごすことが楽しいと感じ、他者や自己に関する理解を深め、自分も仲間も大切にしようという意識を育んでいきたい。

生徒たちが時代の変化に対応できる力を身につけるためには、教職員のアップデートが必須である。教職員が確かな授業力をもち、教育への情熱を高め、様々なスキルを身につけることで、藤中生たちが、自らの明るい未来を切り拓くことができるよう、現職教育のさらなる推進を目指していきたい。

目次へ

研究主題	地域と共に歩み、未来を拓く生徒の育成		
副　題	～ふるさと旭にわくわくする学びの実現～		
学校名	豊田市立旭中学校	校長氏名	後藤　光弘

1　はじめに

本校は、全校生徒４０名の小規模校である。地域の方々や特産物などとの関わりをとおして、自分たちの暮らす地域と共に歩み、未来を拓く生徒の育成を目指し、特色ある学校づくりを推進しようとしている。本校の郷土である旭地区は、自然に恵まれおり、魅力的な施設や農産物がある。しかし、少子高齢化や観光業の衰退、農産物の獣害被害など課題も抱えている。そんな地域に住む生徒たちが、地域の特徴を知るとともに、素晴らしさを見直したり課題を解決したりできるような活動を進めていきたいと考えた。

そこで、本研究では発達段階に応じて学年ごとのテーマを決め、課題を追究する学びの時間として総合的な学習の時間を中心に活動を行い、自分の生き方について考えられる生徒の育成を目指していく。

2　ねらい

（1）学年ごとの大テーマのもと、総合的な学習の時間を中心に生徒一人一人が個人課題を設定し追究していく活動に取り組み、国際理解・環境・福祉等の今日的課題を地域の人・自然・文化・産業との関わりを通して追究することにより、自ら学び考える力、自己の生き方を求める力を育成する。

（2）地域の福祉施設や保育施設への訪問、世代間、地域間を超えて人と交わり、社会性を高め、人を思いやる心と協調性を高める。地域以外の市街地を訪問し、自分たちの地域の良さを伝える活動をする。

（3）地域の施設・名所などの訪問を通じて、地域の特徴を知るとともに地域の素晴らしさを見直す機会とする。

（4）上記１～３の活動を通して地域から学んだことを地域へ発信し、学習の成果を確認して次へのステップとするとともに、地域の方々への感謝の気持ちを高める。

3　活動内容

（1）課題を追究する総合的な学習の時間での活動

＜１年生＞

「旭の人・もの・ことから、生き方を学ぶ」をテーマに、旭地区周遊ツアーを行い、さまざまな場所で体験的な学習をした。

また、旭地区の産業、職業調べ等を実施した。



《周遊ツアーの様子①》


《周遊ツアーの様子②》


《周遊ツアーの様子③》


《周遊ツアーの様子④》

＜２年生＞

「旭のもの・人・こと及び職場体験学習から自分の生き方を探る」をテーマに、職場体験学習や企業訪問等を実施した。

また、地域活性化について、地域の方々と本校で意見交換を実施した。


《職場体験の様子①》


《職場体験の様子②》


《意見交流の様子》

＜３年生＞

「旭ハラペーニョ部」をテーマに、わくわく事業に参画しつつ、地域の方々の協力を得ながら、特産品であるハラペーニョの収穫、商品開発、販売活動等を実施。文化祭にて成果発表をした。


《商品開発の様子》


《イベントの様子》


《文化祭の様子》

（２） 福祉施設訪問、保育施設訪問

全校で地域の福祉施設訪問を実施し、生徒が考えた貼り絵の製作を一緒に行ったり、高齢者の方々が普段行っているレクリエーションを教えていただいたりした。また、全校合唱のプレゼントも行った。


《訪問時の様子》

３年生は、こども園訪問を実施した。幼児が楽しく遊べて何か能力が身につくようにというおもいを込めたそれぞれのおもちゃを持参した。



《訪問時の様子①》



《訪問時の様子②》

4　成果と課題

（1）　総合的な学習の時間等の学習を通して

広域にわたる学区ではあるがバスを活用した旭地区周遊ツアー等の実施から、旭地区の魅力を再認識することができた。また、職場体験学習や企業訪問等から、そこで働く方々の思いや職業観に触れることで、今後の自分の生き方について探究的な学習ができた。

地域活性化を目標に、ハラペーニョを介した様々な活動の企画・運営をすることで生徒が地域の一員であるという意識を高め、今まで以上に旭地区に対して愛着を深めることができた。今後は継続的な課題の追究に向けた取組が実施できるよう、引継等を確実に行っていきたい。

（2）　施設訪問等を通して

バスを利用して全校で福祉施設を訪問し、全校合唱を披露したり、ゲームやクイズを行ったりするなど、利用者の方々と触れ合う機会を通して、ボランティア精神を養うと同時に、コミュニケーション能力を高めることができた。

幼児と触れ合う機会を通して、その関わり方の基礎的・基本的な知識を身に着けると同時に、コミュニケーション能力を高めることができた。

目次へ

研究主題	生徒主体の「できた」「わかった」の実感がもてる授業づくり		
副　題	授業力や指導技術の高め合いを通して		
学校名	西尾市立鶴城中学校	校長氏名	半田　憲生

１．主題設定の理由

昨年度までは、一人一台配付されたタブレット端末の有効活用の方法を探り、たくさんの先生方の挑戦の成果として、いろいろなＩＣＴの活用方法が広がっていった。そして現在、若手教師が増えてきており、本来「できた」「わかった」の実感がもてる授業をつくるためのツールの一つであるはずのＩＣＴの活用が、ＩＣＴありきの授業になってきてしまっている。また、「できた」「わかった」の実感は、教師から教え込む単なるわかりやすい授業によってもてるものではなく、生徒が主体的に学び合うことでもてることである。そして、文部科学省より、自らの授業を磨くための時間を捻出できるよう、働き方改革が急務とされているが、本校の学習指導案の形式はとても複雑であり、作成にとても時間を要している。

そこで、「できた」「わかった」の実感がもてる授業を構成していくために、複雑化している学習指導案の形式を簡略化し、教材研究等の時間を捻出する。そして、授業等公開期間を設定し、若手教師はベテラン教師から指導技術を吸収し、ベテラン教師は若手教師から新しい理論やＩＣＴの活用等を学び、互いに学び合い授業力や指導技術を高め合うことで、生徒一人一人が「できた」「わかった」の実感をもつことにつながると考えた。

以上のことから、 研究主題を「生徒主体の「できた」「わかった」の実感がもてる授業づくり～授業力や指導技術の高め合いを通して～」として、本研究に取り組んだ。

２．研究の仮説

(1) 学習指導案の要点をはっきりとさせ、書きやすく、そして読みやすい形式に簡略化することで、「できた」「わかった」の実感がもてる授業を構成しながら、教材研究等の時間を捻出できるであろう。

(2) 授業等を見せ合うことで、ベテラン教師から若手教師へ「経験をもとにした指導技術」を、若手教師からベテラン教師へ「大学で学んだ新しい理論」や「ＩＣＴ活用技術」を伝授し合い、互いに高め合っていけるであろう。

３．研究の計画

(1) ７月の市教委学校訪問での公開授業や１０月の授業研究会に向けて、４月から研究推進委員会で学習指導案の形式を作成し、７月と１０月に学習指導案の書きやすさや読みやすさに関する事後アンケートを取っていく。

(2) 授業研究会だけではなく、行事がない期間に授業等の見せ合う期間を設定し、Microsoft の Forms を活用して先生方の反省を随時していく。

４．研究の実践

(1) 学習指導案を書く立場と読む立場を想定し、どのような項目が必要であるかや、削除してもよいものは何かを研究推進委員会の中で検討していった。最終的に、「授業を行う学級の実態にあった目標」「単元を通して変容する生徒の姿」「発問や手だ

ての目的を明確にした本時の流れ」「核となる発問によって願う生徒の姿」「本時の評価規準」をＡ４サイズ２枚にまとめることとした。例年に比べ、経験が多い先生方ほど、学習指導案を早く完成させていた。

（2）授業研究会は、ある程度経験を積んでいる３教諭によって実施した。「できた」「わかった」の実感がもてる手だてを中心に授業を構成し、若手教師の手本となる授業であった。特に、話し合いを深めるために、座席表に生徒の意見を書き込んで指名順を工夫する手だてが若手教師には斬新であったようであり、協議会でも多くの意見が活発にかわされた。

また、行事と行事の間の時期に、先生方が気軽に授業等を見せ合える期間をつくった。この期間は、学習指導案等何も準備はせずに授業公開をし、朝の会や帰りの会も見せ合いを行った。そして、授業等を見に行くことを強制するのではなく、先生方の主体性を重視した。見せ合う授業の前後では、教材研究の段階で相談していたり、授業について協議していたりする様子が見られた。

５．研究の成果と課題

（1）学習指導案の書きやすさについてのアンケートをとったところ、約９２％の先生方が「書きやすくなった」との回答があった。また、要点をはっきりさせたことで、指導案を書くと同時に、生徒が「できた」「わかった」という実感をもつために、何をどう考えていけばいいか教材研究への理解が深まっていったという意見もあった。また、指導主事や教科指導員の先生方からは、伝えたいことが十分に読み取れる学習指導案であったという話があった。

しかし、簡略化したことで、教科によっては長い文章で伝えたいものを要約することに時間がかかってしまったという意見もあった。字のサイズや空白の使い方を臨機応変に変更できるよう、さらに改変していきたい。

（2）授業研究会では、「できた」「わかった」の実感がもてる授業づくりのために、どのような手だてがより有効であるか、協議会を通して活発に話し合いが行われた。手だてといっても、その目的次第で出し方や方法が変わり、実施された教科以外の先生方も学ぶべきことが多かった。

しかし、協議会の中では、生徒の変容を追う場面で、授業記録や生徒記録を活用しきれていなかったので、協議会資料がうまく活用できるよう、協議会のあり方を検討していきたい。

授業等を見せ合う期間では、授業等を見る方も見られる方も、授業力向上に向けて得られるものがあったことを実感したという意見が多かった。特に、小学校勤務の経験しかない先生方は、他の先生の普段の授業や朝の会等を見る機会が少なく、貴重な時間となっていた。教材研究の方法や授業を構成するための考え方、指導技術等、職員室内でプチ協議会が行われており、「できた」「わかった」の実感がもてる授業づくりに大きくつながっていた。

しかし、行事のない期間といえども、校務分掌や生徒指導等の忙しさから授業等を見に行くことができなかった先生も多かった。さらなる働き方改革を進めるとともに、授業等を見せ合う期間を設けなくても、いつでも見せ合える雰囲気づくりをしていきたい。

目次へ

研究主題	青空の広がる東中生の育成		
副　題	−道徳・総合・特活を核とした新しい東中文化の創造−		
学校名	西尾市立東部中学校	校長氏名	中村　賢司

1　本校が大切にしてきたこと

本校の教育活動はこれまで多くの人々に支えられてきた。教職員を含むＰＴＡはもちろんのこと、同窓会、東部地区「明るくたくましい子を育てる会」など、年間を通してさまざまな組織が主催する教育的行事もある。多くの地域の方々と関わり合いながら、東部地域の人や自然に守られて生徒が健やかに育っていることは、本校の特色の一つである。

長年の教育活動の中で、生徒の自主的な組織であるハートコンタクトの活動、学年を縦割りにしたブロック活動などに加え、ホタルの幼虫飼育活動、いきものふれあいの里でのボランティア、地域の方々の協力を得た体育的行事のように、地域との強いつながりのもとに行われる教育活動を数多く実践してきた。これらの活動の多くは、時代の流れとともにその在り方が見直されることもあり、中には活動を縮小したり中止したりしたものもあるが、仲間と共に、また、地域と共に生きるという姿勢は、本校の教育の中に脈々と根付いてきた土壌である。

本校で学んだ生徒が、卒業後もよりよい社会の実現のために、社会へはたらきかけ、自ら行動につなげることができるよう、本校で育まれるさまざまな素養が「東中文化」としていつまでも東中生の心に残り続けるものであってほしい。これが、本研究にかける私たちの願いである。

2　次世代に引き続き守り続けること

「道徳科」では、３年間を通して、「生命や自然、崇高なものとの関わり」について重点を置いて学ぶ。この学習活動は、自他の存在を認め、命や自然を大切にし、世の中に生きる全てのものに対して敬意をもってよりよく生きようとする心を育むだろう。

「総合的な学習の時間」では、３年間を通して、地域の魅力を調べたり、地域のために計画したことを実行したりする主体的追究活動を行う。この学習活動は、よりよい社会を目指し、生活の中にある課題に気づいたり、人や地域のためになることを計画・実践したりする力を高めるだろう。

「特別活動」では、自分たちの学校生活の向上や、より魅力的な学校行事を目指し、３年間を通して学級や学年、ブロックなどでさまざまな活動に取り組む。この学習活動は、生徒一人一人が東部中の一員としての自己有用感を高め、主体的に仲間と合意形成したり行動したりする力を高めるだろう。

私たちは、これらの学習活動を通して、生徒一人一人の心に「いまの世代のウェルビーイングを次世代のウェルビーイングへつなぎ、発展させていくことが、新しい東中文化の創造」であるという意識が根づくことを目指す。そして、研究構想図に示すように、生徒が自ら学び、行動し、「新しい東中文化」を末永く引き継いでいくことで、澄み切った青空のようにウェルビーイングに満たされた社会を広げていくことを願う。

3　研究の基本構想

私たちは、急激な変化をともなう社会を生きる生徒のためにも、学校生活を通して、自ら課題を考え、どう行動するのか判断し、ときには仲間と協力しながら、課題にどのように対応していくのか考える場を設定していく。そして、学びの過程を仲間とともに振り返り、責任をもって行動につなげていく生徒を育てたい。また、生徒一人一人が自分のよさを実感し、自己有用感を高め、心身が生き生きとした状態で過ごすことのできる雰囲気に包まれた学校でありたい。

学校生活の基盤は学級であり、授業である。生徒が自ら学ぶ姿勢を育むために、私たちは全ての教科の授業において、生徒の「知りたい」「できるようになりたい」という意欲を引き出し、「どうすればよいのだろうか」という問題意識を生み、「よりよい社会になるために行動してみよう」と追究の方向性を自ら考え行動できるような単元構想を大切にする。そこで、本研究においては、道徳・総合・特活において、それぞれ３年間を見通したカリキュラムを構想する。道徳では、「生命や自然、崇高なもの」についての視点を深め、人の行動を支える心の部分まで話し合うことを重視したカリキュラムを構想する。総合では、「ＳＤＧｓ」と「キャリア教育」を掛け合わせて地域の魅力に注目したカリキュラムである「ＳＴＧｓガイド」を更新していく。特別活動では、学級会での話し合いを軸に、学校行事やブロック活動が明確にわかるようにカリキュラムを構想する。生徒は、これらのカリキュラムを通して、新しい「東中文化」を創造していくことだろう。そのために、私たちは単元や授業の核心に近づく場面を『山場』と捉え、『☆深まりの一手』を講じることで、その『山場』を乗り越えた生徒が、学習の成果を実感することのできるような授業を考えていく。そして、命あるものの尊さやＳＴＧｓについて考えたり、生徒主体で行事を企画したりする学習活動を通して、生徒は社会へはたらきかけて行動につなげていく。

私たちは、このような教育活動を軸に、生徒が東部中学校で過ごすことに喜びを感じ、東部中学校の一員であることに誇りをもつことができるような、ウェルビーイングの理念に基づいた学校づくりを目指していく。私たちは、ウェルビーイングに満たされた社会を澄み切った青空のイメージに重ね、卒業後もよりよい社会の実現に向けて行動し続ける東中生であってほしいという願いをかけ、研究主題を次のように設定した。

研究主題　青空の広がる東中生の育成　－道徳・総合・特活を核とした新しい東中文化の創造－

手だて１：『３年間を見通した道徳・総合・特活のカリキュラム』を実践することで、新しい「東中文化」を創造し、ウェルビーイングに満たされた社会を広げる生徒の育成を目指す。

手だて２：『山場』とは、本時の中心発問からの展開の中で、自他の考えを更新したり単元の核心に迫ったりするなど学級全体に波及していく学習場面と定義し、毎時間の授業で設定する。

手だて３：『☆深まりの一手』とは、生徒の思考を活性化するために『山場』の場面で想定している教師のはたらきかけであり、本時の課題を乗り越えるために授業展開に応じた方法で講じる。

4　研究の成果と課題

(1) 成果

○「☆深まりの一手」を講じることで、生徒たちの思考が活性化し、発言の広がる授業が具現化した。

○3年間を見通した「東部中学校ＳＴＧｓガイド」を作成することで、生徒が社会へ発信するなど行動につなげる姿が表出した。

○「特別活動年間計画」を作成することで、学級文化創り・ブロック活動・生徒会・委員会活動のつながりを意識して行動できた。また、生徒一人一人が自分のよさを実感し、自己有用感を高めた。

○オーソドックスな中に新しさのある「東中の道徳 2024」を作成し、心の部分の話し合いを深めることで、世の中に生きる全てのものに対して敬意をもってよりよく生きようとする心を育むことができた。

(2) 課題

△道徳・総合・特活や９教科の特性に応じた「☆深まりの一手」についての研究を継続する必要性が明らかになった。

△「東中文化」が次世代に引き継がれるだけでなく、発展していくものとなるよう、生徒の実態や問題意識に応じたカリキュラムを更新していく必要性が明らかになった。

目次へ

研究主題	「自ら問いを見つけ、学び続ける生徒」の育成		
副　　題	―教材との出会い、個の学び、他者とのかかわり合いの活動を通して―		
学 校 名	蒲郡市立大塚中学校	校 長 氏 名	多田　敦

1　主題設定の理由

本校校訓「理想に燃えて溌溂と」とは、目標を目指す過程で自分の力を発揮して学ぶことに喜びや価値を見いだすという意味である。具体的な生徒の姿に置き換えると、「学校生活を通して、さまざまな知識、技能、見方・考え方を伸ばしながら、自分や他者、社会をよりよくしていこうという目標をもって生き生きと活動する心豊かな生徒」ととらえている。

本校は１小１中の小規模校である。温かな地域社会で過ごす生徒たちは、お互いに気の知れた仲間が多く、言われたことに対して、素直に向き合い努力しようとする姿が見られる。9年間をともに過ごす生徒たちは、一人一人の人間関係の結びつきがとても強固である。また、別の学年との交流もしやすく、縦の繋がりもできやすい。さらに学級、学年、生徒会、委員会、など、さまざまな場面で生徒一人一人が活躍をする場面が多く、役割を担うことで、責任感や、人を動かす力を育成しやすい環境にある。しかし、幼い頃から狭い地域社会や小集団の中で生活してきたことで、なにか問題やトラブルがあっても、その場の雰囲気で何となくまとまってしまうことが多い。こうした生徒たちが、これからの時代を生き抜くために、さまざまな変化や情報と積極的に向き合い（主体的な学び）、他者とかかわり合いながら課題を解決していくこと（対話的な学び）で新たな価値につなげ、目的を再構築できるようにすること（深い学び）が求められている。そこで、生徒たちには自分の見つけた「問い」をさまざまな視点から考え、疑問をもち、更なる学びを得るために学習を進め、よりよい未来を拓いていくことができる人に成長して欲しいと願い、「『自ら問いを見つけ、学び続ける生徒』の育成」を研究主題とした。



かかわり合いの場で自分の考えを進んで発言する生徒

2　研究の構想

(1)目指す生徒の姿

自分の見つけた「問い」をさまざまな視点から考え、疑問をもち、更なる学びを得るために学習を進められる生徒

(2)研究の仮説

魅力的な教材との出会いによって見つけた「問い」を探究し続けることのできる単元を構想し、個の学びを充実させることで考えを深めさせ、見いだした疑問や困り感を意図的にかかわり合わせ、「問い」の解決に向かわせていけば、更なる学びを得るために学習を進められる生徒を育成できるだろう。

(3)仮説に迫る手立て

①生徒が問いを見つけられる魅力的な教材との出会いと学び続ける単元構想

・当たり前の事象の中にある不思議さや興味深さを持った教材開発
・生徒の探究意欲が継続し、教材による特性を生かした単元の構想

②個の学びの充実
・生徒一人一人が自分の問いを探究する場の設定をする
・生徒が仲間の振り返りを閲覧できるようにする

③意図的なかかわり合いの場の設定
・生徒の振り返りをもとに、意図的に第一発言者を指名する

3　研究の実際と考察

(1)手立て1　生徒が問いを見つけられる魅力的な教材との出会いと学び続ける単元構想

①当たり前の事象の中にある不思議さや興味深さを持った教材開発

○1年　音楽科　「オリジナルのチャイムをつくろう ～カトカトーンを使った旋律づくり～」

授業の開始を知らせるチャイム。その日の音楽の授業では突然、いつもとはまったく違ったチャイムが流れ始めた。「えっ、何これ？いつもと違う」「聞きなれない音だから緊急放送かと思った」など、チャイムについて話し始めた。普段は気にも留めていなかったチャイムだが、聞きなれない音が流れるだけで全く印象が変わることを生徒は自然と感じ取った。音楽Webアプリ「カトカトーン」で作成したものだと知った生徒は、「僕もチャイムを作ってみたいな」と興味を抱き、オリジナルチャイムづくりへとつながった。

○3年　理科　「くさい！シューズのにおいを消したい！　～酸・アルカリとイオン～」

本校では、体育館シューズを全校生徒が体育館入り口のげた箱に置いている。便利ではあるのだがあまり持ち帰らない生徒もおり、中にはきついにおいがするものもある。クラスみんなで体育館入り口に行き、改めて「体育館玄関の何がにおっているのかな」と聞いたところ、口々に「体育館シューズじゃない」と言い始めた。そして、「洗えばいいけど、またすぐにくさくなりそう」「臭いにおいのもとは何だろう」とにおいのもとに関心を持ち始め、「このにおいを消せないかな」とにおいを消す活動へとつながった。

②生徒の探究意欲が継続し、教材による特性を生かした単元の構想

○特別支援学級　自立活動「おいしい野菜をみんなで育てよう　地域の人とのかかわりを通して」

特別支援学級では、昨年度野菜作りを行った。たくさんの野菜を収穫することができ、生徒はとても達成感を味わうことができた。野菜を育てる中で、地域の方を講師としてお招きし、土づくりやなえつけの仕方を教わった。「今年も野菜をつくりたい」という言葉と同時に「たくさんの人が喜んでくれるおいしい野菜をつくりたいな」と自分たちが満足するだけでなく、多くの人と関わり、その人たちにも喜んでもらいたいという思いを打ち明けた。そこで、本校の隣にあるデイサービスセンターへ行き、一緒に野菜作りをして野菜を差し



地域の方と一緒に野菜の苗つけをする生徒

上げたり作った野菜の調理法を教わったりするという単元を構想した。

⑵手立て２　個の学びの充実

①生徒一人一人が自分の問いを探究する場の設定

○２年　技術科　「走れ！上れ！歯車カー　～エネルギー変換の技術～」

電池とモーター、歯車を使って歯車カーを製作した生徒たち。自分が作った車が走り出すと「やったー、走った」と喜んで車を走らせた。そして次第に仲間の作る車に目を向け始め、「もっと速く走らないかな」という問いをもち、車を速く走らせる工夫に興味を向けた。そこで、一人一人が思い思いに自分の車を改良できる時間を設けた。電池とモーターはみんな同じものを使っていることに気づいた生徒たちは、「歯車に秘密があるのではないか」と考えた。そして、大小の歯車を組み合わせる中で、「大きい歯車から小さい歯車に力を伝えると、スピードが速くなったよ」「小さい歯車から大きい歯車に力を伝えると、スピードが遅くなったよ」と、スピードを速くする歯車の組み合わせを見つけた。

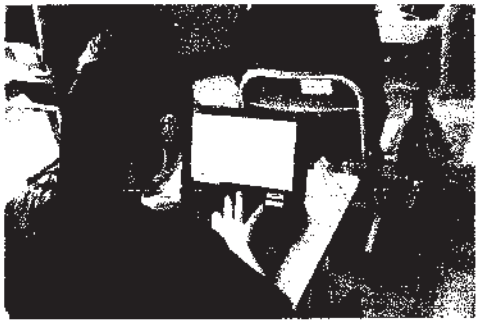


歯車カーを自分なりに改良する生徒

②生徒が仲間の振り返りを閲覧できるようにするためのタブレット端末の活用

○２年　国語　「家族のきずなを読み取ろう　～字のない葉書～」

「『私』が父のことをどう思っているかを考えてみたいな」という問いをもった生徒たちは、「作品をもっと深く読みたい」と考え、個の学びを始めた。本文から父の子どもへの愛情が感じられる部分を見つけ出し、それを全体発表した。「罵声やげんこつは日常」から家で偉そうにしている父の姿を読み取った生徒、「おびただしい葉書に…」から娘のことを心配していると読み取った生徒など、個の学びを充実させることで生徒は多くの気づきをもった。そして、授業の振り返りをタブレット端末に入力した。自分の振り返りを入力し終えると仲間の振り返りを読み始めた。仲間の発言を聞くことを通して自分とは違った本文の読み取りに気づき、さらに仲間の振り返りを読んだことで自分の感じたこととは違った視点で書かれている振り返りにふれることができた。多様な考えにふれたことで、「問い」の話し合いの場面では本文を深く読み取り、自分の考えを積極的に発言する姿が見られた。



振り返りを入力する生徒

⑶手立て３　意図的なかかわり合いの場

生徒の振り返りをもとにした、意図的な第一発言者の指名

○１年　社会科　「これも外国産？！食べ物でつながる世界　～世界と諸地域とのかかわり～」

導入でガマゴリうどんを食した生徒が、パッケージに書かれた品質表示から小麦やごまなどの材料が外国産であることに気づいた。そして、調べ学習を進めていく中でこれから先もガマゴリうどんを残したいという思いを強くもった。話し合い場面では「ガマゴリうどんを国産の材料だけで作ることは可能なのだろうか」という困り感をもった生徒を意図的に指名し、授業を展開した。「国

産化できる」「いや、国産化は難しい」という議論をしていく中で、「可能だとしても価格変動や農家の苦労などをクリアしないといけない」「国産化のためには実は世界情勢も影響している」といった仲間の発言にふれることができた。この話し合いを通して、生徒たちは自分一人の調べだけでは気づけない考えにふれることができた。

○3年　保健体育科　「感染症から自分も相手も守るために！　～健康な生活と病気の予防～」

コロナ禍の生活を想起することから導入し、感染症にかからない対策を考えた。その中で、「防護服を着る」「人と1m以内近づかない」といった過度な対策を考えるに至った。そこでこれらの意見を導入で取り上げ、実現可能な感染症対策を話し合った。過度な対策を考えた数名を第一発言者に取り上げたことで話し合いは活発になり、長く続けることのできる対策を真剣に話し合う姿が見られた。

4　成果と課題

自ら問いを見つけ、個の学びを通して探究し、さらにかかわり合いの場で考えを深めていったことは、生徒の学校生活にもよい影響を与えた。合唱コンクールへの取り組みでは、「どのようにしたらよりよい合唱になるか」という問いをもち、一人一人が練習方法や時間の作り方を考え、学級会で実現可能な方法を仲間と話し合って実践していった。このように、本研究を3年間積み重ねてきたことは、生徒の主体性を高めることにつながったといえる。

今後さらに研究を進めていき、本校を卒業してからも自ら問いを見つけ学び続ける生徒を育成していきたい。

目次へ

研究主題	自分たちが創る授業で、仲間と共に問題を解決する生徒の育成		
副　　題	「深化手だて」を用いた授業構想を生かして		
学 校 名	新城市立東郷中学校	校 長 氏 名	鈴木　則明

1　はじめに

本校では令和５年度より、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために授業をどのように展開していくのかについて、全職員で考えたり、名古屋大学教授・柴田好章先生にご助言をいただいたりしながら研究を進めている。

研究にあたってまず取り組んだことは、生徒たちの現状把握のために、全職員で話し合うことだった。ここから、育てたい力を次のようにまとめた（資料１）。

	易◀――――――――――――――――――――――――▶難		
１年	・人の思いを大切にする ・自分の思いを伝える	・自分の考えに根拠をもつ ・論理的に伝える ・多角的に考える	
２年	・自信をもって発言する ・主体的に取り組む ・当事者意識をもつ	・生徒だけで話し合って課題を解決する ・伝える、課題解決する楽しさを感じる	
３年	・思いや考えを語る	・議論する	・関わり合いの方法を選択する

【資料１　生徒に育てたい力】

本校の教育目標である「互いに進んで関わり合い、高め合う生徒」「自分を大切にし、人も大切にできる生徒」を実現するためには、「生徒が主体的になる」「生徒同士が対話をする」「生徒同士が深い学びをする」必要性が確認された。そして、生徒自身が自分たちの学びをよくしていこうとする授業を目指し、「生徒が授業を創る」を研究の柱にしていくこととした。そこで、研究主題を「自分たちが創る授業で、仲間と共に問題を解決する生徒の育成」と据えた。

2　研究の構想

⑴　目指す生徒の姿

研究主題に込めた目指す生徒の姿は次の通りである。

「自分たちが創る授業」…生徒が問題を解決するための方法を選択・決定して学習を進めていく姿
「仲間と共に」　　…一人で完結するのではなく、協働的な活動を通して学びを深めていく姿
「問題を解決する」　…授業での活動を通して、できなかったことができるようになったり、わからなかったことがわかるようになったりする姿

⑵　目指す生徒の姿に迫るための手だて

生徒を現状から目指す生徒の姿へと変えていくために、次のような手だてを考えた（資料２）。

①関わり合いの土台を築く「ＭＣＣ」

ＭＣＣとは、「Morning Communication Challenge」の略で、朝のＳＴ後 10 分間に位置付けている。ＭＣＣでは、各クラスでテーマを設けて関わり合い活動を行う中で、生徒が協働的な学びを進めるための土台を築いていくことを目指している。この活動の中で、生徒には、短時間で意見を発表できるようにすることや、発表された意見について、(板書を見ながら)自分の考えを述べたり、質問したりする力をつけるねらいがある。また、教師にとっては生徒の学びをよりよいものにするため、話し合いの隊形や発言のさせ方、板書の方法、教師が出るタイミングなどの土台づくりの場としている。



【資料２　研究構想図】

②「深化手だて」を用いた授業構想

「生徒が創る授業」を目指し、教師主導ではなく生徒が授業を進めていけるような授業展開となるように、「深化手だて」を用いて授業を構想している。「深化手だて」は次のように定義している。

○「深化手だて」…生徒が学習に向かう意欲をかきたて、継続して追究活動を進めるために講じる手だて

授業で講じる具体的な「深化手だて」として、次のようなものを考えている。

Ａ「生徒に問題意識をもたせる導入」

生徒が単元や教材に対して問題を見出すことが、学びに向かう力を生む。そのため、目の前の生徒にとって切実感のある問題が起こるような導入を取り入れる。

Ｂ「問題解決を導く単元設定」

生徒のもつ課題や問題の解決を重ねることで、単元を貫く大きな問題を解決していくような単元構想を練る。

Ｃ「解決に向けた選択」する場面設定

学習活動の進め方や課題を生徒が選択し、授業を進めていく場面を設定することで、生徒が主体的に学習に取り組む姿勢を引き出す。

Ｄ　次時の展開に生かす「振り返り」

振り返りを次時の展開に生かすことで、教師主導ではなく、生徒の思考の流れに沿って単元を展開する。

単元の中にこれらの手だてを効果的に取り入れることで、「自分たちが創る授業で、仲間と共に問題を解決する生徒の育成」を目指している。なお、「自分たちが創る授業」がどのようなものであるかは、教科や教材によって異なると考えるため、どのような姿が「自分たちが創る授業」であるのかを各教科、各単元で明確に定義し研究を進めた。

３　研究の実際

⑴　第２学年国語科「短歌の世界へイッテＱ」の実践から

短歌は、限られた調べの中で表現するため、言葉を根拠にしても解釈に違いが生まれることもある。このような特性を生かし、生徒同士の関わり合いを中心として学びを深めていくことをねらい、実践を行った（資料３）。

単元の導入では、手だてＡ「生徒に問題意識をもたせる導入」を目指し、短歌を一句提示し、どのような短歌かを考えさせた。短歌への探究心を引き出すため、教科書を見て知識を得る前に自由に意見を交わす機会を設けた。生徒Ａの振り返りには、「一つの短歌でも似ていることを考えた人やまったく違うことを考えている人がいておもしろかった」と記されていた。

本時では、「君のため空白なりし手帳にも予定を入れぬ鉛筆書きで」という歌を示し、「みんなで謎解きをしよう」と呼びかけ、生徒のもった疑問を、話し合って解決していく活動を行った。手だてＢ「問題解決を重ねていく単元設定」として、これまでにも同じ学習展開で短歌の読み取りを行ってきた。生徒からは、「『君』とは誰のことか」「『空白なりし』とは空白なのか空白でないのか」「『手帳にも』の『にも』の意味は何か」「なぜわざわざ『鉛筆書き』なのか」という疑問が出された。このような言葉に着目して読んでいく活動や、複数の疑問を併せて考えていくことを繰り返すことで、着目する言葉や解釈の糸口に気づく生徒が増え、短歌を読み解く方法を一般化していった。



【資料３　本時指導案】

また、授業展開に手だてＣ「解決に向けた選択」の場を設けた。個々がもっている意見をＩＣＴで集約し、一覧で見られるようにした上で、誰と、どのように関わり合って学ぶかということを生徒が選択できるようにした。生徒Ａはこのとき、生徒Ｂの「えんぴつだと消えてしまう」という意見に着目し、関わり合いで話し合っていった。

こうした活動を通して、だんだんと生徒で読み取りができるようになっていった。

⑵　第１学年保健体育科「チーム力を磨いて、めざせ№0.１チーム（バドミントン）」の実践から

バドミントンは、生徒にとって事前の経験が少ないので、共通の課題をもって学習ができる種目である。また、技術やそれを駆使した戦術など多様な考えや課題を引き出すことができる教材である。これらの特性を生かして、生徒が創る授業を目指し、実践に取り組んだ（資料４）。

チームでの課題追究場面において、手だてＢ「問題解決を重ねていく単元設定」、手だてＣ「解決に向けた選択」として、「主人公練習」を取り入れた。「主人公」とは、その時間のチームの主役のことである。その「主人公」の課題を解決するために、チームで助言したり、どんな練習を行うのが

よいかのアイデアを出したりしながら「主人公練習」を行った。

本時では、生徒Cの「自分より後ろにきたシャトルを返せるようにする」という課題に対し、グループでアイデアを出しながら練習をする姿が見られた。グループの仲間は、「シャトルよりも後ろに下がるといい」「半身になって下がるといい」と助言を繰り返していた。その後は、グループの仲間が相手となり、生徒Aが後方のシャトルを打ち返す練習を繰り返し行った。

試合では、グループの仲間が生徒Cの後ろのシャトルへの対応について着目しながら助言を行っていた。１試合目が終わった時点で生徒Cは「横向きで打てなかった」と反省を口にした。グループの仲間は立ち位置について「後ろに下がったらいいと思う」と話した。

全ての試合後、グループで「主人公の振り返り」を行った。後ろに半身で下がることについて、グループの仲間から「できてたよ」と声をかけられた。


5　本時の指導（8/9／12）
（1）教科目標
・身につけた技能で、効果的に得点するためのシャトルを返すことができる。（知識・技能）
・練習の補助をしたり、仲間へ助言したりするなど、積極的に仲間の学習を援助しようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）
（2）自分たちが創る授業＝「主人公の課題解決に向けて、アドバイスをしたり練習の補助をしたりする姿」が見られる授業
（3）展開
スキルアップトレーニングをする
・ドライブの乱打　・ロブ→スマッシュ
・クリア→ドロップ→ヘアピン→ロブ→クリア
7分
主人公やチームのための練習をし、成果を試合で発揮しよう
前時に決めた、チームの課題とその解決練習を確認する
・今日のゲーム主人公はAさんだね。
・ネット後方のシャトルをクリアで返せるようにしたいな。
・ねらったところにスマッシュを打ち込めるようにしたい。
・カラーコーンを的にしてスマッシュを練習しよう。
10分
主人公を中心に、課題解決練習をする
・スマッシュを打つためには、もっとラケットの面を下に向けるといいよ。
・クリアが打てるようになったから、試合でクリアを使って、相手を後方に追いやり、攻めにつなげたい。
・ねらったところにスマッシュを打てるようになったから、試合で相手が返しにくいところをねらって打ちたい。
練習の成果を発揮するために、試合を行う
・ねらったところにスマッシュを打てるようになった。
・ネット前に落ちるシャトルを拾えるようになった。
・練習したことが試合でできるとうれしい。
22分
振り返りをする
・練習や仲間のアドバイスのおかげでスマッシュを決めることができた。
・次の主人公はBさんだね。
8分
主人公の技能や課題解決練習に向かうために主人公を設定した課題解決練習の場を設定する。
課題解決に有効な練習をしたり、つまずきを解消したりするために、練習内容を振り返らせるような声かけをする。
チームで協力して取り組むために、シングルスチーム戦（3人の試合の合計点で勝敗を競わせる）を行う。
＜試合のルール＞
・チーム戦　3人1組
・ラリーポイント制
・3試合の合計点で競う
・エレベーターゲーム方式
※ルールは、生徒に聞いて変更していく。
（4）評価（B相当）
・身につけた技能で、効果的に得点するためのシャトルを打ち返すことができる。（活動の様子）
・練習の補助をしたり、仲間へ助言したりするなど、積極的に仲間の学習を援助することができる。（活動の様子・振り返りノート）

【資料４　本時指導案】

生徒Cは授業の振り返りに、「最初は横向きで打つことができなかったけど、コートの後ろに立つことと下がるときは横向きでいくことを意識したので、できた」と記述した（資料５）。主人公の課題解決に向け、グループで助言し合い、課題解決に向かって自分の成長を実感している様子だった。

４　おわりに

２つの実践の成果として、生徒が授業の進め方を決めることができている。

２年国語科の実践を行ったクラスでは、MCCでクラスの課題について話し合い、生徒たちは「もっと発言を増やしたい」という思いをもっている。「自分たちの発言だけで授業ができるぐらいにしたい」という意見が出された。さらに授業では、説明文を序論・本論・結論に分ける活動において、生徒が自分たちで進め方を決めていっただけではなく、級長が自ら板書を行い、学習を進めていく場面が見られた。

１年保健体育科の実践では、主人公練習を通して仲間と共に問題解決に向かう姿が見られた。

今後は、生徒の主体的な取組や関わり合い活動を、よりよい問題解決につなげられるよう、深化手だてのあり方について研究を進めていきたい。



【資料５　試合で自分より後ろにきたシャトルを打ち返す生徒C】

目次へ

研究主題	学びをたのしむ竜北生		
学校名	知立市立竜北中学校	校長氏名	丹羽　康二

1　主題設定の理由

本校の生徒たちは素直な生徒たちが多い。生徒同士が関わり合いながら落ち着いた学校生活を過ごしている。しかしながら学習面では意欲が低い生徒が多い。授業中に机に臥せてしまったりよそ事をしてしまったりし、学びから逃避してしまう生徒も少なくない。そんな現状を憂えて生徒に「学ぶたのしさ」を実感させるにはどうすればよいのかと改めて反省と省察をするところが本校の研究のスタート地点となった。また、本校は経験年数５年未満の若手教員の割合が全体の４割をしめ、生徒との関わりや授業の在り方で悩みを抱えている教員が多い。そんな実態からも生徒も教師も研究を通して成長していくことが近々の課題となっている。そこで、本校の研究主題を「学びをたのしむ竜北生」として取り組むことにし、学校のカリキュラムを改善していこうと考えた。

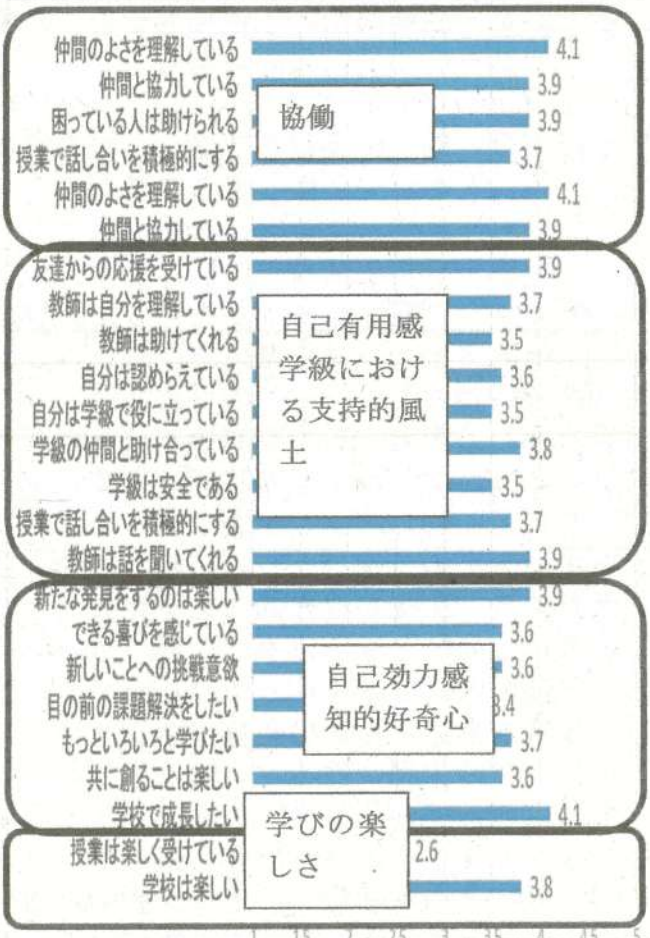
2　研究の目標

生徒の実態と教師の実感をもとに学校の改善の方法を明らかにするというのが、本研究の目標である。そこで研究の目標を次のように設定した。

研究の目標
「学びを楽しむ」生徒を育成するための手だてや教師支援の方法を明らかにする。

3　生徒の実態アンケート

生徒の実態を分析するためアンケートを実施した（資料１）。その結果、「協働」「自己有用感、学級における支持的風土」「自己効力感・知的好奇心」「学びの楽しさ」に関する因子にまとめることができた。さらにそれぞれの因子ごとの相関係数も高く、「学びを楽しむ竜北生」という研究主題に迫るためにはこれら４つの因子から、生徒に身に付けてほしい力を明らかにし、学校改善を進める方向性を導き出すことができた。



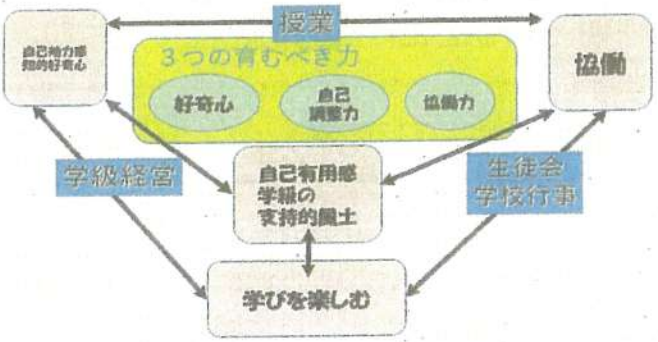
【資料１　生徒の実態アンケート】
５　そうおもう　４　ややそう思う　３　ふつう
２　ややあてはあらない　１　あてはまらない

4　研究の仮説

アンケート分析を受けて、研究の目標に迫るための仮説を次のように考えた。アンケート分析で生み出された４つの因子から「好奇心」「自己調整力」「協働力」の３つ力が抽出できると考えた。さらにこれらの力を活用する場面として、授業、学級経営、生徒会・学校行事を取り上げ、重点的に育んでいくことにした（資料２）。そして、授業だけでなく、様々な場面での「学ぶたのしむ」生徒の育成を目指した。

研究の仮説

授業、学級経営、生徒会・学校行事を中核にしたカリキュラムの中で、「好奇心」「自己調整力」「協働力」の3つの力を育む支援を継続的に行い活用することができれば、学びをたのしむ生徒が育成されるであろう。



【資料２　研究の仮説図】

５　研究の手だて

本研究で育むべき３つの力をつけるための手だてを以下のようにした。

手だて１　生徒の心を動かす「はてな？」や「驚き！」を生む仕掛けの工夫　好奇心

・感覚のズレを生かした学習課題。　・意外性のある資料の活用。
・生徒に考えたいことを選択させ、追究をさせる場の設定。

手だて２　生徒同士の活性化させる、教師の意図的な働きかけ。　協働力

・対話を促す教師の問い返し。　・つぶやきを広げる意図的な指名。
・構造的な板書。　・ICT ツールを活用したグループ活動。

手だて３　成長や課題を認識し、次の学びにつなげる「振り返り」の活用。自己調整力

・視点をもたせた振り返りの蓄積。
　→もやもやしたこと、わかったこと、はてなに思ったことなど。
・行事や日常生活などの振り返り。

手だて４　「竜北タイム」を通した、学びをたのしむ土台づくり。

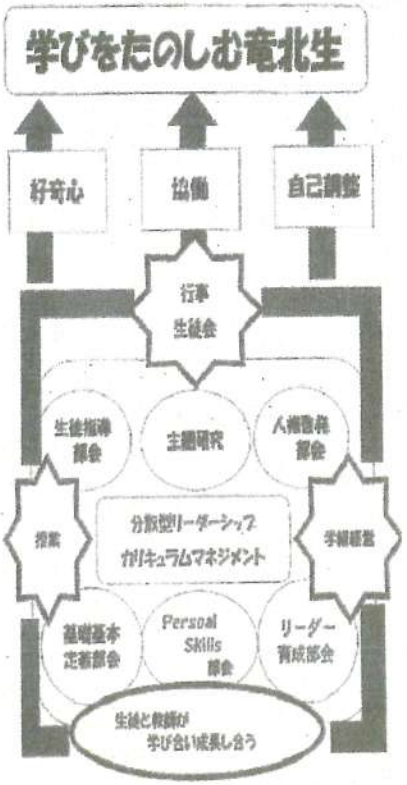
「竜北タイム」は毎週火・金曜日の６限終了後１０分間で行われている。この「竜北タイム」ではミニ作文を通して表現する力を高める「基礎基本の時間」と「コミュニケーションの時間」を交互に実施している。そして、これらの学習を通して、学習のスキルと情動スキルを高め、学びをたのしむための土台作りとする。

手だて５　生徒が自発的に力を発揮できる環境の設定。

生徒の自発的な場を行事の企画の段階から明確に示し、仲間と共に行事を創り上げる時間を体感させる。

６　研究を進めるための組織マネジメント

本研究の主題に迫るためには生徒だけでなく、教師も共に育っていく必要がある。そこで分散型リーダーシップの手法をとって研究を進めていく。具体的には若手教師と中堅教師、ベテラン教師を組み合わせた部会制を敷きながら、研究を進めていくこととする。このことで、OJT を活発化させ、若手教師の教師力の向上をねらっていく。そして生徒だけでなく、教師も生徒ともに「学びをたのしむ」ことができるように組織をマネジメントした。それを組み入れたものが以下の研究構想図（資料３）である。



【資料３　研究構想図】

※各部会について：すべての教員がこの部会のいずれかに属し、「学びをたのしむ」生徒を育成するため教師も生徒も共に成長しようとする学校文化を創ろうと心掛けた。

主題研究部会	研究の推進の中心となる。各種部会へと働きかけや授業研究を主導する。
生徒指導部会	いじめ不登校検討委員会と連携。自分も大事、他人も大事を合言葉に開発的な生徒指導を心がけていく。
基礎基本定着部会	書くことによって表現力を伸ばすことを目的とする部会。
Personal Skills 部会	生徒のコミュニケーション力の育成を図るための取り組む部会
リーダー育成部会	生徒会の取り組みと各学年の級長会の取り組みについて検討する。研究の手だて５を進めるための中核となる部会。
人権啓発部会	人権教育の推進。学級の柱となるマイクラス人権宣言の作成し、生徒にとって居心地の良い学級づくりを目指した。

7　研究の実際

（１）授業研究

①　数学「数学ことばでつながろう～文字と式～」（全体会）



【文字式を考察する生徒】

文字式のよさを感得する単元を構成することを目指し、実践を行った。生徒は、課題を解決するために多様な式を考え、それを解釈していくという授業展開であった。授業終盤では発展的な課題（ジャンプ課題）に取り組ませ、生徒たちは試行錯誤しながら課題解決を進めることができた。授業内における個人思考と小集団思考の位置づけが重要であることが課題となった。

②　理科「全身が映る鏡を設置しよう」（全体会）

身長の違う２人の全身が同時に鏡に映るにはどうすればよいのかという課題をもとに、追究を始めた。使用したワークシートは、光の反射と屈折の概念が表出されるよう工夫がされており、ほとんどの生徒が個人追究を行うことができた。また、自由に検証できるよう、自作の鏡を用意しており、生徒は考察した内容を検証するなど演繹的な思考を活性化させることができる授業展開となった。個人思考を十分に行ったうえでの小集団学習であったため、生徒たちは一人一人こだわりをみせながら自分の考えを吟味することができた。協議会ではキーワードを与えた振り返りが必要ではなかったかという改善案が出た。



【個人追究を進める生徒】

③　自主的授業公開

全体会の他にも教員による自主的な実践を進め、「学びを楽しむ」生徒の育成を目指すとともに、各自の授業力の向上を図った。

④　次年度への課題。

・教材研究の質を高め、より教科の特性を生かした実践の展開の実施。それにともなって教科を学ぶ楽しさを味あわせることができるようにする。→手だて１
・仲間と協働させるときの手法の開発と教員の出場を磨く。→手だて２
・教師が授業展開や単元構想に応じた意図的な振り返りができていたか、振り返りの視点をどのように与えていけばいいのかを明らかにする。→手だて３

（２）「竜北タイム」について

①　基礎基本定着部会の取り組み

基礎基本定着部会から提案されたミニ作文活動は、生徒の表現力を伸ばすのに有効だった。昨今作文を書く時間が削減されているため、このように意図的に書く活動を取り入れることは、生徒のスキルアップや表現力を高めるためにも有効であると考える。



【基礎基本のミニ作文】

② コミュニケーションの取り組み

コミュニケーション部会の取り組として曽山和彦先生の提唱されているスリンプルプログラムである「質問じゃんけん」を実施した。この実践の成果は生徒同士のつながりを密にするものであり、学級の支持的風土の形成の一助となったものと考える。



【コミュニケーション活動】

③ **次年度への課題→手だて４**

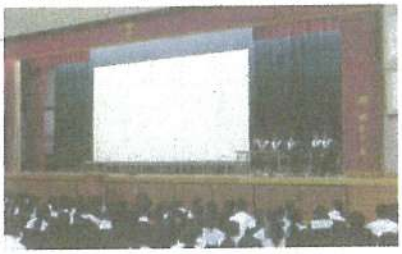
・基礎基本定着部会のミニ作文に関しては、よりバリエーションを増やしていく必要がある。

・コミュニケーション部会のスリンプルプログラムに関しては、より教師一人一人の力量を上げていく必要がある。

（３）生徒の自発的な活動の場について

① 今年度の生徒の自発的な活動としては以下のようなものを実施した。

体育大会	地域の方を巻き込んだ綱引き大会、大玉送りでは生徒会の呼びかけにより大盛況だった。
PTA、教員、生徒会の校則改善会議	父母教師会（PTA）、生徒指導主事を交えた校則改善の会議を行った。生徒会のプレゼンを受けて、保護者、教員の立場から校則改善への意見を出し合い、その実現を進めた。
文化祭	生徒会が各プロジェクトを設置し、延べ６０人の実行委員が文化祭の企画や運営に携わり、生徒主導の文化祭を実現した。
生徒議会	生徒会、級長会が話し合い、学校の問題点や校則の見直しを図った



【生徒議会による校則改善】



【保護者参加の大玉送り】

② **課題→手だて５**

・生徒会と級長会、各種委員会との連携をより密にし、生徒の主体性と参加率を高める生徒会活動の実施を進めたい。

・研究構想にある３つの力と教科の連携を図り、より生徒が学びをたのしむ場として位置付けたい。

８ 研究の成果と次年度の課題

① 研究１年次の成果

研究構想を定め「一人の十歩より十人の一歩」を目指し研究に取り組んだ。教員陣が同じ方向を見て、「好奇心」「協働力」「自己調整力」の育成を目指したことにより、普段の生徒の授業の様子も少しずつでは変わってきている。それとあわせて、生徒会だけでなく級長会においても主体的に自分たちで学校を動かしていこうという気持ちは高まってきたのは成果である。

② 次年度の課題

・教科の専門性を高め、生徒がより教科の学びをたのしむことができるよう、教員の授業力の向上。あわせて教員の研究意欲の向上

・分散型リーダーシップの要となる部会の再編とタイムマネジメント。

・OJT を通して、ベテラン教員の暗黙知を若手教員へと伝達する場の一層の充実。

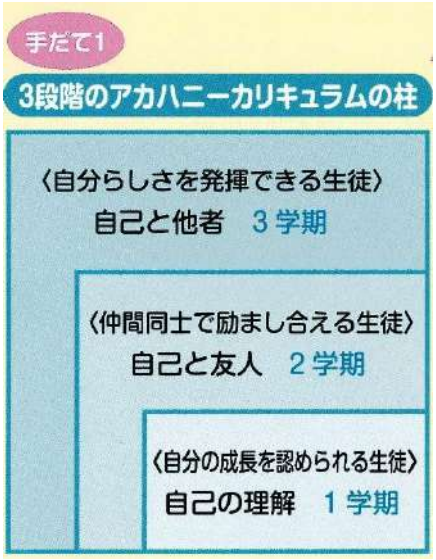
以上のことを課題とし、生徒も教員も「学びをたのしむ」学校文化の形成を、次年度も推し進めていく。そして研究のための研究で終わることなく、現在進行形で学校改善が進むような研究を進めていきたい。

目次へ

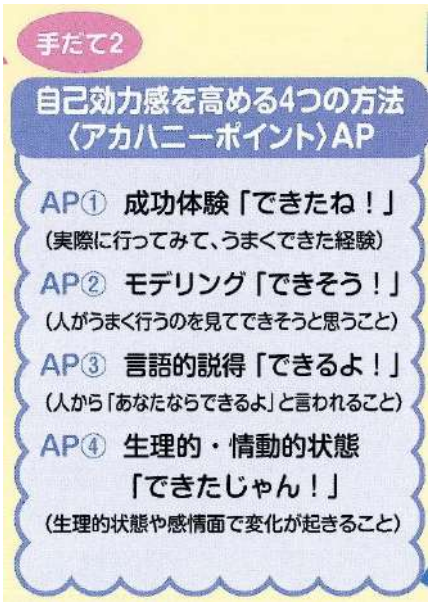
研究主題	すべての生徒がありのままで前向きに過ごせる学校づくり		
副　　題	自己効力感を高めるための実践の充実		
学 校 名	田原市立赤羽根中学校	校 長 氏 名	古越　俊光

学校生活のあらゆる場面において、「自己効力感」というキーワードを教師が意識し、３つの手だてを講じることで、生徒が自分の存在を大切にしてくれているという心が芽生え、生徒が前向きに学校生活をおくることができるようになってきた。

１つ目は自己効力感に関わる３段階の成長段階を設定し、年間を見通して実施するためのアカハニーカリキュラムを作成した。１学期は自己の理解、２学期は自己と友人、３学期は自己と他者というくくりで活動を行い、対象の幅を段階的に広げていった。中でも「自己の理解」という意味で特に力を注いだのが授業後の帰りの会、アカハニータイムである。アカハニーカリキュラムについては、自己効力感が高まるような関連活動について何があるのかを洗い出し、カリキュラムとして位置づけた。



２つ目は、自己効力感を高める４つの方法を、授業をはじめ、様々な活動に取り入れた。本研究に携わっていただいいた、山田浩平先生より、自己効力感を高める方法を享受していただき、それを、生徒も教師も共有できるように、わかりやすい言葉で具現化した。それが、少しの成功体験を重ねる「できたね」、人の行動をみて自分もできるのではないかと感じる「できそう」、あなたならできるよと言葉で励ます「できるよ」、その場の雰囲気でできてしまう「できたじゃん」という４つのことばである。この４つのことばは、アカハニー言葉として生徒や教師も気軽に言葉に発して使えるようにと、各教室に掲示し意識の継続を図った。授業の中でも、この４つの方法を意識し、それをアカハニーポイント①から④として明確に意識して授業を組み立てた。



そして、自己効力感が育まれるためには、人とのつながりを育むことが必要不可欠となる。小さな学校であるという強みを生かし、縦割り班活動も始めた。この活動をＡＫＢＮ集会・活動と名付け、全校生徒の２００名を２０班に分け、それぞれの班には教師も所属することとした。学級という母体とは違う居場所づくりとして機能しだしており、自己表現ができる場として活動している。活動後の振り返りをみても、次回のＡＫＢＮ集会が楽しみと記述している生徒が多くみられ、生徒が前向きになれる瞬間、場面が必然と生まれている。



【ＡＫＢＮ集会・活動の様子】



そして、３つ目は人とのかかわり合いを育む活動である。自己効力感が育まれるのは、人とのかかわり合いあってこそ、ということでそれを意識した授業づくりに努めた。

１年生英語の授業では、ＡＬＴを４名招き、ＡＬＴの好きなことについて、英語の疑問文を用いて、質問していく授業を実施した。ＡＬＴがたくさんいたので、初めは生徒も緊張していた。緊張から生徒がＡＬＴに話しかけるのを躊躇することが予想されていたので、まずは友達同士で、英語で質問を発表し合った。また、友達同士で「いいね」「かんぺき」などと声掛け合い、ＡＰ③言語的説得によって自己効力感が高まり、自信をつけていった。その後、生徒がＡＬＴたちにどんどん話しかける姿に、「～くんが話していたから自分も話せるかも」と考えて話しかける生徒が現れた。つまり、ＡＰ②モデリングの視点によって、自信をもって話しかける生徒の姿があった。また、この授業の教師が醸し出す、終始明るい、ノリの良い雰囲気によって、生徒も会話しやすくもなった。つまり、ＡＰ④情動的な行動の視点である。ＡＬＴと積極的にコミュニケーションがとれた授業となった。



【友達同士で励まし合う場面　ＡＰ③】



【友達を真似てＡＬＴと話す生徒　ＡＰ④】

研究の成果として４つのアカハニー言葉を用いて、様々な場面において検証してきた。中でも、少しの成功体験「できたね」の積み重ねによって自己効力感は確実に育ち、前向きに学校生活が送れるようになってきている。本研究の実践の積み重ねによって、生徒たちが何事にも前向きにがんばろうという意欲が高まり、チャレンジしようという気持ちが育まれてきている。

また、自己理解もすすんだと確信している。ＡＫＢＮ集会・活動とアカハニータイムでは、生徒も前向きに取り組み、自己理解と他者理解がすすんだ。相手とかかわる・話す必然性が生まれたことにより、自分の考えを少しずつ相手に伝えられるようになってきた。

また、我々教師の意識改革がなされた。生徒に対する言葉がけや生徒の感想や振り返りに対する朱書きも、常に前向きな言葉をかけるようになった。授業の中で、ＡＰを意識した励ます言葉掛けや支援は、確実に増えた。そして、生徒はもちろん、赤羽根中学校の職員も明るくなり、職員室は笑顔が絶えない職場となってきたのが大きな成果といえよう。

目次へ

研究主題	積極的に人と関わり、自ら判断し主体的に取り組む豊根っ子の育成		
副　　題	総合的な学習の時間　perfectoyone の取り組みを通して		
学 校 名	豊根村立　豊根中学校	校 長 氏 名	原田　基寛

１　主題設定の理由

（１）本校の教育目標から

本校は目指す生徒像として、積極的に人と関わり合い、自ら判断し主体的に取り組む豊根の子を掲げている。本年度は、さらに目指す生徒像の具体として、

生徒像１　目標を定め、真剣に学習し、知識・技能を習得していく生徒

生徒像２　学び合い、思考力・判断力・表現力を高めながら課題を解決していく生徒

生徒像３　自己の成長を実感し、豊根に愛着をもって生き生きと活動する生徒

を設定し、その実現に向けて学習活動を展開している。

（２）現職研修での取り組みから

現職研修では、上記の目指す生徒像の具体の実現のためにそれぞれ仮説を設定した。

仮説１　教科の見かた・考え方や学習課題を、自分にとって価値あるものとしてとらえさせ、学習の見通しをもたせれば、生徒は自ら課題を追究し、より確かな知識・技能を習得するであろう。

仮説２　授業の展開に段階を構想し、それぞれの段階で効果的な学び合いや支援を取り入れれば、生徒は課題を解決したり、目標を達成したりするであろう。

仮説３　授業の振り返りやその活用を工夫し、社会とのつながりを意識させれば、生徒は自分の成長や学習の成果に気付き、豊根に愛着をもって生き生きと活躍するであろう。

具体的な手だてについては、本校の教員が生徒の実態や学習する教材に合わせて構想したものを自身の実践を通して検証し、現職研修等を通して成果として共有することにした。

（３）総合的な学習の取り組みから

本校では平成３１年度から、「豊かに根差す村から学ぶ総合的な学習」として、豊根村の人、もの、ことから学ぶ学習活動を全校体制で行っている。

本年度は「Perfectoyone（パーフェクトヨネ)」を全体テーマとし、みんなが来たい豊根村を目指して、学習を展開した。本実践では、とよねまつりにむけて生徒が自分のアイディアを実現する過程を取り上げ、めざす生徒像２に迫ることができたかについて、仮説２と手だての有効性に基づいて検証する。

２　研究の構想

（１）目指す子ども像

学び合い、思考力・判断力・表現力を高めながら課題を解決していく生徒

（２）研究の仮説

授業の展開に段階を構想し、それぞれの段階で効果的な学び合いや支援を取り入れれば、生徒は問題を解決したり、目標を達成したりするであろう。

（３）研究の手だて

手だて１　効果的な学び合いや支援の機会を設定するために

とよねまつりにむけたプロジェクトグループを組織し、自分たちの商品や、販売個数の目標を設定し、事業計画を作成する。（つかむ段階）

手だて２　効果的な学び合いや支援の機会を設定するために

自分たちのアイディアを具体化する過程で、事業所に協力を依頼し、アドバイスをもらったり、改善を行ったりする。(解決する段階)

手だて３　効果的な学び合いや支援の機会を設定するために

成果交流会を行い、とよねまつりでの実践を通して得た学びを交流し、全体テーマに迫ることができたか検証する。(まとめる・振り返る段階)

（４）単元構想図（２０時間完了）

学習の段階	・学習活動	○手だて　※評価
つかむ （２ｈ）	・内容、目標の具体的な設定 ・計画作成	○手立て１ ※チームの仲間の意見交流を通して、自己の考えを変容させ、自分たちのアイディアをよりよくしようとしたか。
解決する （１６ｈ）	・販売する商品の決定 ・試作と修正 ・必要な物品の検討 ・当日の販売準備	○手だて２ ※販売価格や目標個数、販売の条件などの制約を意識しながら、事業所の方やプロジェクト担当の教師からのアドバイスを活かし、自分たちの商品をよりよくしようとしたか。
まとめる・振り返る （２ｈ）	・成果交流会	○手だて３ ※生徒同士の意見交流を通して、自分たちの活動の良さに気付き、全体テーマにせまるための方法をよりよくしようとしたか。

（５）抽出生徒Ａについて

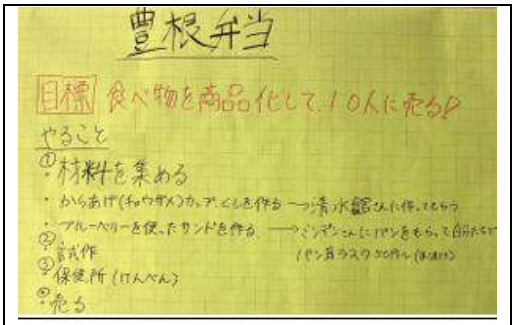
抽出生徒Ａは３年生の男子生徒である。１年生では、村の漁業に関心をもち、チョウザメやアマゴ・ニジマスの養魚場を見学した。２年生では、チョウザメをもっと広めるために、ジビエの有効な利用法を追究していた生徒とプロジェクトを立ち上げ、村内の旅館に協力してもらいながら、豊根村の特産品弁当【豊鹿蝶】（とよしかちょう）弁当の具体化に取り組んだ。３年生では弁当を実際に販売したいという思いをもった。生徒の変容を追う。

３　研究の実践と考察

（１）チームの仲間との意見交流を通して、自分の考えを変容させた生徒Ａ（手だて１）

４月、全校生徒で同じ関心の生徒同士で集まって、今年のプロジェクトチームを組織した。生徒Ａは食べ物に関心のある３名の生徒と一緒にプロジェクトチームを作った。生徒Ａのはたらきかけもあり名称は「豊根弁当」になった。

７月、教師は、プロジェクトの成果はとよねまつりで実際に販売をして村の人たちに評価してもらう予定であることを全校生徒に伝えた。露天営業で調理・販売できる食品は食中毒予防の観点からあらかじめ決められていること、弁当等を販売する場合は、弁当を製造する事業所に食品製造業の資格が必要なことがわかった。生徒Ａは、自分のやりたかった豊根弁当の実現がかなり難しいという現実に直面し、目標を見失いそうになった。



資料１　とよねまつりに向けた計画

豊根弁当チームは、メニューをいろいろと書き出し、模造紙にまとめて検討することにした。生徒たちは、付箋を参考に、「食べ歩きできるメニューがいいね。」「サンドイッチとか、ハンバーガーはどうか。」「チョウザメの唐揚げは人気があるんじゃないか。」などお互いの考えを自由に交流させ、教師は「串にささっていると食べやすくなるん

じゃないの。」とアドバイスをした。生徒たちは、串にささった唐揚げというアイディアと、ブルーベリーを活かしたデザートのようなパンという2種類のメニューをとよねまつりにむけて準備することに決め、計画を立てた（資料１）。



資料２　事業所での試食の様子

（２）とよねまつりにふさわしいチョウザメ唐揚げを追究した生徒Ａ（手だて２）

唐揚げについてとよねまつりまでに解決しなければならない課題はいくつかあった。

味やあげ方、個数、盛り付けなどは、実際に調理してもらい、試食して決定することにした（資料２）。清水館さんの厨房で調理してもらった。味付けについては、生徒Aはその場で「いくつかの調味料を組み合わせたら」と解決に向けてアイディアをだした。塩と胡椒とカレー粉を混ぜた調味料を試したところ、チーム全員の意見が一致し、味付けが決まった。あげ方については、清水館の方が、いくつかの方法を試してくれた。下味をつけ、衣をつけた唐揚げが一番おいしかった。１切れが１０ｇ程度の大きさで調理してもらったので、提供する際はいくつまとめて串に刺すか検討した。３つぐらいあったほうが食べ応えがある、ということになった。提供する際はカップに入れて出すつもりで、紙のカップを持って行ったところ、清水館の方が、「唐揚げが見えた方が、買いたくなるのではないか。」とその場でカップに細工をし、レモンを添えて盛り付けの提案をしてくれた。見た目が随分と良くなった（資料３）。清水館さんの協力を得ながら、チームで協力し課題の多くを解決することができた。



資料３　試作の様子

唐揚げの値段と、提供の仕方は未解決だった。唐揚げの材料であるチョウザメの切り身は１ｋｇあたり６，０００円と非常に高価である。１切れ約３０ｇとすると、１人前の唐揚げは１００ｇとなり、チョウザメの材料費だけで６００円となる。材料購入に使える予算の上限が２万円だったので、チョウザメを３ｋｇ仕入れることができる。単純に計算すると３０食になるが、試食で食べてしまった分をのぞいて２５食は準備できそうだと予想した。そこで、２５食に対し、調味料やカップ・串やレモンの金額も考えて値段を設定することにした。生徒Ａ は、何度も計算を繰り返し、追加のスパイス代は５０円とすれば、１食７５０円で提供できると結論づけ、商品化のめどがたった。チームは、いよいよ終盤の店舗の飾りつけについて考える段階になった。そこで、教師は生徒Aに弁当についての思いを尋ねた。生徒Aは昨年提案した豊鹿蝶弁当の宣伝も作成し、店舗の横に飾ってＰＲすることにした（資料４）。



資料４　豊鹿蝶弁道のPR

唐揚げづくりに前向きに取り組んできた生徒Aだが、豊根弁当に向けた気持ちも持ち続けていたことを確認することができた。そして、豊根弁当チームはとよねまつり当日にむけた準備を整えることができた。

（３）プロジェクトを振り返り、新たな課題を見出したＡ（手だて３）

とよねまつり当日は２５食のチョウザメ唐揚げは４０分もかからず完売となった。

豊根弁当のメンバーは自分の活動が終了した後も、他の店舗の手伝いなどに協力していた。生徒Aは、ブルーベリーの飲料を販売していたブルーベリー大作戦の店舗に行き、販売の手伝いを積極的に行っていた。来店してくれたお客さんに生き生きと対応し、注文をとっている生徒Aの姿から、彼なりに充実感を感じながら活動していることが読み取れた（資料５）。



資料５　接客する生徒Aの姿

とよねまつりの成果を交流する機会を設定した。生徒Aは「チョウザメとミンデンさんのブランド力はすごい。」と興奮気味に発言していた。その姿から、自分が想像してたよりも、チョウザメやミンデンさんのパンに人を惹きつける魅力があることに気がついた様子だった。教師はプロジェクトを通して、豊根村を『Perfectoyone（パーフェクトヨネ)』に近づけることができたか。」と問いかけた（資料６）。

生徒Aの発言から、とよねまつりの成功に満足せず、豊根村の知名度を上げるためにできることをやっていこうという新たな意欲を感じられた。

T　どうですか。
E　豊中生のがんばりを知ってもらえたけど、豊根の人ばかりだったから、豊根のことを広げるということはできなかったと思う。
F　タレントさんは、豊根村ってあったかいところでしたって、話してくれたし、インスタでも発言してくれていたので、少しは豊根の良さを広げられたと思います。
G　飲み物をたくさん買ってもらうことはできたけど、有名にできたか、ということでは、まだPerfectoyoneには近づけてないと思います。
A　僕の Perfectoyone のイメージは、誰に聞いても、豊根村ってあの村ねって言ってもらえるぐらいの誰もが知っている村にするということだから、まだ足りてないと思います。僕はもっと豊根村を有名にしたい。

資料６　生徒Ａと教師の対話の様子

４　研究の成果と今後の課題

（１）研究の成果

手だて１　効果的な学び合いや支援の機会を設定するために（つかむ段階）

とよねまつりにむけたプロジェクトチームを組織し、目標や事業計画を作成する過程で、仲間や教師との対話を通して、とよねまつりにふさわしいチョウザメの唐揚げを販売するという目標に向かって自分の考えを変容させることができた。よって手だて１は有効であったといえる。

手だて２　効果的な学び合いや支援の機会を設定するために（解決する段階）

自分たちの唐揚げのアイディアを具体化する過程で、事業所の方からアドバイスをもらったり、自ら改善したりしたことで、自分の考えを積極的に仲間に伝えたり、自分の弁当に対する思いを唐揚げの商品化と関連付けて前向きにとらえたりする姿が見られた。よって手だて２は有効であったといえる。

手だて３　効果的な学び合いや支援の機会を設定するために（まとめ・振り返る段階）

とよねまつりでの実践を通して得た学びを交流し、全体テーマに迫ることができたか検証したことで、豊根村のために前に進んでいこうという思いを表現できた。よって手だて３は有効であったといえる。

以上のことから仮説は妥当であったといえる。

（２）今後の課題

生徒の思いを現実にするためには、地元の事業所との協働が欠かせない。

目次へ

研究主題	校内居場所カフェの持続可能な運営について		
副　題			
学 校 名	愛知県立旭陵高等学校	校 長 氏 名	林　直紀

1. はじめに

通信制高校では、学校内の安全・安心な居場所づくりが重要である。COVID-19 の感染拡大を通じて学校は学習機会と学力を保障するという役割のみならず、人と安全・安心につながることができる居場所・セーフティネットとしての福祉的な役割も担っていることが再認識された（中央教育審議会 2021）。この居場所としての役割は、通信制高校においてより強く求められる。近年の通信制高校は、不登校経験のある生徒の割合が高くなっている。これらの生徒に学校への適応を促し、学習機会と学力を保障するためには、家庭や学校外だけでなく、学校内にも安全・安心な居場所をつくることが重要となる。

通信制高校における学校内の安全・安心な居場所づくりの取り組みとして、「校内居場所カフェ」が注目されている。校内居場所カフェとは、学校内の空き教室、オープンスペース、図書館などで、飲み物やお菓子などを無料で生徒たちに提供しながら、主に学外の民間団体のスタッフが居場所づくりを踏まえた交流相談・支援を行うものである（居場所カフェ立ち上げプロジェクト、 2019）。校内居場所カフェは、学校での学習や生活の中で困難に直面する生徒が多い定時制高校や通信制高校を中心に実践が行われており、様々な資源を提供するセーフティネットとしての役割を果たしている（高橋 2019）。

校内居場所カフェの実践報告が増えつつあるものの、その多くは NPO 等の団体によって運営されているものであり、それらの団体に頼らない運営については十分に検討されていない。実際に、高校教員が校内居場所カフェを開設したい場合には、学校のある地域に校内居場所カフェを運営している団体を探し、まずはその団体に相談することが推奨されている（居場所カフェ立ち上げプロジェクト 2019）。しかし、近隣地域に連携先の団体が見つけられるとは限らず、仮に見つけられた場合にも、その団体に支払う運営予算の確保などの課題もある。校内居場所カフェの実践をより多くの学校に広めていくためには、NPO 等の団体に頼らない運営の可能性を検討していくことが重要である。

そこで、本研究は、有志の保護者スタッフによって運営されている愛知県立旭陵高等学校の校内居場所カフェに着目し、NPO 等の団体に頼らない校内居場所カフェの運営の実態を明らかにすることを目的とする。具体的には、Q1：どのような動機でスタッフになったのか、Q2：スタッフとしてどのようなやりがいを感じているのか、Q3：スタッフとしてどのような悩みや難しさを感じ、乗り越えようとしてきたのか、の３つの問いに基づいて、有志保護者スタッフを対象とした調査と分析を行った。また、同様の取組を実施している静岡県立静岡中央高等学校への視察も行うとともに中部地区高等学校通信制教育研究会にて情報を収集した。

2. 方法

本研究では、公立通信制高校内で運営されている校内居場所カフェの保護者スタッフ６名（A～F）を対象にフォーカス・グループ（以下、FG）を実施し、質的に分析した。FG は調査の関心に関連する対象者を複数集め、同時にインタビューを行う方法である。FG は参加者間の相互作用を促進することで、非言語化状態にあるものが言語化され、引き出されることから、本研究で採用した。FG は参加者間の相互作用を促進することで、非言語化状態にあるものが言語化され、引き出されることから、本研究で採用した。対象者は、校内居場所カフェの運営に継続的に関わっているスタッフであることを基準に選定した。データの分析は、質的研究手法に基づき、(1) オープンコーディング、(2) カテゴライズ、(3) 結果の図式化、の手順で行った。

3. 結果と考察

分析の結果、前述した３つの問いに関して、８つの大カテゴリーと 35 の小カテゴリーが生成された。なお、以下で用いる記号は、＜　＞は大カテゴリーを、【　】は小カテゴリーを、「　」はFGでの発言を、［　］は著者による補足を意味している。

はじめに、Q1「どのような動機でスタッフになったのか」という問いについて検討した。図 1 に、Q1 の結果図を示す。

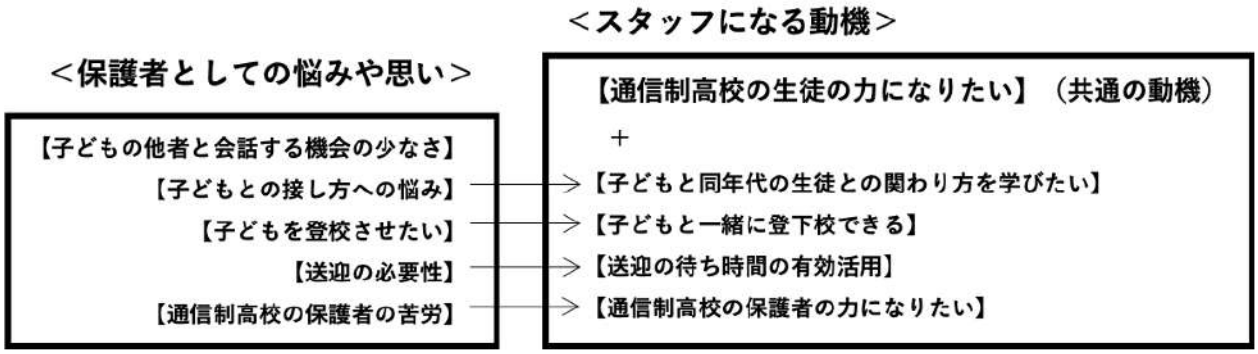


図１　Q1 の結果図

ここでは、＜保護者としての悩みが思い＞があり、それらが＜スタッフになる動機＞につながっていることが確認された。具体例として、【子どもを登校させたい】という保護者の思いが、スタッフになることで【子どもと一緒に登下校できる】という動機につながっていた。また、自身の子どもと同様に様々な事情や困難を抱える【通信制高校の生徒の力になりたい】という共通の動機があることも確認された。校内居場所カフェのスタッフになることで、生徒の支援に携われるだけでなく、保護者としての自身の悩みや思いの解決にもつなげられるという点は、有志の保護者がスタッフになることの特徴であると考えられる。

次に、Q2「スタッフとしてどのようなやりがいを感じているのか」という問いについて検討した。図 2 に、Q2 の結果図を示す。

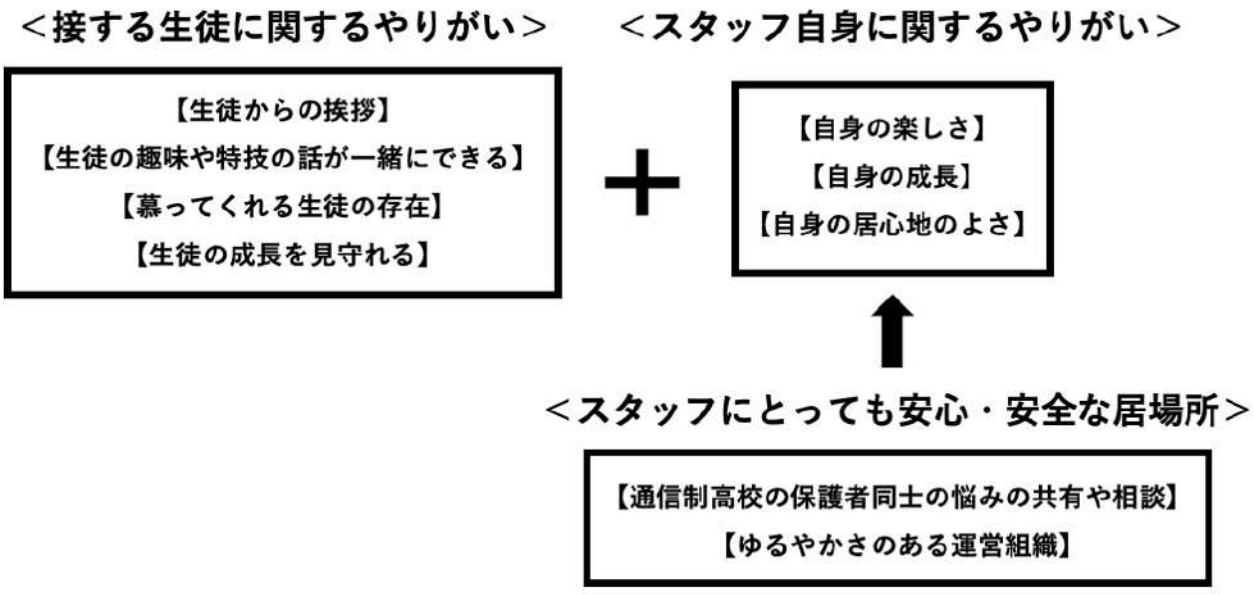


図２　Q2 の結果図

ここでは、＜接する生徒に関するやりがい＞と＜スタッフ自身に関するやりがい＞の２つがあり、スタッフ自身に関するものは校内居場所カフェが＜スタッフにとっての安心・安全な居場所＞にもなっていることが背景にあることが確認された。「[子どもが] 通信制高校に通うからこその悩みとか、そういうのが他の友達では聞いてはくれても、共感はしてもらえない（E)」という発言から、通信制高校の子どもを持つ保護者同士でないと共感できない悩みが存在すると考えられる。スタッフの間で、【通信制高校の保護者同士の悩みの共有や相談】ができることによって、＜スタッフにとっても安心・安全な居場所＞がつくられ、スタッフ【自身の居心地のよさ】や【自身の楽しさ】などのやりがいにつながっていた。

最後に、Q3「スタッフとしてどのような悩みや難しさを感じ、乗り越えようとしてきたのか」という問いについて検討した。図 3 に、Q3 の結果図を示す。

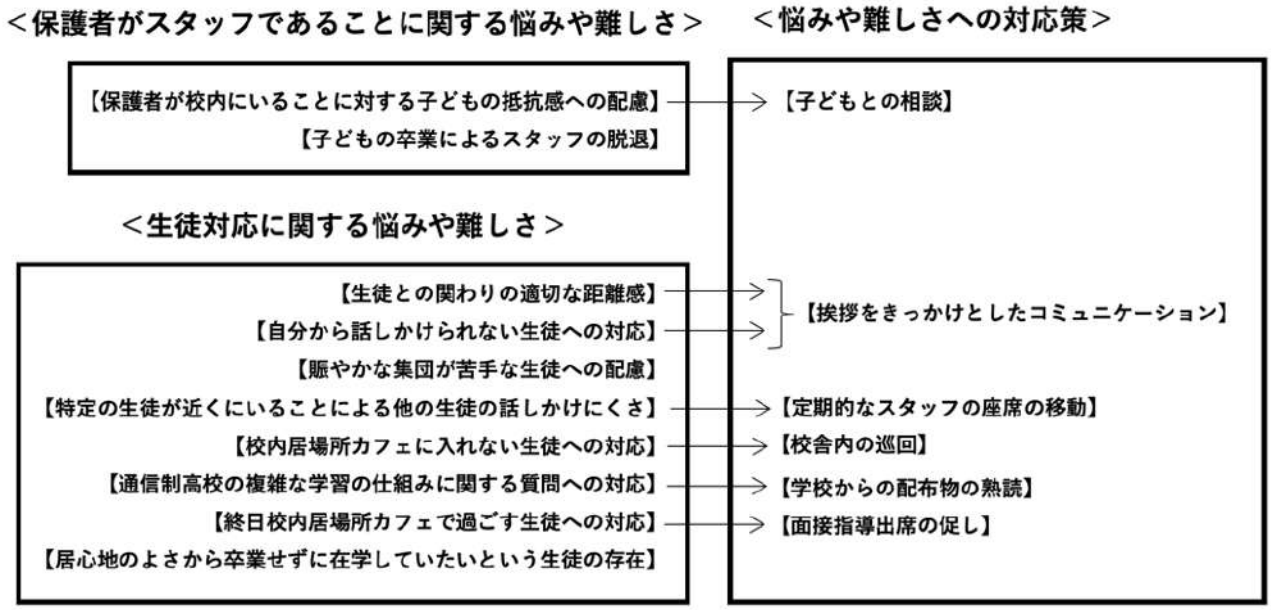


図 3　Q3 の結果図

ここでは、＜保護者がスタッフであることに関する悩みや難しさ＞と＜生徒対応に関する悩みや難しさ＞、それらの＜悩みや難しさへの対応策＞が確認された。例として、【保護者が校内にいることに対する子どもの抵抗感への配慮】が悩みとしてあり、【子どもとの相談】を十分した上で、スタッフになり、運営に携わっていることが確認された。この悩みは保護者がスタッフになるからこそ生まれるものであり、子どもの意思を十分に確認し、尊重した上でスタッフになり、運営に携わることが重要であると考えられる。

以上から、保護者が校内居場所カフェのスタッフになることによる難しさや悩みが存在するものの、保護者がスタッフになるからこそ解決できる悩みや生まれるやりがいも確認された。今後の課題は、校内居場所カフェ開設のニーズがあるが、連携先の NPO 等の団体が見つけられない学校において、本研究で得られた知見を活用して有志の保護者スタッフを募り、本研究で対象とした校内居場所カフェと同様に、保護者スタッフによる運営が可能であるかを検討していくことである。

謝辞

本研究の調査にご協力いただいた有志保護者スタッフ及び、静岡県立静岡中央高等学校の方々に感謝申し上げます。

参考文献

中央教育審議会 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）、https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (参照日 2024.10.6)

居場所カフェ立ち上げプロジェクト (2019) 学校に居場所カフェをつくろう！―生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援、 明石書店

高橋寛人 (2019)「生きる」:居場所カフェ・研究と地域の観点から―学校と、社会―、教育制度学研究、26、141-145

目次へ

研究主題	普通科改革支援事業　新設学科開設に向けて		
副　　題			
学 校 名	愛知県立惟信高等学校	校 長 氏 名	岩堀　昌史

今年度、全学年で実施した「総合的な探究の時間」の取組については以下のようである。抜粋して、第１学年の取組について紹介する。

第１学年　探究テーマ「地元の宝探し」

①　１年生一人一人が、地元の名物・名所等「地元の宝」を一つ探して、クラスメートに紹介する。各クラスで、賛同者の多い８つの宝のチームを結成する。７クラスで 56 チームとなる。

②　それぞれの宝について、チームで宝の内容、良さを調査・研究、協議する。そして、宝について良く知る人や機関などを調べ、生徒が自ら電話で取材依頼を取り付け、チームで訪問し、宝の詳しい内容・歴史・裏話等を取材する。

③　訪問取材の内容も加え、ここまでの探究結果を各チーム３枚のポスターにまとめ、各クラス内で発表する。そして、最も賛同の得た「地元の宝」クラス代表を決定する。

④　クラス代表の「地元の宝」の対象の人・機関に、選抜チームから学校行事「惟信マルシェ」での合同発表の協力を依頼する。発表内容について、チーム・地域協力団体と相談を重ね、惟信マルシェでのブース発表を行う。

学校設定教科の設定については、令和７年度新設学科「未来探究科」において本学科独自の学校設定教科のカリキュラム開発を行った。各学年２教科（各１単位）設定されており、「探究実践」、「学び探究」の２つである。「探究実践」の授業内容については、例えば、身の回りの課題を見つけて、解決策を考える「デザイン思考」や、惟信マルシェの運営側を経験するなど、地域との連携に重点を置いた探究活動を行う。「学び探究」においては、国社数理英５教科の学びの魅力にふれる「学びの魅力発見」など、学ぶことの本当の意味をより深く考える探究活動を行う。

学校全体での授業改善については、授業参観や公開授業など授業研修の機会を確保した。１学期は「GO!AL 授業」をテーマに、３人１組での授業参観や各教科で研修を設定して行った。英語科はパフォーマンステストについて協議するなど授業改善に努めた。２学期はコーディネーターによる公開授業を行った。理系生徒中心に数学の授業実践公開を行い、「生徒の思考力」を育成する授業

について学校全体で考える一助となった。１学期に引き続き、「Do Try!」をテーマに、授業参観（自教科１回、他教科１回）や公開授業（各教科から１名ずつ授業実践公開）を行い、授業改善に向けて学校全体で取り組んだ。３学期は、引き続き個人での授業改善に努めるとともに、1 年間の振り返りを行う予定である。授業改善には明確なゴールはないが、学校全体でより良い授業を目指して研修を実施することができた。

今年度本校が「新時代に対応した高等学校改革推進事業」（普通科改革支援事業）に採択され２年目となる。本校は、人口が集中し、多文化共生がすすむ都市部にあるいわゆる“普通”の公立普通科高校であるが、日本の貿易拠点である名古屋港に臨み、増加する外国籍の人々への対応、海抜０メートル地帯における防災、高齢者へのサポート等、地域が抱える課題は山積している。今後ますます進むであろう外国人労働者の受け入れ、30 年後までの発生確率が 70%といわれる南海トラフ地震、隣人の顔すら知らずに過ごしがちな都市部において、公立普通科高校で学ぶ生徒が、国際的な広い視野を持って、地域に新しい価値を創造し、地域に貢献することができれば、生徒自身の「自己有用性」を高めることにつながると考える。生徒自身が言葉の壁を乗り越えて多文化共生社会の一員となり、未来や自己を見つめることで「自立型思考力」を獲得し、都市部での課題を見つけ出し、課題解決に向けて試行錯誤する探究活動を通じて、新しい価値を創造し、地域社会に貢献するという都市型公立普通科高校での汎用的・普遍的な探究活動に挑戦していく。

都市部にある専門学科を持たない普通科高校において改革が進むことの意義は大きい。特別な産業との結びつきによる地域協働や過疎地域での地域協働とは異なる汎用性の高い公立普通科高校での教育改革を目指していく。

目次へ

研究主題	生徒がより学びを深めるための授業改善方法を探る		
副　　題	～学びの「視覚化」「言語化」を伴う対話的活動の導入～		
学 校 名	愛知県立天白高等学校	校 長 氏 名	福應　浩

1　はじめに

本校は令和４年度より２年間「あいちラーニング推進事業」の研究主管校に指定され，「ICT を活用した『主体的・対話的で深い学び』を推進するための取組」というテーマで研究を続けてきた。各方面からのご理解とご協力，ご指導ご鞭撻を賜り，ある程度は研究が形になったのではないかと自負している。

一方で研究に際限はなく，せっかく形になった本校の研究を継続させた方がよいのではという機運が校内にあったのも事実である。そのため今年度は上記主題と副題のもと，引き続き校内で研究を進めていくことにした。

2　研究重点項目

過去２年間の研究では ICT の活用を唱えていたが，今年度は ICT 利用に限らず「授業改善」に重点を置くことにして，以下の４つの研究重点項目を設定した。

(1)効果的な問いや課題で学びの機会を創出するように授業改善に取り組む
(2)「個」の考えや「きづき」をより深めさせるために，学びの「視覚化」「言語化」「構造化」を伴う対話的活動を導入して，授業改善に取り組む
(3)外部より招聘する指導助言者や職員間のアドバイスを積極的に取り入れ，より専門的，多角的に授業改善を進める
(4)全職員が情報収集・発信を意識しながら多面的に授業改善に取り組む

3　具体的な取組

まず年度当初に各教科の代表者からなる「授業改善プロジェクトチーム」を立ち上げた。このチームが一年間の研究計画・立案・実施を行う機関となった。そこではじめに二つの研究基本方針を確認した。一つ目は過去２年間の研究成果をそのまま活用することである。二つ目は，今年度の研究においても上記重点項目に則って各自で研究を進めることである。これは教育公務員特例法第２１条にある，教員は「絶えず研究と修養に努めなければならない」とあることに基づいている。授業発表者のみならず，だれもが授業改善を目指すこと，教科の特性であったり，個人のスタイルであったりは維持しつつ，多角的な研究プロセスのベクトルを，「授業改善プロジェクトチーム」がある程度共通方向に導くという方針を確認することが重要であった。

基本方針を確認した後は，学校全体としてどのように研究を進めるかを話し合った。その結果

・外部専門家を招聘して授業を参観してもらい指導助言を賜る
・外部専門家を招聘して講演会を行い，最新の教授法にふれ，授業改善方法を学ぶ
・外部専門家の指導・助言を各人がどのように活かせているかを共有して，各教科で中間報告をまとめる
・それぞれの授業改善方法，授業の工夫，研究成果を相互に学び合う授業参観週間を設定する

の４つを柱に一年間研究することにした。

(1) 授業検討会(全２回)

教科を問わず，外部専門家による授業参観と研究協議を経ることにより，それぞれの授業の改善点の確認は

もちろんのこと，推奨される教授法の伝達等を目的として，２回にわたり授業検討会を実施することにした。

今年度は指導助言者として，名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授の坂本將暢先生をお迎えした。参観を希望した教員の授業を坂本先生に観ていただき，教育実践研究や協働型授業研究をされている視点からご指導ご助言を賜り，それを授業者が所属する教科に還元するというねらいで行った。

時間的な制約がある中で，７人が坂本先生の参観を受け，その後研究協議を行った(他の授業でどうしても研究協議に参加できない場合は，個別に坂本先生とやりとりをしてふりかえりを完遂した)。

授業発表に際しては，負担を最低限に抑えるために下記のような極簡易指導案を任意で作成することにした。

極簡易指導案 時 限 （ ） 科目名 （ ）授業者 （ ）クラス （ ）ご高評

1 単元名
2 単元の目標
3 本時の目標
4 指導観(今までどのように授業を進めてきたか，また改善しようとしてきたか)
5 3を達成するための工夫や学びを深めるための仕掛け
6 5で期待する効果
7 本時またはこの単元では，本年度研究重点項目のどの部分にねらいを定めているか






多嶋教諭　数学Ⅱ　　小久保教諭　物理　　綴綱教諭　現代の国語　　内藤教諭　数学C





服部教諭　英語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝⅡ　　壱東教諭　歴史総合　　薫森教諭　英語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝⅠ

(2) 指導助言者講演会

２回にわたる授業検討会で，坂本先生が参観された７つの授業の感想，共通する長所と改善点を端的にお話

していただいた。また，先生が普段から研究されている教育実践研究や協働型授業の研究の観点からも適切な指導助言をいただいた。多用の中４０名あまりの職員が参加した。以下にその要旨をまとめたい。

ア　授業者に共通する長所

(ｱ)教え込み過ぎない授業の構成･･･生徒も一緒に作る授業，主体的な対話の進展と適度なICTの活用

(ｲ)授業者が大切にしたいことの反復的発言･･･授業目標や教師の願い・ねらいなど

(ｳ)「研究重点項目」の存在･･･「何を」「どのように」「どこまで深く学ぶのか」を生徒教員ともに理解した上で授業を行う

イ　課題

(ｱ)学びの系統性･･･「今までや今日の学び・明日以降の学び」と教師の願いの結び付きが明確でない

(ｲ)効果的な問いの不明瞭さ･･･「解ける/解けない」が「深い学び」に引き継がれていない

(ｳ)個別最適化というよりは協働的な学び･･･生徒に応える教師のフォローがないと共倒れになる恐れあり

ウ　提言

(ｱ)(極簡易)指導案に教師の願いを記入する･･･「教師の願い」と「生徒の実態」のズレが明瞭になる

(ｲ)机間観察・指導･･･目的のある周り方をして生徒の主体的な進展を促す

(ｳ)「理解する」の分解･･･解釈・例示・分類・要約・推論・予測・比較・説明などが理解の手段として存在

エ　ふりかえり

講演の後，参加者によるふりかえりをGoogle Formsで行った。そこで出た質問等に坂本先生にメールで回答していただき，それを職員全体で共有した(Google Classroom利用)。この講演会は回答者の９３％が「今後の授業改善に役立てられる」「今後の授業改善にまあまあ役立てられる」と回答する，非常に満足度の高いものとなった。

(3)各教科中間報告

２で挙げた研究重点項目と指導助言者による講演会を通して，それぞれが研究している授業改善方法等を教科ごとに共有して，各人がより深く授業改善につなげられるような機会を設けた。年度途中でふりかえりを共有することは，本校が学校全体で「深い学び」を研究しはじめてから初の試みである。ここにその一部を紹介したい。

国語科･･･生徒の言語活動の充実とそれに伴う思考力･判断力･表現力を伸ばす授業の研究に取り組んできた。グループワークの充実，ICTを活用した生徒間の意見交換や相互評価の取組，複数教材の読み比べ，「書くこと」に重点を置いた指導等を行っている。(林教諭)

地歴公民科･･･対話的活動ではICTを活用したグループワークを通し，教科担当者が個別に設定した課題の探究に取り組んでいる。また，さかのぼり授業や仮想体験授業を取り入れた授業も実施している。科目横断的な活動にいかに取り組むかが課題である。(鵜飼教諭)

数学科･･･毎授業の開始時に相互解説を実施し生徒の学習改善と教員の指導改善の機会としている。毎定期考査ごとに解法マップを作成し別解創出や誤答分析の一助としている。スタディサプリの動画を利用して，反転授業に取り組んでいる。(鈴木教諭)



理科･････豚の眼の解剖　問：眼の中は何色？強度は？(右写真２枚参照)

哺乳類の豚の眼はヒトの眼とほぼ同じである。眼の中を見る機会はめったにない。

実際にさわることで，眼のつくりをより知ることができた。

生徒同士で画像が共有できるように，グーグルスライドを使った。(野村教諭)



英語科･･･会話的ではなく対話的な活動を取り入れている教員が多い(対話の対象は生徒同士，教員と生徒，生徒と教材等様々である)。また，それらの取組や手法が学びの「構造化」につながるにはどうすればよいかを模索している教員もいる。(薫森教諭)

保健体育科･･･保健では，パワーポイントや資料動画等を活用しながら学びの「視覚化」を図っている。体育では，動画撮影を取り入れ客観的に自分の姿が捉えられるようにしている。個だけでなく，グループワークを行うことでより多くの「きづき」から知識が深まるよう工夫している。(辻教諭)

情報科･･･知識と日常の事象を結びつけるような問いかけをすることで，単なる知識の伝達だけではなく，

情報Ⅰで学ぶ知識が日常の様々な場面で活用されていることを意識させた。プログラミングやデータの活用といった実習を多く含む内容を，生徒が課題解決するような授業展開で実践した。（多嶋教諭）

⑷授業参観週間

研究も３年目に入り，今年度はICTの活用をテーマから外したことにより，より多くの先生方が授業改善に

積極的に取り組むようになった。それぞれの授業改善方法，授業の工夫，研究成果を相互に学び合うため，今年度はじめて教員同士による授業参観週間を設定した。期間は１１月１１日から１５日迄の１週間で，以下の３つのルールを設定した。

・原則教科内での参観　　・双方合意の上で参観（できるだけ前日までに）　　・途中入退室も可

この１週間では予定が立たず，翌週に相互了解のもと授業参観をする姿も見られた。何よりも特筆すべきは，ただ互いに参観するだけでなく，授業後に研究協議をしていたことである。授業の狙い，発問の意図，ICTの活用方法はもちろんのこと，「教師の願い」や生徒の「きづき」，学びの「視覚化」「言語化」「構造化」，教科横断に至るまで，あらゆる話題に関して熱い議論がされていた。授業を参観した教員は延べ６０人を上回った。これはいかに本校の先生方が，どのように授業を改善したらよいかに高い関心があり，それを日頃から探究し続けている表れであり，今年度の学校としての研究の取組が形になっていることの表れであると感じた。

⑸その他（学校教育助成事業の活用）

ア　先進校視察

本事業の助成により，３名が異なる府県の先進的取組を行っている高校の視察に臨んだ。校務における様々な手がかりを求め，各々授業改善とは別に以下のようなテーマを持って視察した。視察報告は授業改善プロジェクトチーム内で口頭や書面により行った。特に有益な情報に関してはそれぞれが所属する教科や分掌に持ち帰って共有した。また，報告を誰もが閲覧できるように校内ネットワーク内に保存した。

・１１月　７日　**京都府立桃山高等学校**　薫森教諭　総合的な探究の時間・ICTを活用した授業について
・１１月　８日　**滋賀県立彦根東高等学校**　鈴木教諭　新学習指導要領・評価（成績処理を含む）について
・１１月２１日　**静岡県立浜松南高等学校**　多嶋教諭　遠隔授業・キャリア教育などについて

イ　ホワイトボードの活用

購入したホワイトボードは，なかなか理解が深まらない生徒に対して，「個」の考えや「きづき」をより深めさせるために利用する。ホワイトボードでより見やすく，よりわかりやすく分類・例示・解説することで，生徒の学びが「視覚化」「言語化」「構造化」されるのに役立てることができる。さらに，少人数での対話的活動を付加することで学びが深まり，「個別最適化」に役立てることが大いに期待されている。

４　成果と課題

⑴ 成果

研究も３年目に入り，かなり多くの先生方が当たり前のように授業改善方法を模索していることこそが成果

である。そして，学びの主体が生徒に移行し，「教える」ことよりも「気づかせる」「学ばせる」ことに重点を置く授業が増えてきている（※３⑵ア参照）こともまた大きな成果であり，主題の答えであるとも考える。教科の特性や手法の違いなどから，教員が協働して研究することが難しいと言われる中で，研究重点項目に則ってある程度同じ方向性で研究を進め，それを互いに共有し，形に残していることが大変素晴らしいと感じる。

その重点項目に関しても，名古屋経済大学教授の大谷尚教授，岐阜女子大学の久世均教授，名古屋大学大

学

院の坂本將暢准教授の指導助言を経て，毎年成果を確認しながらブラッシュアップしている。今年度の指導助言者である坂本先生からも，「この研究重点項目があるからこそ研究の方向性が明確で素晴らしい。研究内容の答えも，この中にある気がする。」と賞賛の言葉をいただいている。

⑵ 課題

一つは「生徒がより学びを深めるための授業改善方法」に際限がなく，明確な提言ができていないことである。上述した「学びの主体が生徒に移行し，「教える」ことよりも「気づかせる」「学ばせる」ことに重点を置く授業が増えてきている（※３⑵ア参照）」は，学びの「視覚化」「言語化」による効果の最たる例ではあるが，それ以上のものを明確に提言できるにはまだ至っていない。今後さらに探究していきたい課題である。

もう一つは⑴に相反するが，研究に対してどうしても受動的になってしまう部分があることである。研究や探究はどなたかにお任せしたいという雰囲気は根強い。情報が欲しい，教授法を教えてほしいという声は上がるが，自ら能動的に探究する先生方は限られる。来年度以降の研究に積極的でないことが課題である。

５　おわりに

ご多忙の中指導助言者を引き受けていただいた名古屋大学大学院の坂本將暢准教授をはじめ，非常に多くの方々のご協力によって本年度の本校の研究が成り立っていることにまず感謝申し上げたい。研究３年目となった今年度が今までで一番多くの先生方の研究機運が高まり，上述したような成果が生まれたと自負している。

一方で上述した課題が残っているのも事実である。これらの課題解決方法を個人で探究することはもちろん重要であるが，学校全体として研究機運を高めていくことの重要性を強く感じる。予算が限られ，なかなか同規模での研究は困難かもしれないが，まずは研究重点項目や授業参観週間など，やれることから着実に実行して，その研究成果を生徒に還元できる方法を模索していくことを再確認して，この報告を終えたい。

目次へ

研究主題	学校創立百周年記念関連行事実施と学校活性化について		
副　　題			
学 校 名	愛知県立瀬戸高等学校	校 長 氏 名	堀田　浩史

Ⅰ　研究のねらい

本校の歴史は1924年（大正13年）の瀬戸町立瀬戸高等女学校の開校までさかのぼる。戦後に愛知県に設立された新制高等学校55校の１校「愛知県立瀬戸高等学校」として現在に至っている。創立90周年以降準備が進められた「創立100周年記念事業」は令和５年度及び６年度に実施された。多くの学校関係者が一連の周年行事に関わることになったが、同時に、記念事業の担当としてどうしても欠かせない要素があった。言うまでもなく学校の主役である生徒たちの周年行事への主体的な関りと活動であった。

本研究において生徒の活動が学校全体の一体感を創出し、未来に渡る学校活性化への糸口になりうるかについて考察したいと考えた。100年に一度という学校振興の機会をとらえ、学校がいかに生徒の主体性と創意工夫を引き出し積極的な参加を促したか、その結果として周年記念関連行事が生徒の成長にどう寄与したかという観点から記録・紹介していきたい。

Ⅱ　研究経過

令和６年６月～８月　　創立100周年記念行事準備・進行について協議
令和６年９月～１０月　　創立100周年記念行事の実施と協議
令和６年１１月～令和７年１月　創立100周年記念事業のまとめと振り返り

Ⅲ　研究内容

１　研究方法

令和５年度から６年度に実施した創立100周年関連事業における生徒参加状況を分析し、行事が生徒に与えた影響や学校と生徒の変容について考察する。対象事業は以下の行事とする。

(1)　第４回永井陽子短歌大賞記念大会
(2)　オーストラリア研修生徒派遣(記念発表)
(3)　記念芸術鑑賞行事
(4)　記念図書館まつり
(5)　記念式典(記念講演)


【写真１】第４回永井陽子短歌大賞表彰式

２　研究結果

(1)　第４回永井陽子短歌大賞記念大会【写真1】

本校卒業生の歌人、永井陽子を顕彰する短歌大会を広報し、全国規模の募集を実施した。本校生徒のほぼ全員を含めた中高生からの応募も多数あり、生徒の部「大賞」及び「選者賞」において本校生徒が選出され、令和５年12月パルティせと「アリーナ」で開催した式典(瀬戸市長・瀬戸市教育長出席)、本校３学期終業式で表彰された。

(2)　オーストラリア研修生徒派遣(記念発表)

周年行事準備委員会当初の構想段階から計画されていた事業であり、県立瀬戸西高等学校との協働的な取組として実施した。事業の経過は次のとおりである。

ア　参加生徒の募集と選考

応募多数により令和５年６月に英語技能、作文、面接を経て参加者を決定した。

イ　事前研修

令和６年７月～２月、「英会話」「日本文化」「瀬戸の歴史と産業」を中心に 24 回に及ぶ事前研修を実施した。瀬戸西高校生徒との協働学習も交え、現地校での交流に備えプレゼンテーションの作成・準備を入念に行った。

ウ　オーストラリア現地研修【写真２】

令和６年３月 10～18 日の日程でオーストラリア・ブリスベン市でのホームステイおよび現地校での語学研修プログラムに参加した。現地スポーツ体験、大学キャンパスツアー、現地学生、留学生との交流会、成果発表会、ホストファミリーとの余暇活動を経て帰国の途についた。

エ　事後研修と記念発表【写真３】

３学期終業式での全校生徒への報告、報告書冊子の作成を行った。そして、創立 100 周年記念式典当日には、瀬戸市文化センターにおいて成果報告冊子の配布、画像等の記録を示しながらの英語のスピーチ(成果発表)を行った。発表の準備、特にプレゼンテーション資料の作成とスピーチ練習、ミーティングに相当の時間を要した。発表への評価は非常に高く、記念式典の格調を高め来場者に感銘を与える彩り豊かな報告となった。発表生徒らにとって大きな自信となっただけでなく、全校生徒に異文化体験の必要性を印象付ける機会となった。



【写真２】オーストラリア研修修了式



【写真３】オーストラリア研修記念発表

(3)　記念芸術鑑賞行事【写真３】

芸術鑑賞行事の記念拡大版として、本校スクールソング(校歌とは異なる)「セコウザカ」作曲者の菊池常利氏(作曲、演奏家、歌手)を招き、令和６年９月 17 日に瀬戸市文化センターを会場にスクールライブが行われた。ライブの後半では本校吹奏楽部(管打楽器)、有志生徒(ドラム)、教員参加の合同演奏を行った。客席側の多くの生徒がステージ前に集まり演奏者と一体となってライブを作り上げることができた。演奏に参加した多くの生徒は、楽譜の調整を含め事前練習に励み、前日には菊池氏との合同練習を学校音楽室で行うなど、ステージ創造のプロセスを味わうことができていた。

(4)　記念図書館まつり【写真４】

平成 20 年から、読書週間に合わせて 11 月に「図書館まつり」を実施しており今年度で 17 回を数える行事である。図書委員会内に「図書館まつり企画係」を設置し、テーマや展示方法等を生徒自らが計画を立て、企画運営するなど、生徒主体でテーマに即した大がかりでユニークな展示を行っている。

令和５年度及び６年度は創立 100 周年を記念したテーマを設定し、「100 年の世界」「怪談と学校」の企画展示及び創作活動を行った。瀬戸市立図書館と連携して関連図書を借り受けたり地元ケーブルテレビ、新聞社を通して広報を行い、地域から幅広い年代の来場者を招き、クイズラリーを織り込んだ見学と手作り小物プレゼントによって好評を博すことができた。

生徒と地域の良質な接点、地域の方に学校の 100 年の歴史や現在の取組を知ってもらうための重要な機会となった。



【写真３】記念芸術鑑賞行事



【写真４】記念図書館まつり

(5)　記念式典【写真５】（記念講演【写真６】）

令和６年10 月 18 日（金）瀬戸市文化センター文化ホールにおいて多くの来賓、卒業生の見守る中、待望の記念式典を執り行うことができた。何より、生徒全員が学校の一員として参加できたことに大きな意義を見出すことができた。式典当日の生徒の活躍に触れてみたい。

早朝から生徒会役員とサポーター生徒が来賓・来場者の出迎え、案内・誘導を行った。前日リハーサルもあり非常に和やかで丁寧な応対ができ、来賓・来場者には大変好評をいただいた。式典においては代表生徒が「生徒誓いの言葉」を述べ、野球部全員がステージに立ち校歌斉唱をリードした。休憩をはさんで前述の「オーストラリア研修生徒派遣事業報告」をステージから行った。続く記念講演（講師：卒業生のタレント青木さやか氏）の中で、講師を中心とした座談会が企画された。卒業生３名（会社経営者、名古屋市議、本校教員）及び在校生３名がステージに上がり、パネルディスカッション方式で意見交換を行った。多世代にわたる登壇者から瀬戸高校への愛情がユーモアとともに語られ、会場は温かい雰囲気に包まれ、客席の多くの生徒も愛校心を新たにしたはずである。



【写真５】記念式典(校歌斉唱)



【写真６】記念講演座談会

３　考察

学校の主役たる生徒の周年行事への主体的な関りと活動が、学校全体の一体感を創出し、未来につながる学校活性化への糸口となりうる、という仮説から出発した本研究であった。結果的に100 年に一度という学校振興の機会をとらえ、いかに現役生徒の主体性と創意工夫を引き出すかという教職員らの工夫や指導そして熱意にも支えられ、生徒自身の高校生活を一層彩り、長く記憶に残る経験として印象付けることができたと確信している。

本校生徒は、人前に出たりリーダーシップを取ったりすることにおいて消極的な点が多い。しかし、それぞれに少しずつ役割や表現の場を用意して興味関心を持たせることで、一歩前に出ることができるようになる。自分も前に出ていいのだ、と感じさせることができる。できなかったことができるようになる、という経験を積ませることができる。

周年行事を機に学校の歴史と伝統に向き合いバトンをつなぐ重みと喜びを味わうことで、生徒一人一人が自信をもって主体的に活動できるようになったと感じている。

Ⅳ　結び

Ⅲで述べた取組以外にも、100 周年記念ロゴ、記念キャッチフレーズの応募が生徒から多数寄せられた。ともに校内選考を経てロゴは【図１】のとおり、キャッチフレーズは「大心の思い　100 年先も続く笑顔」が選定され、記念事業をとおして使用されることとなった。

とかく格式や緊張を求められる周年事業も生徒参加によって味付けされることで、極めて明るく元気の出る取組の連続となった。この経験を今後の本校教育活動にも生かしていきたい。「対話的で主体的な深い学び」の原動力として周年事業の記憶を残し、獲得したノウハウを日常の教室において再現できれば何よりの教育的効果と考える。

最後に、生徒・教職員だけでは困難でもあった一連の取組を支えてくださった松翠会（同窓会）およびＰＴＡ、そして地域の皆様のお力添えに深く感謝したい。



【図1】記念ロゴ

目次へ

研究主題	VT（総合的な探究の時間）における探究活動の充実		
副　　題	総合的な探究の時間を再定義する		
学 校 名	愛知県立春日井南高等学校	校 長 氏 名	蔭山　靖

はじめに

本校では「View Time」と称して総合的な探究の時間を実施してきた。しかし、その内容は各学年や個人の力量に任される部分が多く、学校全体での３年間を見据えた取組にはなっていなかった。令和４年度から２年間、愛知県教育委員会から指定を受けた「あいちラーニング推進事業」の主管校として授業改善を進めてきた。そして、推進事業終了後の本年度は、総合的な探究の時間の充実を目指して新たな研究に着手することになった。推進事業の終了に伴い予算配分がなくなったこともあり、この研究指定を受けたことで、充実した研究・実践を進めることができた。

１　研究の目的

(1) 本年度のVT（総合的な探究の時間）における探究活動の充実を図る。

(2) 来年度以降のVT（総合的な探究の時間）の計画・立案を行い、本校における探究活動の充実を図る。

２　研究の内容

(1) 教育課程における活動内容の見直し

今年度から探究活動の充実を図るために、以下の表のとおり展開することとした。

学年	名　　称	単位数	活　　動　　内　　容
1	View Time	1	身近な課題や、職業や進路について探究することをとおして、探究活動の基礎となる知識や考え方を身に付ける。
2	View Time	1	修学旅行の計画や、卒業後も取り組んでみたい課題について探究し、発表することをとおして、発信力を身に付ける。
3	View Time	1	２年次までの探究活動をもとに、卒業後も取り組んでみたい課題について個人で探究活動に取り組む。

(2) 本年度のVT（総合的な探究の時間）における探究活動の充実

昨年度の反省を踏まえ、探究活動を充実させるべく、以下の取組を行った。

ア　先進校からの学び

昨年度から引き続き、先進校を訪問したり、オンライン協議を実施したりして、探究活動についての研究を行った。その情報は、職員会議で全職員に共有した。

イ　探究活動の実践

従前のプログラムをベースにして、探究活動に新たに取り組むなどさまざまな実践を行った。

(ｱ) VT（総合的な探究の時間）における探究活動の実践

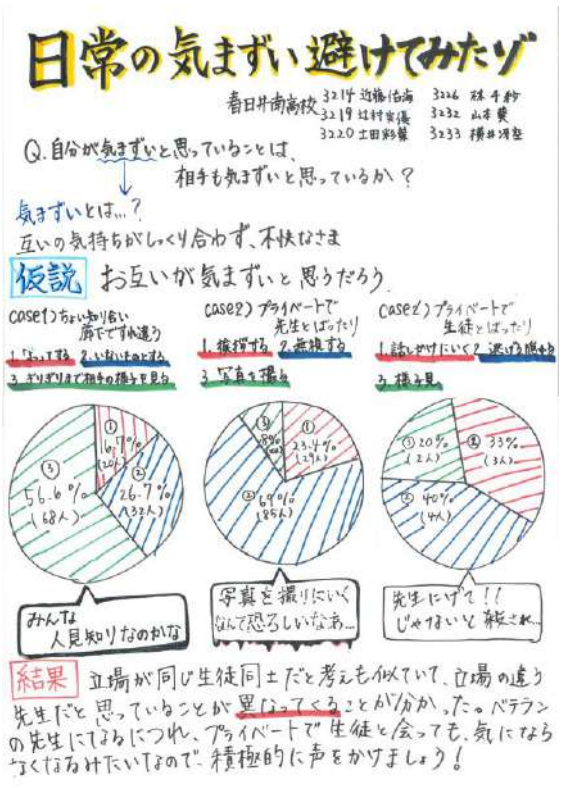
第１学年は従来のプログラム（自分の進路に関する探究活動）に加えて、新たに１学期から探究活動のプログラムをスタートさせた。夏休みの課題やその事後指導、３学期には新たな教材をもとに、探究の手法について学び、３月にはグループごとのアウトプット活動を行う予定である。

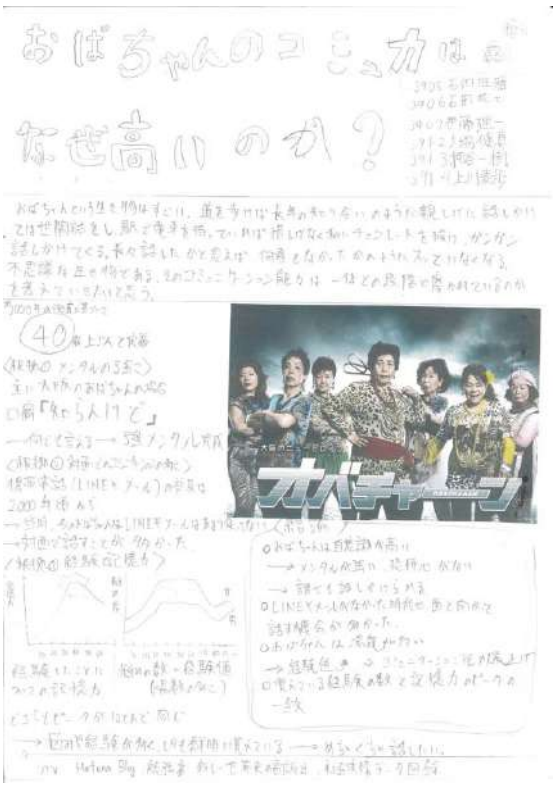

春日井南高校 39 回生　総合的な探究の時間
夏休みの課題【あなたの興味・関心は？】



第２学年は従来のプログラム（修学旅行に向けての探究活動、自分の進路に関する探究活動）に加えて、新たに１学期にグループワークによる探究活動のプログラムを実施した。

第３学年は新たに１学期に探究活動のプログラムを実施した。その成果を９月に行われた文化祭にて発表した。





に

、「業界探究講座」は、12月以降に企業訪問（インタビュー）等を４回実施した。

第１回　株式会社 mediVR（リハビリテーション医療機器メーカー） 取締役 COO／臨床支援部門長 村川 雄一朗 氏へのオンラインによるインタビュー 第２回　JICA 出前講座 海外青年協力隊員へのオンラインによるインタビュー 第３回　株式会社ユースエンジニアリング（春日井市内の IT 企業） エンジニア 田中 一輝 氏へのオンラインによるインタビュー 第４回　株式会社 アンドエイト（春日井市内のデザイン企業） 代表取締役 川口 大介 氏へのインタビュー

(ｲ) 他の授業における探究活動の実践

多くの教科・科目で以下のようなさまざまな実践を行った。

ａ　家庭科

(a) 選択科目「家庭基礎」において、名古屋大学の防災サークル「轍」の学生をによるワークショップを実施した。



名大の防災サークル
春日井南高生に授業
ワークショップ

春日井市如意申町の春日井南高校で2、4の両日、名古屋大防災サークル「轍」の学生らが防災ワークショップの授業を行い、3年生55人が災害に対して自分自身でどのような備えができるかを考えた。

同校では選択科目「家庭基礎」で自助・互助・共助・公助を学習。3年時には、非常時における防災知識を学ぶとともに、自分や家族の命を守るため自分に何ができるかを考える機会を設けている。

ワークショップは生徒と同じ若い世代である大学生らの防災への取り組みを聞き、「自分事」としてとらえる目的で実施。サークルに所属する大学生、大学院生計4人が両日、2組に分かれて参加した。小学2年生の時に東日本大震災で被災し、語り部活動に取り組む名大法学部4年の岩倉侑さんも4日に加わった。

地震、水害、避難生活の3グループに分かれた生徒たちは、能登半島地震や地元の庄内川の水害対策などを題材に、学生から防災減災のポイントや最新の知識を教わりながら意見交換。それを基に「何を備えるのか」を付箋に書き、模造紙に貼り付けてまとめた。

大学生の指導を受けながら災害への備えを考える生徒たち＝春日井市如意申町の春日井南高で（同高提供）

（2）来年度以降のVT（総合的な探究の時間）の計画・立案

校内に有志者による作業チームをつくり、計画・立案を行った。参加メンバーは先進校視察に参加した教員が中心となった。

作成した計画は以下のとおりである。

3年間の全体計画（案）

目標

		具体（成果物）
全体	未来につながる実行力	
3年	自己の未来を社会の未来につなげるための行動を起こす 進路実現への挑戦	進足報告（探究Ⅱ報告） 探究Ⅱ（ポスター・プレゼン）
2年	自己の未来をゼミ活動での学びをとおして社会の未来につなげる方法を構想する 実行力の基盤となるコミュニケーション力の向上（校外、異年齢）	進足動画 探究Ⅱ（ポスター・プレゼン）
1年	自己の未来を構想する 実行力の基盤となるコミュニケーション力の向上（校内ただし自分の属性を超え	進足動画 探究基礎（地図・動画） 探究Ⅰ（小論文・プレゼン）

←範囲大（校外、異年齢）　コミュニケーション力　範囲小（クラス内、校内）→

←社会（広・大）　目標設定力　自己（狭・小）→

←自律（難）　行動力　他律（易）→

	3年				2年				1年			
	3学期	2学期	夏休み	1学期	3学期	2学期	夏休み	1学期	3学期	2学期	夏休み	1学期
ねらい		進路実現 （行動力）	進路実現 （行動力）	コミュニカ完成 行動力（課題）拡張 続・推入試対応	行動力拡張 （表現力） 続・推入試対応	目標設定力養成 行動力養成 続・推入試対応	問題設定（自己の関心）開始 行動力（情報収集力） 続・推入試対応	コミュ力養成 行動力（課題）拡張	目標設定力養成 行動力養成 続・推入試対応	行動力養成 （情報収集・調査検証）	目標設定力形成 （自己の関心を発展） 続・推入試対応	コミュカ形成 心理的安全性の確保 目標設定力（自己の関心を発展）
コンテンツ	学校として進路決定者向けのコンテンツ開発が急務	進路探究 （自習） （面接指導） ゼミ続行	探究Ⅱ 最終発表 （コンテスト応募） 進路探究 （総・推対応） 高大接続イベント	探究Ⅱ 学年またぎで続行 ゼミ追足 （コンテスト応募） 総合型検討会議 小論講座開講？ 名刺交換会主催？ 「あの人に会いたい」	探究Ⅱ 中間発表 小論講座開講？	探究Ⅱ （ゼミ形式） 総合型検討会議	探究Ⅰ 最終発表 コンテスト応募 インターンシップ（A／J） 知の探究講座活用 高大接続イベント 補習→ゼミ（希望者） ※部活動探究	探究Ⅰ 学年またぎで続行 ※修学旅行・ゼミ準備 コンテスト応募 名刺交換会 進足企画 「あの人に会いたい」	探究Ⅰ 設定→行動→発表 総・推入試ガイダンス 総合型検討会議	探究基礎 共キャップ（時期変更）	アカデミック・キャンプ 高大接続イベント （修学旅行・ゼミ準備） 知の探究講座活用 高大接続イベント 補習→ゼミ（希望者） ※部活動探究	名刺交換会 進足企画 H R（他己紹介・内容有） 「あの人に会いたい」 「話し合いルール」提示 探究基礎
形態		個人	グループ→個人	グループ→個人 （クラス解体）	グループ→個人	グループ→個人	個人（仲間）	グループ→個人 （クラス解体）	グループ（クラス内）	グループ（クラス内）	個人（仲間）	グループ （学年、クラス越え）
進路行事	共テ	総合選抜 推薦選抜 第3回模試	夏季講座 第2回模試	スタサポ 第1回模試	模試	スタサポ 類型選択 模擬授業	（夏季講座廃止？）	スタサポ		スタサポ 学部学科研究 類型選択		スタサポ
学校行事	卒業式	文化祭	（文化祭準備）	遠足 体育大会 球技大会	（卒業式） 球技大会	文化祭 学校説明会 修学旅行	（文化祭準備）	遠足 体育大会 球技大会	（卒業式） 球技大会	文化祭 学校説明会	（文化祭準備）	遠足 体育大会 球技大会

【移行計画】

令和7年　3年生　令和6年度計画を踏襲（可能なものは実施）　※総合型検討会議は実施　／　2年生　上記計画案を可能な限り実施　※修学旅行、遠足は確定している行き先の範囲でVTの趣旨をいかす取り組みを構想する。　※教科書は詳細版を学年で購入（班別利用可能冊数）　／　1年生　上記計画案実施　★教科書を詳細版に変更

令和8年　3年生　上記計画案を実施

令和9年 完全実施

3　考察

本年度からVT（総合的な探究の時間）の中で、本格的に探究活動をスタートさせることができた。しかし、その内容については従前の活動の一部を修正したのみで、まだまだ不十分なものであった。

来年度から新たなVT（総合的な探究の時間）の計画を実践することになる。本校では前例にない取組も多かったり、詳細な部分まで決定していなかったりする部分も多く、不安な点も多々ある。しかし、失敗を恐れず、トライ＆エラーを繰り返しながら、本校でしかできない学びの実現を目指し、これからも全職員で取り組む体制づくりや学校全体で学び続ける雰囲気づくりに取り組んでいきたい。

おわりに

本研究により、生徒が探究的な活動の手法を理解し、それぞれの学習活動や学校生活、さらには将来的な大学での研究や就職後の実践に役立つことを期待したい。新しい学習指導要領において、高等学校での学びは探究的な活動が必須であることを鑑み、生徒の活動に対してご協力いただいた多くの企業・機関の方々にこの機会に感謝するとともに、これをきっかけにさらに校内の体制を整えていきたいと考える。

目次へ

研究主題	ＩＣＴ機器を利用した「主体的・対話的で深い学び」の推進		
副　　題			
学 校 名	愛知県立新川高等学校	校 長 氏 名	渡邉　紳太郎

1　研究の目的

先の予測できない未来を生き抜くために、生徒が学んだ知識を有効活用し、協働して困難な状況を解決していけるような授業研究を行う。ＩＣＴ機器の効果的な活用法を見出し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を充実させる。

2　研究方法

各教科で教科会等を利用し、効果的なＩＣＴ機器の活用について研究をした。１０月の公開授業週間では、全職員が１回ＩＣＴ機器を使用するようにした。また、研究授業（国語・地歴公民・数学・理科・英語）を５月と１１月に行い、成果を発表した。

3　実践報告

（1）国語　現代の国語

ア　単元

自分たちの「辞書」を作ろう

イ　目標

・身近にある「ことば」を、相手が正確に認識できるように意味や用例を表現することができる

・「辞書」作りを通して、語感を磨こうとしている

ウ　使用するＩＣＴ機器

教員用タブレット（ロイロノート）

生徒用タブレット（ロイロノート）

まぶしい【眩しい】　形容詞
①光が強くて、目を開けていられない。
例文…太陽の光が眩しい。
②相手があまりにも美しい、または立派なのでまともに見ることができない。
（比喩的）
例文…あの子の笑顔は眩しい。

図１　成果物

エ　成果と課題

教科書で「ことばがものをあらしめている」（鈴木孝夫「ものとことば』）という考え方を学んだので、生徒自身が普段身近で使われている「ことば」をどのように表現するかを聞いてみたくなった。他者へ伝えるときにどのように表現すれば、相手が認識できるかを意識させるため、適切な用例や工夫した点をロイロカードに記入させた。

学習指導要領には、「実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに、語句や語彙の構造や特色、用法及び表記の仕方などを理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。」とあり、辞書作りが語感を磨くことにつながると考えた。『舟を編む』（三浦しをん）の中で辞書が作られていく過程や、ことばに心血を注ぐ登場人物の気概を紹介し意識を高めた。

ＩＣＴ機器の使用場面はカードの作成時で、自分が考えた「意味」「用例」「工夫した点」「班で話し合ったあとに変更した点」「活動の感想」を記入させた。全員のカードを共有して、ロイロノートのアンケート機能を使って、「辞書としてふさわしい成果物」と「工夫があって面白い成果物」を集計した。全体の前で成果物やアンケート結果を提示することができたのは、タブレットだからこそできることで、以前のように

成果物を集めて大量の紙を使用していたことを考えると大変よい。また、色や写真を使って工夫もしやすいので、より伝え合うことを意識した活動となる効果があった。

「簡単そうなことばに見えても、いざそのことばの意味を考えてみると難しかった。ことばにはさまざまな意味があり、意味が違うと指していることも違うことが理解でき、コミュニケーションでいかにことばが大切であるかがわかった。」「ことばとは常に変化するもので定まらない。時代とともに変わっていくから、きちんと認識しなければと思った。」等、ことばについて真剣に考えたという生徒が多数であった。このような点から、目標としていた「相手の存在を意識して表現していくこと」と「語感を磨くこと」実行できる活動になったと考える。

次回は、もう少し難易度をあげて類語に挑戦させ、さらに語感を磨きたい。また、他の生徒の成果物の添削をタブレットで使って行い、表現の豊かさを味わわせたい。

（2）１年生総合的な探究の時間

ア　単元

「地域探究」清須市の推しをプレゼンしよう

イ　目標

・清須市の魅力や活性化方法をフィールドワークなどを通じて考え、市役所の方にプレゼンすることができる。

・他者と協働しながら、斬新なアイデアやＰＲ方法を考え、スライドを作成することができる。

・分かりやすく、人を惹きつけるような発表ができる。

ウ　使用するＩＣＴ機器

教員用タブレット（ロイロノート・パワーポイン）

生徒用タブレット（ロイロノート・パワーポイント）

エ　成果と課題

清須市の市政や歴史を調べさせた後、班ごとに、清須市を活性化するための方法を「清須市の推し」という視点から考察させた。秋には清洲城や朝日遺跡など市内のいくつかの場所にフィールドワークに出かけ、甲冑体験をしたり、職員や観光客に話を聞く機会も設定した。フィールドワークを踏まえて、自分たちの考えをさらに深め、市役所の方に発表するためのプレゼンを作成し、１班５分程度で発表した。

ＩＣＴ機器の使用場面については、まず、教員用タブレットから、ロイロノートで「本時の目標」を配信した。例えば、「清須市の推しを深めるために、あえて、清須市の弱点を考えてみよう」などである。具体例を示しながら、生徒に目標や指示を配信することで、従来行っていたワークシート作成や配布の手間が省かれ、効率よく授業を進めることができた。また、毎回の課題は、ロイロノートで提出させた。教員が班ごとの進捗状況を一目で確認でき、次回のアドバイスを個別に配信するなど、課題提出の面においても、ロイロノートは大いに役立った。

カード作成の場面においても、生徒は班で共有しながら課題を進め、ネットからも画像や動画を引っ張ってきて引用するなど、ロイロノートを上手く活用しながら課題に取り組めていたように感じる。

ＩＣＴ活用においての課題の１つ目は、ロイロノートよりもパワーポイントの方で生徒が発表用スライドを作成したことで生じた、教員のパワーポイント指導知識の不足問題である。生徒にはロイロノートかパワーポイントで発表スライドを作るように指示したが、背景画像やフォントの編集がしやすく、きれいなスライドを作りやすいパワーポイントを選択する生徒が多かった。班員間でパワーポイントを同時編集する方法などは、生徒の方が詳しく、生徒同士が主体的に教え合いながら行っているクラスも見られた。また、発表の際に、スマホで編集した動画を発表スライドにリンクさせていた班も複数あり、ＳＮＳ慣れしている生徒たちは無料の動画編集ソフトを活用し、人が興味を持つような面白い動画を作る能力にも長けていることが

分かった。動画編集に関しては明確なルールや指導をしていなかったので、今後の課題となった。

自分たちで課題を見つけ、その解決方法を考える取り組みを行う上で、ＩＣＴを上手く活用しながら行うことは、生徒の課題に対する理解度をさらに高め、発表するという面においても、表現する力が劇的に高まることがわかった。来年度以降も、効果的な方法を模索しながら総合的な探究活動を進めていきたい。





4　まとめ

ＩＣＴ機器を利用した実践で大事なことは、「主体的・対話的で深い学び」となることではあるが、そのようになるためには、授業を通して教員が自分の専門分野の面白さを生徒に感じさせ、さらに学びたいと思わせることが前提だと考えている。その面白さを伝えるためのツールとしてＩＣＴを効果的に利用していくことが求められている。今回のように成果物をもとに対話する活動や知恵を出し合って地域の課題を解決していく活動は、ＩＣＴを利用すればその効果は高くなる。これからも、「ＩＣＴは面白さを共有する手段」として活用できるような方法を、日々研鑽していきたい。

今年度は、プロジェクタを増やして全普通教室に行き渡るようにした。来年度は、プロジェクタの台を増やして各クラスに固定し、すぐさま使えるような環境にしたい。その他にも、スクリーンの増設や電子黒板を設置することで、ＩＣＴ機器の利用を加速させていきたい。

目次へ

研究主題	「主体的・対話的で深い学び」を実現するための探究的な授業づくり 課題解決探究学習に関する研究		
副　　題	生成 AI を活用した課題解決探究学習に関する研究		
学 校 名	愛知県立西春高等学校	校 長 氏 名	鈴木　達也

1　はじめに

情報社会の進展のスピードははやく、日々新しい技術やサービスが登場している。教科情報において授業内で取り扱う必要がある反面、指導者が正しい知識や技能を習得する時間や環境を作っていくことも難しい。そのため外部の教材を活用することで、生徒が主体的に課題解決を行う能力の育成につなげていきたい。

今回取り扱う生成 AI の単元は、近年急激に普及しているサービスであり、高校生にとっても日常的に使用できる一方で、その特徴やリスクを理解して活用していかなければならないサービスである。ソフトバンク株式会社が提供している AI チャレンジの生成 AI 活用を導入として利用することで、適切な活用方法や注意事項を、生徒も教員側も学ぶ機会となるような授業展開を研究していきたい。

2　授業計画

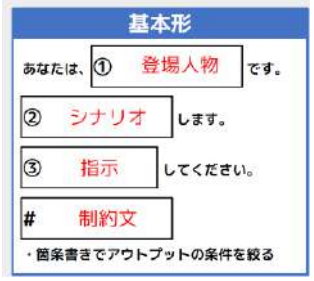
	学習内容	学習活動
導入	人工知能の基本的な概念の復習	機械学習やディープラーニングなど基本的な用語の確認を行う
展開	①生成 AI の特徴 生成 AI の歴史とできることを示す	・文章・画像・音楽生成 AI を実際に提示し、その特徴を示す ・これまでの Web 検索と何が違うのかを考える
	②生成 AI の利用 ・生成 AI を使ってみよう	・生徒が ChatGPT を操作する。表示結果に対して、自分の欲しい回答であったかを評価させる ・生成 AI（ChatGPT）の得意なこと、苦手なことは何かを考える
	・効果的なプロンプトの作成	・基本形を提示し、プロンプトを作成し、実行する。本人が作成したプロンプトや応答を周囲と比較し、効果的な指示の出し方を考える ・生成 AI がどのような場面で効果的に活用できるかを周囲と考える

	③生成 AI の活用とリスク ・生成 AI によるリスクをあげ、適切な対応を示す ・ファクトチェックの方法を考える	・生成 AI によるリスクを示し、実際に起きたトラブルからその対応策を示す ・生成 AI による応答をファクトチェックする際にどのようなことを行うとよいかを周囲と考える
まとめ	振り返り	Forms に今回考えたことや学んだことを入力する。次回の授業のはじめに共有する

３　授業を終えて

これまでの生成 AI の経験の有無についてアンケートを実施した。25%程度の生徒は今回初めて操作をしたとのことであったが、75%の生徒はこれまでに利用しており、そのうち 10%程度の生徒は日常的に利用していることが分かった。ChatGPT の得意なことや苦手なことを学習したうえで、得意な質問や苦手な質問を考えて入力させたところ、内部の情報を含むものや計算は正確に生成されなかったものも多く、生成された応答をファクトチェックする必要性があることを体験することができた。

（図１）



また、基本的なプロンプトの構文（図１）を説明し、「学力の向上にむけた提案」を生成してもらうためにどのようなプロンプトを作成するとよいかを考えさせた。提出したワークシートには、登場人物として高校生や受験生だけではなく、教師や塾の先生など指導する立場にしたり、指示を志望校や偏差値などを具体的な目標を示したりする生徒もいた。活用できる場面としては、「アイデアを提案するとき」や「第三者の意見がほしいとき」など自分が持っていないものを補完したいときに利用するといった記述が多く、ChatGPT が得意とすることを理解できたと感じた。また、「人には相談しにくいこと」を入力することでカウンセリングとして活用できると考えた生徒も多くいた。ただし、個人情報やプライバシーに関する情報など取り扱いに配慮のいる情報も含まれていることから、これらの情報の扱いについての指導をした。



生徒の振り返りでは今回学習したこと、生成 AI を利用する上で気をつけるべきことを Forms で記入させた。今回の学習を通して、生成 AI に苦手なことがあることを初めて知った生徒も多くいることが分かった。また、気をつけるべきこととして「他の情報と比較する」といったファクトチェックで大事な部分を考えることができた生徒がほとんどであった。また、「生成物に用いた AI ツールや周辺情報の添付を義務化する」といった生成物の二次利用における注意点まで気がつく生徒もいた。

４　おわりに

実際に生成 AI を操作し相談しあいながら学習を進めたことで、効果的な活用方法を考え理解できた生徒が多かった。また、指導者側としても初めて知る機能があり、外部の教材を活用することは双方にとって効果的であったと考える。今後は実際に作成した課題の確認作業や情報収集の場面で生成 AI を活用する授業計画も実施していきたい。

目次へ

研究主題	単管パイプ工作を用いて教育活動を活性化する研究		
副　　題			
学 校 名	愛知県立木曽川高等学校	校 長 氏 名	森　也寸司

1.　はじめに

昨今、教員の長時間労働が大きくメディアで取り立たされている。教員が忙しすぎることの原因として世の論調としては部活動や行事といった特別活動に原因があるとの認識が根強い。それに伴い、多くの学校では行事の縮小や廃止が行われている。それによって、その部分においては、教員の時間的な負担の軽減はなされるだろう。けれど、生徒自身が創意工夫をする機会や仲間と何かをつくりあげるという機会が失われ、同時に学校に対する帰属意識も失われていく。それは、生徒自身が所属する組織（学校、部活、クラスなど）に対して「自分の居場所」認識ができず、安心できる場を持つことなく日常を送らなければならないことに繋がっていく。居場所認識ができない空間においては、他者は仲間とは認識されず、その人間関係から不安が生まれ、メンタル不調へとつながり、様々な問題が発生していく。教員はそれらの問題に対して時間を割くこととなり、結局のところ教員の負担へと繋がっていく。そして、生徒も教員も所属する学校に愛情を持つことができず、負の連鎖が始まっていってしまうのではないだろうか。

この研究は、単管パイプを用いることで、学校内に正の連鎖をつくることを目的としている。単管パイプとジョイントさえ準備すれば、生徒は必要な用途に合わせ、レゴブロックを組み合わせるような感覚で、大きく丈夫な構造物を作ることができるようになる。大きくそして自分たちを包括できるような空間を作り上げることは生徒にとっては非日常であり、特別なものとなる。そんな特別なものを仲間と作り上げることで、一体感が生まれ、「自分の居場所」としての認識が生まれる。それによって生徒たちは安心感と自信を持ち、日常生活が送れるようになる。安定した精神はプラスアルファを生み出す基礎となり、次の活動へと繋がっていくものと考える。



2.　本校の生徒会活動

本校では、９月に学校祭、２月に予餞会、３月にクラスマッチの行事全てを生徒会執行部が立案、計画、運営を行なっている。その中には、様々な単位の組織が存在している。

学校祭

ステージ発表（有志）
クラス企画（クラス）
部活動企画（部活）
ブロック発表（学年の縦割り）

予餞会

ステージ発表（有志）
クラスビデオ（クラス）
部活動発表（部活）
思い出ビデオ（生徒会）
課題研究発表（総合ビジネス科）
ソーラン節（有志組織）

3.　実践内容

⑴クラスでの利用

本年度は文化祭にて２つのクラスが単管パイプを用いた企画を行った。図１のクラスはコーヒーカップと同じ構造の乗り物を作成し、図２のクラスはシーソー要素を含んだメリーゴーランドを作成した。

どちらのクラスも単管パイプを使用するという要素固定があったことで、他クラスよりも長期計画的な取り組みが見られた。図１のクラスは責任者が美術教員のもとを訪ね、構造上の問題や必要な材料、道具などを念密に打ち合わせていた。責任者の取り組みを見たクラスの生徒は、責任者を讃えるとともに、協力する姿勢が高まっていった。学校祭当日もこのクラスは、コーヒーカップを回す係、来場者を案内する係、映像で演出する係、周囲で歌を歌い盛り上げる係など、それぞれの生徒が自分の係の役割を全うしていた。一体感のある賑やかで楽しげな企画は当然のことながら最優秀賞を受賞した。

図２のクラスは過去に類似した制作をした卒業生にアポイントをとり、指導をあおいでいた。また、理系教科である担任の先生にも協力を依頼していた。このクラスは、クラスのメンバーがそのまま次年度に持ち上がるクラスの特性も踏まえ、来年度の文化祭において、今年度の企画のバージョンアップ企画を行うことをすでに決めている。



図１

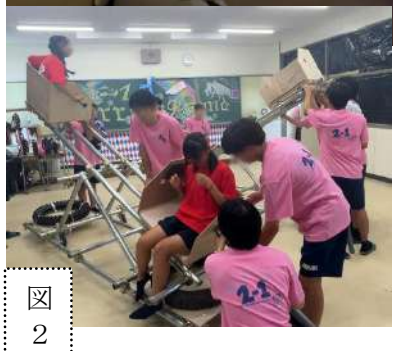


図２

⑵生徒会での利用

生徒会では、生徒全員を体育館に集めて行うオープニング行事と外部の来場者も招いた際に行う有志企画で使用する小ステージ及びランウェイを作成した。昨年度まではステージ上のみで行なっていたものが、せり出した小ステージで行われることで、オーディエンスへのファンサービスなどが行われることに繋がり、これまでにない盛り上がりをみせた。せり出したステージの特徴をいかしてファッションショーを行うなど、学校祭に新たな文化も誕生した。小ステージは、全校生徒からの要望の高まりが見られたため、２月に行う予選会でも作成することがすでに生徒議会で決まっている。その際には、長い単管パイプで柱を立て、クロスさせた櫓を作成し、ミラーボールを設置するなどの新たな形態を現在生徒会執行部が模索している。





4.　まとめ

単管パイプを用いた活動は、すでに生徒に根付きつつある。生徒からは、「単管パイプを用いて次は何を作ろうか？」と次を見据える発言が聞こえてくる。生徒会からは、来年度学校の予算で単管パイプを追加してほしいとの声もある。利用法がわかりやすく、丈夫な構造物が作られる単管パイプは学校教育への親和性が高いことが今年度の取り組みでわかった。現状の学校教育において生徒が自主的に活動できる機会を提供することができるのは、特別活動によるものが大きい。生徒が自らの意思で事をなし、達成感や経験から自信を得る事、仲間との絆を深めることは全日制高校において重要であることを改めて認識する機会となった。今後はさらに部活動や授業での使用を行い、より多くの生徒が利用体験を積める機会を設けていきたい。

目次へ

研究主題	生徒・保護者・地域のつながりを実感する		
副　　題	～尾西高校閉校にあたり「大団円」の完成へ～		
学 校 名	愛知県立尾西高等学校	校 長 氏 名	板垣　光保

はじめに

本校は今年度末で48年間の歴史を終える。閉校にあたり、生徒、職員が最後までモチベーションを高く保つため、保護者、同窓生地域と一体になって様々な行事を行い、つながりの実感を図った。

取組内容

地域に支えられた学校の歴史を振り返り、生徒と卒業生、地域の方々とのつながりが実感できる行事を実施する。その際に一体感を実感するためTシャツを作成し、閉校までの活動で着用して取り組む。

取組の過程

最終年度、生徒数は37名となり、職員も減少したが、尾西高校の最後を「大団円」を完うするとのスローガンを掲げ、気持ちを一つにして様々な活動を進めた。その一環で例年、学校祭で作成しているクラスTシャツを閉校記念Tシャツとして統一のデザインで作成しようとの企画が生まれた。更に、最終年度にあたり、卒業生や地域の方々と共に取り組む企画も進め、生徒、職員だけでなく皆で同じTシャツを着て、今年度の行事を実施しようとのことになった。５月に生徒よりデザインを募集し、クラスごとに色を変え作成した。７月球技大会、８月地域清掃ボランティア、９月文化祭・閉校記念行事、10月闊歩大会、11月地域清掃ボランティア、体育祭で生徒、職員、保護者、卒業生などの参加者全員で着用して活動を行った。

特に今年度、記念行事として、文化祭・閉校記念ステージ、闊歩大会を卒業生、地域の方々にも参加できる企画として進めた。文化祭・閉校記念ステージでは、地元町内会、市教育委員会などに働きかけ、地元公民館を一日借り切って開催した。設備が整った環境で前年までと企画を一新し開催した。生徒によるステージ発表に加え、本校卒業生の芸能人らの出演も実現し、平日にもかかわらず地域や卒業生ら150名ほどの参観者が集まった。公民館内に学校の歴史を振り返る展示スペースも設け、たくさんの見学者が訪れた。運営にあたっては、卒業生のイベント運営会社の協力もあり、職員の少なさが心配されたが円滑に進めることができた。参加者、運営スタッフが同じTシャツを着用し一体感が感じられた。





スギちゃん、閉校決まった母校訪問「まさか自分の母校が無くなるとは」在校生とのショットも公開

[2024年9月6日19時31分]

お笑いタレントのスギちゃん（51）が6日までにインスタグラムを更新。25年3月に閉校式を迎える母校・愛知県立尾西高校を訪問したことを報告した。

スギちゃんは「我が母校　尾西高校が今年をもって閉校になると言う事で在校生に会ってきたぜぇ　在校生は現在37人　みんな良い子達で皆様の後輩達だったぜぇ」とつづり、自身のショット、在校生との集合写真を投稿した。

「まさか自分の母校が無くなるとは思ってもみなかったぜぇ　色んな思い出話をして寂しさを噛み締めて　最後にみんなで校歌を歌いましょうと言う事で全員で校歌を歌ったぜぇ　懐い出し、覚えてるもので懐かしくもおもいっきり歌ったぜぇ！と在校生と校歌を歌ったことを記すも「3行目に突入したところで　ん？歌えない　忘れちゃったのか　ん？なにこれ、聞いた事ない歌詞に歌詞変わってる　誰も変わったとかは教えてくれないけど明らかに歌詞変わってる　えっこれ本当に母校？ってなったぜぇ　忘れたのか、変わったのか後輩ちゃんと歌ってなかったのか確かめてくれだぜぇ」と戸惑う様子を見せた。

「今日の思い出は忘れないぜぇ　在校生もラスト尾西高校生として誇りをもって最後まで楽しみまくって卒業して欲しいと思ったぜぇ　ありがとう我が母校、尾西高校！！！」と在校生を思い、感謝を述べた。


2024年(令和6年)11月12日(火曜日) 16

尾張版

闊歩大会 47年の歴史に幕

尾西高来春閉校 全員ゴール、晴れやかに

卒業生や元職員参加

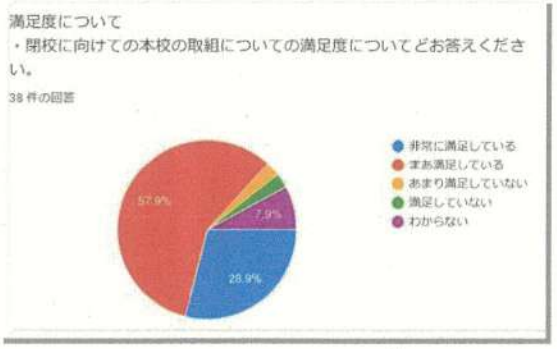
朝日西小児童出迎え

闊歩大会も生徒と卒業生などの参加者が安全に達成感を感じて終われるよう内容を変更した。参加者は出発地点を選択し、最長25㌔学校を目指し歩いた。14時に全員がゴールしてファイナルセレモニーを行うことができ、皆で一緒になって最後の闊歩大会を終えた。コース途中では地元の小学生によるお出迎えなど、たくさんの方々から応援を受けた。10月の平日にもかかわらず卒業生を中心に200名以上が参加し、会場受付や休憩場所の運営、交通整理などの運営ボランティアも50名ほど集まった。参加者、運営ボランティアが閉校記念Tシャツや闊歩大会記念Tシャツを着用し、尾西高校を核にしたつながりを感じることができた。当日の様子は新聞やケーブルTVでも取り上げられ、閉校に向かう取組としてアピールできた。

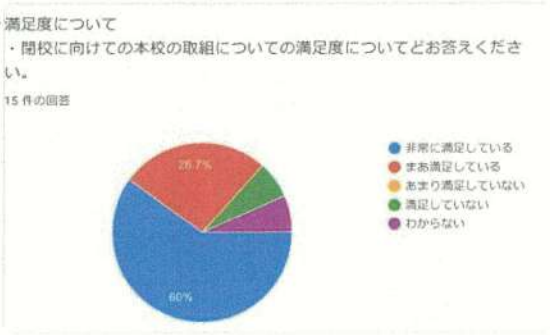
活動の成果

今回の取組は、本校が目前に抱える課題である「閉校に向かう中で生徒、職員のモチベーションの低下と活動の減退をどう防ぐか」への取組の一つである。

２学期末に学校評価アンケートの中で閉校に向かっての取組全般について、評価を行っている。取組の状況、広報活動、全体の満足度などについて聞き、生徒、職員共に肯定的な評価が８割を超



生徒満足度



職員満足度

え、充実感を得られている。取組全般について一定の成果を上げたといえる。

今回の取組について得られた成果について以下にまとめる。

１　ビジョンの共有とモチベーションの向上

生徒と職員が話し合い、Tシャツのデザイン等検討していく過程で、閉校を目前にしているという状況の認識と最後まで前向きな気持ちで進もうとする気持ちを高めることができた。さらに卒業生や地域の方々に配布し、着用してもらうことでそうした思いを校外まで広げることができた。

２　つながりの実感

以前から地域と連携した取組も行ってはいたが、一体感を感じられるものとは言いがたかった。今回、同じTシャツを着ることによって仲間意識も強まり、卒業生や地域の方々と生徒が会話し交流する姿が見られるようになった。ボランティアの方々やイベント運営会社のスタッフの方々が同

じTシャツを着て協力してくれている姿を見たり、様々な人たちと活動する中で直接関わることができ、周囲から支えられていることを生徒も職員も実感し、自己有用感の向上につながった。

3　地域へのアピール

ＨＰやインスタグラムによる発信に加え、地元のケーブルＴＶ局、ＦＭ放送への出演により閉校を迎える学校についてアピールした。その際に同じＴシャツを着用して一体感を持って取り組むことで大団円に実現に向かって進む姿を強く印象づけることができた。学校について家庭や地域で話題にされることも増えた。今まで学校と縁が遠かった卒業生も母校を再び訪れる機会を得られ、感謝の声が聞かれた。生徒や職員も周囲から応援され、注目されていることを実感し、自己有用感が高まった。



まとめ

地域と連携し、様々な活動に取り組むことでコミュニケーション能力などの社会性の涵養、自己有用感の向上などが期待される。しかし、共に取り組んでも交流がほとんど見られない場合もあった。同じ服を着たり、一緒に何か食べたりなど交流しやすくする仕組みを考えることで連携が深めることができると感じた。しかし、取組を活性化するためには財政的な裏付けも必要となる。学校マネージメントに関わる管理職は取組を支える道を模索しながら整えていきたい。今回、日本教育公務員弘済会からの経済的な支援に深く感謝いたします。



目次へ

研究主題	運動部活動の地域移行に関する地域人材との連携について		
副　　題	平日・休日の一貫指導のために外部指導員に伝えておきたいこと		
学 校 名	愛知県立津島北高等学校	校長氏名	永田　昌宏

はじめに

少子化の進行や、学校の働き方改革のため、学校部活動はその運営体制の改革を迫られている。また、文部科学省や県教育委員会の推進する「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方に関する総合的なガイドライン」では部活動の地域移行について言及している。

本校でも地域の生徒数減少による定員割れが常態化し、また、運動部活動顧問（以下、顧問）の時間外勤務が多い状況にある。そこで、本校における運動部活動の地域移行と、その実施に向けて必要な準備の要点を明らかにすることによって、生徒がスポーツに触れる機会を確保しながら、安全で円滑な部活動運営ができるよう、運動部顧問と運動部活動指導員・外部指導者（以下、指導員）との連携について考察することとした。

１　研究の目的

顧問と指導員の間で必要と考えられる生徒に関する情報交換の項目を明確にし、生徒が安全に、かつ円滑に部活動へ参加できる環境を整える。

２　研究の方法

(1) 部活動を指導員に依頼する場合に、顧問が指導員に伝えておきたい情報と、指導員が顧問から得ておきたい情報をそれぞれ聞き取り、意見の乖離について調査する。

(2) 顧問、指導員の双方が、運動に関する基礎的な知識や最新の技術などを専門家から得る機会として講習会や講演会を設定し、有効性（今後も実施したいか）を聞き取り調査する。

３　研究の内容

(1) 顧問が指導員に伝えておきたい情報と、指導員が顧問から聞いておきたい情報について、顧問６名、指導員６名から聞き取り調査を実施した。（　）内は想定される利用方法

① 氏名・年齢・学科・学年・クラスなどの基本的な個人情報（学年別の練習を実施する場合など）　顧問　６　指導員　３

② 生年月日・性別・住所・出身中学校などの、よりプライベートな情報（大会に参加申込する場合など）　顧問　３　指導員　２

③ 携帯電話番号・ＳＮＳのアドレス（ＬＩＮＥなど）などの通信のための情報（練習日時の急な変更連絡をする場合など）　顧問　２　指導員　２

④ 保護者の携帯電話番号・ＳＮＳのアドレスなどの緊急時連絡先情報（生徒のケガ・急病などの保護者連絡をする場合など）　顧問　２　指導員　１

⑤ 学期毎の評定・定期考査成績・模擬試験成績などの学力に関する情報（部活動と家庭学習の調整をする場合など）　顧問　１　指導員　１

⑥ その他　　顧問　１（生徒間の人間関係等）　指導員　２（生徒の競技経験・目標、顧問の活動方針、生徒の持病）

(2) 基礎的な知識や最新の技術の紹介として各分野専門の外部講師による講習会を実施し、運動部活動に参加する生徒へ、どのような講習会に参加させたいかを聞き取り調査した。

右上：①「熱中症からカラダを守ろう」
7/29(月)大塚製薬株式会社東海支店 伊藤栄一 様

左下：②「エアロビクス初級」8/19(月)・8/23(金) 株式会社アクトス 都筑啓太 様

右下：③「けが防止のためのテーピング講座」7/31(水)愛知医療学院大学助教 藤本大介 様







① 熱中症が起こる条件や、熱中症対策。　顧問 5 指導員 5
② ケガ予防の準備（ストレッチ、ウォーミングアップ）　顧問 4 指導員 4
③ ケガへの対処（アイシング、固定・圧迫、テーピング）　顧問 6 指導員 4
④ その他　顧問 0 指導員 1（ＡＥＤ講習会実施希望）

4 考察

(1) 顧問と指導員の生徒情報に関する認識については、アンケートの回答や聞き取り内容から両者に大きな違いは見られなかった。部活動の練習時間中に双方での話し合いが行われ、ある程度の共通認識が醸成されていることが要因だと思われる。

(2) 基礎的な知識や最新の技術の紹介については、顧問も指導員も入学時に全生徒に対して講習会などを通じて学ばせておきたいとの意見が多かった。中学校での運動部活動経験者でも、年齢相応な運動に関する基礎知識が不足していると考えている顧問・指導員は多い。

おわりに

研究をとおして運動部顧問と指導員の間には大きな意識の差が見られなかった。指導員を依頼する際には意思疎通の時間を確保すれば、指導上のトラブルを予防でき、また、熱中症対策やケガ予防の講習会などを実施すれば、生徒の充実した活動に還元できることが分かった。

今後は双方の意思疎通の機会や、講習会開催に必要な日程調整や予算計上などについて、顧問・指導員をサポートできる校内体制づくりを推進したい。

目次へ

研究主題	部活動における地域連携の取り組み		
副　　題	～新体操部の小中高連携から地域貢献へ～		
学 校 名	愛知県立阿久比高等学校	校 長 氏 名	橋元　直子

近年、高等学校の部活動は運営が大変難しく、急速に衰退へと向かっている。そんな中、部活動の地域移行が各地で叫ばれているが、成功した例はほとんど聞いたことがない。「部員の減少」「生徒にとっての部活動の意義の疑問視」「指導者の負担」など、活動を持続させるためには数え切れないほど様々な問題点を解決しなければならない。

本研究ではマイナースポーツの男子新体操部の価値を高め、小学校・中学校と連携する中で、地域に貢献し、求められる活動になるにはどうしたら良いかを考察した。

部活動を運営する上で、まず問題となるのは「部員数の減少」である。近年は中学校の部活動の廃止もあり、高校で部活をする生徒は著しく減少している。現状をみると、全国の「硬式野球部」の部員数は平成21年度では169449名だが、令和6年度には127031名まで減少している。「器械体操部」をみても平成24年度に3589名いた部員数が令和6年度には3016名まで減少している。他の部活動を調べてみても、ほとんどの部活動で部員数の減少がみられる。理由としては「少子化」「運動習慣の二極化」「家庭の経済格差」など様々な問題が絡み合っている。

次に「生徒にとっての部活動の意義の疑問視」だが、本来、部活動は学校教育活動の一環として行われており、興味と関心を持つ同好の生徒によって自主的に組織され、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動である。しかし、目まぐるしく変わっていく時代の中で、運動をすることよりデジタル機器を使用する機会が多くなってきたことや、地域のスポーツクラブで運動する機会が増えたこと、テレビゲームやSNSなどの娯楽が増えたことにより、部活動に対する必要性の有無が問われることになった。

「指導者の負担」をみても、部活動の顧問をする教員は多くのストレスを抱えている場合が多い。理由としては、時間的拘束が長いこと・専門性がないのに顧問を任される・手当などの経済的問題・保護者からのクレーム対応などの問題がある。また、教員の仕事自体が多忙化をしていることも大きな理由の一つである。

以上のように部活動が衰退していく理由は様々であるが、時代の流れに対応し、学校や地域から求められる価値の高い活動にしていかなければならない。

そのために、まず私が実践したのは、新体操という競技で勝つことよりも、生徒にとって活動自体が充実して楽しいと感じてもらうことである。部活動の顧問というのはどうしても目の前の練習や試合に目を向け、勝つことに重きを置いてしまいがちだが、生徒のニーズを徹底的にキャッチし、まずは勝つことよりもそのスポーツ自体を楽しみたい、仲間と青春を過ごしたいという気持ちを大切にし、「どうしたら今日の練習が最高に楽しいものになるか」に考えをシフトした。エアーマットという空気で膨らむマットを何本も導入し、初心者でもピョンピョン跳ねて技の練習ができるようにした。また、大型のトランポリンも常設し、アミューズメントパークのような施設を作った。さらには、体育館の壁に鏡を一面に貼り、演技の練習がいつでもできるようにした。このように設備面を整えることにより、辛くて厳しい部活動から、生徒が楽しみながら自主的に行う部活動へと雰囲気が大きく変わった。これにより、部活動を辞める生徒がほとんどいなくなり、部員数を大幅に確保できるようになった。また、新体操部が楽しいという情報を聞いて、毎年多くの部員が入部

するようになった。

しかし、これだけでは学校内の活動で終わっており、地域に対して何も貢献ができていなかった。部活動の地域移行の中でもっと地元の人々と関わり、お互いに協力し合うことによって、この活動はさらに良くなり、生徒のためにもなると考えた。

部活動の地域移行とは、これまで公立の中学校・高校で教員が実質的に無償で担ってきた部活動を地域のスポーツクラブなどに移行することである。まず 2023 年から、公立中学校の休日の部活動を段階的に地域移行し、高校についても同様の考え方を基に改革を進めようとしている。

地域移行の大きな課題として、「地域の受け皿」の問題がある。地域に移行した際に、子ども達の監督・管理をする指導者が、その地域にいるかどうかということである。地域によっては、教員よりもその部活動に関して高度なスキルを持った人材がいる可能性もあるが、多くの地域ではそうした人材を確保するのに苦労する事が予想され、指導者が全く見つからない可能性もある。

私は、平成２７年に阿久比町の総合型スポーツクラブに新体操クラブを創設させてもらい、地元の小学生を集めて指導を開始した。最初は週に１回、中学校の体育館を借りて、体操を楽しむ程度の内容であったが、次第に本格的に活動するようになり、今では、40 名を超える会員になった。

活動形態も少しずつ変わり、現在は阿久比高校生が地域の子ども達にボランティアで体操を指導する奉仕活動という形をとっている。高校生も年代の違う子ども達と接することでとても良い刺激を受けている。活動場所も阿久比高校へと変わり、学校自体も地域との連携を深めることができた。指導者の確保についても、OB や地域の新体操経験者に声をかけ、充実した指導体制がとれるようになった。また、阿久比町の総合体育館にも競技用のマットを２面調達し、活動の場を増やした。阿久比高校、クラブチームだけでなく、地元の新体操チームも活用ができる場とした。一部活動という枠組みを超えて、地域全体で関わり合いながら新体操をする形ができた。このような取り組みを継続することにより、小学校・中学校・高校・大学と新体操を続けた選手が、また指導者として阿久比町に帰ってきて、指導ができる環境を作りたいと考えている。そうすることにより、新体操という競技を使って地域の子ども達の教育に貢献することができ、地域の活性化につながると考える。

現在の愛知県の高校生の動向をみると、部活動に目的を持って公立高校に入学してくる生徒は非常に少ない。高いレベルの活動を求める生徒は、より施設の整っている私立高校へ入学することが多い。公立高校で部活動をする多くの生徒は「やらされている感」を持って活動をしている場合が多く、これでは価値の高い活動とは言えない。価値の高い活動とは、求める人の数が多いということである。一部活動だけで練習をしていても顧問・生徒の間でしか活動ができない。そこに地域を結びつけ、幼保小中高大、また保護者、OB、地域の応援する人などが一緒になって取り組むことによって、その競技を求める人の数が大きく増える。

阿久比高校新体操部では、毎年、発表会を開催し、そこには地元の新体操クラブ・小中学校・ダンスチームや OB など沢山の人が集まる。応援にきてくれる観客も３００人を超え、その輪は毎年広がっている。

部活を運営する上で、目の前の生徒に一生懸命になることはとても大切なことだが、それだけでは活動が飛躍的に大きくなることはない。大切なことは、関わっている人に「場を設ける」ことである。高校生が小学生に指導ができる場、OB が指導者として活躍できる場、様々な世代の人がそのスポーツに関わることができる場。このような場を設けることにより、これからの部活動の可能性は大きく変わっていく。

変化をすることは大変な労力と怖さがあるが、これからも勇気を持って取り組んでいきたい。

目次へ

研究主題	部活動運営		
副　　題	地域社会とのつながり		
学 校 名	愛知県立東浦高等学校	校 長 氏 名	塩沢　光

１　研究主題の理由

全県の公立高校志願者の減少傾向の中で、本校も定員割れが続いている。入学してくる生徒の自己肯定感が低く、自身の将来を見通せない生徒が多数在籍する。そのため、学校全体の活力が低下しており健全な教育活動が難しい環境になりつつある。そこで、サッカー部では、地域社会とつながりを持ち、いろいろな年代の方と接することで、生徒自身の心身の成長や、将来の進路選択の一助になるのではないかと考えた。また、東浦高校の魅力を発信し、学校全体に活力を生んで生徒募集につなげられればと思い主題を設定した。

２　研究仮設（実践の見通し）

地域社会とのつながりを持つことにより、生徒自身の視野が広がり、将来の進路選択も広がり、自己肯定感が増す。また、地域に本校のアピールをすることによって、東浦高校に魅力を感じてもらい生徒募集低下に歯止めがかかる。

３　研究の実際と考察（実践と検証）

本サッカー部の生徒になぜ、本校を選んだのかとアンケートを取った。内容は「中学校の先生に勧められたから。」、「近いから。」、「ここしか来るところがなかったから。」等で、ぜひ本校にて頑張りたいと思う生徒は非常に少なかった。そのため、いろんな活動を通して、本校に入ってよかった、部活動を続けてよかった、等の前向きかつ肯定的な感想を持って卒業していってもらいたいと感じた。

以下９点が本校部活動で取り組んだ実践である。

① クラブチーム：６チーム　中学校の部活動：４チームと合同練習や練習試合





そのほとんどを本校グラウンドにて行い、たくさんの保護者が来校した。試合だけではなく、本校の雰囲気などを感じてくれればと思い設定をした。また、本校サッカー部の一生懸命にプレイする姿を見て、ぜひここで一緒に活動したいと考えてくれたらと感じた。

② 地元小学生との交流

中学生の保護者だけではなく、小学生の保護者にも本校の現状を知ってもらいたいと思い、町内にあるサッカーのクラブチームとの交流を行った。交流の内容としては、本校生徒が１チーム１０人前後のコーチとなり、スキルトレーニングやミニゲームでのコーチング、ゲームでの対戦相手となった。





③ 保育園との交流

小学生を相手に上手に交流ができたので、保育園との交流にも試みた。





④ 東浦高校サッカー部チラシを地元企業への掲示

部活動だけでは、なかなか本校のことを知る機会が少ないと感じ、地元の企業にお願いをして、本校のチラシを貼ってもらうことにした。









⑤ いろいろな指導者との交流

サッカーの上級ライセンスを取得希望の方や、元プロクラブ監督経験のある方をお招きして、指導をしていただいた。普段と違う方に指導していただくことで様々な刺激を生徒たちが受けたのではないかと思う。





⑥ 多種目との交流

地元のスポーツ鬼ごっこのクラブチームとの交流を図った。このクラブは全国大会で優勝するほどのチームであり、多種目ながら何か生徒へ気づきがあると思い交流をした。子どもたち同士で楽しそうに交流をする傍ら、勝負ごとになるとお互い真剣に取り組みよい関係で行うことができた。サッカーにも通ずる部分も多く非常に有意義であった。





⑦ 東浦高校サッカー部通信作成

中学校のサッカー部顧問の方に、東浦高校サッカー部通信として、活動記録を送るなど本校サッカー部のことを少しでも知ってもらうアピールを行った。





⑧ 地元のボランティア参加

日頃お世話になっている地元に貢献できればと思い参加した。





⑨ SNS の活用

SNS もマネージャーにお願いし、本校サッカー部のインスタで情報を発信してもらった。





４　研究の成果

活動を進めていくうちに、生徒の表情はよりよくなっていった。アンケートを取ったところ「いろんな活動ができて楽しい。」、「小学生との交流があって、自分は子どもが好きなんだと再認識できた。将来は子どもと関わる仕事がしたい。」など、好意的な意見が出てきた。以前にも増して、いろいろな方々に見てもらっているという意識も出てきたのか、練習にも熱が入りいい循環が出てきたと感じた。

地元クラブチームや、中学校からも、練習試合の依頼が増えてきており、本校への関心も少しは増してきたのではないかと感じる。また、１０月に行った本校の学校説明会の部活動体験では、例年にない１０名を超える中学生が参加したのも少なからず影響があるのではないかと感じた。また、私自身もいろいろなつながりを持てるようになり、大変有意義であった。

５　今後の課題

しかし、中学生の進路希望調査を見ると、依然として本校の現状は好転しない。単年単発で行ってもなかなか効果があるものではないものと痛感した。今後も地域との密着を増やしながら、本校の魅力を発信し、学校全体が活気あるものになればよいと感じた。また、卒業後もサッカーに何かしら関わってもらえるよう、社会人、大学とのつながりも持ちながら活動の幅を広げていきたい。

目次へ

研究主題	多文化共生社会の実現を目指す中高一貫教育の構築		
副　　題			
学 校 名	愛知県立衣台高等学校	校 長 氏 名	杉本　明隆

0　はじめに

本校は愛知県教育委員会が推進する県立高等学校再編将来構想の一環である、中高一貫教育（地域の教育ニーズ対応型中高一貫校「外国にルーツのある生徒の能力、可能性を引き出す学校」（連携型））指定校である。本校は外国人生徒等選抜入試や地域性により多くの外国籍の生徒が在籍していることから、以前から取り出し授業や授業後の日本語教室などを行ってきた。

また連携する豊田市立保見中学校は、数十年前から外国にルーツのある生徒が多数在籍し、早くからそれらの生徒に対する教育を行い、実績とノウハウを持っている。本連携事業により中学校までの学びをさらに高校へと継続し、生徒の能力と可能性を引き出すことができると考えられる。

今回は高校の３年間のみならず中学校３年も加えた計６年間で目標を実現するために、愛知県教育委員会、豊田市教育委員会、連携校である保見中学校と様々な検討を重ねてきた。当初は、外国にルーツのある生徒に対する教育をどのように進めていくかに注力していたが、計画を立てていくうちに、対象とならない多数の生徒（外国にルーツのない生徒、全体の約７割）への対応も必要だと気付いた。

その結果、外国にルーツのある生徒のみならず全ての生徒に対し、以下のような基本理念、高校で育てたい人間像、高校における学びを設定した。

【連携教育における基本理念】

・日本語のみならず母語も活かした学びにより、外国にルーツのある生徒の能力を伸ばし可能性を広げる。

・多様な文化・思考などに日常的に触れることのできる生活環境のもとで、仲間との協働した活動を通して、多文化共生に向けた取組みを実践し、多文化共生社会を生きる力を育む。

【高校で育てたい人間像】

・自分自身が持っている全てのことばを活用して、思考、判断、表現ができる人

・多様な文化や言語に関心をもち、他者とのつながりを大切にしようとする人

・多文化共生社会の実現のために、新たな発想を生んだり、他者理解に基づいて行動したりすることができる人

【高校における学び】

・2024 年度より日本語及び母語を用いて、生徒の深い思考を引き出す授業として、リテラシーとコミュニケーションに重点を置いた学校設定教科「日本語」を２単位導入

・総合的な探究において、多文化共生をテーマとした学びと定期的に交流を行う。

1　連携初年度（2024 年度）の取組

本校の連携型中高一貫については、令和８年度に対象となる１年生を迎え入れることになるが、連携型の特性上、中学校における連携教育の成果を連携入試で図ることが条件となるため連携事業自体は既に本年度（令和６年度）から始めなければならず、実際には計画・立案しながら、授業を進めていくことなった。ポイントは以下の２点である。

（１）外国にルーツのある生徒に対する「日本語」の授業
（２）「多文化共生」をテーマとした総合的な探究の時間の授業

（１）外国にルーツのある生徒に対する「日本語」の授業

本年度より学校設定教科として「日本語」（計５単位）を設置し、今年度は「日本語Ａ」（第１学年、２単位）を行った。外国にルーツのある生徒に対しては、昨年度までは授業後（毎週火曜日）に「日本語教室」を実施していた。しかし、参加は任意であり部活動部員や意欲に乏しい生徒は参加することがなかったため、全員がしっかり取り組むことができる体制とした。学校設定「教科」としたのは、全ての教科の教員が担当できるようにするためである。

また教科名を「日本語」としているが、母語での思考も強化することが目標であるため、その方法を東京外国大学多言語多文化共生センター長である小島祥美准教授より指導を受け、従来の日本語だけの習得を目標とした日本語教育ではなく、母語も大切にした授業を行っている。

中心となるのは「プロジェクト型思考育成授業」と「多読」による授業である。

プロジェクト型の授業は、世界や身近にある問題を解決するためにどうすべきか、母語あるいは日本語を用いて考え、発表することで、思考力やプレゼンテーション能力の育成を図るものである。母語も使用するのは、思考する際に言語がブレーキとならないようにするためである。

また、「多読」は生徒の読書力に合わせた本（日本語で書かれたもの）を数多く読むことで、日本語能力の向上を目指すものである。

以上の２点に重きを置き、その時々のテーマや読んだ本のまとめなどをミニアルバムやファイルに集約し、振り返りと今後の記録としている。





（２）「多文化共生」をテーマとした総合的な探究の時間の授業

次に「多文化共生」をテーマとした総合的な探究の時間について、取り組みを紹介する。

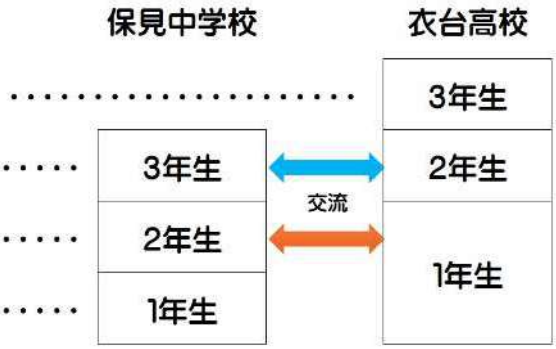
連携校との連携方法については、初年度である今年は保見中学校２年生（令和８年度入学予定学年）と衣台高校１年生で行った。連携校である保見中学校とは約７㎞の距離があり、公共交通機関による移動が困難であるため頻繁に生徒間交流を行うことができない。そのためオンラインで可能なものはオンラインで行い、共同で作業などが必要な場合は対面での交流とした。

交流のテーマや方法は以下に示す通りである。

衣台高校連携型中高一貫教育
～多文化共生社会の実現に向けて～　（案）

【生徒間交流】

段階	テーマ	内容
ステージ4	社会、地域に向けての提言	多文化共生社会を生きるために
ステージ3	問題提起、問題解決法探究	文化的同一性を問い直す
ステージ2	自己表現、相互理解	自己（自校）紹介、他者理解
ステージ1	自己理解	自分のルーツ、自国の文化を知る



令和６年度は保見中学校２年生と衣台高校１年生の交流のみ）

【交流会】

第１回　令和６年11月７日（木）オンライン交流会（於　衣台高校体育館、保見中学校体育館）

・交流事業の説明（衣台高校代表生徒による）
・保見中学生に対し、衣台高校の概要説明（同上）
・両校の発表（学校紹介）
・保見中学校卒業生と保見中学生との交流





第２回　令和７年１月 23 日（木）対面による交流会（於　衣台高校）

・「衣万博　ＫＯＲＯＭＯ　ＥＸＰＯ2025」

①各国ブース（ポスターセッション）

②スポーツ体験

③学校紹介（校内案内）









第３回　令和７年９月 19 日（木）対面による交流会（於　衣台高校）（予定）

２　今後の課題

日本語指導においては、学校における指導以前にＤＬＡ（文化的、言語的に様々な背景を持つ外国人児童生徒たちの日本語能力をマンツーマンによる対話で測る支援付き対話型アセスメント）を行わなければならない。入学する生徒の個々の能力はそれぞれ異なり、授業を進めていくうえでこの能力の把握が必要だからである。しかし、ＤＬＡを行うには専門的知識と経験が必要であり、これを本校職員が行うことは現段階では非常に困難である。すでに豊富な実践経験がある保見中学校との連携により、共同の研修等を通じて教員のスキルアップに努めなければならない。さらに「日本語」の授業のみならず一般教科においても、日本語能力と思考力の向上を目指した授業づくりを進めていかなければならない。そのためのユニバーサルデザインされた授業の推進も図っている。

また、全生徒を対象とした「多文化共生」教育についても、今まで両校で行ってきた総合的な学習や探究の時間の取組みを継続する必要もあり、新たに日程や時間を割くことが困難であるため、綿密な計画と連絡・調整が求められてくる。有効かつ、負担増とならない事業とするべく実効性のある計画・運営を心がけていきたい。

目次へ

研究主題	自ら学ぶ力を育成するための「成功体験の生かし方」と「振り返りの在り方」に関する研究		
副　題	「社会で光る『人間力』」を備えた人間性豊かな生徒の育成を目指して		
学校名	愛知県立松平高等学校	校長氏名	米津　利仁

1　本研究の全体の概要

下記の内容は令和７年度末までを見通して設定したものであるため、この度の助成を受けた今年度の研究活動で全てを実施することはできなかったが、それでもそれぞれの手だてに取り組み、その効果と課題を確認することができた。

(1) 本研究を通して目指す生徒像

成功体験を通して自信をもち主人間性豊かな生徒人間性豊かな生徒

(2) 本研究の仮説

学校の教育活動において、次の三つの手だてを行うことにより、生徒は学ぶことの楽しさと大切さを実感し、目指す生徒の姿に迫るようになるであろう。

ア　手だて１

「ＡＡＲサイクル」の実施（Ａ：Anticipation「学習の見通しをもつ」、Ａ：Action「学習方略を身に付ける、Ｒ：Reflection「学習を振り返る」）

①全教科の振り返りが集まる「松高ファイル」の考案

②教員からの、生徒同士の、地域からの様々なフィードバック

③「実践」から「振り返り」そして「新たな課題と目標の発見」とつながる本校生徒向けのサイクルの開発

上記①～③を踏まえ、授業、行事等の様々な教育活動において、生徒がメタ認知に臨む姿勢と資質・能力を高める。

イ　手だて２

様々な形による協働的な学び

①生徒同士による協働的な学びの機会

②教師と生徒による協働的な学びの機会

③地域人材と生徒による協働的な学びの機会

上記①～③を踏まえ、授業、行事等の様々な教育活動において、生徒が学習方略を考える姿勢、資質・能力を身に付ける。

ウ　手だて３

目的・目標の設定

①自己分析を通した「あるべき自分」「ありたい自分」とのギャップの認識

②自分と他者との関係性を踏まえた的確な目的と目標の分析

③「できること」を段階的に増やすための見通しの構築

上記①～③を踏まえ、的確な自己分析に基づいた明確な目的・目標の設定と管理の力を身に付ける。

(3) 仮説の検証

生徒アンケート結果及び抽出生徒の変容を複数の教員で確認した結果から、客観的に検証する。

(4) 研究成果の普及・還元

①本校の成果を愛知県総合教育センターに報告する。

②学校独自に研究構想等をまとめたポスターを作成し、研究の取組の発信に活用する。また、リーフレットを作成し関係各校に配布する。

2　令和６年度の研究報告

(1) 今年度の研究活動の概略

「平素の学校の教育活動で既に取り組んでいることの数々が、ＡＡＲサイクルを行う手だてとなるはずである」と考え、

①　学習時間及びその日の振り返りコメントを記述する個々の生徒の生活記録

②　クラスの日直が所見を記録するＨＲ日誌

③　主な行事ごとに生徒が記述する振り返りの作文

④　授業で単元ごとに学習内容をまとめて振り返るための振り返りシート

などを改めて見直すようにした。生徒自身が自分の取組等に客観的な価値付けをし、その時の振り返りに基づき、新たな課題や目標の発見につなげられるような工夫の在り方を模索した。

(2) 生徒の実態を踏まえた研究実践の具体

ア　生徒の実態

松平高校の生徒は素直で明るく、教員に対しても気軽に話すことができる生徒が多く、生徒と教員の距離はよい意味で近い。一方で、中学校では自分に自信をもって活動できなかった生徒が多い。

本研究を通して生徒が小さな成功体験を得られるような機会を設け、それにより生徒が自分に自信をもち、主体性を発揮できるようになり、更に人間性豊かな成長を促せるようにしたい。

イ　ＡＡＲサイクルの活用について

校内で本研究の内容やＡＡＲサイクルについて説明したとき、はじめは「こんなことが本校でできるのか」「こんな難しいことに取り組めるのか」という空気が漂った。そこで、「松平高校には既に生徒の可能性を引き出すための様々な取組がなされている。その効果をより高いものにするために、日々の教育活動で取り組んでいることをＡＡＲサイクル実施の手だてとしよう」という意味付けで、校内の共通理解を得た。

日々の教育活動の中で普通に取り組んでいる「学習時間などを書く生活記録」「日直が所感を記録するＨＲ日誌」「主な行事の後に生徒が書く作文」「授業で単元ごとに学習内容をまとめて振り返るための振り返りシート」といったものこそが、ＡＡＲサイクルの活用に最も適したものであると考え、それらの生かし方を研究することで、生徒の自ら学ぶ力を育成しようとした。

ウ　「生活記録」によるＡＡＲサイクルの実践例

体育祭において、小道具を使用した個別種目で優勝することを目標とした生徒がいた。この生徒は最初、目標を自分の言葉で示すこともできなかったが、ＡＡＲサイクルの発想による振り返りを通して「まだ準備が完璧ではない」→「○○○（小道具名）と仲良くなれた」→「○○○と心の距離が知事待った」→「○○○と大親友になった」→「本番では大丈夫」と小さな成功体験を残す振り返りを重ねた。その結果、目標通り優勝を果たした。

エ　「HR日誌」によるＡＡＲサイクルの実践例

学級日誌の横長の生徒所見欄の中央に横線を一本記入し、この線で仕切った上部の欄に「本日の目標」を記入し、下部の欄に「目標の達成度と振り返り」を記入するようにした。このような小さなＡＡＲサイクルの活用を重視し、継続することで、生徒の「目標を立てて振り返る活動」に対する意識が向上している様子が伺えた。

オ　授業の「振り返りシート」によるＡＡＲサイクルの実践例

ここでは、３年生の英語の授業でミニディベートを取り入れたときの取組を報告する。振り返りを実践する以前の生徒たちは「言われたことをやる」「宿題や課題をできるようにする」ことを目標に授業を受けている傾向が見られたため、本研究で振り返りを活用する際に、「言われたことより、自ら学びたいことを見つけよう」「自分が立てた目標について何度も振り返りを行おう」という２点について、生徒に伝えることを心がけた。また、「単元終了時の振り返りシート」から「毎時間ごとの振り返りシート」に生徒の意識がつながるようにするために、「毎時の振り返り」と「単元の終わりの振り返り」の２種類の振り返りシートを用いることとした。

ある生徒は、ある単元の振り返りで「合っていないあいづちを使っていたから、もっとその場に合うリアクションをする」と記述し、それを次の単元における毎時の振り返りの主観点とした。この生徒は次単元の振り返りの１回目で「あいづちは決まったものしか使えていないが、日本語と同じようにあいづちができた」と記述しており、前単元で決めた目標を意識することができるようになっていた。さらに４回目の振り返りでは、「人前で話すことになり、いつものあいづちが出てこなかった。緊張をほぐすためにも相手のためにもがんばる」と記述があり、あいづちの活用法にまで踏み込んで考えることができるようになっていた。その単元を終えたときのまとめの振り返りでは「どういう場面で新しく習った単語を使えるか考えて、身近のことから考えられるようにしたい」と記述しており、前単元の終了時に立てた目標と比べ、より質の高い目標を立てることができるように変容していた。

このような「振り返りを繰り返し行うことで、次の課題を生徒自身で気付くことができるようになった事例」が、いくつも見られた。

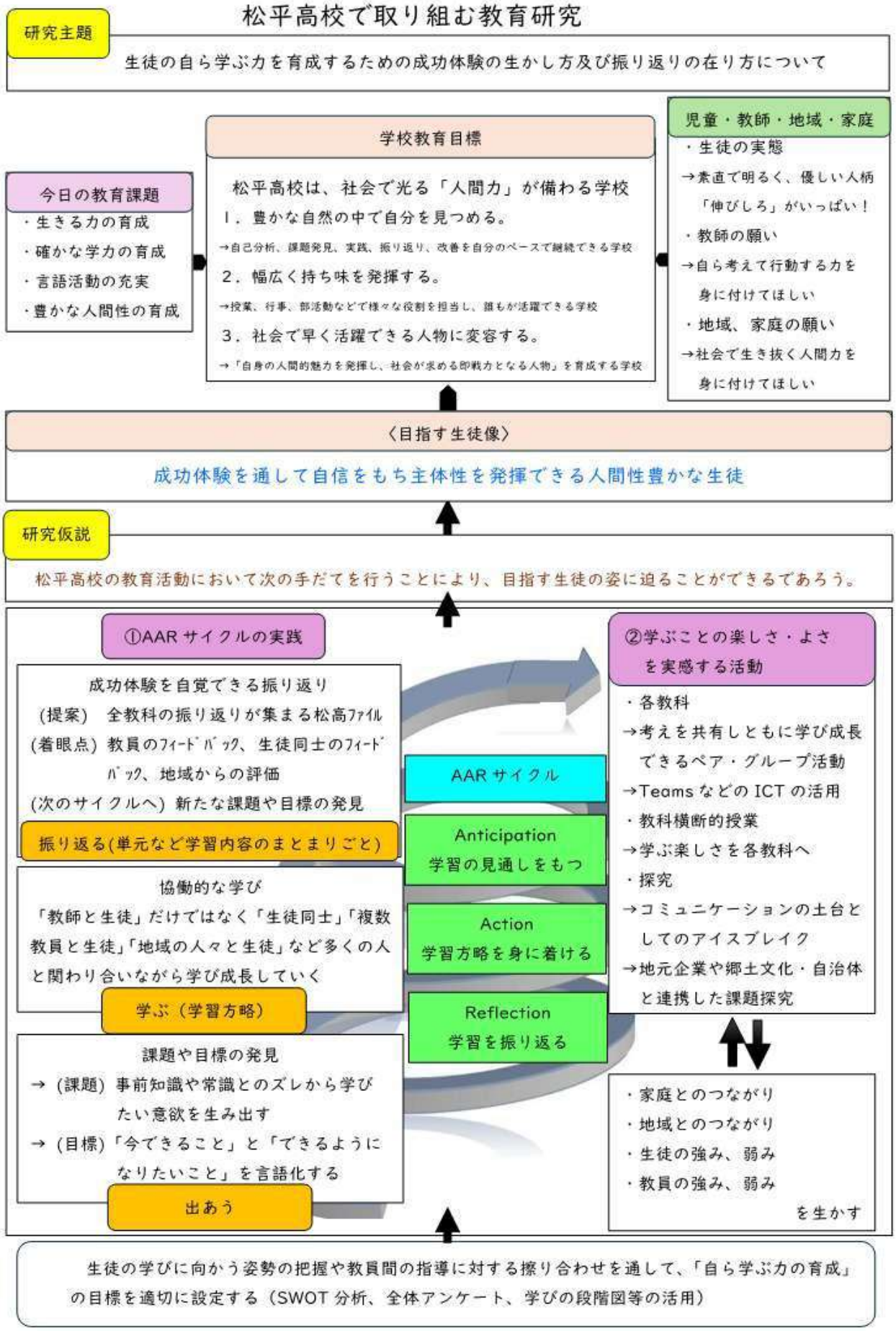
３　今後の課題

本稿の「１」で記載した研究内容の多くが、実践事例を重ねる段階で研究途上にあり、今年度では「データに基づく仮説の検証」など最も大切な総括のまとめには至っていない。それでも、本稿で示したいくつかの事例から分かるように、ＡＡＲサイクルの活用、的確な目標設定とそれを意識した振り返りの効果は、確実に見られている。

今後も「させられる学び」から「したくなる学び」への転換を学校全体で目指すとともに、学ぶことに対する喜び、学びを通して得られる成長を生徒が実感できるような指導法の改善に努めたい。

最後に、本研究は愛知県総合教育センター主催の研究調査事業「自ら学ぶ力の育成に関する研究」と研修事業「教育研究リーダー養成研修」と関連付けて取り組んだものである。本研究の推進に当たり、名古屋大学大学院の柴田好章教授、愛知県総合教育センター研究部の武田邦生研究指導主事から多大なるご支援とご助言を賜った。ここに感謝の意を表したい。

資料　本研究の構想図


松平高校で取り組む教育研究
研究主題
生徒の自ら学ぶ力を育成するための成功体験の生かし方及び振り返りの在り方について
今日の教育課題
・生きる力の育成
・確かな学力の育成
・言語活動の充実
・豊かな人間性の育成
学校教育目標
松平高校は、社会で光る「人間力」が備わる学校
1．豊かな自然の中で自分を見つめる。
→自己分析、課題発見、実践、振り返り、改善を自分のペースで継続できる学校
2．幅広く持ち味を発揮する。
→授業、行事、部活動などで様々な役割を担当し、誰もが活躍できる学校
3．社会で早く活躍できる人物に変容する。
→「自身の人間的魅力を発揮し、社会が求める即戦力となる人物」を育成する学校
児童・教師・地域・家庭
・生徒の実態
→素直で明るく、優しい人柄
「伸びしろ」がいっぱい！
・教師の願い
→自ら考えて行動する力を
身に付けてほしい
・地域、家庭の願い
→社会で生き抜く人間力を
身に付けてほしい
〈目指す生徒像〉
成功体験を通して自信をもち主体性を発揮できる人間性豊かな生徒
研究仮説
松平高校の教育活動において次の手だてを行うことにより、目指す生徒の姿に迫ることができるであろう。
①AAR サイクルの実践
成功体験を自覚できる振り返り
(提案)　全教科の振り返りが集まる松高ﾌｧｲﾙ
(着眼点) 教員のﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ、生徒同士のﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ、地域からの評価
(次のサイクルへ) 新たな課題や目標の発見
振り返る(単元など学習内容のまとまりごと)
協働的な学び
「教師と生徒」だけではなく「生徒同士」「複数教員と生徒」「地域の人々と生徒」など多くの人と関わり合いながら学び成長していく
学ぶ（学習方略）
課題や目標の発見
→ (課題) 事前知識や常識とのズレから学びたい意欲を生み出す
→ (目標)「今できること」と「できるようになりたいこと」を言語化する
出あう
AAR サイクル
Anticipation
学習の見通しをもつ
Action
学習方略を身に着ける
Reflection
学習を振り返る
②学ぶことの楽しさ・よさを実感する活動
・各教科
→考えを共有しともに学び成長できるペア・グループ活動
→Teams などの ICT の活用
・教科横断的授業
→学ぶ楽しさを各教科へ
・探究
→コミュニケーションの土台としてのアイスブレイク
→地元企業や郷土文化・自治体と連携した課題探究
・家庭とのつながり
・地域とのつながり
・生徒の強み、弱み
・教員の強み、弱み
を生かす
生徒の学びに向かう姿勢の把握や教員間の指導に対する擦り合わせを通して、「自ら学ぶ力の育成」の目標を適切に設定する（SWOT 分析、全体アンケート、学びの段階図等の活用）

目次へ

研究主題	ホワイトボード・ＩＣＴ機器を用いた深い学びの研究		
副　　題			
学 校 名	愛知県立岡崎工科高等学校	校 長 氏 名	久永　記央

1　はじめに

愛知県立岡崎工科高等学校は、1911 年（明治 44 年）に私立愛知工芸学校として設立されたのが始まりで、令和 4 年度に創立 110 周年を迎えた学校である。全日制と定時制があり、全日制では機械科、機械デザイン科、電気科、都市工学科、環境科学科、情報デザイン科があり、定時制では機械科がある。実習やインターンシップを通じて、ものづくりの基礎を身に付け、卒業生は西三河地域の製造業の担い手として活躍している。

2　研究の目的

主体的・対話的で深い学びを実現するため、ホワイトボードとＩＣＴ機器が個別最適な学びや協同的な学びにどのように活用できるのかを研究し紹介する。

3　研究の方法

(1) 授業の概要

・課題の提示

生徒に練習問題を提示し、ホワイトボードに練習問題の解答を書かせる。必要に応じてヒントやサポートを行う。

・発表とフィードバック

生徒の解答を発表する場を設ける。生徒が解答をホワイトボードに書き説明することでクラス全体で確認できる。教員はフィードバックを行い正しい解答例を示す。

・解答の共有

生徒の解答をタブレットで写真に撮り、Apple TV でクラス全体に共有する。自分と違う解法の確認や、練習問題への理解度の統一を図る。

(2) 使用機器

・ホワイトボード

アール・エフ・ヤマカワ株式会社　SHWB-5090BSWH

・ＩＣＴ機器（教材提示装置）

Apple Computer, Inc.　Apple TV 4K Wi-Fi + Ethernet モデル



(3) ホワイトボードとＩＣＴ機器を使った授業の違い

ホワイトボードを使い情報や概念を視覚的に表現することで、生徒が理解しやすくなる。リアルタイムの参加型の学習を促進するための有効な手段として使える。ＩＣＴ機器は視覚的な教材を用いることで授業の幅や理解度を広げられる。

ホワイトボードを使った授業	ＩＣＴ機器を使った授業
・リアルタイムなフィードバック 　生徒の反応を見ながら授業を進めることができ、質問があればすぐに答えることができるため、授業の進行を調整できる。 ・参加型の学習 　生徒が自ら書き込むことで、授業への参加意識が高まり、学びが深まる。 ・情報の整理と共有 　授業の流れを書き出し、全員が同じ情報を共有できる。	・授業の幅が広がる 　インターネットの調べ学習やリモート講義ができる。 ・生徒のモチベーションの向上 　効果的な動画や映像を利用できる。 ・効率的な授業ができ、教材の共有が簡単 　あらかじめ板書を用意できる。 また、デメリットとして、 ・ＩＣＴ機器の準備と導入コスト ・教材作成の手間がかかる ・生徒の想像力の低下　　がある。

4　授業実践

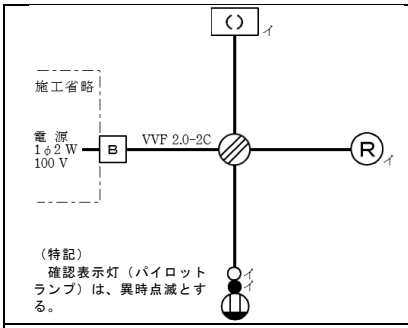


図１　単線図（2024 公表問題 No.10）

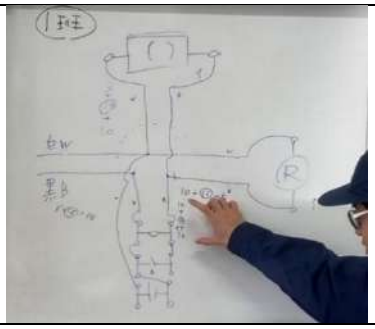


図２　１班　複線図を説明する様子

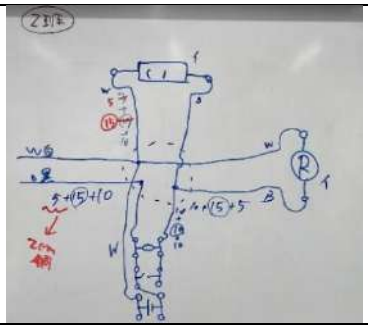


図３　２班　複線図

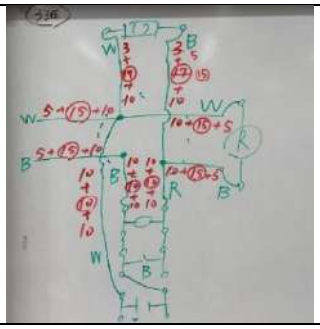


図４　３班　複線図

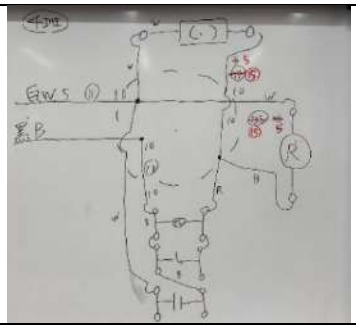


図５　４班　複線図

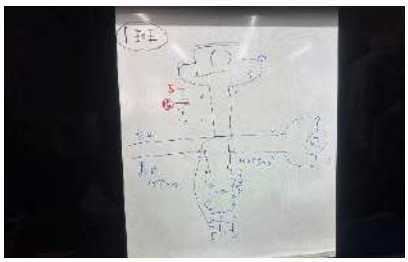


図６　Apple TV で１班を共有した様子

工業技術基礎の科目を利用し、1 年生 8 名に対して、単線図（図 1）から複線図に変換する課題を与えた。生徒は二人一組となり、議論をしながら解答をホワイトボードに記入した（図 2～図 5）。当初、複線図を誤って記入した班もあったが、議論の中で自分たちの誤りに気づき、すべての班が正答にたどり着くことができた。

その後、班の代表生徒に発表してもらい（図 2）、どのように考えたかを共有しクラス全体で確認した。その際、正答であるが説明のポイントが異なっていて興味深いという生徒の感想があった。また、ホワイトボードを複数枚使用することで考えを深めることができたと確認し、コメントおよび評価を行った。

今回は主にホワイトボードを用いた授業であり、教材提示装置 Apple TV（図 6）を活用できなかったが、教室でそれぞれ課題の解答を撮影しクラス全体に共有し、解法や練習問題への理解度の統一を図れることを確認した。今後も授業の方法を深めていく。

目次へ

研究主題	課題を探究し、学び続ける生徒を育成するための実践		
副　　題			
学 校 名	愛知県立知立東高等学校	校 長 氏 名	渡辺　喜長

1　はじめに

子どもたちがこれからの社会をたくましく生き抜き、持続可能な社会を実現していくために、高等教育では「主体性」「課題設定・解決能力」「論理的思考力」「表現力」「集中力・粘り強さ」「コミュニケーション能力」等の資質を身に付けさせることが期待されている[1)]。本校においてもクリティカル・シンキングで物事を捉え、自ら考え、課題を設定し、他者と協働しながら課題を克服する力、表現力を身に付けさせ、学び続けていく生徒を育成したいと考えている。

そこで今回それらの必要な資質を身に付けさせるために、第２学年の生徒を対象とし、調べてまとめるだけではなく、課題を見つけ、その解決に向けてグループで探究活動や発表を行わせている。「総合的な探究の時間」、「生物」の授業、自然科学部の３つの集団において、課題を探究し、学び続ける生徒を育成するための実践に取り組んだ。

2　実践の様子

（1）「総合的な探究の時間」における実践



図１グループでの活動の様子

第 2 学年の生徒約 350 名を対象に 2024 年 4 月～10 月にかけて大学での研究分野について調べさせ、平和学習なども取り入れ、生徒の視野を広めた。11 月に探究活動の専門家の講義をオンラインで受講させた。ワークシートにそれぞれの興味関心を書き出すところから始まり、課題を設定するための方法、問いをたてることの重要性を理解させることができた。

講義後の授業では、各クラスにおいて数名のグループに分かれ、それぞれの興味関心に基づいて問いをたて、探究テーマを設定した。各自のタブレットを活用し、それぞれのテーマについて調べ、どのように探究していくかを考えさせた。学年全体で８８グループとなり、科学、心理学、教育学などテーマは多岐に渡っている。現在も探究活動は続いており、生き生きと取り組む姿とともに、壁にぶつかった時にグループの仲間と話し合い悩んだり、発表資料を完成させる難しさに直面しながら試行錯誤を繰り返す姿も見られる。

2025 年３月に校内において口頭による成果発表会を予定している。3 月の発表会では自分たちの成果を発表し、達成感を感じてほしいと考えている。また、質疑応答を通して、他者とコミュニケーションを取り、新たな課題を発見し、学び続けていく姿勢を身に付けてほしい。

（2）「生物」の授業における実践

生物選択者 22 名を対象にさまざまな基本的な実験や観察を体験させ、その後に、生徒に疑問点をあげさせ、課題設定に取り組ませた。

「光合成色素の抽出」実験では、キャベツやクスノキなど身近な植物の葉を生徒が各自で持参し、葉緑素を抽出した。ＵＶライトを用いてクロロフィル蛍光を観察することもできた。生徒たちの提出したワークシートには「植物の種類によって、光合成色素はどう異なるのだろうか」「生物の蛍光や発光はどのようなものがあるだろうか」などの

問いが書かれ、課題を探究しようという姿勢がみられた。この２月にはウミホタルの発光の観察も行う予定を立てている。

「ウニの発生の観察」では、受精の瞬間や、プルテウス幼生などのさまざまな発生段階の胚を顕微鏡下で観察した。生徒たちの提出したワークシートには「精子が２つ未授精卵に入ることはないのだろうか」「なぜ受精膜が形成されると精子は侵入できなくなるのか」などの問いが書かれていた。



図２生徒が集めてきた葉

遺伝子組み換え実験も３月に行う予定である。遺伝子への興味関心を深めるだけではなく、組換え体の取り扱いや滅菌方法など正しい知識も身に付けさせたいと考えている。また、校外での実習も有効と考え、蒲郡市生命の海科学館での講義や実習を３月に計画している。



図３ カキツバタ植え付け

（３）自然科学部における実践

2024 年４月に生徒自身で関心のある課題を複数挙げ、その中から３つのテーマを選び、2 年生を中心に数人ずつのグループに分かれた。５月～11 月にかけ、試行錯誤を繰り返しながらも諦めずに探究活動を続けた。11 月から発表準備に取り組み、校外でのポスター発表、口頭発表を経験させることができた。



図４ 鳳来寺自然科学博物館

また、前年度から研究している外来生物の駆除後の有効利用策としての堆肥についての研究も並行して行っている。堆肥の研究では本校の校章や校歌にも取り上げられているカキツバタの栽培に利用できるかを試している。

視野を広げるために新城市での合宿も企画した。鳳来寺自然科学博物館において館内及び館外での専門家の講義を受けたり、海老川での生物採集のためのトラップを自由な発想で作成させることができた。



図５ 館外での講義

自ら科学的な課題を設定し、研究計画をたて、実験を行い、発表していく中で必要な資質を身に付け、課題を探究し学び続けていく姿勢が見られた。

３ まとめ

今回の実践では、課題を探究する力を生徒が身につけることができたかどうかを、生徒の活動の様子を観察し、ワークシートによる意見交換や口頭でのコミュニケーションを取る中で判断した。「総合的な探究の時間」、「生物」の授業、自然科学部のいずれの集団においても、多くの生徒が意欲的に取り組んでいた。特に、粘り強く探究活動に取り組み、発表まで到達することができた生徒たちは、ポスターや論文、パワーポイントを用いた発表資料の作成の難しさに直面したが、一生懸命取り組み、努力し続けることができた。課題を探究し、学び続ける生徒の姿を見ることができたと考えている。

４ 引用文献

１）中央教育審議会（第 140 回）配布資料 3-1 急激な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について 2024 年 12 月

目次へ

研究主題	校則見直しを通した生徒の主体性を促す取組		
副　　題			
学 校 名	愛知県立知立高等学校	校 長 氏 名	谷上　正明

1 研究の趣旨

平成30年に公示され、令和4年度入学生より学年進行で実施された現学習指導要領においては、「主体的対話的で深い学び」が提唱されている。その中には探究科目も設定され、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」が方向性として示された。また、令和4年には生徒指導提要も改訂版が出され、これまでの「させる」指導から「支える」指導への転換が重要になってきている。いずれもこれからの不確定な時代を生き抜く力を持った生徒の育成を念頭に置いたものであり、これまでの一斉型の詰め込み教育からの脱却を示唆したものであると解釈している。

本研究では、多くのアプローチがある中から、昨今ブラック校則などでマスコミにも取り上げられることが多くなった「校則見直し」に焦点を当てていく。校則の見直しを通して、生徒の主体性を促すとともに、新しい教育に向けた教職員の意識改革に取り組んでいく。また、取り組みを通してどのように生徒、教職員が変化したかを検証していく。

2 研究の概要

(1)教職員を対象とした現職研修実施

(2)代表生徒によるルールメイキング活動の促進

3 研究の実践

(1)稲沢東高等学校の教諭および生徒を講師とする現職研修実施について

令和６年7月 30 日(火)に、一般社団法人アスバシに仲介いただき、NPO 法人カタリバと愛知県立稲沢東高等学校の教諭および生徒による本校教職員を対象とした現職研修を実施した。

本校からは約 30 名が参加し、アスバシ小柳真哉さんの司会進行により、まずカタリバの藤本さんから東京の事務局からオンラインで参加いただき、ルールメイキングの意義や全国の取組状況等についてレクチャーを受けた。その後、稲沢東高等学校の坂元啓太教諭から「稲沢東高校のルールメイキング」と称して実践報告がされ、３ 年生に在学する生徒２名から、質問形式による対話を通して、より具体的な活動の説明を受けた。

この研修を通し、ルールメイキングとは単なる校則改定ではなく、生徒主体による探究活動の場であるとの理解を深めることができた。





(2) 生徒による定例ミーティング、地域生徒大会への参加について

第 2 学期に入り、生徒会役員を中心とした有志数名によるルールメイキング委員会が組織された。水曜日の午後を中心としてミーティングが開催され、現在も継続的に活動がされている。

自分たちが感じる校則についての違和感や友人からの助言など、自由な雰囲気での対話がなされ、参加した生徒の意識の高さを感じることができた。

また、令和6年 11 月 4 日(月)には「なごのキャンパス」(名古屋市名駅)にて、東海ルールメイキング地域生徒大会が開催され、本校から4名の生徒が参加した。当日は豊田市立逢妻中学校、愛知県立足助高等学校、大同大学附属高校、名城大学附属高校の皆さんによる事例報告、グループに分かれての活動報告やディスカッションが行われた。参加した本校生徒も他校から多くの情報を得ることができたようで、早速知立高校での活動に活かしていきたいと笑顔で語ってくれた。





(3) 生徒による全校生徒へのアンケート実施について

令和 7 年1月 14 日から 21 日まで、ルールメイキング委員会による全校生徒への WEB アンケートを実施した。内容としては、「今の校則について不満はあるか」「今の髪型の校則について不満はあるか」など、学校生活について具体的な質問がなされ、またその理由について問うものであった。回収したアンケートについては、すべての内容をホワイトボードに掲示し、生徒玄関に設置し内容を閲覧できるようになっている。今後は回答の内容を検討し、よりよい学校生活の実現に向け対話を進めていくつもりである。





4 今後の課題と展望

この 1 年を通して、教職員の意識改革、生徒主体による活動を目標に生徒指導部を中心として研究を進めてきた。しかし、まだまだ道半ばどころか始まったばかりである。教職員の理解も徐々に深まりつつあることは実感できるし、代表生徒も積極的に活動してくれている。しかし、生徒の主体性を引き出し、教職員が支える活動ができているとは言い難い。次年度以降も継続して研究、実践をしていくことで活動を充実させていきたいと考えている。

この研究は、まさしく探究活動であり、答えのない問いへの挑戦でもある。生徒と教職員が対話を繰り返し、熟議する過程を大切にし、共に未来に向かって歩んでいけるよう全力を注いでいきたい。

目次へ

研究主題	学校全体で取り組むユネスコスクール活動について		
副　題	豊橋南高校ができる地域社会貢献とは？		
学校名	愛知県立豊橋南高等学校	校長氏名	有賀洋之

Ⅰ　はじめに



本校は、普通科と生活デザイン科の併設校であり、各学年7クラスの全日制高校である。校訓（理想像）は「厳にして自由」で、昔ながらの硬派な応援団がある一方、スクールキャラクター「みなみん」（図1）が、学校行事を盛り上げ、学校のPRに一役買っている。なお、平成30年度には普通科内に教育コースが設置された。現在卒業生は18,000人に上り、東三河地域の政界・産業界・官界・教育界に多数の優秀な人材を輩出し地域に貢献している。（図1）

Ⅱ　研究のねらい

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関 United Nation Educational,Scientific and Cultural Organization）は1946年に設立された国際機関である。そのユネスコ憲章前文において「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とユネスコの理念が謳われている。この理念を学校現場で実践するために1953年に発足した国際的なネットワークがユネスコスクールで、この理念や目的を学校のあらゆる面に位置付け、児童・生徒の「心の中に平和のとりでを築く」ことを目指している。令和6年4月現在、国内では1173校が加盟し、本県では83校が加盟している。本校は平成30年度にユネスコスクールの加盟申請を行い、現在（令和6年度）に至るまで、キャンディデート（加盟準備段階）である。本校ではその後、ユネスコ委員会を発足させ、各クラスの代表が協力し高校生として何ができるかを主体的に活動することを目指した。しかしながら、この活動は本校としては一部の生徒の活動に限定され、本来のユネスコスクールの本旨とは一致しないとの意見が本校職員から挙げられていた。そこで、学校全体としてユネスコスクールの活動を意識できる方法はないかと考えた。

Ⅲ　研究の内容

本校の教育活動を改めて見直し、その活動内容及び主管分掌を以下のように位置付けた。

1　活動内容

(1) ユネスコ委員会

フードバンクの活動として、職員・生徒から食品等を回収し、NGO団体に寄付することができた。これらの活動は生徒自ら現状や課題を調べ、行動することができた。また、ユネスコ委員会の活動を全生徒に周知するため、文化祭にてポスターセッションを行った。

(2) 教育コース

教育コースの学びの一部を地域社会貢献と加盟校どうしの交流と位置づけ、以下の活動を行った。

①小学校運動会サポート活動（写真１）②絵本読み聞かせ活動（写真２）③地元の図書館（ミナクル）での夏休み教室（写真３・４）④宮城県気仙沼高校、沖縄県立那覇国際高校等との交流学習（写真５）



（写真１）



（写真２）



（写真３）



（写真４）



（写真５）

(3) 生活デザイン科

豊橋市からの呼びかけに応じ、小学生に対する料理（お菓子作成）教室の開催（写真６・７）。



（写真６）



（写真７）

(4) 応援委員会（応援団）

普段の活動は、離任式、部活動壮行会、中学生体験入学等での主に自校生徒に対する応援演舞披露であったが、名古屋ウイメンズマラソン（写真８）や地元豊橋で開催される穂の国ハーフマラソン（写真９）での応援演舞や近隣小中学校での応援演舞（指導）（写真 10）をとおして地域への貢献も積極的に行った。



（写真８）



（写真９）



（写真 10）

(5) ボランティアグループ「のはな」

本校近くにある豊橋市表浜海岸は絶滅危惧種に指定されているアカウミガメの産卵地の一つとして有名であり、生徒有志で構成されるボランティアグループ「のはな」はアカウミガメの保全活動に積極的に参加した。

2　主管分掌

本校がユネスコスクール加盟の契機となったのは平成 30 年度に開設された教育コースが国内外の高校との交流を円滑に展開するためもあり、当初は教育コース主任がユネスコスクールの活動・渉外業務を一手に担当していた。しかし、学校全体で取り組むために、主管分掌を生徒部特活係とし、上記の活動の取りまとめを行うこととした。これにより、本校の幅広い教育活動にユネスコスクールの理念を再確認させるきっかけとなった。

Ⅳ　成果と課題

以上の活動をとおして、生徒から挙げられた感想としては、

○私たち一人一人が社会の一員であるという自覚を持てるようになった。

○地域の小学生との交流をとおして、この活動が地域につながっていることが実感できた。

○フードバンクでの成果をNGO団体に寄付することができ、自分たちの存在意義が確認できた。

以上の意見が、ユネスコ委員会の生徒のみならず、教育コース生徒や生活デザイン科、応援委員会生徒やボランティアグループ「のはな」からも聞くことができた。今後は「総合的な探究の時間」を活用し、より学校全体の活動として広めていきたい。そのためのよりよい組織・運営方法の模索が求められる。

Ⅴ　まとめ

日々の特色ある教育活動をとおしてユネスコスクールの理念を意識づけることこそ、豊橋南高校らしい地域社会貢献といえる。今後ともユネスコスクールの理念である生徒一人一人の心の中に平和のとりでを築く努力を続けていきたい。

目次へ

研究主題	生成AIは教員業務の支援ツールとして活用できるか		
副　　題	校務における生成AIの活用法を探る		
学 校 名	愛知県立小坂井高等学校	校 長 氏 名	本多滋明

1　研究の方法

6月下旬に、ICT支援員を講師として生成AIの活用に関する現職研修を実施した。この研修において本研究の概要を教職員に説明し、職務における活用事例の報告を依頼した。

約10名の教職員から生成AIに関する新たな利用届出があり、これらの教員を中心に、書籍やWeb上の資料、動画、他校の取組事例などを参考にしながら、校務における活用を試みた。

主に利用した生成AIは、CopilotやChatGPT、また研修時にICT支援員が紹介したWebアプリなどである。

2　研究の内容

生成AIの活用に取り組んだ教員から、以下のような活動事例の報告があった。

(1) 教員と生徒による対話形式の考査問題文の生成

教科書の内容を読み込ませて会話形式の問題本文を作成、それを用いて考査問題を試作した。

(2) アンケートの質問項目とその選択肢の作成

生徒を対象としたアンケートの質問項目と選択肢のたたき台案を作成させた。

(3) 各種アンケートの自由記述部分の要約の作成

アンケートの自由記述部分など、情報量が多い文章について、着目するキーワードや集計の仕方を指示して要約させた。これにより、回答を効率的に整理することができた。

(4) HTML命令文の生成

旧ホームページから新ホームページへ遷移させるためのHTML命令文を生成させた。HTMLに関する知識が全く無くても可能であった。

(5) 各種ソフトウェアやアプリの使用法を示させた

・Excelの関数やマクロのプログラムコードの生成

・PDFファイルのパスワードの設定方法

(6) WordやPDFのデータを数値として認識させ、Excelに表形式で出力し、グラフを表示させる。

(7) 会議出席者の氏名および役職に基づいて座席表を作成させ、Excel形式で出力する。

(8) 発出文書やメールの文案の生成

(9) 周年行事記念基金の規約文案の作成

基金の各条項案を出力させ、それを基に詳細を検討した。

(10) 文章の校正と修正案の提示

誤字脱字のチェックや文章表現の修正案を提示させる。修正前と修正後を併記させ、校正の理由も示すように指示することで、元の文章との比較検討が容易となる。

(11) 音声による文字入力や文字への変換

WordやExcelの「ディクテーション」や「トランスクリプト」機能を利用して、音声で入力したり、音声データを文字に変換する。変換の精度も高いため、入力作業の効率が向上する。

3　まとめ

本研究をとおして、生成AIは工夫次第で教員の職務を支援するツールとなる可能性を持ってお

り、積極的に導入する意義があるものとして考えることができるようになった。

また、実際に利用する際の注意点として、生成 AI は最新の情報を反映していないことや、誤った情報を出力するリスクがあること、さらに学習をさせない設定でも入力内容は 30 日間データサーバーに保管されるため、個人情報や機密情報は入力しないよう留意する必要があること、そして生成された成果物の使用責任は利用者にあるため、出力結果は必ず確認し、必要に応じて適切に修正した上で利用することが重要であることなども確認することができた。

今回の研究は、校務における生成 AI の活用方法を探る中で、教員としての「より効率的な働き方」を考えるうえで大変意義のある機会となった。今後も他校や他県での取組事例も参考にしながら、その活用の可能性や将来性を探っていきたい。

目次へ

研究主題	生涯にわたって主体的に学び続ける生徒の育成について		
副　　題	課題解決型学習を通した「主体的・対話的で深い学びの実現」		
学 校 名	名古屋市立若宮商業高等学校	校 長 氏 名	山口　大二

１．課題解決型学習計画の策定

名古屋市立高等学校の単独商業高校並びに商業系列を有する３校は、昨年度より「ナゴヤ・コンパス・プロジェクト」の指定を受け、探究的な学びを進めることの意義や方法についての研修を積んできた。本校においては、デザイン」「観光」を通じた探究的な学びの実践を計画した。今年度は授業を通じてビジネスマナー・コミュニケーションなどの社会人基礎力、社会に求められる実践的・専門的なスキル、社会の変化に対応できる柔軟な発想力、自ら課題を発見し、解決していく能力を高め、最終的に「主体的に未来を創造し、社会に貢献できる人財を目指す」本校の教育目標の生徒像につなげるべく、実践研究を行った。ここでは、「デザイン応用」を通じた取り組みを紹介する。

２．３年デザインキャリアコース「デザイン応用」を通じた取り組み

デザインコースの生徒は、２年次科目「デザイン基礎」で色彩や配色、レイアウトについての知識・理論及びアプリケーションソフトの Photoshop や Illustrator の基本的な操作を学んでいる。

３年次のデザインコース「デザイン応用」はその上位科目であり、手書きによるレタリング、地域イベントをテーマとしたポスター・タイトルロゴ制作、ランプシェード「和紙の灯り」制作（写真１）といった題材に取り組んだ。



和紙の灯り展

名古屋市天白区役所からの制作依頼では「天白区民まつり」のタイトルロゴを題材とし、実践的な知識・技能の活用を目指した。３年次デザインコースの科目の特徴は、これまで学習してきた知識・技能を実践的にどのように活用するのか考え、表現し、自らどう作品と向き合っていくのか学ぶことにある。依頼主の意図を生徒が読み取り、その表現を考えるとともに、デザインとして完成されたものでありながらも自分らしさを表現することも目標とした。また、授業で学んだことを活用しながら、さらに発展的な技法が必要となる場合もある。創意工夫してより精緻な作品にすることで自らの課題解決力育成にもつながった。



天白区民まつりロゴ　優秀作品

授業では、完成した天白区民まつりタイトルロゴの作品鑑賞会を開催し、自己及び他己評価を行った。生徒が自分の作品について表現したかったことを発表し、他者からの評価を得て、自ら振り返るという「主体的・対話的で深い学びの実現」につながった。また、他の生徒の作品を鑑賞することで、自分にはない表現や工夫､感じたことを記述しながら鑑賞することで｢考える鑑賞」を目指した。



マスコットキャラクターの
制作に関する外部講話

３．取り組みを通じて得たこと

教員は誰しも前年度踏襲に陥りがちであるが、実社会に求められるスキルがどのようなものであるか、また､これまでの教員としての経験をいかに融合するかを考えるきっかけとなった｡上記の課題解決学習を通じて、生徒自らが課題発見・解決することを促す「ファシリテーター」としての資質の飛躍的向上が見られた。他の教職員とこれらの経験を共有することで、学校全体に「課題解決型学習」の意義や方法を進めていく所存である。



商品開発に関する
事業所見学



事業所と共同で
開発した商品



併設する特別支援学校生
徒と協働した販売実習



開発した商品を
紹介するＰＯＰ

目次へ

研究主題	やりたい遊びに夢中になって取り組む子をめざして		
副　題	自分なりに考えたり工夫したりする姿を捉えて		
園　名	刈谷市立日高幼児園	園長氏名	二木　歩見

1 はじめに

保育の質の向上が求められる中、幼児の主体性を大切にした保育が重要視されるようになってきた。幼児の主体性は、目的をもって考えたり工夫したりして遊んでいるときに発揮されるものと考える。そこで、今年度は、自らやりたい遊びを見つけて「こうしたい」という思いをもち、その実現に向けて考えたり工夫したりしながら、夢中になって遊ぶ幼児の育成をめざし、そのための環境の構成や保育者の援助について明確にしていくことにした。

2 研究の方法

○ 幼児が目的をもって遊びに取り組んでいる姿を、写真や動画を使って記録にとる。
○ 記録をもとに、職員間で、気付いたことや疑問に思うこと、迷うことなどを話し合う。その際に幼児の思いや保育者の関わり方、環境の構成をポイントに意見を出し合う。
○ 話し合う中で分かったことや、幼児が夢中になって遊ぶ姿を支えた環境の構成や保育者の援助について明確にする。

3 めざす幼児像

○ やりたい遊びを見つけて繰り返し楽しむ子
○ 自分なりの思いやイメージを広げて遊ぶ子
○ 目的をもって遊びに取り組み、考えたり工夫したりして最後までやり遂げる子

4 研究の内容

○幼児の内面理解をする
・つぶやき、表情、動き、視線などから、幼児の思いや興味、関心を読み取る。
・幼児と一緒に遊ぶ中で、どんなことを楽しんでいるのか、何に困っているのかを捉える。

○夢中になって遊ぶことができるようになる環境構成の工夫をする
・やりたい遊びが見つかったり、やりたいことが実現したりするように、幼児の興味、関心、発達に合った教材の提示や出合わせ方の工夫をする。
・やりたい遊びが満足いくまで遊び込める物や時間、場所の保障をする。

○夢中になって遊ぶことができるようになる保育者の援助の工夫をする
・もっとやってみようと思えるように、幼児のしていることを面白がったり、幼児の気持ちに共感したり、認めたりする。
・幼児の思いや考えを受け止めながら、一緒に考えたり、幼児では気が付かないポイントに対してタイミングを見計らって投げ掛けたりする。
・目的がはっきりするように話を整理したり、友達と思いが共有できるように橋渡しをしたりする。

4 実践

事例1　3歳児　9月　「ピンポーン、アマゾンです」

ままごとコーナーのキッチンで遊んでいたU児が「いらっしゃいませ」と言う。保育者が「お腹すいちゃったからお買い物に行こう」と言ってU児のところに行くと、U児はパンに見立てたものを、「どうぞ」と言って保育者に渡す。①保育者は渡してもらったパンを落としてしまいそうな様子を見せ、「たくさん買ったから落ちちゃいそうだなぁ」と言う。②それを聞いたU児が「入れるやつ…」と何かを探し始め、近くにあった皿を手に取ろうとする。しかし、すぐにやめて再び周りをキョロキョロ見回す。③保育者が、制作コーナーにあったカバン作り用の紙の袋を見せて「こんなのもあるよ」と言うと、U児は「それにする」と言い、袋にパンを入れた。保育者が「袋に入れると本物のパン屋さんみたいだね」と言うと、U児は「うん」と笑顔を見せ、保育者に袋入りのパンを渡す。そこへS児、N児が「パン、ください」と言って来ると、U児は一つずつ丁寧に袋にパンを入れて渡す。その後も、保育者や友達に袋入りのパンを渡すことを何度も繰り返した。

別のところで遊びながらその様子を見ていたR児は、④電話に見立てた積み木を持って「先生、何のゼリーがいいですか」と聞く。⑤保育者が「桃ゼリーがいいです」と答えると、R児はカップを持って来て、「どうぞ」と言って保育者に手渡す。R児は、その後も何度も保育者に注文を聞き、「プリン」や「おにぎり」「ハンバーガー」「ジュース」などを保育者のところに運んでくる。また、S児は、⑥かごの中に模造のプリンやリンゴを乗せた皿を敷き詰めると、それを保育者のところに持って来て、「ピンポーン、アマゾンです」と言う。⑦保育者が「わぁ、ごちそう届けてくれたの？」と聞くと、S児は「うんうん」と笑ってうなずき、繰り返し配達することを楽しんだ。

【考察】

- ①のような様子を保育者がわざと見せたことで、②のようにU児がどうしたらよいかを自分なりに考えるきっかけになった。また③のように保育者も一緒に考えて提案したことで、U児は自分のイメージに近いものを見つけることができ、繰り返しやり取りを楽しむ姿につながった。
- U児と保育者の関わりから、R児、S児も店と客という大きなイメージを共有し、④⑥のように自分の経験から知っていることを言葉や動きで表しながら遊ぶ姿が見られた。幼児が繰り返し満足するまで遊ぶためには、⑤⑦のように保育者がその幼児のイメージしている世界を大切にして、一緒に楽しむことが必要だと分かった。

事例2　4歳児　7月　「あ、い、す、や、さ、ん」

S児、B児、E児が、アイスクリームの絵を描き、切り取った物をたくさん作っている。しばらくすると、丸く切った画用紙1枚ずつに「あ」「い」「す」「や」「さ」「ん」と書き、それを、横に長い画用紙にバランスよく貼り付けていた。①できあがると、「できた！」と声をあげて喜ぶ。②保育者が「見せて、見せて。素敵だね！」と声をかけると、③3人で声を合わせて「あ、い、す、や、さ、ん」と文字を読み上げる。④保育者が「もしかして、看板？」と驚くと、「そう！」「アイスやさん、やるの」「帽子も作る」「アイスを置く台もいる」と口々に言う。そして、S児とB児は、制作ワゴンから割りばしを持ってくる。保育者が「看板を立てるってこと？いい考えだね」と言うと、二人は顔を見合わせてにっこりし、一緒に割りばしを看板の両端に付けた。E児は切り取ったアイスクリームの絵とトイレットペーパー芯を持ち、保育者に「こうしたいんだけど」と言って、絵とペーパー芯を近づけて見せる。⑤保育者が、「絵の裏側にトイレットペーパーの芯をつけたいってことかな」と聞くと、E児はうなずき「でも、大きいから。ちょっと切りたい」と言う。そのため、保育者も手伝いながら、E児の思うような大きさにトイレットペーパーの芯が切れるようにする。B児が保育者に「帽子がほしいんだけど」と言ってきたため、⑥どのような形をイメージしているのかを聞きながら、画用紙を使ってB児が被れる大きさの帽子を作った。すると、「これが

いい！」「Ｒもほしい」「Ｓも」と言い、３人でおそろいの帽子をかぶって笑う。その後、３人で積み木を運んで重ね、その上にたくさん作ったアイスクリームをきれいに並べると、「いらっしゃいませ」と声を合わせて言う。クラスの友達が客になって来てくれると「どれがいいですか」「どうぞ」「１００円です」と言って、アイスクリームを手渡すことを、繰り返した。

翌日の登園後、３人がそろうと一緒にアイスクリーム屋の準備を始める。しかし、保育室に数人の友達しかいなかったためにすぐにお客が来なくなり、⑦しばらくするとＳ児が「お客さんが来なくて、つまんない」とつぶやく。保育者が「そうか、何かお客さんが来てくれる方法ないかな」と問いかけると、⑧Ｂ児が「いいこと考えた！他のクラスを呼べばいいじゃん」と言い、Ｓ児、Ｅ児も「いいね」「そうしよう」と顔を見合わせて言う。そして、３人そろって隣のクラスに行き、「アイスクリーム屋さんがありますよ」「来てください」と張り切って声を掛ける。その後も、いろいろなクラスに声を掛け、多くの人に来てもらうことを喜んでいた。

【考察】

- ①③のように、看板を作ったことを喜ぶＳ児らの気持ちに対し、②④のように保育者が同じようなテンションで言葉をかけてうれしい気持ちに共感したことは、Ｓ児らのその後も次々にアイディアを出して遊んでいこうとする意欲を支えることになったのではないか。
- ⑤⑥のように、Ｅ児、Ｂ児のイメージを聞きながら、保育者も一緒に考えたり手伝ったりすることで、Ｅ児らは自分のイメージしている“アイス屋さん”が形になっていくことのおもしろさを感じ、よりなりきって遊びを楽しむことができた。
- ⑦のように、客が来なくて困っている時に、⑦のように声を掛けたことで、Ｂ児は⑧のようにどうしたらいいかを思いつき、自分たちで行動する姿につながった。幼児が自分たちで解決策を思いつかないときには、保育者から提案していくことも必要だと分かった。

事例３　５歳児　１２月　「秘密基地だから、見ないでね」

Ｓ児ら７名の幼児が、秘密基地を作りたいと言ってくる。保育者と一緒に場所を探すが、園内にはスペースが見つからない。すると、Ｓ児が、「ここはどう？使ってもいい？」と園舎裏で作るのはどうかと聞いてきた。園舎裏は、出入り口付近にコンクリートの部分がある他は小石の砂利になっていて、普段は遊びの場として利用してはいないが、①保育者が「使ってもいいよ。特別な場所だから、秘密基地にぴったりの場所かもね」と言うと、Ｓ児は「ここにしよう！」と他の幼児に声を掛け、さっそく段ボールを運んできて囲いを作り始めた。しかし、段ボールがすぐに曲がったり倒れたりしてしまい、栽培で使う支柱や固く長い筒で補強しようとするが、なかなか思うような形にならない。そこで、②保育者から「こんなのあるんだけど、使えるかな」とマルチパネという大型遊具があることを知らせた。すると、Ｓ児らは「使える！」「ちょっと汚れているから、洗おう」と言って、１枚のマルチパネを２，３人で一緒運び、組み合わせ方を考えながら自分たちが入ることができるくらいの囲いを作った。秘密基地ができると、「探検に行って来る」と言って裏庭の散策をしたり、木の実を使ってごちそう作りをしたりする。

翌日、Ｒ児、Ｓ児、Ｋ児、Ｔ児、Ｙ児は、畑で見つけた小さいサツマイモを使って、焼き芋パーティーをしようと思いつき、落ち葉を集めたり机を用意したりしていた。Ｋ児、Ｔ児が、コンクリートの上に小石が多く乗っていることに気付き、「なんだか、石がいっぱいだね」「きれいにしようよ」と、ほうきを持ってきて掃除を始める。そこへ、探検に出かけていたＥ児、Ｈ児が勢いよく走り込んできたため、また小石がコンクリートの上に多く乗ってしまった。それを見て、③Ｋ児が「やめてよ！」と大きな声で言い、Ｙ児、Ｔ児も「またぁ」「せっかくきれいにしたのに」と不満を言う。Ｅ児、Ｈ児が黙っていると、再びＫ児が「走らないで！」と強い口調で言う。④保育者が、「探検に行っていたから、どうしてみんなが怒っているのか分からないよね」と声を掛けると、Ｅ児、

H児はうなずく。それを見て、K児らは、「ここに石があると嫌だから、きれいにしていたの」「走ってきたら、また石がこっちにきちゃうから走らないで」「ここをきれいにして、焼き芋パーティーするんだから」「E君たちも手伝ってよ」とE児、H児に話す。E児、H児は、「分かった」「ごめんね」と言い、その後、R児、S児らが、焼き芋を焼いたり食べたりする場所を作っていることが分かると、「もっと葉っぱがあった方がいいと思う」「向こうにたくさんあったよ」と一緒に落ち葉を集めに行く。また、木切れを組んで四角の囲いを作り、「ここにお芋を入れると焼けるね」と芋を焼く場に見立てたりして、焼き芋パーティーの準備に加わった。

【考察】

・遊びの場所が見つからずにいる時に、①のように、いつもとは違って特別に使える場所を、S児らのイメージしている「秘密基地」という言葉を使って保証したことで、S児らはよりその気分になって遊びをつくっていくことができたと考える。
・基地を作り始めたものの、なかなか形にならない様子から、②のように大型遊具を提示したことで、2，3人で一緒に運んだり、友達と力を合わせて組み立てたりして、基地を作ることができた。友達と一緒になって場を作っていく楽しさを味わわせるために、今の時期に大型遊具は適した遊具であった。
・まだやりたいことのイメージが違い、幼児がそれぞれで動いていたため、③のように思いの食い違いからトラブルになった。その時に④のように声を掛けたことで、互いのしていることの違いやそれまでのいきさつに気付かせることができ、焼き芋パーティーという同じ目的をもって遊びを進めていこうとする姿につながった。

5 まとめ

・幼児の言葉や表情、動きなどから、幼児のイメージしていることや楽しんでいることを汲み取り、保育者も幼児がイメージした世界を大切にして同じような気持ちで関わっていくことが大切だと分かった。そうすることで、幼児は生活の中で経験していることを自由に表したり、さらにイメージをふくらめたりしながら、自分のやりたいことに集中したり、繰り返し楽しんだりすることができると分かった。
・幼児がやりたいことやイメージしたことができずに困っている状況をとらえ、保育者からも提案したり、どのくらいのことがその時の幼児の力でできるのか、取り組みの中でどのような経験をさせたいのかをふまえて、使う物の提示や十分な場所と時間の確保をしたりしていくことが大切だと分かった。また、思いの食い違いがあった時には、互いの思いが伝え合えるような橋渡しをしていくことも必要であった。そうすることで、幼児は自分の力を出したり友達と力を合わせたりして、思ったことを形にしていくおもしろさを味わうことができ、より考えたり工夫したりして、意欲的に遊びに取り組むことができると分かった。

6 今後の課題

・幼児がどのようなことに興味をもち、何を楽しいと感じているのか、何をしたいと思っているのかなどを読み取っていくために、必ず保育の振り返りをして、幼児の内面理解に努めていく必要がある。そのための時間の確保をしたり継続させたりしていくことが課題である。
・幼児が考えたり工夫したりして遊んでいく姿を支えるために、発達に合わせて幼児に提示できる物や教材、遊具、教具、自然などは何があるか、やりたいことを実現させていくためにはどのような方法が考えられるかを保育者自身が分かっていることが必要である。そのために、いろいろな場面をとらえて、職員間で情報を伝えあったり知恵を出し合ったりし、保育者自身がもつ表現の選択肢を増やしていくことが課題である。

目次へ

研究主題	わくわく運動遊び		
副　　題			
学 校 名	高浜市立高浜南部幼稚園	校 長 氏 名	神谷　幾子

１　はじめに

幼児の生活の中で自然や公園といった遊びの場の減少やインターネットやゲーム等の普及により室内遊びが増え体を動かして遊ぶ経験が少なくなってきている。幼児にとって体を動かして遊ぶ機会が減少することは、多様な動きの獲得や体力・運動能力に影響するとともに意欲や気力の減少や友達とコミュニケーションを上手くとることができないなど、幼児の心の発達にも影響を及ぼしかねない。文部科学省では平成２４年３月に「幼児期運動指針」を取りまとめ、その中で幼児期は生涯にわたる運動全般の基本的な動きを身に付けやすく、体を動かす遊びを通して動き（表１）が多様に獲得されるとともに、繰り返し実施することにより動き方が上手になる洗練化も図られていく。また、体だけでなく心と体が相互に関連し合いながら総合的に発達していく時期であると記されている。そこで、様々な遊びを経験する中で自ら体を動かす心地よさを実感したり、「もっと～したい！」と意欲的に取り組んだり友達とのかかわりを深めながら心と体が育つことができるような環境や援助について考えていきたい。

２　目指す幼児像

① 様々な遊びに取り組み、のびのびと体を動かして遊ぶ幼児
② 友達や保育者と楽しさを共有し体を動かす心地よさを感じる幼児

３　研究の方法

（１） エピソードや事例から幼児の育ちを読み取る力を高め、環境構成や援助を探っていく。
（２） 講師より指導を受け、多様な動きを遊びに取り入れることができる環境や手立てを学ぶ。
（３） ドキュメンテーションで幼児の育ちを伝えたり、一緒に体を動かす機会を作ったりして保護者と育ちを共有する。

★幼児期運動指針より　「３つのポイント」と「幼児期に経験する基本的な動きの例」

① 多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること
② 楽しく体を動かす時間を確保すること
③ 発達の特性に応じた遊びを提供すること

表１　幼児期に経験する基本的な動きの例

体のバランスをとる動き	立つ　座る　寝ころぶ　起きる　回る　転がる　渡る　ぶら下がる
体を移動する動き	歩く　走る　はねる　跳ぶ　登る　下りる　這う　よける　すべる
用具などを操作する動き	持つ　運ぶ　投げる　捕る　転がす　蹴る　積む　こぐ　掘る　押す　引く

４　実践事例

（1）【異年齢児　１０月　～バルーンみたい！～　】

運動会で年長児が行ったバルーンに憧れて、曲がかかるとバルーンを持っているかのように腕を動かしたり、「1，２，３，４,」とカウントをとったりして、年少・年中児の「やってみたい！」の気持ちが大きくなった。そこで保育者が風呂敷をつなげミニミニバルーンを用意すると年長児の真似をして上下や横に風呂敷を動かして楽しんだ。次第にやりたい気持ちは大きくなり、運動会後、年長児や保育者と一緒にバルーンをすることができた。



＜考察＞

運動会で見たバルーンに魅力を感じ、年中・年少児は年長児の姿を見て「やってみたい！」という気持ちと「かっこいいな」という憧れの気持ちを感じていた。保育者がその気持ちを受け止め、実現できるよう環境を整えたり職員同士で連携をとったりしたことが幼児の満足感につながった。年長児がバルーンの持ち方を優しく教え年下の子に動きを合わせるという気持ちがもてたことは思いやり心も育ったと感じた。

（2）【3歳児　１１月　　～雨の日でも楽しく体を動かして～　】

今日は雨が降っていて戸外で遊ぶことができないことから、テラスに巧技台やマット、はしごなど組み合わせ場を作っていると、興味を示した幼児たちが集まってきた。保育者もお面をつけ楽しそうにジャンプしたり、はしごを渡ったりしていると、うさぎのお面をつけたＡ児が嬉しそうにジャンプした。「うさぎさん、遠くまで跳んだね」と保育者が声をかけると、「見てて！」と今度はＢ児がより遠くへ跳ぼうと張り切って跳んだ。また、はしごを渡ったり斜めの板を山に見立て何度も登り、初めはうまく登れなかったり渡れなかったりした幼児も何度も遊ぶことで登れるようになった。保育者が少しづつ傾斜をつけ「ちょっと高い山になったよ。登れるかな？」と声をかけると「もう少しで登れるよ！」「山の向こうは海だよ！」など保育者や友達と一緒にイメージしながら遊ぶ姿も見られた。









＜考察＞

いつもは戸外で動物やキャラクターになりきってのサーキット遊びを楽しんでいたが、狭い場所でも安全を確保しながら場を作ることで、雨でも体を動かして楽しむことができた。巧技台やマット・平均台などは子どもの発達に合わせ様々な動きにつながるように構成の仕方を工夫することが大切だと分かった。また、～になったつもりで遊ぶことが好きな３歳児は、保育者もなりきって遊び、動きを共感することで幼児の多様な動きを引き出すことも分かった。

（3）【４・５歳児　１２月　～親子で一緒に体を動かして遊ぼう！～　】

講師を招き小学校の体育館で親子運動遊びを行った。内容は、親子で鬼ごっこ、お尻たたき、横ジャンプ、ボール投げ、マットを使っての「だるまさんがころんだ」、チームに分かれ玉取り、バルーンである。「だるまさんがころんだ」は小マットをいくつか立て、「だるまさんがころんだ」で親子一緒にマットに隠れるといった遊びである。「もっと小さくなって！」と体を丸めたり「次はあのマットに隠れよう！」と。繰り返し遊ぶ中で、親子で作戦を練ったり早く鬼のところまで辿り着く方法を考えたりする姿もあった。

＜考察＞

親子で体を動かす楽しさや心地よさを味わうと、幼児が体を動かして遊ぶことの意味や大切さに保護者が理解を示し、一つ一つの動きが幼児の発達を促すための大切な遊びということを知っていただけた。楽しみながら体を動かす習慣に結びつくよう、家庭でも楽しめるような遊びを紹介したり、保育参観や行事で一緒に楽しむ機会を作ったりし、働きかけていくことが大切だと感じた。

５　まとめと今後の課題

幼児が体を動かすことの楽しさを保育者も一緒に共有すること大切であり、保育者が遊びを示したり場を工夫したりすることで遊びが広がることが分かった。また、親子で一緒に体を動かす心地よさを味わえるよう行事に取り入れたり、運動遊びを通し体とともに心の育ちにもつながることを発信していきたい。

目次へ

研究主題	自己肯定感を育むためには		
副　　題	一人一人のよさが発揮できる遊びの環境と援助		
学 校 名	半田市立亀崎幼稚園	校 長 氏 名	川瀬　多恵

1　はじめに

幼児期に自己肯定感を育むことは重要である。子どもたちは園での遊びを通して、充実感、満足感を積み重ねながら、人との信頼関係の築き、自分のよさを発揮していく。この過程が自己肯定感を育むことにつながるのではないかと考えた。そこで、遊びや生活の中で、様々なことに興味をもち、満足感や達成感を味わうための遊びの環境構成や援助について探っていきたい。

2　研究の方法

（1）研究の内容

・　自己肯定感・子どもの姿・環境・援助について共通理解する。
・　各学年の子どもの姿から、ねらいを設定する。
・　一人一人のよさを発揮できる遊びの実践と事例検討をし、幼児理解と遊びの環境、援助に観点をおき、検討内容をまとめる。

（2）自己肯定感についての共通理解

自己肯定感⇒　いつも自分をこれでいいのだと肯定できること
自分が好き、自分は大事、自分は成長していくと感じること
自分には何かやれることがあると思えること

実践に向けて大切にしていきたいこと

子どもの姿　⇒安心して自分を表現できる。
自分や友達のよさに気付いたり認め合ったりする。

環境・援助　⇒一人一人が充実感、満足感を味わう遊びの広がりや深まりを図る。
様々な遊び、生活の場面から幼児理解を深める。
子どもたちの姿、行動等をありのままに肯定的に捉える。

（3）学年のねらい

3歳児・先生や友達と過ごす中で安心感をもち、様々なことをやってみようとする。
・自分の思いを出しながら、遊ぶことを楽しむ。
4歳児・いろいろな遊びに興味をもち、友達と思いを伝え合いながら遊ぶことを楽しむ。
5歳児・友達と互いのよさを認め合いながら、意欲的に遊びや活動に取り組み達成感を味わう。

3　実践事例　　※3学年6クラス各2事例を検討　うち3事例を抜粋
※下線＿＿＿は事例検討の観点となった幼児理解・環境・援助

（1）3歳児実践　　年少　7月初旬　「自分で言えたよ」

子どもの姿　入園当初より自分の思いを伝えることが少なかった A 児は、自分の力でできない場面で困った表情を見せることが多かった。また友達の遊びを気にしながらじっと傍観している姿が目立った。

教師の願い　自分の思いを安心して出せるようになってほしい。

6 月初旬から、クラスではどの子も興味をもち、ウレタン積み木で家やバスを作って遊んでいた。A 児もやりたそうに積み木を一つ持ったが、他の子が使っていたため、他の遊びに移った。教師は A 児の姿からやりたかった気持ちを感じ、次の日にウレタン積み木を多めに用意した。教師は A 児に「A ちゃん、ウレタン積み木で遊んでみる？」声を掛けた。A 児は嬉しそうに「うん」と返事をした。教師「何を作る？」の問いかけに A 児は「家を作る」と言い、教師は一緒に家を作り始めた。B 児が「ぼくもやりたい」と遊びに参加したことをきっかけに、他の子も一緒に家作りを楽しんだ。A 児は屋根を作ろうとしたが、欲しい積み木を友達が使っているため、困っていた。教師は A 児の気持ちを読み取り「先生がお話してみるね」と仲介に入ると、B 児は「ひとつならいいよ」と気持ちよく貸してくれた。A 児は教師と一緒に「ありがとう」と伝え、貸してもらった積み木を載せ、家が完成して嬉しそうだった。

数日後、A 児は気の合う友達と一緒にウレタン積み木でバスを作っていた。他児も同じ場で別のものを作っていたため、積み木が足らなくなったようだった。A 児は近くで遊んでいた C 児に近づいて、小さな声で「かして」と伝えた。C 児から「いいよ！どーぞ」と言われた A 児は嬉しそうに積み木をもってバスを完成させ、友達と乗って楽しんで遊んだ。教師が「A ちゃん、かしてって言えたね」と声を掛けると「うん！」と笑顔で答えた。

＜〇考察　☆検討内容　＞

〇　A 児が園生活に慣れ、安心感をもてるようになるまで無理に促さず、伝えたい気持ちが芽生えるのを待ったことで、自分から伝えられる姿に変わってきたと思われる。

〇　A 児が好きな遊びをしたい気持ちが高まり、友達と関わる場面ができ、必要な言葉を実際に伝えられたことが自信となった。

☆教師が A 児の姿から気持ちに寄り添った言葉がけをし、興味関心を探りながら、遊びの環境づくりをしている。それらが A 児の安心感につながっているのではないか。

☆教師がモデルとなり、積み木を借りる時の言葉や伝え方を見せるなど、A 児への理解を深めながら、段階を追った丁寧な援助を進めている。

（2）４歳児実践　６月中旬～下旬「いろいろな遊び方があるね！」

子どもの姿　5 月よりカップタワー遊びに興味がもてるようにカップを出していたところ、一人で積み上げたり、気の合う友達と２人で行ったりする姿が多かった。ごっこ遊びを通して友達広がってきたが、一方的に思いを伝える姿が目立っていた。D 児は自信のない姿が目立ち、E 児は緊張が高く一人で遊ぶ姿が多く見られていた。

教師の願い　遊びの中で、友達と思いを伝え合いながら遊ぶことを楽しんでほしい。
友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、安心感をもってほしい。

数人でカップタワーを上に高く積み上げることを楽しんでいる。F 児は「こんなにたかくなったよ、せんせい、てつだって！」と教師に伝えてきた。高くなってきて嬉しい気持ちに共感しながら、より高くするにはどうしたらよいか子どもたちで考えてみてほしいと思い、積み上がったタワーを支えることだけ援助をし、様子を見守ることにした。

F 児はタワーを曲げて積み上げていくが、カップが少しずつ落ちてきてしまった。それまで一人で遊びながら様子を見ていた D 児がウレタン積み木を持ってきた。D 児「これにのってやればいいよ、こうやって」と伝え、F 児も「いいね、いいね！ぼくもやる！」と嬉しそうだった。D 児は笑顔でその後も一緒に遊ぶ姿があった。

1 週間ほど、F 児を中心に、友達と一緒にカップタワーを高く積み上げることを楽しむ様

子が見られた。F 児がカップタワーを高く積み上げているうちに、倒れて壊れてしまった。E 児はF 児の横でカップを逆さまにして積み上げ始めた。
教師は「F ちゃん、E ちゃんは何作ってるんだろう？おもしろそう！」と声を掛けた。E 児の「おおきなおしろだよ！」との言葉に、F 児と数人の友達が「いれて。ここにおいてもいい？」と伝え、E 児は「いいよ、もっとたかくしよう！」といつもより大きな声で答えた。その後、E 児が中心になりお城作りを楽しんだ。



＜〇考察　☆検討内容＞

〇　発想やアイデアが豊かな D 児の良さが遊びの中で発揮され、いつも一緒に遊びたい気持ちを表現できないD 児もよく見られていたが、自然と遊びの中に入る姿があった。

〇　一人で遊びを楽しむことが多かった E 児は、数人の友達の中で自分の思いを伝え合いながら楽しく遊ぶ姿が見られた。友達と一緒に遊ぶことの楽しさを感じた時間になった。

〇　いろいろな遊び方で友達と関わってきたことを通して、新しい友達と遊ぶ楽しさや安心して自分を出すことができる姿が見られるようになってきた。

☆子どもたちの遊び方を把握し、一人一人のよさを周りの友達に伝えて広げていくことが、自信をもつことにつながるのではないか。

☆遊びの中での教師の言葉がけは、友達に関心をもたせ、一緒に遊ぶ楽しさを味わう体験を促している。

（3）５歳児実践　7 月中旬　　「みてみて！こんなコースができたよ！」

子どもの姿　G 児と H 児は既製のビー玉転がしで、コース作りに興味をもち始め、作ったコースで楽しんで遊ぶようになった。制作遊びが好きな I 児もビー玉転がしに興味をもち、遊びに参加するようになった。しかし、I 児は友達と一緒に作ると自分の考えたコースが壊れるかもしれないと思い、一人で遊ぶことが多かった。G 児と H 児も二人で遊んでいることが多く、ビー玉転がし以外の遊びでは遊び込めない姿があった。

教師の願い　自分なりに考えたり、工夫したりして作ることを楽しんでほしい。
友達と思いを伝え合ったり、協力したりして遊ぶことを楽しんでほしい。

既製のビー玉転がしを十分楽しんだ後、自分たちでビー玉コースターを作れるようにトイレットペーパーの芯やラップの芯を十分用意した。

G 児は、興味をもちコースターを作り始めたが、どこを繋げていいのか困っていた。教師が一緒に考えながら「G ちゃんどうやったらビー玉転がるかな？ここを繋げてみる？」と伝えると、G 児はテープで自分なりに考えながら貼っていた。最初は上手くいかなかったが、何度もテープを貼っていくとつながり、「できた！」と喜んでいた。G 児の姿を見て、H 児、J 児も作りたいと仲間に入ってきた。みんなで考えて作ったコースコースを繋げていくが倒れてしまった。J 児はコースが立たないことに気付き、段ボールで柱を作り、固定することを提案した。教師はアイデアを認め、遊びが途切れないように段ボールをすぐに用意した。みんなで柱を付けて、コースターができた。G 児、H 児は友達が作ったコースにビー玉を転がし始めた。



J 児が「ぼくは、まがるコースをつくる！」と一人で黙々と作り始めた。I 児、G 児は曲がるコースターを見て「すごいね！」「いっしょにもってあげるよ」

と手伝い始めた。
H児は自分もコースを作りたいとトイレットペーパーの芯をハサミで切り始めるが、思うようにいかず困っていた。近くにいたJ児がその様子を見て、H児に切る場所を丁寧に教えていた。J児に教えてもらったH児は「できた！このコースはここにつなげるんだ」と得意げに友達に見せ、嬉しさを感じているようだった。I児も友達が作っているコースを支えたり、一緒にテープで固定したりして取り組んでいた。I児は「せんせい！みてみて！こんなコースができたよ」とイメージしたものを形にした面白さや嬉しさを教師に伝えてきた。

＜○考察　☆検討内容＞

○　教師が仲間として作り方を一緒に考え、同じイメージをもてる言葉がけを工夫したことで、コース作りを一緒に楽しむことができた。また、友達が作ったコースに感心している言葉も聞かれた。

○　普段友達との関わりが少ないＩ児が、自分のイメージを形にすることが得意なため、ビー玉コースター作りでは、自分の得意を生かし、友達とも関わって遊ぶことができた。この経験から、ビー玉転がしでも友達と一緒に作る姿につながっていった。

○　連休明けに重さで壊れてしまっていたが、気付いた子から直し始めていき、「前とは違うコースにしよう」と、繋げ方を変えたりして楽しむ姿があった。

☆　ビー玉を転がすという分かりやすい遊びだったことで、友達と共通のイメージをもちやすく、関心も高まった。夢中になって遊ぶ姿も継続している。

☆　教師が一人一人のよさを理解し、表現できる機会をつくっている。

☆　遊びが楽しく充実することで、子どもたちの意欲的な姿や協力する姿など様々な姿が出ている。

4　研究の成果と今後の課題

・　事例検討を通して、教師が子ども一人ひとりの良さを受け止めることの重要性や、子どもを肯定的に見る視点が大切であることを改めて考えることができた。保育での教師の子どもを捉える姿勢もより肯定的になった。

・　子どもたちがいろいろなことに興味をもち、遊びの体験を広げていくことが、人との関わりが生まれ、満足感や充実感や自己肯定感にもつながる。そのための遊びの環境づくりについても深く考えていきたい。充実した遊びのあり方についても探求を続けたい。

目次へ

研究主題	“もっと知りたい！面白い！”自然に親しみ、心を動かして遊ぶ幼児の育成		
副　　題	～「つぶやきシート」を活用して～		
学 校 名	名古屋市立神の倉幼稚園	校 長 氏 名	豊本　実

（1）主題について

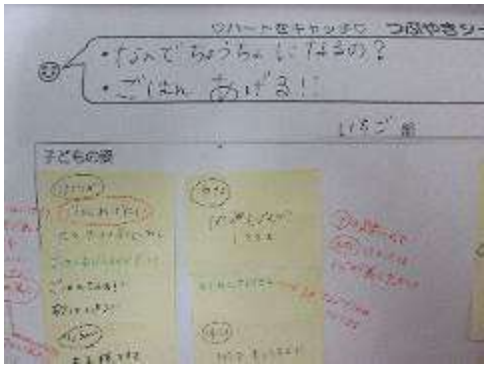
名古屋市教育委員会が本年より推進する「ナゴヤ学びのコンパス（学びの指針）」を基盤に、“幼児がもっと知りたい”、“面白い！”と自然に親しみ、心を動かして遊ぶ幼児に視点を当てて研究に取り組む。手立てとして日々の保育記録や職員の話し合いに「つぶやきシート」を活用し、幼児が心を動かした瞬間のつぶやきを捉え、教師の援助や環境の構成について振り返り、幼児の言葉の奥にある心の動きに迫ることで、内面理解を深めたい。

（2）実践の方法

○　一人一人の幼児が身近な自然に触れている姿を捉え、“もっと知りたい”“面白い”と心が動くような教師の援助や環境構成を考え、実践する。
○　幼児の言葉に耳を傾け、つぶやきをとらえた場面を振り返り、「つぶやきシート」に考えを整理しながら書き込むことで、きめ細やかに幼児を見取り、心が動く過程や援助のあり方を明らかにする。
○　研究保育や事例検討会等で「つぶやきシート」を使って幼児が体験したことを丁寧に捉える。また、そこにつながる教師の援助や環境の構成について考える。
○　保護者との対話や保育ドキュメンテーションを通して、つぶやきから読み取れる幼児の内面の変化や育ちを伝え、相互理解を深める。



【つぶやきシート：保育記録】



【つぶやきシート活用例：付箋を使った話し合い】

（3）実践の内容

①【つぶやきシートを活用する】実践事例《5歳児7月》

<table>
<tr><td colspan="2">つぶやき　「じゃあ、明日、どうなっているか、見てみよう」</td></tr>
<tr><td colspan="2">子どもの姿　ミニトマトがようやく赤くなり、収穫したものを机の上において何人かが眺めていた。</td></tr>
<tr><td>A：この赤いのが一番おいしいと思う。
B：こっちのもいいんじゃない？
と比べ始めた。教師が“おいしいじゅんばんシート”をさっと作って机に置くと
A：これはすっごく赤だから一番おいしい
B：これとこれは同じくらいかな
C：これは黄色っぽいからまだだと思う
D：これは真ん中くらいじゃない？
全てのミニトマトを並べ終えると
A：一番おいしいの食べたいな
C：でも、みんなの分がないよ</td><td>T：2番目、3番目のトマトももっと赤くなるのかな？
B：（赤く）なるんじゃない？
C：でもそのままだと腐るかもよ
D：そのまま置いておいて大丈夫だと思う
A：じゃあ、明日、どうなっているか、見てみよう
C：いいねー！
＜次の日＞
C：なんか赤くておいしそうなの増えてる
A：赤くなってる気がする！
B：昨日、みどりだったところ赤くなってる！</td></tr>
<tr><td>教師の援助　ミニトマトの色がそれぞれ違うことに気付いて比べ始めた。どれがおいしいか、自分の考えを話すが、どのトマトのどういうところを見て話しているのか分かりにくく、友達の考えをもっとよく知ろうとしてほしいと思った。</td><td>環境の構成　“おいしいじゅんばんシート”を書いて、幼児がミニトマトの色を比べている机の上に置いた。
次の日も同じようにして、朝登園したらすぐに見られるようにした。
保護者には保育ドキュメンテーションで発信した。</td></tr>
</table>

幼児の言葉からどのような育ちが読み取れるか、資質・能力の３つの柱をもとに話し合った。

『赤いミニトマトは甘いと考える』⇒知識・技能の基礎

『収穫したミニトマトは置いておいたら赤くなるか試す』⇒思考力・判断力・表現力等の基礎

『ほし組みんなで育てたからみんな甘いミニトマトが食べられるといい』

⇒学びに向かう力・人間性

＜「学びのコンパス」リーフレットを用いた振り返りから＞

「子ども一人一人の思いや願いを尊重する」ことを重点にして幼児のつぶやきに耳を傾けると、

「子どもと対話する」も同じように大切だと実感した。（5歳児担任より）

②【動画を視聴し付箋を使って話し合う】《4歳児9月》「バッタさんに、なりたいよー」

〇教師の願い：トンボやバッタなどの虫と触れ合ったり餌をあげたりして自分なりに関わってほしい。

園庭でバッタの死骸にアリが群がっていた場面に遭遇した。様子を見たA児とB児の思いが相反し、担任は、幼児の言葉の受け止めや関わりがよかったかどうか迷っていた。



A児

年少のころからアリを見つけては喜ぶ。たくさんのアリがバッタに集まっている。バッタをアリに食べさせたいからそっとしておいてほしいと思っている。

つぶやき

「アリさんいっぱいいる。バッタ食べてる。」
「アリさん、生きてるから。大きくなりたいよー」
「バッタさんに、なりたいよーって言ってる」



B児

夏休み中、飼っていたカブトムシが死んでしまい、お墓を作って埋めてあげた経験がある。バッタが死んでいるから、お墓を作って埋めてあげたいと思っている。

つぶやき

「バッタさんがアリに食べられちゃってる」
「死んじゃったから、お墓作る」
「どこにお墓作ったか教えてあげる」



担任

「“お墓を作る”か、“アリさんのご飯”か、どっちがいいかな」



A児B児どちらの意見も正解だなと思った。先生が迷うのも皆同じだと思う。



こっそりバッタを持っていかれて埋められてしまい、A児が不完全燃焼だったとしたら、A児の思いに寄り添うのもいいのでは。



A児はアリに心を寄せていて、B児はバッタに心を寄せていて、どちらも交わるものではないので、そのままでいいのではないかな。



A児B児どちらも生命尊重の大切なことを思っている。それぞれの思っていることを先生が言葉にしていくことで周りの幼児に伝わり、次につながるね。



それぞれ自分の考えをしっかり持っているところがいいですね。

＜話し合いを終えて＞

経験が浅く、関わり方を迷うことが多かったが、答えが出ないことでも幼児の言葉から思いを受け止めて関われればよいことが分かり、先生たちの話を聞いて自信を持つことにつながった。（４歳児担任）

（４）話し合いや進め方の工夫

①テーマに関連した保育の様子を動画にして、検討会で幼児のつぶやきを捉える。
②幼児の思いやどのような姿かを読み取り、教師の援助や環境の構成について考えたことを、観点別に色分けした付箋に書き込む。
③拡大したつぶやきシートに付箋を貼って集約し、意見交換をする。

成果

「付箋に書き込むと率直に意見を出しやすい」「付箋をシートに張ると、意見を集約できて、後で見返しても分かりやすい」「事例検討では伝わりにくい状況やニュアンスも共通場面を見ることで、つぶやきの奥の思いを話し合いやすい」など前向きな意見が多く出た。

（５）研究を振り返って

幼児のつぶやきに焦点を当てて取り組んだことで、教師が保育の場面で何となく受け流してしまいがちな幼児の言葉に立ち止まって、つぶやきの奥にある幼児の心の動きを捉えようとする姿勢をもって保育するようになった。そのことでこれまで以上に幼児の内面を理解する大切さに気付くことができたことは成果と言える。また、幼児の育ちや実践の取り組みを保育ドキュメンテーションや学年だより、掲示物等で発信しているが十分とは言えないので、引き続き家庭への発信を続けて理解を得られるようにしたい。研究の進め方を工夫したことで、積極的に意見を出し合い、幼児理解を深めようと取り組めた。今後も、職員間で意見を出し合える良さを生かして研究を進めたい。











目次へ

研究主題	主体的に遊び込む幼児の育成		
副　　題	一人一人の思いや育ちを捉えて		
学 校 名	名古屋市立西山台幼稚園	校 長 氏 名	勝又　靖代

1　はじめに

名古屋市では「子ども中心の学び」を幼児期から青年期まで一貫して大切にすることで自立して学び続ける子どもの育成を目指し、『ナゴヤ学びのコンパス』という基本的な考えが示されている。そこには、重視したい学びの姿の一つとして「夢中で探求する」とある。また、学校園で大人が大切にしたいこととして、子ども一人一人の思いや願いを尊重することがあげられている。幼児期には幼児がしたいことの実現に向けて、思いや願いをもち、試行錯誤したり友達と協力したりして夢中になって遊ぶ経験を重ねることで、主体的に遊び込むことが必要であると考える。幼児一人一人の姿を丁寧に読み取り、育ちに合った環境の構成や援助を行っていくことで主題に迫りたい。また今年度本園では中学校ブロックでキャリア教育を核とした「つながるプロジェクト」に取り組んでいる。キャリア教育においても、主体的な姿が重要視されている。キャリア教育で育成する「基礎的・汎的能力」の視点でも、幼児の育ちを捉え、小学校以降への学びにつなげていきたい。

2　実践の方法

① 事例検討会や研究保育を通して、幼児の姿を丁寧に読み取り、幼児の育ちを捉え、その時期に大切な環境の構成や教師の援助について明らかにする。
② キャリア教育について学び、「基礎的・汎用的能力」の視点で幼児の育ちを捉える。
③ 送迎時や懇談会、保護者会に加え、保育アプリを活用して幼児の姿や育ちを保護者へタイムリーに伝え、幼稚園教育への理解が深まるようにする。

3　実践の内容

⑴ 研究保育　４歳児第１２週　６月下旬　「先生と遊びたい」

ねらい：友達と同じものを作ったり同じように動いたりして、一緒に遊ぶ楽しさを感じる。

ＥＶＡ積み木で乗り物を作ることが好きで繰り返し遊んでいたA児は、登園してすぐに、担任が作りかけにしておいたＥＶＡ積み木を見付け「今日は車を作りたい」と教師に言った。「ここが運転するところ」「こっちに扉も作る」等、A児のイメージに応じながら教師も一緒に作った。そこへB児が「入れて」と来た。A児は「先生と作っているから」「先生と遊びたい」と断ると、B児は「もういい」と別の遊びに移った。今度はC児が「入れて」と来た。A児が考え込んだので、教師が「Cちゃんの車は隣に作る？」と提案すると、二人は納得して隣同士で車を作り始めた。二人の作っている車が近づいてくると、A児は「くっついたら船みたい」と話した。教師が「いいね、二人で船にする？」と言うと、二人とも「そうする」と言って、互いの車がくっつくようにして船に作り変えた。出来上がると、二人はうれしそうに船に乗った。教師も仲間に入って「どこに行く？」などと行き先を引き出しながら、船に乗って出掛けることを繰り返した。その様子を見ていたB児とD児が「入れて」と来たので、教師は「運転手さん、お客さんも船に乗せてください」と一緒に頼んだ。A児は「いいよ。動物園にも、遊園地にも行けるよ」と客を乗せていろいろな場所に運転して行くことを繰り返した。



【運転手になりきって、教師C児に声を掛けるA児】

［幼児の姿の読み取り］※□内は幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿

・　自分の思いを受け止め、一緒に形にしてくれる教師が近くにいることで、A児は安心し、思いやイメージを教師に伝えながら車を作ろうとしている。

自立心、思考力の芽生え、言葉による伝え合い

・　A児とB児それぞれの車が少しずつ出来てきて、その形からA児は新しく船をイメージした。

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、豊かな感性と表現

・　船を作る中でイメージが広がり、いろいろなものを思い付き、教師に受け止めてもらいながら作った。

思考力の芽生え、豊かな感性と表現

・　自分なりの船ができた満足感を得られたことが、C児を受け入れ、大きな声で行き先を伝えながら遊ぶ姿につながった。

健康な心と体、協同性、言葉による伝え合い

［大切な環境の構成（☆）と教師の援助（◎）］

☆　A児の言葉や表情から思いを汲み取り、A児と教師二人の場を確保したことで、A児は自分のしたいことを実現することができた。

◎　A児が新しく船をイメージしたタイミングで教師がA児のイメージを受け止め、形にしてみるように提案したことがきっかけで、B児を受け入れ一緒に遊ぶことにつながった。

◎　客になりきってやりとりをして楽しい雰囲気をつくったり他の幼児との会話の橋渡しをしたりしたことで、A児が友達と関わるきっかけができ、自分から声を掛けながら遊ぶ姿が見られた。

<table>
<tr><th colspan="2">キャリア教育で育成する「基礎的・汎用的能力」の視点で捉えた幼児の育ち</th></tr>
<tr><th>人間関係形成・社会形成能力
（つたえる、つながる）</th><th>自己理解・自己管理能力
（むきあう、やりぬく）</th></tr>
<tr><td>・　教師に安心感をもち、自分の思いやイメージを教師に伝えている。（コミュニケーション・スキル）
・　教師とのつながりを基盤とし、友達とイメージを共有して遊んでいる。（他者に働きかける力、チームワーク）
・　自分のイメージしたものを形にできたことで満足し、友達を受け入れている。（他者の個性を理解する力）</td><td>・　思いや考えを教師に受け止めてもらいながら、イメージを広げ、思い付いたものを作ったりなりきったりして、遊びを楽しんでいる。（自己の動機付け、主体的行動）</td></tr>
<tr><th>課題対応能力
（みつけるしらべる、みとおす）</th><th>キャリアプランニング能力
（えらぶ・きめる、ふりかえる）</th></tr>
<tr><td>・　自分の思いをもち、車や船を作る中で、必要なものを思い付き、形にしようとしている。（実行力、発想力）</td><td>・　教師との対話の中で、思いを引き出され、自分で考えたり、決めたりしながら、遊んでいる。（選択）</td></tr>
</table>

⑵　キャリア教育について学びを深める

１１月中旬、中学校のキャリアナビゲーターと連携し、キャリア教育についての研修を行った。また、５歳児のおいもパーティーを参観してもらったり、幼児の活動の過程を伝えたりして意見交換を行った。

［キャリアナビゲーターとの対話より］

・　共通の目的に向かって一人一人が自分の役割を果たしながら学級の友　達と協力して取り組み、充実感や達成感を味わうことができている。

・　幼児は日頃の主体的な遊びの中で「アイデアを出す」「思ったことや考えたことを伝える」「役割をもつ」「目的に向かって試行錯誤する」「人の役に立つ」等を経験しており、キャリア教育で育成したい資質・能力につながっている。

＜５歳児　１１月中旬　おいもパーティーの事例における分析＞

［幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿の視点でとらえた幼児の姿］

・　園で育てたサツマイモを収穫し、前年度に自分たちがしてもらったように、年中児を招待しておいもパーティーを開きたくなり、学級で相談して開くことにした。

自然との関わり・生命尊重、社会生活との関わり、言葉による伝え合い、自立心

・　学級のみんなで必要な準備や役割を相談し、会場の飾り付け、看板、招待状、おみやげ作り材料の買い物等、年中児の好きなものを聞いて取り入れながら準備を進めた。

協同性、言葉による伝え合い、思考力の芽生え
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚豊かな感性と表現


［ 会場の飾り付け ］

・　当日は席に案内したり、サツマイモをホットプレートで焼いて配ったり、お茶をついだりして分担した係の仕事をしていた。

協同性、言葉による伝え合い、自立心、社会生活との関わり


［ クッキング中 ］

・　年中児が喜んでいるか表情を気に掛けたり、おいしいかどうか感想を尋ねたり、おかわりの希望を聞きに行ったりして優しく関わっていた。

協同性、言葉による伝え合い、思考力の芽生え
道徳性・規範意識の芽生え


［ パーティーの最中 ］

・　パーティー後に学級のみんなで「喜んでもらえてうれしかった」「係の仕事が楽しかった」「みんなで力を合わせてがんばった」等と感想を伝え合ったり、パーティーの成功を喜んだりした。招待しなかった年少児にも、できることはないか意見を出し合っていた。

協同性、言葉による伝え合い、社会生活との関わり、健康な心と体、自立心

キャリア教育で育成する「基礎的・汎用的能力」の視点で捉えた幼児の育ち	
人間関係形成・社会形成能力 （つたえる、つながる）	**自己理解・自己管理能力 （むきあう、やりぬく）**
・　自分の考えを教師や友達に伝えたり、相手の意見を聞いたりしながらおいもパーティーを成功させるという共通の目的をもつ。（コミュニケーション・スキル、他者に働きかける力、チームワーク） ・　年中児に対して、必要な声掛けや対応に気付き、関わっている。（コミュニケーション・スキル、他者に働きかける力他者の個性を理解する力） ・　感想を伝え合ったり、できたことを喜び合ったりして、達成感を共有している。（コミュニケーションスキル、チームワーク）	・　おいもパーティーを成功させるという共通の目的に向かって自分たちで考えた準備や役割をやり遂げている。（自己の動機付け、主体的行動、自己の役割の理解）
課題対応能力 （みつけるしらべる、みとおす）	**キャリアプランニング能力 （えらぶ・きめる、ふりかえる）**
・　年中児に喜んでもらえるよう、一人一人の好きなものを取り入れて準備をしている。（発想力、情報の理解、実行力） ・　パーティーに間に合うように、準備を進めている。（計画立案、実行力） ・　パーティー後に出た新しい意見をどうように実現するかを考えている。（評価・反省、計画立案）	・　必要な役割に分かれ責任をもって果たそうとしている。年中児がうれしそうにする姿を見たり「ありがとう」と言われたり、教師に認められたりして喜美を感じている。（働くことの意識や役割の理解、選択） ・　パーティー後に、計画した行動について、うまくいったことや改善点について意見を出し合っている。（向上心、行動と改善）

⑶　保育アプリを活用して

幼児の思いや遊びの過程を捉えて保育ドキュメンテーションを作成し、アプリを活用してタイムリーに保護者に配信してきた。また、学年ごとの育ちの違いや遊びの過程が伝わるよう、各学年の取り組みを保護者会や掲示で写真と共に知らせる工夫をした。保護者からは「幼稚園でどのように遊んでいるのかがよく分かった」「子どもから聞いていた話の実際の様子が伝わった」等の意見をいただいている。また、教師が自身の保育を振り返ることにもつながり、保育に生かすことができた。

4　実践の成果と課題

幼児の姿を丁寧に捉え、思いに寄り添った関わりを心掛けてきたことで、幼児が好きなことや興味があることに心を動かし、生き生きと主体的に遊び込む姿が増えてきた。また、キャリア教育について学んだり、キャリア教育の視点で幼児の育ちを捉えたりしたことで、幼児期は小学校以降のキャリア発達を含め全ての力の基礎を培う重要な時期であることを確認した。他校種の教員との意見交流や授業参観の機会を増やすことで連携を深め、見通しをもって幼児教育を充実させていきたい。